明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可
昭和二年十月十八日印刷納本
昭和二年十一月一日發行（毎月一回一日發行）

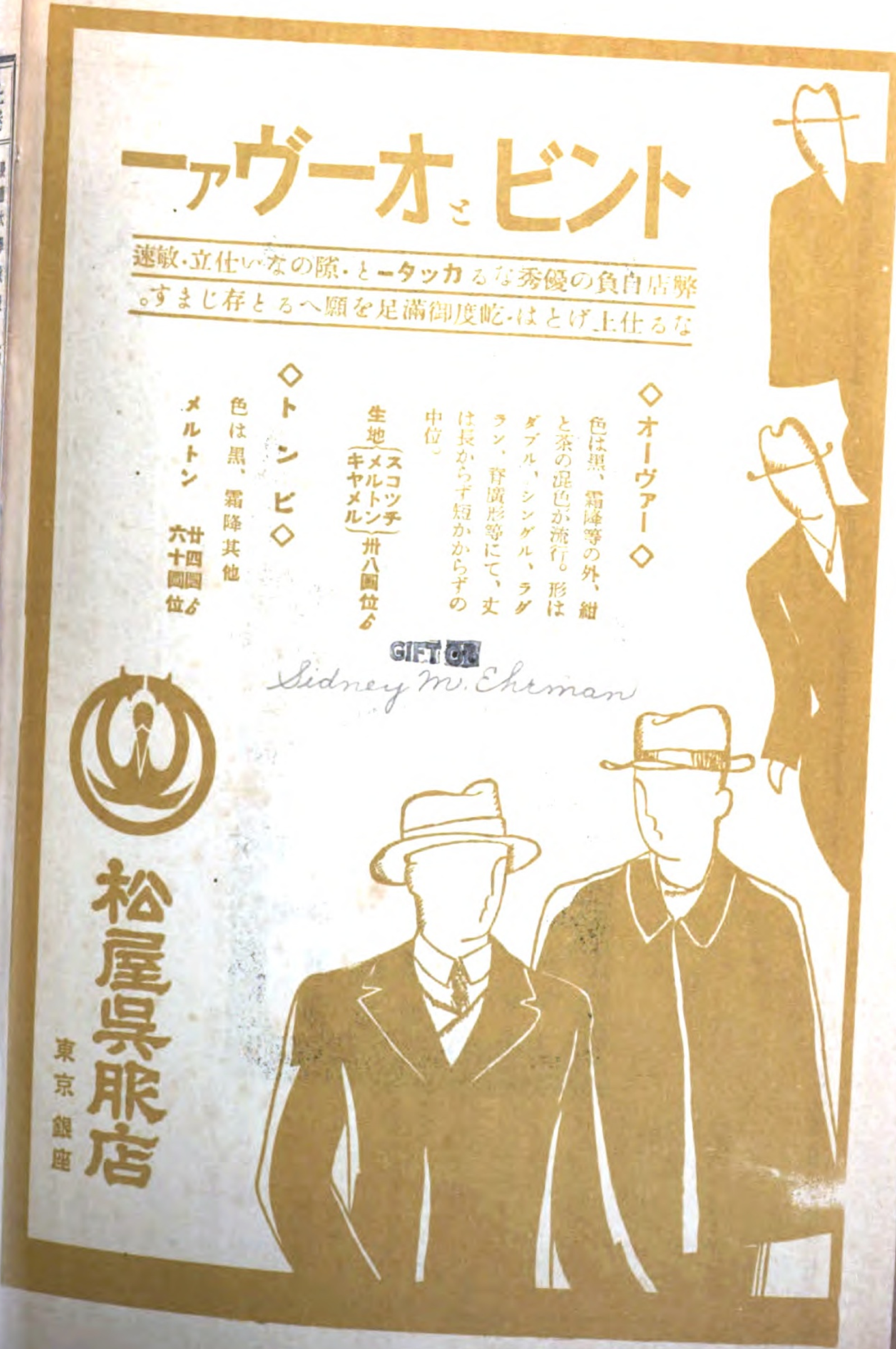
THE CENTRAL REVIEW

中央公論

11-1927

十一月號

第四十二年　第十一號　第四百七十八號


トンビとオーヴァー
弊店自負の優秀なるカッターと・隙のない仕立・敏速
なる仕上げとは・乾度御満足を願へると存じます。
◇オーヴァー◇
色は黒、霜降等の外、紺と茶の混色が流行。形はダブル、シングル、ラグラン、背廣形等にて、丈は長からず短かからずの中位。
生地（スコッチ メルトン キヤメル）卅八圓位ゟ
◇トンビ◇
色は黒、霜降其他
メルトン 廿四圓 六十圓位ゟ
松屋呉服店
東京銀座

上卷六版 下卷十版

慶應大學教授 戸川秋骨譯

エマーソン論文集

▼四六版 ▼總布製
上卷定價參圓 下卷貳圓五拾錢 郵稅各十二錢

近代に於ける最も幽玄にして最も健全なる思想家はエマーソンである。加之其文辭最も簡潔にして又最も雄勁、句々みな座右の銘とするに足る。譯文亦精確、苟も思想界の事に留意するものは必ず一讀すべき名著である。

廿一版

白耳義文豪 マーテルリンク著
文學士 栗原古城譯

死後は如何

附錄「交靈術とは何ぞや」

▼四六判總布 定價壹圓九拾錢 郵稅十錢

人間の死後は果して如何、**絕滅**か、**永生**か將た**『醒むる無きの睡眠』**か、既成宗教は其權威を失し、近代科學は之に就て何等の說く所が無い。現代第一の文豪にして思想家たる著者は、其神秘的瞑想と聰明なる理智との高潮に乘じて此大問題を解決した。

七版

印度マドラス大學 ナラス教授著
駒澤大學教授 立花俊道譯

佛教の要諦

▼四六判總布 定價參圓貳拾錢 郵稅十二錢

これ幽玄なる佛教々理の眞諦を何人にも解し易きやう手に取る如く明快に說破せる稀有の名著で、**佛教の知識を得んと欲する人は必ず一讀すべきものである。**現に歐米の諸大學でも學生の指定參考書として汎く推薦してゐる。

八版

白耳義文豪 マーテルリンク著
文學士 栗原古城譯

靈智と運命

▼四六判總布 定價貳圓貳拾錢 郵稅十錢

人間の運命は果して**先天的に豫定**せられたるものなりや否や、人間は自からの努力によりて其運命を改造し能ふべきや、將た又人間の理性は奈邊まで信賴せらるべきものなりや、マーテリンクは茲に**『運命』の正體**を解剖す。

東京市本郷區西片町 **玄黃社** 電話小石川一三九番 振替東京七九九五番

昭和二年

豫約募集 ◇全八巻◇ 菊判總頁五千六百餘頁 小穴隆一畫伯裝幀

芥川龍之介全集

申込期限 ▷

芥川龍之介全集刊行に就て

曠世の才を抱きてしかも黽勉倦まず、鏤心彫琢して金玉の文字を就す。幽雅又清艶、警抜又清妙。雙波のうちに漂渺を藏め、古典のごとき沈靜のなかに近代の憂思を潜む。篇篇一句として心血の痕はだらならざるは無し。これ彼が藝術に非ずや。少年既に鬱然として大家を成し、獨自の境を拓き得てしかも須臾も自足せず。藝術の諸形式諸傾向、一として試みざるは無く、試みて遂げざるは無し。鶯は日輪を望み見ていや高く翔らんとす。悲しむべし多病と多愁と。腰圍は詩に因つて痩せ、雙肩は生に由つて歪みぬ。一朝人生の無常を感悟するや、冷然として大死に趣き身邊一絲の亂るるものを見ず。これ彼が生涯に非ずや。彼を稱して人生の殉教者また藝術の聖使徒と呼ばんとする者はひとり我等のみにあらざるべし。宜なり、天下を擧げて彼がために痛哭する事や。噫生命は短し、されど藝術は永し。彼が泡沫の生涯は終りぬ、然れども見よ、嚴として彼が藝術は天地とともに在り。我等友人相謀りて彼が述作を網羅し、芥川龍之介全集の刊行を企つる所以のものは、實に玆に存す。期して斷翰零墨をも洩らさざらんとするは、彼が如き一代の文人に對する時代の義務にして、ひとり友朋の私情のみにあらざるを信ず。不文をもつて微衷をのべ江湖の諸君子に訴ふ。幸にこの擧を贊して我等をして大成せしめられよ。謹みて白す。

昭和二年

十月三十一日◁

〔[illegible]同人〕

小穴隆一　室生犀星　久米正雄　佐佐木茂索

谷崎潤一郎　宇野浩二　小島政二郎　菊池寛

恒藤恭　久保田万太郎　佐藤春夫　（いろは順）

第一巻　小説　　第五巻　随筆

第二巻　小説　　第六巻　随筆

第三巻　小説　　第七巻　書翰

第四巻　小説　　別冊

芥川龍之介全集刊行の經緯に就て

芥川龍之介全集刊行については、生前、大正十五年十月、新潮社と契約がとりかはしてありました。ところが遺書には、「僕の作品の出版權は（若し出版するものありとせん乎）岩波茂雄氏に讓與すべし。（僕の新潮社に對する契約は破棄す。）僕は夏目先生を愛するが故に先生と出版書肆を同じうせんことを希望す。但し裝幀は小穴隆一氏を煩はすことを條件とすべし。（若し岩波氏の承諾を得ざる時は既に本となれるものの外は如何なる書肆よりも出すべからず。）勿論出版する期限等は全部岩波氏に一任すべし。この問題も谷口氏の盡力に待つこと多かるべし。」と認めてあります。よつて谷口喜作氏は、初七日の翌日、七月三十一日、新潮社に赴き、よく在社の佐藤義亮氏と面談すると、大變に潔く解約して下さいました。ただ當時者の中根駒十郎氏が不在でしたので、契約書は八月十日、靈前に供へて頂いた次第でした。岩波氏には八月十九日、田端で谷口氏面接、委細お頼みすると、岩波氏も大變よろこんで引受けて下さいました。死去の當時、何等かの噂も出たりして多少皆さんのお耳にも入つてゐることと存じますので、右の經過を明かにすると同時に、佐藤氏岩波氏の御好意を茲に感謝する次第であります。

昭和二年九月

芥川比呂志
芥川文子

故人の知遇に感激しその附託に背かざらんが爲め微力を顧みず全集刊行の事業を虔んでお受け致しました。薄弱なる動機と愼重を缺く態度とによる廉價版横行の際かゝる全集の刊行は困難が尠くないのでありますが眞に藝術を愛する江湖諸君子の諒解と援助とを待つて此事業の達成を故人の靈に告げたいと思ひます。

昭和二年九月

岩波茂雄

申込略規

頒布方法　全八巻豫約申込者にのみ頒布。但選擇豫約の求めに應ぜず。

刊行期日　昭和二年十一月より毎月一册づゝ刊行。昭和三年六月完結。

體裁　菊判十ポイント活字一段組枠附一册平均七百餘頁、紙質英國製コットン紙、布裝天金函入。口繪二葉宛

申込方法　申込金四圓を添へて期限內に申込まれたし。但此申込金は最終會費に充當。一時拂は申込金不要。

申込期限　昭和二年十月三十一日。

會費　毎月拂　一册分　四圓
一時拂　全八巻　參拾圓

送料　會費の外に書留送料を要す。

◇豫約申込取扱全國各書店

内容見本

無代進呈

東京神田南神保町

振替東京七四四一六番

電話九段(33)　二一〇八番　二一〇九番　一〇二二番

岩波書店







秋雨　　　小川芋錢筆

岩波文庫

謹告

讀まれざる書ほど高價なものがないとすれば、世に岩波文庫ほど廉價なものはないであらう。それは讀まるべきあらゆる條件を具へてゐるからである。この文庫は豫約を排して各冊自由に分賣されるが故に、讀者に欲せざる書を强ひることがない。しかもそれは誰もが讀まねばならぬ凡ての種類の永久の生命ある書のみを選んで收めてゐる。我々は單に既刊書をそのまゝ復刻するを以て甘んずることなく、むしろ從來のいづれのものよ

新刊書目

- マルクス 資本論（第一卷第一分冊） 河上肇・宮川實譯 ★
- 賃勞働と資本 マルクス著 河上肇譯 ★
- カント プロレゴーメナ 桑木嚴翼・天野貞祐譯 ★★
- プラトン プロタゴラス 菊池慧一郎譯 ★
- チャールズ・ダーウヰン F・ダーウヰン著 小泉丹譯 ★★
- ゲエテとの對話抄 エッケルマン著 龜尾英四郎譯 ★★★
- 俗樂旋律考 上原六四郎著 ★
- 綱島梁川集（二十一周年記念出版） 安倍能成編 ★★
- 希臘羅馬神話 バルフィンチ著 野上彌生子譯 ★★★★
- 奥の細道 その他 芭蕉作 伊藤松宇校訂 ★
- 古今和歌集 尾上八郎校訂 ★★
- 花傳書 世阿彌著 野上豐一郎校訂 ★

既刊書目

- 新訓 萬葉集（上） 佐佐木信綱編 ★★★★
- 新訓 萬葉集（下） 佐佐木信綱編 ★★★
- こゝろ 夏目漱石著 ★★
- プラトン ソクラテスの辯明 クリトン 久保勉・阿部次郎譯 ★
- カント 實踐理性批判 波多野精一・宮本和吉譯 ★★
- 古事記 幸田成友校訂 ★
- 藤村詩抄 島崎藤村自選 ★★
- スミス 國富論 上卷 氣賀勘重譯 ★★★★
- にごりえ たけくらべ 樋口一葉著 ★
- 國性爺合戰 鑓の權三重帷子 近松門左衛門作 和田萬吉校訂 ★
- 戰爭と平和 第一卷 トルストイ作 米川正夫譯 ★★★★
- 芭蕉七部集 伊藤松宇校訂 ★★★
- 五重塔 幸田露伴著 ★
- 病牀六尺 正岡子規著 ★★
- 父 ストリントベルク作 小宮豐隆譯 ★

りも優秀なる校訂本、信用するに足る飜譯書を提供するばかりでなく、また嘗て存在しなかつた飜譯書、校訂本をこの文庫に初めて收容することに最も努力する。そしてまさにこの點に於て獨のレクラム文庫、英のエブリマン叢書等の企て得ざりしところを岩波文庫がここに成就するのであつて、世界に於けるこの種の出版物に對して我々の文庫の有する誇である。民衆版として、書物を仰々しきもの、近づき難きものとする時代は去つた。今や何人もが瑣細な日用品を求める手輕さを以て、良書を購ひ得る事となつた。携帶に至便なる岩波文庫は到る處に諸君に伴はれて諸君を慰め、勵まし、休息せしめ、活動せしめるであらう。

好色一代男　西鶴作　和田萬吉校訂　★
好色一代女　西鶴作　和田萬吉校訂　★
好色五人女　西鶴作　和田萬吉校訂　★
オネーギン　プーシュキン作　米川正夫譯　★★
愛と死との戲れ　ロマン・ロラン作　片山敏彥譯　★
小公子　バアネット著　若松賤子譯　★★
風流佛・一口劍　幸田露伴著　★
うたかたの記（他三篇）　森鷗外著　★
埋木（水沫集より）　森鷗外譯　★
千曲川のスケッチ　島崎藤村著　★
上田敏詩抄　茅野蕭々編　★★
布施太子の入山　倉田百三著　★

近刊

マルクス 資本論（第一卷第二分册）　河上肇・宮川實譯　★
民約論　ルソオ著　平林初之輔譯　★★
ヴィルヘルム・マイスター（上）　ゲーテ作　林久男譯　★★★★
戰爭と平和（第二卷上）　トルストイ作　米川正夫譯　★★★
戰爭と平和（第二卷下）　トルストイ作　米川正夫譯　★★★

出家とその弟子　倉田百三著　★★
櫻の園　チエーホフ作　米川正夫譯　★
幸福者　武者小路實篤著　★★
號外（他六篇）　國木田獨步著　★
科學の價値　ポアンカレ著　田邊元譯　★★
認識の對象　リッケルト著　山內得立譯　★★★
おらが春　我春集　一茶作　荻原井泉水校訂　★
北村透谷集　島崎藤村編　★★
賢者ナータン　レッシング作　大庭米治郎譯　★★
春の目ざめ　ヴェデキント作　野上豐一郎譯　★
令孃ユリエ　ストリントベルク作　茅野蕭々譯　★
曾我會稽山　心中天の網島　近松門左衞門作　和田萬吉校訂　★
闇の力　トルストイ作　米川正夫譯　★
仰臥漫錄　正岡子規著　★★
科學と方法　ポアンカレ著　吉田洋一譯　★★★
伯父ワーニャ　チエーホフ作　米川正夫譯　★
生ける屍　トルストイ作　米川正夫譯　★

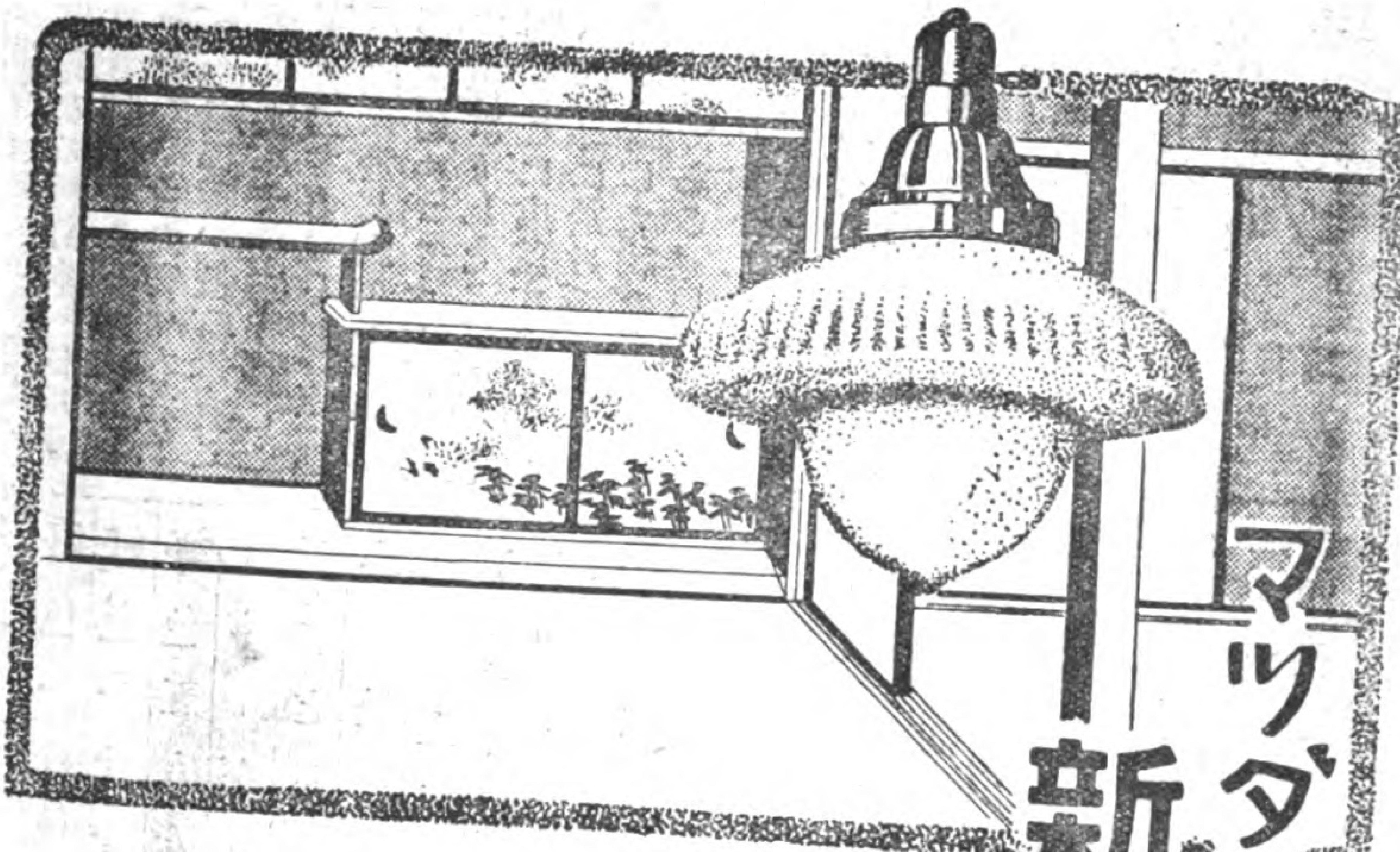
□菊半截判、紙裝、平福百穗畫伯裝幀。
□約百頁を單位とし★一つを以て現はします。
□送料（及定價）は左表によります。

	【定價】	【送料】
★	二十錢	二錢
★★	四十錢	四錢
★★★	六十錢	四錢
★★★★	八十錢	六錢
★★★★★	一圓	六錢

★一つ二十錢

東京神田神保町　振替東京二六二四〇番　電話九段(33)二一〇八番　二一〇九番

岩波書店



マツダランプの新パラソリヤ

（六〇―一〇〇ワット用）

日本室向の理想的照明器具として今回發賣致しました新パラソリヤは耐熱、配光、能率、外觀等に於て從來の反射笠に比し遙かに優秀であります

特長

一、體裁が上品で優雅に出來て居ります

二、「ぎら〳〵」が直接目に入りませんから目の爲めにもよく光が柔かで室内を美化します

三、器具の直下附近が最も明るく出來て居りますから光に無駄がありません

四、グローブが薄肉で輕い上に取附けが至極簡單であります

五、最上質のガラスが使用してありますから丈夫な上に能率が極めて良好です

六、完備せる工場で大量に生産致しますから値段が非常に低廉です

東京電氣株式會社
神奈川縣川崎市



昭和二年

中央公論

十一月一日發行

十一月號

第四十二年　第十一號

第四百七十八號

新に選出された無産黨議員に望む

今次の府縣會議員の改選で新に二十餘名の無産黨議員を出したことは何と云ても喜ばしい。事前にもッと連繫を密接にして居つたなら猶一層の多數を擧げ得たらうにと、今になつて遺憾を禁じ得ぬ點もあるが、夫にも拘らず選擧の結果が遙に世上の期待を超過したのは、それ自身將來の好望を暗示する一瑞兆たるに間違はない。選出されたものの左右兩翼を分つて之を氣にするが如きは固より無益の事。空論時代はともかくとして、之より愈々無産黨の實際政治に乘り出す段取りとなつては、其の態度行動に自ら一種の堅實味を加ふるに至るべきは疑ない。要するに正しいものに最後の勝利は決して面を反けるものではない。只我々國民として將來に冀ふ所は、各無産黨が新選出議員を通じて出來る丈け誠實なる貢獻を國家に捧げられんことである。知らず各無産黨はこの點に關し今果して如何の方策を有つて居るか。

右の如き立場からして、各無産黨に於ても新選出議員に對しては色々の注文があることであらう。やかましい言葉で云つたら、黨としての所屬議員に對する統制の問題であるが、事實なほ未だ至て微力な無産黨としては、所屬議員との關係に於て動もすれば主客の地位を顚倒さるることがないだらうか。追々所屬議員も殖え之等が黨の幹部にも据はつて中央との連絡がうまく取れれば格別、今のところ這の統制の問題は黨に取つて仲々骨の折れる仕事であり、從てまた其の發展の如何は無産階級運動の將來に取つて頗る重大な意味を有つものである。併しそれ等の點は無産諸黨各自の攻究に委せるとする。必しも局外から喙を容れてならぬ問題だとも思はぬが、之は別の機會に譲るとして、我々は玆には捉はれざる一市民の立場から新選出議員諸氏に對する二三の忌憚なき希望を述べるに止めようと思ふ。要は彼等に眞に無産黨議員としての十分の使命を果して貰ひたい爲に外ならない。無産黨それ自身は所屬議員をして這の使命を果さしむるの義務を自覺する所から之に關していろ〳〵攻究すべき問題を有つて居る筈だが、我々が一市民として議員諸氏に要求する所が同時にまた黨自身の方針を間接に助くることにもなるは明白である。只我々は捉はれざる立場にある丈け一層直截明白に所思を披瀝することが出來ることを信ずるものである。

前置きが長くなつたが、我々の希望要求は實は極めて簡單だ。最も卑近な心掛けとして先づ次の四ケ條を聽いて欲しいと思ふ。

（一）新選出議員の今後の行動に對し心ある國民は意外に大きな期待をかけて居る、從つてそれ丈け大に自重し

て貰ひたい。

（二）議員としては既成政黨の孰れとも一切何等の關係を付けて貰ひたくない。色々な形に於て既成政黨よりの誘ひの來るは疑なき事實と考へる。而して一人や二人では何とも働き樣のない無產黨議員に取つて右の誘ひは仲々油斷がならず、一旦之に引き入れられん乎後に必ず救ふべからざる禍の種となるは疑ない。その實に恐るべき毒素であることに深く反省することが必要であらう。

（三）さればと云つて既成政黨の言動には一から十まで反對すると云ふも能に非ず、常に獨自の見識を立て所謂政策本位で一貫するを勗むることが亦必要だ。

（四）議員になつたからとて其生活方式を換へてはならぬ。今まで通りの職業にいそしみ生活の本據を常に爰に立てて居れば、在來の所謂職業政治家の類に墮せざることを得る。一度出た以上次回にも出なければ身が立たぬと云ふ樣になつてしまうと、議員はよく墮落するものである。この點特に深く自ら戒むる所なければならぬ。

詳々しい說明は略するが、右の四點だけは是非とも嚴守して貰ひたい。事極めて平凡の樣だが、そこが今後の無產黨議員に取て最大の危險の伏する所であることを我々は深く憂惧するものである。

更に一步を進めてモ少し慾を云はうなら、次の諸點にも深甚の注意を傾けられんことを希望する。

（一）在來の議員間に通有なる弊風に對して常に超然たる態度を執つて欲しい。下らぬことまで一緒になつてやらなければ議員の仕事が一寸勤め難いかに見え、その上繼子扱ひにされるが厭さにツヒ操守を弛めた例は、從來案外に多いと聞く。

（二）さればと云つて實務の取扱に全く無智であり又は實地を離れた突然な空論を連發して滿場の輕侮を受けても困る。出た以上は出たことに何等かの意義を有たしめなくてはならぬ。自己の存在を事實上無視せしめぬ樣着實な努力を績くることを希望する。

之を要するに我々は新選出議員諸氏に向て直に華々しき成功を求めたり又何等具體的の急速なる效績を强ゆるものではない。數の少い現狀の下に在て之等を望むの無理なることは始めから承知して居る。唯此間に在て大に自重し、常に階級代表の明白なる意識を把持してその地位の與ふる機會を有效に利用し、時務の攻究を怠らずして誠實なる努力の結果を正直有りの儘に見せて貰ひたいのだ。それ丈けやつて吳れるなら、無產階級自身も爲に大に啓發されるだらう。之に由て又世上の信用も大に加はつて、詰り益々無產諸黨の隆運を促すことにもならう。之が爲に我々は言ふ迄もない事ながら、吳々も輕い成功を急ぎ給ふなと切に諸君に忠告するものである。

中央公論



第四十二年第十一號
十一月號
第四百七十八號

經濟文化の硬化と創造

阿部賢一

生命あるものは常に若い。朽木に花の譬もないではないが、若木の花の清新馥郁たるに及びもつかなからう。たとへ若返りの醫法が發明せられても若き日の釋迦を嘆ぜしめた老と死を共を現世に滅する術はなからうかと思ふ繁育と衰朽は尠なくとも生物界と人間界とに於ける約束である。一國の經濟について觀るも決してその例に洩れるものではない。未開の自然に蒔かれた人間經濟の萌芽は天と地との慈養に培はれ育てられてすく／＼と伸びもしよう。或ひは

きた舊い經濟文野に新來のものが接木せられて思はぬ經濟創造の花を咲かすこともあらう。さり乍ら生は常に死の起點であり、死の瞬間〳〵は新生を次々と濟産して行く過程である。丁度それは妙なる音樂だ。一つの生の音階は、今と云ふ今、後へ去つた死の音階と、間を容れずに、即ち死と同時に相繼起することによつて存續し、更に之によつて音樂全體の調を保つ譯であるが、人生社會もまたこれに似たるものがある。ある哲人が「舊きものゝ死は同時に新らしきものゝ誕生である……。而して舊き文化の衰朽は新らしき高き文化の素因をなす……」と云つた言葉は單なる言葉の綾として無下に斥けられるものではない。

經濟は云ふまでもなく一つの生命だ。生きとし生けるもの經濟と有緣の衆生たらざるはない。この緣に繋つてのみ現在と將來の人類が保存せられるのだ。而してその爲には財の流通が、丁度血液の循環のやうに社會體の隅から隅まで、不斷に、圓滑に、且つ過不足なきやうに行き亘らなければならない。それ故に常に若き血液を必要とする。若き血液のみ身體を健全に支へるのであらう。

我國の經濟は、接木のやうなものだ。原始大和民族の生活に支那と印度と、それから歐米諸國の生活様式が、それからそれへと攝取せられ、攝取されて今日に及んで來た。模倣性とさへ云はれるまでに崇外拜他の見榮坊心理も働いて――。

接木は成長した。種子と苗圃がどれだけ相性であるかは別として、政府要路の指導誘掖はもとよりのこと、民間先達の掛聲も手傳つて殖産興業は文字通りに著しい發達を示したのであつた。資本主義經濟にとつて、我國がかなり良い地質にあつたこともまづ認めねばならぬ事にもあり、また資本主義經濟が最近五十年間に我國經濟の發達になしたところの貢獻も之を認めない譯にはゆくまい。之に就ては例證を擧げずともよからう。何れにしても漸く辿りついた今日の經濟文野である。やつと之で一安心とゆきたからうが實の所現實は煩悶、苦難、行詰りの八方塞りの危險がないとは云へない狀態ではないか。而してこの際私共は密に尋ねて見る。現在我國の經濟組織内の支配者階級にどれだけ將來の我國經濟を眞に

よく擔當するの能力があるかどうか、と。また現今の經濟生命を更に伸長してより高度の社會生活を約束し得る創造力があるか、どうかと。見渡すところありさうにもない。またあるべき筈がないやうにも思はれる。何故ならばすでに硬化せる我國經濟制度そのものから新しい魂は生れる筈がないからである。少しく論歩を進める必要がこゝに生ずるであらう。

*　*　*　*

血管の硬化は身體にとつて最も恐るべき病症の一であると聞いてゐる。制度の硬化、經濟制度の化石化または彈力性の喪失は文化の上から觀てまた最も恐るべき病症であるの如くである。

數年前我國に於て司法官の化石が問題となつた事は今尙ほ私共の記憶に新なところであるが司法官の化石化は、法令制度の硬化の一表現に過ぎない。何も驚くにも當らない事柄であつて、若し私共が他の社會面を觀察するとき この人生の硬化が私共が日頃想像してゐるより遙かに深く、廣く浸透してゐるのに氣付くに違ひない。政治界を見よ―。敎育界を見よ―。宗敎界を見よ―。更には最も創造を、何物よりも獨自の開發を目的とし生命とする藝術界を見よ―。そこに私共は果して淸新の氣運を見出すや否や。そこに潑剌として天地の生命に參ずる底の命に觸るゝことを得るや否や。若し何萬人かの人の中に肯定を以て確信する人があるならば、私は喜んで其人の前に脫帽するであらう。否、恐らくその狂ならざるかを恐れて敬して遠ざかるかも知れない。

旣に然うである。我國―外國も多くは之であるが―の社會經濟制度の硬化が著しくなつて來たのも蓋し尤もの事と觀るべきであらう。否。私は、好かれ、惡かれ資本主義的經濟 主義の大きなローラーで壓し去るところ、政治を、敎育を、藝術を、をしなべて劃一、硬化の運命に、鑄込めて終はねば置かぬ事は、宜しくこゝに擧證して論ずる迄もなく明々白々である。

凡そ生あるものは死因をすでに備へてゐるのであり、自己確立の使命を持つものは自己不定、自己崩壞の約束をその胎內にすでに具備してをるものだ。例へば私共の生は死の約束であり、壽命は自然の死刑執行猶豫のやうなものではなからうか。一の社會制度は自己胎內に自己死刑の因をその發生と共に備へてゐる。のみならず本體の發育と共にその死因も發育し、制度の血管硬化によつて自己崩壞の期を急がしめることゝなるやうだ。敢て、私は社會の有機體說に依つて立論する譯ではないが、制度硬化の制度崩壞に對する內在的關係が過去の社會の興亡隆替によつて明白に證明せられてゐるところであり、かねてこの點が生物の生死に似通ひたる點の尠なくない事も容易に氣付くわけである。

何れにしても硬化せるものに新生の命がない。すでにその文化的使命を終つて自己否定に走つてゐるものと云はねばならない。而してこの角から觀察して、我國經濟制度の硬化症がどれほど膏肓に入つてゐるか、について少しく立入つて觀なければなるまい。

この問題の考察に當つて私は假りに二方面から進もう。一は現代經濟制度の機械化とその結果の考察であり、二は現代經濟の機械化の內在的價値としての快樂派經濟文化の破綻の考察である。この二者は相共に關聯する一體の二面であつて別々のものではないが考察の便宜上別に論じようと思ふ。

*　*　*

一般文化に就て云ふも、現代文化の一特色はそれが技術化せられてゐることである。機械化せられゐることである。全技術化か、將たまた半技術化かの問題はその觀るところによつて違ふではあらうが、人生が、ましてや經濟が、一つの技術となり、一つの機械となつて規則的に營むとして運行せらるゝものになつて來てゐることは否むことの出來ない事實である。一個人に就て云つても朝から夜まで、自分の身體も精神も何かある仕事の一齣か、一個のゼンマイになり終つてゐ

るではないか。個人の營む小さい仕事から、何億圓の資本金を擁する大企業も人間を一つ道具視、技術化しなければ止まぬところの迫力を持つてゐる。而してかやうに技術化せられた經濟を統制するところの經濟制度はすでに一つの大きな技術體化せられたものであることは云ふ迄もない事でなければならぬ。而してこの原因が資本至上主義經濟の必然的歸結によることはこゝに說く必要はなからうと思ふ。

技術化は人間のルーテン化である。お定まりの仕事本位である。個別的價値の發揚ではなしに劃一的事務の繰返しにすぎない。そこには創造の花は咲かない。そこには生命を奪はれたる仕事の砂漠があるだけだ。そしてこれが現代日本の經濟が陷らんとしつゝある形勢であると云はなければならぬ。

機構の營みが先に立つて、個々の人間はまるで鑄型せられた製造品にすぎない。寔に已むを得ない制度硬化の約束である。かうなると個性創造は殆んど磨り減らされるのであるが、我國の經濟にもこの傾向は最近甚しくなつて來た。例へて云へば一つの事業が個人經營である場合、また家內經營である場合は個別的創造が多く許されはしたが、現代の大資本主義的經營の下にあつては事業經營を擔當する者と資本を所有するだけの者とが益々遊離するのである。即ち資本の運用と資本の所有とが分離し、職能と所有とが全然別物により總るのである。この事はこゝに實例を取つて證明するまでもなく周知の事であるが、之は大資本的經營がすでにその發溂たる時代、資本と人間の合致の時代を通り越して資本制度が硬化しつゝある證據だと云へるであらう。昔は封建制度が制度として硬化し、樣式や形式やのみが貴ばれて生々の命が失はれた際に、辛ふじて之を支へ得たのは養子制度と諸侯の改易移封等の制度の力が加はつて多少新らしい血液が注入された爲であつた。移肉療法であり、移血療法であつた。しかも遂に支へる事が出來なかつたのは他滅と云はんより自滅であつたのだ。恐るべきは自己內に宿る崩壞の因素である。獅子身中の蟲とはよく云つたものだ。

制度の硬化は人の硬化であつて、硬化された者は制度の硬化に氣が付かない。寄蟲はその巣を天地とし、其中に居るもの

は是を知らぬが常である。現代經濟制度の硬化中にゐる人士の中に、いや經濟識者と稱られる人との中に果して、どれだけ、我國の經濟を伸展せしむるの經綸を有する人が居るであらうか。氣焰はある。快談はある。併し乍ら多くの所論は同一觀點よりするところのものであつて、概して目前の利害の囚になつてゐることを虞れるのである。先日ある場所で三土藏相が云つたと傳へられてゐるが、——私はその眞僞を知らないが——、甚だ興味ある話がある。それは、世の中で眞劍に働いてゐる者は役者と角力だけである。どちらも人氣相手の商賣であり、なほ多數の目の前で公然と演ぢなければならず、晴天十日の成績で收入が定まると云ふのだから、とても誤魔化しは出來ず、一生懸命にやる。また政治家も議會で角力取るわけで下手すれば世間から非難せられる。ところが實業家と云はれる人々はたゞ目の前を誤魔化すことを第一義として憂身をやつしてゐるのだから……と云ふ意味であつたと記憶する。私は仕事に眞面目なのは俳優と角力だけであるか、どうかは知らない。また實業家と云はれる人が世の中で最も不眞面目な種類の人々であるか、どうかも、斷言は出來ないが、三土藏相の如き、身台閣の重きに居つて、日頃謂ゆる實業家と接觸多き責任ある人の言說であつて見れば、餘程穿つてゐる言なのだらうとも考へられるのである。私はかやうな種類の人々によつて謂ゆる双肩に擔はれてゐるところの我國經濟界を祝すべきか、否かを疑ふ。が、さりとてかやうな實業家乃至は虛業家の個々の人格の問題は實は私の興味を引かないのである。それよりか、それ等の人々に將來我國の經濟を眞に双肩に擔ふて行くだけの識見と經綸があるかどうか、を知りたいのである。若しこの力があれば安心もしやう。併し乍らさうでなければ、我國民は彼等を俟つに不信認を以て遇するの外はないこと丶なるのであらう、而して私を以て見るに我國經濟の制度的硬化がすでに經濟擔當者をも化石化して甚だ望み少なからしめてゐる樣に思ふのである。

多くの例を擧げて之を證明する必要はなからう。やゝ大きい打擊に侵はれては、まるで無能力を表白した我國經濟界である。今春以來の金融恐慌はその最も雄辯な證據ではないか。日頃は偉さうに安樂椅子に悠々と構へ込んで萬事呑み込んだ

やうな振舞の大政治家、大實業家といふ大の字の付く人々はあの際どうであつたか。大藏大臣や日銀總裁やその他大銀行家と自負する人々の周章狼狽は如何であつたか。あの際資本家階級の立物の中に頼みになる人とては悉皆見當らなかつたではないか。在野の政治家や、無責任な言論を弄し得る實業家諸氏の中には、尤もな樣な說を吐いた人はなかつたではないか、何れも國民が信認して依頼し得る底の個人も集團もなかつた。資本家階級はあの際全くその無力を表白したやうなものであつた。のみならず爾來すでに半歲を經てゐるに未だ休銀問題は目鼻が付きかけたり、落ちかけたりして前途暗澹、預金者こそ迷惑の至りである。これも支配者階級の國家經綸に對する無能無識を告白する一證左に外ならぬ。

元來我國の經濟界には輿論と稱すべきものがない。政治上に於ては歪みなりにでも憲政の常道とか輿論とか云ふものが最近出來上つて何人もこれに反抗することが出來なくなつてゐるが、事經濟問題にかけてはかいもく重要なる集合的意見即ち輿論と云ふものがない。であるから國民經濟に對する國家交渉の關係が常に模糊として暗雲に閉され、その醜體が時々曝露せられる有樣であり、景氣よければ有頂天になつて何十割でもの配當に鼓腹して、將來の逆風や缺損の場合の準備を怠り、困つてはあらゆる緣を辿つて政府に泣きつくと云ふことになる。然も人之を怪まず、却つてその惡辣なる腕を謳歌すると云ふ有樣であつて、眞に鞏固な經濟發達を指示する輿論がないのである。であるから實業家の多くは景氣の僥倖を當に其日暮しに目前を糊塗する事を仕事とすることゝなるのであつて、我國の實業家が八方から不信用なのも當然ではないか。更にはまた預金部の問題にしてからか、それは我國財政の一つの癌であり、一千萬以上の民衆の零碎な金の集積であるその資金が如何に惡辣に濫用せられてゐるか。これは周知の事であるからこゝには論じない。

この外現代資本家階級の集團として、我國の經濟を如何に指導すべきかの經綸を欠く點を指摘して行けば數多く發見し得るのである。人口問題にせよ、食糧問題にせよ、更に大問題である所の貧富の問題即ち分配問題にせよ、未だ何等の定論がないらしい。全く暗盲の實業界ではある——。

とは云へ、この支配者の無能力は我國の夫れに限られた譯では決してないのである。大問題に應しては、多くの經濟活動家は自己の利害や、低き目前の打算に囚はれる結果、その眼は鈍り、其の心は濁つて、どゝのつまりは大局よりする批判と見識を欠くことゝなり勝である。之は無論その人を咎めることは出來なからう。却つて人間をかやうに小さく狹く錮固めた社會經濟制度そのものにその大部分の責任を問はねばなるまい。この點は外國にても同樣であるらしく見へる。今にその一例を取らう。英國今日の財政上の大問題は何と言つても國債の問題である。七百六十億圓にも上る大借金を世界大戰爭のお土產として背負ふてゐる英國は年々三十六七億圓もの利子の負擔をなしてゐて、歲出の約四割に達する額をこの目的の爲に投じてゐる。富みたりと雖も英國國民が國債の元利償還の負擔に堪へざらんとするのも尤もの事である。然らば如何にしてかゝる巨額の國債を整理し得るか。この問題に對して各方面から種々の提案が發表されてゐるが未だ勞働黨及び二三の學者から提案されてゐるところの謂ゆる資本課稅ほど、理論的にまた實際的に、合理のものがないやうに觀へる。この問題に就てはこゝでは立入らないが、英國の財政經濟の中心問題であるところの國債問題に關して資本家階級及び支配者階級者は自他共に永く國債負擔より解放せらるべき何等の策を有しない。自己を救濟する方法を知らない。何ぞ他を救ひ、他を導くの見識を有しよう。何れにせよ之が英國支配者階級が何かの大問題に直面しての有樣であつて、英國經濟の硬化も之によつて想像し得られるであらうと思ふ。

凡そ一國の經濟の强味は、その彈力性の有無大小によるであらうと考へる。經濟制度たる外枠が硬化さるれば、內容たる經濟實體はその彈力性を失ふて、やがて自助の力を失ふことゝなる。自助最も難い。しかもこの淵に我國經濟制度は瀕しつゝあるかに見へる。

觀點を更へよ。一寸觀方を更へて今迄とは違つた方面から物事を觀よ。必ずそこから新生活が始まるから——。マーカス・オーレリアスの云つた言葉は本當である。

技術化文化の中を逍遙ふてゐる現代人は偶には振り返つて自己を評價の秤にかける必要があらうかと思ふ。まづ第一に私共の認めざるを得ないのは技術化文化の特色は目的と手段との混想である。云ふまでもなく目的と手段は不可離相關の絲に繋がつてはゐるがこの兩者の混同は恐るべきことのやうである。目的は手段なくしては達し得ないが如く、手段は目的を想定せずしては考へ得られない。無論目的に對しても、また手段に對しては全意議あり、半意議あり、無意議の場合があるには相違ないが、人間行動の意義は目的と手段の調整とその努力に懸くと云へよう。論ずる迄もないが目的は私共が勝手に文字通りに奇想天外的に案出し得るものでなく、まづ自然の法則によつて狹められ、更に歷史的に制約せられた社會生活、畢竟それは時の生産力の大小、意向によつて定められる所のものに限局せられ、つまりは甚だ以て狹隘な小天地に於けるものを出でない。手段とてもその點に於ては何等の變りやうのあらう筈はなからう。

狹隘であるとは云ひ乍ら、私共に取つては掛け換へのない世界である。こゝに意圖し劃策し精進するところに私共の生とその意義がある。目的と手段の混想があつて見れば、それこそ取り返しのつかぬ事ではないか。ところが現代がこれなのだから困る。その表現として經濟方面に例を假りに二つ取る。貨幣上に於けるものがその一である、經濟行爲上に於ける目的概念の混想がその二である。

貨幣は云ふまでもなく財貨流通上に於ける一個の手段に外ならぬものである。マイダス神の童話を持ち出すまでもなく、貨幣そのものは其儘では食へず、着れず、住むことはできない。たゞ我人共に之を好み、社會生活上の便宜はこの手段の發達を促して一つの立派な制度を作り上げて整つた。草履取りから太閤になつたどころではない。ナイフヤフオータが神樣になつた以上だ。人間の拜物教も貨幣崇拜に至つてその最高調に達したものと云はねばならぬ。昔から表では貨幣を

出みたから、本心では之を萬物融通の神視したことは資本主義經濟の促進力によつて一層甚だしくなつて最早濟度すべからざるものとなつた。善惡ではなしに事實の語るところだ。また之はダラー崇拜のアメリカだけの話ではない。何處に於ても人間は何物かで神を造る。現代資本主義經濟の神は貨幣となつた。貨幣は萬象の尺度となつた。人間までが貨幣價値で立派に評價される時代である（序に一言。奴隷や遊女の金錢賣買はあり來りだが、貞操や童貞やの蹂躪慰藉料はをかしい。がここに現代相が活躍してゐる。先年佛國のバリオール氏が世界大戰による各國の死傷者の調査に當つて各國民を貨幣價値に換算した。之を邦貨に換算すると、米國人一人は九千四百四十圓。英國人は八千一百八十圓。獨逸人は六千七百六十圓。佛國人と白耳義人は五千八百圓。墺國人は五千四百四十圓。その後は日本人、伊太利人、露國人、ギリシヤ人、ルーマニア人、トルコ人、ブルガリヤ人及びポルトガル人であつて一人前四千四十圓になるさうである。これが各國人の正札だと云ふのだから助からぬ）。手段が目的の王座に上つて諸國民がその神秘の魔術の前にひれ伏してゐる形である。現代社會は――。目的と手段の混淆がこゝにその尾を出してゐる。

　それはそれとして、今一つ私共に反省を强ゆるものは現代を風靡する經濟思想そのもの〻評價である。善かれ惡かれ資本主義經濟思想はその背景として或ひはその基礎として、快樂派哲學の上に築かれたものである。この二者は論理上では必然の關係がある譯ではないが、歴史上の事實としては形影相伴ふて、こゝ百數十年を經て來た。快樂思想が哲學史上に於て持つた地位と意義の論は別として、それが十八九世紀に於て資本主義經濟に合致して相期せずして世界を支配して來たことは歴史的現象として最も目ざましいもの〻一つと見なければならぬ。舟が順風に乘じ順潮に乘つた姿である。昔流に云へば快樂思想の蛟龍が資本主義の雲雨を以て天に騰つたやうな凄じい事象でもあつた。

　資本主義によつて經濟は數段の飛躍をなしたことは事實である。分業の原理、生産力の增進、財貨の豐富、國內國外の市場の開發、工業の發達と外國貿易との相關誘掖、金融、交通、通信機關の發展、……等々。耳と眼と鼻と味と觸の五官能

を通じて享くる感覺の滿足的分量は増加したやうである。技術化文明の恩澤は萬人に及んだとさへ云はれてゐる。烟突の煤煙や汽車の響を口を極めて罵倒したラスキン、カーライル以來の感情的悲觀主義はあつたにせよ。幾多の宗教家の表向きの呪咀あるにせよ。たゞしは近年西洋文明の沒落觀が花火の如く人目を惹いたとは云へ。なほ多くの眼と心は感覺飽滿の境をその經濟理念の涅槃として來たこと、又現にそうであることは事實であらう。

併し乍らどれだけ、人は滿足し得たか。飽滿したものは醉醒めの悲哀を感じなかつたか。飽滿せざるものや、いや、飽滿どころか足らぬ勝のものや全く足らぬもの﹅現實曝露の痛苦は今更いふにも及ぶまい。何人をも、尠なくとも自覺し反省する底の人の滿足を獲ち得ずに經濟は一つの制度として行く。人はそれに引ずられて喘ぎ乍ら歩く。如何に考へてよいか私にも十分に解らないが、人々の求めるものは心の滿足、心の幸福ではなかつたゞらうか。私共は易々言葉の奴隷になり勝ちだ。快樂と云へば直ぐにそれは幸福と異語同義だと早合點したがる。ところが果して如何であらう。無論快樂と幸福が一致する場合もある。併しいつもそうであると限らない。心の底に何ものか空虛の潜むことを感ずる場合は、よし人生享樂の極致にあつても不安で堪らなからう。思ふに動物に於ては快樂と幸福が合致するかも知れないが、人間と動物の相違が、ある點に於て快樂と幸福の背馳することに、否その場合の甚だ尠なからざる點に、存するとも云へよう。何れにしても快樂は感覺を通じて間接に感ずる滿足でありと云へるし、幸福は直接に内心に湧き出すところの滿足であるとも云へよう。無論かう云ふ風に判然と分類することは甚だ無理であらうとは思ふが、今はそうして置く。かやうに考へると私共はある場合快樂によつて幸福を得ることも出來やうが、快樂を通じて必然に幸福を得ようと思へば恐らく失望の不幸を得る場合を尠なしとしなからう。之を反面から云へば内心に眞の幸福を得ようと念ずる者が或ひは快樂を通して、或ひは快樂を涌さずして、その目的を達することもあるであらう。平凡な私共には望めない事ではあるが、大宗教家と稱せられる人や、優れた社會運動家達やは、血を流し骨を砕くの死苦の中に絶大の幸福を享受するのかも知れない。貧苦の中に常人の想

像し得べからざる底の幸福を感ずる人々を、私共は學者や思想家の中に見出すことがないではない。そしてこれ等の人々の氣持は多少私共にも解るやうである。

と云つて快樂滅却をこゝに提唱し、色即是空を人生に主張しやうとするのでは毛頭ない。だから貧乏や生活の不安が私共に幸福を齎す天使であると云ふのでは斷じてない。事實として快樂が、物資の分量的增加が、私共の鋭い感覺が、私共に幸福を齎す方便として、最も手取早き一方法であると認めるからこそ、之にもつと偉大なる意味を考へたく思ふのである。それにしても資本主義的經濟によつて大に油をかけられた快樂至上の慾念は、現代人を强烈な刺戟と、飽くなき財の蓄積の下に喘がしてゐるのであるが、それで果して幸福を與へてゐるか如何か。安息の代りに不安を、靜穩の代りに焦燥を與へゐるのではなかつたが。パンを求めて石を得たと云ふのは現代人の事である。命に溢るゝ生活を求めた現代民衆が血と汗の勞苦の末に得たものは石であつた。化石化した、命の拔けた制度の殼であつた。

資本主義經濟は必ずしも感覺至上を目的とする生活內容を約束した譯ではなかつたが、事實はさうなつて來てゐる。搾取の上に築き上げられてゐると云ふ資本家的生産の結晶であるところの財貨と事業は、一方に於ては民衆の貧窮を誘致するまでにその稀少性を甚しからしめ乍ら、他方に於ては感覺滿足財の産出にその全力を盡し乍ら却つてその目的を達し得ずして不滿を買つてゐる。恰も出口のない袋小路の奥をさ迷ふてゐる形であつて、生活樣式としては健全なものであるとは云へまい。

各國をしなべて、現代人は當來の社會經濟制度が齎すところの文化に食傷するまでに無理强いをされてゐる。のみならず自己を壓するところの社會經濟制度がどれ位の文化高揚力を具備するかを、かなり判然と見極めてゐる。すく〳〵と春の日に伸びた當來の文化は、すでにそれが持つところの發達力、創造力を、もう殆んど伸し盡してゐるものと認めてゐる。言葉を代へて云へば文化發現力の限界に近接しつゝあることを見拔いてゐるのだ。だから當來の制度と文化は、過去に

於てその使命を大凡そ爲し遂げたものとしての感謝を要求する資格ありとしても、將來の文化擔當者としての光榮を要請するの資格を有するか、否かは疑はしい。異質の創造的文化を齎すものを祝福しよう。

我國經濟の大任を擔ふ力が今日の政治經濟的支配階級にないこと、及び支配階級者が有意識的に無意識的に囚となつてゐるところの快樂至上哲學がまづ行く處まで行つて、今や方向轉換の必要に迫つてゐることの概略を論じた。そこで私共は一歩を進んで、果して然らば如何なる經濟思想と階級とが新生の意氣を以て我國の經濟文化の擔當者となるべきかの問題に直面することゝなるであらう。

私は個々の人の問題ではなしに、集團として、また階級として、將來の我國經濟の擔當者は、舊來の因襲と資本主義制度の硬化力の中毒症にかゝつてゐないものでなければならぬと思ふ。いや、そうでなければならぬ。そうでなければ異質の文化、高度の社會生活、命に溢れた經濟、彈力性に滿ちた經濟統制、つまるところ創造的經濟文化を期待することができないのである。而してまたこれが當來の文化を更に伸長し擴充する所以であつて、この古き種子の腐つた上にのみ、新來の文化たる穀物は、芽生へ、花を咲かし、實を結ぶであらう。こゝに於て私共は最近我國がその懷の中から生み落したところの新興の集團及び階級者の任務が經濟文化の上から觀て、甚だ重要な役割を豫期せしめることを認めざるを得ない。併し乍ら本文に於てはこの問題には直ぐに入らずに、なほ經濟文化の擔當者として自負し、矜持するところの他の一二思想に就て論じてみたいと思ふ。

既に云つたことではあるが、我國の經濟は接木の經濟である。我國古來の原始經濟に、やゝ高度の支那、印度の文物の輸入と共に經濟樣式を接木し、更に近世に至つてからは歐米の經濟方法を接木したものである。接木はつまり雜種だ。ある外人が我國へ來ればエリザベス朝から現代に至るまでの英國のシルクハットの型を一しよに見物することが出來ると云つたそうであるが、それ處ではない。最近パリ流行の洋裝を銀座で見ることも出來れば、私共自身は南洋土人と一樣の簡易生活を營んでゐる。ハイカラーと褌を一しよに身につけて矛盾はないのである。

かやうな經濟であるから、その內容が單調なものでなく、かなり複雜であることは云ふまでもない。最近のディー・ノイエ・ルンドシヤウ誌上に於てレッデラー教授は過渡時代の日本の社會と經濟のことを論じてゐるが、その中にヨーロッパの官僚とか封建思想とかは、もう抽象的のものとなつてゐるが、日本の夫れは具體的の存在物であると云つてゐるが、正にその通りであらう。私共は我國の大都會に於ては素より、地方に至るまで、謂ゆる現代式の大企業や大工場經濟組織を見るのである。併しそこで働いてゐる經營者の頭とか、身體とかはまだ舊幕時代の因襲そのものであるが如き者の決して尠なくないことを見出すのである。世襲と情實と門地から事業經營の中堅者たるべき者が撰ばれてゐることは甚だ多いのである。それだけではなしに經營者は主人であり、大小の大名であつて、使用人は家の子郎黨の樣に取扱はれる。即ちなほ家長的思惟が經濟界に殘留してゐることを否むことはできない。而してこの家長的思惟と資本家的思惟が甚だ妙にからんで更らでだに沈滯な我國の經濟を停滯せしめてゐるやうに思はれる。

かやうな雰圍氣にあつて、ある者は自棄頹廢し、どうにでもなれ、どうにかなるだらう、と將來を僥倖し危惧するのであるが、これも一應は道理の如くでもある。悲觀論者ならずとも無爲は有爲、無策は大策、と何等かを空頼みに自惚れる放任論者もあるにはある。

併しこれ等の成行主義に反抗して英國流の個人主義を標榜する人士も尠くない。武藤代議士や上田博士の如きその前

線者の如くに見ゆる。武藤氏が「我國政界の腐敗を根絶し、我國經濟界の行詰を救治する途は、我國の行政組織に一大改革を加へ、財政を整理緊縮して、一面腐敗の生ずる原因を絶つと同時に、民間の景氣を良くする原動力たる國民の資本を政府の手より國民の懐に戻す外なきを確信するに至つた」、ことに對しては多少の敬意を表したくも思はぬではない。また上田博士が新自由主義と稱するものを提唱して、我國の官業の整理、關稅政策及び一般租稅政策の改正を主張して、結局それは「我國民の一人一人をして其天分を充分に發育し得しむるの自由」を與へ、その爲に當來の資本主義の餘弊を一掃して、「資本主義そのものを自主的ならしめなければならぬ」となし、この目的の爲には「自由競爭の如きは固より不朽の原則ではないけれども、それが資本主義の自然的調節手段たる限りにおいては、何れの國でも今後尙ほ之を利用しなければならぬと思ふのみならず、我國の如き民主的政治機關の幼稚なる國において特に然りとしなければならぬ」、と。而して謂ゆる舊き自由主義者が自由競爭の法則を過信したのは誤りであつて之を修正しなければならぬのみならず、「自由主義の求むる所は自主獨立の精神である」から、「若し自覺したる個人の團結によつて眞に協同の事業が行はれるならば、それが政治上であつても產業上であつても均しく喜ぶべきことである」。上田博士の新自由主義と稱するものゝ意味の大要は以上の如くであるやうである。今、私はこの新主義なるものゝ檢討に從事しようと云ふのではないが、少しく之に觸れるだけは觸れたいやうに思ふ。

我國の政治がだらしなく有害である事に就ては、正に一つの例證をも必要とせぬであらう。この點に於ては武藤上田兩氏の言說の通りである。私共は政治の刷新、無能率不親切の官業の整理、關稅、稅制の徹底的修正を希望するに於て人並に、人後には落ちない。併しそれがすぐに新自由主義でなければならぬと何故になるか、を疑ふのである。十八九世紀の思想家であつて今から云へば舊自由主義者の分類に恐らくは入れられるであらう人々で、各人は各人の利害を最もよく知る以上それ等の人々の協同事業を否定する譯はなし、更には個人的自由主義者にして國民の一人一人が各々の天分を充分に

發揮することを希望しない者はなからう。自由主義の新と舊との間に如何樣な差別があるか、博士の色々の說明にも拘はらず、まだ不明のまゝにあるが、それはそれとして、英國流の個人本位經濟に追從しなければならないものか如何か。ここに問題の要點が横ると思ふ。

第一に考へなければならないと思ふ事は、英國流の個人的自由主義即ち、資本主義は經濟文化の上から云つて、もう試驗濟のものだとも云へないだらうか。それ故に過去百年の英國の惱みがあつたのではなかつたか。諸々の社會立法が時々設けられたに拘はらず英國民が安んじられない破目に今日陷つてゐるのは何故であらうか。無論のこと世界大戰前から米國、獨逸等の有爲經濟國の脅威を受け、大戰後期の輕重に變化があつて、その經濟覇權の他國に對する相對的地位が下つたことも有力な原因であるとは云はなければならないが、尠なくとも鋭敏なる先驅者の頭腦には異質創造的經濟文化を希望するの念慮が盛んなる事を看過することができるであらうか。若し昔の人が好んで用ひた覆轍の戒を以てするも、我國文化をこの上英國式の泥濘みの轍の跡を辿らせなければならないだらうか。私共はもつと多くを經驗から學ばねばならぬ。昔から之を他山の石と云ふ。

次に考へたいのは自由競爭そのものゝ問題である。謂ゆる舊派の自由主義者でも人間社會に於ける自由競爭を社會進化の最大唯一の原理となした者は極めて尠いのである。引合に出す迄もないが古くはアダム・スミスの如き自由主義の大宗も、經濟界に於ては假りに自由競爭を以て原理となしたものゝ、その思想體系に於ては同情の感情に非常に高き地位を與へてゐるではなかつたか。ミルの如きも競爭を讃美することに於て新舊自由主義者に讓るものではないが、之を以て最高のものとなすのではない。「競爭は考へ得べき最良の刺戟ではないかも知れぬが、差し當りは必要なのだ。そして競爭が進歩にとつて要らなくなる時を豫視することはできない……」となしてゐる。つまり自由競爭論は一面利あれども、他面弊害あり、結局は必要惡の一つだと視るのが新舊自由主義者を通じての見解であると云つても間違はなさそうだ。

自由競爭が一つの原理として社會の發達に尠なからざる寄與をなし、またなすであらう事は否認しない。併し乍ら自由競爭を過信しないと云ふ消極的態度の外に、また致方のない必要惡として捨てゝ置くと云ふだけではなしに、もう少し詳細に考察することが今日に於て緊要のことではなからうか。こゝに至つて自由競爭が社會生活上に於ての意義を確めることと、次で自由競爭存在そのものゝ問題の考究が差し當つて必要になる。區別して順々に論じよう。

先づ社會生活に於て自由競爭が如何なる內在的價値を有するであらうか。こゝにはダーヴィニズムに基く適者生存の原理と經濟の發達の問題については深入しないが、畢竟するに最適者殘存の原理は生物界を通じて既に論證せられたところである。故に思想上から云へば原始米國の一州に於て人類進化の原則を教授することを禁止する判決が下されはしたが、そは單に判決者が一種の猿から進化したものであることを證明する外何の效果もないことでもあつた。實に優勝劣敗の理によつて環境に最適者のものが殘存すると云ふことは一つの自然法則として行はれるものであつて、常に必ずしも有價値者殘存と云ふ意味ではない。マーシャルによれば孤棲的の習性を有する狼種よりも、群棲的の狼種の方が殘存する可能性が多いと云ふことにすぎないし、又ケーンズの例によれば首の長いヂラフは短いものよりも高き樹の果實に屆き得るから殘存すると云ふ事實にすぎない。これは動物界のこと。翻つて今の世の經濟を視よと云はう。眞面目なる企業家の殘存もあらう。が、併し大富を蓄積し得るものは多くは投機者、ペテン師、法網を免れて恥なき詐僞類似者の如何に多きとよ。人の世乍らに狼の世の如くにもある。私共が今感傷的氣持をまるつきり捨てゝ考へても、果して經濟上に於ける優勝劣敗を人間社會に適した有價値の生活原理と看做し得るか如何か——。併しこれはこれとしてよろしい。價値の問題になると意見の相違として終るかも知れないから。併し客觀的にもつと重要な疑問がある。それは今日の時代の社會に、抑も、自由競爭なるものが在り得るや否やの問題だ。我國でなくとも、例へば官業の少ない、政治の腐敗の少ないと云はれる所の、且つまた國民が概して常識的に教養せられてゐると云はるる所の英國に於て果して自由競爭なるものが存在するや否やの

問題である。英國に於てもケーンズ其他の學者論者によつて新自由主義なるものが提唱せられてゐるところを見ると甚だ怪しくなつてゐる。私はそれは當然の事であると思ふ。何故ならばよしんば自由競爭が最善最美最眞のものとしても、實は事實に於ては存在しないのであるから。と云ふ譯は社會制度經濟組織が硬化して來てゐるその上に封建的因襲が多分に殘留してゐる國に於ては、眞の意味に於ける自由競爭なるもの丶在り樣がないではないか。いくら裸で生れるとは云ひ乍ら富豪を親に持つ兒と、勞働者を兩親に持つ兒との間には既に一生相償ひ難きハンヂキャプがあるではないか。大名華族の子弟とその馬丁の子弟の自由競爭も變なものである。早い話が胎子に產母選擇の自由があるとするならば恐らく多くの民衆の母は忌避せられるであらう。何れにせよ過去の封建的因襲と、偶然の機會と、籤引の樣な盲目的蓄富競爭と、謂ゆる自由競爭の結果出來たところの種々の獨占の成果として出來上つてゐる今日の社會經濟制度と、その富と所得との分配狀態である。この不正と不幸によつて固められてゐる基礎の上に、立派な方正な自由競爭の產果を求めんとする。その甚だ難きを感ぜざるを得ない。出發線が既に歪んでゐる。如何にしてそこに眞に自由の競爭を望み得るか。

この點に就いて思ひ起す事がある。ワグナー教授と云へば人も知る通りの近代の大財政經濟學者であつて、その主張するところは社會政策であつた。而して教授によれば現代最も憂ゆべきは貧富の間隔の甚しくなり、又なりつ丶あることである。而してこと玆に至つたのは全く產業革命以來自由競爭が行はれたことに歸しなければならぬ。この自由競爭の結果による貧富の間隔を緩和する爲には社會政策を徹底的に實行せねばならぬ、と云ふにあつた。ところが之に對してスエーデンのウイクゼル教授は現代の貧富の間隔が甚しくなつたのは自由競爭の結果ではなくして、不自由競爭の結果であるとなしたのであつた。而して私に取つてはウイクゼル教授の說の當れるを思ふのである。今日の社會經濟制度の上に於ては官業の縮少や少しの政策の變更位にて、新にも舊にも、眞裸の自由競爭なるものを望むことは、決して出來ないのである。既に門地や情實や、貧富の甚しい間隔が鐵筋コンクリートで出來上つてゐる。注文通りの各人の能力の自由の伸張を如

何して宥めるだらう。而してこの點は資本主義經濟制度を擁護する側に立つケーンズ教授さへも認めるところである。同教授は「自由放任の終末」なる小冊子に於て曰ふ。從來自由放任主義がその基礎となしてゐたところの形而上學的な一般原則なるものを掃蕩しなければならない。人々がその經濟的活動をなすに當つて、既に定まつた自然的自由などと云ふものを持つてゐる譯ではない。財產を所有したり獲得する人に對して永久的な何か契約的の權利がある譯でもない。また世の中は個人の利益と社會の利益が常に合致すると云ふやうにうまく出來上つてはゐない。經濟學の原理からして高尚な利己主義はいつも公共的利益を生ずるものだと演繹するのは正しくない。いや、利己主義は一般に高尚だとは云へまい。實際人々が自己の利益を計らうとしても別々に活動してゐては餘りに無智であり虛弱であることを悟るだらう。のみならず經驗に徵しても人々が社會的集團となつて活動する方が、別々にある場合よりも、明を欠くものとは云へないのである……。

ケーンズ教授は從來の意味に於ける個人的自由主義が既に社會實生活上に於ける權威を失墜したことを認め、且つ又現代資本主義が危險と不確實と無智の三大經濟害を有してゐることを認め乍ら、尚ほ且つ資本主義の改善によつてその弊を矯めその長を伸ばして行かうとするのである。而してその目的の爲には技術的に個人的のものと、技術的に社會的のものとの區別を明にして國家經營と個人經營に職能の分擔を求め、更に其の間に半自治的團體、即ち個人と國家との中間に位して適當の職能を分擔するものゝ發育を希望する如くである。こゝに於てはケーンズ教授の所論の批判を目的とするのではないから、之でこの點はよすが、以上の例によつて英國に於ても個人的自由主義なるものが舊來の信用を全然失つて來てゐることを知ることが出來るであらうと思ふ。

社會生活上に於ける純粹の自由競爭さへが不信用である。況んや不自由競爭の外に思惟することが出來ない內容を持つた現代社會經濟制度の下に於て、已むを得ず必要惡として之を是認し、更にその赤裸々なる活躍によつて社會經濟の發達を期せんとする、その甚だ危險なるを感ぜざるを得ない。

また論者は云ふかも知れぬ。勞農露西亞の如きもその絕大の權力を以て遂に微力取るに足らぬものと輕視した個々人の利己心に敵するを得ず、兜をぬいで新經濟政策即ちネツプを採用せざるを得なかつたではないか。而してそれはつまり各自の蓄積を許し、自由交易を許し、結局自由競爭を基調とする經濟制度への復活を意味するではないか、と。この點に關しては論者の言の如くであつてレニン自身も之を認めたやうだ。併し乍ら之を以て直ちに資本主義への復歸を必然に意味するものと云つては、それは速斷にすぎる。何故ならば社會政策をいくら實行しても資本主義經濟制度の本體そのものに變りがないやうに、ある程度の私有財產と自由競爭を許しても社會主義經濟制度の本體には變りはなからう。それと云ふのも社會經濟の統制力が奈邊にあるか、と云ふことによつて經濟文化の歸嚮が決定せられるからである。その故であるか如何かは忖度の限りではないが、現今勞農政府の頭目スターリンがこの點に關して自分等の掌中に國家の權力を有する限りこの新經濟政策の採用は資本主義への復歸を意味しない、と論じてゐるのは尤もの事とも思ふのである。好嫌善惡は別として、客觀的觀察の歸結はこうなるであらうと考へる。自由競爭と資本主義經濟の論決して容易ではない。

* * * *

これも人間の弱さである。失望を感じつゝも何物かに取縋らねば安んずることを得ないのは——。私共は、しかし、大勢の動きを悟らねばならぬ。

現代社會經濟制度の硬化は遂に經濟生活を、否更に社會生活一般を、すでに型化し、硬化して停滯の惰氣に滿々たらしめてゐる。自から化石化せる支配階級はその生命の枯渇の故に、自己救濟の能力なく、況んや我國經濟の將來を擔當するの識見と氣魄を欠いてゐる。こゝに、個々十九世紀哲學に復歸して、我生と我經濟の一新を期待するものあるも、そは過去百年の尊き文化經驗より學ばさるの甚だしきものである。

新環境は新制度と新生活を要望してゐる。否之を個々人が希望すると、せざるを問はず、新生命に滿つるもの、創造心に燃ゆるもの、因襲の混迷を打破する力あるものは、必ずやこの時代に生れるに相違ない。これが社會制度の榮枯滅生の約束である。而しこの創造者の力がよく我國の經濟の大任を將來に擔當することも期待しなければならぬ。一新展開を渇望する我國經濟は、相當の期待を以て創造者經濟の來るのを望んでゐる。

勞働組合運動の『新』方向轉換

山川 均

（一）『新』方向轉換

最近わが國の勞働組合運動の主要な部分において、新たな意味での方向轉換が行はれ、もしくは行はれつゝあるものと見做されてゐる。これは日本勞働組合評議會の第三回（本年度）全國大會によつて定められた新方針（『日本勞働組合評議會運動方針大綱』）をさすものであつて、わが國における組合運動のうちに占める評議會の重要な地位にかんがみ、この新方針の方向轉換は、組合運動の今後の發展の上に、したがつてまた無產階級運動全體の發展の上に、大なる影響を與へるものとして、異常な注意をもつてその進行と發展とが凝視されてゐることは怪しむに足りないことである。

この新方針ないしはこの『新方向轉換』の方向と性質とを知るために、私は三四の點について、これを第三回全國大會に先だつて開かれた日本勞働組合評議會關東金屬勞働組合大會に現はれた見解と比較してみよう。

この比較のために、私が關東金屬勞働組合大會の見解を選んだわけは、次の通りである。

關東金屬勞働組合大會は、新方針以前の舊傾向が、恐らくその最高潮にあつた時期に開かれたものであつて、したがつて新方針の方向と性質とを知るために、最もよい對照となると思はれるからである。

『新方向轉換』は晴天の霹靂のごとく、卒然として行はれたものである（もちろん評議會の內部にあつては、久しきに亘る討議の行はれた結果であつたらうし、またその結果でなければならぬと考へるが、少なくとも公然の問題として外間に現はれた

のは、それはかりそめにも大衆的性質をもつた運動の歴史においてはほとんど類例のない、またほとんど不可能と考へられるほどの、急角度をもつて旋回した方向の轉換であつた。現に私の如き外間からの觀察者は、無產者運動の種々なる狀況にかんがみ、この第三回全國大會こそ、恐らく舊傾向の最高潮であつて、この大會を分水嶺として、初めて新傾向が漸次に現はれるにちがいないどいふ、極めて迂遠な豫想をしてゐたのである。しかるに實際には、第三回大會は舊傾向の最高潮、ないしは舊傾向の終末ではなくて、新傾向の初めとなつた。いなただに初めではなくて、この新方向轉換は、『漸次に』ではなくて、たゞ一擧に完了されたかの觀がある。そこでこの大會の一ヶ月前に開かれた關東金屬勞動組合大會の當時をもつて、大體において舊傾向が高潮にのぼりつめた時期と見ることができる。であるから新方針をこの大會に現はれた見解と比較することは、新方針の方向と性質とを知るために最も便利であると同時に、その間一ヶ月間を隔てた兩者を比較することによつて、この方向轉換が、いかに急角度の旋回運動であつたか(これもまた新方針の性質の一つの要素である)を現實に吾々に理解せしめる利益がある。

この時期からは、新方針に對する舊傾向を、より活躍的に知らしめるような言論や實踐上の挿話を、ほとんど無數に拾ひ出すことができるが、これは極めて繁雜な仕事であるし、なほその上に、金屬大會に現はれた見解は、私の知つてゐるほとんど唯一の公式のものであるから、この二つのもの丶比較にとゞめようと思ふ。

(二) 勞働組合と日常鬪爭

關東鐵工大會の『組織運動に關するテーゼ』は、『日常鬪爭の問題』と題する項下に、次の如く敎へてゐる。

『勞働者のブルジョアジーに對する戰ひは、その存在と共に始まつてゐる。そして勞働者のブルジョアジーに對する鬪爭の武器たる組織(こゝでは勞働組合と解す、筆者)はこの鬪爭を通じてのみ可能である。

『此所に鬪爭と組織との交互作用が起る。だがかゝる自然發生的な鬪爭の發展は、それが勞働者それ自身に委ねられては自ら限界がある。

『勞働階級が眞實に資本家階級の搾取壓迫から離脫し得るが爲めには、彼はこの限界を、もの丶見事に越ねばならぬ、だがそれは如何にしてか。

『この限界を越え得る爲めには、彼は新たなる要素、外部より注入されたる理論との結合を必要とする、組織は今や眞實

の階級的實行との媒介形態となる。こゝに組織問題における日常闘爭の重要性がある。』

多くの人々によつてしばしば引用せられてゐるように、レーニンは有名な『何を爲すべきか』のうちに、『階級的政治意識は、外部からのみ、經濟闘爭の外部からのみ、勞働者に附與することができる、階級的政治意識は、勞働者對傭主關係の領域からではなくて、人民のすべての階級對國家及び政府の關係の領域、すべての階級相互の關係の領域からのみ得られるものである』と云つてゐる。レーニンのこの言葉を承認する者は、同じ意味において、このテーゼの規定を承認するにちがひない。たゞこの二つの場合の異ろところは、レーニンが目の前においてゐた問題は、前衛黨の結成のために『何を爲すべきか』といふ問題であつて、このテーゼが答へようとしてゐるのは、勞働組合の組織運動として『何を爲すべきか』といふ課題であつた。テーゼはこの課題に答へて、勞働者對傭主の關係にもとづく自然發生的な闘爭――從つてこの闘爭の主體である組織、即ち主として組合――の發展は、それが勞働者自身に委ねられては、おのづから限界がある、勞働組合は外部より注入される理論との結合によつて、この限界を、ものゝ見事に飛び越へねばならぬ、と云つたのである。

レーニンの場合は、この限界をものゝ見事に飛び越えた要素によつて、前衛隊が結成せられる。このテーゼの場合には、自然發生的な闘爭の主體として生まれた組織――勞働組合――がこの限界を飛び越える。勞働組合にはこの限界を飛び越へることができるかできぬかは暫らく別問題として、かりに勞働組合がものゝ見事にこの限界を飛び越えたとしたならば、このすばらしい組織こそレーニンがその結成のために何を爲すべきかを考へた前衛黨と、精密に同じものであることは云ふまでもない

これは勞働組合の日常闘爭といふ問題ばかりでなく、勞働組合の組織問題ばかりでなく、勞働組合そのものに就いての大會の根本見解を示したものであるが、この點についての第三回全國大會の見解は、次の一節によつて知ることができる。

『吾が勞働者組合は、經驗的にも理論的にも、我等勞働者大衆の日常經濟生活利益の擁護獲得のためにする日常經濟闘爭を、第一段の、中心的な任務とするところの大衆的組織體である。從つて勞働組合は、資本の搾取に對抗し勞働條件の維持改善と生活の安定とを圖るためにする一切の日常經濟闘爭の擔當者、主體となり、これが任務を有効、活潑に遂行しなければならぬ。』

これが大會の認めた、勞働組合としての勞働組合の任務で

あり、意義である。しかし宇宙間のいかなるものも、それ自體だけで完たき意味をなすものはない。その如く、全無產階級運動のうちに占める勞働組合の完たき意味は、便宜のために切り離して言ひ表はした勞働組合としての勞働組合の任務と意義とでもつて、言ひ盡されたものではない。これは當然自明のことであるが、大會はこの點について人々に誤解のないやうに、特に次の如き言葉によつて、無產階級政治運動と勞働組合運動との關係についての見解を示してゐる。

『だが右の如き我勞働組合運動の第一段の、中心的な任務及び目的は、終局的には…我が勞働組合が階級的政治鬪爭、即ち無產階級の完全なる解放と合理公正なる新社會の實現とを目標とする一切の運動を支持し、これに活潑に參加することによつてのみ、よく實現達成し得られるものなのである…。』

テーゼは勞働組合の日常鬪爭に對する見解を、さらに次の如く展開してゐる。

『我々は今や前衛の目的意識性と大衆の自然成長性とを絕へず結びつけるところの鬪爭、そしてこの內的な交互作用によつて大衆をより強く前衛の指導下に置くと共に、前衛を訓練し強固にして行くところの日常の鬪爭を必要とする。そしてそれこそが今や吾々（組合運動と解す、筆者）の云ふ日常鬪爭の規定でなければならない。』

『全民衆の先頭隊たるべきプロレタリアートに於ける日常鬪爭は、その中から絕へず訓練され教育されたる前衛隊を提供し、この前衛隊をしてやがてあらゆる人民の層集團の中に浸消し、そして絕對專制支配に對する各被壓迫層の政治的不滿を誘發し、鬪爭を喚起し指導し統一し得るに至らしめる樣に戰はれねばならない。而してまさに此の事こそが、今我々の決定すべき日常鬪爭の嚴密なる規定をなすものである。現段階に於ける日常鬪爭の意識は、まさにそれでなければならぬ…。』

『……（從來の組合運動は）獲得したる大衆を……日常鬪爭に於て訓練し、鬪士を養成せんとはしたものゝ、當時にあつては……それは眞實の政治鬪爭への訓練ではなく、又無產階級前衛の養成でもあり得なかつた。これらの訓練は、畢竟斯かる組合主義的鬪爭の擴大再生產を準備する（二字欠字）運動の鬪士を作り出すといふ範圍を出でてゐないのであつた。』

かようにこのテーゼが勞働組合の日常鬪爭として規定し定義してゐるものからは、新方針の謂ゆる『資本の搾取に對抗し、勞働條件の維持改善と生活の安定とを圖るためにする一切の日

常鬪爭』は、積極的意識的に排除せられてゐる。從つてこの種の一切の日常鬪爭の擔當者となり、主體となり、この『任務を有効（有効とは、これらの日常鬪爭が、資本の搾取に對抗し勞働條件の維持と生活の安定とを圖るといふ見地から、合目的的に行はれることゝ解す、筆者）活潑に遂行』するなどといふことは、テーゼが現段階に於ける日常鬪爭の意識はまさに斯くあらねばならぬと命じたその意識とは、全く異つた意識にもとづく行動であつて、それは『現段階』においては、勞働組合の任務に反した行動であることは自明である。

　これに反してテーゼが勞働組合の日常鬪爭に認める唯一の意義——即ち勞働組合の日常鬪爭の任務——は、さきの拔萃によつて明らかであるやうに、この日常鬪爭によつて、『大衆をより強く前衛（嚴密な意味での前衛黨と解す、このテーゼでは『全民衆の先頭隊たるプロレタリアート」といふやうに、嚴密な用語の區別が守られてゐることに注意せよ、筆者）の指導下に置くと共に、前衛を強固にして行く』ことである。また勞働組合の日常鬪爭——たとへば或る工場で、晝飯に茶を出せとか、賃銀を一割増せとかいふ要求にもとづく日常鬪爭——レーニンが極めて重要視した鬪爭——の一つ一つを、その中から訓練された前衛隊を前衛黨に供給し、この前衛黨がその部隊を人民のあらゆる階級と層とに派遣し（レーニンは『何を爲すべきか』のうちで、前衛黨の任務について精密にかう云つてゐる！）て絕對專制支配に對する各被壓迫層の政治的不平を誘發し、鬪爭を喚起、指導、統一し得ることを目的として、そのために、その手段として、嚴密にそのやうに行ふべきものであつて、勿論、勞働條件の維持改善等々のために——少なくとも直接にそれを目的として——行はるべきものではないのである。

（註一）

　かゝる明確な意識の上に立ち、そしてその部隊を人民のあらゆる階級とあらゆる層——勞働組合をも含めて——の内部に派遣することを任務とし、また勞働組合の純然たる日常經濟鬪爭にもかくの如き意義を見出だし、勞働組合の日常經濟鬪爭にもかゝる見地から重要な意義を認める（それ故にレーニンは辨當の茶を出せといふ要求にもとづく鬪爭をも、極めて重大視した。それは現にこの鬪爭を行つてゐるすべての勞働者の意識が、『嚴密な規定』に現に合格してゐたからではないのである。）團體がもしこゝに存在すると假定したならば、これは少なくともレーニンの用語例に從へば、これこそまさしく嚴密な意味での前衛黨なのである！　それは當時の用語に從つてレーニンが社會民主々義の黨派と云つたところの前衛的黨以上のもので

も、以下のものでもないのである。（註二）

この點については、新方針は、『勞働組合は、自ら政黨的性質（たゞに前衞黨的性質ばかりでなく—筆者）を帶ぶるが如き從來の混合型からは脫却しなければならない……』といふのである。

（註一）　これは前衞黨は勞働者の日常鬪爭を、かゝる意味からのみ見るものであり、かゝる手段にのみ利用するものであり、從つて勞働組合内における前衞黨の派遣部隊は、組合の日常鬪爭を、『勞働條件の維持改善等々を圖るため』に指導しないで、たゞかくの如き手段への利用としてのみ個々の鬪爭の一つ一つを指導するものだ、といふ意味ではないのである。これに反して、勞働組合といふ限界內では『勞働條件の維持改善等々を圖るため』に、これを直接の目標として行つてゐる鬪爭が、前衞黨のより廣い視角からは、同じ鬪爭がかような手段としての作用をするのである。であるからこそ、組合内における前衞隊の派遣部隊は、單なる勞働條件の維持改善等々を圖るといふ考へから一步も出でない意識にもとづいた勞働者の日常鬪爭にも、全心的に協力し、かつこれを有效に遂行しようとする——卽ち、かくの如き勞働者の意識と目的から見て合目的的に遂行しようとするものである。またそれ故に、晝飯に茶を出せといふ要求にもとづく鬪爭は、或る人にとつては自然發生的な、組合主義的な鬪爭以外の何ものにも見へない（現にこの鬪爭を行つてゐる勞働者も、それ以外の何らの意識をも持たなかつた）が、レーニンのより廣い視角からは、この同じ鬪爭が、極めて意義あるものに見えたのであつた。

（註二）　當時私は、罷業に關して次の如き意見を聞いたことがある。最近の時期における著しい特徵は、罷業の頻發と、これらの罷業において、勞働者側がほとんど例外なく敗れてゐることである。これは指導原理の誤謬にもとづいてゐる。卽ち資本家から或る經濟上の利益を獲得することを目的とする罷業は、現段階においては（どんな段階か？）必然に敗北すべき運命をもつものである。そこで在來の組合主義的ないしは折衷主義的罷業に代はる『マルクス主義的指導原理』により、現段階においては、罷業は或る一定の經濟的利益を獲得することを目的として行はるべきものではなくて——卽ち新方針の謂ゆる『勞働條件の維持改善等々を圖るためにする』罷業——ではなくて、ブルジョアジーの全支配、ブルジョアジーの支配そのものに對する抗議の罷業でなければならぬ。從つて、それは一週間、一ケ月、または數ケ月の惡戰苦鬪の持久戰を敢てする必要はない。一日可なり、一時間可なり、五分間三分間でもよい。要は資本主義の全支配に對する抗議の表示である……。罷業に對するこのマルクス主義的最新の指導原則は——私はその眞實を疑ふが——現に來るべき評議會第三回全國大會によつて採用せられ、評議會の罷業戰術を一變するであらうとさへも傳へられてゐたのである。日本の資本主義の『現段階』が、勞働者の要求と自衞に對して、資本家の態度を頑强にし、罷業の勝利の機會を著しく縮少したことは事實である。この『マルクス主義的』新戰術は、罷業運動に對する抵抗をものゝ見事に飛び越えて、無抵抗線へと進出展開せしめようとするものであつた。かくて組合主義的ないしは折衷主義的日常鬪爭は、ものゝ見事に政治鬪爭へと發展轉化した。そうして勞働者の罷業は、教會における敬虔なキリスト教徒の默禱の一種にまで進化するのである（これはまた、日常鬪爭の一つ一つに、何でもかんでも政治的鬪爭の性質を賦與しようとする面白い實例である）。

（三）日常經濟鬪爭の政治鬪爭への轉化

勞働組合の日常鬪爭は、全無産階級の政治鬪爭との關係において理解しなければならぬ——勞働組合運動を、全政治鬪爭の一翼たらしめねばならぬ——經濟鬪爭は、政治鬪爭にまで發展轉化せしめねばならぬ——經濟鬪爭と政治鬪爭とは、不可分に結合されなければならぬ——この思想は、テーゼにおいても第三回全國大會の新方針においても、共通に繰返して力說せられてゐるように見える。そこでいかに理解することが、所要の如く理解することであり、何がこの發展であり、何がこの轉化であり、如何に兩者は結合せられるのか、といふことについて、兩者の見解を比較して見よう。眞に重要なのはかような抽象的な公式——一メートルは何尺何寸だといふ換算表——ではなくて、現に吾々が踏破の必要に迫られてゐる山が、何千何百メートルあるか、といふことにあり、そして意見と觀測との眞實の分岐は、この點にあるのだからである。

この點についてのテーゼの見解は、極めて明瞭である。

『組合主義乃至折衷主義に指導された日常鬪爭には、明白な限界があつた。即ち勞働組合にあつては、それは必然に勞働者の經濟鬪爭に限定され、それが政治的に鬪はれた時でも、勞働者の經濟的利害による政治鬪爭に限定せられた。かゝる理論に指導せらるゝ限り、現實の運動はどこまで行つても同じである。即ち目先きの勞働契約の取引を有利にするための鬪爭からは一歩も足を踏み出し得ない……』。

では、どうしたらよいか？これに對しては、テーゼは勞働組合はかく／＼する、と答へる代りに『前衛、智識分子等』は次の如く行動すると答へてゐる。即ち——

『それは（前文からの關係により、勞働階級の前衛、智識分子と解す、筆者）……勞働者の日常經濟鬪爭をも敏活果敢に捕へる』

かようにテーゼは、決して日常經濟鬪爭を組合主義者折衷主義者の仕事である、として顧みないのではなくて、反對に、これを『敏活果敢に捕へる』のである。だが間違つてはならぬ。

『だが、この經濟鬪爭を遂行することが、組合主義者乃至折衷主義者の解した如くに、所謂日常鬪爭（もちろん、勞働組合の日常鬪爭と解す、筆者）の規定となるものではない。』

從つてまた、テーゼの理解する勞働組合は、『資本の搾取に對抗し勞動條件の維持改善等々を鬪るための一切の日常經濟鬪爭の擔當者』であつたり『主體』であつたり、またはこれを『中心的任務とするところの大衆的組織體』であつてはならぬ。で

はこの『前衛、智識分子』によつて敏活果敢に捕へられた日常經濟闘爭はどうなるか？

『……我々は（前衛、智識分子と解す、筆者）運動を今や廣汎なる領域に、全無產階級政治闘爭に轉換せんとするのである……。』

『……今やそれ（前衛、智識分子等、筆者）は資本主義全機構を全體性的に統一的に見拔いたところの認識を以て一切の問題を解決せんとするものである。それは政治から出發する。政治は經濟の集中的表現だからである。かくてそれ（前衛、智識分子等、筆者）は凡べての闘爭を眞實の階級的政治闘爭に發展轉化せしめ、或は眞實の階級的政治闘爭に大衆を動員し來るための中間關節として指導する。』

讀者が迷はれることを恐れて念のために斷はつておくが、私はこれらの拔萃文を、依然として、勞働組合の『組織運動に關するテーゼ』のうちから引用してゐるのである。從つてまた、私はこれらの文字を、方法論上から正しいとか正しくないとかといふ見地から見てゐるのではなくて、勞働組合の組織運動と直接に結びつけ、組織運動に直ちに當て嵌めて、これを組織運動上の一定の指令として見てゐるのである。

そこで本題に立ち返へる。政治は經濟の集中的表現である。たしかにその通りである。それは（前衛は）政治から出發する。しばらくその出發に任せておく。たゞ遺憾ながら吾が勞働組合運動は、經濟から出發したのである。それは謂ゆる自然發生的な、組合主義的な、ないしは折衷主義的な經濟闘爭から出發し、今やつとのことで、しかもそのうちの先頭分子が、政治に辿りついたのである。勞働組合運動は、たゞに經濟に出發したばかりでなく、それは經濟の土壤に生きぬいてゐる。であるからこそ、テーゼが、組合の自然發生的な經濟闘爭は、これを勞働者の手に委ねておいたのでは、おのづからその發展の限界があると云つたのである。私の當面の目的は、さきにも述べた通り二つの異つた見解を比較することであつて、この比較を混亂させるような私自身の意見を挿入することは、出來得るかぎり差控へてゐるのであるが、もし附け加へることを許されるならば、勞働組合はかような生ひ立ちの故にこそ、かゝる性質から離脱する不斷の努力と闘爭とを必要とするのであるが、しかも究極において、勞働組合運動は完全にこの性質を離脱し切らないものであり、そしてこゝに勞働組合の前衛黨と異つた特質があり、最も廣汎た意味での大衆的組織であるところの特質があり、從つてまた、こゝに無產階級の全運動のうちに占める勞働組合運動の特殊な意義と任務がある。

しかしながらこれは組合運動の先頭分子、ないしは組合運動の内部に派遣せられた前衛黨の部隊が、組合運動をして、この性質から離脱せしめようとする努力と闘爭との必要を少しも輕ずるものでもなく、またこの努力と闘爭との重要な意義を小さく評價することを意味するものではない。いはんや、それは、この努力と闘爭とが成果のない無効な努力と闘爭であるといふ意味ではなくて、不斷の努力と闘爭であり、いかなる時にもその張度をゆるめることなしに、闘ひつゞけねばならぬ永久の努力と闘爭であるといふことを意味してゐる。しかし、それは勞働組合が勞働組合の性質を存して存續する限りは、永久に闘ひ殘されてゐる闘ひなのである。それは唯だ一回の揚棄や離脱によつて決濟してしまふ過程でなくて、勞働組合運動の全歴史を通じて間斷なく行はるべき過程である。この闘爭の必要が全くなくなつた時、勞働組合がかような性質を完全に揚棄し、完全に離脱し、この性質によつて與へられてゐる制限と限界とをもの丶見事に飛ひ越えた時、勞働組合はその性質を一變して、もはや勞働組合でないところの或るもの——即ち前衛的黨となる——或は少なくとも、前衛黨と勞働組合との謂ゆる『混合型』の組織となる——それは最小限度においても、二重組合主義に立脚した左翼組合となる。ドイツの共産主義勞働組合は、二重組合の上に立つ左翼組合の實例であつて、それは非常な廻り道をして、結局或る點ではI・W・W・のサンジカリズムと顔を突き合せてゐるものである。

第三回全國大會の新方針は、勞働組合の日常闘爭を『資本の搾取に對抗し勞働條件を維持改善等々を圖るための』闘爭——即ち『日常經濟闘爭』であると規定してゐることは前にも指摘した通りであつて、勞働組合はこの日常經濟闘爭の擔當者であり主體である。從つてこの日常經濟闘爭は、『階級的政治闘爭、即ち無産階級の完全なる解放と合理公正なる新社會の實現を目標とする運動』の一翼たる作用をたすべきものではあるが、それを全階級運動との關係にはめこんで丶はなく、しばらく全階級運動と切り離してたゞそれ自身として見るならば——言葉をかへて云へば、これを勞働組合運動の限界内に於て見るならば、依然としてそれは日常經濟闘爭——資本の搾取に對抗し勞働條件の維持改善等々を圖るための日常經濟闘爭なのである。もう一度繰り返していふならば第三回大會の取つた見解に從へば、勞働組合の日常經濟闘爭は、それ自體においては、資本の搾取に對抗し勞働條件の維持改善等々を圖るための闘爭であるといふ性質を失ふことなしに、なほかつ無産階級の階級的政治闘爭と『不可分に結合され、』『その『一翼』たる作用をするものであ

る。したがつて勞働組合の日常鬪爭を、日常經濟鬪爭と規定することを少しも妨げず、また勞働組合をこの日常經濟鬪爭の主體であると規定して、何らの不都合をも感じなかつたのであつた。

テーゼの立場は全く異つてゐる。それは勞働組合の日常鬪爭が、資本の搾取に對抗し勞働條件の維持等々を闘るための日常經濟鬪爭―組合主義的ないしは折衷主義的鬪爭！―たることを許るさない。テーゼはこの種の鬪爭をも敏活果敢に捕へるが、これらの日常經濟鬪爭を、日常經濟鬪爭として捕へてゐると―遂行することと―は許るされない。それは勞働組合運動の限界内で直ちに政治鬪爭にまで、あわたゞしく轉換しなければならぬ。

これは第三回大會の見解とはまさに正反對であつて、勞働組合の日常經濟鬪爭は、資本の搾取に對抗等々を闘るための鬪爭たる性質を失ふことなしに、それは同時に階級的政治鬪爭に結合され、その一翼たる作用を爲すといふ見解に立たない以上は、日常經濟鬪爭を政治鬪爭にまで發展轉化せしめるといふとは、文字通りに日常經濟鬪爭の一つ一つを政治鬪爭に變へてゆくといふこと以外の意味を持つことはできぬ。即ちテーゼのいふ日常經濟鬪爭を捕へて、これを政治鬪爭に發展轉化しなければならぬといふとは、資本の搾取に對抗し勞働條件の維持改善等々を闘るために着手せられた一切の日常經濟鬪爭の一つ一つを、勞働組合は勞働組合運動の領域と限界内において、國家權力を對象とするところの鬪爭―政治鬪爭―にまで發展轉化しなければならぬ　といふことを意味するものとなるのである。

こゝに工場の晝飯時間に茶を出させるといふ、勞働條件の改善を闘るための日常經濟鬪爭が始まつたと假定する。勞働組合は敏活果敢にこの鬪爭を捕らへ、これを國家權力を對象とする鬪爭（またはブルジョア・デモクラシーを、政治的自由を獲得するための鬪爭）にまで現實に、文字通りに、發展轉化せしめねばならぬ！（この發展轉化のできないような日常經濟鬪爭は、よくよく素性の卑しい鬪爭―よくよく組合主義的ないしは折衷主義的素性のこびりついた鬪爭―であるから、もちろん勞働組合は、これを顧みる必要はないのである！）。

かくて日常經濟鬪爭が、ものゝ見事に政治鬪爭にまで發展轉化したならば、この新たな鬪爭―日常政治鬪爭―の擔當者たり主體たるべきものは、そもそも政黨であらうか、組合であらうか。テーゼは、恐らくこれを自明のことゝしたゝめに、答へを與へてゐない。テーゼの見解に從へば、この日常政治鬪爭の主體となるものは、固より勞働組合でなければならぬ。なぜならば、勞働組合の日常鬪爭が日常經濟鬪爭であることを許さぬとしたならば、そして日常政治鬪爭の主體となるものは政黨

だとしたならば、勞働組合が主體となるべき日常闘爭はもはやどこにも無くなるからである。（註三）この種の性質を極く輕度に帶びた組合を指して、第三同大會の新方針は『混合型』の組合と名づけてゐる。

（註三）この傾向が高潮に達した時期には、組合無用論さへも高唱せられてゐた。組合無用論と組へ政黨化の傾向（それは政黨無用論に歸着する。極政治主義はこゝでも非常な廻り道をして、サンヂカリズムの政治否定主義と頰を突き合せてゐる！）とは、手のひらの裏と表である。斷つておくが、手のひらの裏と表のようなとは、密接な關係をもつて結びついてゐることなのである！）。

第三同全國大會の取つた、經濟闘爭と政治闘爭との『結合』經濟闘爭の政治闘爭への『發展轉化』に對する見解は、次の如き言葉で說明せられてゐる。

『……ブルジョア民主主義獲得闘爭の主體たる勞働農民黨が强固になり、その活動能力が集中され、全運動を黨が統一的に代表し指導し得る程度に應じて……我勞働組合をしてその內部にもつ混合型的殘滓を速かに消滅せしめ、これを全部的に淸算克服する條件をつくり、組合が日常經濟闘爭を果敢に廣汎に激發指導し得るに至るのである。

『勞働組合はかゝる政黨的闘爭との結合に依る闘爭を、充分に遂行することに依つて、初めて……吾々の日常闘爭は、政治闘爭に不可分的に結分されたる部分となり、經濟闘爭は政治闘爭にまで發展轉化せしめ得られるに至るのである。』

しからば勞働組合が、『かゝる政黨的闘爭との結合に依る闘爭を遂行する』といふことは、そも〳〵何を意味して居り、それは如何にして實現せられるものであらうか。新方針は次の如き言葉によつてこれに答へてゐる。

『……勞働組合運動の第一段の中心的な任務及び目的は、終局的には……階級的政治闘爭、即ち無產階級の完全なる解放と合理公正なる新社會の實現とを目標とする一切の運動を支持し、これに活潑に參加することによつてのみ、よく實現達成し得られるものなのである。

『かくて我勞働組合は、自ら政黨的性質を帶ぶるが如き從來の混合型からは脫却しなければならないが、同時に新に展開されつゝある政治的闘爭を積極的に支持し、これに活潑に參加しなければならないのである。

……我勞働組合運動の第一段の中心的な任務たる日常經濟闘爭の如きも……また常に當面の政治闘爭の主體たる政黨と協力し、その助力によつて、政治的壓迫に充分に對抗するところがなければならない。

『……勞働農民黨と完全なる連絡を圖り、黨の活動を積極

的に全力を擧げて支持し、これに參加し、必要なる場合は黨の要求に應じて大衆的行動を組織して鬪爭を發展せしめ、又絕えず全組合員に適當なる方法を以て入黨を宣傳勸誘せなければならぬ。』

以上の引用によつて明らかである如く、第三回大會が組合の日常經濟鬪爭を不可分的に政治鬪爭に結びつけてその一部となし、かくて經濟鬪爭を政治鬪爭にまで發展せしめるといふ意味は、勞働組合の日常經濟鬪爭の一つ一つを、經濟鬪爭ならざる鬪爭にまで文字通りに變化するといふ意味ではなくて、『勞働組合運動を全政治鬪爭の一翼たらしめる』ことなのである。そしてこれが具體的な實現は、勞働組合がもはや資本の搾取に對抗し勞働條件の維持改善等々を直接の目的とする（時としては、大衆はこれを目的の全部とするところの）日常經濟鬪爭の主體でなくなることではなくて、依然としてかゝる日常經濟鬪爭の擔當者たり主體たるところの勞働組合が、政治鬪爭の擔任者たり主體たるところの政黨を『支持し』、組合大衆をこの『政黨に參加』せしめることに努め、政黨の活動に『活潑に參加し』、この政黨と『完全に連絡を取り』、これと『協力し』必要の場合には、この政黨のために『勞働大衆を動員する』の任務に就く等々といふことなのである。

終りに私は、經濟鬪爭を政治鬪爭に發展轉化せしめるといふことについて、讀者の注意を喚起しておきたいと思ふ。第三回大會の『日常經濟鬪爭に關する方針』は

『……今日の政治的經濟的狀勢は、勞働階級の生活を擁護し向上せしめるがためには、鬪爭を產業的地方的に、廣汎にしかも集中的統一的に激發し指導しなければならぬと同時に、かゝる鬪爭は、政黨的鬪爭と不可分に結合され（政黨との協力と解す、筆者）而してこれを政治鬪爭にまで發展轉化せしめる（文字通りに、本來の經濟鬪爭に政治鬪爭の性質を帶びしめることゝ解す、筆者）ことなくしては、充分に鬪爭し得ぬのである』

と云つてゐる。本來の性質から云へば純然たる經濟上の鬪爭も、產業的地域的に——即ち分量的に或る程度まで擴大すれば、勢ひ鬪爭の性質の上の變化を引き起こさゞるを得ぬ。これは反面から、經濟鬪爭はその本來の純然たる經濟鬪爭たる性質に變化を伴はないでは、或る程度以上には分量的にも擴大することはできぬ、と云ふこともできる。實際においても、大衆的な經濟鬪爭は、現實にその鬪爭そのものが政治的性質を帶びた鬪爭に轉化し、または純然たる政治鬪爭にまで發展した場合がある。たとへば英國坑夫の同盟罷業は、資本の搾取に對抗し勞働

條件の維持を圖るために起こされた純然たる經濟鬪爭――テーゼの謂ゆる組合主義的折衷主義的日常經濟鬪爭――として出發したものではあるが、英國政府は政治的鬪爭としてこれを鎭壓したのである(これに反して、經濟鬪爭は分量的に擴大すれば、いつでも必然に、政治鬪爭に轉化するものではない。一九二〇年におけるイタリー金屬工の工場管理は、その實例である。)かように大衆的な經濟鬪爭が或る條件の下に或る程度に擴大してくると、それはもはや『政治鬪爭にまで發展轉化せしめることなくしては充分に鬪爭し得ぬ』場合がある。かような場合には、この經濟鬪爭を鬪ひぬくといふことは、即ち鬪爭の性質を政治的ならしめることを意味してゐるのである。

しかしながらそれ故に、『經濟鬪爭を政治鬪爭にまで發展轉化せしめる』といふことは、勞働組合の日常經濟鬪爭の一つ一つを、すべて政治鬪爭に發展轉化(前述の如き意味において)せしめねばならぬといふ意味に解するなら、むしろ意外な結論に到達することになるのである。

私は最も卑近な實例で說明しよう。もう一度こゝに、工場に茶を支給せしめるための鬪爭が起つたとする。また出勤時間の遲刻十分間までは默認せしめるための鬪爭が起つたとする。それから殘業の步合の三割引下げ反對の鬪爭が起つたとしよう。この鬪爭の實踐とその發展との間に、これとの關係において、資本主義經濟と資本主義社會の組立てとからくり――その全機構――を、勞働者の理解の前に『暴露』することができる(これが勞働者に、政治的階級意識を、外から――即ち傭主對勞働者といふ關係の領域外から――持ちこむこと、言葉をかへて云へば、あらゆる階級の關係を理解することによつて、勞働者がその階級意識を擴大し發達せしめることである)。けれどもこれらの日常經濟鬪爭の一つ一つを、現實に文字通りに國家權力を對象とする鬪爭に發展轉化させる!これは困難な、もしくは不可能な事柄だといふよりも、寧ろ異樣な考へだといつてよい。

けれども日常經濟鬪爭は、これを政治鬪爭にまで發展轉化せしめねばならぬ!吾々の公式は斯く規定する!

そこでこの努力は、何に歸着するだらうか。それは最善の場合合にも(最惡の場合には茶番に終る)、これらの日常經濟鬪爭の一つ一つに政治鬪爭の形を賦與することに歸着するのである。言ひ換へれば、これらの日常經濟鬪爭の一つ一つを、必ず政治運動に轉化しようとすれば、茶の供給を獲得するための政治運動、遲刻默認を獲得するための政治運動等々に歸着する。これは勞働條件の維持改善等々の目的――テーゼの謂ゆる組合主義的ないしは折衷主義的目的――を、たゞ政治的方法によつて達

しようとする運動であつて、これこそはテーゼが『政治的に鬪はれた時でも、勞働者の經濟的利害による政治鬪爭に限定せられてゐた』といふその限定から、一歩も踏み出さない鬪爭なのである。

(四)『だが、それは如何にしてなされるか』?

『組織問題に關するテーゼ』は、勞働組合は勞働者の日常經濟鬪爭をも敏活果敢に捕らへて、これを政治鬪爭にまで發展轉化する必要を反覆力說したあとで、『だがそれは如何にしてなされるか?』といふ自問を起こしてゐる。これは當然に起こるべき疑問であつて、このテーゼを讀むものが、熱心に聞かんとして待ちあぐんでゐた答へである。テーゼはかく自問して『それは執拗果敢なる曝露によつてである』と答へてゐる。しからばこの執拗果敢なる曝露は如何にしてなさるゝか?

『搾取、僞瞞、暴虐、壓制の具體的發現、現行犯……を捕へてこれを大衆の面前に曝き出すことによつてである。かくて我々はその曝露の機關を組織しなければならぬ。』

では曝露の機關とは何か?

『各工場分會は、工場新聞、壁新聞、リーフレット、分會々報等によつて、絕へず組合員のみならず全從業員に對してかゝる曝露を行はなければならぬ……。』

テーゼは『日常鬪爭の問題』といふ一項目の三分の二を費して、勞働組合の日常鬪爭についての全く新しい見解——かくて組合運動内の前衛的分子の意識にさへも上ぼつたことのない見解——即ち、テーゼの謂ゆる組合運動外の智識分子から注入せられた見解——を述べ、この見解を注入せられてゐなかつたがために、過去の組合運動はその日常の鬪爭を、『全無產階級的政治鬪爭との關係において認識することを得ず』、その鬪爭は『勞働組合的利益の上に立つてこの組織(組合、筆者)の維持擴大並に發展』をはかるといふ範圍から一歩も出でないものであつたこと、それは『無產階級運動の發展』ではなくて『組合主義的日常鬪爭のズルズルベツタリな延長、擴大、綜合』、『いつまでもズルズルベツタリに自然成長的運動を延長したもの』にすぎなかつたこと、またかような組合主義的日常鬪爭によつて今日までに獲得し得たものは、何ら『眞實の階級意識』ではなかつたこと——これを要するに今日までの——言葉をかへて云へば、日常經濟鬪爭についての最新の見解を智識分子から注入せられるまでの——わが國の組合運動は、たゞ『目先きの勞働

契約の取引を有利にするための闘爭』から先きは少しも意識せず、『即ち勞働者としての狹隘な生活から來る意識――ブルジョア的意識――から一歩も脱却しきつてゐなかつた』こと、また日常經濟闘爭についての最新見解を注入せられてゐなかつたがために、今日までの組合運動の多くの計畫と運動とが、『紙上の計畫』『紙上の運動』に終り、『空しく萎靡沈滯に陷つた』こと、等々々々についての、過去の『分析、批判、追跡、究明』を遂げてゐる。この批判究明の形式が高度に非俗學的である上に、問題の領域は、無産階級運動の廣濶な範圍を蔽ふてゐる。これはこのテーゼを學習しようとする吾々に、理解力の極度の緊張を要求する。吾々は理解力を最大限度に緊張させて居りながら、なほかつしばしば戸惑ひすることがある。

しかるにこの『分折究明』の結論に達すると、吾々は急に重荷を取り除かれ、張りつめた氣が一時に緩んだ感じがする。『だがそれは如何にしてなさるゝか？ それは執拗果敢な曝露によつてである』。この『組織運動に關するテーゼ』が『日常闘爭の問題』について求めてゐることは――組合主義折衷主義からの完全な離脱、ものゝ見事な跳躍のしるしとして、政治的階級意識への發展進出の證左として求めてゐることは――組合の各工場分會が、工場新聞、壁新聞、リーフレット、分會々報等を作ることだつたのである。

『曝露』とは何か？ テーゼによれば「搾取、欺瞞、暴虐、壓制の具體的發現、現行犯を捕へて、之を大衆の面前に曝き出す』ことにほかならぬ。

何の爲めに？ テーゼは恐らくこれを自明のことゝして、何らの答をも與へて居らぬが、私の理解するところでは、それは資本主義社會の機構――からくり――を勞働者の大衆に理解せしめることにほかならぬ。『曝露』といふ譯語の文字が與へる印象に捉はれて これを煽動的な意味にのみ解してゐる人が往々ある。それは勞働者が、日々その工場で遭遇する具體的な搾取の事實と、日常の生活において蒙る具體的な隷屬と壓迫の事實とが、何を意味してゐるかを見せしめることに始まつて、最も冷靜な、科學的な、資本主義社會の組み立てと働らきとに對する知識をまで含んでゐる。たとへばマルクスの『資本論』は、資本主義社會の經濟的機構についての最高の曝露であり、レーニンの『國家論』は、政治的機構についても最大の曝露である。勞働者が眞實の政治的階級意識に達するために必要な理解は、日常目前の雇傭關係のうちに現はれてくる資本主義の經濟上の機構とその作用に對する明白な理解から、あらゆる階級勢力の關係を包容した資本主義の政治的機構とその作用に對する明確

な理解にいたるまでを含んでゐる。現にテーゼは、『搾取、僞瞞、暴虐、壓制の具體的發現』の曝露を命じてゐるのである。『僞瞞』と『暴虐』と『壓制』とは、資本主義社會の經濟上の領域と政治上の領域とを通じて行はれる『搾取』は本來、資本主義の經濟關係の領域において、勞働者對傭主の關係の領域において行はれる。この領域は、テーゼの見解に從へば、『目先きの勞働契約の取引を有利にするための鬪爭』の意識から先きへは、一歩も踏み出すことを許さぬ領域であり、この狹隘な生活から來る意識は、まさに『ブルジョア的な意識』なのであつた。テーゼが何故に、ブルジョア的意識に到達し、もしくはせい〴〵組合主義的折衷主義的鬪爭の意識にしか到達せしめぬところの、勞働者對傭主關係の領域で行はれる『搾取』の事實を曝露すること——この組合主義的ないしは折衷主義的曝露！——を、却つて組合主義折衷主義からの離脫と日常鬪爭の政治化との唯一の具體的方法としての『曝露』——しかもその劈頭第一に數へたかは、固より私の知るところでないが、私自身としては、經濟上の曝露——即ち資本主義社會の經濟的機構とその作用についての明白な理解を與へること——に、重要な意義を認めるものである。

勞働者が、資本主義の全機構を明白に理解すること、たゞに傭主對勞働者關係の局限せられた領域ばかりでなく、すべての階級關係といふ廣い領域に限界を擴大すること、この廣い領域の一部として——即ち資本主義社會の全機構の一部として——日々當面する傭主對勞働者の經濟關係搾取關係を理解するにいたること、この廣汎な、資本主義の機構全體に對する理解をもつて、その一部分に對する理解にもとづく階級意識——從つて勢ひ狹隘な局限された階級意識（しかしながらそれはブルジョア意識ではない！）をさらに擴大し、展開し、發展すること、——これが私の理解する『外部から』『經濟鬪爭の外部から』、『勞働者對傭主關係の領域の外から』、勞働者が政治的階級意識を獲得するといふことなのである。私の理解するところでは、この『外から』といふことは、經濟上の搾取關係といふ狹隘な生活に押し込められて居り、この狹隘な被搾取生活の必然の結果たるブルジョア的な意識に到達してゐる勞働者（これがまさしくテーゼの取つた見解である）のところへ、一日天氣晴朗の日に、恐らくは傭主の搾取に虐げられた經驗などによつて何らブルジョア的意識を注入せられてゐないところの清淨無垢の知識分子が『外から』降臨し、政治的階級意識と革命理論の卷き物を授けて、勞働者をしてこれを暗誦させ、勞働者をして自分自身にも解らぬ公式と片言とを合唱せしめることではないのである。

かような意味に理解した『曝露』の必要と、政治的階級意識への發展の必要とは、多くの人々は、つとにこれをレーニンの著書から學んでゐる。またそれ以前にも、多くの人々はこれをマルキシズムの著書や實際運動の歴史のうちからも、體驗のうちからも、或る程度まで學んでゐた。現に今日以前においても、組合運動内の前衛的分子は、まさしくかくの如き目的をもつて、かくの如き活動を組合内に續づけてゐたものと、私は誤信をしてゐたのである。

この『誤信』は、いまテーゼによつて『曝露』された。いまテーゼの史觀に從へば、わが國に勞働運動が發芽してから、大正十幾年かに『理論鬪爭』が初めて開始せられる時期までは、『自然生長的運動のズルズルベツタリの延長』であり、『現實の運動はどこまで行つても同じもの』であつた。それはたゞ無益にして無意味な『組合主義的乃至折衷主義的鬪爭』の反復以外の何ものでもないものだつたのである。これはまさしく、わが國における勞働運動の暗黒時代であつた。歴史はたゞ同じ箇所を旋回してゐたのである。この時俄然として、この暗黒を破つて、天外の一角から光明が輝やきでた。いふまでもなく、『理論鬪爭』の輝やきである。これは慥かに、あらゆる意味で勞働組合運動の『外から』來た。そしてこれを合圖にわが國の勞働運動の歴史は、初めて發展しかけたのである。なほその上に、あわたゞしい發展である！ 何故か？ それは運動の内的條件にもとづく運動自體の發展ではなくて、『外部より注入せられた理論』が一切の答へである。精密に云へば、運動の發展ではなくて、新しい運動の接ぎ足しなのである。

第三回全國大會の新方針書は、『だがそれは如何にしてなされるか？』といふ問に答へる代りに、日常鬪爭を遂行する種々なる具體的な方針を定めてゐるが、これには後段で言及する。

以上は、テーゼが勞働組合の『日常鬪爭の問題』として、即ち日常鬪爭についての組織上の問題として取扱つた事柄であるが、次項においては『工場委員會の問題』が取扱はれてゐる。

『……工場委員會の任務を……極めて狹隘なる框内に閉ぢ込めてしまつた。即ち工場委員會を、（イ）一工場内に於ける組織及び未組織勞働者の協同戰線機關、（ロ）一工場内に數個の組合の存在する場合には、之等各組合の協同戰線機關、（ハ）工場分會（組合の）が之を通じてその政策を未組織大衆及右翼、中間派指導下の大衆に及ぼすための機關としてしまつたのである。工場分會の外殼としての工場委員會、一工場全員が組織されるまでの過渡的一手段としての工場委員會、この狹隘なる規定は、併し、又、折衷主義の必然的結果

である』。

過去の工場委員會運動に對する右の如き批判にもとづいて、テーゼは現段階における工場委員會運動を次の如く規定する。

『我々は今や組合主義的鬪爭より、全無產階級政治鬪爭へその運動を轉換しなければならぬ。工場委員會は、こゝに新たなる政治的性質を帶びる。』

『……工場委員會は工場內に於ける事業主の權力に對立する全勞働者の機關であり、工場內で行はるゝ事業主の、或はこの事業主を通じて行はるゝブルジョア政府の專制支配に抗爭し行くべき全從業員の組織である。』

『工場委員會の本質は、工場の全勞働者を政治的に代表する組織である。從つてそれは現在においては事業主の工場內に於ける獨斷的專橫的管理に對する從業員の自主、自治のための鬪爭、工場の監獄化、兵營化に對する鬪爭を組織し指導しなければならぬ。』

『工場委員はこの鬪爭の發展につれて、工場內の狹隘なる「政治」(!)にかゝはる鬪爭を全無產階級的政治鬪爭へ發展、轉化、合流せしめずには置かない。』

『こゝに亦、工場委員會が無產階級の末端政治組織の萠芽たり得べき重要なる意義を有するのである。』

これがテーゼの規定した、特に『現段階に於ける』工場委員會の意義である。

第三回大會は『工場委員會運動に關する方針』を次の如く定めてゐる。

組合運動の新なる段階(テーゼの『現段階における工場委員會……』の『現段階』と、この『新なる段階』とは別個のものを指してゐるものと解す、筆者)への進出と共に開始される日常經濟鬪爭を充分に遂行するために、所謂產業合理化による組織的科學的な搾取並に抑壓の諸條件に對する鬪爭の出發點たらしめ、最も廣汎なる大衆組織であるところの工場委員會……。』

『工場委員會は、雇主の專制的官僚的支配と搾取とに對して鬪爭するために、組織、未組織、及び政治的傾向の如何に拘らず、全從業員の共同戰線體として組織されねばならぬ。』

『……工場委員會は、階級鬪爭の端初的組織であり工場代表者會議の基本的單位であつて、組合運動の共同戰線に對して有力なる武器となる。』

『工場委員會內における吾々の活動は……わが組合の政策を支持し活動に參加せしめるやう努め、且全從業員の利害を忠實に代表して鬪ひ、以て從業員の信賴をかち、之を組合へ再

組織し、工場委員會を勞働組合の基礎たらしむるやう努力しなければならぬ。』

紙數の制限のために、ここには二つの見解を並べるだけに止どめておく。たゞ附け加へておきたいことは、テーゼにおいては、勞働者對傭主の經濟關係——そのちうからは『ブルジョア的意識』しか生れないところの關係、せいぐ『組合主義的ないしは折衷主義的鬪爭』から先へは一歩も發展のできないところの關係——の領域にも、『狹隘』ながらも『政治』があり、政治鬪爭が存在する（火星に人間が存在するかも知れないやうに！）といふ、新發見が加はつてゐることとである。

第二に著るしい事實は、テーゼにおいては、工場委員會は全從業員を政治的に代表するもので、ブルジョア政府の專制支配に抗爭するといふ任務から見ても、組合よりも遙かに政黨の性質に近いものである。即ち從來、組合運動の活動領域內で理解せられてゐた工場委員會は、テーゼによつて、この程度まで政黨化されたのである。しかるに新方針においては、それは政治的意見と政治的傾向との如何を問はず——從つて純然たる經濟的利害を基礎として——全從業員を組織しようとすることである。

第三の著るしい事實は、テーゼは工場委員會に、無產階級の末端的政治組織——即ち政治組織の最低單位——の萠芽を認め、新方針書は、これを階級鬪爭の端初的組織——最も原始的・發端的、從つて自然發生的の組織——と見做してゐる。

第四の注意に値ひする事實は、新方針書が工場委員會の意義、任務、その內部において組合員のなすべき活動として規定してゐるものゝ主要部分は、テーゼによつて『折衷主義の必然的結果』たる『狹隘な規定』として斥ぞけられてゐることとである。

この二つの見解のいづれが正しいか、或はより正しいかは、しばらく讀者の批判に任せておく。いふまでもなく、私がそのいづれが正しいかと問ふ時には、公式としていづれがより正しいか、と問ふてゐるのではなく、『現段階において』、實踐的な意味で、いづれがより正しいかと問ふてゐるのである。またこの二つの見解の相異は、單なる政策上の相異と見ることはできぬ。即ちその間には、たとへば二ケ月間における組合の『混合型の脫却』といふような急設架橋工事ではとうてい渡ることのできない溝渠がある。組合運動の實際は、現實に、いかにしてこの溝渠を渡つたらうか？　一と思ひに飛び踰へた！　或は飛び踰へたのかも知らぬ。しかしこれを飛び踰へたといふ人があるならば、恐らくその人は、目をつむつて飛び踰へたにちがひない。然り、理論に目をつむつてゞある。これは政策の問題では

なくて、恐らくは組合主義、折衷主義、經濟鬪爭と政治鬪爭、政治鬪爭への發展轉化、全無產階級政治鬪爭への進出、等々々々々についての理解の問題――これらの言葉が如何に理解されてゐたか、また理解せられてゐるかといふ問題――なのである。

次に工場代表者會議についても、テーゼは

『工場代表者會議も工場委員會と同じく、かの組合主義折衷主義の狹隘なる限界に押込められて、未組織勞働者を勞働組合へ獲得のための、又は爭議應援のための過渡的一時的組織として理解されたに過ぎなかつた、偶々夫れが永續的組織を採らなければならぬといふ見解を發見するのであるが、これとても……組合の外殼としての意義をしか認められてゐないのである……』

と云ひ

『……工場代表者會議の現段階における重要性――その本質は、それが全無產階級的政治鬪爭の見地から行はれる勞働大衆の凡ゆる鬪爭を激成し之を統一するところの、勞働者の大衆的動員の組織であることとである』

と規定してゐるが、第三回全國大會の新方針は、工場代表者會議に次の如き定義を與へてゐる。

『工場代表者會議は、日常經濟生活擁護とその向上のために政府及び資本家に對して鬪爭するために、地方的又は產業的に、組織未組織或は所屬組合の如何に拘らず、當面の具體的な經濟的利害の一致によつて、各工場の代表者……によつて永續的な共同戰線として組織されなければならぬ。

この點についても、この二つの見解を詳細に分析して比較する暇がないので、兩者を並べ掲げるに止めておく。たゞ第三回全國大會の見解によれば、工場代表者會議が工場委員會と異るところは、一つ一つの工場の『特殊利害に基づく鬪爭ではなくて、勞働大衆の一般的な鬪爭組織である』といふ點に存してゐる。從つてその鬪爭の對象は、資本家と共に政府をも含んでゐる。けれどもそれにも拘らず、その鬪爭は當面の具體的な經濟上の『利害』の一致にもとづき、日常經濟生活の擁護とその向上とを、少なくとも直接の目的とするものなのである。かように工場代表者會議の鬪爭は、政治的な鬪爭の形を取る場合のあることを豫想せしめるが、その政治的鬪爭は、テーゼの謂ゆる『それが政治的に鬪はれた時でも、勞働者の經濟的利害による政治鬪爭に限定せられた』と指摘した場合に精密に該當するものであつて、いまテーゼの見解に從へば、第三回全國大會の理解した工場代表者會議なるものは『勞働者として、狹隘な生活から來るブルジョア的な意識から一歩も脫却』しないところ

の、百%の『組合主義的乃至折衷主義的』運動だといふことになるのである。從つてまた――忠實にテーゼの見解に從へば――工場代表者會議をかくの如く理解した（流行的に云へば、かくの如く認識した）第三回全國大會とその新方針そのものが、組合主義的ないしは折衷主義的意識から一歩も脫却してゐないものだといふ、結論に到達するのである（私自身は別樣の考へをもつてゐることを、念のため斷はつておく）。

（五）日常經濟鬪爭はいかに評價せられたか

わが金屬工大會のテーゼが、『組合主義者折衷主義者が、その自然成長的運動の限界を持つたまゝに繰返し延長してゐたところの勞働者の日常經濟鬪爭をも、敏活に果敢に、捕へる』ことは、さきにも明らかにした通りである。

けれども、先づ第一に、勞働組合は日常經濟鬪爭をも捕へはするが、この經濟鬪爭を遂行するといふことが、勞働組合の日常鬪爭の規定をなすものではない。かくの如きは組合主義者ないしは折衷主義の見解である。即ち勞働組合は勞働者の日常經濟鬪爭をも捕へるが、勞働組合の主たる任務――その日常の鬪爭――は經濟鬪爭以外の何らかの鬪爭なのである。それはいふまでもなく、政治鬪爭でなければならぬ。

第二には、わが勞働組合は、その主たる任務のほかに日常經濟鬪爭をも捕へるが、『それは最早、自然成長的運動の限界を持つた鬪爭の修正としてゞはなく、眞實の無產階級的政治鬪爭へ勞働者大衆を動員し來たるために意識的に、計畫的に設けられ展開されるところの鬪爭であり戰線である』のである。（註四）

（註四）　この一節の眞實の意味は、私の理解力の限界では充分に分らぬが、大衆を政治鬪爭に動員するといふ意識をもつて指導せられるところの日常經濟鬪爭といふ意味かとも思はれる。けれどもこれは後段に言及するやうに、明らかにテーゼの根本見解になつてゐる。のみならず、全階級的の目的と鬪爭との關係において日常經濟鬪爭を理解し、この意識の下に日常經濟鬪爭を指導し發展せしめねばならぬといふことは、少しも珍らしいことではなく、謂ゆる折衷主義者が久しく主張してきた見解であり、彼らを折衷主義者と呼ばしむるにいたつたところの見解であつて、この俗學的見解をわがテーゼに擬することは、甚しい冒瀆でなければならぬ。要するに、これは日常經濟鬪爭であつて、しかも日常經濟鬪爭でないところの、日常經濟鬪爭の一新種と解し、それがどのやうなものであるかは、暫らく後日の『分析究明』の宿題として殘しておく。

第三には、日常經濟鬪爭には、大衆を全階級的政治鬪爭に動員するために、初步的手段ないしは初步的過程ともなる値打ちがないといふことである。しかるに我が組合運動の間には、な

ほこの經驗主義の殘滓が現に殘つてゐる。即ち

『……最近の理論鬪爭の展開は、吾が左翼をして、著しく共組合主義折衷主義を清算さしめつゝある、だがそこには尙完全に經驗主義を離脱し得ずして、即ち「日常經濟鬪爭を活潑に大規模に計畫的組織的に指導することが、勞働大衆を全線的鬪爭に動員する基本的方策である」(註五)となすの一(一字欠字)を見る』

のである。

(註五) これは『勞働者』第二卷第二號所載、內田廣氏『我國勞働組合運動の發展とその方向轉換方策に就て』と題する論文中の、『勞働組合を全階級的政治鬪爭へ轉換せしめる具體的方策』として指示せられた項目の第三點の主文である。この論文は、當時一般に、左翼組合主義の見解を、半公式的に代表したものであるとまで見做されてゐたものであるから、尙ほ後段に言及する機會があることゝ思ふ。

以上の引用と註釋とによつて、勞働者の日常經濟鬪爭の重要さが、テーゼによつて如何に評價せられてゐるかは、おぼろげながらも說明されたと思ふ。テーゼは勞働者の日常經濟鬪爭を閑却せず、少なくとも『公式的』には、勞働組合はこれを敏活果敢に捕へる必要を『一應は』認めてゐるが、なほ且つそれは勞働組合の日常鬪爭の規定をなすものではなく、從つて勞働組合の主たる任務ともなり得ぬものである。この點においてテーゼの見解は、第三回全國大會の『運動方針大綱』の見解との間に、尖銳な對照をなしてゐる。

先づ第一に、新方針が、勞働者の日常經濟鬪爭を、經驗上からも理論上からも、組合の主たる任務とし、組合行動の主たる領域と認めたことは、さきにも說明した通りであつて、これは新方針の基調をなしてゐる見解――組合の政黨的性質の脫却――と一致し、これと相俟つて初めて完たき意味をなすものであることは云ふまでもない。

第二には、新方針が組合の主要任務と認めてゐる日常經濟鬪爭なるものは、日常經濟鬪爭にしてなほ且つ日常經濟鬪爭でない種類の日常經濟鬪爭ではなくて、『勞働階級の日常經濟上における利害を擁護し、これを向上せしめるための日常經濟鬪爭であり、『資本の搾取に對抗し、勞働條件の維持改善と生活の安定とを圖るためにする一切の日常經濟鬪爭』なのである。

第三には、この日常經濟鬪爭を活潑果敢に遂行することは、この『鬪爭の經驗によつて』『大衆をして『資本主義に對する共同の鬪爭に參加し結合せしめる』ものなのである。

第四には、新方針の見解に從へば、『勞働者大衆の現實生活に基く熾烈な要求を統一し、個々の資本家に對する鬪爭から、同業組合、カルテル、トラスト等、及び政府に對する鬪爭にま

で、即ち經濟鬪爭を産業的、地方的に擴大し一般化することは』、かのテーゼが云ふ自然生長的な運動を、自然生長的な運動の限界内で、たゞ單なるズルズルベツタリの『反覆』『延長』を繰返へすことを意味するものではなくて、これこそ『經濟鬪爭を有力な政治的要因たらしめる』ものなのである。新方針の見解に從へば、『經濟鬪爭をヨリ廣汎な範圍に於て鬪爭することは、政治鬪爭へヨリよく發展轉化せしめる條件をつくり、その有力な鬪爭手段たらしめるもの』である。これに反して、『政治鬪爭への轉化（經濟鬪爭の一つ一つを、現實に政治鬪爭に變へるといふ意味に解す、筆者）を急ぐのあまり、かゝる經濟鬪爭（經濟鬪爭としての經濟鬪爭、筆者）の意義を正當に把握せぬのは明かに誤りである』。

第五には、日常經濟鬪爭を活潑、大規模、計畫的組織的に遂行することが、大衆を全線的鬪爭に動員する基本的方策であるとする見解を、經驗主義の遺物と見るテーゼの立場に反し、新方針はかような立場をこそ、却つて『混合型的性質』の遺物と認めてゐるかのようである。

『……勞働組合の日常經濟鬪爭を政治的な鬪爭に結合發展せしめなければならないといふ新なる要求、及び我勞働組合運動を、全政治鬪爭の一翼たらしめなければならないといふ新なる要求を、かの組合主義幹部及び折衷主義的指導者の好んで中傷するが如き誤解、即ち我左翼勞働組合は、勞働組合本來の任務を忘れて、經濟鬪爭に代ふるに政治鬪爭を行はんとしてゐるとか、左翼勞働組合は理論鬪爭に陶醉せんとしてゐるといふが如き誤解に口實を與ふるが如きものたらしめてはならぬ。かゝる口實を與ふるが如き理解及び行動こそ、混合型的性質の遺物なのである。我勞働組合運動が全政治鬪爭の一翼たるの要求を充たし得んがためには、日常經濟鬪爭を第一中心の契機として、勞働者大衆が我等の陣營に組織されなければならないのである……』

かように新方針に從へば、勞働大衆を組合運動に組織することが、即ち組合運動が全階級的政治鬪爭の一翼たる作用をなすための條件であり、日常經濟鬪爭は、勞働大衆を組合運動に組織するための條件なのである。言葉をかへて云へば、日常經濟鬪爭を遂行することが、大衆を全階級的政治鬪爭にまで動員する第一歩であつて、この初步的な事業こそ、勞働組合の任務の基調であることになる（かようにテーゼが經驗主義の遺物と認めた種類の鬪爭を遂行することが、眞實の意味で、經驗主義から離脱する唯一の方法となるのである）。

（六）勞働組合と政黨

最後に、勞働組合の任務と政黨の任務、したがつてまた組合と政黨との行動の領域とその關係は、兩者によつてどのように理解せられてゐるだらうか。これはテーゼも新方針書も、直接この問題を主題としてゐるものではないから、充分にかつ積極的に說明さられて居らぬことは云ふまでもない。ことにテーゼの場合には、この問題は消極的にも答へられてゐないから、これに對するテーゼの見解は、ほとんど端睨すべからざるものである。テーゼはこの問題に答へてゐないといふばかりでなく、吾々はこのテーゼを讀むことによつて、では組合と政黨との關係はどうなるかといふ問題を、大なる疑問として提起せざるを得なくなる。私が本論の一節としてこの問題を取り上げたのも、同じ動機によつてゞあつた。

『我が日本の勞働階級が純經濟鬪爭より全無產階級的政治鬪爭へ現實に方向轉換し得るための根本的條件——（即ち）無產階級的理論の獲得——は、今やこれまでの組合主義との鬪爭、折衷主義の淸算によつて一應準備せられた。我々は早くも政治的曝露につき進むことによつて、現實にこの方向轉換を成し遂げつゝある』

『我が勞働組合は、現實には、純經濟鬪爭よりは遙かに運動を擴大し展開し來つた（それにも拘らず、組合運動は自然生長的運動の延長であつたから、全無產階級政治鬪爭に轉化するといふ問題を解決し得なかつた、そこで——筆者）ひたすら外部からの理論注入、及び無產階級的政治意識に徹底せる前衞の派遣（即ちレーニンが必要とした前衞黨の部隊の派遣、筆者）がなければならぬ』。

『……今や既に、一應この條件が戰ひとられたのだ。……かくて我が勞働組合は、今や眞實に、現實に（傍點は原文のまま、筆者）總てこの問題を解決し、運動（いふまでもなく勞働組合の運動、筆者）を全無產階級的政治鬪爭へと轉換せし得る……』。

『……日常鬪爭は、その中から……前衞隊を（前衞黨に、筆者）供給し、この前衞隊を……あらゆる人民の層集團の中に派遣し（誰れが？いふまでもなく前衞部隊を派遣するのは、前衞黨である、筆者）そして絕對專制支配に對する各被壓迫の政治的不平を誘發し、鬪爭を喚起し指導し統一し得る樣に（日常經濟鬪爭を、筆者）戰はねばならない……』。

かくて勞働組合の『組織問題』の一部分として見た『日常鬪爭』の『當面の任務』は、『曝露の機關を組織する』ことであ

る。

勞働組合運動そのものを『現實に』、即ち文字通りに、全無產階級政治闘爭へと轉換すること、そのために、あらゆる社會階級と社會層との中に（勞働組合の中にもまた）前衛の戰鬪部隊を派遣すること、そして曝露の機關を組織すること——これらのことが階級的政治闘爭を發展せしめるために、いかに緊急であるかはいふまでもないこととして——これが勞働組合の日常闘爭の規定であり、その活動の領域であり、そして當面の任務であるとしたならば、勞働組合なる組織以外に、どこに無產階級の前衛黨の必要があり、その活動の領域が殘されてゐるだらうか。テーゼは勞働組合と政黨との任務と活動領域との區別と關係とについて、間接的にも消極的にも暗示的にも、全然觸れようとしなかつたのは、むしろ當然といふべきである。（テーゼの見解では、ブルジョア專制政治に對する鬪爭を主要任務とする工場委員會と工場代表者會議の運動の如きも、勞働組合——若くは勞働組合と名づける前衛黨の一種——の行動領域なのである。）

これに反して、第三回全國大會の見解は、第一には勞働組合結合の基礎を、被搾取者としての勞働者の經濟上の利害に求め、勞働組合の中心任務とその行動の領域とを、勞働者の經濟上の利害のためにする經濟闘爭であると規定することによつても、黨の任務と行動領域と、組合と黨との活動領域の限界をを、消極的に示してゐる。（これらの點は、上段の引用によつてすでに明かであるから、こゝには再錄せぬ。）

第二には、組合の行動と政黨の行動とは、政黨の鬪爭を全無產階級政治鬪爭——即ち無產全階級的、綜合的の鬪爭と見做し、組合の經濟鬪爭をその一翼たる作用をするものと見做して（即ち組合の鬪爭に『現實に』政治鬪爭たる性質を帶びしめるのではなくて）これを調整すること。

第三には、この調整——即ち組合の行動と政黨の行動との接觸交叉の問題は、政黨の活動に對する組合の『支持』、『連絡』『協力』等の方法によつて解決すること。

第四には、勞働組合と政黨との活動領域には、兩者の交叉した部分があるといふこと、即ち、組合の行動と政黨の行動とは、截然として相犯すことのできない區別と境界とをもつて、たゞ或る地點で接續してゐるものではなくて、少なくとも或る部分では、双方の行動が互いに交叉して行はれることが認められてゐる。これは新方針の次の如き言葉に現はれてゐる。

『……我勞働組合運動の第一段の中心的な任務たる日常經濟闘爭の如きも……また常に當面の政治闘爭の主體たる政黨

と協力し、その助力によつて、政治的壓迫に充分に對抗するところがなければならない。』

第五、この事實は、そしてなかんづく右の拔萃文は、テーゼが組合主義的ないしは折衷主義的政治鬪爭として絕對に排斥してゐるものが、新方針においては、組合行動の一部分として認められてゐることをも意味してゐる。即ち右の場合は、組合の鬪爭が政治的な形態を取るにも拘らず、それは勞働組合の第一段の中心的任務——即ち勞働者對僱主關係の領域における勞働者の經濟的利害——のための鬪爭であり、かのテーゼが『ブルジョア的な意識にもとづく鬪爭』と認めたところの、『勞働者の經濟的利害による政治鬪爭』なのである。

この新方針の見解は、次の一節にも現はれてゐる。

『……左翼は經濟鬪爭を放棄して政治鬪爭一點張で進まふとしてゐる、といふ虛構と中傷の原因の一つは、彼等が今日の政治的、經濟的狀勢に盲目であり、經濟鬪爭も、政鬪的鬪爭と結びつけ、政治鬪爭にまで發展轉化せしめる（即ち勞働者の經濟的害を目的とする政治鬪爭にする）ことなくしては、日常經濟上における利益をすら、充分には獲得し得ぬといふことを、忘却或は故意に考へようとせぬからである。（註七）

新方針はまた、組合運動の行動領域と認めてゐる工場代表者會議の鬪爭についても、同じ見解を取つてゐる。新方針が理解した工場代表者會議は、勞働者の『當面の具體的な經濟的利害の一致によつて』結合した共同戰線體であつて、勞働者の『日常經濟生活の擁護とその向上のために、政府及び資本家に對して鬪爭する』ことを主たる任務とするものである。共通した經濟的利害を基礎とし、日常經濟的生活の擁護と向上とを目的とする政府との鬪爭——政治的な鬪爭——は、テーゼが（いな極左理論家の殆んどすべてが）折衷主義の最も重要な根本的な特質として——或は特質として押し賣りして——ゐるところのものに外ならぬ。

（註七）私は、新方針のこの見解に反對するものではない。しかしながら現に極左理論家と極政治主義者とは、謂ゆる『折衷主義者』の理解する政治鬪爭は、この種の政治鬪爭に歸着するといふことをもつて、折衷主義の特徵として非難してゐるのである。しかるに新方針書にとつては、この謂ゆる折衷主義的政治鬪爭をも組合の任務と行動とのうちに認めることが、その謂ゆる『誤解』と『曲解』と『虛構』と『中傷』とに答へる唯一の方法だつたのである。重ねていふが、私は新方針の見解に反對しようとしてゐるものではない。たゞ一方においては、極政治主義者が『折衷主義』の特質と認めてゐるところのものを自ら受容れつゝ、尙ほかつ他方においては、これらの極政治主義者と共に、たゞ漫然と、これこそ文字通りに『外部から注入された』『折衷主義』等々の呪文の暗誦と合奏との追隨を續づけてゐることは、決して

自分自身で理解する能力——獨立した思惟能力——を備へた者の光榮とすることではないのである。新しい方向轉換の徹底は、過去の誤謬を正當化することからではなくて、何が眞實にマルキシズムであつて、何が眞實に折衷主義等々であるかといふ、正しい理解——一知半解のマルクス主義的文句の口眞似ではなくて——から發足しなければならぬ。

(七) 謂ゆる『新』方向轉換の方向と性質

以上の比較と對照により、(『現段階』との關係において、そのいづれがより正しいかといふ問題には暫らく觸れないで)、新方針が對立するところの舊傾向が大凡そいかなるものであつたか、また謂ゆる『新』方向轉換の性質と方向とが、ほゞどのようなものであるかといふことが、讀者によつて理解せられたことゝ思ふ。(註八) そこで私は紙數の制限のために、この比較の結果を私自身で要約する仕事を省ぶき、この新方針の支持者自身が、この『新』方向轉換の性質と方向とを、どのように理解してゐるかといふことを一瞥するに止めたい。

第三回全國大會の採用した『運動方針の大綱』には、『無産階級の方向轉換と勞働組合運動の新たなる地位、任務』について次の如く述べられてゐる。

『吾が組合運動が、從來、所謂政治的自由の未だ確立せられざる政治的形態の下に於て、且つ政黨的活動の全く存在しなかつた事情の下に於て、必然に帶ばしめられつゝあつたところの混合型的特質——勞働組合が自ら主體的に政治行動を擔當しなければならなかつたがために生じたところの勞働組合の組合的性質と政黨的性質との混合型的特質——は、今や吾國の現段階に於ける政治的支配形態によつて規定せられるところの政治鬪爭、即ちブルジョア民主主義獲得のための一切の被壓迫階級層の階級的協同戰線による政治鬪爭の主體たるべき政黨たる我勞働農民黨が確立され、且その任務の遂行に就き始めたることによつて、急速に消滅せらるべき必然性に迫られ、またその根據條件をも供與せらるゝに至つた。我等は今や意識的に右の消滅の過程を促進しなければならぬ。何故ならこの過程を完了することによつて、始めて吾等は全運動に於て占むべき勞働組合運動の新なる地位を確立し、その新なる任務の現實的遂行に就くことが出來るからである。』

この點についての、いま一つの公式な、典據的な見解は、第三回全國大會直前の評議會機關紙に揭げられた『吾が第三回全國大會の意義』と題する文章に見ることができる。これは前揭の拔萃文を、或る點は註釋したところがあり、また或る點は補足したところがあつて、かつ極めて暗示的なところがあるか

ら、参考のために掲げてみる。

『……以上……に述べたる狀勢は、我が評議會が、全く新なる見地から急速に在來の混合型を脫却して、より一層活潑に勇敢に、眞實の組合運動に進むべき必要を、ひしひしと痛感せしめる。』

わが評議會をして、『眞實の』組合運動に進むべき必要を痛感せしめた――ことにひし〳〵と痛感せしめた――『狀勢』とは、何だらう？

『……無產階級の利益を代表すべき政黨のなかりし我が國の狀勢は、我が評議會をして所謂「混合型」をとらしむるの處置（？）を有する。斯くて我々の過去の鬪爭は、無產階級の全運動の指導者としての鬪爭であつた……。

『勞働農民黨は今や全無產階級の要望を擔ふて積極的活動を開始した……我々の政黨は一應確立されてきた。此の時に於て我が評議會が、舊來のまゝの「混合型」として恰も全運動の指導者たり、又日常鬪爭の主體でゝもあるかの如き運動方針をとるならば、政黨をして萎縮せしめるのみならず、組合運動自體を萎縮せしむるものでなければならぬ……。』

これが『狀勢』の一つである。

『この一兩年來猛烈に行はれきたりし所謂左右兩翼の對立鬪爭は、各モメントを結成せしめた……彼等（社會民衆黨等等）は組合運動においてもそれ〳〵の地盤を有する。勞働組合は本來大衆の日常經濟利益を楔として組織するものであるから、大衆は彼等の欺瞞に乘り易い。彼等も勿論無產階級の利益を標榜するものであり、ことに大衆の日常利益に對し最も關心を裝ふものであるからだ』。

『大衆を右翼幹部に引渡す危險性は**刻々として迫る**』。

これがいま一つの『時勢』であつた。この第二の狀勢が、新方針の採用を必要ならしめた理由のうちに、どれだけの割合を占めてゐたか、またこれは何を意味してゐるかについては、しばらくこゝには言及せぬ。いま『運動方針大綱』によれば、この『新』方向轉換を『必然』ならしめたものは、かの組合の『混合型』とその脫却なるものである。この『混合型』とその『脫却』こそ、『新』方向轉換の回轉する樞軸であり、『新』方向轉換の眞實の意義を開く鍵なのである。

そこでこの『混合型』とその『脫却』とは、そも〳〵何だらう？

（註八）私が金屬工大會のテーゼと全國大會の運動方針大綱とを比較したのは、その間にどのような相異があるかを知ることにより、新たな轉換の方向と性質とを知るためであつて、その共通點を明らかに

するためではない。したがつてかやうな比較對照は、勢ひ兩者の間の差異だけを前景に押し出すことにより、全體として見た相異を、實際よりも誇張する結果になることを免がれぬ。私の信ずるところでは、兩者の間には、とうてい相容れがたい見解——枝葉の意見の相異といふ意味ではなくて、根本的な理論と理解に相異があるものと假定しなければ解釋できないやうな見解の相異——があると同時に、多くの共通點——枝葉の點についての意見の一致といふ意味ではなくて、根本的な理論と理解の一致と見做されるもの——があるのである。本論の目的は、第三回全國大會の新方針そのものを批評することでないから、すべてこの問題には觸れなかつた。

（追記）さきごろ私は、『私は斯う考へる』といふ一文を發表した。これは最近わが國の無產階級運動の間に行はれた謂ゆる『理論鬪爭』なるものに關聯したいろ〳〵の問題について、數名の人々から質問を提起され、私の答を求められたのに對して、私の見解を述べたものであつた（これはその後、小册子として無產社から發行せられてゐる）。

しかしこの文章は、提起せられた二十有餘の問題中の僅かに一半に答へたばかりであつて、なほ重要な多くの問題が殘つて居り、これらの問題については、他の機會に答へることを約束した。本論はその續稿の一部であつて、次の如き質問に答へたものである。

『評議會大會に現はれた態度に關する論點——評議會最近の大會は、明らかに近き過去の態度を變更した……少くとも最近の關東地方評議會金屬勞働組合大會の採れる態度とは著しい差違を示したと想見せられる。いはゆる極左翼派は、之を以て……混合型脫却に歸してゐるが、そんな遁辭で片づけられる問題であらうか。抑々混合型とは何か、そういふ型態が存するであらうか。此點に關する意見如何』——荒畑寒村氏提出。

『混合型と謂ゆる折衷主義との關係、評議會の方向轉換と經濟主義との關係についての見解如何』——無名氏提出。

本論は遺憾ながら、この質問に對する答の前半、ないしは豫備的考察であつて、問題の中心たる謂ゆる『混合型』の問題に入ると同時に擱筆せざるを得なかつた。本論の續稿は、與へられた最も近い機會に、何らかの形式で發表したいと思ふ。（九月七日）。

試驗地獄救濟の根本問題

杉森孝次郎

いはゆる試驗地獄の救濟には、直接の外觀からいうて、消積兩極の特徴に於ていちじるしい綜合的方法が必要だ。

その消極的方法とはなにか。第一に、それは、教育の世界に於ける私財の權力を否定することだ。即ち、家庭の貧富を決定力として中學、隨つて大學に或ものは志さず、或ものは志すといふ社會的一大現實の根本原因、禍因を救除することがこれだ。

教育は、それを受ける當人の眞の利益から考へても、かれを一員とする社會のそれから考へても、一つの絕對的必要物だ。被教育者たる個人の單なる私財の有無によつて、かれが教育を受ける、受けないが決定されてよい理由は斷じてない。

中學、即ち論理的に大學の特權を純化、改廢することが試驗地獄救濟の一方法だが、教育に對する私財の特權を無くすることが一層根本的な方法だ。この根本策に關心と理解と鋭意とを持たない單なる特權改廢説は甚だ不徹底だ。

私財が關する限り、なに人も、いかなる學校へも自由に入學しうる制度が必要だ。志學者自身の本質的被教育必要、即ち能力が關する限り、それなきものは、かれがいかなる富者であらうとも、決してその關係の學校へ入學する社會的自由をかれが許與されないことが必要だ。現實は、しかるに、この一双の必要は滿たされないであるのみならず、あまりにも不十分に意識されてゐることを酷烈に示す。最近に簇發した試驗地獄問題關係の世論も、この點に於て最も不完全だ。

決して私財を問はず、專ら能力、即ち眞の被教育的資格または必要を問ふ制度を興すならば、中學校入學志望者の數は、有産階級方面に於ては現在よりも遙かに減じ、無産階級方面に

於ては現在よりも遙かに殖えるだらう。しかし、その遙かに減ずる部分だけが關する限り、そこに消極的、勿論善なる消極的方法がある。

積極的方法は、勿論、學校增設にある。その增設の第一方面が廣義實用學校に存することは疑ふ餘地がない。

廣義實用の世界に於ける本質的、絶對的不適者は時代に極めてすくない。なに人もなにかの用に立つ。社會の外延が擴大し、それの內包が複雜に分化したからだ。廣義の勞働、技術、事務、作業の世界を見よ。いかなる少年、青年をも、いはゞ有望な素材として歡迎しうるだけの包容力をそれは持つ。その素材に或加工、即ち教育をさへ與へるならば、それは一つの立派な社會的有用物たりうるのだ。

他面に於て、しかしながら、今日の大學が與へるやうな教育を眞に有意義に受ける能力的資格ある個人の數は甚だ有限だ。いはゆる高級學藝の專修に堪ふる適能者は社會內の僅々的少數者だ。

これは、しかし、勿論、その高級學藝向きに出來てゐる個々人が、その他の社會用向に出來てゐる人々よりもえらいといふ意味では決してない。えらい、えらくないの問題ではそれはない。社會から見れば機能別にそれは過ぎない。そのいづれもが社會にとつて必要なものであるのだ。いひかへるならば、そのいづれもが、その他のいづれもにとつて必要なものであるのだ。いはゆる高級學藝に對する崇拜の現代心理は、なほ多分に「古典」的遺物としての迷信を實質とする。現代の大學殊にいはゆる法文科方面の教育內容の或大部分との比較に於て、一運轉手、一技手、一農夫、一事務員が所有し、發揮する學藝の方がいかに無限的に純眞であり、本質であり、實在であり、價値であることか。實に、前者は無用であるがゆゑに、即ち存在する無用であるがゆゑに無害でなく有害であり、後者は社會から見て積極的に有用、必要だ。

大學の目的は、是認されべきかたちに於ては、社會が眞に必要とする或ものを社會に與へることと、學生の自已教養とに分類または識別される。前者は職業教育、專門教育を意味し、後者は閑の積極的使用を意味する。

その閑が關する限り、それは社會の各人の平等所有權であることが正當だ。自已教養の藝術的快樂が、また人格的利益が、單に私財の比較的所有者のみに許與されてよい理由は決してない。單なる自已教養慾の滿足を目的として大學、即ち順序的に中學校に入學する權利即ち社會的自由に關しては、いかなる無產子弟にも、いな廣くいかなる無產者にも、その社會の經營的即

ち政治的責任からしては、差別待遇をいさゝかなりとも設くべきでない。

勿論、閑は產を原因とするものであるほかないがゆゑに、問題の解決は經濟組織の或根本的改正をさし措いては不可能だ。

大學が意味する職業教育、專門教育が關する限り、卒業後、眞に能く一定の職業、專門のかたちに於て、社會が要するものを生產しうる能力上の見込みあるもののみが入學を許容または希望され、然らざるものは拒否されることが正しい。實に、さうしないならば、本質的に損するものはその個人及び社會の兩者だ。

廣義實用の世界に於ける可能的、本質的有資格者が、それを犧牲にして本質的無資格の世界に大學、隨つて高等學校、中學校時代もが意味する貴い長歲月を浪費することをばその社會の政治が許容すべきでない。

社會的眞價、實用ある教育を、即ち卒業生を生產する學校ならば、それがいはゆる實業學校、乃至補習學校程度のものであらうと、それがいはゆる大學、專門學校程度のものであらうと、その社會はそれの增設を至難と認むべき根據を持たない。眞價、實用といふ概念内にそれだけの理由が具足してゐる。例へば軍備、また多少の戰爭的行動や企業をも含めての外交等に現代の一國家が費やす錢を想へば、社會的眞價、實用ある教育を生產する學校を增設するための財政が絕望される理由は成り立たない。

教育の偶像化、殊に大學の學の偶像化が試驗地獄の原因だと見て事實に妥當するが、教育の社會化が、機械時代相當の位置をいまだ十分に形成しないことがその偶像化の時代的一特質であるのだ。教育、學藝、隨つて學校は生活を教育、學藝、隨つて學校に特有のしかたに於て反映するものであらねばならん。その特有のしかたとは、勿論、原料を生活から取り、結果を生活に與へることにほかならない。教育の根本約束であるべきこの關係がいまだ十分に學說化せず、社會的常識化してゐないがゆゑに、その虛に乘じて、惡意義の特權が學校關係の世界に構巢しうるのだ。大學に於ける教育の或大部分が生活から遊惰、蕩慢、及び最も主として無明のかたちに於て離れてゐるがゆゑに、中學、高等學校は必然的にそれを反映する。

現代の學校體系は、殊にそれの正系と一般から見なされてゐる小、中、高等、大學の一統が生活、社會の現實と最も確實に、有効に關係させられる必要がある。文部省論にも、世論にもその材料が多少の徵候的存在を示すことは極めて說明がつく。實に、その一方途を追ふことだけによつてすら、試驗地獄問題

の如きは解決の光明を迎へる。

現狀に於ては、中學入學者、大學卒業生は、かなり大きな割合に於て、消費主義者を意味する。消費主義者を收容する設備が無限に大きくないことは社會が全然狂つてゐない證據でもあるが、社會的自然力の制限だ。いはゆる特權、特典は、それが正當に惡視されうる場合が關する限り、消費主義以外のものではない。

試驗地獄救濟の根本策は、かくして、社會が持つ限りの學校を生産主義物化するにある。生産主義の學校なら、これを造ることは、正しい意味に於て、あるひは善い意味に於てその社會の營利業に屬する。校舍用の土地、建築材料、教師は決して絕對的不足、拂底を目下告げてはゐない。それらは國内に豐富にさへある。それらの實質的生産方法が豐富に存在する以上、單なる金融は、國家と國民の決意一つで、絕望的難問題などでは決してない。さうであるならば、なぜ文部省は、あるひは政府は、聰明なる國民の意思を體認して、敢然として教育的企業に着目、着手するといふ積極的方針を示さないか。「內申」、「考査」等が問題の重心であることは根本的企業からはどの途遠い。特權改廢または廢止の掛け聲にしても、それが重心そのものであるならば、意味が乏しい。

現案は、根本的改正と積極的企業に導く限りに於て、それは功績によつて評價されべきものだ。單なる試驗と內申との比較は、どちらにしても試驗地獄救濟の根本策には觸れない。

戰跡を顧みて

安部磯雄

此度の府縣會議員選擧はかなり熱心に行はれた。單に當事者が一生懸命に運動に携はつたばかりでなく、國民一般も之れに對して相當の注意を拂つたやうである。それは如何なる理由に基くかといふに、次のやうな事情が考へられる。第一に普選が大規模に行はれたのは今回が最初で、昨年は市會議員、町會議員の選擧が普選の下に行はれたが、それは極めて一小部分に止つてゐる。然るに此度の府縣會議員の選擧は僅か一小部分を除く外は全國的に行はれた。此點が大に人々の注意を惹いた所以であると思ふ。次に地方政治に對する熱心が段々に增加して來たことである。從來の狀況を觀ると、府縣會は丁度中央政治と地方自治政治の中間に介在して居てさほど人々の興味を惹かなかつたが、併し結局政黨の競爭が激しくなると地方政治にも注意を拂はねばならなくなつた。府縣會に多數を占めることは國會議員の選擧に影響するので、各政黨が此方面に注意を怠らぬやうになつた。之れ第二の理由である。第三に來年は總選擧が行はれるので、其前衞戰として此度の選擧は非常な意義を持つやうになつたことである。これは政友會や民政黨のみでなく、無產政黨にとつても重要な選擧であつた。無產政黨は必しも此選擧に依つて大なる結果を得る事は豫期してゐなかつたが、つまり來るべき總選擧の瀨踏みとして此度の選擧に臨んだわけであつたが、之れが爲めに其態度は既成政黨よりも一層熱心であつた。第四の理由は、從來各無產黨の間に多少競爭が行はれてゐたので、孰れの無產政黨が最も勢力を得るかといふことが知らず識らずの間に無產政黨及び外部の者の興味を惹くやうになつたことである。孰れの勢力が大であるかといふことは、單に議論をしただけでは適確に知ることが出來ない。たゞ選擧の事實・

に依つて知るより外はない。で各無産政黨は其目標に向つて熱烈なる運動を試みた。

然るに選擧の結果に於いて明かに其勢力が分るやうになつた。それは當選者の數を見ても容易に分ることであるが、殊に適確にそれを知るには各無産政黨が選擧によつて得た投票數で、朝日新聞の調査した所に依ると、即ちそれは二府二十九縣に行はれた選擧の結果を示したものであるが、（未だ八縣ばかり殘つてゐるから今後多少數字の變化はあらうが、大體に於いて各無産政黨の勢力を知り得ると思ふ。）今其投票數を擧げると

勞働農民黨	一〇三、二三六
日本勞農黨	三七、五八八
日本農民黨	三三、一九六
社會民衆黨	二八、一三六
合計	二〇二、一五六

右の表に依つて見れば、各無産政黨の勢力を知ることが出來ると同時に、無産政黨全體の得票數が未だ極めて微々たるものであるといふことが分る。

一體選擧前に於いて無産政黨は如何なる豫想をしてゐたか。無産政黨の立候補者は約百四十六名であると云はれてゐる。而して當選した者は二十六名である。其中勞農黨が十三名を占めてゐるのであるから、勞農黨はたしかに無産政黨の實力の半ばを有してゐるといふことが出來る。選擧前の豫想は頗る樂觀的であつて、各無産政黨共立候補者の半分位は當選せしめることが出來ると思つてゐたのである。其豫想に比較すると實際の當選者數は案外に少かつた。併し得票數から考へると無産政黨は少くとも五十人位の當選者を得る筈である。何故ならば政友會の得票數は二百萬を少し超えてゐるのであつて、無産政黨全體の得票數は其一割に相當すると云つてゐるのであるが、然るに政友會は約五百六十名の當選者を得てゐるのであるから、無産政黨が其一割である五十六人を選出し得るものと豫想したのは必しも無理ではなかつたからである。ところが實際に於いては此豫想は全然裏切られた。乍併我々は決して此結果に就いて悲觀することを要しない。何故ならば無産政黨にとつては此度の選擧は最初の經驗であり、且つ現在の選擧は決してフェアプレイと稱することは出來ないからである。選擧も一つの競爭であるからスポートと同じやうに十分フェアプレイの精神を重んじなければならぬが、現在の選擧法は其精神に於て フェアプレイが行はれてゐないのみならず形式に於ても此精神に反した點が少くない。私は今無産政黨の投票獲得の結果が餘り芳しくなかつたといふ事實に就いて次の二つの理由を擧げたい。

第一、我國の選擧法は、無產政黨にとつて非常なハンディキャップがつけられてゐるといふことである。其第一は保證金制度である。僅かに二百圓の供託金ではあるが、無產政黨にとつてはかなり多くの負擔であつた。何分にも無產政黨は經驗がないのであるから、候補者を立てる際にも果して成功するか否かに就いての見當がつかない。併し無產政黨の意氣組は非常に素晴らしかつたから、殆ど黨の爲に犧牲になる考で立候補した者も少くない。而も隨分危險と思はれる場合にも立候補したのであるから、供託金を沒收されたことも無產黨に一番多いのであり、政友會の如きは僅かに十五人、民政黨が單に十人であるのに反して無產政黨は四十九人といふ多人數が其運命に會して居る。私共が此度の選擧に於いて最も痛感したことは此供託金制度に就てゞあつた。此事は府縣會議員選擧の場合だけでなく、來年の總選擧の場合に於いても同樣の事が感じられるであらう。二百圓や二千圓の供託金は、有產階級にとつては何んでもないことであるが、無產階級には容易ならぬ負擔である。殊に此度のやうに四十九人も供託金を沒收されることになると、將來の選擧に於いて、無產階級の候補者が餘程減少することになりはしないかといふことを惧れる。之れ決してフェアプレイでない。普通選擧に依つて無產階級の御機嫌をとりながら、一方に於いて斯樣な卑怯にして狡猾な手段を設けることは實に有產階級の責任であると云はなければならぬ。又、選擧費用の制限に就ても私共には不服がある。府縣會議員の選擧でも、選擧費は約三千圓までは使用することが出來るやうになつて居る。之れも無產階級にとつては不公平な制度であつて、有產階級は其最大限の三千圓までを使用するだらうが、無產階級はどんなにしても三千圓といふ金を使ふ力はない。然らば斯くの如き限度を設けるといふことは、無產階級にとつて大なるハンディキャップと云はなければならぬ。衆議院議員の方は別としても、府縣會議員の選擧などに於いては、今少し選擧費用の制限を嚴重にして、四五百圓程度まで引下げることが必要ではないかと思ふ。此點が無產政黨の此度の選擧に敗北した第一の理由である。

第二には棄權者が意外に多かつたことである。新聞紙の報ずる處に依ると、私共は次のやうな驚くべき數字を見る事が出來る。今棄權者の最も多數ありし大都市を左に擧げて見よう。

大阪市	五割五分強	高松市	四割弱
京都市	五割強	宮崎市	五割強
名古屋市	三割八分	大分市	三割八分
神戸市	三割五分強	高崎市	三割三分
仙台市	五割三分強	明石市	三割三分

大阪郡部　四割八分

何故斯く棄權者が多かつたかに就いて種々なる說明を下して居る人がある。今之れを綜合すれば大體次の如き理由に基くやうである。

第一、有權者が府縣議戰に對して極めて不熱心であること、第二、有權者が政治に對して大體に於いて冷淡なること、第三、戶別訪問、狩出、買收の少かつたこと、第四、選擧法がめんだうであつたこと、第五、選擧場の不便であつたこと等である。兎に角棄權者の多かつたことは、無產政黨にとつて大なる打擊であつたに相違ない。既成政黨及び無產政黨の得た投票數を總計しても約四百四五十萬位のものである。然るに府縣會議員を選擧することの出來る資格を有する者はたしかに千萬人以上を超えて居る筈である。之れに依つて見ても殆ど有權者の半數が棄權したといふことが出來る。其半數が果して新有權者のみであつたかどうかは分らぬとして、とにかく普選實施の第一回戰に於いて斯くの如き結果を見たことは如何にも殘念であるが、無產政黨に席を有する勤勞無產階級が熱心に投票したことは疑なく、若し棄權した者があつたとすればそれは全然無產政黨に關係のない未組織無產者が大部分を占めて居たのではないかと思ふ。

此度の選擧に於いて無產政黨は案外不成績であつたが、其處に悲觀すべき理由はなく、寧ろ私共は之れに對して樂觀すべき多くの根據を有つ。殊に無產階級が此度の選擧の戰線に參加した事實を目擊して、無產階級の將來に對して大なる希望と滿足を感じた。私はそれに關して次に所感を述べやう。

第一に今度私が處々に應援演說をして步いた際に於ける、其演說會に就いて云へば、それは到る處非常な盛會といふことが出來た。四國、九州地方を廻つた時は最初五六日といふもの每晩雨で、人の集らないと思はれた時、而も或場合には入場料をとつたにも拘はらず、聽衆はいつも千人位入つた。そして處々で私が聞いた所に依ると、我々が其地方に行く前に既成政黨側の演說會があつたが、それと無產政黨の演說會とを比較すると非常な相違で、既成政黨の演說會には餘り聽衆が來なかつたが、無產政黨の方には非常に來た。それは中央から辯士が行つたといふ理由もあらうが、選擧間際に至つては必しもさうでなかつたに拘はらず、其地方の人々が催した無產黨の演說會は何時も滿員であつたといふことである。今度の私の行つた先で一番大きな演說會は吳に於てゞあつた。此處には海軍勞働者が多數おり、有權者も八千人ありと云はれて居た。此處で演說會を開いたが一箇所では足らないので、小學校と劇場の二箇所でやり、

私は二回演壇に立つたが、小學校では八百人からの聽衆がすし詰めの盛況であり、劇場の方へ來るとこゝも亦滿員で、花道から舞臺へかけて一杯の聽衆は、其數實に三千五百人と算せられた。これは全く無産政黨の勃興が人々の興味と注目を惹くに至つた事實を語るものに外ならない。大概の無産政黨の演說會に於ては、既成政黨のそれに於けるが如く、反對黨の攻擊をするといふやうなことは殆どなく、既成政黨全體に對しては其鋒を向けることがあるが、多くの場合に於いて、攻擊よりは政治とは生活問題であるといふ點を力說したので、それが非常に民衆の注意を惹いたやうである。それから民衆黨の本部から地方に送つた宣傳ポスターが面白いものであつた。それは人口の九割五分は勤勞無産階級であり殘餘の五分が有産階級であるといふことを圖で現はしたものであつたが、民衆黨の辯士は到る處に於て九割五分の勤勞無産者といふことを說いた。これは有産階級にとつては苦しいことであつた。何故ならば、九割五分が無産者で、五分が有産者といふことになれば、數に於いて有産階級は到底無産階級の相手でないからである。此意味に於いて或處で私共の宣傳ポスターに對して非難を加へた既成政黨の者があつた。即ち無産階級、有産階級といふが如く階級的區別を立てることは徒に階級鬪爭を刺戟するものであるから面白くない、若し區別をするならば善人と惡人の二階級に分けた方がいゝと云つたさうである。之れに依つて見ても如何に宣傳ポスターが既成政黨にとつて一つの脅威であつたかを知ることが出來る。兎に角無産政黨は言論戰に於て、たしかに既成政黨よりも餘程有効に勤勞無産階級に訴へることが出來たことを信ずる。

次に私が無産階級運動の將來に對して樂觀的である點は、此度の選擧に於いて無産政黨員の壯んなる意氣込を見たことに就いてゞある。大概の處では選擧費用は黨員が寄附を以て辨ずるのであるが、今度は黨員自身も寄附したし、又同時に勞力の寄附も大したものであつた。私は處々で黨員の選擧事務所へ行つて見たが、其選擧事務所が場合に依ると候補者自身の家、而も狹い家で、黨員が五六人來てゐて、晝はポスターのビラを書くために働き、又夜の演說會の辯士の割當をやり、夜になると皆出て行つて應援演說をするといふ有樣であつた。無産政黨には選擧ブローカーの如きは絕對に入る餘地がないといふことを私は知つた。自分から金を出し、勞力を提供する無産政黨員の間には、あべこべに金を取らうとするやうな者は入ることが出來ない。猶ほ次いでに云へば今度各候補者の使つた金は極めて小額なものであつた。各無産政黨の本部の事務所で使つた選擧費用は幾何に上つたかといふに、勞働農民黨は六百圓、日本勞農黨

は千二百圓、社會民衆黨、千四百圓であつた。民衆黨が比較的選擧費が多かつたのは、平常に於て、地方に遊說に出かける場合には旅費は地方の負擔であるが、今度は旅費及びポスターのビラは本部に於いて出す方針になつてゐたゝめに割合に費用が嵩んだゝめである。乍併それとても既成政黨のそれに比較すれば驚くべき程小額である。尤も之れは止むを得ざる事情に基く小額であるが、併し此選擧費を多く使はないといふ精神で政治運動をやれば將來此種の運動に良い影響を與へるに相違ない。

次に私は此度の選擧に於いていろ／＼傳ふべき美談があるからそれを語らう。

最初民衆黨では小倉市には候補者は立てぬ方針であつた。支部の方でも組合員は多少あるが金がないので候補者は出さないことにした。然るに矢張民衆黨員中の或者が、小倉あたりで候補者を立てぬといふ筈はない。金の工面をしても是非候補者を出した方がいゝと說いた。丁度其時は門司の方では候補者が立たなかつたので、其處で演說會をやつて入場料をとり、其金を小倉の方に寄附するといふ約束で門司で演說會を開いた。私は爲藤五郎氏と共に九州からの歸り路を其處へ出かけて行つたが、其夜は雨であつたにも拘はらず、土地の一番大きな劇場に於いて、入場料二十錢を徵收して千六百人の聽衆が來た。當日の會計をして殘金百圓餘りあつたがそれは全部小倉市に寄附した。又或處では候補者が立つたが、其人は保證金其他で五百圓丈け費すことの出來る立場に在つた。併し自分が果して適當な候補者であるかどうかを疑ふので、他に若し良き候補者を發見することが出來るならば五百圓は其誰れにでも提供するといふことを申出でた。併し別にさういふ適當の人物を見出すことが出來なかつたので、結局黨の決議に依つて矢張其人が出ることになつた。又或處では千五百圓までは使ふことの出來る力を持つた候補者があつたが、其人も若し自黨から他に適當の候補者があれば其金を全部提供することを申出たが、他に立ち手がなかつたので結局其人が立候補した。これらは寔に黨員の美しき精神の發露と稱すべき例である。以上は社會民衆黨にあつた事實であるが、他黨にもかういふ例はあつたことゝ思ふ。斯くの如き事實を見ても私共は無產政黨員の旺んなる意氣込を知ることが出來ると同時に、現狀の必しも悲觀すべき理由なく、寧ろ將來に多大の希望を繫ぐべき所以を知るのである。

更に私は無產政黨の將來に就いて樂觀的である理由をもう少し述べるならば、それは現在の選擧は決してフェアプレイではないが、それは將來にかいてたしかに實現の可能性があることを信ずるが故である。私は將來は言論戰が力を占めることを疑

はない。それを有効ならしめるためには演說會場が問題であるがそれに就いて最も喜ばしき現象は、近頃女學校や小學校を演說會場として解放することになつたことである。恐らく普通選擧法の中で學校を解放すると位よい項目はない。之れは確かに立法者の傑作であると云つてよい。各地に行くと都會ならば云ふまでもないが、候補者の數よりも小學校の數が多いのが普通である。或人は選擧前に於いて、有力者に依つて小學校を先に借りられて了ふ惧れはないかと心配したが、實際は小學校の數が多いので、私達は毎晩それを使用することが出來て些かも差支がなかつた。小學校を使ふことが便利である理由は、使用料が廉いといふことが第一である。昔のやうに劇場や活動寫眞館などを借りると非常な高い使用料をとられるが、小學校では電燈料の二三圓を徴收する位で、京都の如きは學校も立派であつて、電燈料が七十錢、廉いのになると十七錢といふのがあり、それに掃除代が普通一圓といふ相場である。斯くの如き便利な事情が存し、又將來選擧法が改正されて印刷物の配布も止めることになり、言論戰のみが戰はれることになれば、其處に初めてフェアプレイが行はれる。假令印刷物が配布されても、言論戰に重きを置くことになれば無產政黨は旣成政黨と同等の地位に立つことが出來るであらう。更に、私が小學校の解放を喜ぶ理由は單に使用料が廉いといふこと丈けでなく、學校で政談演說が行はれることになれば演說の品位が高くなるからである。選擧前の演說に於ては妨害は選擧違反になるからでもあらうが、學校の演說會に於いては聽衆は極めて靜肅で、殆んど妨害といふものがなかつた。私は此事を政治の教育化と唱へたい。政治の向上は實に玆から生れるであらう。猶私の希望を述べれば將來寺院をも小學校の如く解放することが必要である。東本願寺は地方の寺院に命じて寺を政談演說の會場として貸すことを禁じたが、西本願寺は地方寺院に對しては其自由に任せ、たゞ寺を演說會場に貸す場合には各派に公平に貸すやうに命じた。これは西本願寺の態度が甚だ公平であつたと云へる。市や町には小學校があるが、村となると學校が不足であるからどうしても寺院の解放が必要になる。政治は決して汚らはしいものとして見るべきものではなく、小學校でやつても政談の品位をあげるのであるから、寺を解放したら一層その効果を擧げ得やう。私などは聽衆の態度に非常に滿足したものである。學校に於ては其處で何一つ破壞されたものもなく、損をしたといふこともない。其點からでも學校當局は案外であつたらうと思ふ。會場を貸すといふとただで貸すやうに思はれるが、多くの人達が學校に集るといふことは、其處の講堂なり、雨天體操場なりに父兄が集

るといふことは、それらの人々と學校との聯絡をつけることになり、非常によき結果を得ることが出來る。寺院も亦本堂を解放すれば村の人々と寺との親みを增し、信徒と寺とを結びつける因緣ともなるのであるから、宗教家は此點にも考へ及ぶべきであると思ふ。斯くて小學校や寺院までも解放されるやうになれば、言論戰は益々力を得て無產政黨にとつて有利な立場が展開されることを疑はない。

以上は將來に關する豫想であるが、次に現實の問題として此度無產政黨が選擧に臨んだ態度を考へて見たい。今回は四の無產政黨が何等地盤の協定をしないで選擧に對したことは、そのために投票數に應じて得べかりし議員の半數にも足らぬ議員を出したに過ぎぬ結果を招いた。それは明かに同志討ちの結果であつて、未だ十分數字が明かでないから明言は出來ないが、鳥取縣や兵庫縣などに於いても同志討ちさへなかつたならばもう少し當選者が出なかつたであらうか。此點は各無產政黨の幹部が數字的に研究をして見たならば、將來無產政黨は單一に纏まることが出來なくとも、選擧に際して地盤の協定をすることの必要を感じるであらうし、又それは必ずなさねばならぬ。これを實行するにさほど困難な事情があるとは考へられないのである。我々は來年の總選擧に今回の失敗を繰り返してはならぬ。

轉じて此度の選擧の實際を見れば、當選者を出した選擧區に於いては、矢張相當に組合の後立があつたことは云ふまでもない。强固な組合のある處では成功の可能性のあることは確實である。併し斯ういふことも亦考へられねばならぬ事情であつた。それは候補者が若し非常に適當な人物であつたならば、例へば人格や思想や辯舌に於いて優秀なる候補者であつたならば、今回の選擧に於いても成功した例が少くないといふことである。社會民衆黨に於いても其例が一つあつた。それは宮城縣に於ける事實であつたが、其處には農民組合や勞働組合の後立もなかつたが、候補者が雄辯家といふよりも縣政、殊に縣の財政に關する知識が十分であつたゝめに、其演說に於て聽く人を感動せしめ、遂に見事に當選した。併し之れは矢張例外と稱すべきものであつて、無產政黨の運動に於ては組合の援助を得なければならぬことを痛切に感じた。今後は一方に政治運動を旺んにやることも必要であるが、他方に經濟的方面から勞働組合、農民組合、俸給生活者組合を擴張することが努むべき急務であると思ふ。

乍併此度の府縣會議員選擧は無產政黨にとつて、來年の總選擧に對してたしかに有効であつたと云ひ得る。從來無產政黨は盛んに宣傳されたが、世の中に無產政黨の何たるかを知らしめ

ることはなか〳〵容易でなかつた。今日は宣傳の世で、なるべく共存在を多數に知らしめることが必要であるが、此意味から云へば此度の選擧ほど無產政黨にとつて有効な宣傳方法はなかつた。無產政黨は實に日本中に宣傳されたのであつて、二十六人の府縣會議員を當選せしめた事は此意味に於て非常な成功であつた。

最後に一言附け加へるならば、此度の選擧に於いて無產政黨の當選者が二十六名に過ぎなかつたといふことは、其數に於いてたしかに貧弱であつた。而も之れを一つの縣會に割當てれば多いところで二三人、少いところでは縣會の一人に當る位しか出てゐない。併し一人の無產政黨員が縣會に送られても其及ぼす影響は大である。それは無產政黨が市會、町會に僅かな議員を送つたことによつてゞも分る事實であつて、二三人の無產黨員が入つて行くと、それだけで市會、町會の形勢が變化した實例もある。府縣會に於ても、政友、民政の議員の情勢に依つて、一人の無產黨議員が府縣會を動かすといふ實例さへ既に現はれてゐる。又一人の無產黨議員を二大既成政黨の孰れからも引張らうとしてゐる事實もある。一人は必しも無力ではない。要するに無產黨議員がしつかりした態度を以て無產階級のために働いてくれゝばいゝので、さうして辛抱してゐる中には、二回三回の府縣會選擧の後には次第に勢力となることが出來るだらう。無產政黨がキャスティングボートを持つといふことは、其事が必ずしも政略的に兩方の政黨を操るといふことを意味しない。只無產政黨が正しい道を步きさへすれば、其事丈けで府縣會の空氣を一新することにならう。此意味に於いて此度の府縣會議員選擧は大なる意義を有するものであつたことを信ずる。



民政黨の內閣倒壞運動

馬場恒吾

民政黨が外交問題と財界救濟問題を提げて、內閣倒壞運動を起さんとすると云ふ新聞記事が出た。三四年このかた內閣倒壞運動が途絶えてゐたのだから、それも面白からうと云ふ彌次馬的氣分も混じつて、世間に多少の興味を惹起した。然るにこの新聞記事の實體を調べて見ると、民政黨が果して倒閣運動を起すか、否か、其幹部で正式に決定した事ではない。現在では黨の總裁濱口雄幸氏は東京に居らず、他の巨頭も縣會議員選擧の爲めに地方に旅行中であるが故に、それが歸京の上、相談さるゝ事になるであらう。從つて大阪を振り出しに、全國的に內閣彈劾演說會を開くと云ふ事も尙希望に止まる。併し此希望は黨の中堅幹部の希望であり且つ、黨の巨頭にも其希望があるが故に、民政黨が倒閣運動を正式に開始する可能性は充分に存在してゐる。

民政黨が此運動を起す目標は元より來年の總選擧前に、內閣を乘取ることにあるが、例令これに成功しなくても、此冬の議會を解散に導けば、目的の大半は達せられたとする。その理由とする所を聞くに、現在の田中內閣の參謀長格である所の、鈴木喜三郞內相は此冬の議會を解散せずに濟まし、來年の總選擧を普通の總選擧にして、例へ其總選擧で政府黨が負けても、政府は來年一杯は辭職せずに居ると云ふ計畫を建てゝ居る。若し此計畫が當れば、政府は明後年の議會を解散して二度目の總選擧を行ふ。さうして、政友會內閣の手で、二度も總選擧を行はれる事は在野黨に取つては非常な痛事である。それ故に民政黨は來年の總

選擧を解散後の總選擧とし、其勝負に依つて内閣更迭が直ちに行はれる事を希望する。だから政府が此冬の議會を是非解散せねばならぬやうに、今より倒閣運動を起し、政府との正面衝突の免かるべからざる形勢を作るのであると。

それでも民政黨がこれ丈けの鬪爭心を奮ひ起したのは寧ろ感心である。民政黨と其前身である憲政會の無抵抗主義は今年春以來の天下の笑ひ草であつた。若槻内閣時代の三黨首妥協、樞密院の襲擊に遭つて一溜りもなく總辭職をなした事、財界動揺後の臨時議會で唯々諾々として政府案に贊成した事、其後に於ける外交内政に於ける田中内閣の醜態暴露に對して只傍觀的態度を採つた事、これらはすべて彼等が去勢され切つてゐる事を天下に廣告するものであつた。それが少數黨であつて、奮鬪しても力及ばすと云ふのであつたならばまだ恕すべき所もあつたであらう。然るに彼等は衆議院に於て二百二十名の壓倒的多數を有してゐる。貴族院の同情は政友會よりは寧ろ民政黨に傾いてゐる。この形勢を前にして此國家多事の時に袖手傍觀してゐるのは、彼等何の爲めに政黨を組織してゐるかと世人に疑はしめた。

尤も彼等に云はしめれば、彼等は府縣會議員選擧に沒頭したから、外の事に手を出す事が出來なかつたと。成程その事情は其やうに見られる。併し民政黨が選擧に沒頭して他を顧みる暇がなかつたと自白するならば、彼等には政府の選擧第一主義を笑ふ資格がなくなる。政府は今年四月内閣を組織して以來、地方官の更迭、其他汎べての施設を選擧を目標として行ひ、所謂選擧第一主義に立籠つて他の政務を顧みるの暇はなかつた。否寧ろ、汎べての他の政務を選擧の宣傳に便利なる如く行つたが故に、他の政務は只放擲して置かれたのでなく寧ろ選擧に惡用されたのである。一般の政治を爲すべく作られたる政府が政務を餘所に、選擧に沒頭する事を選擧第一主義と云ふ。さうした政府の存在する事を、國民は苦々しく思ふ。然るに在野黨も亦選擧第一主義である事を發見するとき、國民は既成政黨全體に對して憎惡の念を懷くやうになる。

茲に議會政治の本質的な缺點が暴露されてゐる。元より政治を民衆の利害に一致せしめる事に於て、議會政治は封建政治若しくは官僚政治に比して一つの進歩である。併し議會政治を認めると、其所に政黨の存在を認めねばならず、政黨が存在するとき、政黨が政權獲得に熱中する事も已むを得ずと云ふ事情が生れる。そして選擧第一主義も畢竟するに政權獲得又は政權維持の別名に過ぎない。

と云つて、議會政治を昔しの封建政治若しくは官僚政治に逆戻りさす事は吾々の望む所でもなく、又出來得る事でもない。

併し議會政治が政權爭奪戰以外に何ものもない狀態に墮落したときには、國民は其弊に堪へ兼ねて、議會政治を根本的に改善するか、然らずんば何か新たな形式の政治を以て、之に代へんと試みるであらう。それが何う云ふ風に變化して行くかは元より豫言し難い所であるけれども、只、これ丈けは斷言出來る。即ち國民は政權爭奪のみに沒頭する政黨の存在を許さない。それ故に現在の政權爭奪に沒頭する政黨を無理矢理に政權爭奪を目的とせざる政黨に更生せしめるか、然らずんば、その政黨を滅ぼして、他の今少し純眞無垢の政黨を起らしめるかである。そしてさうした變化を、既成政黨自身の手に依つて行はしめんとする。恰もブルジョア政黨である所の憲政會と政友會をして、普通選擧に贊成するの餘儀なきに至らしめたと同じ事である。彼等は彼等自身の地盤を動搖せしめる所の普選には內心贊成でない。併し之に贊成する事が政權爭奪に便利であるが故に贊成した。其動機は不純であつたが、其結果は良かつた。世界の進步は不純の動機から出發して、善良なる功果に到着する事に依つて行はれる。混濁の人生に情熱の燃ゆるが如き花が咲く。醜きものから美しきものが生れる。政治の改革もさうして永久に連續して行くのである。

民政黨の企てる倒閣運動も亦原則に漏れない。倒閣運動！、何たる云ひ古したる言葉ぞや。在野黨は永久に倒閣を叫ぶべく運命付けられてゐるかの如く思はれる。其中に政權を取り逃がしたる悲哀の情が籠もり、又將來の政權を夢みる不純の動機が現はれてゐる。併しかうした出發點から付ける火も、一度それが燃へ上がつたときは政界を淨化し、或は既成政黨を燒き盡くす所の大なる國民運動に變化しないと、誰れか保證し得るものがあらうぞ。

倒閣運動で政府を攻擊する二つの題目は支那問題と銀行問題である。支那問題に對して內閣が如何なる無態を演じてゐるかは、玆に述べるを必要としないほど政府自から之を世間に示してゐる。政府は何か前內閣と違つた事をしようとして、山東に出兵した。濟南居留民を保護する爲めであつた。然るに濟南に入つた日本軍隊は、支那官憲の抗議に依り、町を自由に通行する事が出來ず、從つて河迄水を汲みに行く事が出來ず、却つて居留民に水を汲んで來て貰つて飲料水を得た。居留民を保護するのでなく、居留民に保護されるかの如き觀を呈した。滿蒙交涉も亦政略の爲めに遣はれた。交涉の題目は大して問題にする程の事でなかつたに關らず、政府は恰かも大々的經綸を有するものたるかの如く宣傳した。それは支那人に知らしめる爲めでなく、選擧の爲めの內地用の宣傳であつた。然るに其效果は內

地に現はれるよりは、先づ支那に現はれた。支那官民は日本が滿蒙に對して恐るべき野心を懷いてゐるかの如く思ひ、滿洲に於て排日運動を起し、田中内閣打倒の叫びを上げた。それで滿蒙交渉は一時中止になつた。

此等外交上の失敗は永き將來に亘つて、日本の國際的立場を惡くし、國民の經濟生活に重き負擔を加へるのは勿論であるが、民衆はそれが彼等の生活に影響する事を容易に理解しない。之に反して休業銀行の問題は目に見へて國民の生活を脅し、民衆の神經を苛立たせてゐる。銀行の門が鎖されて既に半年以上を經過してゐる。預金者は首を長くして預金の支拂はれるのを待つた。政府が議會に於て、銀行救濟にあらず、預金者救濟だと云つた言葉を信じてゐたのであつた。然るに今日迄、それは空宣傳に終つた。預金者の心は極度に暗くなつた。

唯に預金者のみでない。三土藏相が公開演説に述べた所に依ると、二流銀行以下が銀行恐慌に驚いて、手元に金を聚めんとした。即ち今迄の貸金を回收する事に全力を盡くした。そうして回收した金が九億四五千萬圓に上つてゐる。これ丈の資金が商工業から引き上げられたのだから、商工業界が恐慌に陷り、世間が不景氣にあるのは當然だと云つて居る。此深刻な不景氣の下に、一般民衆は受難してゐるのが今日の狀態である。

此不景氣の原因である所の銀行破綻が、只經濟界の自然の成行きでさうならざるを得なかつたものならば、一般國民としても尙忍ぶべき餘地はあつたであらう。少くも資本主義社會の自業自得だとしてあきらめる餘地があつた。然るに此銀行恐慌が政黨間の政爭の結果だと云ふ事は、今は誰れも疑ふ者のないほど明白にされた。震災手形法案が出たとき、政友會はどの銀行が震災手形を所有してゐるかを質問した。そして其銀行の名前が漏れる機會を作つて、中流所の七銀行を休業せしめた。議會閉會後樞密院と呼應して台灣銀行を休業せしめた。其餘波が四月の大恐慌になり、三日間の銀行總休業、モラトリヤム、七億の國庫補償となり、今日の不景氣になつてゐるのである。

これが爲めに政友會は政權を取り得た。元より政權獲得を生命とする政黨に採つては、政權を取る爲めには、銀行の二十や三十、預金者の五十萬、一般民衆の生活などは、之を足元に蹂躪して進んでも、其處に何の不合理があらうぞと云ふであらう。併し不合理は斯の如き政黨の存在其物にある。

而して財界救濟の進路にも不合理が橫はる。今日は國民受難の秋である事は何人も否定しない。若し受難が免かるべからさるものとすれば、せめて其受難は公平に分配されなければならぬ。然るに政府の銀行整理の方針は決して公平に建てられてゐ

ない。此所にも政治的の理由に出發して、貴族院の後援する十五銀行は單獨整理が行はれんとする。

十五銀行の欠損は一億四千萬圓、休業銀行中で內容が最も惡い。然るに十五銀行の株主は未拂込株金約五千萬圓を拂込む義務があるに拘らず、それを一千萬圓位で勘辨してやる。他の銀行の預金は四割前後の切捨てを行はるるに對して、此銀行の預金は切捨てられない。十五銀行へは日本銀行からは八千萬圓の特別融通をなさしめる。それを可能ならしめる爲めに、川崎造船所國際汽船をも特別に助けてやる。さうした苦心は十五銀行を單獨に救濟せんが爲めに必要となつて來たのである。

內容の惡い十五銀行の預金が切捨てられず、それより內容のよい銀行の預金者のみが、預金切捨てを我慢しなければならぬ。吾々は社會正義の上から其理由を發見するに苦しむ。十五銀行の株主が華族たるが故に、其責任を輕くされ、他の銀行の株主は其恩惠を受けざるとき、誰れか政治の公平を信じやうぞ。此所に國家の危機が含蓄される。

民政黨が國民の生活苦を理解してゐるものならば、今迄に銀行問題を提さげて起つべきものであつた。これを此黨派はしなかつた。却つて無產政黨の一つである社會民衆黨は數ヶ月から小口預金者救濟を呼び、府縣會選擧の最中にも東京に於て預金者大會を開いた。今後も其活動を續けるであらう。

民政黨は此れを倒閣運動の一題目にせんとする。其意圖は政爭の外に出でない。併し其動機がどうであつても、此れが全國的運動になるとき、一般民衆の生活苦、公平なる政治に對する要求は、必ず政界を燒き盡す如き熱を以て叫ばれる。そして其劫火の中から、政友會又は民政黨が如何に燒け爛れて出て來るかは吾々の知る所でない。古き者は死に、新らしき者が生れる。さうしてよりよき國家が作られて行くのである（二、一〇、七）

普通選擧に於ける棄權の考察

市村今朝藏

諸政黨が狂奔した府縣會議員選擧戰はとにかく終へた。この府縣會議員選擧は我國最初の普通選擧（勿論部分的には昨年九月、十月に濱松及び北海道各市に市議選擧の普選はあつたが）であつたこと、明年の衆議員選擧の前哨戰であること、無產諸政黨が參加してゐること等のために異樣の期待、注意と興味をもつて迎へられた。これ丈けの意味でも充分に選擧史上劃時代的意義があつたと云へる。特に新興勢力の代表者としての無產諸政黨の絕好の力試めしの機會であつたことに意義がある。

その數字の上に現はれた結果について、與黨は、與黨の勝利を語り、野黨は野黨の人氣を說いてゐる。又無產政黨は議員を擁して地方自治に參加する最初の基礎を作ることが出來た。

單純な數字上の結果は決してすべてを物語るものではない。選擧戰は政治運動の一過程にすぎないからである。選擧戰が如何に大衆的基礎に影響したかが問題である。これは現はれた數字によつては計算することが出來ない。政治は意識的行動であるが、一朝一夕に傳統と因襲が深く喰ひ入つてゐる意識を變革することが出來ないとしたなら既成政黨の看板の塗り替へや、無產政黨の敢果なる態度も旬日に滿たない短い選擧戰では素志を貫くことは絕對に不可能である。その影響は次の、又その次の……選擧に現はれて行くものである。

無產政黨はとにかく數字上零から出發して二十六までその議員を獲得した。その當選率は既成政黨のそれより低いとしても、それは不成績を物語るものでは決してない。此の選擧は無產政黨の政黨としての誕生を意味するもので既成政黨との比率は本質上この場合に無意義だとも云へるからである。選擧の結果最も重要なことは數字上の結果ではなくしてブルジョアジーの政黨に對する無產政黨の出現にある。即ち舊勢力と新興勢力との政治的鬪爭の形式上の序幕がこの府縣會選擧によつて開かれたことにあらねばならない。

今後政治鬪爭は議會をその一舞台として演ぜられる以上、選擧過程を觀過するわけには行かない。従つて『投票』が重大な意義をもつて來る。投票は原則として民衆の經濟的、若しくは社會的（等々）の要求が政治的關心となり投票となつて現はれるのだと見るべきである。けれども我々の意識を鈍らしてゐる永年の習慣と惰力とは眞實なるものを見るの目をくらましてゐる。更に眞實を行ふに怯懦ならしめてゐる場合が頗る多い。そこで政治教育の方針が確立するわけである。この方針は細かい技術によつて補はれなければならない。その一技術は投票の研究

である。この投票の研究は必然にその反對現象である棄權の研究にも足を踏み入れなければならない。兩者の考察は、その動機については社會心理學的に研究して行かなければならないが、社會心理學は未だ思索的、主意的領域から脫却しきれないのでそれから實績を見出すことは頗る困難である。そこで心理的な考察を離れて、統計的材料の分析に注意を向けなければならないことになる。こうした立場から研究したものに、投票については、イオワ大學のマイヤー教授により割合に精しい分析が發表されてゐる。（米國社會學雜誌三十六卷、一號）又棄權については極めて精細な研究がシカゴ大學のメリヤム及びゴスネル兩教授によつて試みられてゐる。（棄權の原因とその統制方法）

私は今度の府縣會議員選擧に際しての棄權の率の甚だ高かつた事について各方面からにはかにその問題が注意されだしたことを見て、ここに一材料を提供してその問題の理解の一助としたいと思ふ。

二

先づ私は選擧に關しての專門家が棄權の原因をどう解釋してゐるかを觀ふことにする。一般的に擧げられてゐる理由は次の數種のものである。

一、有權者の激増
二、普選の趣旨が徹底してゐないこと
三、普選法が難解であつたこと
四、狩出し戶別訪問禁止の結果
五、議會政治否認の思想
六、偶然に選擧日が日曜、祭日とかち會つたこと」

個別的理由としては

一、1大阪・京都（五割三分の棄權）は由來政治熱が薄い所であつたこと
2多數の立候補の亂立の結果撰擇に迷つて棄權したこと
3特に大阪に於ては松島事件の直後として既成政黨に對する不信の結果

二、水戶（四割の棄權）は競爭が緩慢であつたため投票心をそゝらなかつたこと

これ等の理由は一應は皆尤もなものばかしである。

棄權を投票しなかつた人々と云ふ風に廣義に解釋することも出來るが、その場合は次の三種類のものに分類される。

一　選擧資格に住居期間の制限があるがその期間、その區域に住居しなかつた人々――卽ち選擧權を最初より拋棄してゐる人々も又棄權者である。都市に於ては無造作に移轉す

るこのグループに屬する人々は相當に多數あることが豫想される。けれどもその概數は不明。

二　立候補者が定員を超過しなかつたため投票をすることが出來なかつた人々も棄權者である。この部類に屬するものは二十七區に亘つてゐる。

三　上述の二ツの場合を除いた殘りの棄權、即ち普通の意味での棄權、これに屬するものは有權者（選擧済の二府二十七縣）の數七、二二五、一五九の中二、四四六、五〇一票。投票者四、七五八、六五八票に對して二、四四六、五〇一票、即ち二府二十七縣の總有權者數に對し三割三分强同投票總數に對しては、五割强の比率となる。（棄權數の中には無効投票及び先記第二項の棄權をも含まれてゐる。）

一及び二は棄權の部類に入るべきものではあるがその原因及び統制には重要な意義はない。從つて研究の對照となるものは第三に屬する棄權である。

この棄權の理由について專門家は上述の幾多の一般的原因と特種的事情とを擧げてゐる。けれどもそれは想像的理由であつてその中に働く幾多の社會的データーを見てゐない。例へば普選の趣旨が徹底してゐなかつたと云ふ一ツの理由を取つて見ても、それだけでは諸事實を覆ふ總括的説明であるとしか見るわけに行かない。それは選擧人の年齡のどの部分にそうした傾向があつたか。職業別にしてどう云ふ種類のグループにそうした棄權が最も多く現はれたか、どう云ふ經濟的地位にそうした棄權の著しい特徴が見出せるか等、等の社會的データーによつてその一般的理由は説明されて行かなければならない。更らに一ツの棄權の理由は單獨に棄權の動機となるものではないことに留意してゐなければならない。一ツ或ひはそれ以上の理由が結合して或る人を選擧場に向はしめなかつたことは往々にして多々ある例である。個條書に並べた幾つかの理由は他との聯絡によつて棄權の行爲の動機となつたものであるとすれば、それの間に働く相互關係も又研究の對象に置かなければならない。更らに棄權者について云へば、1、その地方に於て曾て投票したことがあるが今度棄權した者。2、何處かで投票したことはあるが今度棄權したもの。3、どこに於ても、又何時でも投票したことのないものの三種に分けることが出來る。1及び2は時宜的棄權者で3は習慣的棄權者である。こうした見わけは缺くべからざるものであらう。

今度の選擧に於ける棄權についても、かうした分析が直ちに可能であると云ふことは出來ないが、それ等に充分の注意が拂はれなければならない事は云ふまでもない。そうでなければ棄

摘の研究から政治教育に轉化して行く場合に充分の効果を齎らすことがむつかしい。

三

そこで棄權の理由の諸項目は次の諸社會的データーによつて分類されるべきである。

一、具體的困難
1、病氣のために選擧場に行くことが出來ないこと
2、不在であつたこと
3、手離しすることの出來難い家族のために在宅したこと

二、法律的及び行政的障碍
1、法定住居期間その地方に住居してゐなかつたこと
2、選擧場が輻輳する事のために時間の消費を吝しんだと
3、選擧場の位置が惡いこと

三、投票の否定
1、一票は何の役にも立たないものだと思つたこと
2、政治に嫌惡の感じを抱いてゐたこと
3、自黨に愛想をつかしてゐたこと
4、投票が腐敗してゐると云ふ考をもつてゐたこと
5、總べての政治行動に否定的態度をもつてゐること

四　怠慢
1、一般的無關心である事
2、特別の選擧に對する不關心であること
3、怠惰—投票しようと思つてゐたがつい怠けたと云ふようなこと
4、選擧に關しての無智或ひは臆病であつたこと
5、政黨運動員の失敗によること

五、經濟的原因
1、賃金或ひは職業を失ふ恐れがあつたこと

更らに、これ等の諸項をつらぬいて、次の觀察が必要である

一、年齢の差異と諸棄權理由の關係
二、住居期間の長短と諸棄權理由との關係
三、經濟的地位と諸棄權理由との關係
1、家賃を基礎として見た經濟的地位と棄權との關係
2、職業を基礎として見た經濟的地位と棄權との關係

棄權の原因についての一般的分析の方針は上述の如く案出出來たが、それ丈けでは尚不充分である。次の如き調査の基礎的準備が必要である。

一、選擧過程についての專門家の判斷と洞察。

二、棄權者の個別的考察。棄權の代表的標本を得る見込みで棄權者を撰ばなければならない。各方面に亘つて出來る丈け廣い範圍から撰び出す必要がある。全體の棄權者に就て調査をすることが困難であるから、公平なる代表を擇び出さないと研究の目的を達することが出來ない。

三、全人口統計と研究の對象に擇び出した棄權者との比較を作つて置くこと。

これ等準備は棄權の研究の基礎的要素であると云へる。かうした基礎の上に立ち、こうした方針で分析することによつて棄權の研究は有効に成し遂げられる。現在行はれようとしてゐる中央當局からの指令により地方官憲の手によつて作り出される棄權の調査は、その素材となる棄權の原因の確實性が頗る疑はしい。先づ第一に地方官憲に棄權の狀況を正確に認識し、これを分析する能力があるかどうかが問題であると同時に、彼等に棄權者が果して眞實を語るかどうかが問題である。一例を擧げれば官憲に向つて自分は政治行動を否認すると云ふ理由や、政府に對する不滿などは語ることを避けるであらうと云ふことは明瞭であるから。

然らば棄權の調査は絶對に不可能かと云ふにそうではない。シカゴ大學の政治學部で一九二三年、シカゴ市長選擧に於ける棄權の調査な[illegible]り眞實を投じて遂行したことはその可能性を示すものである。

上述の基礎と方針とで棄權の研究が直ちに我が國で行はれることは頗る困難事であるから最も綿密に然かも正確に調査されたシカゴ市の棄權の調査を極く簡略に紹介して我が國の棄權考察の一助にすることは無駄ではないと思ふ。

四

シカゴに於て行はれた棄權の調査は七千人の棄權者を全棄權者の代表であるやうに擇び出し、それを個々に訪問、面接してデーターを集めたのである。これがメリヤム及びゴスネル兩教授の手によつて分析、綜合された。この市長選擧に於ける棄權は米國に於てはテピカルのものであつたと見られてゐる。更らにそれは世界的にも代表的のものだとも云へる。といふのは諸國の棄權率を見るに、

國名	年次	棄權率	普選施行の年	選擧資格
イギリス	一九一八	〇、四二	一九一八	男子普選 女子制限選擧
フランス	一九一九	〇、三八	一八五二	同右
ドイツ	一九二一	〇、二四	一八七一（プロシヤ 一八四九）	男女普選
イタリー	一九一三	〇、四〇	一九一二	同

アメリカ　一一九二〇　〇、四三　一九一三　同
合衆國　一一九二三　〇、五〇

獨・佛の棄權率の低いのはそれは普通選擧が八十年も前に布かれてゐたが爲であるが、他の國々に於ては四割以上の棄權率は普通の狀態である。これに比し從來の日本が一割五分位の棄權率であつたことは好成績であつた如く一見思はれないでもないがそれは皮相た觀方であらう。日本は從來制限選擧であつたから、かり出し、買收が行はれてゐたことが棄權率を低からしめたのである。又今次の府縣會議員選擧に於ても大都市は兎に角として各地方に於ては歐米に比して棄權が少なかつたが、それは婦人が投票權をもつてゐなかつた爲である。米國の如きは婦人の棄權は棄權の四分の三にも達してゐる事實から見てこうした傾向をもつ婦人を除外して我國の普選の結果は決して單に數字上から外國に誇るに足るものでは決してない。

かう云ふ風に普通選擧史上の先驅國を除いては各國はすべて四割以上の棄權をすることになる。そこで米國の一九二三年の棄權の調査は各國の棄權の考察に役立たないものでもないと云ふことが出來る

シカゴに於ける棄權者のうち身體的困難で投票しなかつたものは面接した全棄權者の二五・四%あつた。これ等は更らに病氣のもの二二・二%、不在のもの一一・一%、家族に手を離すことが出來なかつたため在宅したもの、二二・二%に分類出來る。棄權の理由に病氣を擧げたものは婦人と老人及び貧困の人々の間にあつたことは首肯出來る常識的事實である。不在による棄權は男子に多く、男子棄權者の五分の一に達してゐる。又最良住宅地域に住む男子棄權者の半數は不在であつた。これに反し不良住宅地域に於ては男子棄權者の一八%が不在であつたにすぎなくて、然かもその殆んど全部が交通勞働者であつた。

法的及び經濟的障碍による棄權と認むべきものは一二・六%あつた。法定住居期間未滿のもの五・二%、開場時間の都合の惡いことを理由としたもの五・五%、投票場の輻輳及び投票場の場所の惡い事によるものは各〇・八%、其他。この部類に屬するものは勞働者階級に最も多かつた事は注意すべき事實である。

投票を否定する棄權者のうち婦人參政に直接間接の不贊成を理由とするものが一七・六%ある。その外の諸理由を擧げたものが八・九%ある。そのうち最も多かつたものは政治に對する嫌惡であつて四・三%ある。この理由は勞働者の中に多かつたことと、その個々の理由を次の如く說明してゐたことに注意しなければならない『すべての政治家は詐欺師である。そうでないにしてもすぐそうなつて終ふ。』『善惡の人を撰び出すことは無用

の事である。すべてのものは悪い影響や政治機關に感化され易いから。』『當選して終ふと自分達のために何事をもしてくれない様な人を選ぶのに投票場へかけつけたり、心配したりすることはこの上もない馬鹿げたことだ。』『政治は金持ちが貧乏人を搾取し、强者が弱者を支配する手段にすぎない。』と云ふやうな明瞭な理由を雄辯に告げてゐた事である。

最も棄權率の多かつたものは一般的無關心及び怠慢による棄權であつた。面接棄權者の四四・三%はこれに屬するものであつた。更らにそれを細別すれば、

一般的無關心二五・四%、特別にその選擧に對して無關心であつたもの一一・五%、心がけてゐたが、つい投票を果たさなかつたもの八・四%、選擧に關する無智臆病七・一%、政黨員の失敗〇・九%

これ等を理由とするものの多くは他の諸理由もあはせてもつてゐたものであつて、男子に比して女子は二倍あつた。男子棄權者の六分の一、女子棄權者の三分の一はこの部類に入る。年齢から云ふと中年の成人の內に最も多く約三分の二は四十才以下の人達であつた。又二十代の男子の六分の一は棄權の理由に無關心をあげてゐた。

職業及び賃銀を失ふ心配から投票をしなかつたものは面接棄權者の五・五%あつた。これは法的障碍の中に入るべき棄權である。と云ふのは開票時間、開場時間の不便宜がその原因の原因となるからである。

私は出來るだけ簡單にシカゴの棄權についての調査の一部を記述した。精細なる分析は一卷も有足れりとしたい位であるが、一口に云ふ棄權はどう云ふ社會的、數字的內容をもつものであるかの一斑を知るには適當な資料であらう。

五

棄權の因果的研究は、すべての社會的事象と同様に、個々の環境及び刺戟的情況の記述から出發しなければならないから、統計的分拆及びケース・スタデーだけでは充分だとは云へない。けれども概要はそれによつて摘むとは出來る。シカゴ市に於ける棄權の調査の結論として次の諸條件を引き出すとが出來る。

1、棄權と男女別は頗る密接な關係があること、女子棄權は男子棄權の二倍あつたこと、けれども女子に於ける場合と男子に於ける場合では棄權を刺戟する情況が異つてゐる。

2、劇的興味の割り合に少ない自治體の選擧は棄權率が高いこと。

3、市民の內老人と若人とは一番多く選擧しなかつたこと。

4、棄權した多くの理由のうちで、無關心と怠慢とは全體棄權理由の五分の二以上であり、病氣、不在の如き身體的困難が四分の一、法的、行政的障碍が八分の一、政治嫌惡その他はその殘りの部分と云ふ割合ひになつてゐる。

我々は棄權の理由について上述して來た。これによつて現代の政治、特に社會生活の重要な一部分を爲すところの選擧過程に何が動いてゐるかの局部的考察を爲すことを得た。けれども尙こゝに殘された問題がある。それは棄權の統制の問題である。棄權者を一概に立憲國民として緣なき衆生だと云つて一蹴し去るものがあるが、それこそ非立憲的だと云はなければならない。我が國の諸大都市に於ける五割前後の棄權、及び男女普選國に於ける四割以上の棄權の統制は代議政治上の重大な問題でなければならない。

棄權の統制の方法は、各々の情況に應じて考察されなければならない。或るものは單純で、或るものは頗る複雜である場合がある。投票場が輻輳してゐたり、開場時間が不適當であると云ふやうな單純な場合はその解決は容易である。又不在者の棄權などは、廣義の不在投票法を設けることによつてそれを矯正して行ける。一層困難な問題は投票の否定、選擧に關する無智、臆病、一般的或ひは特種的無關心について起る。議會政治に憎惡を抱らてゐる種類の投票否定に關しては別として、選擧に關しての無智、臆病、などの棄權は選擧に關しての通告の改善及び啓蒙、啓發の講演會などによつてその障碍を取り除くことが出來る。一般的無關心は投票者の氣分、利害關心、趣向などから起る諸要素を廣範に含み、習慣的棄權から一時的喪失までの間に幾つかの形相がある。これ等のものには社會的教育、學校教育に於て政治教育を高調する必要がある。シカゴに於て年少有權者に棄權者が割合に多かつたことは彼等に政治教育が缺けてゐることを物語るものである。我國でも有權者の年齡二十五才が更らに將來十八才にまで低下して行くことは近々に實現するであらうが、そした場合には尙のこと注意すべき事柄であらう。教育が支配階級的意識からにしろ、被支配階級的意識からのものにしろ、何れにしろ、政治教育の必要の認識がいやが上にも强要される。

我々の社會的、經濟的生活の正しき認識は必ず政治行動に反映するものであると云ふ原則は政治教育の骨子である。尙思ひ切つた棄權の矯正方法に『强制的投票』もある。それは現在ベルギー及びチエツコスロバキヤに於て行はれてゐるもので棄權者に罰金を課し、或ひは選擧權を剝奪することによつてそれを處罰して行かうとするものである。（一九二七―一〇、一）

普選第一戰の總決算的八面評

此の際に感じた事

田川大吉郎

一

此の際の普選、即ち縣議の選擧の經過、成績に就て、私の感じたことは、相變らず「金」の多く使はれたことであつて、投票數の少かつたことでありません。

投票は、有權者の義務には相違ありませんけれど、氣の向かない候補者に投票せず、已み難い故障のため缺席することは、許さるべきであります、且、それが餘りに少かつたと申しますけれど、イギリスの地方議會の選擧などに、こんな割合の例は常にあります、要するに投票は其の自發に待つべきもの、強ゆべきでありません。

たゞ「金」に至つては、法律の規定を、固く守られ、嚴しく取締らるべきでありますが、相變らず、亂雜なこと、法定額の範圍以內で選擧を了した者は、九牛の一毛しか無つた樣です、初めから之をくゞるつもり、若くば之を無視してかゝつて居るのだから溜りません。

日本人は、どれだけ法律を守る民であるか、自分の作つた法律を、自分で守る責任、道義を重んずる民であるか、そこに疑問がありませう。

二

それよりも、此の際の地方議員の選擧に、兩大政黨が血眼になつて相爭はれた有樣を、變だと思ひました。

兩大政黨は、中央政治の進步、經綸、計畫を目的として起つたものである、兩大政黨共に、地方自治の發達を希望し、主張して居るものである、然るに兩大政黨とも、其の地方自治を根底より亂る無理、横着の運動を此の際に敢てしました。

內閣總理大臣を始め、內務大臣等が、此の際中央の任務を放擲して西に東に驅け廻られたことなどは、格別目につきました。

彼等は、他人がやるから、自分達もやる、それが習慣になつて居るからやらねばならないとだけ申して、これはいゝ事であるからやるとは苟めにも申しません、いゝとは思はないけれど、他人がやつたからやる、これでは、改善の計畫刷新の意氣はどつこにも無いわけでせう、日本には、いつも新政府は無いといふことになつて、誠に變に聞へます。

三

それよりも、無產政黨の爭ひが、目立つて目につきました

彼等は、合すれば力を成すといふことを信じて立つて今日の運動を爲して居る者である、何故に、あんなに、ばら〱の爭ひをしたのでせう。

今に昔、自由黨、改進黨の起つた初めには、兩黨自身が、二つに分立すべきでない、理由を能く承知してゐました、中には兩方の會合に臨んだ人もありました、けれども其の後の彼等の爭ひは次第〱に烈しくなり、到頭、犬と猿と全く相容れない間柄と目さるゝに至りました。日本の憲政のため、これ程、無念な事はないと、しば〱嘆かれたものであります。

その兩黨の間に、水をさしたものが無かつたでせうか、有つたとすればそれは誰でしたらう、私は、無產政黨の諸氏が、その新興運動の初めに當り、又しても、昔の自由改進の二の舞をなさるのでないかと危んで居ります。

プロレタリアートの立場から

佐野學

貴重な慘敗　今回の選擧戰で勞働者農民の當選者が少く、專制勢力と結托する大資本の黨が壓倒的多數を占めた。だが貴重な慘敗だ。吾吾は專制的支配に對抗して大衆の政治的闘爭力が烈々と燃え立ちつつあるを認める。問題は何人が最も正しく出發したか、何人が最も豐かな發展性を示したかだ。

唯一の反對黨としての勞農黨　專制主義と帝國主義との抱合した日本の社會は莫大な矛盾を含んでゐる。勞働者、農民、小市民の直接の生活過程からの不平反抗は當面において政治的自由の獲得といふ統一的目標の下にのみ組織化される。勞農黨は精確にこの契機を把握し且つ勇敢、忠實に戰ふことに依つて最も正しい出發を遂げ、そして强烈な發展性を示した。これが同黨が無產階級内の政黨のなかで壓倒的に優勢である所以だ。

日勞黨の議會主義　ヨウロッパの社會運動史に出てくる日和見主義を型みたいに示したのが日勞黨だ。選擧前の同黨機關紙は氣狂ひのやうに投票第一主義を唱へ、勞農黨は當選者が少くて今に分裂するだらう、といふ卑劣な虫のいゝ豫想をしてゐたが、それは今日同黨自身のことになつたかに見える。

社會民衆黨　同黨は大衆の直接の生活過程の苦痛に立脚して宣傳、煽動を試みなくて、將來の美しい夢を說いて大衆を引き付けようとして失敗した。同黨は、資本主義末期に必然に現れる小ブルジョアの特殊な自由主義運動を表現する黨であるが、それは前代の自由主義運動のような進步性を持つものでなく、勞働者農民から幾何の支持を將來期待し得るか甚だ覺束ない。

最も反動的な農民黨　女郎屋の亭主を黨首とする同黨は、その指導精神が最も反動的だ。彼等は勞働者と農民とを敵對關係におかうと欲してゐる。農民の黨と稱してゐるが、實は貧農を搾取する富農の黨だ。しかし富農は特種の黨を作るよりも、大資本の黨を通じて自己の利益を增さうとするのが帝國主義時代の特色だ。この時代錯誤の黨は將來、正體をあらはして政友會あたりに併呑されることと思はれる。

棄權について　ブルジョア新聞は棄權率の多かつたのは政治教育の不足からだといふ抽象論理で片付けてゐる。だが民衆が政治的自由殊に選擧の自由を奪はれてゐるからこそ棄權者が多かつたのだ。供託金、罰則、干涉、集會言論出版の自由の剝奪のことに想倒せよ。殊に大都市では多くの工場勞働者は工場主の意識的妨害のために工場から投票場に行かれなかつたのだ。先づ選擧の自由を與へよ、言論集會の自由を與へよ、しからば棄權率は激減するのだ。

次の議會鬪爭　この次にやるべきことは來るべき第五十四議會の解散請願運動でなければならぬ。新しい民衆代表者の現れない前に、この最後の制限議會がいかに惡ラツな民衆壓迫の諸手段を政府、與黨、野黨の狎れ合で作りあげるかは、第五十二、第五十三議會が十億圓の大搾取を安々と民衆に課したことを考へて見れば明かだ。日勞黨其他の黨に屬する大衆のみならず、勞農黨の大衆も政治的自由の獲得の鬪爭がいかに切實なものかを今度の府縣會戰で現實的に學び知つたであらう。この解散請願運動の鬪爭を徹底的に戰ひ得た後においてこそ、次の總選擧に最も正しく戰ひ得る。

僞瞞に充ちた普選法

細　迫　兼　光

勞働農民黨の選擧戰は全政治鬪爭の一場面として、日常鬪爭の綜合せられた一舞臺としてのみ戰はれた。だから對選擧方針は從來の一般鬪爭方針と毫も變る事なく、一方に猛烈な日常鬪爭の繼續展開と共に徹底的の政治的暴露が一段と熾烈に敢行せられた。そこには投票の爲めのみの何物も行はれなかつた。此の態度は根本的に他の諸々の政黨と異る所であつた。勞働農民黨は、その逆宣傳の樣に『投票など問題にしてゐない』のではなかつた。ただ常にそれよりも大切なものを忘れる事はなかつたのである。

我々は此の選擧戰に於て、既に我々の指摘し戰ひ來た所ではあるが、より明確に普選法なるものが如何に僞瞞に滿ちたものであるかを痛感した。年齡、住居等の制限、運動員資格の制限、保證金制度の不當、等々は如何に無產階級の力を剝奪してゐるか、逆に此等の制限によつて如何に無產階級の力の伸張を妨害せんとしつゝあるかは多言の必要ない程明瞭である。更らに心得がたきは官憲の得手勝手な法規の解釋である。一例を擧げるならば福井縣の我黨支部の書記長は、それが黨公認候補者と隷屬關係あるが故にと稱して、當然第三者として何人にも許されてゐる演說を候補者と同じ會場に於て行ふ事を禁ぜられた。更らに辯士等の辨當代等の支出は運動費の支出にして事務長の權限に屬すとの理由によりて辨當を買ひ入れる事を妨害し辯士等は夕食もとれず汽車にも乘れず夜中の二時に峠を越してヘト〳〵になつて事務所に歸つた。更らに演說も連續して出る事を禁じた。一體何回以上演說をやつてはならぬとか、中斷せられゝばよいが連續してはいけないなどと何處に書いてあるか。

更らに干涉に至つては枚擧に暇がない。一二の例を擧げれば、既に內務省に於て檢閱濟のポスターが地方では殆んど禁止せられた。宣言書等の頒布禁止は數限りなくある。大阪の我が黨候補者の事務所は一

齊に臨檢せられて、ビラ、ポスター、立候補宣言書、黨の推薦狀はことごとく差押へられた。演説會の注意中止、辯士の檢束は、これ又枚擧に遑がない。ある支部では十六回の演説で中止が四十八回あつた。

棄權の多數なるは、當日が公休でなく、投票者に手當制度なき事と、官憲の無謀なる壓迫の爲めである。都市に於て特に棄權多き事はその雄辯なる證據である。

勞働農民黨は前記の如く投票の爲めのみの運動としては何物をも爲さなかつた。然し我が黨に集つた投票は既に十萬を突破してゐる。之れわが黨の指導精神と、闘爭方法との如何に正しきか、民衆は如何に民衆の利益の爲めに日常不斷に果敢なる闘爭を爲すもののみを支持するか、如何にニセ無產政黨幹部の指導精神が民衆を裏切り或は誤り、無能無力であるかを明に示すものでなくて何であらう。當選第一主義者から見れば明に失敗といはれる鳥取、神戸、奈良等の如く當然當選出來る所から二人を立候補せしめた事すらも失敗とは思つてゐない。

我等は此の選擧の結果益々果敢に、十八歳以上の男女に選擧權を與へよ。軍人官公吏に政黨加入の自由を與へよ。言論集會結社印行の自由を與へよ、——選擧自由の原則の獲得。政治的自由の獲得の爲めに闘はなければならぬ必要と責任とを感じた。我等はそれを敢行するであらう。

不徹底の敗北

高畠素之

政府黨でありながら政友會の成績が餘り香ばしくなかつたのは、政友會の態度が善にも惡にも徹底せず、半善半惡の民政黨的デモクラ傾向にかぶれた結果と思ふ。それにかぶれる位なら、本家の民政黨の方がマシといふことになる。既成無產黨の中で勞農黨が比較的よかつたのは態度がキリッとしてゐて刺戟を好む現代人の興味に副ふ所が多かつたからと思ふ。右翼といふ奴は國家主義的に徹底して政友會などをも顏色なからしむる點まで行かない限り無用の長物、ただのデモクラなら民政黨だけで澤山だらう。何もかも、露骨に極端に走つたものでないと、現代人の趣好に副はない。棄權率が多いのは、貧乏人は選擧どころでないと考へるからで、既成無產政黨の非民衆的惡趣味ではこれをどうすることも出來ない。

團結・組合・供託金

北澤新次郎

○

過般の府縣會議員の選擧は既成政黨にも又無產政黨にも幾多の暗示を與へた點がある。又我等が痛感した處を二三述べて見よう。

一、從來の府縣會議員の選擧と違つて今回のは普通選擧制で、之れ迄參政權を附與せられなかつたものが、新たに所謂「淸き一票」を所持するに至つたと稱せられたが、其れは誠に結構な事であるが、一方立候補せんとする者に金錢的の條件をつけた事は甚だしく遺憾である。即ち二百圓の供託金を條件とした事は普通選擧の根本精神に相容れな

いものである。既成政黨の人々は二百圓位の供託金に困難を感じないかも知れないが、無産政黨の者にはこれ丈けでも非常の苦痛である。まして選擧に際して演說會場を借りたり、ポスター代、交通費等が多少でも必要であるのに、二百圓を供託しなければならないと云ふ事は尠からざる困難を感じたに違ひない。此の點は來春の國會議員の改選に際して尙更ヨリ大なる苦痛を感じるに違ひない。即ち二千圓の供託金を先づ以て用意しなければならないし、又其れはやゝもすると返還して貰へない事になるが如きは極めて不合理である。尤も此の供託金制度は無暗な立候補を防止する意味で出來たものかも知れないが、其れは何んとか他の方法で制限して貰ひたいと思ふ。

二、無産政黨の當選率は立候補者數から云へば不成績であつたに相違ないが、しかし數丈けで其の成功不成功を論ずべき事でない。兎に角從來無産階級の代表者が地方議會に殆んど出て居なかつたに比較し、今回三十名近い者が新に參加した其事實其のものが重要なる政治的意義があると思ふ。即ち無産階級は將來の我國の政治的勢力の推移に於て主要なる役割を爲す可能を現實に立證したものであると考へる。

三、本來から云へば無産階級を代表する政黨は單一で、團結して其の共同の敵である既成政黨に對抗すべき筈のものが、四つにも劃れてしかも相互に相反目、抗爭して居る事は非常に不利である事は何人にも理解せられる處であるが、其の當然の具體的な結果を今回の地方議會の選擧に依つて立證した。共同の敵を前にして、兄弟同志打を尙繼續する以上無産政黨の政治上の勢力は到底伸暢する可能性がない事を如實に示した。之れは無産政黨の總べての關係者が最も反省すべき點である。

四、無産政黨が政治上の勢力を增大するには、其の背後に組合の强固なる組織がなければならない事も判明した。今回の選擧に於ても從來組合の組織が確實に出來上つて居る處では、皆成績が好良であつた。之れは最も當然な事であるが、今迄は動もすると忘れられがちな事であつた。

無産政黨の分解

永井柳太郎

一、第三黨として最も大なる未來を有するは、恐らく勞農黨でありませう。他の無産政黨には、それぞれ分解作用が行はれて、階級鬪爭を主張する者は次第に勞農黨に合し、穩和派は、革新黨と類似の運命に遭遇するではないかと考へます。

二、縣議戰には從來とても棄權が多い。これは候補者が多く、而かも其間に優劣が少いので、誰が當選してもよいと云ふ感じがあること、それに智識階級が現代の政爭に愛憎を盡かしつゝあること、新有權者中未だ權利の價値を自覺せざる者少からざること等が今回多數の棄權者を出した主要な原因でせう。

地方普選を體驗して

片山哲

未だ、本部の方へ、詳細な報告が到達してゐないから、極く簡單に感想を書き誌すに止めやう。

【A】實戰に臨んでの感想

イ、地方の民衆の頭のうちに、既成政黨の勢力が、因襲的惰性としてコビリついてゐること――最も端的にいふなら、マアマア理窟は理窟、長いものには卷かれろといつたやうな、事大思想が可なり、根強いこと

ロ、勞働組合や農民組合が組織されて、經濟行動、政治行動の理論が組合の講習會研究會に依つて徹底されてゐる地域は別として、然らざる未組織大衆に對しては、政治的訓練、無產政黨運動の主旨が容易に徹底されざること

ハ、既成政黨は殆んど言論戰を行はず、言論戰においては全く既成政黨は慴伏したる觀を呈したのは、實に痛快であつた。しかし、言論戰に依つて未組織大衆が漸く啓蒙せられ、從つて民衆黨の希望が既成政黨のそれを凌駕せむとする形勢を誘致したる時期に、既成政黨が惡宣傳を行ひ、爲に當然、獲得すべき投票を失ひたる觀があること

ニ、勤勞しつゝ選擧運動に從事する關係上、支部幹部が擧つて陣頭に立つて奮鬪する場合は極めて稀有の事であり、この點既成政黨に比して可なり不利なること

ホ、投票日が公休日でない地方は勤勞階級の棄權が多い、又、勤勞階級の住居と投票場との道程が餘りに遠方なる場合には、自然棄權率が多いやうである

ヘ、既成政黨は經費に何等顧慮せざるもわが黨は經費の關係から、宣傳費も充分支出することを得ざる立場にあること

【B】結果に就いての感想

イ、わが黨から公認候補三名當選、應援候補二名當選し、少數ながら地方議會において、勤勞階級の政治的言論が高調されるつは、誠に喜ばしい事である、殊に總同盟會員たる塚本重藏君が大阪から最高點で選出されたる如きは、明かに勤勞階級の政治的擡頭を裏書すると共に、他面、來るべき總選擧地盤の確實性を實證したものであらうと信ずる

ロ、無產政黨は選擧前まで、トモカクも四つの對立が明確であつたが選擧の結果(a)民衆政治の確立を主眼とする潮流＝社會民衆黨に代つて代表、(b)ロシア式の勞農獨裁を目標とする潮流＝勞農黨に依りて代表、との二大對立への傾向が漸く顯著になりつゝある事實は否定出來ない

ハ、無產政黨の出現と選擧運動への參加とは、長らく、叫ばれ來たつた選擧界の革正に就いて、絕大の貢獻をなした事も、否定することの出來ぬ儼たる事實である、無產政黨は投票買收を絕對になし得ない、從つて自然に選擧界の革正が出來るわけだ

ニ、勞農黨は、勝利を誇つてゐるやうであるが、曝露一點張りの共產派としては、奇利を占めたに過ぎない、各國の共產黨が、その成立の當初において、鳴物入りの空騷ぎから、拾ひ物の投票を獲得したとその軌を一にしてゐる、大衆の自覺は

決して、あのやうな無恥さには、いつまでも欺瞞されないであらうことを特記しておく。

最左翼の壓倒的勝利

猪俣津南雄

今度の選擧の戰績は、謂はゆる普通選擧なるものが實は甚しい制限選擧たることを最も赤裸々に暴露した。大阪その他の工業都市における多數の棄權は、「政治教育」の不足の爲ではない。勞働者が選擧日に休日を與へられなかつた爲である。無產政黨に對する壓迫は言語に絕した。しかも一切の制限と拘束と暴壓にも拘らず、無產政黨中、最左翼の勞農黨の勝利が壓倒的であつたのは何故か？　政治的自由の爲に最も勇敢に戰つたからである。勞農黨は、ますます〱その戰ひを押進めると同時に、今後は特に工場地帶の投票獲得に努力するであらう。

政治教育の缺乏

高橋龜吉

一

無產政黨が幾つにも分れて政戰に立つたのであるから、同志打ちのため多くの落選者を出すであらうと云ふことは、初めから、氣使はれたことであつた。しかし實際の結果を見ると、單に、勢力の二分乃至三分で落選したと云ふ事實の外、對立した一方の候補者をワザと落選せしむるために、たゞそれだけの目的を主として、內輪喧嘩をやつたと云ふ地方も可なりあるとかにて、この情勢をこのまゝ押し進めて行くときは、來年五月の總選擧には、更に、下劣な內輪喧嘩が激成されはしないか。ツマラない私情や感情を捨てゝ、此際、共同戰線を張る方向に努力することの必要は、誰しも痛感したであらう。唯だ問題は、如何にせば、或は共同戰線を布き或は合同をすることが出來るかである。この點になると、なか〱面倒らしいので、要するに、各派が現實に教へられて、御互に步み寄る時期を待つ外はあるまい。が、兎に角、總選擧後に於て、無產政黨各派の共同戰線乃至合同問題が擡頭するであらうことは必然の情勢であらう。更に、從來、この種の企てが、幾度か企てられながら、結局總選擧に於て、各派が現實に敎へられるのを待つ外致方なしと云ふに、大勢が落ちついてゐたのであるから、この方面からも亦、斯樣な氣運を促進するのではあるまいか。

二

しかし、私を以て見れば、無產政黨間の同志打ちは、必しもさう悲觀しない。何故ならば、なる程、一方には落選者を多く出すが、他方には、各派互に必死となつて政戰を行ふから、全體として見れば、無產政黨の進出は、遙かによく國民の中に行き渡るの理であるから……この立場から云へば、今度の總選擧に於て、無產各派が同志打ちをやつたことは、必しもその全部が無駄であつたわけではなく、之を永い目から云へば、却つて、國民の間に無產政黨の主張をよりよく普及せしめたわけで、却つて、好結果を納めたことになるかも知れぬ。然るに、實情を聞くに、田舍に於ては、民衆の政治教育の不足の結

果買收戰が依然旺んで、このため、既成政黨から可なりに切り崩されてをると云ふ。更に、無產各派の選擧演說すらが、聽衆に媚びるために、可なり低級な場あたりなものに、墮したものが少くないらしい。私自身、二三の場所で應援演說をやつたが、矢張り、理詰めな話は不評判で活動寫眞でも見に來た氣分の場あたり演說が受けると云ふ有樣である。

私の、一番、痛感させられた點は此の點であつて、これでは仕方がない。更に〱民衆の政治教育が必要だと云ふことを、ツク〲と考へさせられたのである。蓋し、われ〱がいま無產政黨に期待する所は、その目前の當選者數ではなくて、その背後に、どれだけ、無產政黨の綱領政策を理解し共鳴してゐる大衆がゐるかであるからだ。

ポスター戰是非

清瀨一郎

普選法は先づ成功といつてよい。戶別訪問や、投票所附近の米搗バツタがなくなつただけでも一大進步である。これからの選擧はポスター戰となりそうである。こゝで考へさせられるのは、畫家か何かの投票ならばポスター競技も良からうが、政治家の適不適はポスターの意匠だけでは判り兼ねる。結局將來は政府より機會均等的に各候補者の政見を公示して、國民の判斷に訴へ、個人的の運動を禁止することに進まなければなるまいと思ふ。

情熱なき言論戰

石井滿

僕はさる關係から秋田地方に應援演說を依賴され、投票日まぢかの所謂白熱戰を視察することが出來ましたが、「これが待ちに待つた普選に依る選擧か」と疑ひたい程情熱のない言論戰の行はれてゐるのに少なからず幻滅を感ぜざるを得ませんでした。

×

言論戰に情熱のないのは、知識階級が總立ちになつてゐないことがその一、無產勞働の人々がバラ〱になつてゐることがその二の原因であると考へました。

さらにまた、この新興勢力とも稱すべき團體が生命にかけても主張すべき具體的の政見とも見るべきものがないのが大に物足りませんでした。かくして地租委讓、教育費負擔と云つた既成政黨のお題目のみが賑々しく論ぜられてゐたのも、大に興ざめたことです。

×

せめてこれが大正八九年ごろの、言論の熾んなりし時代に斷行されたならば、かなりの衝動を各方面に與へたかとも思はれますがかく時代精神が沈滯してゐるのでは仕方がありません。

×

十年に一度國運を賭して戰爭をした國民としては、われ等の生活そのもののためにも、この選擧と、來るべき總選擧とは一大奮鬪を要す

ることと思ひます。以上

戰術戰策上の修正

前田河廣一郎

無産階級の政治的鬪爭にまで燃燒化されなかつた地方無産階級の多かつたことが——當然來年度の衆議員選擧について重大な戰術策戰上の修正又は集中に從事すべきことを、運動當事者のみならず全無産階級に警告したものと思はれます。尤も一府一道六縣が控除されてゐましたから、多少發足の氣勢に缺ける處があつたかも知れないのですがだが無産政黨の共同戰線は假令コムミユニスト・インターナショナルがどういふ意見にしろ、日本の支配階級が曾て之を許さなかつたことなので、現段階に於ては、三黨分立にしても仕方がないと思はれます。ブルジョア政黨は舊樣に依つて胡蘆を描けるに過ぎず、只資本支配の勢力化の顯著なるを示したことが思ひ併はされます。

誤まれる見解

植原悅二郎

第一回の普選實施に於て勞働黨の當選率の少なかつたことは殘念であるとか、又は大阪、京都、神戸、名古屋市等の如き、大都會に於て四五割の棄權者を出せしことは普選の價値を損ずるものであるとかいふが如き批評をなすものがあるが、之れは誤まれる見解である。普選になつたからといふて、世の中のことはさら俄かに激變すべきものでない。さういふことがあつてはならぬ。普選の効果は三四回の總選擧を經て後現はれべきもので、第一回の普選實施に於て急激なる變化を示すと思ふ斷定は誤つて居る。殊に縣會議員の有權者は從前に比し大略二倍增加せしのみである。如何に選擧資格が物件本位より、人間本位に變はりしとて、之等の人の構成する社會は根本に於て更に變化して居らぬ。されば選擧の結果のみが著しく變化すべき筈はない。

普選の結果は大體に於て良好であつたといはねばならぬ。有權者が非常に多數になりしと選擧の取締りが嚴重になりしとの爲めに、今回の選擧は主として言論文章に依つて其勝敗を試みられた。而して中立候補が多く失敗し、全國を通じ二大政黨の分野を一層明瞭ならしめたことは、立憲政治發達のために喜ぶべき現象である。小黨分立より立憲政治により多く弊害を釀すものはない。何としても立憲政治の健全なる發達は二大政黨の對立に俟たねばならぬ。普選に依つて更に之の體系の紊されざりし事は、國民一般の政治的進歩を物語るものである。

都市に於ける棄權者の多きを見て普選の價値を論ずるが如きは立憲政治の眞義を解せざるものである。選擧權を有するが故に、必らず之れを行使せねばならぬといふ理由はない。選擧者が其必要を感ずる場合、之れを行使すればよい。之れを行使しても、行使せざるとも、其政治的結果に於て同樣なりと、有權者が思考する場合、敢へて之れを用ゆる必要はない。殊に都市の生活に於ては、市制の關係上、縣治の影響を受けることが少ない。現在の縣會議員の職權は非常に局限され

て居る。それ故に都市の住民が府縣會の選擧に多くの興味を持たざるは當然である。されば都市に於ける棄權率の多きは、主として現行府縣制の欠陷に基くものにして、普選の價値に關係なきことである。

普選になつたからとて俄かに勞働黨の縣會議員が多數出來るべき筈はない。我國の勞働者間には、まだ統一されて居る運動がない。我國の勞働運動は、まだ勞働者の指導者の運動時代で、勞働者自身の活躍時代でない。それにも不拘、二三十名の勞働黨員の當選したる事は彼等に取つては大成功である。普選の實施に依らざれは勞働者が地方自治體に於て斯る地步を占むる事は出來ぬ。之等は普選の効果を顯著ならしめたものである。

斯く普選の結果各方面に亘り、相當の効果を現せしのみならず、之れによつて急激なる變化を示さず、我國民の政治的堅實性を立證し、而かも何等の弊害を釀さゞりし事は普選の主唱者たりし我々の深く悅ぶ處である。

一無産政黨への結束

小川未明

今日の議會政治を目的として行動するには、今日の大衆の思想もしくは感情、その他の生活狀態を考へなくてはならない。その點に於て、急進か、漸進かいふことも問題になるのである。さきに、單一無産政黨の出現を要望したものは、既成勢力に對する手段としてゞあつた。共同の敵を忘れて徒らに理論鬪爭をして、四つに分裂した結果が、今日の府縣會議員の選擧に現はれたる結果である。單一無産政黨が、不可能なら、せめてこの際、左、右の二つに結束する必要がある。しからざれば、この次無勢力の政黨を信頼せずして、棄權する者が多いにちがひない

國民は政黨政治に期待せず

高島米峰

普選々々と、御大層に觸れ廻はりはしたが、實は、多少、選擧權が擴張せられたといふにしか過ぎないのであつて、吾々の考へて居る、眞の普選を距ること、頗る遠いものである。從つて、その第一回の府縣會議員選擧の結果が、謂はゆる新興勢力なるものが、殆と認められないと言つてもよい位の程度にしか、認められなかつたので、一向普選らしい氣分を發揮しなかつたことは、寧ろ當然である。

たゞ一つ注意すべきは、棄權者の甚だしく多かつたといふことである。これは、有權者の政治的自覺が、足らないのだと考へられるし、或は又既成政黨に愛相をつかし、さりとて、無産政黨でもあるまいといふやうな、超然派が多くなつた結果とも見られないことはない。しかし、棄權者が多かつたからと言つて、直ちに、普選尚早論を蒸し返さうとするものがあるならば、その近眼、眞に笑ふべきである。

イヤ、逆に、性に基づく差別待遇を撤廢して、男女共に、成年に達したものは、選擧權も被選擧權も、共にこれを有すといふ、眞の普選を實行し、實物に依つて政治教育を行ひ、以て、國民の政治的自覺を

促すのが、最も急務ではあるまいか。（昭和二、九、三〇）

注意に値する點

青野季吉

こんどの府縣議選擧經過や結果を見て、いろ〱考へさせられるが、中でも無產諸政黨の中勞働農民黨がいちばんいい成績を示したことは注意に値する。政府の壓迫もファシストの妨害も最もひどかつたこの黨が、最もいい成績を示したのは、勞農大衆の意のある所を知るに足る事實だと思ふ。當選者から云つて無產者政治勢力の反映が極めて微弱のやうであるが、しかしこんどの選擧全體には一方に無產者政治勢力の擡頭があるといふ事實が強く反映してゐる。その意味でそれは立派に政治の舞台へ乘り出したと云つてよい。この選擧戰卽ち民衆が政治的に興奮してゐる場合に、無產者政黨がどれだけ「實際の」政治勢力をかち得たか、それが寧ろ大切であるが、いまははつきりとは分らない。

投票場を増加せよ

內ヶ崎作三郎

一

從來の府縣會議員の選擧は多少の除外例はあるが、言論戰は殆んど無かつたといつてよろしい。それは市郡內の有力家が集つて候補者を選定した場合が少くなかつたのである。されば府縣會議員の選擧には注意する人々があまりなかつたのである。

然るに此度の選擧は全國注目の府となつた。これは普選第一回の選擧であつたためでもあり、且つ明年の衆議院議員選擧の前哨戰であり、瀨踏みであるからでもある。

府縣會は地方自治體である。何故に中央政黨が之に熱中したり[illegible]したりする必要があるかといふ批難もある。

府縣會は市町村會のごとき比較的完全なる自治體でない。市、町、村、長は市、町、村、會で公選せられるが、府縣知事內務部長警察部長、學務部長は中央政府の任命に係るものである。超然內閣、藩閥內閣、官僚內閣、中間內閣の時代は一場の夢と消えて、目下は政黨內閣の天下である。憲政常道論が元老にさへ支持せられる大勢である。政黨內閣の交迭と共に府縣會の首腦部は殆んど全く變るのである。また府縣會を通過した議案でもこれが實現をはかるためには中央政府の助をえなければならぬことがある。而して中央政府の基礎が政黨であるとすれば、府縣會と政黨との關係を無視することが出來ぬ。與黨も在野黨もこの度の選擧に腕によりをかけたのは理の當然である。

とにかく民衆は著しく言論戰に興味を持つて來た。大正十三年の衆議院議員の總選擧よりも遙かに多くの熱心と忍耐と期待とを示した。確かに或る數の候補者は言論戰で勝利を奏した。これは甚だ喜ぶべき現象である。言論戰は都市に於て成功した。郡部に於ては未しと言はざるをえない。しからば郡部の當選者は何を武器としたかといへば言論以外の秘密の手段に訴へたものが少くないやうに考へられる。

或人は言ふであらふ。當局の嚴重なる監督をどうするかと。これは一を知りて二を知らぬ議論である。政府が知事内務部長警察部長をかへた。縣では警察署長を代へた。巡査の配置までも變更した。當局の監督は勢ひ與黨に寛にして在野黨に酷である。これが與黨もしくは準與黨の强みである。言論戰で負けても或る他の方法で勝つことが出來る。如何に普選になつても郡部では理想選擧は甚だ六ケしい。全く困つたものである。しかし言論戰でも相當の成績を收めてゐるから、選擧を重ぬるに從つてこの弊害が矯正せらるるであらふ。

與黨は事務的に於て成功した。手續上の過失は與黨には皆無であつた。之に反して在野黨は絶えずこの瑣々たる事柄のために油を絞られた。與黨は警察と聯絡があつたと解するはわるいといふならば、當局者の注意が豫め行き屆いたことであらふ。在野黨はこの點については少からず消極的干渉を蒙つたやうである。

在野黨が選擧監視員を全國に派遣したことは慥かに善い思ひ付きであつた。これは或點まで成功した。或る地方では官吏は與黨と上官の命令と監視員の訪問との板挾みとなつて全く悲鳴をあげたものもあつたといふことである。

二

大都市の棄權率の多いのは何のためであるか。

第一、投票場が少きに失することである。普選と投票場の數とは正比例して增加しなければならな、。從來よりは幾分か增加したが、その率が足らない。

一案は都市の各小學校を投票場にすればよいといふのである。各學校に學區が附屬してゐる。父兄は子女の通學する學校を知つてゐるから、其處に投票場を設くるは最も適當であらふ。私の考へとしてはそれでも不十分である。選擧は義務である。そのために半日や一日を費さしむるは勿體ない。よろしく二三十分の時間で投票場へ往復が出來るやうにしなければならない。大正九年秋、私はニューヨークで米國大統領の選擧を目擊した。投票場は殆んど、一町四方に一ヶ所位の割合で設けられた。或はクラブに、或は學校に、或はホテルに、或は乾物屋の店に、よく〱適當の場所のない空地の横通りなどには、步道にテントを張つて之を投票場にしたのを見うけた。英國に於ても近來婦人參政權まで與へたので、有權者が多くなつた。ロンドンにては投票場が非常に多くなつたといふことである。

明年の衆議院議員の總選擧には投票場を思ひ切つて增加すべしである。

町村に於ても投票場は少なすぎる。私の見た某町は四千餘人の有權者に對して投票場は一個所に過ぎず、午後五時にも場外に數萬人がまちあぐんでゐた。かゝることは當局の手落か不注意か、いづれにしても糺彈する價値がある。

第二、都市といはず、町村と言はず、一體府縣政に對する興味は足らない。どうせ縣當局の發案するところであるから大した面倒も失政もないだらふと安心してゐる。しかし必ずしもそうでない。或縣では電氣縣營のために多大の縣債で苦んでゐる。詰まり、縣が餘計な仕事を始めたのである。山口縣や宮城縣がその例である。

然るに縣會議員は代議士のやうに報告演說をやらない。そこで、

縣會の重要問題を知つてゐるは少ない。

また府縣立の中學校や女學校や、師範學校や、農、工、商の學校では、公民教育より、法政經濟の一部として各々の府縣政に關して、生徒に相應の知識を與ふべきである。然るに實際はこの事が行はれてゐないやうである。依つて相當の位置にある市民にして府縣政に冷淡なるものが多い。

第三、郡部のやうに或る秘密の手段が用ゐられない。驅り出しが利ず、戸別訪問による親しみがないこと、また、本年は九月の二十四日秋季皇靈祭にして二十五日は日曜なるにより、秋晴の二日休みを利用して、蕈狩りや、入湯や、旅行に出かけた官吏の多かつたことも此度の都市の棄權率を増大した原因であらふ。

第四には、言論戰のために公立學校や建物を開放したことがよいが、更に進んで或る一定の規則の下に路傍演說や屋外集會をも許すべきである。しからざれば普選の精神は徹底しない。

三

要するに普選の賜は莫大である。政府があれ丈の陣立をしてさへ、在野黨の成績の豫想以上なるは何といつても普選の賜といはねばならぬ。

無產黨の擡頭も注意すべきである。同志討や排斥をせねば將來ますます勢力を伸張することであらう。しかし當選者には中々用意周到なる作戰を試みて成功したのもあるやうである。無產黨なるが故に言論戰をのみ唯一無二の武器としたと認められない場合もあるといふ噂さである。

私共の政府當局に對する要求は黨派を超越して買收行爲を極力監督防止することと、投票場を思ひ切つてふやすことである。かくすれば普選は實に我が國の政治史に於ける劃時代的の飛躍である。

無產各派の協定

藤森成吉

無產政黨の候補者の當選が尠かつた大きな理由は、その各派が相爭つた事にあると考へます。此の意味で、來年の國會議員選擧には、尠くとも各派候補者選定の際の協定が是非とも必要です。すでに黨の識者はこれを痛感してゐるやうですから、必ず實現されるでせう。勞農黨の當選者の多かつた事はやつぱり當然です。

議會政治に近道はない

清澤洌

今度の府縣會議員の選擧に棄權者が非常に多かつたのを見て、氣の毒なほどあはてたのは全國の新聞であつた。なにしろ新聞は、七八年も前から、普通選擧は國民の一致した要望なりと書いた。また實際、中には自分の指を切つて、血書して請願するといふ勇敢なのもあつた。普選さへ來れば何でも解決してしまふように囃したてたのが新聞で、何の事はなく『既成政黨最後の鬪へ』とか『新興勢力の擡頭』とかと、朝日が上つて闇が消えるように書きたつたものだ。今度の府縣

會選擧を馬鹿々々しく大袈裟に取扱つたのも、この心理狀態の現はれである。

ところがこの選擧に棄權者が多かつたといふのだから、あはてたのも無理がない。かれ等は今更政治教育の必要を騷ぎだして、何の新聞もこの趣旨の社說で埋つてゐた。けれどもわれ等から觀れば、これが前と同じ程度の藪睨みだ。考へても見給へ、棄權の場處の多かつたのは大阪、神戶、名古屋といふような大都市ではないか。これ等大都市の人間は、どう割引しても先進國の田舍の人々よりも進步してゐよう。彼等の棄權は讃めた話しではないけれども、併し投票しなくても、選ばれた者の統治には服するといふ暗默の應諾があるとは解釋できる。進んで投票による政治革正の熱意は有さないけれども、投票を惡く行使して、濁水に更に泥を投げ込むの惡をなさなかつたことだけは確かだ。

これに對して田舍はどうだ。新聞によつては棄權數の比率が少なかつたことを喜んでゐるものすらあつた。併しこの投票が金で買はれて、日當が出た代價だとしたら、それでも投票數が多かつたことを喜べるだらうか。殆んど公然選擧干涉を發表し、地方官を更迭し、國民を威脅して選擧に臨んだのに、國民は却つて唯々としてこれに投票するのだ。政友會より民政黨の方が成績がよかつたようにいふのは新聞の贔負目だ。數字が何よりの眞實である。時の政府の意のまゝになり、威脅が通用する投票が、かりに十割の投票率があつたからとて大して誇りにならうか。

議會政治に近道はない。國民の教養と常識を如實に反映するのが、良かれ惡かれ、議會政治の特長だ。私は無論普通選擧が敷かれたのを喜ぶ情において何人にも劣らぬ。それは、消極的には少なくとも從來よりも惡くなることのないのは確實であり、積極的には(一)國民教育に何よりいゝ機關であり(二)無產政黨に擡頭の機會を與へるからである。私はこの問題に對しても他の場合における如く樂觀と悲觀の中間にある。

試練としては成功

早川鐵治

選擧のことは餘りに研究して居ません、それだから確かな意見を申上兼升然し普選第一回の試練としては僅かでも無產黨各派に當選のあつたこと丈が先以て成功かと存升始めから無產黨や勞働黨が多數を占めたことは各國にも例なきことであり升。

與へられたる普選

鈴木文史朗

一、結果からいふと、(イ)言論、文筆による競爭が眞面目に行はれる可能性が非常に多くなつたやうに思はれる。(ロ)無產黨がものになりさうだ。(ハ)地方官は今度の選擧に鑑みて、來年の總選擧には更に御用振りを發揮しないだらう。民政黨が勝つかも知れないといふので、中立公平に限ると思ふだらう。

二、經過からいふと、（イ）大都市に棄權の多かつたのは地方人の方が政治にマジメだからだらう。普選が政府から與へられたものであるからでもある。（ロ）反對黨の選擧監視委員は思ひつきであつた。

豫想以上

鶴見祐輔

小生は普選に多大の懷疑と杞憂とを抱き居りしに豫想以上に言論の效果ありしを見て、これで日本も次第に明るくなるやうにうれしく存じ申候

不徹底

花井卓藏

普選の理義十分徹底せざるを遺憾とす。

無產黨の進展

小島精一

拜復、折角御尋ねの件、私數ケ月來病氣のため田舍にとぢ込もつて、一向世間から離れてゐますので、少しも具體的の成り行きを存じません、感想とても、少しも御答へに價ひするものが御座いません、無產黨の人々にはきつと、かなり興味ある戰略上の收穫があつたらと存じますが、それも一向存じません、ともかくも數十名の當選は注目すべき進展では御座いませう。

御答へ出來ないのを遺憾に存じます。

匆々不一

差當つての問題

堺利彥

無產諸政黨の中、勞農黨が飛びはなれた好成績を示した事は、特別な意義を有するものと考へる。然しその勞農黨すら、まだ〳〵幾許も大衆と結びついて居ない事が明かになつた。その原因を切實に探求して從來の過ちを卒直に改める事が、左翼無產黨に取つて、この際最も重要な事だと考へる。謂ゆる極左翼の分裂主義と、宗派的おかたまり主義とが、差當つての大問題である。

社會時評

府縣會議員選擧の跡を見て

吉野作造

先度の府縣會議員選擧の結果につき世人の最も痛切に問題とする所は二つある。一つは選擧取締規程のことで二は棄權率のことである。

新選擧法の取締規定はまことに煩瑣を極めて居る。選擧施行前からこの事は頻りに各方面から訴へられて居たが、實際の經驗は益々その煩累に堪へぬことを立證した。そこで改正の要求もボツ／＼聞える樣であるが、私は規程の煩瑣を難ずる其事には世上の論者と共感を同うするも、然らば何を如何に改正すべきやの點になると必ずしも彼等と同一の步調を取るものではない。何となれば世上の改正論は槪して選擧界に馳驅した者の側から起り或は少くとも彼等の希望に影響せられて作られるものであり、從てその根據には候補者乃至政黨の便宜といふことが橫はつて居るからである。候補者乃至政黨の便宜も之を圖つていけないといふのではない。併し我々の立場として專ら眼中に置くべきは、彼等の便宜ではなくて選擧の目的でなければならぬ。選擧本來の目的を達成せんが爲には、時として彼等の所謂便宜の如き之を顧みるに遑なき場合もあらうではないか。蓋し我々國民の立場としては常に一段高い處から斯種の問題を冷靜に考察して見る必要があるのである。

さて選擧取締規程の改正に關しては私にも具體的の考案がないではないが、一々之を說くは別の機會に讓りたい。茲には讀者の參考に供する爲め唯簡單に改正の方針に關する抽象的原則の主なるものを揭ぐるに止めておかう。

(一)取締規程の多くは選擧人を以て自由な良心のない、他から

誘はるればどんな馬鹿な事でも敢てするでくの棒と前提し、之を欺瞞し籠絡せんが爲に取る候補者側の狡計をば出來るだけ制抑せんとの見地から立てられたものである。だからあゝしても不可かうしても不可と規則が馬鹿にやかましいのだが、考へて見れば、選擧民さへしつかりして居れば之等は本來どうでもいゝものなのである。選擧民に鋭敏な良心の自由があり又事物を判斷するの相當な能力があれば、相手方がどんな狡猾な手段を持つて來ようがさう去就を間違ふ筈はない。況んや各黨の候補者は互に相控制して一方の失態は他方必ず之を天下に明示して呉れるに於てをや。例へば今度の選擧法では極めて細かい規程を設けて戸別訪問を禁じて居るが、選擧民の方でペコ／＼頭を下げて賴み廻る樣な不見識な奴には斷じて投票しないとさへ決めて居れば、戸別訪問なんどは段々やるものはなくなるにきまつて居る。然らばわざ／＼法を設けて之を禁ずるの必要は何處にあるか。斯んなわけで煩瑣な規程の多くは實は選擧民を極端な馬鹿者と前提しての必要條項なのであつて、やがて選擧民の覺醒と共に全然無用となる性質のものである。尤もあつたからとて選擧民の邪魔にはならぬ。選擧民は默つてそしてよく考へて然るべき人に投票しさへすればいゝのである。候補者に對する各般の命令禁令の如きは彼に取つては何の係はりもないのだ。寧ろ斯種の規程あるため戸別訪問などに來られぬ丈けが幸ひだともいふべきであらう。して見れば選擧民本位の論としては、かの煩瑣なる諸規程の如き別に急いで之を改廢すべき實際的必要はないと云つてもいゝのである。但だ之を無用の規程といつたのは選擧法本來の眼目から見ての理論的結論を述べたまでのことに過ぎぬ。一言にして約すれば、選擧民の立場から云へば、あゝしたうるさい規程の存在は格別迷惑にも苦痛にもならぬのである。

（二）初めに遡つてあゝ云ふ規程を作らうかどうかと云ふ問題なら、私は原則として之を無用とする論に左袒する。併し既に制定公布されてしまつた以上は、實際の必要あるに非る限り、別に面倒な手數を繰り返して改正するまでもあるまいと考へる。而して大體論として改正の要求は多く候補者側の希望に發し、その要求はまた理に於て深く顧慮するに足らざる所以は、既に前段に於て述べた通りである。唯茲に一つ考ふべきは、選擧の目的から觀て例外として速に改正を要する點が二三なからうかといふことである。候補者の醜惡なる運動は固より之を抑止して構はないが、所謂角を矯めんとして牛を殺すの譬にもれず、取締りに急ぐのあまり候補者側の正しき活動までを妨ぐることなきやを一應反省して見る必要はある。候補者側の正しき活動

には十分な自由を與へた方がいゝ。それが實に選擧の目的に叶ひ選擧人の便宜にもなるのだ。新選擧法はこの方面に於て餘りに無用の規程を立て過ぎた嫌は慥にある。之等は速に改正を要すべきものであらう。

（三）改正の要求が主として候補者側から起る丈け、特に熱心に改正の叫ばるる個條の中、迂つかり之れに乘つて改正を急いではならないものがあるかも知れない。大體論としては、有つても無くても同じ樣なものだが、例へば特に今次の經驗に於て依て以て從來の政弊を幾分でも阻止し得たと云ふ樣な規程があつたなら、（例へば戸別訪問の禁止の如き）、選擧民の十分なる覺醒の猶ほ未だ容易に期し難き今日、姑く之を存置した方が得策であるかも知れぬ。選擧民を醜惡なる誘惑から保護するに役立つ樣な規程は、之を不便とする者の提説に聽いて輕々に手を觸れてはならぬものと考へる。無論之にのみ賴つて選擧民の根本的覺醒の方途を等閑に附すべからざるは云ふまでもない。

選擧の結果につき一番やかましい問題となつたのは棄權率の意外に多かつたといふことである。平均五割、中には七割以上にも及ぶ處があつたといふ。之を見て世上の論壇は、今更の樣に吃驚し、何れも皆一般民衆の政事に冷淡なるを慨嘆して居る。中には之から論結して一般大衆は本來普通選擧權を要求しては居なかつたなどと說くものすらもあつた。少くとも之を以て政界革正の前途尙遼遠なるの一兆候なりとするの說には輿論のひとしく一致する所の樣であつた。併し之は一概にさう悲觀すべき現象でもないと私は考へる。少くとも斯かる現象を呈せるに付ての責任を徹頭徹尾大衆の無見識に歸するの說は私の容易に首肯し得ざる所である。

之に就て思ひ出すのはラスキの言である。彼はその著「政治學綱要」に於て、抽象的概念を基礎とする先人の政治學說を排し、『多年の經驗は政治に在て理性の作用の案外に薄弱なものなることを吾人に敎へた』と云ひ、又は『大衆は存外彼等自身の需むる所をはツきり頭に入れて居ないものである。否、頭に入れて居る場合でも、示されたる提案が滿足すべきものなりや否やの問題に存外無關心なものである』などと云つた。又斯んなことも述べてゐる。『近代政治組織のすべてに通ずる著しい特色は、一方に民衆の福利を圖る專門家の一群あり、他方にまた其專門家の行動をば結果に於てのみ判斷しその達成の過程方法には殆んど全然無頓着な大衆があると云ふことである。而して政治作用の細目に全然興味を有せざる且又之を知るの餘暇もないこの大衆が、實に一切の最終的決定權を握つて居るのである。

一旦與へたものは後になつて容易に之を取戻すことは出來ぬものだ。ふだんは使はぬくせに取り上げようとすれは忽ち異常の昂奮を見せる。斯う云ふ基礎の上に良い政治を實現して行かうと云ふので、近代の政治は事甚だ面倒なのである』と。斯くしてラスキはこの基礎の上に彼れの新學說を打ち立てようと試むるのであるが、その結論は玆でいま評論するの限りに非ずとして、唯讀者と共に吳々も注意したいのは、政治的に最も發達したと稱せらるゝ英國人を眼中に置いてすら、彼が斯くまで民衆の曖昧と冷淡とを罵倒せねばならなかつたことである。彼はまた別の處で云つた。我々は民衆といふものは與へられた選擧權を常に必ず正しく使用するものと考へてはいけないと。政治に於ける理性の作用の薄弱を說いたのもこゝから來る。して見れば權利の要求に熱心にして而も之が利用に冷淡を極むるは、東西揆を一にするところとも云へよう。否、英國にして猶且つ然り、況んや我國に於ておやと云ひたい位だ。之を要するに、我我は選擧民の理性を買被つてはいけない。棄權率の多いのに吃驚したのは、畢竟謬つて選擧民の行動に過大の期待を繫けた爲ではあるまいか。

そんなら英國でも矢張り我國今次の經驗が示した樣に異常の棄權率に苦んだのかと云ふに必しもさうではない。もう少し棄權率が少ければいゝがと云ふ議論は彼國にもあつた。併し相當數の權利行使者のあるに世間は大體滿足を表して居る。然らば彼に在て斯く棄權率の少いのは何に因るのであらうか。ラスキの言の如く之を選擧民の覺醒に歸し難しとすれば、他にその原因を求めなければならぬ。抑も選擧民自身の曖昧なるは右述ぶる如く英國も日本も同じ事で、今急に之を如何ともすることは出來ぬ。之は漸次民智の一般に進步向上するの趨勢に委せなければならない。併し乍ら差當つてその冷淡なるまゝに放任することも出來ないとすれば、我々はまた何等か別に民衆の惰眠を刺激するの方法を講じて、一時的でも政治的活動の渦中に彼等を進出せしむる工夫をすること肝要だ。英國も日本も民衆の曖昧なるに變りはなくして棄權率の多少にあゝした驚くべき差違を示したのは、實はこの刺激の有無厚薄に因るのではあるまいか。然らば刺激とは何ぞやといふに、間接には言論機關の呼號等も數へられるけれども、直接には候補者乃至政黨の「呼び掛け」だと謂はねばならぬ。假りに之を政治家の積極行動と云つておかう。即ちこの積極行動が民衆に對つて有機的に働き掛けることの如何によつて、民衆の政治的進出の程度がきまるのである。選擧民は本來他から誘はるるまでもなく自ら進んで有效にその權利を行使すべきであると云ふのは所謂机上の空論に過

ぎぬ。放任して置けば棄權するのが事實の當然だ。それが良いか悪いかは別問題として、只その避く可からざる勢なるを認むる以上、棄權率の多い少いは正に政治家側の責任に歸するものと論ずべきではあるまいか。

して見れば今次の選擧に於て棄權率の異常に多かりし事實に付て民衆そのものを責むるの愚なるは云ふまでもなく、主として責任を問はるべきは政治家階級であらう。少くとも斯う云ふ方針を立ててその眞原因を探究すべきものではないかと考へる。

今度の選擧で我々の最も深く關心すべきは、實は棄權率の多少ではなくて選擧權行使者の態度であつたのだ。棄權率の多いのは選擧民の曖昧を證明する事實には相違ない。その限りに於て是も亦慥に我々の一關心事たるを失はないが、ラスキの言ひ草ではないが、之は疾ふの昔に諦められて居るべき筈なのである。之を今更氣に掛けたとて仕樣がない。それよりも一番氣になるものは、折角選擧權を行使した人達が、從來の選擧民がよくやつては我々を泣かした樣に、候補者や運動員の悪辣醜汚なる誘惑に迷はされ、良心の自由を賣つてその頤使に盲從したのではなかつたかと云ふ點である。新選擧權者も舊有權者と同じく滔々として皆小利權に眩惑して良心の操守を棄てて顧みざる底の連中であつたとしたら、彼等が權利の行使に冷淡でなかつたと云ふ事は一體何の役に立つ？マイナスは幾ら澤山集つても要するにマイナスだ。だから棄權率の多い少いは實は此際それ程關心すべき問題ではないのである。關心すべき問題は外にあるのに、世上の論壇が專らこの點のみを中心問題として更に新有權者の態度如何に意を注がないのは、私の甚だ怪訝に堪へざる所であつた。

棄權率の多いと云ふ事を直に悲むべき現象と見るの說を肯定するには、實は次の三項を前提として許さなければならない。（一）新有權者は舊有權者と既成政黨との慣れ合に依て政界の腐敗せしめられて居るの事實に對し意識的に强い反感を懷いて居ること、（二）彼等は深くこの腐敗の原因を除くの捷徑が自家階級の政權獲得の外にないことを信じ、爲に多年普通選擧制の確立を熱求せしこと、（三）從てこの多年の熱望が達せられ普通選擧制が布かれた以上、彼等は猛然としてその積極的行動に躍進すべき筈なること、是れ。無産政黨の一部の人達は頻りにこの事を金科玉條として說き廻る樣だが、成る程お前はいゝ子だと賞め上げて小供の惡戲を止め得ると同じく、大衆の煽動籠絡の目的の爲には結構此上もない說明に相違ない。だが政界の

現實その儘の描寫としては實は之れ程田鱈目の言ひ草はない。だから私は之れ迄も凡ゆる機會に於て屢々說いたのであつた。普通選擧制の實施に過大の期待を置いてはいけない、選擧權擴張の喜ぶべき所以はたゞ新有權者の一團が從來の政弊に染んで居ないと云ふ點にある。而して單にそれだけに過ぎず、その外に積極的に頼もしい所があるのではない、即ち唯白紙であると云ふ丈けを賴みにするのだから、その當然の結果として我々は、一方には彼等までが從來の弊害に侵されぬ樣心配してやるを要すると共に、他方にまた改めてその自覺を促す爲め大に誘導啓發につとめなくてはならぬのであると。同じ骨折りでも從來の有權者は一度悪酒に醉つた經驗がある丈け容易に足を洗ひしめ得ぬが、新有權者はまだ純眞無垢である丈け、骨折り甲斐があらうと云ふまでに過ぎぬ。故を以て普通選擧制の施行を喜ぶ者は、必ずや同時にその喜びを現實のものたらしむる爲の教育的責任を感ぜずには居れぬのである。從て斯う云ふ立場の人に取ては、新有權者が能く投票場に馳せ參じたと云ふことは、それだけで安心の出來る事柄ではないのである。

私は却て斯うも考へる。既成政黨などにモ少し新有權者の中に喰ひ入り之を誘惑するの勇氣と準備とがあつたなら、棄權率はもつと／＼減つたらうと。若しさうであつたら、その投票の大部分は、從來の選擧の場合と同じく、矢張り利權の爲に良心を賣つた結果に外ならぬことになる。それでも世人は棄權率の少きの故を以て之を滿足すべき現象と觀るだらうか。私は敢て棄權率の多い方がいゝと云ふのではない。又必ずしもその率の多きを以て直に誘惑買收の無かつた證據だと說くものでもない。棄權率の多かつたのは何に因るやは別に研究を重ねるとして唯一概に之を憂ふべき現象と主張するの立場に對し、その見當外れなることを抗論したいのである。この點に關し正しき目標を指摘して呉れる者の極めて少かりしの事實には、特に私が多大の遺憾を感ずる所である。

次に私は何故に棄權率が斯くも多かつたかに就て少しく愚見を述べて見たい。

私は先きに棄權率の多少の岐るる所は政治家側の責任に歸することを說いた。詳しく云へば、大衆に呼び掛くる政治家の積極行動が廣汎にして痛切であれば棄權するものは少く、從てまた棄權率の餘りに多いのは夫れ自身候補者側の怠慢を意味するものだと云ふことを述べたのであつた。さうすると斯う云ふ人があるかも知れない、今度の選擧でも各黨とも大衆の投票を得る爲には死力を盡したではないかと。成る程その通りだ。中に

も無産諸政黨の如きは、巧妙なる宣傳と猛烈なる辯論を以て民衆に迫ると頗る深酷なるものがあつた。尤もそれはいろ〳〵の事情の爲に廣く行き渡り得なかつたので、その運動の行はれた限りに於ては深刻であつても、一般にいへば至て微弱であつたと云はれても仕方がない點はあつた。そこになると既成政黨の方は流石に多年の經驗と研究とに基いて全國隈なく運動の手を擴げて居る。故に概していへば、之等政黨者流から一度も誘ひを掛けられたことのないと云ふ様な人は、有權者中恐らく一人もなかつたと思ふ。どんなに少くとも二度や三度は必ず彼等の運動網に引ツ掛つて居る筈だ。故に斯うした外形から云へば、政治家は決して大衆の呼び掛けを怠つてゐたのではない。一票二票を爭ふ候補者に取てこの點に心を用ひざる道理もあり得ないのである。故に單に候補者乃至政黨が大衆に手を擴げたと云ふ外形上の事だけを云ふなら、私も論者と共に彼等の大に努につとめたるの事實を認める。併し私の主として着眼するのは、その呼び掛けに反應があつたか如何と云ふことである。幾ら手を擴げても空中に發砲する様なことでは何にもならぬ。手應えのある有効な努力が合理的に遂行され、從て骨折りに相應する丈けの成績を作ふものでなくては何にもならぬ。換言すれば、一旦大衆に呼び掛けた以上、大衆が眞に之を自分達の代表者とする様な實効のある努力が拂はれたかが問題なのである。斯う考へると候補者乃至政黨の努力と云ふものは、動もすれば空中への發砲に類し、力の大なる割合に案外に無駄なものであつたことに氣が付くであらう。

何故さう云ふ事になるのか。之に付ては各黨派に付て別々に考察するの必要がある様に思ふ。

（一）既成政黨は政友會にしろ民政黨にしろ大體に於て所謂ブルヂョア階級を地盤とする。彼等はその範圍内に於て各々その領域に分ち而して互にその擴張爭奪に浮身をやつす連中である。故に從來の行き掛り上その相互間には烈しく相爭ふとはいへ、ブルヂョア階級の代辯たるの關係に於ては均しくその利害を一にするものである。從て彼等は彼等の地盤とするブルヂョア階級の利害を犠牲にしてまで、一般大衆に迎合することは出來ない。相爭ふ敵味方として既成政黨の双方は、一票でも多くといふので無産大衆にも呼び掛けはする。けれども具體的の新政綱を掲げて堂々と新興階級に訴へ得ざるは勿論、時節柄猜疑心の深いブルヂョア階級の思惑に遠慮して、一般大衆に思ひ切つて接近することをも能くし得ぬのである。斯くして既成政黨は、一般大衆に對して形式上冷淡ではなかつたが、實際上は態度甚だ煮え切らず、序を以て一應の挨拶はすると云ふ位の程度

にとゞまり、事實上主として力を注いだのは矢張り從來の關係に依て結ばれた人達に過ぎなかつたのだ。彼等が選擧場裡に依然優者の地位を占めしは多年の經歷に基くものとして怪むに足らず、あれ丈けの準備と經驗とを以てして、無產政黨を自家の代表として積極的に後援することを知らざる程ボンヤリして居る大衆をば、ムザ／＼網の外に逸し去つたのは、何と謂ても既成政黨の恥辱たるを失はぬ。尤も私は既成政黨がこの點にもツと良い智惠を出し我々を驚歎せしむる程の成功を收めんことを希望するのではない。寧ろ此點に彼等の臆病で無爲であつたことをもツけの倖ひとする。就中その爲に新有權者が在來の苦々しき政弊に捲き込まれる危險から免れ得たことは我々の最もよろこぶ所である。我々は更にこの點を無產大衆の意識裡に明白にし、既成政黨をして益々近づき難きものたらしむる樣努力する所なければならぬ。

（二）無產諸政黨の大衆に對する關係は黨に依り多少の相違あり一樣に論ずることが出來ぬ樣であるが、細目のことは別の機會に讓るとして大體のことを概論するに、何れの政黨に於ても大衆對策の根本方針が確立せず從て頗る準備が不十分であつた樣に思ふ。前にも屢々云つた樣に、大衆は決して政事に緊張して居るのではない。既成政黨は駄目だといへば、大衆の何人もがさうだと答へる。だから大衆は既成政黨所屬の候補者には投票せぬだらうとまではいへるが、彼を抑え彼を牽制せんが爲に進んで無產派の候補者に一票を入れるかどうかは自ら別問題だ。幾ら候補者や運動者やが諸君の利害はこの通り蹂躪され居るなどと怒號しても、見物の大衆は汗みづくになつて居る彼等の姿を面白さうに眺めては只ゲラ／＼笑つて居る。斯う云ふ種類の人に更に有効なる刺激を與へて奮ひ起さしむるは、尋常一樣の方法の能くし得る所ではない。この點に付て無產諸政黨はかね／＼十分愼密の方策を研究確立して居つたであらうか。是が私のひそかに疑問とする所なのである。

この事につき私の常に無產諸政黨の爲に憂ふる所は、既成政黨の常套手段を先蹤とすることなきやの點である。既成政黨は斯うした問題については每時最も安價にして手ツ取り早い方法をとる。從て之が爲に將來どんな惡影響が殘るかを顧みない。所謂目前の目的を達するに急いで百年の大計を疎略にする所に既成政黨の特色があり、我々が彼等を頭から排斥するのも實はこの爲に外ならぬ。就中最近の政友會の如き、黨利黨略の爲めに國家の利益をふみにじつて屁とも思は所、その横暴殘虐眞に唾棄すべきではないか。併し之は程度の差こそあれ政友會に限つたことではない、民政黨だつて過去の經歷に於て決して國民

の前に大きな顔は出來ぬ筈である。何れにしても目前の目的に對しては常に一番の近道を執ると云のが既成政黨に運命づけられたやり方だ。斯う云ふ立場から採らるる具體的の方策に至ては、時宜に依り必しも一律には出でないけれども、最も普通なるは種々の形を以てする利權の提供である。積極的利權の授與もあれば、その不當なる既得の優越的立場の保護といふのもある。要するに之が目前當面の應急的手段としては一番有効な方法なのだ。而して既成政黨は從來之れで地方の有權者と深く結んで居るものだけに、今更之と大に利害を異にする新興階級に向つて憚る所なく秋波を寄せ難いのである。斯うした妙な廻り合せで新興階級が偶然にも既成政黨の誘惑から解放されて居るのは我々の大によろこぶ所だけれども、新に之を背景とし地盤として起つ所の無産政黨が、萬一また彼等と結ばんが爲に既成政黨と同じ様な態度に出づることあらば、我々のよろこびは眞に一時の糠よろこびに終らざるを得ない。問題は即ちこゝに在る。

私は必ずしも無産諸政黨が大衆獲得の方策に於て全然既成政黨を眞似たとは謂はない。少くとも買收請托等の如き忌むべき罪惡に付ては頗るその潔白であつたことを確信する。けれども只彼等は、有形無形兩面の犠牲を主として中央本部より提供すると云ふ方策に出でた點に於て既成政黨の轍に倣はなかつたか。既成政黨なら、少くとも從來の組織を以てしては、此外に行き方はない。併し乍ら本當の政黨は――少くとも有力なる既成政黨の間に介在し大衆を背景として政界の分野に乘り出さうとするものに取ては――一から十まで中央から地方に買ひ出しに出張する様な方法では駄目だ。或る點までは中央が世話を見る必要はあらうが、結局は地方に各々自主的立場を自覺させる様にしなくてはならぬ。演説會の費用をよこせの、宣傳ポスターをもつと送れの、應援辯士の旅費は本部で持てのと、中央から頼まれてやる様な積りで言つてよこす各地方の勝手な注文を一々聽いて居つては堪つたものでない。既成政黨は徹頭徹尾之で押した、そして相當に成功もした。併しそれが爲には莫大な金が要る。是れ彼等が常に金權と密接なる關係を結ぶ所以である。之が爲に國家が暗々裡にどれ丈けの損害を蒙つて居るかは云ふまでもないが、兎に角彼等の本來の立て前が之れなのだから、黨に依て多少の差はあるが、孰れも皆ふだんから相當の財政的準備はして居る。故に無産政黨がまた同じくこのやり方で渡り合はうとするなら、到底彼等に肩の立つ道理はない。概していふに、無産諸政黨は既成政黨の失態を抉剔するには著しく長ずるが如きも、扨て進んで何かやり出す段になると、乾度既

成政黨のやり方を追隨して恥ぢない様だ。單に大衆獲得の方策に付てのみ之を云ふのではない。何事につけても餘りに智恵のなさ過ぎる嫌はないだらうか。

私はこゝで圖らず私の初めに提出した問題に再び逢着する端緒を見出した。即ち今次の選擧に於て棄權率の非常に多かつたといふ問題である。前にも述べた如く、新有權者の多數は概して云ふに既成政黨自身の憚りて敢て近づかぬ所である。謂はば之等は無產諸政黨の勝手に取り去るにまかされた分域なのである。無產諸政黨に取つて之れ程都合のいゝことはない。それにも拘らず無產政黨は指をくはへてボンヤリして居たと云つたら、世人は餘りにその腑甲斐なきに呆れるだらう。併しそれには相當の理由はある。無產諸政黨はいづれも之等の投げ與へられたる大衆を前にして食指大に動いたのであるが、如何せん彼等には之を獲得する爲に唯一つの方策しか持ち合せがなかつた。即ち無意識的に既成政黨の經驗から割り出した地方懷柔策が是れだ。能く考へればこの方策の執るべからざる所以が分る筈だのに、目前の成功を急いでか、彼等には十分之を反省するの餘裕がなかつたらしい。而してやつて見ると之には莫大の金が要ることが分つた。彼等は俄に選擧資金の調達に狂奔した。平素金に緣のない連中がどんなに馳け廻つたとて集め得る金高は知れたものだ。斯くして自然の勢は遂に彼等をして思ふ樣に手を伸ばさしめなかつたのである。詰り彼等は赤貧の分際を以して大金持の眞似をして見たのだ。事功の擧らざるは當然である。それでもあれ丈の成績を擧げたのは一に時勢の賜である。之を俺達の奮鬪の結果だなどと自惚れてはいけない。要するに彼等は最初から肝腎の方針を誤つた。從つて取れる筈の獲ものを我から逃してしまつたのだ。財力の微弱なだけ彼等の張つた網は極めて小なる部分に限られても居る。故を以て既成政黨から見放された大衆は、無產政黨からも顧みられずして、普選最初の大事な選擧だと云ふにも拘らず、而もその顧みられざることを聊も苦とすることなくして、悠々として太平の惰眠を貪つた譯なのである。棄權率の多いのは勿論大衆曖昧の直接反映には相違ない。併しさう迄させなくても良かつたのをさうさしたのは、何と謂つても無產諸政黨の責任と斷定せなければならぬ。

終りに一言する。そんならば今後無產政黨はどうすればいゝのか。無產政黨は第一に選擧費用調達の悪夢から醒めなければならない。もと〱金に緣の薄い連中のことだ。赤手空拳で行け。但し之を看板にするばかりでは駄目だ。金のないと云ふ所に難境もあるが、金がないからこそ本當の恒久的關係が有權者との間に結べるのではないか。固より之は選擧が來たからとて

他に始めて出來る事柄ではない。金で仕事をする既成政黨が、平素は散々國民の面目をふみにじつて置き乍ら、選擧となつて俄に札たば切つても見事に所謂國民の信用を恢復するからとて、無産政黨までが、選擧の時はまた如何樣にもなるなどと安心して、平素貴重な時間を内輪喧嘩に空費し大事な國民的利害の討究を等閑に附してはなるまい。選擧に際して大衆の獲得を確實ならしめんが爲には、平素彼等との有機的關係を十分に開拓しておくの必要があるのである。眼あるものは今度の選擧の經驗で少しはこの事に感づいた筈だ。而して來年の總選擧のことを考へると、之が爲に備ふるの用意は寧ろ今日を以て遲しとする位である。私は呉々も無産政黨の諸君に向つて、當今の政界に於ける諸君の眞實の立場に十分反省せられんことを望まざるを得ない。

無産諸政黨は近き將來に共同戰線を張るだらうか

今度の府縣會議員選擧の結果を彼れ是れと批評して、この苦き經驗を嘗めた以上各無産政黨も今更ながら内輪喧嘩の損なことを痛感し早晩情實を排して包括的共同戰線を張るに至るだらうと論ずるものがある。内部の反目を咎むるの聲は固より昨今はじめて唱へられたのではない。殊に選擧の直前に方つてはこの點頗るやかましく說かれたのだが、四分五裂の形勢は一朝一夕の事でなかつたものと見え、部分的の選擧協定すらが殆んど出來なかつたやうだ。之が無産政黨不振の一原因であり、殊に今次の經驗が何等か斯種の協定ありたらんには必ずやもツと多く收穫ありたるべきを思はしめたとすれば、局外者がこゝに漸く提携協同の機運の到來を想像するは怪むに足らない。況んや共同戰線の必要は多くの無産政黨が亦自ら熱心に主張する所たるに於てをや。然らば今次の經驗は果してよくこの機運を作るだらうか。二三の新聞にはその意味の試みが既に已に始められて居る樣にも書いてあつたが、私はどうも之を信ずることが出來ない。局外の冷靜なる觀察を以て判斷するに、さうした協同提携の機運は今のところ毫末も動いて居ない樣に考へられる。

私共は先づ今日の無産政黨が四分五裂したに就ては其の由來する所決して一朝一夕でないことを知らねばならぬ。冷靜なる批判としては其間に是非善惡の別を說くの餘地なきに非るも、深く事情の推移を洞察して同情を以て之を觀るとき、亦大に之を諒とすべき理由もある樣だ。故に私共は、永く敵なき反目を續けることを遺憾としつゝも、猶ほ彼等が反目の結果として蒙る少し位の損害に屈せず、頑然提携協同に步武を進めないのに格別の不平を有つものでもない。寧ろ何かと云ふと輕々しく提携協同を促がす世上一部の論客に對して、心中ひそかにその觀察のあまりに淺薄なるを蔑んだ位である。私は固より今日の狀態をいゝと許すのではない。併し物の改善には自ら順序がある。相當の基礎工事が出來なくては、上層の粉飾だけに力を注いでも駄目だ。無產諸政黨の今日の狀態を其儘いゝとするのでは固より無いが、輕々しく共同戰線に急ぐの危險を私は却て從來種々の機會に於て說いたのであつた。今の儘では斯うあるより外に致方のないのかも知れぬ。議論は姑く別として、要するに今日の實際に於て、各無產政黨間に共同戰線の機運の毫も熟して居ないことは疑ない。この點に關して今次の選擧に於ける苦い經驗は、世人の安價に期待する如く、各政黨指導者の頑强なる割據的精神を融和する上には、殆んど何の役にも立たなかつた樣である。

然らば我國の無產政黨はいつまでも今日の四分五裂の狀況を續け、結局ブルジョア政黨に漁夫の利を占められる運命にあるのだらうか。尤も無產政黨の人達自身は云ふだらう、今に見ろ、俺達が天下を風靡するの時が來るからと。當の本人には勝手な熱を吹かしておけ。局外の第三者たる私共は、斯くまで相排し相陷れて無用の紛爭に精力を浪費する裡からは、決して無產大衆の眞の後援を賴みとする鞏固なる政治勢力は生れて來ないと考へる。必しもすべての政黨が渾然たる一體を爲すことを必要とはしないが、モ少し無產政黨間に有機的な友誼關係が成り立ち得ぬものだらうか。現在の樣な醜い內爭に沒頭して居る樣では、無產階級の政治運動の前途には何等の光明をも認め得ない。之が若し無產諸政黨の指導者達の心なき我儘から來るものだとすれば、我々無產大衆こそ飛んだ迷惑を蒙るものではないか。

併し結局は協同提携も出來るだらう、又之を出かす樣勉めなくてはならぬ。而して私の考へでは、之を出かす爲には少くとも次の三點に於てモ少し變つた行き方が現はれねばならぬと考へる。即ち左記三項の改善を最少限度の條件として、始めて

無產政黨の正しい連繫關係は、新しい光明の途を踏み進むものと思ふのである。

第一は獨尊的絶對主義が理論上拋棄さるることである。ロシアの影響を受けてか、最近の我國には斯うした理論が不思議に存在を許されて居る。否、社會の一角には狭い範圍ながら相當に之が跋扈して居るとさへ云ひ得る。即ち反對論の存在を許さないのである。人に向つてイエスかノーかの明確なる返事を求むるのである。ロシア本國に於て六十萬そこ〳〵の共產黨員が一億四千萬の大衆を立派に支配して往く故智にならひ、主張と實行とを一圖に押し進めて改革を急がうと云ふのである。この態度方針を理論づける爲めに私の所謂獨專的絶對主義が生れる。やり方の實質に於て之はかのファシチシズムと全然揆を一にするものだが、只表面に强制壓迫の看板を掛けぬだけ、同じ目的を達する爲に彼等は第一に所謂教育の手段を執る。たゞその教育たるや、自由の精神に基き民衆良能の潤達な開發をはかるのではなくして、その精神を一定の方向に固着せしめようとはかるのである。名は教育といふも實は宣傳に外ならぬ。たゞ宣傳の爲に說き立つる手前味噌を粉飾するに、極めて巧緻なる科學的眞理の假面を被ツける所に近代的の利口さを見せて居る。この點はかの舊幕時代の教育が人智開發の名の下に時の政府を有り難い〳〵と妄信せしむるに成功したのと異曲同巧である。斯う局外から冷靜な批評を下して見れば何でもない様だが、今日の實際につき無產諸政黨の人達の間に斯んな見解を眞面目に信奉して居る人の如何に多いかを考へて見たなら、蓋し思ひ半ばに過ぎるものがあらう。

俺のみが正しく他は皆贋ものだと考ふる類の人は外にもある。併しわが獨尊的絶對主義の連中は斯く妄想してよろこんで居るばかりでは滿足せず、更に進んで御丁寧にも斯うした考を人にも押しつけ、傍若無人に之で突進することに正義が存すると說くのだから堪らない。斯うした考が之れまで如何に無產陣營内部の平和を害し、時としてまたその主張者達の間をも如何に紛亂せしめたかは、今詳說するを避けようが、要するに、之を振り廻すもののある以上、無產政黨間に此の提携協同の見込なきは明白である。一方が他方に完全に降伏しない限り、當分のところ彼等の關係は先づ永久の鬪爭であると見なければなるまい。

第二はもツとフェア・プレーの精神が起らねばならぬと思ふ。前記の所謂獨尊的絶對主義が理論上拋棄され銘々の立場の對立が承認されたとしても、感情の上で自ら高しとしては小さい所に面目を押し立てようとする者があつては、矢張り提携協同の

實はあがり得ぬ。今日の無產政黨にこの點がまた頗る訓練を缺いて居るの危惧は、比較的穩和な立場を取る者の間にも協同の步調が甚だ取り悄いと云ふ事實に觀ても現はれて居る。信ずる所あつて或る立場を執つた以上、之を主張するに於て一步も枉ぐべからざるは云ふを待たない。けれども同時に他の立場を執る者に對しては、爭ふべきを大に爭ひつゝも、亦之に相當の敬意を表するを忘れてはならないと思ふ。他を尊敬し謙遜してその說にも耳を傾くるはつまり自らをより良きに向上せしめる所以である。向上發展に熱意あるものは、一旦執つた立場にいつまでも拘泥はせぬものだ。こゝから所謂フエア・プレーの美德は生れるのだ。斯うした訓練が始めから利權の爭奪を目途として起つた既成政黨に求むべからざるは怪むに足らずとして、單純に無產大衆の利福の爲に起つた人達の間に、大局を達觀して共に公に奉ずることがどうしても出來ぬとは、餘りに腑甲斐ない事ではないか。

第三に私は最も實際的な問題として今日の無產政黨の專制組織の拋棄を希望する。今日の無產政黨は、幹部中心の專制組織なるの點に於て、毫も既成政黨と異る所はない。その爲に黨全體の運命が之等少數幹部の氣分如何に依つて勝手に左右されて居る樣である。斯く云へば或はその當事者達から叱かられるかも知らぬが、私をして感ずるが儘を忌憚なく云はしむれば、今日の無產政黨の四分五裂の原因には、たしかに二三幹部間の感情の阻隔と云ふ事が伏在すると考へる。感情の阻隔が四分五裂の直接原因だといふのは言ひ過ぎかも知れぬが、それが重なる原因の一つであり、少くともそれが無かつたら四分五裂が或は防ぎ得たかも知れぬと云ふ樣な場合はたしかにあると思ふ。而して然らば彼等少數者の我儘に依て重大な運命のきめらるゝ無產大衆こそいゝ迷惑だ。見よ、今日我國の無產大衆に三つも四つもの政黨に分れねばならぬ實質的必要は何處にあるか。無產大衆はいづれを見ても皆親愛なる同胞である。到底彼れと和すべからずとする事情はひとり少數幹部のみに存するのではないか。而して我國の政黨が依然幹部本位の專制組織なる以上、無產諸政黨の間に包括的なる提携協同の成る可からざるは火を睹るよりも明瞭である。

然り、大衆には何等分立せねばならぬ理由はない。故に彼等大衆が完全に黨の統制監督權を掌握するか或は少くとも現在の幹部の大部分を放逐するか二者その一に出でずんば、共同戰線の張らるる見込は絕對にないやうだ。繰り返して云ふ、大衆には分立對抗を持續すべき理由は毫末もない。その當然現はるべき提携協同を妨げて居るのは少數幹部の感情問題である。感情

問題であるだけ、表立つて之を述べ立てれば下らぬ事柄だが、實際問題としてはその處置頗る六かしい。私は到底之を當該本人に求むべからざるを思ふが故に、彼等の自發的にか又は他動的にか引退するまでは、容易に希望の實現を見得まいと考へるのである。

之等の事を思ひ合はすると、孰れにしても無産政黨間に近き將來に於て有力なる共同戰線の張らるる見込のないことだけは明白だ。既成政黨は尙ほ姑くは枕を高うして惰眠を貪りて可、ひとり純良なる天下の大衆は、更にいつまで好評に釣られて當途もなき悪路を辿らねばならぬのか。甚だ心細き次第である。

雜感三則

一

九月末の新聞に、四谷新宿の舊遊廓地が大正十年大火に見舞はれたるを機とし、東京市は此處に都市計劃法による道路擴張を行ひ、その結果沿道の百五十戸に對し總計二十四萬圓に達する受益者負擔金を賦課徵收することになり、一ケ年内に完納すべきを令したが、例に依りて住民の運動乃至陳情があり、爲めに更に年限を延ばし且分納をも認めることになつたが、今日に至るまで一文も納付する者はなく又一向その氣配も見えない。市でも取扱上甚だ困るので、此度嚴重な督促狀を發すると共に場合に依ては强制處分を辭せざる決心をかためた。之を耳にした住民は今更ながら狼狽し、某々市會議員を介して頻りに市に向つて處分の緩和並に延期の陳情をして居る云々とあつた。つまり市會議員などと云ふ者は斯んな時に賴まれて横着者の我儘を通さしてやるのが主なる仕事であるやうに見える。一方には市民を戒め、他方には彼等と市當局との間に立つて、最も正しい最も適切な解決策を研究すると云ふ風な馬鹿正直な議員は、今のところ藥にしたくも見出し難い樣である。

二

之も九月末の新聞で見た。過般の縣會議員選擧に際し茨城縣某町の投票所に中風と神經痛とで身軀の不自由な一人の男が女房に介けられて這入つて來た。之を聞き込んだ或る有志家とやらは、神聖な場所に婦人の入り込むとは怪しからぬとて、外の理由とあはせて知事あてに選擧無效の申立をしたとやら。まさか中風の男が妻君に手を取つて貰つて投票用紙に候補者の名を書いたのではあるまい。假りに選擧人以外の者を投票場に入れ

るなどの禁令があるとしても、病人を介抱してその場所まで之を運び入るるは妨げないとしてもよからう。それ等はどうでもいいとして、異議申立者が投票場を神聖と稱し而して之に婦人の入り來るを汚らはしいと觀たのは振つてゐる。婦人參政權論者などの一言なかる可からざる所であらう。

三

新選擧法が戸別訪問を嚴禁したところ、(一)政黨加入勸誘の形式で戸毎に訪問して歩くものがあつたり、(二)ポスター貼付の許可を得るのだとて一々頭を下げ廻つたり、(三)事務所開設の挨拶として候補者の名刺を配つたり、又(四)村長をやめて選擧運動員となつたものが辭職の挨拶だとて村内有志を訪問したり、(五)訪問ではないと云ふ言ひ前の下に人家の前で戸内に這入る様に名刺を撒いたりしたものがあると云ふ。どんなにやかましく規則を作つても、之をもぐらうと思へば幾らでももぐれる。今に始まつたことでもなければ又選擧に限つたことでもない。只斯んな事が新聞に麗々しく書かれて公けの問題にまでなつたといふことに、私は日本國民として多大の恥辱を感ぜずには居れない。何故なれば之が新聞紙上などの問題になるだけ、實際に社會の之に悩まされた例の少なからざりしを思はせられるからである。一體戸別訪問などを平氣でする様な不見識な奴には投票しなければいゝ。選擧民にこれ位の矜持のないと云ふは洵に悲しむべき事態である。そればかりではない、凡そ法律の禁制といふものはもと唯大體の様式を例示するに留まるものである以上、戸別訪問がいけないと決まつたなら、常識ある良民にはその精神を推擴して爲すべき事と爲すべからざる事との區別は自ら明瞭にわかる筈だ。折角設けた法律を相協力して守り立てて往かうと云ふ誠意のない奴に限つて、巧に之をもぐつては一己の利益をはからんとするのだ。而して苟くも自ら進んで天下の公事に參せんとする者の間に此種の醜類の横行を見るべしとは、心ある者の誰か豫期する所であらう。斯んな奴をば國民は宜しく大に辱しめて再び面を擧げしむべきでない。私は之等の報道に接してつくづく政治道徳の低劣なるを歎ずると共に、之等の事實を擧げて新選擧法の疑義だの不備だのと騒ぎ廻る官吏政客の心事を解するに苦むものである。

明治文學史上に於ける德富蘆花

千葉龜雄

德富健次郎氏にとつては、自分は可なり長い、忠實な愛讀者の一人であつたと思ふ。それは「健次郎」前紀である「蘆花生」紀、その蘆花生紀ですらも、ずつと遠い先にさかのぼるきものだ。たとへば、「國民之友」「國民新聞」「家庭雜誌」、「國民小說」に現はれるもので、蘆花生の署名のあるものは、自分は大抵見落しはしなかつた。「水國の秋」などは、相當長いのを我慢して、こつこつ筆寫したほどの熱心をさへ持つて居た。熱心はそれから最近まで續いた。「富士」は、第一から第三まで、みな出ると直ぐ買つて讀んだ。何分多い中だ。見落したものも若干あるにはあらうが、まあこれ位ゐなら、健次郎氏半生の業績を忠實に見おくつたものとして容されても好いであらう。と、云つて、「水國の秋」當時のやうな、純眞な禮讚心だけで、最後まで彼の業績を眺めたものと思はれては迷惑である。むしろ折には、それと反對でさへもある。たとへば小說家としての彼れは、とうとう藝術の本道まで、立派に足を踏み入れる餘裕を持たずに終つた。そのために、彼れの藝術が、どんなに時代文壇から白い眼を向けられ、藝術信仰の讀者から、どんなによそ者として取り扱はれたか。恐らく彼れは、知り過ぎるほどそれを知つて居た。知つて居ても、彼はおいそれと文壇通用の本道などを決して探し廻らなか

つた。廻らうともしなかつた。かへつてそんな反省とは一向沒交渉に、ぐんぐん、自己の傾向を、自分の最良とする様式の中へ推し進めて行つた。それはあながち彼れが、つむじ曲りであり、負けず嫌ひであり、剛愎だからのみでない。彼は彼の自我が、自分の好きな様式の中でのみ、中でこそ、最も正しく表現され、生長し得るものだと信じたからであらう。信念は通つた。文藝人としての彼の肩書が、たとへどんな符牒の下に置かれるにせよ、とにかく、明治文壇における德富健次郎は、質として外に一人の類もない、獨得な存在として認められることを强ゐる姿になつたからである。たとへばその小説が、藝術からは可なり型がはづれた、若干の缺點と低度はあつても、一方純藝術には望まれぬ程度の、偉大なアツピイルを多數民衆の胸からひき出すことが出來た。そしてさて此の次ぎの彼は何を書くか、どんなものを掴まへるか。それが絶えず好奇心とゴシツプの種になつて居た。もつとも「日本より日本へ」この方は、彼れの名聲も、可なり下火になつた。めまぐろしい文壇の急潮は、一寸でもまごまごすると、容捨なく舊人の足をさらつて行つて了ふ。彼も、この潮先にかゝつた一人ではあつたが、それでも、彼の存在に對する好奇心は、まだまだみつしりと大衆の心をつかんで居た。有りやうそれも彼が命にかけて大切にした獨自性のお蔭であつて、自分が未完成で終つた「富士」に、最後まで興味を持つたのも、一にこの好奇心の誘惑である。もつとも、彼がいくら小説だと威張つたにかゝはらず、彼のいふところの小説は、一部から他の一部へ移るごとに、ますます小説の藝術道から離れて行つたのではあるが。それなら、德富健次郎の持つた獨自性の藝術とは、表現とは何であつたか。それが明治の文壇に、どんな特殊な存在を持つたといふのであるか。これからそれを檢討して見たい。

自分は、德富健次郎氏を直接に知らない。一體自分は、どんなものに對しても、賞賛することまでは出來るが、崇拝の氣分までにはどうしても醉ひきれない。どんなに豪い人間であれ、こちらから行つてまで逢はうなどといふ興味にそゝら

れた經驗が一度もないのはそのためだ。それを藝術の場合と假定して、どんなに頭の下る作品を讀んだところ、自分は、作家の風貌までを、直接に知らうとする誘惑を決して感じない。一つは、作家はどんなにしても、作物以上の傑作を作り得るものでないといふ眞理を信ずるからだ。作物こそは、作家の全人格全生活の、最高精粹を結晶したものであり、昇華したものである。製作のエクシタシイに醉ひきる瞬間こそ、作家は神であるが、そこから解放された作家は、もう人間に還元する。人間である、さらに人間が持つやうた、弱點や缺點を持つたとて何の不思議があらう。いや、この弱點と神性の交錯があればこそ、人間味のゆとりも、自然さも酌み取られるわけのものではあらう。ところがとかく沒分曉な人間どもは、制作境の神だけを作家に認めずにその等質のものを、同樣に作家の實生活と實人格にさへ求めやうとする。自分の喰ひ違ひがわからずに、むやみとそれを求める。そして要求が滿されなかつたと云つては、今度は作家にひどい幻滅を感ずる。勝手な話だ、まるで自分の錯誤に自分でつまづいて居るわけのものである。自分はそんな神性を、作家に强制しやうとは始めからしたい。むしろ彼等の、人間らしい失行や矛盾に對し、ほゝえましい共感さへも感ずる。たゞそんな人間味なら、誰だつてさらに持つて居るのだから、わざわざ作家までへ行つて求めるほどの衝動を感じないまでの話だ。

たとへば蘆花は、「順禮紀行」の「ヤスナヤ・ポリヤナの五日間」の中で、「トルストイもまた斯る愚痴をこぼす乎。苦しき辯解の底に僞善は潜まざる乎。斯かる眞似は道樂にて、貴族の趣味は本色ならざる乎。トルストイとても、もとより撞着の中に住む人の子。個人性の强きだけ癖も多かるべく、完全を求め難きは無論の事ながら、ちと芝居は過ぎざるか、こは、眉に唾つけ、吾眼を見開く用意肝要なるべしと屹となりしが」云々と感じて居る。このトルストイ評が、そつくりそのまゝ、後年の千歳村の蘆花に、向けられた奇觀をさへ見たのだからほゝゑまれるが、さればとて自分は、この矛盾をそのまゝに持つててこそ、大トルストイであり、蘆花である眞面目であるとも思ふ。人間としての二人の眞實も面白味も、そこでこそ遺憾なく味はれるものだとこそ思へ、下手に矛盾を解決してもらひたいなどとは夢にも望まない。この偉大な矛

盾がなかつたら、トルストイもなければ、蘆花もまるつきり無いわけになるからだ。たゞ彼等が思想家である限り、この矛盾を解決したいとは念々に思ひ惱んで居るであらう。どう解決するか、どう解決したらよいか。たとへ實際に解決が出來ぬにしても、彼等の内の思想家は、理想としての解決方法を案出することによつて、せめての慰藉を得やうとするであらう。得ずには止まぬであらう。彼等の制作とは、すなはちこの切ない理想の表現であり、或ひは、實際に不可求であればこその、この理想であるかも知られない、だから この理想の表現であり、苦悶の象徴である――すなはち作物をとつこにとつて、現實での實行を作家に求めるとするならば、それは明らかに二重の錯誤でなければならない。作物と作家が、一つのものの分裂であるやうに見えて、有りやうは、抱擁され得ない別箇の存在である理由の一つも、またこの悲劇に宿る。

ところで、いくつもの矛盾した心理を一つの肉體に宿したり、自我性一點張りの自然人である人間といふものは、とかく自分のやうな、氣の弱い、もしくは一本調子で行かうとする人間にとつては、致命的な苦手である。すぶの盲目な崇拜者はいざ知らず、物ずきにも、わざわざ自分の自我の蟲を殺してそんな人に逢ひ、そんな氣分本位の壓迫に對抗したり、相手の氣に向くやうに調子を採つたりすることは、よほどの必要があつても出來さうはない。蘆花などは、その藥の強い苦手の方では、まづあまりひけを取り相もない藝術家のやうに見えたのである。ところがその彼れを、自分は原宿へ訪問したのである。自分はその頃、或る五目雜誌を拵らへて居た。店主が熊本の人で、その命令で、その名刺で、彼れを音づれたのだ。何せその頃は、蘆花の文章ほど、市價として高價なものはなかつた。蘆花さへ引張り出したなら、一雜誌の土臺や、一書店の繁昌ぐらゐは、苦も無く出來上るとさへ公けに認められて居た。で、その雜誌でも、せめて彼の談話でも載せたいと言ふのである。言はゞ商賣用のために、自分は、何の刺戟もなしに彼れを訪問した譯であつた。女中が出て來て、玄關ではお出でですと言つたまではよかつたが、名刺を取次いでから、平氣で御不在ですといふ返事である。自分は堪らなくむつとした。その日は憂鬱な氣持で歸つて來たが、妙に段々と反感が薄れて來た。そこが蘆花らしくてかへつて

面白いとさへほゝゑまれて來たのである。

と云つて、逢ひたい衝動にそゝられぬことは以前と同じだ。その後自分は眞砂町に棲んで居たが眞砂町の角に相馬屋といふ新らしい洋書の古本屋が出來た。主人にも懇意になり、珍らしい古本などは知らしてもらうやうになつたが、或る日、シインキィウヰィツチの「行商ハリル」一外四五部を棚から見付け出した。徳富健次郎藏書印が見返しに浮き出すやうに大きく捺されて居る。彼が外國へ行くので、澤山賣りに出したといふ主人の話であつたが、自分は、無けなしの蟇口をたゝいて買つて來た。讀んで見ると、主人公は例によつて亡國の志士である。亡國ポオランドの作家であるシィンキイウヰイッチは、いつも亡國の志士を主人公として、民族的獨立の理想を描き出すのであるが、行商人であるこの志士も、最後には戰敗れて、同志が悉く斃れた。一度は祖國から逃げ延びやうとして、夕月を仰いでしよんぼりと立つて居る。萬感雲の如くせまり、河水が咽ぶやうに流れる。ポオランドの山中鹿之助の心情を、蘆花氏はどう思つて讀んだことか。その他の小說を見ても、彼れがどうしてあんなに廣く、歐洲作家の新しい作物を、丹念に取寄せて讀んだものか。いささか驚ろかされたのであるが、その後の彼の書いたものを追々讀むやうになつて、彼が其頃から、いかに讀書好きの作家であり、歐洲の重なる作家の作物を、どんなに廣く讀破したかを充分に知ることが出來た。尤とも民友社の人には、盟主に蘇峰氏を頂いて居るだけに、どの人も劣らぬ讀書狂であつたやうだが、近代小說の讀破の段では、蘆花だけがひとり記錄の保持者らしく見えた。いな、探偵小說の黒岩涙香、博學無比な森鷗外を別格とすれば、明治文壇の作家で、彼れほど廣く、多方面に雜駁に、近代歐米小說を讀破したものがあつたかどうか。一度は玄關拂ひを食つたこの雜誌記者も、かうして古本棚の愛藏書を通じて、彼れの作物に、以前と變りのない親しみを持つやうになつたのであつた。

徳富蘆花は、文壇國において、どんな戸籍の下に据置かるべきであるか。定めし觀點によつて多樣な相違はあらうが、

世間評によれば、何を置いても、「不如歸」の作者としての彼を、第一に置くべきことは、異論のないところらしい。が果してそうだらうか。「不如歸」が果してそれほどの、また賣れ行きで見たほどの傑作だらうか。賣行きはいつも傑作の目安にはならない。或は正反した現象さへもある。少くとも自分は、出版早々讀んだ直下から、あれは、義理にも藝術品とは云へない。よい加減の通俗作品と思つて居た。彼は第百版の卷首で、「お坊ちやん小說である。單純な說話で置いたらまだしも、無理に場面を賑はすため、かき集めた千々岩山木の安つぽい芝居がゝりやら、小川某女の蛇足やら、あらを云つたら限りが無い」と書いて居る。缺點の一部を、世間體ではなく、正直に認めて居るのらしい。全たくその通りである、いやそれ以上である。一つはこの小說が、卷首のこの作の動機で書いても居るやうに、動機が實感でもなく、體驗から出たものでもない。たゞ夏の一夕ふと不思議な老女から聞いた興ある世間話に、瞬間的な暗示と衝動を感じて書いたといふ程度のものであるため、あんなにもよそよそしい作物にもなつたのであらう。たとへそれにしてもお芝居氣があくど過ぎる。素直な處女性がない。いやに業々しい見世場のモザイクであり、過度な感傷性と、誇張した善玉惡玉の使ひ分けで、安價な淚と道德感をむやみとそゝり立てやうとするに過ぎない。明治時代が築き上げたところの（第一版は明治卅三年）市民道德ではまだそれでも健全な小說だと言はれたのであるが、こんな甘さと不自然さで、人生觀照に安協して居るのでは、健全どころか、かへつて不健全なのである。當時あれほど、芝居の獨參湯だとまでたゝへ上げられた新派劇「不如歸」が、おそらく今日では、大抵の場末でも演じられなくなり、演じても一向觀衆の親しみを呼ばなくなつた。それほど現代の人生觀照は、民衆の間にこれも比較的深化されて來た證據であらう。が、「不如歸」における致命的な缺陷は、何といつても、人間が書けてないことである、なるほど人間は舞台に動いては居るがそれは作りつけのほんのマニキンに過ぎない。マニキンの群だけが動いてる世間に、深刻で眞實な人生のある筈がない。然るに人生道場の修業たる小說は、どんな意味においても、嚴肅な現實觀照から踏み出さねばならぬのであつて、彼の小說は、出發からもう躓づいて居る。第一歩でつまづいた

彼は、とうとう最後までリアリストとしての資格を持ち得ずに終つた。たとへ、他の特色で缺點を代償したにしてもだ。彼が正味の文壇圈內へ踏み込めなかつたわけはそこにある。たゞこの作物がもたらした意外な影響があるといふならば、それは正しく時代的意義を持つことであつた。時代は、まさに個人主義の權威が呼ばれやうとし、ほんのかすかながらも、女性の自由が求められやうとし、また思想の動搖が、固有の家族主義の根柢に、何か知ら不安の種を蒔かうとする氣運でもあつた、この時の社會にあつて、家族としての嫁姑の傳統に對する、大きな懷疑を投げかけたものは「不如歸」である。これまでの家族道德ならば、どの道、浪子の運命は、不可抗なものとして諦らめて濟まされたであらう。武男は或ひは、美くしい妻のみに甘く、家族精神に不忠な低能者だと批判されたかも知れない。ところが事實はそうでなく、むしろ反對であつた。川島未亡人の行動は、すべてに不合理だと審判された。いや、それは少し誇張に過ぎるかも知れぬが少くとも藝術と關係なしに、「不如歸」以前に、家族成員としてのそれぞれの分け前を、こんなに眞劍な問題として、讀者を大きく撲つた作物はない。少くとも、讀まれた數が多かつただけに、多數の若い青年男女が、いづれかうした立場に置かるべき自分達の將來について、たとへ意識せぬにしても、眞劍な考察を始めて强ゐられたことは確かだ。それでもなければ、あんな寄せ集めの紙上演劇が、あれほど廣く世間の評判になる筈があり得ない。しかし、作家は、この一事に對しては、ほとんど氣がつかずに了ひであつたやうに思へる。

嚴密に見て、彼れの小說として數ふべきものは、「不如歸」の外に、「思ひ出の記」と、「黑潮」だけであるらしい。外のものは、小說としてよりも、小說の形をとつた、自敍傳であり、色彩のある人生記錄としての圈內において、はじめて地位を占むべきものであらう。「寄生木」から始まつて、「黑い眼と茶色の目」「富士」までがみなその部類に屬する。

「黑潮」は、作品としては、その頃の水準で見ても、完成から遠いものである。それにかゝはらず、すばらしい評判になつたには、少くとも二つの理由があつた。第一は、誰も手をつけては失敗するところの、政治小說として、時代權力者の

群像を描かうとした企圖である。第二は、令兄蘇峰氏と仲違ひになり、黑潮社を作つて獨立した。「黑潮」は、獨立第一歩の運命をトふやうな、ルビコンの褰ころであつたことである。そしてあの卷頭四頁に亙つて、家兄蘇峰氏に與へ、蘇峰と訣別する切々たる哀辭には、すてきな情熱がこもり句々暗誦されるほどの名文であつた。「蘇峰家兄、初め斯小説を民友社より出す時、君に献ぜんと思ひたり、今や余は民友社を去りぬ。然も斯小説を献ず可き者は、竟に君ならざるを得ず」「若し余が言にして君を累するあらば、君に背くなり。若し君が欲する所に從つて、余が言を枉げなば、余は自ら欺くなり。若かず相別れて、おのおの其道を行かむには。兄弟牀に對するも、夢は東西に飛ぶ。烏鵲今宵一枚に棲むも、明朝は南天北地の身なり、骨肉は情なり、傾向は天なり、各賦命に從ふて自己を發揮せむのみ。湘南の双親老ひ玉へりと雖も、必らず不悌を以て余を責め玉はざるを信ず」「余は何人の助けをも求めず、孤立には馴れたり。寂寥は余が不斷の糧なり、神明上にあり、衷、自信あり、身を天命に委ねて、斃るるまで行かむのみ……」自分は、幾度この哀辭を讀みかへしたことであらう。

「黑潮」の材料を供給したものが、蘇峰氏であつたことは、なをとこの哀辭を深刻にもし、因緣の矛盾をも感ぜしめる。それについて、氏は、令弟を弔する葬場辭の中でかう云つて居る、其「黑潮」と云ふ小説は、實は兄きが弟に種を授けたのである、私が自分が書けたらば書きたいと思つて居たことを、どうも自分は小説などを作る筆は有たない。又た小説を作ることは自分としては欲しない。それでどうかあれ程の筆を有つて居るのであるから、弟に話して見たい。是な恰もヴィクトル・ユーゴーが、「九十三」と申しまする小說で、佛蘭西革命を書いた如く、維新から明治の世界の潮流を書いて見たいと云ふことで、弟と相談して、乃ち此の靑山會館の立つて居りまする、此の所に私が居りました時に、何時も夕方から庭に緣臺を出して、私が色々と斯ふ云ふ風の事もある。さう云ふ事もあると云つて、弟に話した。それが即ち「黑潮」である。若しうまく行つたならば、兄弟で非常な大著述が明治年間に出來たかも知れませぬが、「黑潮」が出來つゝある

間に、弟から絶交狀を突き付けられたのである：」

これだけを取り離しても、文壇に類の無い佳話として、永遠に文學史に記錄される價値を持つものであるが、さて出來映えとしての作品はどうか。「黑潮」は、これを第一篇として、驚くほど廣大な、外延に展開さるべき構圖であつたことは、直接に蘇峰氏からも聞いて居る。だから、未完で終つた第一卷だけで、成績をあげつらうことは多少無理であるかも知れない。たとへそれにしたところ、この第一卷が、救へない若干の缺點を暴露して居ることは爭へぬ。もし蘇峰氏が自分でペンを採つたとしたなら、もつと大きな展望の下に、もつと有機的なつながりを持つものを書いたであらう。雄大な史家であり、炯眼な時代政治の批評者である氏では當然かくあるべきであらう。社會はどんなに細かく分岐されても、各部層の底には、綜合さるべき一道の生命を潛めてゐる。が、蘆花氏は蘇峰氏と違つて時代の冷靜な批判家ではなかつた。で、「黑潮」には、なるほど、細切りにされた若干の社會相はある。それだけでも、どうにか、その頃の時代相がわからぬではないが、何分個々の社會相をつなぐ、有機的な生命が思ひの外稀薄である。形體はある。形體を肉づける生命の燃燒が心細いほど乏しい。たとへば、「黑潮」は、喜多川伯の家庭と、幕臣東家の浮沈と、二つの大動脈によつて、明治の時代相なるものが代表されて居るが、かりにも「明治の世界の潮流」を描くといふ、大きな構圖から出發したものとしては、ひどく役不足でもあり、認識が足らず、小細工に過ぎる。それにこの二つの事件が、お互に關係せずに、勝手に自分たちの道を辿つて居るのも變である。小說意識に囚はれ過ぎ、固くなつたのはまだしもとして、人物をも、事件をも、過度に、お芝居的な、通俗味な甘物にして了つたのが第一に可けぬ。人物も型に入つて流動性がない。尤とも、人間を觀念だけで拵らへ上げて了ふことは、或は彼れのやうに、自我性のみで世界を眺めるものにとつては、どうともし得たい運命なのかも知れない。自分といふものを、他人と平等な水準に置き、冷靜な氣持、或ひは謙遜な態度になつてさへも、人間を觀味しない限り、人間性の眞實や彈力性が、自然と胸に入つて來る筈のものでないからである。が、彼れは、さうした態度を持た

うとする忍耐さへもてんから持たなかつたらしい。そこで上づつた觀念だけで、勝手な符牒を、人間につけて行くやうになつたのも自然の過程であらう。で、「黒潮」は、より多く事實上の興味によつてのみ心を惹かれる。

が、何と云つても、心を惹かれたのはあの序文である。早い頃の「國民の友」に、宮崎三昧の「亡妻」と云ふ叙情文があつた。逝いた妻に對するめんめんたる情緒を、この頃としては、思ひきり正直に暴露した表白であつて、しみじみとした哀感が、行と行の間に浸み出して居た。それをも自分は筆寫したのであるが、「黒潮」の序文から見れば、それなどは足元にも及ばない。肉親の分離を主題として居ながら、かへつて肉親の情愛が、どんなに堀つてもつきない深化と執着を帯びて居るものであるかを、目が覺めたやうに、端的にそこでは味到されたのである。古い言葉だが、情理行き届いたといふのはこの一文のために發明されたのかも知れないとさへも思はれた。稀代の「名文」である。

名文といへば、自分が蘇峰氏の「國民新聞」に居た六年間、氏が同時代のわが國のどんな文章に對しても、これは名文だとか、誰は名文家だとか評したのをとんと聞いたことがない。が、それによつて、自分は、少しでも氏が、他人の文章を認めることに狭量だと思つたことはない。かへつて海内の文章はおれ一人だといふ自信を持つ氏であつてこそ、あの文章の强味もにじみ出るのだと心から信じて居たのであるが、最近始めて氏の口から、あれは名文だといふ公評を聞いたのである。それは蘆花氏の「黒潮」の序文に對して、氏が弔辭の中で述べたものに見える。そしてあの序文が、愛兄と絶緣を宣した宣言であり、それが今まお互に許し合つて、名文だと公言されるまでになつた。目頭の熱くなるやうなあの劇的光景を想ふと、それだからこそ人間に生きることの意義も味はれるものだとさへしみじみ思ふ。

「黒潮」が、結構において、どこかそぐはない亂調を持つて居るのに比べれば、「思ひ出の記」は、一番器用にまとまつて居る。むしろ、人巧味が、あくど過ぎるほどにもまとまつて居る。尤もこれもどちらかと云へば、小説であるよりも、

いくらか自叙傳へ足を踏み込んで居る。自叙傳なら、讀者が感興があらうとあるまいと、自己にとつて必然なものは、どんな些事まで織り込まうと一向構はない。小説となるとそうは行かぬ。小説は普遍の人生と、共通の感情に訴へるものであるから、その法則から離れたものは、どん〴〵割愛されねばならず、割愛することによつて、作物の緊張が始めて完全になる。「思ひ出の記」が半は自叙傳だといふのは、その刈込みがうまく出來てないからである。刈込みが努力されないために、無用な雜物が、ひつきりなしに視野へはいつて來て、嚴肅な人生觀照を妨げる。「思ひ出の記」にもやはりそれがある。その意味から「思ひ出の記」は、或ひは幼稚であるとさへ見られる危險がある。が、たとへ幼稚であるにしても、愛すべき作物たる權威を奪ふことは出來ない。この作物を滿たすものが、純眞で生一本な純情であり、無垢に燃えさかる情熱だからである。そして、彼れの中にあるロマンチシズムは、「黑潮」や、「不如歸」で、畸形な實を結ぶに過ぎなかつた代りに、こゝでは、幼ないまゝに、美くしく成熟して居る。とりわけこゝで強く射られるのは、彼れの母性禮讃の信念である。彼の實生活において、話がこの信念を、どんな風に結晶さしたものかは知れないが、少くとも「思ひ出の記」一篇は、むしろ主人公菊池愼太郎は副主人公であり、副主人公たる女主人菊池節子が、勝手に主人公の玉座を僭位して居るかにさへ見える。「兎に角犬死すまいと思ふ一念の燃え立つたのは、實に此時で、言ふまでもなく氏は、母の烈火にまき込まれたのである。あゝ若し母が居なかつたら、僕は如何なつたであらう。だから僕は、今も母の崇拜者で、從つて女子敎育の熱心家である」

それは、ロマン・ロオランの、「ジヤン・クリストフ」の一部分をさへ連想させるものである。

「ジヤン・クリストフ」にあつては、それは母ではなくて、副主人公の姉であつたが、婦人の或る性格の禮讃者としては、ロオランも蘆花も違ひがない。ロオランが彼の、「クルランボオ」の中の女性から、長編「魅せられたる魂」までに進んで、理想の女性、アンネツトを描いて居る情熱はよくわかる。尤とも「魅せられたる魂」の母子は、「思ひ出の記」と反對

に、離れて行かうとする二つの魂の悲劇から成り立つのであるが、この耐え得ない受難の下に、雄々しく振舞つて居る高貴な母性が、なをと我等の禮讚心を、涙ぐましいまでに高潮させるのである。この意味で、ロオランも蘆花も、一種の尊ぶべきフエミニストであらねばならぬ。蘆花が、どんなに夫人を敬愛したかは、事新らしく云ふまでもなし、「竹崎順子」もまた有力な一旁證であらう。と云つても、彼れは婦人を、男性と同質の社會的地位まで引き上げやうとするほどの、先驅的フエミニストではない。たゞ、あらゆるわが小說が、婦人とさへいへば、みな男性のおもちやであり、救はれない無知者だとして取扱つて居る。それが公けな傳統であつたのに、彼のみは、いつも暖かい同情で、女性を哺ぐみ、女性のみが持つ耀やきを抽出する敬意を忘れない。だから彼の作物を讀めば、甘やかな微笑と、鋼鐵線のやうに鋭どく張りつめた意志を綯ひまぜにしたところの、一人以上の、好もしい性格女性がきつとそこにあり、それを發見するに決して六づかしくはないであらう。「思ひ出の記」は先きに說いた。「みゝづのたは言」にも、「寄生木」にも、「黒い眼」にも、みなそれがある。で、彼の作物の、全體としての價値は何であらうとも、珍らしいフエミニストである作家としては、たしかに明治文壇に稀有な座位を占めても異議がないものであらう。

どの「明治文學史」を開いても、德富蘆花のために割かれた行は、ひどく儉約されて居る。それによれば、彼れは家庭小說家としての取扱ひである。家庭小說とは何かとなら、それは光明小說であり、健全な傾向を持つ小說ではあるけれども、現實性などははるかの向ふへ蹴飛ばし、甘つたるい脚色と、末梢的な感傷性のみを合の手にして、讀者の涙を無理にでも絞らねばならぬものだ。どの道、通俗味をふんだんに含んだものであつて、嚴密な意味の文壇では、眞面目に採り上げるわけには行けぬといふのである。スコット・ゼイムスの、「通俗の作物」の定義によれば、第一が分り易い文章を必要とする。比較的低級な讀者の鑑賞に訴へるものだから。第二、動情に訴へること。讀者の多數は、理性よりも感情により

て動き勝ちなものだから。と。誰にもわかりきつてる見方だが、そう云へば蘆花のものなどは、第一、言葉、そのものは決して低級ではないにしても、行き方が、大てい描寫でなくて説明であるから、大抵の讀者に解り易い、しかし藝術は説明であつてはならぬ。どこまでも描寫でなければならぬ。第二、彼の作物が、沈潜された人生の再現ではなくて、燃え上る情感の上澄みだけを、無邪氣に、野放圖に發散するものであつたことも爭へない。それが一部彼の强味であつたにしても、が、重大な弱點もまたそこにあつた。

それなら、明治文壇における德富蘆花が、どんな地層で彼れの木地が發揮されたかとなれば、自分は容易に、一個の座席を、特に彼れのために用意することが出來る。第一は、前にも一寸暗示したやうに、自叙傳、或は傳記ものとしての彼れである。

自分が、彼の作物として、出た頃から愛讀するものの一つに「寄生木」がある。この文章を作るために、自分が大阪市中の書店を探し廻つて買つて來た「寄生木」は奥附を見ると、昭和二年六月の六十六版である。一千九十六頁の、ぼう然たるかさ高なこの本が、よくこんなにも讀まれたものだ。一つは、事實の乃木大將が、副主人公になつて居るせいもあらう。が自分にとつて忘れられないのは「寄生木」の主人公が仙台に居たらしい頃、自分も仙台に居て、乃木希典邸や、小笠原憲兵隊長の門前を、學校の行きづりに通つて居た記憶を持つて居るからでもあるし、またこの作物の全體に亘つて、東北人の生活が細かに展開されて居るからでもあらう。もちろん、これも正直な人生記錄だと云ひ條、部分的には目につくほど小説化もされ、こつてりした、ロマンチックな上塗りや、あらでもかなの自己辯解なども、再々顔を出すのであるが、そうした氣がかりな分子があるにかゝはらず、非凡の平凡人である小笠原善平の人生と性格が、心を惹かれる程度に、忠實に浮き出して居る、小説家としての蘆花氏は、とかく木地の人間を塗り消して、自分勝手な映像を作り上げ、それを紙上舞台に踊らして、悦に入つて居る惡い癖があるが、「寄生木」では、そうした非凡人製作の興味を、意識してあ

りありと抑へて居る。一癖も、二癖もあり氣で、それでどこか性格破産的な氣分を潜めて居る。二つが摑み合つた主人公の性格悲劇が、とうとう、ピストルを採り上げねばならぬまでのどん底へ彼を追ひ詰める、この興味ある未完成の主人公を、助筆者である蘆花は、いささか咏嘆しながら、ちつと眺めて居る。「自敍傳論」を書いたジオゼフ・コリンズといふ男は、「傳記家は、Judgeではなくて、Witnessである。自敍傳家は、その二つを兼ねる」といつたが、そうした意味からら、「寄生木」はやはり「傳記」として見るべきであらうか、自敍傳としては、「富士」三卷、「日本から日本へ」などが、差當りその資格に入るであらう。彼れ蘆花はいかなる場合にも、純客觀的な立場に立てぬ思想人らしい。こういつたものでは、「不如歸」や、「黑潮」があるがよそよそしくもあるし失敗しても居る。それがたとへ、小說であらうと、感想であらうと構はない。我まゝ一杯で傍若無人な野人德富健次郎が、思ひきり泥足をふみ伸す作物であつてこそ、彼の作物は始めて生色を帶びて來る、生き生きして來る。他人に興味があらうと、あるまいと、繁瑣で複雜した生活を、彼はひとりで獲々として說述し、讀者を置き去りにして、勝手に自分で俳徊したり、咏嘆して居る。どこまでも主觀的にならねばならない。そうして澄んだ大氣のやうな純情と、熔爐のやうな情熱が、朗らかに、雲雀のやうに中空に融け合つて居る。そうしたものは、どうしても、自敍傳であり、傳記に落ちて來なければならない。そこでまた彼の傳記や准自敍傳は、他と全く違つた獨自の樣式をも帶びて來る。「寄生木」、「新春」、「死の陰」、「順禮紀行」、「みゝずのたは言」と數へて來て、みなその特長が說明される。だから、地域の廣さから云へば、熊本から東北の端までに亘り、時代から云へば明治初期から大正までに及び、日本の國民性、明治風俗生活の變遷、思想の推移、地方的色彩、時代の傾向その他を、彼れのやうに細かく見つめ、うづくやうな興味をもつて記述したものは彼の製作の外にはない。或はそうしたものがあるにしても、彼のやうに、具體的に、溌溂と、美くしく、生命を帶びて描寫したものは少く無い、かれのやうに、透徹した文明批評と、彈力と靱性に富んだ理解をもつて、時代と國民を眺め、記錄したものは少ない。かうした廣汎な展望こそは、明治のどの職業小說家にも求められ

得られぬものであり。彼が民友社の雰圍氣にはぐゝまれて來たことが、測らずも、かうした清新な時代敏感を彼れに惠むことになつたものであらう。

コリンズはまた、「傳記が書かれるには澤山の理由があるが、重なものは、立派に生きるやうに、他人のために手本を拵へてやるのが純眞の本願なのである」と說いて居るが、これはべら棒に淺薄な觀察である。すぐれた傳記は、人の爲に作爲するものではない。どんな意味でか、傳記される人物をとをして、自分を語らうとする、內からの欲求から泉まれたものでなければならず、またさうでないものがない。自叙傳にあつてはもつとさうだ。すぐれた自敍傳であればあるほど、苦悶の象徵である。そしてそれを自叙する人物は、大抵、たまらない人格の矛盾と分裂に苦しむ人達である。自分は一體どんな人間か。黑も、白も、美醜も、醜汚も、あらひざらひ一度白日の下へ曝け出して、もう一度自分を反芻して見やう。望めるなら、この溷沌の中から渾一をひき出して見やう。ハイネはどんな自叙傳であれ、人間は、まるまる赤裸々になりきれるものではない。ルッソオなどは、自叙傳によつて、一層その虛僞を裝飾してるぢやないかといふ意味の皮肉を言つて居たが、なるほど渾沌たる人格の矛盾の暴露が、虛僞のやうに見える危險もあるにはある。だからとて、これが虛僞だとばかりは云ひきれない。矛盾が虛僞のやうに見えることもあるのだ。性格人としての蘆花も、小さいながら、この矛盾の角つき合ひに苦しんだ思索家であつたらしい。死ぬまで、自分といふものを精一抔に延ばしきり、他人の批判などは一向耳に入れないかに見える。さうかと思へば、始終自分といふものを責め拔き、自分を淨化し、自分の靈魂を昇華する營みを、絕えず怠らなかつたやうにも思ふ。「日本から日本へ」や「富士」などは、その淨化と、精進の營みの一方面であつたのであらう。彼は骨肉の愛情を無慘に拒避しながら、千歲村の聖人とまで歌はれた。人道愛を說いた、平和愛を高調した。或はおぼろ氣ながらも、人道愛を妨げる社會惡の根本を、生產分配の世界までにつきつめ、社會主義ににじみ出やうとする轉回さへをも見せた。「土の上に生れ、土の生むものを食ふて生き、而して死んで土となる。あらゆる生活の方法

の中、尤もよきものを擇び得た者は農である」（みゝずのたは言）と說きながら、彼は、事實では、「土の生むものを食ふ」以上の、貴族的な生活を享樂してさへ居た。すべてが矛盾である。矛盾の塊まりである。大トルストイは、自分でこの大矛盾に氣づいたから、大きな苦惱を、制作の中に殘して行つた。蘆花は、どれほどまで自分の矛盾と撞着に氣がついたか。それだけ苦惱は小さかつたのであらうが、たゞ矛盾そのものの、そのまゝの姿が、彼の作物に正直に橫はつて居るだけでも、自叙傳家としての彼の特性を語り、その香味を傳へるに充分な價値を持つものであらう。

が、何と云つても、明治文壇における彼れの存在は、文字の風景畫家として、第一にその革命家としてのそれによつて、ひとり高く標置さるべきものであらねばならない。他の一つの座位とはこれである。一體民友社は、二個の風景畫家を文壇に提出しただけでも、立派な功績をもつて居る。一人は國木田獨步であり、他の一人は德富蘆花である。が、自然畫家としての二人の立場は全く違ふ。獨步はどこまでも、主觀的であり、蘆花は自然派的である。獨步は人生を通じて自然を眺め、蘆花は自然を通じて自然を眺める。獨步は人間の微小を悲しむが故に、自然の悠久に畏懼するが、蘆花は、自然の點景があるがための、人生の惠光をしみじみと感謝する。獨步の眉はひそみ、蘆花の瞳はかゞやく。面白いのは、あの「自然と人生」が、獨步の示唆によつて出來上つた挿話である。

『富士の曙』の話から、丸田君は熊次（蘆花）に鴨志田君（獨步）が、斯う云ふて居たと噂した。それは自然の日記を書いたら面白からうといふのであつた。成程と熊次は思ふた。而して直ぐ實行にかゝつた。去年は元日から大晦日まで一日も缺かさず、日毎日毎の自然の見聞を書いた。熊次は從來すべてを毛筆で書いたが、自然の日記は初めて洋紙のノオトにペンで書いた」（「富士」第二卷）

そのころ、紀行文家の逸才であつた小島烏水君は、蘆花の自然描寫について、「自分にむかつて、かういつも評して居

た。自分は畫が描きたい。蘆花の自然觀察は、繪を描く人間でなければ到達され得ない境地だ。とりわけ、あの色彩感覺などが……と。「富士」を讀むと、蘆花が、どんなに繪畫に趣味を持ち、努力したかを始めて知ることが出來た。蘆花は、「自然と人生」の中に「風景畫家コロオ」を書いて居る。コロオは、親しみ深く和らかい自然、純で、有るがまゝの自然を見出すことに、天才を持つて居た畫家であつた。蘆花の自然觀察は、コロオの手法から學んだものが少なくないであらう。少くとも、彼は自然を主觀の框に小さく取こめない。「有るがまゝ」の形態を、印象を、さながらに、臨模するつもりで自然を描かうとする。「彼は十分に自然を愛し、自然を解し、自然に同情し、而して活ける自然を俘へたり」と、彼がコロオを語つて居るのは、やがて端的に自分を語つて居るものではあるまいか。「自然は生く、一秒時も同じからず、唯一叢の林、然れども朝の林は夕の林にあらず、唯一時の小湖水、然れども彼時の水は此時の水に異なる。彼は實に死せる自然の繁瑣なる目錄標本を臚列することを屑しとせずして、務めて、此活ける變化ある自然の意、自然の詩、自然の狀態、自然の相を活寫したる者なり、彼は此相を捉へむ爲に、其畫題の大形と、其全體の調子を見、一團の色と他の色との大關係を見、空の面目、大氣の性質、光の浮游を察し、空と氣と樹葉の斷えず脈搏顫動する機微を攫まむと務めぬ…」「靑山白雲」から「自然と人生」へ、そして「みゝずのたは言」へ、誰れか彼の自然描寫が、一點一畫、みなこの忠實な、コロオの使徒たらんとする禮讃によるものであることを認めぬものがあらう。彼の自然描寫において、特に目につく一傾向は自然の息づきに對し、心からの敬愛と淡懷をもつて、どんなかすかな「變化」すらも、見のがすまいとする神經であらねばならない。自然を生物とし、その生きて行く刻々の生命を捉へる發見において、彼はまづこれまでの紀行文や風景描寫の上に、すばらしい革命を喚び起した。これまでの紀行文や風景描寫なるものは靜止であつて動態ではなかつた。自然を固定して、內にひそむ生命の流動を認めなかつた。一つは彼等は、自然をもつて、人間と對照する別々の冷嚴な存在だときめてかゝつたためであるが、蘆花は違ふ。人類さへ謙虛に求めれば、自然は、限りなき恩寵と慈愛をもつて人類に呼

びかける。その鼓動を、かれは自然の中に共感するのである。だから、彼が傳へる自然の消息は、暖かい愛の輝やきと、窮まりなく忠實な臨寫によつて、讀者を快よく愛撫する。そして、自然の流動に對する纎細な敏感は、彼の光や、聲や色彩の表現に對する、無限に豐饒な筆觸と步調をともにする。「雪をたわわに載せた小枝が、恨めしげに雪をはねかへした」といつた擬人的な風景が、すばらしい觀察だとして、かつて「源氏物語」でわれ等は說かれた。「富士の煙も、自分の嘆きに共感する」といつたやうな、「十六夜日記」の點景が、自然描寫の骨法だと我等は敎へ込まれた。赤兒のやうに柔かな感情で、自然を自由に反應するのこそ、自然を味得する秘訣だといふのと、何と違つた見界がそこにあるであらう。かうして、明治大正人の、自然に對する態度は、改めて省察し直された。そして夜が明けたやうに、人々は急に眼を見ひらいて、この新奇な、清新な表現の世界に驚奇した。あえぐやうに、この酌めども盡ない、新自然の滋味を求めた。座右の「自然と人生」は、昭和二年九月十日版で、三百六十五版といふ、一年の日數とひとしい驚異な版數を見せて居る。「靑蘆集」の『吾初戀なる自然』で、彼は彼を語つて居る。「自然は余の初戀なりき、多くの初戀は泡の如く消えさるは希なり。獨吾此初戀は、死に到つてまさに已む可き戀なり」、「十歲を過ぎて斯陋物は拭ふが如く癒へたれど、人遠き癖は容易に治し難くなりぬ」「時には心に人を戀ふこと燃ふるが如くありたれど、余は人に親しむ術を知らず、近よれば疎まるるまゝに、いよいよ默し、辭し、屈し、隱るる者となれり。然も人は愛せずして生きる能はず、寧ろ愛されずして活きる能はず。人に求めて得ざる慰藉を、余は何時しか「自然」に求めぬ。十四の秋、獨り熊本の東南二里ばかりなる江津湖の長堤に腰うちかけて、水の面に落つる夕日の光を瞰めて、ほしいまゝに泣きしことを記憶す。然も其淚は苦き淚にあらずして甘かりき。眼には見えずも、大いなる母の膝にうち俯して、心ゆくばかり泣くの感ありき」

そして彼のこの初戀は、文字通り「死に至つてのみ始めて已む」べき戀であつた。彼がそこで保證したやうに。が、彼れの自然の初戀が、何によつて釀されにせよ、彼れの自然觀賞の眼が、歐洲の文學によつて、多くを見ひらかされたこと

け議論する餘地さへない。表現においてもまたさうである。たゞ、獨歩が詩人として自然を詠嘆する場合にも、彼はどこまでも自然畫家として、忠實に文字の刷毛をふるつた。けれどもその彼にあつてすらも、表現の効果から見れば、やはり彼の知識にひそめた漢字の持つ魅味、漢語が含む印象が、半分の力を添へて居ることを見落せないのである。ぽきぽきした簡勁な句法、韻律に變化が多く、その辭、朗讀するリズムの爽やかさ、そして、短かい語彙の中に、たゞよう暗示と含蓄のゆたかさ、陰影のしなやかさ、それはみな、漢字のみがひとりもつ强味であらねばならない。かれのかうした文字に對する選擇と神經は、極度に敏捷であり、自由であり豐富である。も一つは、彼れは、よくある他の紀行家のやうに、自然の平等相をだらだらと讃美などはしない。いつも端的に、いきなり自然の差別相、特種相をつかむ。俳句の生命とするところの、象徵的でなく、少しも無駄のない緊張味がここから生れる。こんなわけで、彼の自然觀ほど、多く今日の男女中等程度の學校教科書に拔萃されて居るものはないであらう。

けれども、それもいつまでものことであらうか。自然に對する藝術の觀照は、其後めまぐるしく變つて來た。現代繪畫の傾向は、印象派のコロオなどを、もう遠い過去に見おくりつゝあるやうに、蘆花の眺めた自然觀さへも、また、その頃清新であつた表現さへも、單なる過渡期の一革命として、いつ歷史の蔭に葬むらぬと誰か保證し得やう。たとへ、スペインのウナムノのやうに、小說における自然を、絕對な邪魔物と主張するほどに、破壞的でなくともよし、近代感覺や、神經や心理の纖細な分化は、蘆花が見たやうに、自然を單なる官能の對象としてのみ、象徵的に眺めることのもどかしさに堪えざらしめて居ることは、もう疑ふべき餘地さへないやうだ。がそれだからとて、明治期における、自然觀法の一革命者としての、德富蘆花の存在が、文學史上に、相當した地位を占めることを、否認する根據には少しもならぬであらう。

婦人

蘆花翁の傑作 不如歸座談會

（出席者）
若杉鳥子　山田邦子　吉屋信子　山川菊榮
金子しげり　岡本かの子　島中雄作　婦人記者

■如何なる標準で婦人の職業を擇ぶべきか……東京府職業紹介所長 豊原又男

■ひいきの話―他人へのひいき自分へのひいき―（優越欲から見た青年女性）……青木教授

■現下の三大經濟問題……高橋龜吉

妻の出産

◆憎むべき父……橋爪健
◆招かれざる客達……太田黒克彦
◆父となる經驗……高橋邦太郎
◆銀座―世田ケ谷……鈴木彦次郎
◆數倍の不幸……小野宮吉

■風變りな松茸料理
■休銀と預金……大山覺威
■歌夢・其他……栗原潔子
■花占の頁……河井醉茗
■漫畫漫文……前川千帆

■映畫界の寵兒ジョン・バリモア……森岩雄

■繪畫講座（鑑賞の標準）……松本亦太郎博士

■今日の避姙法はどの程度まで奏效するか？……小池四郎

■宵話
◆隣のラヂオ……田中
◆へんな言葉……伊曾部
◆お孃さん……渡邊

■黑い繪具……原阿佐緒

公論

創作欄

■短篇小說 空の袋……細田源吉

■長篇小說 顯現……谷崎潤一郎

■長篇小說 愚人の唄……正宗白鳥

■長篇小說 憂鬱な愛人……松岡

■保護者の觀たる入學試驗撤廢案……二十一名士

■瀨戸物の話……田村松魚

■成功と失敗 家庭の副業

■氣味惡き會見……西條八十

◆養兎の話……北川千代

◆年に千二百圓儲かる小鳥

◆養鷄の話……牧口博光 本誌記者

■本文と廣告……島中雄作

■秋の婦人衞生……北井博士

■今月の問題……吉野博士

■世界一のモデル……古莊國雄

■子供のお辨當——そのお菜は？……四十五家庭

■子供を舊派の役者にしたことに就て……小山内薫

■モダンガールの着物の着方……三須裕

■白粉なしの化粧法……早見君子

■クリームの使ひ分け方……メイ牛山

十一月號

■今秋の流行界

（一）婚禮衣裳と七五三祝……（松屋）

（二）着物・羽織・帶……（松屋）

（三）關西の流行界……（大丸）

（四）今秋冬流行ショール……（松坂屋）

◆價七十錢郵稅二錢◆

中央公論社

（振替東京三四番）

◇長崎高等商業學校教授　伊東勇太郎氏新譯◇

大好評

全譯 チユード

人間愛の宿命悲劇

《諸新聞雜誌の批評よく賣行激甚》

チユードは歐洲文壇の巨星トマス・ハアデイ翁屈指の傑作中最も深刻にして最も寫實的な而して最も藝術的香氣高きものである。主人公チユードと從妹と舊師とを遶る戀の三角關係・熱烈火の如き學問の思慕と執拗蛇の如き愛慾の追窮とに若き魂をさいなまる丶主人公の苦悶人生の暗黑面に弄ばれて生存を悲觀し弟妹を道連としてみづから縊る丶凄愴なる幼年自殺等をテーマとせる作者得意の宿命悲劇で全篇叡智と人間愛と哀愁と抒情味に輝き顫へてをる。譯筆極めて精嚴一字半句に拈じせる陶趣微韻をも苟もせず流麗にして雄健創作に優るものがある。この泰西の名花が斯くも完全に我が藝苑に移植せられた事は我文壇近時の快事である。吾等は此の思想と暗示とに富む近代の名作を味讀して人生を考へ直さなければならぬ。

《名文章家として世既に定評ある》

《著者が堂々原稿紙一千五百枚に》

《心血を濺いで成りし模範的譯書》

四六判最上製美本
八ポイント二段組
紙數五百餘頁箱入

正價金貳圓八拾錢
送料十八錢

瀧本二郎新著

世界性業婦制度史

《本書は世界を通じて古來の風潮及其變遷よ》

《り現代性業法規施設迄の經緯を詳細に說く》

性業と現代宗教は相容ないが往時は賣淫を宗教儀式上必要な行爲として強制した!! 道德は性業を惡弊と難じるが一度は果すべき人類の義務だと教へた時代もある又遊廓を官營とし性業を獨占した國もあつたのである然し思想の進化道德の純化は公娼不認可主義に移つて行つた。本書は世界各國の道德宗教社會思想の變遷が性業を通じて美術文藝に表現した陰影や其時代の制度及文化に及した影響を述べ更に性業法施行迄の經緯を說たから社會問題婦人問題研究者には必讀の書である。

四六判最上製本
九ポイント組箱入
紙數五百八拾頁

正價金貳圓八拾錢
送料十八錢

栗原寅治郎著

解り易き國際講話 **最近世界の大勢**

內容豐富記述平易一讀現時の國際政局を明かにす

（新刊）正價金貳圓　送料十二錢

春藤與市郎著

古今 **世界大海戰史**

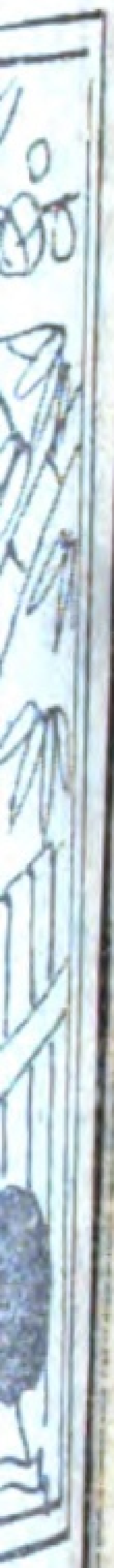
海權爭奪の爲に演じた古來幾多國民の血湧き肉躍る花々しき奮闘を記す

（新刊）金貳圓八拾錢　送料十八錢

東京市神田區表神保町七番地

■大同館發行■

振替貯金口座 東京八七貳番





神のわざ

此石は今でもまだ在るかどうか、一度是非見に行きたいと思つて居る。南津輕の黑石の町に近く、シシガサハといふ山路の傍に、周り五六尋もある大岩の面へ、大小無數の鹿の頭を彫刻したものがあつた。我々の敬慕する白井秀雄といふ旅人が、百三十年ほど前に此地を訪ねて、詳しい日記と見取圖とを遺して居る。何よりも珍しいと思つたのは、鹿の顏が素朴なる寫實であつて、しかも其耳が特に大きく、鼠などのやうに描いてある

鹿の耳

柳田國男

とであつた。さうして首雜の位置は亂で、次々に彫り加へて行つたことは疑ひが無い。岩の横手の大木の空洞には小さな石が入つて居て、それにも同じ樣な鹿の首が刻んであつたといふ。

場處は淋しい山の中であつた。どうして此樣な彫刻がこゝにあつたものか、其當時でも既に說明し得る者が無かつたさうである。土地の言ひ傳へには、たゞ神のわざであつて、每年七月七日には、一つづゝ新たな鹿の頭が彫り添へられてあるとも謂つた。附近の村々ではシシヲドリ（鹿踊）の面が古くなると、必ず此岩の脇に持つて來て埋める慣例があつたが、其由來も亦明かならずといふことであつた。奥州では村々に神樂の獅子舞と似たものがあつて、之を鹿踊といふのが普通であつた。その所謂獅子頭を權現又はゴンゲサマと稱して、面は稍細長く枝角があり、確かに鹿の頭を擬したものであつた。是と岩石の表の彫

刻と、何か關係のあつたことだけは、誰にでも想像することが出來るのである。

鹿の家

諸國の獅子舞の作法を比較して見ると、是ほど面白く內外二樣の慣習の混同した場合も少ないかと思ふ。第一には二三食用の獸類を、日本語でシシと謂つたこと、是が偶然ながらも獅子舞の普及を容易ならしめて、この輸入舞樂の幾つかの特徴が段段に固有宗教の祭儀に採用せられることになつた。カノシシ、ヰノシシの踊とても、最初から今のやうに手の込んだもので無かつたかも知れず、新舊の堺が判らぬといふよりも、或は大部分が唐樣に改まつて居るのかも知れぬ。しかも其唐獅子の頭の上に、つひ近頃まで角の痕跡が殘つて居た如く、氣を付けて見るとまだ色々の前代信仰が、却つて之に由つて保存せられて居たのである。

例へば獅子舞が惡魔を攘ふと稱して、疫病流行の際などに村中を巡ること、是も獅子だから、こはいからと、今では手輕に考へられて居るやうだが、それは所謂大法會の獅子などの本來の目的では無かつた。伎藝に携はる者の地位系統、乃至は信仰上の條件などにも、佛法からは解說の出來ぬものがあつた。村村のシシは通例三頭の連れ舞ひであつて、中ジシの役は重要であつた。牝牡相慕ふの狀を演ずる迄は石橋なども同じであるが、歌の章句には往々にして、嶺の秋霧に妻を隱されて、戀ひ求めて得なかつたといふ悲みが敍べてある。即ち大昔の牲祭り式に伴うたかと思ふ淸哀の調が、尙幽かながら傳はつて居るのである。

之を新秋七月の靈送りの頃に、行ふ土地の多かつたことも意味がある。新撰陸奧風土記に牡鹿郡鹿妻村の口碑として、鹿の供養に此踊を始めたとあるなども一つの例で、其以外にも府縣に多くの鹿塚があつて、稍似通うた歌物語を傳へて居る。古くは津の國の夢野の鹿、萬葉集に採錄せられた乞人の吟、それから和泉式部の逸話と稱する、いかでか鹿の鳴かざらんの歌の如き、久しい歲月を一貫して、我が文學も之によつて拘束せられて居た。即ち一種國民共有の情緒とも名づくべきものが、鹿の死を繞つて成長しつゝあつたことを認めるのである。

獅子舞の異國風が模倣せられる以前、我々は既にカノシシの頭を以て祭に仕へる習はしを持つて居た。是も同じく攝津國の昔話だが、原田の鹿塚の由來談の如きは、或程度まで津輕シシが澤の異聞を解說してくれるやうである。以前原田の社といふのは春日大明神の攝社であつて、毎年神職が奈良から來て祭をした。春日山の神鹿も之に伴うて來り、或時此地に於て殞れた

と傳へらる。衙門の外に共塚があつた。其より以後は神像の材を以て鹿頭を彫刻し、毎歲九月の朔日から九日迄の間、十一箇村の氏子の村を巡り渡すを以て神事としたといふのは、多分は曾て活きた獸を牽いて來た代りに、像を用ゐて古い記念を存したことを意味するのである。春日鹿島などの鹿を神使とした根原も、行く／＼は亦此方面から明らかになつて來るであらう。春日では鹿が死ぬと、之を埋葬すべき一定の靈地があつた。西大寺の邊なる小山のある處で、神宮から人が出て法事を行うたと諢海には記して居る。

京都でも清水觀音の地内に鹿間塚があつて、御堂創建に功のあつた鹿の頭を埋めたといふ口碑が傳はつて居る。斯ういふ話の一つ／＼は、到底學問の資料とするだけに、取留めたものでも無いけれども、幾つかの例を比べて見るうちには、些しづゝ我々の不審を散ずることが出來る。古い獅子舞の頭が靈寶として社寺に傳へられ、雨乞世直しに禱れば應驗があるといふなども、恐らく日本だけの昔からの信仰であつて、其が此伎藝を中繼として今日までは記憶せられたものであらう。近江の膳所の中庄の獅子森は、午頭天王獅子に乘つて此地に降りたまふといふ一說の外に、中古此邊に住んで居た鹿が死に、土人憐みてこゝに埋むとも言ひ傳へ、三州伊田の獅子舞塚なども、天子御惱の御禱りとして、六十六國に獅子頭を一つづゝ、下し賜はるともいへば、或は納められたのは獅子で無く鹿の頭で、それ故に實は鹿前塚だといふ說もあつたのである。

村の爭ひ

奧羽地方の鹿踊の鹿頭は、一般に靈あつて能く賞罰すと信ぜられたのみならず、隣同士で喧嘩をして咬み合つたといふ話が、幾つとも無く傳はつて居る。秋田縣では平鹿郡淺舞のシシ塚などが、その有名な一つの例であつた。昔大森の町から鹿踊が遣つて來て、爰で山田の鹿頭と鬪つて負けたので、それを埋めて此塚が築かれたと謂つて居た。同郡の河登といふ部落にもシシ塚の梨の木といふのがあつた。周圍五尺餘りの空洞木で、下には亦鹿踊の頭が埋めてある。是も古くシシの大喧嘩があつたので、埋めてあるのは負けた方か勝つた方か、其點は明瞭で無いが、兎に角此村へは其から以後、鹿踊が入らぬことになつて居た。同じ名前の塚は尙村々に多く、由來は何れも同樣であつたが、土地の人たちは或は之を實際的に解して、以前鹿踊の大にはづんだ時代、喧嘩の爲に傷き死する人があつて、それを埋めたものであらうと謂つたのは、全く塚まで築いて踊の面ばかりを、埋めたといふ理由が不明になつた爲で、これだけ又著しい信仰の變化が、古代を近世から引離して居たことも察せら

れるのである。

右の舊傳を錄した雪之出羽路といふ書物は、同じく白井翁の遺稿であるが、是には鹿踊を獅子舞と書いてあつた。鹿ならば殊に其樣な荒い闘爭をするわけが無いと、考へられたのも尤もなことである。併し立派に角があるのだから、何としても仕方が無い。村々の鹿踊の組が各其力を發揮しようとすると、斯ういふ衝突は免がれぬわけだつた。殊に此踊の目的は災害を我領分から追拂ふのだから、鄰村より見れば常に侵害である。双方の主張を折合はせようとすれば、爭闘が無くともやはり境の上に、塚でも築くより他は無い。それ故に必ずしも其通りの事蹟は無くとも、斯ういふ言ひ傳へは起り易かつたのである。現に東京の近くでは二合半領の戸ケ崎村に、又次の樣な話もあつた。村には古くから三つ獅子と稱して、越後獅子程の頭にの倶ある二本の角あり、鷄の毛を以て飾としたものがあつた。寶永元年の大洪水の時、水練の達者な者が之をかぶつて、夜明け前に向ふ岸へ泳いで行くと、水番をして居た人々は大蛇かと思つて、驚き怖れて逃げ散つた。其間に安々と對岸の堤を切つて還り、我村の水害を免れたと謂つて居る。是なども多分は話であつたらうと思ふ。

耳取畷

何れの土地の話でも、大抵は此程度にぼんやりしたもので、とても法官の如き論理を以て之に臨むことは出來ぬが、兎に角鹿踊の面は人間以上に喧嘩をする。だから靈がある性があると、畏敬して居た場合は多いのである。下總船形村の麻賀田神社の神寶、飛驒の甚五郎作と稱する三個の獅子面なども、面の影を水に映して後に其水を飲めば、病氣がなほるとまで信ぜられ、毎年の春祈禱には此面を被り、神を勇めて五穀豐饒を念ずるのであるが、それが靈驗あらたかといふ證據に、却つて毀れたまゝにしてあつたのも一奇である。或年祭が終つて面を箱に納める時、順序を誤つて入れて置いたら、三つの獅子が仲間喧嘩をして、箱の中で咬み合つたといふことで、今では三つながら其舌を拔いてある。即ち巨勢金岡の馬が、夜な〳〵出でゝ萩の戸の萩を食つた類であるが、咬み合つたから舌を拔いたとは少しばかり平仄が合はぬ。又一つの獅子の眼の球が破裂して居るのも、曾て産の忌ある者が手を觸れたからと謂つて居る。是などもやはり其理由が現代を超越して居るのである。

そこで立戻つて奧羽のシシ塚の話になるのだが、我々の感じて悟らねばならぬ二つの問題は、負けたにせよ勝つたにせよ、喧嘩をしたから塚の中に埋めるといふのはどうしたわけか、一方には古び且つ損じた面でも、修繕もせずに大切にして拜して

居る例もあるのに、斯ういふ元氣横溢の鹿頭を埋めてしまつたといふのは、即ち塚が生存の終局を意味せずして、何か新たなる現實の開始であつたからでは無いかといふこと是が一つ、第二には木で作つた鹿の頭が、喧嘩をしたといふのはどうすることを意味したか。殊にその勝つたとか負けたとかは、何を以て決したかといふことである。是が單なる想像上のものであつたら、少なくとも負けた方の村が承知し得なかつた筈である。

遠野物語にも既に一つの例を擧げてあるが、あの地方では尙處々に同じ話が傳へられる。權現樣が喧嘩をしたといふ場合には、多くは一方が耳を食ひ切られたことになつて居て、現に今ある御面にも耳のちぎれた儘のものがある。是を後代の假托とするときは、各村うそ話の申し合せをしたといふ結論に歸着せねばならぬのみならず、そんな奇に過ぎたしかも名聞にもならぬ說明を備はずとも、他に幾らでも神異を宣揚する途はあつたのである。故に誤解にしても共通の誤解、隱れたる原因の之を一貫するのが、曾てあつたことを想像してよろしい。自分が津輕シシが澤の大磐石に、特に耳を大きく彫刻した鹿の額を見て、さてこそと膝を折つたも故無しとはせぬのである。

或は一方が特に耳大きく、他の一方では咬み取られてもう無いといふに、何の關係かあらんと訝る人もあらうが、兎に角に鹿の耳は東北地方に於て、可なり重要なる昔からの問題であつたのだ。先づ順序を立てゝ話を進めて行かねばならぬが、秋田縣でも仙北郡の北楢岡では、或年龍藏權現の獅子舞と、神宮寺八幡宮の獅子頭と衝突をしたことがあつた。神宮寺のシシは耳を取られたと稱して、今も其故迹を耳取橋と呼んで居る。其時一方の龍藏權現も鼻を打缺かれて、其儘長沼に飛込んで沼の主となつてしまつた。それ故に沼の名を又龍藏沼といふとある。耳を失つた神宮寺のシシは如何なつたか。今では多分尋ねて見てもわかるまいが、自分はそれよりも尙多くの興味を、耳取橋といふ地名に就いてもつて居るのである。

勿論獅子頭の嚙み合ひといふが如き、奇拔な原因の一致する筈も無いが、不思議に耳取といふ土地は府縣に多く、それが又大抵は部落の境などにある樣に思はれる。福島市の近くでは、信夫郡の矢野目丸子の間を北に流れて、伊達の鎌田村で八反川に合する小流を、耳取川といふなども一つの例である。鎌田の水雲(ミクマリ)神社は其川の岸に在つて、昔御神體が流れて來て此地に漂着し、それを拾ひ上げて安置したから御耳取揚川などいふ說もあつたが、別に其地名の由來として、此川に妖怪住み、夜每に出でゝ行人の耳をもぎ取つた。其怪物を神と祭り、由つて川の名を耳取と稱すとも謂つて居る。しかも此地

方には他にもまだ耳取といふ地名はあるので、いくら妖怪でもさう〱は人の耳を取つてばかりも居られなかつたかと思ふ。ところが遠く離れて三州小豆阪の古戰場近くにも、やはり耳取畷があつてよく似た話を傳へ、日暮れて後此路を通ると、變化の者出現して人の耳を引切り去ると謂つた。此以外に尙方々に耳取といふ字が、通例往還の傍などにあるのだが、果して斯な口碑をもつか否かを知らぬ。人が地名などは何の意味無しにも、存在し得るかの如く考へ始めてから、尋ねて聞かうともせぬ様になつたのであらう。さうで無ければ自由なる空想を以て、所謂常識に合した解說を下し、或は記憶の不精確を補はうとしたやうである。九州では南端薩摩の坊津から、鹿籠の枕崎に越えて來る、境の嶺が耳取峠であつた。開聞岳をまともに見る好風景の地であつたが、冬は西北の寒風が烈しく吹付けて、耳も鼻も吹切るばかりであつた故に、斯んな名前を付けたと說明せられて居る。それが始めて此名を呼んだ人々の、心持で無かつたことは確かであるが、さりとて三河や岩代の妖怪談が、全國無數の耳取を說明し得べしとも思はれぬ。ただ幾分か古くして且つ案外であるだけに、或はまだ偶然に何等かの暗示を、與へはせぬだらうかと思ふだけである。

全くつまらぬ小さな問題に、苦勞をする人もあつたものだ。實際どうだつていゝぢや無いか知らぬが、是がはつきりせぬと我々の前代生活に、闡明せられぬ點が一つ多く殘るのである。史學はあらゆる方法と資料とを傾けて、久しい努力を續けたけれども徒勞であつた。平民の過去の暗さは神代も近世も一つである。若し他に些しでも辿るべき足跡があつたとすれば、之を差置いて今更何物の來るを待たうか。しかも地名は有力なる國民の記錄であつて、耳取は至つて單純なる二つの語の組合せに過ぎぬ。各地別々の動機に基いて、結果ばかりの一致を見るといふことが無い以上、必ず全國を通じて曾てはさういふ名稱を發生させるだけの、一般的生活事情があつたものとしてよいのである。それを尋ねて見ようとするのは、別に無益の物ずきでも無いと思つて居る。

生贄の徵

但しさういふ理屈ばかりこねても、凡その見當が付かなければ何にもならぬ。自分の推測では、耳を取られるといふ様な平凡で無い昔話が、何等の經驗にも基くことなくして、そこにも爰にも偶發することはあるまい。夢であつても夢の種はあらう。いはんや只の誤解であり誇張であつたとすれば、すべての歷史が學問に由つて精確になつて行く如く、必ず元の事實が其・

陰に隠れて居るのである。幸ひにして若干の手掛りは既に發見せられた。或地の耳取橋に於て耳を取られたといふのは、祭の式に奉仕する靈ある鹿の頭であつた。事によると生贄の慣習が夙く廢せられて後、その印象深き一部分のみが、斯うして幽かに記憶せられたのかも知れぬ。假にさうだつたら我々の信仰史の、重要なる變化の跡である。是非とも一應は考へて見なければならぬ問題である。

魚鳥を御贄とする神の社は、現在尚算へきれぬ程多い。諸國の由緒ある舊社に於て、獣を主とした例も少なくはなかつた。九州では阿蘇、東國では宇都宮、又信州の諏訪の如く、特に祭の日に先だつて狩を行ひ、供進の用に充てた場合には、鹿はその氣高い姿、又さかしい眼の故を以て、最も重んぜられたことも疑が無い。ところが奈良の春日の若宮などでは、御祭の贄に澤山の狸兎猪の類が集められたけれども、鹿のみは靈獣として其列に加はらなかつたらしいので、或は異議を挾む餘地があるやうだが、是は寧ろ其地位の一段と高かつた證據になる。イケニエとは活かせて置く牲である。早くから神用に指定せられて、或ものは一年、あるものは特殊の必要を生ずる迄、之を世の常の使途から隔離して置く爲に、其生存には信仰上の意義が出來たのである。諸處の神苑に鹿を養うたのも、恐らくは之を起原として居る。八幡の放生會の如きも、佛者には別様の説明があるが、要するに彼等の教條と觝觸せざる部分だけ、在來の牲祭の儀式を保存したものであらうと思ふ。

片目の魚の傳說は此推測を裏書する。即ち社頭の御手洗の水に住む魚のみが、何等かの特徴を以て常用と區別せられたので、實際又斯うして一方の目を取つて置くのが、昔の單純なる方式でもあつたらしい。耳ある獣の耳を切るといふことは、之と比べると更に簡便であり、又牲の生活を妨げることが少なかつた。最初は我々が野馬に烙印し、若くは猫の尻尾を切る如く、常人の家畜乃至は俘虜などにも、斯うして個々の占有を證明したかも知らぬが、後には方法其もの迄が、神の祭に限られることゝなつて、追々に普通の生活からは遠ざかつて行つたらしいのである。

牲の頭が繪となり彫刻となつて、終には崇高なる感情を催すだけの、一種の装飾となつてしまつたことは、希臘の昔などと同じであつた。たつた一つの相異は日本の學者が、今まで神樂のお獅子に對して、根原を問はんとしなかつた點である。さうして生贄の耳を斷つといふことは、珍らしい例でも何でもなかつた。日本でも諏訪の神社の七不思議の一つに、耳割鹿（ミミサケジカ）の話があつた。毎年三月酉の日の祭に、俗に御俎揃

へと稱する神事が前宮に於て行はれる。本膳が七十五、酒が七十五樽、十五の俎に七十五の鹿の頭を載せて供へられる。鹿の頭は後には諸國の信徒より供進したといふが、前は神領の山を獵したのである。其七十五の鹿の頭の中に、必ず一つだけ左の耳の裂けたのがまじつてゐた。「兼て神代より贄に當りて、神の矛にかゝれる也」とも謂つて、是だけは別の俎の上に載せた。諸國里人談には「兩耳の切れたる頭一つ」とあつて、何れが正しいかを決し難い。兎に角に是は人間の手を以て、切つたので無いから直接の例にはならぬが、耳割鹿で無ければ最上の御贄となすに足らなかつたことは窺はれる。或は小男鹿の八つ耳ともいつて、鹿の耳の往々にして二重であつたことを說くのも、斯うして見ると始めて其道理が明かになるのである。

名馬小耳

六百七十年前の諏訪大明神畫詞に、次の様な奇瑞譚が出て居るのを見ると、生贄の耳を切る方式は、此頃早既に絕えて居たのである。曰く信濃國の住人和田隱岐前司繁有、當社頭役のとき流鏑馬のあげ馬闕如して、一族に石見入道と云ひける者、黑駮の良馬を立て飼ひけるを借用しけるに、古論の宿意ありて借與に及ばず、且つは使者の詞をだにも聞入れざりけり。祭禮の日に當つて、此馬俄かに病惱して既に斃れんとしけるが、左右の耳忽ちに失せにけり。奇異の思をなしてつら〱思案するに、揚馬に借られたりし事を思ひ出で、神道に種々の怠りを啓し幣を附けて本社の神馬に獻じければ、病馬立ちどころに平癒して、水草の念も本に復しけり。兩耳は漸ら出現しけれども、もとの如くにはあらざりけり。近年當社に小耳といふ名馬は則ち是なりと。即ち耳の消滅に由つて神の御用に心づく迄の、傳統はまだ絕えて居なかつたのである。

切るのが必ず耳でなければならなかつた所以は、此等の動物の習性を觀察した人ならば知るであらう。耳で表現する彼等の感情は、最も神秘にして解しにくいものである。常は靜かに立つて居て、意外な時に其耳を振り動かす。だから外國にも之を以て幽冥の力を察せんとした例が多い。佐々木喜善君の鄕里などでは、出産の場合に山の神の來臨を必要とする信仰から、馬を牽いて御迎へに行く風が今も行はれて居るが、馬が立止つて耳を振るのを見て、目に見えぬ神の召させたまふ徴とする。故に遠く山奥に入つて日を暮らすこともあれば、或は門を出ること數步にして、すぐに引返して來ることもあるといふ。數ある鹿の子の中から孰れを選みたまふかを卜する場合にも、恐らくはもと耳の動きを見たので、それが自然と切るならば耳といふ

ことに、定まつたものでは無いかと思ふ。

所謂占ベ肩燒の用に供せられた鹿なども、必ず豫め神意に基いて、之を選定する樣式があつたのである。それがもし自分の想像する通り、嚴重の祭典と終始したとすれば、之を耳切り若くは牽き來つて屠つた場處も、永く神德を記念すべき靈地であつたらう。石を存し樹を植ゑ、土を封して塚とする最初の目的は、常人の拓き耕すことを防ぐに在つた。諸國の獅子塚が屢々靈ある獅子の頭を埋めたと傳へるのは、若し誤聞で無いならば則ち此古風の踏襲であつて、奧羽地方の鹿踊のわざをぎと、之に伴なふ幾つかの由來談とは、たま〳〵中間に在つて、能く過渡期の情勢を語るものであつた。

耳塚の由來

尙此と關聯して考へられる一事は、京都の大佛の前に在る耳塚が、純乎たる近世史の史蹟では無いらしいといふことである。大閤秀吉の朝鮮征伐は、成程つひ三四百年前の出來事だが、京都人の好奇心はそれから後にも數々の傳說を發生せしめて居る。だから耳塚の如きも只の話かも知れぬと、自分などは何て考へて居たのであるが、實際は方々の諸侯家に、確かなる證文が殘つて居るといふ。但し其證文に依ると、朝鮮から鹽に漬けて送つて來たのは鼻であつた。之れを何故に耳塚と稱ばせたかに至つては、やはりまだ解決せられざる疑問である。ところが國々には此以前の同名の塚が、よくも捜して見たいのに既に十何箇處とある。古くして而も京都の耳塚に似て居たのは、筑前香椎の濱に在つた耳塚、是は延寶年間に發いて見たが、內は僅かに三間ばかりの石室で、四尺程の刀のみが納めてあつた。それを畏れ多くも神功皇后の御事蹟に、久しい前から附會して居たのである。伊豫の新濱の耳塚山なども、今は塚處の有無さへ明かでないが、やはり越智益躬が播州蟹阪に於て、外寇の賊將鐵人及び其從者を誘ひ殺し、其耳を馘して持還つて埋めたと傳へて居た。丸々歷史には無ささうな話である。

之に由つて考へて見るのに、耳塚は謂ふが如き異賊退治の決算報告では無くして、寧ろ今後の侵犯に備ふべき豫算の如きものではなかつたか。江戶でも上澁谷の長泉寺の境內に、加藤清正が朝鮮から取つて來た耳を埋めたといふ耳塚があつたさうだが、斯うなると全く信じにくい。それから武藏野に入つて行くと、府中の西南分倍川原の地續きにも、亦小さな耳塚があつたが、附近に弘長年間の古碑があつたといふのみで由來は知れず、其上になほ頭塚だの堂塚だのもあつて、いくら古戰場でも成程とは言へなくなる。其他備前の龍ケ鼻の耳塚、日向の尾谷

の耳円塚の如きも、單に古城の近く又は古戰迹であるから、空漠たる想像が浮ぶといふのみで、實は後からさういふ名を付したのかも知れなかつた。

信州でも有明山の麓の村に、可なり有名なる耳塚傳說があつた。田村將軍に滅ぼされた中房山の大魔王、魏石鬼(ギシキ)の耳を切つて埋めたと稱し、是にも亦首塚立足村等の地名由來談が附隨して、頗る我々の蚩尤傳說と名くるものに接近して居る。規模に於ては勿論京都の耳塚に劣るが、其宗教的威力に至つては、或は彼を指導するに足るものがあつた。死屍を分割して三つ七つの塚に埋めたといふ口碑は、大抵は山と平野、若くは二つの盆地の境などに發生する。密教の方には之を說明する教理も出來て居るらしいが、要するに無類の慘虐を標榜して、外より來り侵す者を折伏する趣旨に出たものらしく、しかもそれは近代の平和生活に對しても、多少の實用ある言ひ傳へであつた。土佐の本川郷の山奥などにも、伊豫との堺に接して耳塚があつた。「曾て豫州の者數十人竊かに材木を取る。追つて之を捕へ耳切りて之を埋めたりといふ」と土佐州郡誌には記してあり、寺川郷談には「以前盜人の耳をそぎ、箱に入れ御城下へ出し、其後御境目へ埋め置き候やう申し來り、即ち埋めて今耳塚といふ」ともある。果して其通りの事があつたか無かつたか。あやふやな所に深い意味があつたやうに思ふ。

境の殺戮

併しそれだけの事由では、まだ耳塚といふ如き小さな名稱が、獨立して永く記念せられるには足りなかつた。是にもやはり獅子舞の御獅子が耳を咬み切られたと云ふ類の、古い神話が來て助けたのである。即ち耳取りが境の威力の大切なる條件であることを記憶する人々が、この口碑の成長にも參與して居たのである。或は之に基いて塵よりも今一つの以前の、大昔の生贄慣習を尋ねることが出來るかも知れぬ。實際我々の祖先が信じて居た靈魂の力は、餘程今日とは違つて居た。例へば味方の靈でも死ねば害をしたと同じく、敵の怨靈も祭り樣によつては利用する途があつた。殊に堺の山や廣野には、寧ろ兇暴にして容赦の無い亡魂を配置して、不知案内の外來者に襲撃の弋を向けしめようとしたことは、必ずしもよその民族の遠い昔のためしではなかつたのである。人を賴んで川の堤の生柱に立つてもらひ、後に之を水の神に祭つたといふ話などは、勿論たゞ話であらうがあちらこちらに殘つて居る。黑鳥兵衛だ東尋坊だといふ惡漢が、死ぬると直ぐに信心せられたのも、祟るから祭つたのだといふ說明だけでは、まだ合點の行かぬ所がある。恐らく

人間の體内には神と名けてよい部分が前からあつて、それが此上も無く一般の安寧の爲に、必要なものと信ぜられた結果、時としてはわざ〳〵之を世俗の生活から、引離して拜まうとした風習が曾てあつたので、勿論現在の生死觀を適用して見れば、到底忍ぶべからざることには相違ないが、其豫定があつてこそ始めて生牲といふ語が了解せられる。即ち死の準備の或期間が、人を生きながらの神とも爲し得たので、鹿の耳切りは必ずしも鹿を以て始まつたる方式で無いかも知れぬ。

至つて古い時代の民間の信仰が、獨り其形體を今日に留めて、本旨を逸失した例は無數にある。近世文學の中に散らばつて居る神恠奇異にも、詩人獨自の空想の所産なるが如く、我も人も信じて居て實はさうで無いものが多かつた。久しい年代の調練に依つて、隱約の間に養はれて居た思想が、無意識に折々顏を出すのである。由緒ある各地の行事の中にも、同じ名殘は尚豐かに見出される。獅子舞などが既に平和の世の遊樂になつて居ながら、屢殺拔なる逸事を傳ふるも其爲である。伊勢の山田の七社七頭の獅子頭が、常は各町の鎭めの神と祭られつゝ、正月十五日の終夜の舞がすんで後に、之を山田橋の上に持出して刀を揮うて切拂ふ態を演じ、即座にこれを舞衣に引くるんで、元の社に納めたといふなども、假に如何樣の解説が新たに具はつて居やうとも、到底後の人の獨創乃至は評定を以て發案せられ

類の趣向では無かつたやうである。

耳切團一

そこで話は愈々近世の口承文藝の、最も子供らしく且つ荒唐無稽なる部分に入つて行くのであるが、自分たちの少年の時分には、「早飯も藝のうち」といふ諺などもあつて、いつ迄も膳にかぢり付いて居ることが非常に賤しめられ、多くの朋輩と食事を共にする場合に、大抵は先に立つ者が殘つた者の耳を引張つた。痛いよりも耻がましいので、所謂鹽踏みの奉公人などが、淋しい涙を飜す種であつた。どうして耳などを引くことになつたのかと、子供の頃から不審に思つて居ると、嬉遊笑覽卷六の下、兒童遊戲の鬼事の條に、鬼になつた者が「出ずは耳引こ」と謂つて、柱にばかりつかまつて居る者を挑むことが記して居る。鷹筑波集に塚口重和、出ずは耳引くべき月の兎かな。即ちもう俳諧の連歌の初期の時代から、鬼事の詞となつて我々に知られて居たのである。

鬼事の遊びのもと模倣に出でたことは、其名稱だけでも證明せられる。以前諸國の大社には鬼追鬼平祭などゝ稱して、通例春の始めに此行事があつた。學問のある人は之を支那から採用

したと謂ひ、又は佛法が其作法を教へた樣にも謂ふらしいが、何かは知らず古くから鬼が出て大にあばれ、末には退治せられる處を、諸國僅かづゝの變化を以て、眞面目に神前に於て、日を定めて演出したのであつた。而して子供は特に其前半の方に、力を入れて今以て眞似て遊んで居る。耳を引くといふ文句も其引繼ぎであつたかも知れぬ。さう考へてもいゝ理由があつたのである。

小泉八雲氏の怪談といふ書で、始めて知つたといふ人は却つて多いかも知れぬ。亡靈に耳を引きむしられた昔話が、つひ此頃まで方々の田舍にあつた。被害者は必ず盲人であつたが、其名前だけが土地によつて同じでない。小泉氏の話は下ノ關の阿彌陀寺、平家の幽靈が座頭を呼んで平家物語を聽いたことになつて居り、その座頭の名はホウイチであつた。面白いから明晩も必ず來い。それ迄の質物に耳を預つて置くと言つたのは、頗る宇治拾遺などの瘤取りの話に近かつたが、耳を取るべき理由は實は明かでなかつた。

ところが是と大體同じ話が、阿波の里浦といふ處にかけ離れて一つあるので、右の不審が稍解けることになる。昔團一といふ琵琶法師、夜になると或上臈に招かれて、知らぬ村に往つて琵琶を彈いて居る。一方には行脚の名僧が、或夜測らずも墓地を過ぎて、盲人の獨り琵琶彈くを見つけ、話を聽いて魔障のわざと知り、からだ中をまじなひして遣つて耳だけを忘れた。さうすると次の晩、例の官女が迎へに來て、其耳だけを持つて歸つたといふので、是は今でも土地の人々が、自分の處にあつたもの〻やうに信じて居る。耳を取つたのが女性の亡魂であつたこと〻、僧が法術を以て救はうとした點とが明瞭になつたが、それでもまだまじなひの意味がはつきりしない。

それを十分辻褄の合ふだけの、物語にしたのが、曾呂利物語であつた。江戸時代初期の文學であるが、此方が古くて前の話が其受賣だともいへないことは、讀んだ人には容易にわかる。是は越後の座頭耳きれ雲一の自傳とある。久しくおとづれざりし善光寺の比丘尼慶順を、路の序を以て訪問して見ると、實は三十日程前に死んで居たのであつたが、幽靈が出て來て何氣無く引留め、琵琶を彈かせて毎晩聽き、どうしても返すまいとする。それを寺中の者が注意して救ひ出し、馬に乘せて遁がしてやつた。後から追はれて如何ともしやうが無いので、或寺にかけ込んで事情を述べて賴むと、一身にすき間も無く等勝陀羅尼を書きつけて、佛壇の脇に立たせて置いた。すると比丘尼の幽靈が果して遣つて來て、可愛いや座頭は石になつたかと胸中を撫でまはし、耳に少しばかり陀羅尼の足らぬ所を見つけて、

愛にまだ殘り分があつたと、引ちぎつて持つて行つたと言つで、其盲人には片耳が無かつたのである。

其話なら私も知つて居ると、方々から類例の出ることは疑が無い。此民族がまだ如何にもあどけなかつた時代から、否人類が色々の國に分れなかつた前から、鬼に追はれて逃げて助かつたといふ話は、幾千萬遍と無く繰返して語られ、又息づまる程の興味を以て聽かれたのである。それが極少しづつ古臭くなり、人の知慮が又精確になつて、段々に新味を添へる必要を生じた。そこへ幸ひに耳の奇聞が手傳ひに出たといふ迄である。鬼や山姥に追はれた話でも、大抵は何か之に近い偶然を以て救はれたのみならず、其記念ともいふべき色々の痕跡があつた。蓬と菖蒲の茂つた數に入つて助かつた。故に今でも五月にはこの二種の草を用ゐて魔を防ぐのだといふ類である。古い話の足掛かりのやうなものである。さうすれば座頭其者がやがて又、見るたびに此話を思ひ出さしめる一種の大唐櫃や、蓬菖蒲の如きものであつたとも言へる。

旅の御坊

つまり小泉八雲氏の心を牽いた耳無法一の神異談は、彼が父母の國に於ても今尚珍重せられる所謂靈驗說話と、異郷遊寓談との結び付いたものゝ、末の形に他ならぬのであつた。西洋では說話運搬者の說話に與へた影響は、まだ本式に研究し得なかつたやうだが、日本には仕合せと其證迹が、見落し得ない程に豐富である。殊に盲人には盲人特有の、洗練せられたる機智が認められる。例へば江戸川左岸の或村の話で、鬼が追掛けて來て座頭の姿を發見し得ず、僅かに耳だけが目に觸れて、おお愛にキクラゲがあつたと謂つて、取つて喰つたと語つて居るなどは、盲人の辯にと言ひたいが、實は目くらだから考へ出した、やや重くるしい滑稽である。そんな例は氣を付けて御覽なさい。まだ幾らでもあるのである。

實際座頭の坊は平家義經記のみを語つて、諸國を放浪することも出來なかつた。夜永の人の耳の稍倦んだ時に、何か問はれて答へるやうな面白い話を、常から心掛けて貯へて置いたのである。然らば耳の切れた盲人が何人もあつて、御坊其耳はどうなされたと、尋ねられるやうな場合が多かつたかと言ふに、さうかも知れず、又それ程で無くともよかつたかも知れぬ。片耳の變にひしやげたり、妙な格好をした人は存外に多いものだ。さうで無くとも目の無い人だから、耳の話が出る機會は少なくはなかつたらう。耳と申せば手前の師匠は、片耳が取れてござつたなどと、そろそろと此話を出す手段もあつたわけだ。さう

して其話といふのは實に一萬年も古い舊趣向に、現世の衣裳を着せたものであつた。故に今爰で我々の不思議とすべきは、其話の存在や流布では無い。單に何故にさういふ耳切の話が、盲人に由つて思ひ付かれ又持運ばれたかといふ點ばかりである。

即ち澤山の盲人が懸離れた國々をあるいて、無暗に自分たちの身の上話らしい、妖魔遭遇談をしたのが妙である。其說明を試みても、そんな事があらうかと怪み疑ふ人すら、今日ではもう少なからうと思ふが、それでも何でも自分は證據が擧げたい。つまり座頭は第一に自分たちが無類の冒險旅行家であることを示したかつた。第二には技藝の賴もしい力である。第三には神佛の冥助の特に彼等に豐かであつたこと、第四には能ふべくんば、それだから座頭を大切にせよの利己的教訓がしたかつたのかと思ふ。此條件を具足してしかも亭主方の面々を樂しましむべき手段が若しあつたとしたら、之を一生懸命に暗記し且つやたらに提供することも、即ち亦生活の必要であつた。

山神と琵琶

村の人は村に居て聽く故に、大抵は土地ばかりの舊事蹟と考へたのである。さう考へさせることも亦有力なる技術であつた。座頭辭し去つて數百年の間、それが物々しく保存せられ、次第に近郷の人々に承認せられると、再び說話は其土地に土著するのである。今日ではもう信じにくいといふことは、少しも農民をうそつきとする理由にはならぬ。古くからある物は誰だつて粗末にはしない。

一例を擧げると羽前の米澤から、越後の岩船郡に越える大里峠、一名折峠又蛇骨峠座頭峠ともいふ。頂上には大倉權現が祭つてある。昔々一人のボサマ、日暮れて此嶺に獨宿し、寂寞の餘りに琵琶を彈じて自ら慰めた。時に女性の忽然として現れ來る者あつて、曲を聽いて感歎止まず、且つ語りて曰く、我は此山中に久住する大蛇である。近く大海に出でんとすれば、闕の一谷は水の底となるであらう。必ずあの村に長居はしたまふな。又命にかけて此事を人に洩してはならぬと告げた。それにも拘らず夜明けて闕谷に下るとき、意を決して之を村の人に教へたので、盲人は立ちどころに死し大蛇も亦村人の爲に退治られた。其盲人が頂上の祠の神であるともいへば、或は惡蛇の靈を祀るといふのは、兩方とも眞實であらう。最近の傳說では大倉權現は盲女おくらの怨靈、獵夫鯖七の女房にして禁肉を食つて蛇となる者とも謂つて居るさうである。

然るに同じ米澤から更に他の一人の座頭が、北に向つて大石田越といふ山路で、略同樣の功を立てゝ死して亦神に祀られて

居る。大石田に於ては森明神といふのが其盲人の靈であつた。或時山中を過ぎて一老翁に逢ひ、琵琶の一曲を所望せられ、傍の石に坐して地神經を彈じたとある。老人感歎してさて曰く、謝禮の爲に教へ申すべし、今宵は必ず大石田に宿りたまふべからず云々、それから後は例の如く、村民は何とかして恩人の命を助けようと、唐櫃の中へ三重四重に隱して置いたが、開けて見たれば寸々に切られて死んで居たといふ。

越後では尙小千谷の町の南はづれ、那須崎の地藏堂にも同じ話があつた。盲人は蛇の害の迫れることを語るや否、血を吐いて忽ち死んだが、里の人たちは早速手配をして、鐵の杭を山中の要路に打込み、豫め防遏することを得たりと誌されて居る。大蛇に取つては鐵類は大毒であつた。故に大利峠の蛇精の女なども、一番嫌ひなものは鐵の釘だと、うつかり座頭に話した爲に退治られたと言ひ、關谷の村には鍛冶屋敷の迹さへあつた。信州では山に法螺崩れと蛇崩れとがあつた。蛇崩れの前兆には山が夥しく鳴るので、直ちに檜木を削つて多くの橛を作り、それを其山の周圍に打込むと、蛇は出ること能はずして死んでしまひ、年經て後骨になつて土中から出る。それを研末して服するときは癎病を治すなどゝも謂つた。即ち盲目の教を待たずして、既に之を防ぐの術は知られて居たので、或は座頭が其受賣をしたのだと思ふ者があつても、さう立派に反對の證據を擧げることは出來なかつたのである。

盲の効用

それにも拘らず、座頭が此話をすると人がさも有りなしと考へたのは、單に話術の巧妙ばかりでも無かつたと見えて、今では何處に行つても彼等だけで此話を持切つて居る。まだ他の府縣にもあるだらうと思ふが、自分の今知つて居るのは磐城の相馬にも一つ、常房(ダイボ)の釋師堂様といふ池の神が、或時信心の盲に目をあけて遣つて、斯んなことを敎へたといふ話である。自分は近いうちに小高の一郷を湖水にする企てがある。それを人にいふと汝の命を取るぞと、堅く戒めて置いたが本人は身を捨てゝ里人に密告した。小高の陣屋では之を聞いて、領内に命じて澤山の四寸釘を打たせ、それを四寸置きに丘陵の周圍に差込ませた。蛇は鐵毒の爲に死して切れ〳〵となり、それの落ち散つた故跡として、今に胴阪角落村耳谷などゝいふ地名がある。しかも折角目の開いた盲人は旋風に卷上げられて行方知れず、琵琶塚ばかりが後代に遺つて居る。此邊からは實際鐵の屑が出るといふのは、或は此話の鍛冶屋と合作であつたことを語るものかも知れぬ。

伊豆では又三島の宿の按摩の家へ、夜になると遊びに來る小僧があつた。後に來て言ふには、我は此山を七卷半卷いて居る大蛇である。毎日往來の人馬に踏まれる苦しさに、大雨を降らせて此邊を泥海にして出て行かうと思ふ。御身一人は逍れたまへ。人に語ると命を取ると謂つた。人助けの爲に其秘密を明かし、山に鐵の杭を繁く打込んで終に大蛇を殺させたが、一村は難を逃れて按摩は死んだ。其石像を作つて香火永く絶えずといふのは、果して今もあるかどうか。兎に角に此山とは箱根のことであつたらしく、話が按摩になつてはもう關係も薄いが、實は水土の神の蛇體は、佛教の方では琵琶を持つ女神で、且つ夙くから琵琶を彈く者の保護者であつた。座頭の地神經は其神德をたたへた詞である。農家が四季の土用に彼を招いて琵琶を奏せしめたのも、最初の目的は其仲介に由つて、神の御機嫌を取結ばう爲であつた。故に村民は言はゞどんな話を聽かされても、默つて承認せねばならぬ關係に在つたのである。

盲人が此技藝に携はつてからの、歴史だけはもう大分わかつて居る。今更そんな事を述べて居れば只の編輯になつてしまふ。それよりも理由が知りたいのは、どうして日本に入つて琵琶が當道の業となつたかである。何故に盲が大蛇の神の神職を獨占したかである。此疑問に對しては耳切團一の話が、やはり有力なる一つの暗示であつた。自分の想像では生牲の耳を切つて、暫らく活かして置く慣習よりも今一つ以前に、わざと其目を拔いて世俗と引離して置く法則が、一度は行はれて居たことを意味するのではないかと思ふ。日向の生目八幡に惡七兵衛景淸を祭るといふなども、或は琵琶法師の元祖が自製の盲目であつたといふ幽かな記憶に、ローマンスの衣を著せたものとも解せられぬことは無い。兎に角に此徒が琵琶の神即ち水底の神から、特別の恩顧を得た理由が、目の無いといふ點に在つたことだけは略確かであつた。

蛇と盲目

さうすると、自分などの斯ういふ思ひ切つた假定說のやうなものを批評する場合に、昔からよく聞く「めくら蛇にをぢず」といふ俗諺なども、今一度とくと其起原を考へて見る必要はあるまいか。元來目あきが蛇を畏るゝ道理も、實はまだ明白でも何でも無いのだが、我々の流義ではそれを究めやうとはしない。單に畏れて居るか否かを問うて、靜かに其事實の何物かを語るを待つだけである。併し少なくも盲の蛇を畏れざる所以を、なんにも知らぬからであらうと速斷したのは誤りで、彼等は此通り蛇に關する珍らしい知識を、昔から持つて居たといふ事實が擧

がつたのである。從つて行く〳〵彼等の蛇をちたかつた積極的原因も、改めて又發見せられるかも知れたい。

今だつてもう少しは分つて居るのである。第一には全國に弘く分布する琵琶橋琵琶淵などの言ひ傳へに、琵琶を抱いて座頭が飛込んだといふものは、往々にして蛇の執念、若くは誘惑を說くやうである。即ち盲人には何かは知らず、特に所謂クラオカミに由つて、すき好まれる長處のあるものと想像されて居たのである。第二には勇士の惡蛇退治に、似合はぬ話だが折々目くらが出て參與して居る。九州で有名なのは肥前黒髪山下の梅野座頭、是は鎭西八郎の短刀を拜借して、谷に下つて天堂岩の大蛇を刺殺したと稱して、其由緒を以て正式に刀を帶ぶることを認められて居た。しかもよほど念の入つた隱れた理由の無い限り、人は到底盲人を助太刀に頼む氣にはなり得まい。即ち彼等には一種の神力を具へて居たのである。

西國の盲僧たちには、寺を持つて其職務を世襲した例が多いよその目くらを取子とする以前に、成るべく其實子の目が潰れてくれることを、親心としては望んだであらう。即ち曾ては自ら目を傷けて、神に氣に入る者と成らうとした時代が、有つたと想像し得る根據である。耳の方ならば猶更差支が少なかつたわけである。昔信仰の最も強烈であつた世の中では、神に指定せられて短かく生き、永く祀らるゝことを欣幸とした者は多かつた。其費が季になつて死ぬことだけは御免だと考へ始めた頃には、よくしたもので八幡の放生會の如く、無期の放し飼ひが通則として認められた。耳切團一が信仰の爲、又同時に活計の爲に、深思熟慮の上で自ら耳を切つて來たとしても、自分たちは之を怪まうとは思はぬ。又さう迄せずとも話は成立したのである。

然し彼等如何なる機智巧辯を以てするとも、我々の間に之を信ぜんとする用意が無かつたならば、畢竟は無益のほら吹きに過ぎぬ。ところが我々は忘れたるが如くにして、實は無心に遠き世の感動を遺傳して居た。鹿を牲とすれば耳が割けて居り、獅子を舞はしむれば忽ち相手の耳を喰ひ切り、記念に巖石に姿を刻めば、耳を團扇の如く大きくせざるを得ず、さうして盲人を見ると永く水の神の威徳と兇暴とに對して、一喜一憂せざるを得なかつたのである。之を無意識にしかも鋭敏に、測量し得た者が色々の歌を物語り、又數々の言ひ習はしを作つて、久しく我々の多數を導いて居たのである。前代は必ずしも埋もれ果てたとは言はれない。例へば耳に關し又目に就いて、普通の同胞が信じ且つ說いて居る小さな智識の中にも、日本の固有信仰の大切な「失はれたる鍵」を、引包んで假に隱して居る場合が、まだ幾らでもあるらしいのである。（了）

アンゴラの都

芦田均

アナトリアの高原を汽車はあへぎ乍らうねり〳〵走つてゐる。ずつと昔は湖水であつたといふ盆地であるから右を見ても左を眺めても筋張つた骨許りの様な山が突立つて其麓から眼の下まで、例へば印度洋の大うねりのやうに起伏した原野が續いてゐる。其平原の上に初夏の日の光が惜氣もなく溢れて、太古のまゝに咲亂れた色々の草花が、或所は一面の菜の花の如く黄金色に、或所は蓮花草のやうに紅に、又谷川に近い草原には鮮かな綠色が帶の様につゞいてゐる。

村と云ふものは稀にしか見えない。それがあちらの山の麓、此方の丘の上に、一階建の褐色の壁と草葺の屋根とが四角な煉瓦を伏せたやうに土に平伏して散在してゐる。所々に家畜の群が動くともなく動いてゐるのが眼にうつる。黑い塊は牛、黄色を帶びたのは羊、鳶色のは恐らく馬の群であらう。其中に山羊の群の純白な斑がこれ許りは日の光を射返してハッキリと眼に映る。

歐羅巴からアンゴラに來る者は皆この汽車の便をかる。君府から船に乘つて聖ソフィアの尖塔（ミナレ）を右手に見上げ乍ら潮の早いボスフォールを横切ること僅に廿分、船はもう亞細亞大陸につく、眼の前に控えた建物は卅年許り前に獨逸人の敷設したバクダッド鐵道の起點、ハイデルパシャの停車場である。此所からイズメットまで汽車は灣に沿うて、別莊地や畑地の間を東南の方角に走る。イズメットから約二時間許りは近東の地に珍らしい程靑々と樹木の茂つた谷間を拔けてアルガントンの山脈にかかる。此邊はローマの盛時にダイオクレチャンの君臨した土地なのであるが火災と革命と地震とに破壞されて今では昔を偲ぶ何物も殘つてはゐない。

小亞細亞はスペインと同じやうに海に沿うた北方の十數哩の地帶には鬱蒼とした森もあり、綠の深い谿もある、然しその他

帶を離れて内地に入ると、山にも野にも一本の樹も無くなつて乾いた原野が幾十里となく擴つてゐる。この汽車と同じ道を、亞歷山大王の軍も通り、ローマ皇帝の鳳輦も通つた。八百年の昔にはババリアとロムバルダイから來た五千人の十字軍があらゆる辛酸を甞め乍ら矢張り此道を辿つてパレスチナに向つたのである。

汽車は翌る日正午に近い頃アンゴラ驛についた。新らしく土の中から蘇つた都であるだけに、右も左も新裝の官廳や煉瓦のまゝの新普請が列んでゐる。自働車と馬車がけたゝましい音を立てゝ縱橫に行違ふ。それが黄色い細かい紛末の砂塵をあげて走るのであるから塵を隔てゝ眼の前に突立つた城塞や、お寺の圓屋根を見ると云つた方が精確である。かくしてアンゴラの町は朧に新らしい二十世紀の新市街をめぐらし、中世の儘なるアンゴラは小高い岡の城塞の周圍に褐色にくすんだ儘に立つてゐる。

古いアンゴラ

アンゴラの町は四つの小高い丘の上に立つてゐて、其一番高い丘は朧の新市街から百米突も高くなつてゐようか、舊市街はこの丘の傾斜にあつて、凡そ八合目位の處に城塞の石垣が懸崖の上に屹立してゐる。アンゴラの舊い町と、現に建設中の新市街とは、互に隣接して居るとは云ふもの丶其規模なり、體裁なり、全く似てもつかない別箇の世界を爲してゐるからこれを一つの都と云ふは支那の租界と南京町とを同日に論ずるよりも、まだ甚しい懸隔がある。

昔のアンゴラは時に消長があつて二萬の人口をもつてゐたこともあり、時には四萬の住民があつたともいふ。然し此地が土耳古の首府として選ばれる前には恐らく三萬のトルコ人は居なかつたといふのに、今では七萬以上の住民がある。新しい都市計畫が完成すれば、街の面積は十倍以上となり市民の數は十年ならずにして三十萬を超えることであらう。

丘の中腹には、瓦葺の低い家屋がぎつしり立並んで、曲りくねつた町の兩側を埋めてゐる。羊飼を相手の外套屋、驢馬の鞍や蹄鐵を賣る店、金物店、野菜店、それに荒い堅縞又は辨慶格子の布をひさぐ商人が軒並につゞいて、岡の八合目の邊に城塞の門が立つてゐる。城門の中はアンゴラでも最も荒廢した場所であらう、昔の回々教寺の塔の壞れたのや、トルコ人の墓地などが散在して、住宅の無い空き地には近郊から野菜を運んで來た驢馬や、遠いクルヂスタン邊から曠野を旅して來た駱駝が群をなして憩ふてゐる。

この狹いアンゴラの舊市街にも折れ重るやうに多數の人が住んでゐて、それがトルコ人も猶太人も、アルメニア人も、云ひ合せたやうにみすぼらしい破れた着物を纏ふてゐる。黑い頭巾で頭から顏を覆うた婦人がまだ澤山ゐる。レモンを賣り歩く男、パンや飴を木の箱に乘せて、聲高く客を呼ぶ人達が、驢馬に麥粉や牛乳を積んで通る村人を相手に忙しく話かけてゐる。村の人は紋平袴のやうに腰の周圍のだぶ〳〵して足首の處で狹くなつたズボンをはいてゐる、そのズボンと短い上着との間に赤や紫紺のクーシヤツクと稱する巾の廣い胴卷をしてゐる、その中には煙草入だの、財布だの、時としては磨ぎすました合口も潜めてあるものと思はれる。

店に坐つてゐる人達は紋平袴や胴かけをしてゐない代りに刺子絆天のやうなカフタンと稱するものを羽織つてゐる。昨年の秋までは老幼を問はず男子は凡てトルコ帽を冠つて居たのであるが、ケマル・パシヤの英斷で政教分離の法令が出て以來、トルコ帽の使用が嚴禁されて――その命令に服從しないものは容赦なく銃殺された例もある――今では輸入ものゝ鳥打だの、學生帽だのを手當り次第に冠つてゐるが、それが如何にも場所を得ないやうにぎごちなく顱頂に鎭座して見える。

アンゴラの城は中世の「サルタン―バヤヂツドの築いたものと物の本に書いてある。砦は殘つてゐるといふものゝ、近くに寄れば彼方も此方も石垣が崩れて、其間にずつと昔希臘時代に使つたと思はれる圓柱や、角な石材が横つてゐる。石にギリシア語の刻んだものだの風に崩れた浮彫が其處こゝに混つてゐる。城壁の角々には四角な塔があつて、その内には十字軍時代のキリスト教徒の武器だの、回々教徒の使つた道具が一杯に納めてあるのだと聞いた。

回々教の尖塔（ミナレ）、お寺の圓屋根、それは此地方の風致の變化と雅趣を添へる材料としてなくてならない建物であるがアンゴラの町には殆んど一つとして見るべきミナレも寺もない。僅に低い重苦しい形のものが山の麓に顧られない廢墟のやうに殘つてゐる。街には樹らしい樹、草花といふ草花は殆んど見ることが出來ないで、見るからに酷寒と炎熱とにさいなまれたらしい古い瓦と、岩と、干いた土とが折重つてゐるに過ぎない。軒並の人家は窓と屋根とを備へてはゐるものゝ、力の強い男が一押し押せばかたもなく崩れて了ふだらうと思はれる程の荒れはてた住家で、新しく手を加へた建物は唯の一も見當らない。古いアンゴラには町の偶々まで廢頽と貧窮の影が到る處に漂うてゐる。

此の市の舊蹟として數へられる唯一の記念物は、舊市街の西端にある聖アウグスタスの殿堂である。現在殘つてゐるのは南

門と殿堂の側面を爲す石壁とである。殿堂の廣さは奥行五十二尺、間口二十四尺で東の側面は稍完全に保存されてゐるが西側は半以上崩壊して了つてゐる。いづれも白い大理石で卅五尺の高さに積重ねた昔を偲ぶ立派な建築であるが、今では其頂に巣をくんだ鴻の鳥が見物の人間を不思議さうに覗いてゐる。

南門の石には一面にラテン文字の刻んだ跡が殘されてゐる。これは聖アウグスタスの事蹟を彫つたもので、曾てイオニア文明が此地方に榮えた頃に築かれた古代希臘の殘骸の一である。ずつと昔にアリアン人種がイランの高原から漸次に地中海の岸に擴つて、アッシリア、バビロンの文明を築いた頃から數へて、小亞細亞の地には世界の有ゆる宗教と文化が興亡の跡を殘してゐる。バビロンの王様が埃及のファラオン王朝と爭つた頃から所謂近東問題と稱する複雜した爭鬪の幕が開かれて、東地中海を中心とするイオニアの文化が起り、更に大陸希臘の覇權が此山奥にも及ぶ時代が來た。ゾロアストルの拜火教からヂアナを祭る希臘人の殿堂が建てられ、聖母マリアがアナトリアに避難した頃からパウロの遊歷に依つてキリスト教が擴められた。それも然しマホメット教の北漸と共に十字軍の悲慘な歷史に殘つてゐるやうに、亞細亞と歐羅巴との激しい鬪が此地方に始まり、突厥が侵入して聖ソフィアの堂宇を占領する時代に入つては更に人種と宗教と利害の三角關係が渦を卷いてトルコ共和國がアンゴラに都を定めるまで三千年に亘つて爭鬪の種を殘してゐる。

斯樣なアナトリアの平原に覇を爭うた民族は遠くは中央亞細亞や西歐羅巴からも度々押し寄せて諸方に殘つてゐる建築物の破片が物語るやうに紀元前千五六百年代から築き上げたイオニア文明の跡も無殘に踏躪られて了つた。紀元前七百年許り前に地中海を渡つて來たレオナタスと呼ぶ酋長はゴロア（今の佛蘭西）の蠻族を率ゐてアナトリアを征服しアンゴラに都して一時はアンチオキアの附近まで領有して居た。更に韃靼侵入の時代に入つては一層多くの傳說を殘してゐる。アンゴラの町の南に茫々と連る曠原、詳しく云へばステルラ山から「シブウク、カバー」河迄の間の地は十五世紀の初めにタメルランがアラビアの「サルタン」、バヤヂッドを破つて之を捕虜にした古戰場である。

歷史の本によると戰敗の將バヤヂッドはアラビア式の馬車に乘せられて牽かれて行つた。（昔ハレムと云ふ制度のあつた時代、そして汽車や自働車や近年の歐洲風の馬車が輸入せられない時代にはハレム女は馬を二匹つないで其間に籠を下げたやうなカフェスと云ふ箱馬車で旅をしたのであるが、玆にアラビヤ式

の馬車と云ふのは此のカフェスの事である）。捕はれたバヤチッドと勝ち誇つたタメルランとの間に色々の問答が交換されたと誌してゐる。——話の實否は今日確める由もないとして——兎にも角にも其中の稍信ずべき傳說に依ると斯ういふ問答も繰返されたといふのである。

　バヤチッドは敵將タメルランの幕營に牽き立てられた。玆に附加へて云ふ可きことはタメルランは跛であつて、バヤチッドも片手のきかない不具であつたことである。そこで韃靼の勇將がサルタンに向つて云ふには、

『自分もお前も上天の神樣に對して、銘々かうした王國の支配を許された事を感謝せずばなるまい。』

『何故か』とサルタンが問返す。タメルランは云ふ。

『神樣は自分のやうな跛と、又お前のやうな不具者に東西の王國を支配させられた。跛の私に東は印度から西はシヴァスに至る間の亞細亞を治めさせ、不具者のお前にはシヴァスの町から匈牙利までの廣い王國を授けられた。だが、神樣に取つては世界を征服する等といふことは何でも無い事であるに相違ない。さもなければ吾々達のやうな不具な者に世界の支配を託さないで手足の完全に揃つた人間に委せられたに違ひない。それといふのも、お前が神樣の恩を知らず、神樣の御思召をも考へずにゐたから、この自分の手でお前に神罰を下されたといふものぢや、然し心配するな、人間は丈夫でさへ居れば又容易に盛返すことの出來るものぢや。』

　私はこの話の實否を保證しない、然しカトリックの古い坊さんが之に裏書して、『タメルランの此挨拶の中には回々教の深い教理を含んでゐるから恐らく本人の口から出た言葉に相違ない、のみならず此言葉は歷史家の描いたタメルランの性格をよく映してゐるし、又其時代の時代精神にもよく符合してゐる』と書いてゐる。

　歐洲の歷史家の筆を藉りて云へばタメルランは肉を喰ひ血に渴いた亞細亞の酋長であつたけれども、それでも宗教と科學に對する理解と尊敬とを失はなかつた。凡そ古今の暴君の中で彼程に多くの人命を屠り、都市を破壞した人間はない。そして捷ち戰を祝ふ時にはいつも敵の屍をピラミッドの樣に積み上げて、血に狂ふた士卒共を激勵したと誌してあるが、敵の村落を破壞し、人民を鏖殺する命令を下した際でも、宗教家と學者と立法者の命だけは助けるのが例であつた。眼に文字なき一酋長も、コーランと學問との前には人間としての敬虔の念を捨てなかつた。それは亞歷山大王が、テーベの町の破壞を嚴命した時に希臘の詩人ピンダーレの子孫と其住家に手を觸れなかつたの

と同じ心持である。

タメルラン亡びて、後彼を記念すべき何物も殘つて居ない。殘つたものは西亞細亞の殘壘と、荒廢した山河である。それでも彼の愛用した印には「正義」といふ文字が刻んであつたと傳へられてゐる。

新らしいアンゴラ

ケマル・パシャ以後のアンゴラは舊市街を中心に八方に擴つて、六間幅の道路が縱横に計畫されて居る。大統領ガヂー――現在のトルコでは大統領ケマル・パシャに戰勝將軍なる稱號を奉つて皆ガヂーといふ――の官邸はアンゴラを眼下に見下すチヤンカヤ（釣鐘岩）と云ふ山の頂邊に立つてゐて、其附近に總理各大臣の官宅や金持、政治家の新しい住宅が日に〳〵建築されて行く。これと反對の丘の上にも同じやうな歐洲風の家が年毎に殖えて、首都のアンゴラはやがて此近傍七丘の上に基礎を置くことになるであらう。

停車場を中心とする平地には國民議會の議事堂を始め各省の建物、郵便局等が大部分完成して、大統領の經營する模範學校もあり、更に「新生活學校」といふ看板のかゝつた新式の小學校も出來上つてゐる。新しい住宅町と指定せられた區劃には市廳の自營になるコンクリート建が幾十軒となく建築を始めてゐる。其處此所の小高い土地の上には官署や博物館が既に大部分完成して其間を縫うて建築材料を積んだ自働車、馬力が東西にすれ違ふ、荷物を負つた驢馬の群が砂煙を揚げて忙しく過ぎて行く、道行く人も工事に立働く勞働者も顔は日に焦げ、全身は汗と砂塵にまみれて居乍ら何處か希望に滿ちた若々しい表情をもつてゐる。舊い都のスタムブールは日に日に廢頽して、街頭の人の面持、ミナレの影、凡てに死滅の影が漂つてゐるかの樣に思はれるに引換へて、此處には新しいトルコの潑溂たる生氣が漲つてゐるかの樣に思はれる。

一切の因襲と古い制度の腐敗を打破る爲めに沈滯した舊府をすてゝ、このアナトリアの原野に都を移した青年政治家の決心はアンゴラを見た者の始めて首肯し得る所である。

國民議會はアラビア式を加味した近代的の建築である。二百八十の議員さへも收容し得ない程の小規模であるが、日々に制定せられる幾多の新しい法律や條約は皆この殿堂の洗禮を受けてトルコの基礎を作つて行くのであるから、議會は殆んど連日の討議をつづけて倘ほ日も足りない有樣である。

政府の建物を中心として農業銀行や百貨店の建物も新しく出來上つた。店頭には日用品が堆高く積まれて、多くは食料品と

雜貨とを並べてゐるが伊太利製の絹ショール、巴里製の化粧品等も通行人の足を止めてゐる。其間にカッフェーだの、旅館だのが殖民地らしい安普請のまゝで店を出して、木蔭には塵にまみれた勞働者がカッフェーをすゝり煙草を吸つて道往く人を眺めてゐる。トルコの或政治家が云つたやうに、アンゴラは茲五年の中には「住み得る町」になる。更に五年すれば一大首府となるに相違ない。

新しいトルコは數世紀の因襲をすてゝ回々教と別れた。赤い帽子をすてゝ一齊に洋俗を强い、婦人をハレムから解放し歐洲でも新しい瑞西民法の法典を殆んど其儘に公布することになつた。學校を建て病院を開き工場を起し鐵道を布き治外法權を撤廢して内外人の區別なくトルコの法權の下に置くことになつた。

それはオットマン・トルコが國を建てゝ以來の大事業である。熱狂的な回々教の信仰から政治を解放する丈けでも革命的の事業であるのに、婦人解放や希臘人の放逐に依つてトルコ人の社會生活、經濟生活を根柢から造りかへようとする努力はアンゴラに新首府を建設する以上に大膽な試であつた。

現在トルコの政治家は最も困難なる試練の前に立つてゐる。サルタンの專制から放たれた民衆はまだ民衆政治を巧に運用する丈けの訓練を受けてゐないし、從來國内の生產業を支配してゐた希臘人アルメニア人を放しても之に代るべきトルコ人の中產階級は一朝にして出來上つて來ない。治外法權を撤廢しても外國人を安堵せしめる丈けの完備した法制を作ることは西歐の法制を鵜呑にしない限り不可能である。

民力の休養は數十年來の兵戰に疲れたトルコ人に取つて最も緊急の事業であるけれども庶政革新の施設の爲めには巨額の國帑を投じなければならない。國庫は常に窮乏してゐるが租稅を增徴すれば產業の開發を妨げるであらうし、外資を多額に輸入すれば國内の資源は全く外國資本家の手に委ねなければならない。暫く隱忍して平和の維持に專念する政策を採れば、國内の保守國權派は基礎の固らない新政府の無爲無能を嘲笑し、對外硬を以て一貫しようとすれば、トルコは孤立無援の地位に陷る外はない。斯樣な困難な境涯に立つて隱忍自重、只管に民族再生の爲めに努力してゐる年若きトルコの政治家に對しても世間は屢其政策の欠陷を批評し、其行動の矛盾を指摘してゐる。吾吾は寧ろ同情と雅量とを以て暫く之に聲援を與へることが、吾吾の義務であるやうに思はれる。

アンゴラの郊外

朝は思切つて晴れる、雲も霧も形を潜めて、紺青の空とあるが、

まゝなる山野の姿とがすつきりと抱き合つた有様は寸分の虚僞を許さない自然其儘の姿である。地球創造の翌日を思はせる程に透通つた眩い日の光が草木をはぐゝみ、山や谷を埋め其間に鳥と獸と人と、其外ありとあらゆる生物を容れて尚その撫育の足らないのを虞れるかのやうに天地一面に溢れてゐる。

アンゴラの町の郊外、小高い岡の中腹から眼前に展開されたアナトリアの平野を眺めると、曾て物の本で讀んだやうな落莫たる自然の姿は何處にも無い。悲しい蘆笛の聲で想像した悲歌哀愁の民は影も見せないで、今尚中世のまゝなるオスマンの民が長閑な歌で現在を謳歌してゐるのが聞えて來る。

チヤンカヤは町から一直線の新道を卅度の勾配に馳け上つた山の頂にある土地であるが、此處には大統領ガヂーの官邸を初め總理大臣や外相の官邸が急坂に沿うて新築せられて以來、英吉利、佛蘭西、日本を初め、各國の大使館、公使館が敷地を選定していづれもアンゴラ平野の雄大な景色を眼下に納める形勝の地位に陣取つてゐる。

私達はこのチヤンカヤの反對の丘の上にある別莊に一週間の日を送つた。この丘からはアンゴラの町の頂にある城塞がその周圍の人家の屋根と共に眼の前に展開される。

春から秋までの季節は雨の降る日は稀で、からりとした天氣が毎日のやうにつゞく。郊外にはあちらこちらに天幕を引めぐらして夥しい兵隊が野營してゐる。此邊りは、どの家も廣い庭と畠とを取り入れて、其處には梨、葡萄、杏等の果樹を植え、メロンや苺を栽培してゐる。町から歸る紳士達の車の音が杜絶えて、庭の木陰に夕餐の卓が用意される頃になると、山々の頂に夕日の光が紫にさし初める。牧場の者に連れられた羊や山羊の群が數百となく村に歸つてくる。町の方角にはチカ〱と星のやうに燈火がまたゝき初める。この雄大なそして莊重な風趣は他の國の都に求め難い情調である。

希臘人がヂアナを祭つた遠い昔はもとよりチムールの陣營の篝火が空に映つた中世の出來事も暫く之を問はないとして、まだアンゴラの町に電燈がつかず、自働車の音が聞えなかつた十年二十年の以前に比べても、アナトリアの今日の生活は回々教の善知識でも夢想しなかつた程のあはたゞしい變化である。現在アンゴラの人が「政府」と呼んでゐる官廳の石門の中には曾てパシヤと稱ばれる嚴しい高官がカシミヤの巾で頭を卷き袖の寛かな着物に絹の帶をしめて、アラビヤ物語の挿畫にある通りの姿で住んでゐた。

そのパシヤを取卷く女達のハレムの生活は吾々に一層別世界の感を與へるものである。其頃のトルコの高官は三人四人、時

とすると十人にも餘る婦人を妻としてゐたが、年老いた男でも十八九歳の新妻を迎へるのが尠くなかつた。此等の女達は多くは地方から召し出された美しい娘であつてヂヨルヂヤ或はシルカシヤの女、時としては希臘、伊太利の女も混つてゐたが、いづれも卑賤の家に生れて玉の輿に乘る境遇の女であつた。

生暖い風の吹く今頃の季節には女達は白いムスリンの裾廻しに青絹の胴着の膝の邊まで垂れたものを輕く着流して、足には寶石を飾つた草履(バブウシユ)をはくのである。長い黑髮を首の邊までさばいて、それには眞珠の頭飾だの、色々の模樣のリボンをつける。時としては眞紅色の小さな頭巾を頭に冠つてゐるのもある。

かうした年若い女達の朝晩の生活が極めて變化に乏しいものであつたことも想像に難くない、日のうららかな頃には庭の亭に腰を下ろして樣々の空想にふける。亭の中には小さな噴水をしつらへて、其の傍に大きな長椅子が据えてある。椅子は赤い毛織物で張りつめて其縁に金糸の縫でアラビヤ模樣が浮出してある。女は寛いだ姿勢で、マンドリンに似たウートと呼ぶ樂器を稍斜に抱く、女の歌は日々の心持と共に喜びの歌、悲しい曲といろ／＼に變化することは勿論である。

一年を通じて、同じやうなかうした生活が彼女等にくり返される。朝は十時過に床を出て、化粧に取りかゝると召使の黑ん坊の娘が彼女等の長い髮に櫛をあてゝ、それを幾つもの三編に結び上げる、やがて眉墨をつけ、まつげを黑く染め出す、細い然しふくやかな指の先にはヘンネ（つまくれなゐの木）の粉末で薄紅をさす。かうして身じまひの出來上るのは正午を過ぎた頃である。

女達の午后は煙管とナルギレ――それはトルコ人の使ふ瓢簞形の大きな煙管で、高さは二尺にも餘るであらう――それに四方山の世間話で暮れて行く。時々は奴隸の女が主人達の目を樂ます爲めに手振りの忙しい舞踊を見せる事もある。要するにハレムに集つた女達の唯一の慾念は現在の歡樂と肉の逸樂の外には有り得ない。

文明と稱する波が、アナトリアの奧まで潤み込んで、古いトルコの代官は逐はれ、ハレムの制度も破壞されて了つた。アンゴラの代官所の庭には今新しい洋館が建てられて、解放された女達が忙しげにタイプライターをたゝいてゐる。古いトルコはかくして日に月に壞されて行く。ビザンチン帝國の死骸の中から生れて僅に詩と夢と物語とを受ついでゐたトルコはやがて器械と自働車の音に掻き消されて行くことであらう。

人買船

大泉黒石

はしがき

「人買船」と題して讀み上げまする一席……エッ。支那滿洲は都會であれ田舍であれ、いやもう、到るところで御目にかゝる、人家の塀や城の塀にペタ〳〵と貼られたる仁丹の廣告だが、よくも、あゝ萬遍なく行き渡つたもんでありまするなッ。されば日外も青島から一寸入つた江蘇省は滁州なる町の縣衙門正面の影壁――といふと玄關の衝立――に次のやうな排日檄文が貼り出されたこともあつて直譯すれば斯うだ。エッ。「涙を流して愛國之志士に告ぐ」といふ冒頭「あゝ。わが國を愛する中國の人人よ。日本は將に我が中國をして、過去に於ける高麗の轍を踏ましめんとしてゐるのである。日本は如何にして高麗を併合したるか？　諸君！　諸君は彼等日本人が高唱しつゝある大亞細亞主義なるものは、彼等が亞細亞を統一し以て是に君臨せんことを意味するに氣づいてゐるであらうか？　日本は中國の政治に干渉しつゝあるのである。財政顧問。軍事顧問の公名の下に、中國の政治を暗中左右もせゐることに氣づいてゐるであらうか？　諸君！　諸機は近來日本が、軍機借款。鐵道借款の裏面に如何ばかり豺狼の毒牙を磨きつゝあるか、大いに注意しなければならんのである。然り。滿洲や青島に於ける日本の行動は、そも何を暗示すると思ふか？　我等。ここに愛國の涙禁ずる能はず。滿天下の志士たる兄弟姉妹に訴へ。斷々乎として日本を排斥せねばならんのである。中國は中國の中國にして、日本の中國でない。我等は高麗の運命に鑑み、奮然起つて以後一切の日本製品を排斥することから始めねばならまい。日く。仁丹。清快丸。大學目藥。味之素。獅子牙粉。金剛石牙粉。玩具等。その他長江上下の輪船中。（丸）の字のついたる船は日本船であるから、決して乘るべからず」云々。偶然にも此の印刷ビラに打つかつたるは、武者修業中の東亞同文書院在學蒙傑。これは奇ッ怪と眦を裂き、腕をまくつて、そこなる知事は蒙佐良とやらの面前に、白齒をむいて泡を吹きまするとーーやッ。南無參！　飛んだ疎忽な仕まつた。右は小官のトンと存じ寄らんこと。今後は嚴しく取締るであらうほどに、平に平に御容赦を願ひたい。何と小官こそは中國隨一の日本品負。それ。それ。卿よ。見る

れい。（ポケットから仁丹の袋を出して）いやはや。仙藥でありまするワ。これなる一粒によつて精神、忽ちスッといたすが、獅子牙粉（ライオンはみがき）も結構。味之素に到つては格別ぢや。コレ。コレ。誰か居らぬか？　お茶を持て！——とか何とか巧いもんです。かゝる捻込（ねぢこみ）なんざ、お茶の子さいさい屁とも思はない。檄文は其のまんま。かういふ風に支那人がボイコットする日本製品の第一に擧げるのは必ず仁丹。話は別だが、エッ、「特來拜回知事大人來了」。これは外國人——特に日本人が縣知事訪問の折。秘書官日誌に書かれる定文句で土産も定（きま）つてゐる。「仁丹五袋。臭蟲藥（なんきんむしたいぢくすり）三罐。大學目藥二瓶。以欲實現日支親善」とは安い。「虎風龍雲」なる物の本によれば「山中の子どもまでも、よくその名を知つて愛用するものは日本の仁丹だ。これはどんな處でも、あの髭の生えた仁丹の廣告が貼つてあり、土民は之が眞個にいゝ藥だと考へて愛用してゐるのだ」云々。

また或る學生の修學旅行記には「田舍の支那土民は、我々書生を指して、地圖を書く人間だといふか、さもなくんば仁丹賣だと言ふ。地圖も書かず、仁丹も賣らず、この名前を頂戴する。彼等は一ど地圖を書かれたら、その土地は自己が先祖から受けついだ其土地に關する總ての權利を剝奪されるやうな恐怖を抱く。仁丹に到つては、たゞ値段が高いから、よく效く藥だと考へてゐる。我々が物々交換をやるには從つて最もいゝ材料だ。」とあるのを見ても、およその光景は察しがつくといふもの。むろん輓近のこと。恐ろしいかな廣告の偉力。二十年まへまでは、かゝる代物が有つたやら無かつたやら、かいもく存じませんものねッ。その頃は富山の名物、江戸以來の定賣屋が專らで、奇應丸とか、守田の寶丹とかも敢て新顏にあらず。高木の消心丹。大橋の太陽丸。松[illegible]の神仙萬金丹。それに山崎のせゝと高橋の濟快丸。先づ以て此處（こゝ）らが、懷中常備としてはピリッと涼しい藥劑（やくわり）をつとめ、關東より上方への紳士淑女に、一頻りポリ／＼と嚙られてゐたが、九州へ下ると、例の對馬の千金丹。なかんづく古うございまして、今も有るには有るが、當時け[illegible]に西海道の津々浦々に至るまで流行（はや）つたものである。處へ忽然として現はれたる勁敵。海の彼岸より唐人（あちやさん）が携へ參つた六神丸は、どなたも御存じの眞黑い犀角の小壺に入つてをる罌粟つぶよりも微（さい）さいがおつそろしい效驗（きゝめ）をあらはすンで、なか／＼安くない丸藥。安くないせいいと、も一つは氣味のわるい噂でもつて、現今はあんまり姿を見せないけれども、ありや丸藥仲間の魔王。迚もの化性。靈物ですなッ。此奴が何と上陸地たる長崎港街の人心を魅惑しつくし、遠近（をちこち）に怪手を伸ばして、千金丹の地盤をも蠶食し、剩つさへ關東や上方に於ける前述賣藥の繩張をも窺ひにかゝつた。つまり現代支那に暴威を縱（ほしい）まゝにする仁丹の勢ひで、日本全土を風靡にかゝつた形。今にして想へば、これも奢る者は何とやら。豈。面白からずと言ふべからざる現象ではございませんか？　然り。而して先刻の排日檄文に見える仁丹以外の日本製品の中には、濟快丸、大學目藥、味之素、獅子牙粉、金剛石牙粉、玩具などがある、いや、その他にも石鹼やらマッチやら、種々雜多の日用品があるに違ひないやうに、彼奴（きやつ）、妖的、六神丸の襲來當時、向ふから押し渡つて來つる支那製品も少なくないやうだ。エヽ。帽子類。白砂糖。朱。墨。筆。龜甲。香木。紫檀。曲籙。竹籠。印材。佛像。纖花。南京針。丹。鉛丹。錫器。

繪具。算盤。薬品。その薬品の中の主なるものが六的だ。今は國の文明の地位が顛倒になり、輸入無用、かゝる器具類は港の街より影を失ひ、六的などは漸く一二軒の支那商店にあつたところで罌粟つぶ一つ十錢もする、が、その當時は何でも兎に角、無關税だし、外國製賣薬輸人者取締りの第十四號と申す法律もなかつたし、高いなかにも買ひよかつたんで、百病に神效を奏するが不思議とばかり、どこの家の薬籠にも備へつけたものらしく思はれまするなツ。されば一円今の支那土民は我々書生を指して、地圖を書く人間だと言ふが、さもなくんば仁丹賣りだと言はれた日本人が、嘗ては何うでせう、この港街の支那町に軒を列べて、さまざまの物を商ふ支那人さへ見れば、どいつも此奴も六神丸屋だと思つたんですからねッ。實際。どこの店にも此の丸薬の十壺やそこら、持ち合せぬことはなかつたし、欲しければ分けてくれる、のみならず、これら支那人の八割を占めた黒繻子や紋繻子の行商人などは、反物と一緒に持ちまわり、盛んに賣りつけたものだ。旅人などは土産に求めて行つたもの。四百餘州は到るところに「髭の生えた仁丹の廣告が貼つてある」と書物の文句を引いて申したが、それに劣らず、嘗ては此の長崎の港街、到るところの人家の壁やら石垣やらに、辮髪の唐人が兩手を高く差しかゝげ、六神丸の巻軸を廣げた繪看板廣告の類、目まぐるしいほど貼られてゐたのである。それは斯かる豚尾人種の眼中に、日本なるものが餘り大きく説かれなかつた日清戰爭の一寸まへ頃。奇薬六神丸とは因縁あさからぬ「人買船」と街人に呼ばれたる唐人船か、港の沖に出沒したのは、正に此の時代でございまする——やつ。ピシリと張り扇。板なんぞを引つぱたいて、エ、もう此のくらいに餘談は止めて置きまして、[illegible]あ、それでは御話に移りまするど、初代目白鼠權と名乘る奴が、[illegible]第一頁をパッとあけて、勝手に獨りで咿らうといふ次第である。

港の秋は琥珀に闌けて、澄みわたる胡笳の音いろも肌へに泌みつく小寒い夜を、婉やかに煌めき散り亂れる街燈の、眩しい光の雨の飛沫に濡れながら、あとさき五六間隔つて、物寂しい海岸通を、支那街へ向つて行く二人の男があります。先なるは辮髪のぶら下つた脊なかに大皷のやうな黄龍の紋を染めぬきの上衣を纏ひ、ぞろッぺいな唐袴に黒繻子の靴を穿ち、油壺から躍り出した大入道よろしくの大兵肥滿。べんべんたる布袋腹が歩くたんびに左へドンブリ、右へドンブリ、大波打つて揺れだぶる力で、あつちへよろよろこつちへよろよろ。大ぶん酩酊した様子の支那水夫であります。後なるは、これも矢張り辮髪だが餘程小柄の、づんぐりしたづくりで、袋みたいにだぶだぶの寛袍。蛇がねぢけた恰好の唐袴に兩手を突つ込み、爪先の破れたチビ靴を突つかけたる風體は、どう見たつて唐人饅頭賣りか、上海わたりの繻子行商人といふところだが、帽子をぬげば、ころッと一緒にくッついて脱れる辮髪。ほんものゝ支那人ではない。支那街に近い此邊一圓——梅ケ崎といふ——管轄警察署外事課の松村文助なる刑事です。これも職務柄、こんな姿で受持ち區

域を密行してゐるところへ、老大なる此の支那水夫、港に碇泊中の金山號といふ唐人船から、たつた獨りで漕ぎよせたる短艇を岸邊に棄てゝ匐ひ上るのを見つけたんでありまして、港内碇泊中の外國船は、他に幾艘もあるにかゝはらず、件の船より上陸する者にかぎつて、どいつ此奴の差別なく尾行する必要あるがために、毎日毎夜の密行を命ぜられてゐるところへ持つて來て、そも〳〵何處へ何しに行くのか、大がいの船では、もう、そろそろ灯を消して寢仕度にかゝらうとする時刻に、單身、波を分けてやつて來たことが、松村君には迂散千萬に思はれて、こいつ何だか怪しいぞツ。職業神經がピンと動いて緊張すると、はや本能的です。少しの躊躇もなく、見えがくれに後を跟け始めたる次第。が、先なる支那水夫は悠々たる千鳥足の、鼻唄でもやりさうな無頓着で、稅關前から右へ曲り、大浦郵便局を蹦めき通りすぎ、支那人居留地の橋を渡ると、そのまんま新地街廓門の中へ、のッそり入り込んだ。けだし、それまでには二三べん不意に立ち止り、さも不安げに、あたりを盜み見ては何やら、ちよつと思案の體だつたが、かゝる場合に、間髪を容れぬ素敏つこい猿の、でんぐり返りで家の隅や壁の蔭に身を隱す技も商賣のうちの松村君、相手に尾行を感づかれるへまはいたしません。しかも此處へ入るのを見屆けたからには、もうメたもの、彼奴の行場は大がい知れてゐると、一氣に橋を突つ切り、大きな石門の柱にピタリ吸ひついて、奴さんの後姿に凝視を投げるのであります。さればズツト以前は、この港町の心臟とも言ふべかりし一廓。紅白の綾幟は百尺の銀竿にひるがり、畫樓の窓々には紅氈をのべ、ひねもす茴香酒にひたるところ、步履閑過したり花藥の欄とあつたのだが、月の風に削られ、日の雨に打たれて、今は漸く色褪せ寂れてはゐながらも、唐人屋敷時代の面影はまだ廢つて居らぬ。時に此處はまだ宵の口。胡弓の悲鳴や韮くさい艷歌が甃路に流れて居ます。件の支那水夫は右手七八軒目の酒棧へ消えた。さて皆さん。こゝらで暫く中話に移りませうか――「水兵事件」といへば正史にも明らかに見えるが少々古いから、御承知でない向もあらうか？

明治十九年――日支外交關係より見れば天津條約の翌年九月――長崎碇泊清國軍艦水兵。此地の警吏と抗鬪し互に死傷あり。――東京政府の官吏。長崎駐在清國領事と談判し久しく決せず。翌年兩國の犯罪者は各々自國の法律に依つて處罰することを約し局を結ぶと、物にはありますが、事の起りは支那の水兵が港町の料亭で物を喫ひ、代價を拂はずに立去らうとするから、亭主が請求すると、いきなり亂暴に及んだ、そこへ通りかゝつた巡査、おどろいて制めやうとすれば、ナイフを閃めかし斬つて

かゝるンで據ろなく拔劍して防いだものです。結果は右の通り、支那水兵は清國で處刑し此方は此方で始末することになつて、免官の上に一ヶ年の重禁錮とある。巡査の免官はさることながら、重禁錮とは埋らん話だといふたもんで、その頃の新聞などでは、これも畢竟、日本の外交が弱いためだとか何とか熾んに書き立いては發行停止を命ぜられ、外交當局攻擊演說會をひらいては中止をくらふなど、水兵事件の處置に對する町人の輿論は却々以て沸騰したらしいが、その筋の腰はますく弱くなり、この騷ぎあつて以來、土地の巡査は帶劍しないこととなつて丸腰。どたいから巡査などは眼底に置くやうな支那水兵や、唐人船の水夫らではなかつたんだから、丸腰になつた姿を見ると、日頃の輕侮嘲弄を鼻の先にあらはし、ひいては、是が町人への傲慢無禮な態度をとる結果となり、上陸するたびに傍若無人の振舞ひを敢てするンで町人は弱る。警察の役人は手古摺る始末だが、出來るだけ隱忍我慢すべしといふ御布令に、少々の不埒は大目に見てをれば、いゝ氣になつてのさばる。從つてそれ、町の中央に蟠まる支那人居留地は新地街の一大廓に住まふ唐人の、鼻息の凄まじさと來たら想像以上であります。件の如く巡査が丸腰になつて二月目の十一月も冬至に近い或日のこと。おきまりの貿易品――繻子や白砂糖。香木や六神丸その他の荷物を滿載したる金山號といふ名まへの二千噸ばかりの珍らしく巨きな唐人船が、上海方面からやつて來て、港口は金貨明神岬の沖合に錨をおろしました――(演者申す……一說には其處から少し手前の立神附近に投錨すとあるが、あまり確かでないから暫くは右の沖合として置いて)――さて此の月は支那人相手の商人の家では吉例によつて善哉餠をつくり、新地街に贈つて酒宴をひらく、言はゞ唐人の御氣嫌を取る古俗だが、夜は町々の子どもらが、木片細工の唐人船を肩に、銅鑼うち叩き新地街を練りまわり、支那商司の門邊に立つて御注進々々々と喚はり乍ら、若干の祝儀を貰ふ。其年内の唐ふね開帆を祝ふ月です。あゝ然し。今にして思へば此の痴けたる賑ひの最中に入つて來た金山號の汽笛の咆哮こそは世にも戰慄すべき厄魔來襲の豫告ではなかつたらうか?されば其の翌る日の夜を序幕として、思ひきや港町の歷史あつて以來、誰も知らない、いや、誰も聞睹したことのない不思議な恐怖惑亂の夜が夜について來やうとは!ごてくと彩られた小さい唐人船の雛型を舁ぎながら、袖をつらねて町々を、惡々と戲れあるく子どもらの中に、打ちまじつたる七歳ばかり、天神髷の可愛い少女が、いつの間にやら、どこでやら、姿をかくしたきり行衛が知れないといふ記事です。翌朝の新聞に出た。さては仲間にはぐれ、途に迷ふて、戻る家の

在所もわからンのだらうぐらい、さほど氣に留める者もなかつたが、さて、その次の晩の唐船行列で又一人、おんなじ年配の、縹緻よき少女が紛失したつきり、何處に何うしてゐるやら皆目わからンといふ報道に接すると、町の人々も流石に澄してはゐられない――何だと？オイ！端から端まで十ケ町あるなしの四辻には、交番なるものがあらうてヱ港町に、七つ八つの小娘が二人もウロ〳〵とは冗談にもサ！――有り得べからンことであると漸く怪しみ審かり始めます。更に其の次の晩の行列で、また〳〵同じ年頃の某家愛娘が、姿を消したまんま歸らない、と新聞です――ちなみに前の二少女が行衛は、その筋にて嚴探中なるも、未だ發見に至らず、或は當市內に居らざるてふ見込みにてか、郡部各分署へも依賴し、手を配け捜索に努めつゝあるが、氣の毒なる彼女らの家族は、もはや娘は歸らぬものと諦らめ、悲嘆の涙にくれ居れり。けだし三日相繼いでの三少女の失踪は、近來稀なる珍事といふべく、必定これは何者かに誘拐されたるに相違なしと、其筋は睨んで居りまス故に、時節柄、學齡前後の娘御を持たるゝ皆さん、御用心々々々――といふやうの筆法で親達の警戒を促したものですから、かゝる港には、ちよい〳〵現はれる例の人買ひといふ奴。もしかすると、あの手に拉はれたンぢやあるまいかといふ疑念、無きにしもあらさる矢先。さてはと町の人々の、俄かに愕然として恟悚に目ざめ、狼狽し、もはや娘の夜遊びを禁じて了つたことは申すまでもない。吉例のお祭騒でもあるまい。行列はお流れです。それでまあ辛と事件に兎がつい……いや、ついたら不思議はないのだが、何と一たび日が暮れる！今の今まで家にゐたと思ふ何某かの娘が矢つ張り、不意に而して永久に姿を隱すのです。さあ、さうなると是れ果して人買の仕業であらうか？……町の噂もそれで持切の形。いや。取るに足らぬ小さい出來事と思はれた一少女の紛失は實以て容易ならン大怪異の性質を帶びたるものであつたのです。その時刻になりますると、港町の空は何時なんどき起るか知れない怖ろしい不幸な變事を暗示するやうな脅やかすものゝ影におはれ、街燈の灯は黝黑い風につゝまれて物悲しくふるえ、電柱は首を俛れて涙ぐみ、郵便函は獨りでに眼を閉ぢて溜息をつき、路上の小石までがピタリと押し默つて弔意をあらはすやうに思はれるのです。町人の心の不安もさりながら、年幼き娘をもつ親の恐怖こそは底も知れず、宵の口から戸を閉さし、家中こぞつて少女を取り卷いて、蒼ざめたる顏に眼に言ひやうのない怯えを泛べ、息を殺し片唾を呑み、烈しき胸騷ぎを抑へて、神經を異常に緊張め、堪えがたき心配に打ちおのゝきながら、怖ろしい鬼手の通過を待つのであるが、その

とき不意に突然に……バム！バム！バム！……バム！バム！バム！……どこの家からか、あはれ其夜の犠牲が拂はれたことを告ぐるために亂打される辻々の樓の、警鐘の兇はしき響を聞くならば、あゝ、かゝる厄災より免かれし娘の親兄弟の喜びは何うだらう。たゞ暫くは茫然として顏を見合ひます。やがて心から救はれたやうに胸を撫でおろし、翌日の新聞に現はれる、行衛不明の少女の親たちの悲嘆を思ひ遣つては痛ましき同情を寄せるのであります。されば、かやうに奇怪な出來事に對する町人の思惑も推して知るべし。誰しも尋常人間の振舞ひとは見做しません。これは偏へにわれ／＼人間を憎惡する魔性のなす業であると、神話、傳說、昔噺にでもありさうな荒唐無稽の風說さへ傳はるほど五里霧中に迷ひ、流言蜚語は到るところに囁かれる有樣。何と皆さん。この曲者たるやですなツ。空前絶後の兇惡なる性情をもつた狂人でありまするぞツ。かう尤もらしく言ひふらす人もある。いや何うしてツ、神出鬼沒―こりや確かに狗賓とかの神秘不可思議なる術力をもつた背信敎者に違ひござりまツせん。かう眞顏に說きまわる人もある。いづれ。實間は何處かに潜伏し、夜の訪れを待つて秘かに現はれ出て來り、翼手をひろげ跳梁するものと思はれるが、いかに蝙蝠よりも巧妙自在に隱顯するの術あらうと、かりそめにも、多少姿形の變つた人間であるなら、何條以て人目を惹かずにゐるであらう狹き港町に於て、いまだ犯人の片鱗をすら見た者がないところから、さやうに取留めのない空想も生れるンでありませう。もつとも斯んな臆說に同意滿足するがものは流石にない、とは言ひながら、得體の知れぬものに對して、たゞ譯もなく怯えてゐることは、たとひ不完全ながらも、幼稚ながらも、さういへば或はさうかも知れないくらゐの說明を、少しでも信ずる馬鹿らしさよりは、はるかにやり切れません。ところでサテ、かういふ町人よりも、一そう深く心を痛め、頭を惱ましつるは警察側の役人衆。申すまでもないことだが、商賣がらです。件の狂人と背信敎者と少女と、いかなる關係があるものやら、たんだ無暗に揣摩臆測を逞しうする連中と違つてこの一見謎がゝりの現象に科學的の解剖刀をふるひ、事件の眞相を夙の昔に解いてゐるのです。先刻も言つたやうに右の失踪事件は、唐人船入港の翌晩から始まつて今日まで引續き、行衛不明になるのは、いづれも十歲前後の少女――新聞紙の記載するところに據れば可愛い美しい顏の少女であつて、彼女らの足跡は全く地上より消え去つてゐる。つまり此の町にはゐないものと見做すべきだから、この三つの事實を結びつけて考へるならば、これほど簡單明白な結論はあるまい。即ち、こゝに於て支那人居留地たる新地街

管轄署長の山木正也氏は、失踪者捜索審議の席に居列ぶ役人衆を睥睨しながら、から斷言したものです——事件の裏に犯罪が潜めることは最初から解つて居つた。犯人は他ならぬ唐人船——金山號乘組員だ。犯行の目的は要するに、誘拐せる少女を、支那へ行つて賣り飛ばす。けだし珍らしからんこツた。なシしろ斯ういふ性質の仕事にかけては彼奴ら支那人——ことに水夫等が、天成、悪魔のやうな殘忍不道の悪智慧と、神速機敏の頭腦手腕と、おどろくべき大膽不敵の度胸とを、兼ね備へてゐる事實は、世界の犯罪記錄が明らかに示してゐるンだからなツ。彼奴ら屈强の者が夜暗に乘じ、ボートかサンパンで岸に漕ぎよせ、川獺のやうに這ひ入り、豫め目星をつけた家の者の隙を狙つて、そこの娘を引つ拉ふンだ。擔いで逃げるには十歳前後が手頃だからなツ。して見ると行衛不明の少女らは、あの船中に匿されてゐるわけだ——この見込みが的を射てゐるか何うかは金山號に踏み込んで見なければわからんが、何分にも支那老大國に對する日本の弱腰外交は、警察權の執行にまで制肘を及ぼしてゐるために、正面から不遠慮に手をつけるわけにも行かないンで、水上署と共議の上、數名の刑事を荷揚人足に化かして乘り込ませ、秘かに船中を調べさせました結果、少女誘拐の疑ひをかけるやうな怪しい點は少しもないと言ふ。署長の見込みはスツカリ違つてゐます。が、何しろ箆棒大きい船のことではあるし、相手も充分の警戒をしてゐるだらうから、勝手不案内の者が紛れ込んで行つて、一通りや二通り搜つて見たところで、ちよつくら、ちよツと嗅ぎ出せるやうな場所に隱してある筈はない。これは此方の探偵が不成功であるに過ぎないと言はねばなるまい——いや。本官の見當は斷じて外れちや居らんぞ。どうだ。諸君の考へは?——といふたものです。警察側の活動なんか丸で知らない町の人々が、同一事件に對して、超人間的存在の行爲であるといふ迷妄から、少しも考へを變へやうとはしないやうに、自家の說を主張して署長はビクともしないばかりか、部下の意向も九分九厘までが、矢つ張りさうなんで、愼重嚴肅なる考究の歩を進めし結果、別の方法によつて、この考へに間違ひのないことを實證する段取りにかゝりました。船の中へ化け込んで探るのもいゝが、まかり間違つて下手を踏むと、彼奴ら一味の警戒心を刺激する虞れがあるンで、これは暫く見合はせるといたしまして、今度は其の筋の、いはゆる特別非常警戒の網を、海岸一帶に張つて、晝間もさうだが、特に夕景より上陸する金山號乘組員には、片つぱしから尾行をつけるために總動員です。少女誘拐犯人を捕縛するための全機能は此の方面に向けられたわけだが、どこに如何なる手落があ

るものやら、どこに何んな拔目があるものやら、これほどまでに、全力をつくすにもかゝはらず、少女紛失（？）の悲劇は相變らず、あつちでも、こつちでも警察を嘲ふやうに頻々として起り、留置場は嫌疑者で毎晩一ぱいになるが、翌朝はみんな進ン出されて、ほんものは風影よりも速やかに去來するといつた調子。捕縛の手がゝりすら覺束なく、港町の空氣はいよ〳〵暗く物凄くなり、人の心は物も手につかねほど、おどろ、おどろしく動揺します。あはれ斯かる不可思議の現象に對應すべく力及ばンのであらうか？そろ〳〵新聞は役人衆の無能を攻撃しだす。と、例の迷信黨は兎も角も、はや天災とあきらめて、この上は神佛の加護に縋るより法はないといふ風だが、多少開けた向は新聞と相呼應して、悲憤をこめたる痛罵を叩きつける。かうなると署長山下氏の頑健な頭腦も混亂せざるを得ないのだが、よく言へば市民の安寧を保たねばならぬ重大な職責と地位とを自覺し、わるく言へば唐人船以外に犯人の目星がつかンため、彌次半分、有象無象の聲に慫ふて濫りに血迷ふた眞似はいたさぬ。非難惡口の礫を一身に浴びながら、既定の方針を守つて、部下の指揮に努めてゐます――中話は此のくらいにして置きまして――化裝の刑事松村君が、瞎酊水夫の後を跟けて參つたのも、一に斯かる理由からであつて、もとより此奴が曲者であるか何うかは、わかりませんが、どうやら曰く有りげな代物だから、どこまでも纏着きまわつて監視しなければならンと松村君です。酒棧に紛れ込んだ水夫の姿を確かめると、しばらくの間を置いて、そこの店先に風來然と立ち現はれたのであります。

青錠の角唐銅に南京飯店水龜樓と、血色あやざやかに彫りぬいた眉間の招牌に、短い鐵の鎖で逆さまに釣るされし生きた大蟹が、さわらば咬みつかうと狂ひ藻掻く下斜かいに店棚があつて、黄紙を貼つた瓶詰の琲や鱶の鰭や錫器に盛つた煎海鼠や龍眼肉や、瓷にころがした燒肉や古色蒼然たる酒甕なンど列べたる見かけは尋常の飯店だが、一歩、韮くさい閾を跨ぐと、鬼氣人を襲ふものがあります。剌立ちさゝくれ泥まぶれの床には、瑾だらけの卓子、椅子、十脚ばかり　脚と脚との間には、蜜柑の皮、玉葱の尻、蟹の殼、吐き棄ての痰――時には此處で暴れて、ぶちのめされた客の帽子や靴などが落ちてゐることもある食堂だが、そんなことにはお構ひなしの、喰ひ醉つて管を卷くのがあるンだから、そいつらの柄も自と知れる。唐人船の水夫などには、お誂へ向の家でせう。汚濁のなかに蒸れ騰る痰氣と、鼻を刈るやうな甕酒の臭ひと、こんがらがつて、甘酸つぱくムツとする窖の口へ首を差入れて覗きますと、紫ぶさも凄いほど燻ぶつた天井から、ぶらさがる釣し洋燈の眞下の卓子に打ちも

たれ、吐物か溲か、垢びかる溫袍の亭主ひとり、朦朧と居ねぶつてゐる、確かに、こゝで今頃は蛇坐をまいてゐる筈の支那水夫が見えません。おや。これはと、松村君つか〱入つて行けば、亭主は目玉の上に、だらりと垂れかぶさる瞼の皮を突つぱるやうにキヨロツとあけて、びつくり顔です。「やア。旦那さんか。」と腰が浮いて飴いろの歯がニヤリと會釋する。醉客同志の悶着が起るたんびに、警察署から飛んで來るのが、支那辯の達者な松村君なので、お馴染みです。

「おゝ。水夫は何處へ行つた？

「水夫つて？」

面喰ひの表情

「む。金山號の水夫が、さつき此處へ入るのを見屆けて來たンだ。」

「あゝ。あの肥ツちよの？あれですかい？ありやねッ。そら、そこの隅ッこの桑の酒を一ぱいキユッと引つかけるなり、お錢を叩いつけといて、よろ〱便所の方へ蹣めいて行きましてねッ。へエ。わッしや小用でもたすンだらうと思つたら、そのまんま、そら、あすこから、ひよろッと外へ流れ出ッちやいましたがねッ。」

と指さす便所の脇の裏戸の外は仄暗い路次です。松村君の顔にあらはれる意外の色は、やがて狼狽のそれに變つて、例の職業的直感の稲妻が閃く――失策つたッ――彼奴め。こちらの眼を憚かり恐れる底の何者かでなけりや猶更のことだが、たとひ、さういふ曲者であるにしろ、尾行されてゐることは御存じないのだから、いや、確かにさう信ずる、そこで、奴、こゝへ入つたら、さう急には發つまいと思つたし、また落着いて行つて悟られては拙くもあるし、ほんの二三分だが、間を置いて來た、それが不可なかつたンだと、思へば松村君、自分の迂濶が悔まれるのです。一ぱい食つた形。まさか裏口から、倉皇として抜け出やうとは思ひがけなかつたンで――さアては彼奴め、感づきをつたンではあるまいかなッ？されば、あんなに蹣ついてゐたのも、こちらの目を欺いて油斷をさせる計略であつたかも知れン。して見ると附纏はれては困るわけがあつたンだな。フム！――たちまち、そこで目に浮ぶのが、畏怖すべき少女誘拐犯の幻影であつたのも、自然の勢ひです。おどろくべき暗示をうけたやうにハッとしたが、いや、まさか、あゝデブ〱肥つた奴に、神變不思議、目もとまらぬ際どい天狗業が演れるであらうかい？と首をひねる。いや、どッちみち迂濶くさいと睨んで参つたからには、豚尾、何者であらうと、もはや、かうなると棄てゝは置けない。まだ遠くへは行くまいから、取つ捕

まへて念のために調べて置かすンばなるまい、と、網を張りしめ、きほい立つ松村君に、亭主、怪訝な眼差しを向けて、一體、あの肥太公が何うかしましたンですかい？——やツと、いきなり跳ね上つて、物も言はず、颱の勢ひ、裏口から外へ躍り出したる刑事。てつきり此方へ逃げたに相違ないといふ見當が、不案内の者なら、きつと出口にまごつく迷路のやうな狹い歩道です。その曲り角や辻々の街燈も、やうやう衰えんとして、人通り疎らなる路次といふ路次。横丁といふ横丁を、左右前後に注意ぶかい眼を配りながら、駈けづりまはつてゐるうちに、とうとう北口の廓門へ出ちまつたが、水夫の姿は影もない。こゝより先は港町、それと支那町との境をなす關所だが、門際の番所に詰切る見張りの老支那人について訊くと、さやうな風體人相の水夫は見かけないといふ返事だから、今度は先刻の廓門、南口番所へ引返して、そこの老支那人に伺ふと、あの肥つた水夫は廓内へ入つたきり、出て行つた樣子はないといふ挨拶。右の二老人は支那町の顏役であり、町の安寧秩序を保つべき仕事については、松村君などと連絡がとれてゐるので、むろん嘘をつく筈はないと思ひ、ちと調べたい筋あつて捜してゐるンだが、ひよツと工作、通りかゝつたら、巧く留め置いて、警察へ報せてくれるやうに賴んだ松村君です。まんまと撒かれちまツたのは殘念至極だが、奴め、廓の外へ紛れ出ないかぎりは、高の知れた四丁四方の支那街。何處に潜伏してゐやうと、嗅ぎ出せないことはあるまいから、敢て失望落膽するにも及ばンと思ふのであります。ともかくも今夜のことは一應署長の耳に入れて應援の打合せをして置かねば、存外手剛い奴であつた場合に不覺を取つては一大事と思ひながら警察へ向ひます。廓門前の橋を一跨ぎ、左へ折れると右手は毛唐人街となる廣馬場の三つ角。天の川に貫き入つて星を啗ふ塔嶺から胴壁へ絡みつく怪しげな蔓蘿の花も肉塊のやうに赤ぐろい古風なる峩斯族式の猶太教會堂がある。汗を拭きながら喘ぎ〳〵そこまで來ると、星影冷やかに映る鏡のやうに滑らかな甃の上に、松村君の足はピツタリ停りました。黃龍の丸大紋は金山號乘組員と見えたる水夫衣の支那人が、堂の石段に腰かけ踞り、下腹おさへて、あうん、あうん、苦悶の體です。傍らに惻はるやうな物腰の一婦人が何やら口を利いてゐる——おやアツ。彼奴めツ——胸躍らして背を決すれば……逆ひました。似ても似つかぬ桁型の、すんなりした鼻の先に夜露の雫など垂れ流してゐなかつたら、いかさま一瓣の、色淺黑く苦み走つた眉に、搦れ枯らしたる美男子の名殘ありといふ代物。松村君。大股に近づいて後ろから

「行路病者ですか？」

「えゝ。何だか、さうらしんですの……」婦人は共儘の態(ポオズ)で

「……ねえ。ちよいと、南京(ナンキン)さん。どうしたのサ？」

「うゝん。」

「どこが悪いのさ？」

「うゝん。」

「言葉がわからないの？」

「うゝん。」

「困つたねえ。」

徐ろに此方(こちら)を向けば、會堂の庇の拱心石(かなめいし)に錆びついた軒燈の光り袈裟がけに浴びて、奥様と言ふては堅すぎる、お内儀さんと言ふては砕けすぎる氣品の彼女、衣紋(えり)は黄八丈の小袖に黒縮緬の羽織。白絹の紐。佛蘭西毛襌安(モレアン)の帯をしめて、一番の大丸髷に翡翠(ひすゐ)の中指し。無疵薄毛の七分もある古渡り珊瑚玉の金簪に梅も金無垢です。眉をおろさないのは、流行(はやり)の洋風元服と見えますが、別に粉黛のあともありませんで、瑛々たる目鼻立ち。媚めかしい唇のあひだから、黒漆(くろうるし)のやうに艶やかに閃めく美しい歯は鐵漿(かね)で染められてゐる。その情を含んだ魅力ある眸に泛ぶ微かな笑ひには、一脈の妖氣をさへ感ぜしめる婀娜者。年紀(とし)のころは二十五か六でせう――おや。まあ此の人は何て邦語(ことば)の巧い支那人だらう！――そんな顔つきで眞正面(まとも)に見つめられ、松村君、へどもどしてゐるところへ、通りかゝつたる職人體の三人づれ、萬の者、俥夫、一人ふえ二人ふえ、何だ／＼と支那人を取り巻いちまつて――おい。大人。南京。何(ど)うしたッてんだ？病氣かア？――なかに物好きと出しやばりと親切なのが、人波を掻き分けて割り込むなり、奴(やつこ)さんの肩に手をかけ、俯向いた顔を覗きながら、かう訊ねる、と、その途端です。今の今まで苦しげに唸つた奴の雁首が、不意に突然に、ひよいと持ち上つて、あたりへキヨロ／＼眼を配るかと思ふと、ヘラ、ヘラ、ヘ、ヽラと白つぽく笑ひ出したもんぢやありませんか。おや／＼これは！と、みんな一樣に呆れた顔つき。呆氣に取られてゐると、こいつが片言まじりの邦語でやり出すンです。

「へヘッ……わたし病氣ない……たゞ疲れた。こゝ休むある……皆しやん……支那ふね金山(キンシヤン)號知つてゐる。なあ。わたし水夫ある……あの船……薬。たアくしやん積んでる……わたし金ほしいこと……なか／＼……正直いふよろしいか？……それ。わたし、こッそり持つて來た……それ安く賣る……皆しやん買ふよろしい。」

一わたり群衆を見渡して、唐袴(ズボン)の衣兜から、鷲づかみに摑み

いだし、石段にガラ〳〵とあけたるは、眞つ四角い錦の小篋十二三箇。

「ヤツ。六神丸ぢやねえか？」

頓狂な聲は俥夫

「さよ〳〵」

と頷づくは水夫。

「フウム！」

「さては、やりをツたな。」

「ヘツ。どえらい。わるごとを此の野郎！」

驚いて目を丸くする三人連れの若い紳士です。

「あゝ。もし。旦那しやん。それよく知つてゐる。泥坊わるい。それよく知つてゐる……けれども仕方たない……わたし金、いる。」

「エヘヘ、山の花魁でも買はうてえ腹藏だらう？」

五十がらみの鳶。

「や。それ違ふ！」

六神丸泥棒躍起となれば

「ぬかすな。こら。わかつとる。」

「あぶねえな。おい。」

「仲間に見つかつたら、おめえ、どうする？」

「おゝ！」たちまち怕ろしいものゝ影に襲はれたやうな眼底[illegible]えを浮かべて、ぶるツと身ぶるひです「そ、それ考へる、ほんと怖ろしい……旦那しやん……わたし早く船かへりたい……さあ買つてくれる出來ないか？たつた是だけ。あと、もうない。」

「ム。まあ買つて遣きや眞實なもンではあるがだねッ」と鳶の親方らしいのが「いくら？」

「いくら？……あゝ一圓……たつた一圓……安いなあ。旦那しやん。それ値段。どこにもないよ。」

「ム。だが物は何うだい？肝腎の物は？だいぶ彼方此方で贋物をつかまされるツてえぜ。この節は。」

と言ひながら、ふと横を向けば、お隣のが例の大丸髷なンで、思はずエヘヽと愛想笑ひ。

「さうですつてね。ちよいと南京さん。それは眞物かい？」

「あゝ。これ眞物！奥しやん試すよろしい。」

小篋の一つを取つて封を切り、犀角の蓋から傾ける一粒、一まみ出せば、滾物は腰をかゞめて纖細な手のひらに受け、舌のはしへ持つて行く。この丸藥の主成分が阿片なる事實は未だ知られてはゐなかつたやうだが、味覺神經に激烈な痲痺を起すのが然るべき證據で、ピリリツと來れば眞物としてある。どうやら、そんな樣子だ。眉をひそめて顰める白い顏へ衆目一齊に集

まゐると傍らの爺が伺ひます。

「いかゞですな？奥さん。」「効きますよ。」

「ほほう！どれ一つ俺にも舐めさせろ」と差伸べる掌にポッツリと落ちた丸子をパクッと口へ放り込んで「ン。成る程！こりや確かなもンだ。」

と合點する。

「それ。上海出來るもの。僕印見てわかる。嘘ない。」

と爺が蠢めかす。

「一つ貰つときませうかねえ。」

「大きに！大きに！」

大丸髷が眞つ先に帯の間の蟇口から札を摘み出すと、お次は鳶の親方です。何しろ相場の半分につかぬ箆棒の安値だから、こんな時に求めて置くのは便利。そんなら俺もと俄かに八方から手が飛び出して、見る間に賣りつくすのも不思議ではありません。めいめい拾ひ物でもしたやうに北叟笑んで崩れ行く、なかにカラコロ、塗下駄に琴を弾いて仄白く消えて行く、あでやかな女の足に、うつとり見惚れてをりました松村君。氣がつくと六神丸賣りは、石段に溜つた金を掻きよせ、いそいそと衣兜へ捻ぢ込んでゐる。

「こいつ。病人の眞似をして人を寄せるとは、企らみやがつたなッ。あはゝ」

圖星を指されてビクッとした小泥坊です。おどろきの目を底ん丸くして凝乎と刑事の顔を見詰めてゐたが、いきなり、べつたり地べたにコキ坐つて三拜九拜。實は全く餘儀ない事情で金をつくるために、船の荷物を盗み出したンだが、もう二度と再び繰り返しは致さんから、どうか今夜のところは大目に見逃して、この始末を船に通告してくれないやうにと、例の片言まじりに哀願嘆訴と來た。こんどは此方で少々面喰つてゐると、眼に媚びを浮べてお追從笑ひ。

「へゝ。わたしよくわかる。あなた、ほんと支那人ない。ほんとの日本言葉つかふ。それ支那人。なかなか出來ない。あなた隱す。駄目々々。わたし。すぐわかる。」

こんな奴だが、金山號の乘組員とあつて見れば、正體を見ぬかれる、面白くも名譽でもありません。松村君は苦り切つた、いやな澁面に少々悲観の體だつたが、やがて、よんどころない苦笑を漏らしながら

「こんなこたア何うでもいゝ。そこへ掛けろよ。ちと訊きたい筋があるンだ。」

といふのは、むろん此の水夫が、上陸する前後の模樣について

だが、正直さうな應答によつて判斷するに、新地街へ姿を消した例の怪しい肥太漢（デブ）より、一足おくれて船から忍び出て、暗い海を岸邊に漕ぎ寄つて、そこに非常線が張られてゐることも知らず、また不思議と引つ掛りもせずに、こゝまで來たらしいのです――あれほど密（みつ）に警戒してあるんだが、矢つ張何處かに隙があると見えて、こいつら風情までが網の目を漏れるンだもの。神出鬼沒の怪物。容易に捕まらンわけだ――忌々しいやら、空恐しいやら、松村君、だが、まあ、こんな奴でも見つかつてよかつたと思ふのであります。それと並んで腰かける。

「時に、お前の船に象みたいな圖體の水夫（かこ）がゐるだらう？」

相手の表情の變化によつては、一件、いかなる人物かを少しでも知ることが出來はしないかと考へたのですが、首を捻つて思ひつかぬ風だから、さツと人相にあらはれたる特徴を擧げました。海岸通りの街燈の光に、左の眉の眞ン中、二つに裂けて見たのは、なかんづく頭芯に焦げついた印象です。それで辛（やつ）とわかつたらしい。

「あツ。あれか？……あれ漢成方（ヘンシャンファン）……それ違ひない……あなた御存じか？」

「いや知らンから訊くんだが、あの男、酒をのむか？」

「いや。のまない。」

案の掟。醉ふた眞似をしてゐたのです。松村君は自分の鼻に指をつける「此の方は？」

「それ。やらない。」

「さうか。ちや。親類縁者か情婦か何か此の時刻に尋ねて行くやうな家でもあるのか？」

「それ。何處に？」

「この港にだよ。」

「そん家あること聞かない。」

といふのだから上陸の目的、いよいよ怪しまれます。

「可訝（おかし）いね。」

「何が？」

「何がつて？いや。實はね。あの男が先刻上陸するのを見たンで、念のために訊いてるんだ。」

あゝ。これがです。これが此の水夫の頭に霹靂の激動を打ちくらはすなんて、流石の刑事も思ひがけませんでした。非常な驚愕を喫したるものの如くに、先生の顏の色は見る見る變つて、銅青（ろくしやう）で染め揚げたやうに蒼くなり、深い心痛と憂慮の陰暗に蔽は（おほ）れて了ひました。かう一目で知れるほど大きな心中の騷亂を面に現はすまいと必死に努めながら「ヘヱ……さうか？」と空ツ呆ける樣子まで、はつきり讀める。それも始めのうちは、た

だ意外と思ふに過ぎなかつたが、忽ち胸に飛び來る一物――こん畜生！あの布袋腹の秘密を知つてやがるなツ。びツくりしてゐる。フム。もはや疑ふ餘地は寸毫ないぞ。彼奴め。何のために夜の町へ忍び來るかは明らかだ。けだし少女を引つ拉つて逃げる神妙不思議の早業が、あのデブに出來やうとは、どうしても信じられないンだが、ことによると、あいつ一人ではないかも知れン。この野郎。相棒ではないかな？人目を欺く手段に藥なんぞ賣りに來るんではあるまいかな？――此の藥賣りを捉まへたのは偶然とは言ひながらも天與の手掛りを摑んでゐるやうで、このまんま警察へ拘引し訊問し、場合によつては打つ叩いて見たら、きつと口を割つて、おどろくべき泥を吐き出しさうな氣がします。ともかくも引つ張つて行かうと肚に決めたが、氣振りにも顯はさない。

「でお前は何といふのか？」

「わたしなか？……孫春安」

「さうか？孫君か？ところでその漢成方とやら、あの男に就いて、もちツと聞きたいことがあるんだが、こゝぢや夜露で冷える。俺の家は直ぐそこだ。手間は取らない。何なら小蒸汽で船まで送つてやつてもいゝから、ねえ孫君、御苦勞でも、ちよつと來てくれ。お茶でも喫まうや。」

厭と言へば引摺つても引致せずに置かぬ了見です。いかさまハツと胸に應へた樣子を隱し、傍ら迷惑さうに躊躇逡巡の體だつたが、拒絕しては却つて不爲と思つたか何うか、しぶしぶ頷いて臆劫に立ち上る物腰からして身に後暗い覺えのあること確かな男――有力なる嫌疑者だ！こやつを餌に罠をかけたら、鬼神天魔の曲者でも捕まらンこたない！フム！その曉には、わが天晴れの功名に町の人々は、どんなに狂喜するだらうか？わが素張らしい手腕に同僚達は、どんなに驚嘆し、署長は何んなに褒めそやすだらうか？――將に耀やかんずる名譽の榮光と賞讃の拍手をあびつゝ滿面得意の彼自身を胸に描きながら、凛々と勇み立ちます。果せる哉。松村君の眼力は間違ひはなかつた、もつとも、彼の思惑通り、こいつが少女誘拐犯の一味片割れであるか、それとも全然他の罪惡を犯せる者であるかは、いまだ判明ないけれども、少なくとも、脛に疵もつ代物であることは確かだ、その證據には警察へ引つ張り込まれる結果を怖れたに違ひない、猶太教會より小半丁の地點に、塵芥どろどろの汚水が、渦をまいて泡立ち流れる幅一間餘の深い溝が、厚い鐵板の蓋をかぶり橫たはつて、踏み渡るとガンガン、物凄く鳴りひびく、ところどころに掃除口の大穴があいてゐます、そこまで來ると、刑事の目の前を神妙に歩いてゐた孫春安の姿が、忽然とし

て消え失せ、アツといふ叫び聲と凄まじい水音が烈しく耳を打ちました。足もと覺束なくて溝穴には氣がつかず、あやまり墜落したのか、或はこれ偶然の血路とばかり、無鐵砲にも飛込んだのか、溝穴は市中いたるところにあるので格別念頭にも置いてゐなかつたし、まさか斯んな始末にならうとは思ひもよらなかた松村君の仰天はしたゝかです、ヤツ！と駈けより、地べたに腹匐ひ、穴の口から覗いたが、何ぶん晝までも眞つ暗い下水道。ありつたけの燐寸を燃やして搜るけれども、光は屆かず、催嘔とするもの〻腐つた臭ひ鼻を刳り眼に泌みつくばかり、水面は見えません。見えたところで追つつくまい、土地の勾配の急に從ひ、濁水は常に滔々と走つてゐるんだから、飛び込むと一緒にどツと押し流されるに決つてゐる。地團駄ふんでも焦つても甲斐はない。かくて孫春安の姿は、たうとう刑事の限界より沒し去つたのです。さるほどに、か〻る冒險を覺悟の上で演つたものとすれば、奴、よほど命知らずの向ふ見ずに違ひない。

暫くはたゞ驚き呆れるばかりだつたが、南無三！此奴こそはと狙ひさだめた大獲物に、今一息の、際どいところで、まんまと逃げられる、けだし一度ならずとあつては、忌々しくも口惜しくも、業が煮えませう。名譽心の强い、負けん氣の靑年。失望と屈辱と憤怒に、すつかり昂奮し、もう、かうなつたら意地だ。犯人を擧げやうといふ職務上の責任意識に、狡猾不埒なる憎むべき奴ばらと腕くらべでもする敵意をさへ含んだ競爭心が手傳つて、一種悲壯の戰鬪氣分、時と場合によつては、命にかけてもフン縛らずに置くものかといふほど猛然たる精神が、海嘯のやうに心頭へ逆卷き起つた勢ひ、まツしぐらに駈けつけたる處は港ぞひの川口です。町々の地下を迂繞りまわる件の下水道が、そこに巨口をあけて、汚水を吐き出してゐるンで、注意ぶかく見張つてをれば、彼奴め、いやでも應でも、そこから流れ出る、それには充分の時間がある、と考へたのは、さすがに機敏と申すべきです。支那人街と背なか合せの、昔はこゝに禁制の高札打つて、遊女の出入りを取締つた阿蘭陀屋敷跡より大波戸へ跨ぐ水師橋の石段をくだれば左側。下水掃除夫ひとり辛と足場にするだけの、膠灰の突出廂。鐵の熊手が一竿立てかけたる蔭から、下水は小さい瀧をなして落下するンで、疏口は殆んど見えない、そこに危なつかしく踞んだ松村君です。お尻の眞下から轟々と地鳴りをあげて奔出する游水の、どツと落ちあたり、眞つ黒く泡立ち騷ぎ、地獄の坩堝に沸る重油さながら敗滅せる人の世の醜怪毒惡なるもの〻相を象どつて示すやうに渦を卷き吼えたけり、靑ざめ閃めく蛇の目かと怪しまれるは空の星の燐光を映してギラ〳〵流轉する川面へ、じつと目を向

ける、が、這奴め、こゝへ押し出されるまでに、溺れずにゐるだらうか？死にはすまいか？生きてをればいゝがと、たゞそればかり氣を揉み焦々しながら、待ちに待つてゐると、さやう、二三十分もたちましたらうか？案の掟！くた〳〵どろ〳〵大海鼠の化けものです。はや人間の形もなきまでに、蹴られ、弄ばれ、打ちのめされ、揉みくだかれ、見るも無殘なる支那人の死體が、鼻緒のない下駄を枕にすけ、便器の蓋をシツカと摑み、手も足も胴も、得態の知れぬ不氣味な芥に、がんがら絡みつかれ、眞つ逆さまに恐ろしい勢ひで、ゾロツと躍り出すと一緒に、渦のなかへ落ち込み、鰻のやうな、水びたりの辮髮が、ぬらッと、もんどり打つて、摩きあがつた、その瞬間、ワツと、思はず首をちゞめて身顫ひながら、よろめき後退ぐ彼の頭に閃めいたるもの、それ、死んで來はすまいかと心配した人間の姿、哀れ、つひに生けるものゝそれではないといふ直感でありました。この時の恐怖は實際、獲物を亡くした失望よりも遙かに大きかつたが、それに打ちかつべく勇を鼓して、もう一ぺん怖々と川面を覗いたる刹那の驚きは、さらに大きいものでした。實に不可思議なる、奇怪なる、異妖なる魔術が演ぜられてゐたからです。ぶく〳〵泡立つ眞つ黒い渦卷のなかに吸ひ込まれた孫春安の死體は、いかなる物の作用によるか、水底に沈むや否やムツクと立ち上つて、着物を脫ぎすて、頭髮を捲りとり、素つ裸になつて、深い泥中に己れの墓を掘り、身を埋め横たへたのである、いや、さうでも考へなければ、理屈がわかン、といふのは、一たん見えなくなつて、まもなく、また水面にポカリと浮かび上つたものを見れば、長い髮の毛、水夫衣、帽子、靴、それだけであつたからです。あゝ。然しながら、かやうなる奇蹟、いづれの世界に有り得ませうか？よしや有り得るとしても、誰が信じ得ませうか？たゞ、ひたぶる驚異の眼睛りつる刑事は、然り、意想外なる發見の闇前にあつたといふべきです。鐵の熊手を摑み取り、亡者の纏ひし物を片はしから、突出桁の上に引つ掻き揚げて査ぶれば、帽子も服も靴も正しく見覺えのある孫春安の遺品だが、たつた一つ、それには全く氣がつかなかつた辮髮が、何と刑事の頭に冠れるやうな鬘であつたらうとは！毟り損ないめ。演りをつたなッ――だらりとぶら下つた尻ツぽの先から、ぽた〳〵臭ひ雫の垂れる不氣味な鬘を抓んで、薄明りに透してゐると、ゆくりなくも眼前の謎を解くに容易なる想像力が働き出したのであります。溝の中へ飛び込んだか、落ち込んだか、六神丸の密賣者は濁水に押し流されて行くうちに、運よくも、水に浸し崩れた下水道の壁の罅隙に衝き當り取りついて、水と闘ひつゝ素裸になると、あちらこちら

で蜿々と彎曲せる洞壁をつたひ、足で搜り手で搜り、比較的低い天井に穿てる掃除口を見つけて、命から〴〵地上へ匐ひ上り、逃獄したのである。や。それに違ひない。想ひ此處に到れば、漸くにして氣がつくのは、なるほど、この疏口から吐き出されるまで、生きてゐるものならば、浮き沈み流れるあいだには、長々しい道中、取りつく壁龕もあらう、何うにかして爬搔き遁れるために死力を揮すのが道理ではあるまいか？しかも、それが生きて流れて來るのを待ち受けてゐるなんて、いくら慌てふためいたる頭に思ひつかなンだといへ、何たる間拔けだ。のみならず、彼奴め支那人ではなかつたのである。こちらの正體は一目で見拔かれたンに、彼奴めの化けの皮が引ンむき得なかつた、いや、てんで怪しみもしなかつたとは、何たる迂濶だ。こんなことぢや仕樣がない！――松村君の氣象としては、かゝる失策滅多にないのだが、さすがに情けないやら不甲斐ないやら。そゞろ悲觀せずにはゐられません。フウム！と松村君、やうやく目が醒める。今にして思へば、あいつ、金山號の水夫、孫春安なんて言ふたのも、六神丸は該船から盜み出したなんて悧々しく言ふたのも、口から出任せの嘘八百で、あの婀娜者や嶌の親方に、試しに舐めさせた一粒のほかの、小篋の中味は、たしかに此頃頻々として現はれる眞つ赤な贋物に違ひない。その贋物を眞しやかに眞物と見せかけて賣るために、あいつ、支那人の風采を粧ひ、さも〴〵支那人らしい口調の不連續な言葉を操つて、素人を瞞着しをつた町の香具屋かペテン師の類であつたのだ。從つてそれ、新地街で見失つたる金山號の黄龍大紋について訊かれても知らン存ぜンでは可怪いから、あれは漢成方と申す下戸で厶るの何のツと、その場遁れの出鱈目を吐きをつたんだらう？そいつが上陸したと聞いて、顏色を變へたときは、てつきり此奴も一味片割と睨んだが、何のこツた、奴さん、嘘の尻が直ぐにも、割れはしないかと心配したんだ。さうして見ると此の贋藥賣りと支那水夫とは、何の關係もないやうにしか思はれンのであります。けだし警察署へ引つ張られて、顏も知らぬ男の素情人物を根ほり葉ほり訊かれた日には、どうせ辻褄を合はせ通すことは出來まいから、まかり間違ふと、己れの假面が剝げて了ふ、それに怖れをなしたかも知れないが、命がけの脫走を企てるほど重大な惡事に干はつた男ではないのだから、下水道へ姿を晦ましたのは確かに過つて足を踏み落したンである。思考こゝに落ち來ればです。今や大仕事の途上に於て、かゝる山師風情の一言一顰に怪疑の胸おどらし自ら血迷ふて、汗を手に苦慮焦躁、ヘツ、飛んだ暇つぶしの、骨折り損とは近ごろ御苦勞千萬とや申すべき愚かさ、悲憤慷慨に

値するンだが、ふと今ごろは、夜陰の町々を、寒さに打ちふるへ、匍ふ這ふ隠れ逃げて行く、濡れ鼠のやうな奴の、惨めに滑稽なる光景が目にうかぶと、世界中の苦蟲かみつぶしたる口邊に、せめてもの夜警をしてやつたやうな小氣味のいゝ苦笑がニヤリと揺らめき出で——態ア見ろ!——持つた鞭を突出扉(すつぱり)にグシャットと叩きつけるなり、石段を駈け上る、ほとんど同時に——バム!バム!バム!——いかんとも仕難い魍魎の詛殃に封じられたる港町の、重苦しい夜氣を震はし、いづこかの家の娘の不幸な運命の到來を悲しみ告ぐる警鐘の音が、遠くより幽かに陰慘に一筋の糸を曳いて流れ來ッたのです。その不吉な響に耳を欹立ッた、すばしこい獵犬が、宙に飛び上り、一直線に突つ走つた先の警察署では、丁度そのとき徹夜ながらの緊張した惑亂と沈痛な絶望の、蒼白く物狂ほしい場面が、くり返し演ぜられてゐるところでした。刑事部長は石井なる上役と、卓子を挾み額を鳩めて、何やら密議中であつた署長室の頑丈な主人公——少女誘拐事件このかた、非難攻撃の矢表に立てる不撓不屈の人物は、いく夜眠り得ぬ苦悶心痛に、いたましく憔悴せる額を上げて、松村君を迎へたが、その奧深く悩ましげに落ち窪める甕のやうな大きな眼には、絶えて久しく影を潜めてゐた希望と光明とが、異常なる虹光を放つてギラ〳〵輝いてゐる。見のがし得ざるものは、それ。いつもと少し遂つてをります。

「また今夜もやられましたなッ。」

「ム!残念至極だ」と人物が唸る「君が知つての通り。犯人は唐人船の乘組員に違ひないといふ確心のもとに活動をして居つたが、なンしろ、一の證據も一の手掛りもないために、とかく暗中模索の心細い狀態であつた。しかし、ね、君、それも長くはないといふもんだ。ム!今夜といふ今夜は有力な手掛りがついたんだ。それは、たつた今だがねッ。やつぱり吾輩の眼識に間違ひはなかつたよ。ム!犯人は確かに支那人。君の活動領分だ。まあ。掛けたまへ。」

いかに世間よりは愚物扱ひにされやうと、已れ自らは炯眼なる技術家を以て信ずる人物は松村君の着座を待つて、事の次第の説明にかゝるンであります。(次號完結)

情實

情實の人間性と反社會性

長谷川如是閑

抽象を離れると情實が生ずる、

事物をその事物自體の合理性に於て見る時に抽象が成立する。車を『重力の現象を利用して、物を移動させる構造』といふ風に『考へる』時に、車が抽象される。

この抽象に於ては、毫末も情實を容れる余地はない。重力の原則とその利用とに關して『自然』の決定した所のものは、『人間』の情實で何うすることも出來ない。その車によつて物を移動せしめやうとする運動をとる場合にも、その運動が重力の原則を利用したものである限り、やはりその間に人間の情實を容れる余地はない筈である。それは車を曳く行動が、車の抽象から離れ得ないで、車自體の合理性を實行するより外はないからである。

所が、一度、車の抽象即ち車自體の合理性から離れた、しかし車に關係した事柄があるときには、そこに必ず情實が産れる。

百斤を積んだ車を曳かねばならぬ場合に、當事者の間に、九十斤だけ積んで百斤積んだ事にしやうとすれば、それは確かに可能である。又嚴格に載量百斤を超へることの出來ない車に、百五十斤を積むことも出來る。然しこの後の場合にはそれがために車の破壞が起つて、事實上情實が破綻する。それはこの場合の情實が、車の抽象に觸れたからだ。車の自體の合理性を無視したからだ。

で情實は、抽象に觸れゝば打ち破られる。

そこで、情實なからしめるためには、嚴格に抽象に即するにかぎる。法律、定款、證文、等をその文字通りに理解するのは、それらの法律、定款、證文等をそれ自體の合理性に於てのみ見ることであるが、その文字通りの勵行といふことは、情實を排する唯一の道である。それは行動を、その行動の約束自體の合理性に限定するから――抽象を離れないから――である。

然し、現實の人間の生活行動に於ては、抽象から離れない行動といふものは存在し得ない。蓋し、人間の行動自體は、抽象とは全く別な、行動傾向の上に立つてゐるもので、抽象はあとからその行動の合理性を『考いた』に過ぎないのである。『戰ふ』といふ行動は、決して戰爭といふ事柄自體の抽象に基いて起つた行動ではなく、戰ふ行動の傾向に基いて起つた事である。それをあとから、『戰ひ』が如何にして起り又は起らねばならぬかを『考へ』て、戰爭の抽象が成立したのである。

然らば、抽象に即するといふことは、現實の行動を起すことではなく、たゞ行動を『考へる』ことである。それは『行ふ』ことではなく『考へる』ことである。『抽象に即する』ことからは決して行動そのものは起らない。力學の法則を考へることから、直ちに建築は起らない。

人間の行動は、生活意慾に刺激されて起るものであるが、生活意慾は、複雜な具體性をもつて始めて充足されるべきもので、抽象によつては決して滿足されない。惡行でも善行でも、行動の衝動は、行動そのもので具體的に充たされる外はない。『惡行とは何ぞや』、『善行とは何ぞや』といふやうな抽象を考へたゞけでは、惡行も善行も行はれたのではなく、從つて人間的生活の意慾が充たされたのではない。

生活の意慾は決して抽象によつて充たさることは出來ないとすれば、人間は決して道理や法理や數理や學理や論理や病理やの『理』を文字通りに生きるものではなく、必ずそれらの合理的公式を外れた、尨雜な具體的生活そのものを生きるものである。蒸溜水のみを飲めば、人間も魚も死んでしまうといふことがあるが、行動の抽象のみを行動しやうとすれば、人間はどんな行動をもとることは出來なくなつて、結局無行動の狀態――死滅――に陷らざるを得ない。

抽象を離れなければ生きることが出來ないといふ人間は、即ち情實なしには生きられない人間である。

自然の理法には情實がなく、人間の行動には情實があるといふのは、人間の行動には理法がないといふことではない。情實のないのは、『自然の理』に於てであつて、自然そのものに於

てゞはない。情實のあるのは、人間の行動に於てゞあつて、『人間行動の理』に於てではない。人間と雖も、その行動の理法に於ては情實がない。何となれば、行動の理法は、行動の抽象であつて、道徳、法律、宗教その他の規定や教理の條文そのものであつて、これには情實が禁物とされる。同時に自然と雖も、自然そのもの丶具體的實現に於ては情實だらけである。自然の水には決して蒸溜水がないやうに、自然も決して、それの抽象――即ち自然科學の公式――のみを實現させてゐるわけではない。『自然』といふ言葉自體が　通常、公式を外づれた尨雜性を意味する慣はしである。天然水といへば、必ず尨雜物を含んだ水を意味してゐるやうに、すべての抽象されない狀態を私達は『自然』と呼んでゐる。道徳や法律や宗教やの公式に拘束されない人間を、私達は『自然人』と呼ぶ。それはその人間の行動が抽象性を外づれ勝ちの場合である。

　抽象を外づれた行動に於て、人間はよく彼れ自からを表現する。人間の個人的感情が一般的の抽象に拘束されずにそれ自體を貫徹するからである。萬人のするやうな『お辭義』をした時に、私達は　何等私達自身を表現しない。法律の條文通りに借金を返却した場合、私達は少しも自分自身を表現してはゐない。反之、もし私が誰れに會つても　たゞその人に白眼を吳れるのみで決して會釋といふことをしないなら、私は、自分の『人嫌ひ』の個性を表現してゐるのである。私がもし、決して人から借りた金を返したことも亦人に貸した金を返へさせたこともない人間であるならば、私は或は共産的の人間であるか、又は甚しく放慢な人間であるか、何れにしても、多少自分の個性を表現してゐること丶なる。個人的感情が抽象を外づれて現はれてゐるところに個性が見えるのである。

　情實は、個人的感情に基いて、一般的抽象を破壞するところに、その人間性があると同時にその人間破壞性がある。道徳に、法律に、その他人間生活のあらゆる約束に沿ふてのみ行動すれば、人間は勢ひ抽象化され、人間的情味に乏しいとの批評をうけねばならぬが、反之、全く抽象に沿はずに個人的感情の意慾によつて生活の約束を空文に歸せしめるやうな行動にのみ出た時には、彼れは社會生活の理法を破壞するものとして排斥されねばならぬ。蓋し社會の生活は、個人的感情の自由にある拘束を加へねば決して成立するものでないのに、個人が無暗にその拘束に反して個性的意慾による行動を擅まゝにしたならば、社會の存立は不可能となるに定つてゐる。情實は、約束に規定された抽象を、個性的生活意慾で破ることである。それは決していつも惡い結果をもち來すものとは限らないが、その結果が善い

といふことは、その判定の破られたことによつて招かるべき不幸を防ぐ道とはならない。社會生活の組織が、その本質的形態を保つためには、それが村落の組織であらうが、軍隊の組織であらうが組合であらうが、國家であらうが、寺院であらうが、その組織の一定の抽象が破られずに進行することを條件とする。

原始的には一種の共産體であつた民族的の宗教集團が、その本來の形態を失つて、階級的の搾取機關たる寺院といふものに變化して、今日のやうな僧侶階級の財團として發達したのは、原始的の宗教集團を規定してゐた共産的の約束が、僧侶等の個性的意慾の集合による階級的搾取の手段によつて破られた結果である。それには、必らず本來の共産的組織の約束を破壞する僧侶個人の意慾の強く働いたことを思はねばならぬ。それは即ち情實であつた。

情實は、個人的意慾の具體的充足のために、生活の組織に對して、さまぐ\の惡いことをしたが、永久にその惡いことは續けられる。

人間は、社會を離れて生きることは出來ない、從つて、社會的抽象——即ち制度、習慣その他の約束——の下に生きる外はない譯に、その社會的抽象を生きるよりも、個性的具象を生きる方が遙か人間らしい生き方であると感ずる人間的パラドックスを、私達は何うすることも出來ない。求心力と遠心力との平均が、物質を凝集せしめてゐるやうに、人間は、抽象的の『一般』と具體的の『單獨』との、二つの矛盾した力の平均の下に自分を凝集せしめてゐる。人間の生活は、理性と情實との間を自振動する振子的生活である。

更らに甚しいことは、社會的抽象たる制度の成立さへもが、情實の力に依頼する場合が少なくない。『訐いて以て直を爲す者』ばかりだつたら、如何なる制度も組織も成り立たない。

原始國家の支配集團は多く合議政であつたが、その合議政の制度には、必ず神意が重大な役目をもつてゐた。八百萬の神々が神つどひにつどつて政事を決定する場合にも、より高い神の啓示が、議員たる神々の投票以上の決定力を持つてゐた。

これは何ういふ意味であつたかといふに、事實に於ては、神意が啓示されたのではなく、少數の最高支配者の個人的判斷が抽象的の制度に反して、最後の決定を與へたのである。

もつと發達した古代のローマに於てさへ執行官は支配階級の選擧によらねばならぬといふ制度のあつた時に、現在の執行官の一人が、その選擧の行はれる前夜に候補者の氏名を神の啓示によつて知らねばならなかつた。さうして選擧人等は、その啓

示に現はれた候補者のみを投票せねばならなかつた。これは無論、その執行官の個人的判斷によつて適任者を選定する方法であつて、選擧制に對する『情實』に相違ない。

然し、この情實なしには、當時の選擧制は決して有効に實行されなかつた。すべての選擧人の判斷に任せる時は、いろ〳〵の意見で悲慘な結果となる。そこで情實が、選擧制に反して被選者を個人的に決定せねばならなかつた。それならば、始めから選擧制などによらずに、豪らい人の指名に任かせた方がよさ相なものだが、その社會に、個人的な決定が一般に信奉されぬといふ情況が存在する場合には、どうしても合議制をとらねばならぬ。しかも、個人的決定を否認する習慣は、その社會の永い間の經驗が作り上げた約束であつて、その約束を産み出すやうな合議制の下に、その社會は原始以來その統制を形作つてゐたのであつた。だから、合議制はやめられぬが、その制度の持續のために、却つて、少數の權威者の個人的判斷に依賴する『情實』を加味せねばならなかつたのである

かういふことは、もつと進んだ今日の社會の合議制にもある。普通選擧に於て、候補者の屆出を必要とするが如きも、畢竟被選擧人が、一般の判斷以外のある他の方法で豫め選定されるといふことである。古代ローマに於いてはそれは神意の名の下に、有力な最少數支配者の判斷によつたのだが、今日ではそれが、政黨といふ甚だしく『情實』性に富んだ集團の決定によつてゐるのである。

普通選擧といふ、甚だしい抽象を求める制度の根抵が、政黨的情實といふ甚だしい具體性の上に立つてゐるといふのも人間的パラドックスの一つの現はれである。

理法と情實――理性と感情――『理』と『情』――との二つの相反するもの同士の不即不離の關係の下に社會といふ人間の凝集が可能である。男と女といふ相反するもの〻關係に於て夫婦といふ人間の凝集が可能であるやうに。

東京人と情實

小島政二郎

チャーレス・ラムが

「私は自分が人種、國民、或は個人間の相違を極端に感ずることを自白する。私には物でも人でも冷淡に見てゐられない。ど

んなものでも、私には興味不興味の問題として映つて來る。だから、私が冷淡に見てゐられるものは、無味なものなのだ。分り易い言葉で云へば、私は僻見の塊だ。好き嫌ひの塊だ。同情と無情と嫌惡の奴だ。隨つて私には、すべての人を等しく好くなんてことは到底出來ない。」と云つてゐる。誰でも人間はこんなものだらう。世に謂ふ情實なんてものも、こんな人間心理から生じて來るのだらう。

ところで、私の貰つた題は「江戸ツ子と情實」と云ふのだが、今時江戸ツ子なんかゐる譯はないし、ゐたら其奴は箸にも棒にも掛らぬ「酸豆腐」に違ひない。そんな奴の話なんかするのは眞平だから、「東京人と情實」と云ふことにして書くことにする。

さうなると、今度は情實と云ふ言葉の詮議にかゝらなければならないが、云ふまでもなく、情實と云ふ言葉のうちには非難の意味が含まれてゐる。眞理とか正義とかに則つて行動をしずに、個人の私感情乃至私益を行爲の動機にしてゐるやうな場合を、情實に捉はれてゐると云つてゐるやうだ。ところで問題の東京人だが、東京人と云ふ奴、人情脆いからぢき情實に捉はれ易い。――これは情實と云ふには當らないが、東京人くらゐシキタリに負ける人種はあるまい。例へば、あすこの料理は旨いよと聞いて行くにしても、行く前に、お帳場へ附け屆けをしなければならない家かどうか、女中にはどのくらゐ遣つたらいゝものかなんてことを一々問ひたゞしてからでなければ容易に出懸けやしない。

そこへ行くと、地方から出て來てゐる人は氣が强い。自分本位で、遣りたいだけ遣る。いつか三人で、日本橋の中華へ飯を食ひに行つたことがあつた。その時、地方出の先輩が奢つてくれることになつて、女中がおつりを持つて來る間に、

「幾ら遣つたらいゝ？」と、もう一人の先輩に女中への祝儀のことを尋ねて、「一圓ぢや少いか。」

――但しことわつておく十年も前の話だから、今よりは貨幣價値が稍高かつたと思つて戴きたい。ところで、さう聞かれた東京生れの先輩は

「一圓ぢや少いね、君。」と私の顏を見た。で、私は「えゝ。」といふ代りに頷きながら、

「まあ、二圓でせうね。」といつた。すると地方出の先輩のいふことには

「二圓は多いよ。一圓五十錢やらう。」

「一圓五十錢なんて半端な祝儀はないよ。二圓やれよ。」

「一圓ぢや少いし、二圓ぢや多いし、一圓五十錢がジヤストだ

よ。」

　二人の先輩は冗談半分にから云ひ爭つてゐたが、結局地方出の先輩は五十錢銀貨を二つ並べて立ち上つた。私はこの一部始終を見てゐて感心した。我々東京人の頭には、一圓五十錢、二圓五十錢なんて祝儀は存在しない。しかし、考へ返すまでもなく、五十錢といふ勘定がある以上、二圓置きたくなければ置く必要はないのだ。一圓五十錢で澤山なのだ。その法が合理的だ。金高にすれば、高が五十錢多いか少いかの話だが、しかし考へやうによつては、生活態度の問題だ。私はさういふ風に考へた。さうして露骨に自己本位の祝儀の遣りつぷりに、目を醒された

　シキタリを直ちに情實に解すのは當らないが、まあ大目に見て情實のうちに入れて貰つて、――それでなければ、私には話の種がない。東京人と云ふ人種は、私の兩親の生活なんか見てゐると、もうまるで情實の奴だ。不斷は半紙一枚も無駄にしない生活をしてゐながら、お祭禮なんて云ふ時には、五圓も寄附すれば十分だと思ふところへ、三十圓も五十圓も寄附してゐる。一圓も出すまいと思はれるやうな家が、十圓も寄附してゐる。ちやア何かそこに趣旨でもあるのかと云ふと、さうでもない。唯神さま佛さまのことと云へば、出さなければならないやうに考へてゐるのだ。

　旨い菓子屋が出來ても、旨い米屋が越して來ても、「××屋はお祖父さんの代からの買ひつけだから」と云つて、見向きもしない。熱海だとか湯河原だとかの宿屋に對しても、この「お祖母さんの代からの」を遵奉して變らない。お祖母さんの行つた頃はいゝ宿だつたかも知れないが、今ではどうだか分りはしない。第一、もつといい宿が幾軒も出來てゐる。それでも、こつちが昔しと變らないやうに、向うも昔通と信じてゐるのだ。面白いのはお寺さんに對する盆暮の附け屆なんかも、昔の通りと云ふ保守主義を守つて、祖父以來の、その頃の最高の金額を改めずにゐる。ところが、時代の變遷で、その頃最高だつたものが、今では最低になつてゐるのも御存じない始末だ。

　着物なんかにしても、巡査や藝者と同じやうに、十月一日が來れば、今年のやうに暑くつても、必ず袷を着る。五月一日には、どんなに寒くつても、單羽織を引ッ掛けてゐなければ法律に牴觸するのかと思ふやうだ。

　東京人は弱蟲が多いから、どうしても事大主義になり易いと思ふ。私はじめ東京生れの文士を見わたすと、大抵は弱蟲ばかりだ。弱蟲は大勢を賴みにする。殊に、賴まれると厭と云へたい性分があるから、つい引き受けてしまふ。が同時に、ハタの見る目

を恐れること東京人より甚だしきはない。だから、自分が局長か何かの位置に就いても、心ではあれをあの位置に、あれをこの位置にといろ〳〵身贔屓をしやうとしても、薩摩や長州のやうに、おほつぴらに聟や親類や乾兒を引き立てることなんか思ひも寄らない。この文章の初めの方で、私は東京人が人情脆いからぢき情實に捉はれ易いと云つたが、情實に捉はれ易さうに見えて、その實東京人くらゐ情實に捉はれない人間は珍らしいだらう。本當は、人前を憚らず情實を行ふだけの圖太さがないのかも知れないが……。文壇を見わたしても、東京人はみんな離れ離れだ。東京人は一種のコスモポライトだ。

オーヘンリーの短篇に、「カッフェのコスモポライト」と云ふのがある。シカゴの話で、主人公がカッフェへ行くと、そこで一人のコスモポライトに逢ふ。こまかい話は忘れたが、何でもそのコスモポライトが主人公に向つて、「自分はシカゴ市の生れだが、本當のコスモポライトは、世界を家とするだけでは十分ではない。世界中どこにも家がないと云ふのが本當のコスモポライトの心境だ」と云つたやうなことを説いてゐたと思ふ。主人公はその説を聞いてひどく感服して、これこそ本當のコスモポライトだと思つて尊敬するのだ。やがて、そのコスモポライトは主人公のテーブルを離れて奥の方へ行つてしまつた。暫くして主人公も出ようとすると、奥の方で喧嘩騒ぎが起つた。見ると、喧嘩の相手はさつきのコスモポライトだつた。で、主人公はボーイを掴まへて喧嘩の原因を尋ねて見た。すると、意外なことに、「こちらの方が」とボーイはコスモポライトでない方の紳士を指さしながら、「シカゴ市の下水の惡口を仰しやつたのです。すると、あちらの方がお怒りになつて、いきなり喧嘩をお始めになつたのです。」と云ふ返事だつた。世界中どこも家でないと云ふコスモポリタンが、生まれ故郷の下水のことで毆り合ひの喧嘩をするなんざあ、皮肉でいゝ。いかにもオーヘンリーの喜びさうな材題ではないか。

ところで、東京人は丁度このあべこべだ。東京人は一刻も東京が忘れられない。東京を離れては生きてゐられない。どうしても巴里を離れることを肯じなかつた若いアナトール・フランスを思ひ出す。そのくせ、心は一種のコスモポライトだ。情實なんか行はれよう譯がない。

試驗から情實へ

高島米峰

法治の世界、そこには、權利と義務との爭ひが絶えない。德治の世界、そこには、溫情と互讓とが溢れて居る。といふやうなことを考へて見る。さうすると、權利と義務との爭は、二一天作の五と割り切らうとするのであり、溫情と互讓とは、算盤を超越して居るのである。といふやうな氣がして來る。今、問題の試驗と情實、一は水際立てやうとするのであり、一はそれをぼかさうとするのである。水際立つて善いこともあり、ぼかされて善いこともある。たゞその極端に走れば、どちらも弊害を生ぜずには居らない。

情實は情實で、試驗は試驗だ、各々獨立の地歩を占めて居るものではあるが、しかし、情實の世界にも、試驗は存在し得るし、試驗の世界にも、情實は成り立つのであるから、全然これを切り放して考察するといふだけでは、或は恐らく、實際生活の眞相に、觸れ得ないかも知れない。

『試驗』、何といふ冷酷な關門だ。『情實』、何といふ人間の溫味だ。冷酷な關門を突破し得る確信を有するものは、敢て、人間の溫味に抱擁せられる必要はないかも知れないが、情實の蔓をたぐつて、何ものかを攫まうとするものは、蓋し、試驗の關門を通過し得る、自信の無いものと見られても仕方があるまい。イヤ、關門冷酷なるが故に、こゝに情實の發生を要し、情實の弊堪へ難きが故に、こゝに試驗の制を要するのだ。とも言へないことはない。その試驗にさへ、今では、手のつけられない程の弊害を伴つて居る。

『大義親を滅す』といふのは、情實否定の標語であつて、『義理と人情のしがらみ』などといふのは、實際生活上、到底、情實を振切ることの出來ないものだといふことを、物語つて居るではないか。硬骨を以て鳴つて居た男も、搦手からは、得て口說き落され勝だとある。自分の代表者を、立法府に送るといふ選擧權さへ、賣買したり贈與したりするといふ程に、情實の弊害が行はれて居る現代だ、チョイと眼を離したら、何をするかわかつたものではない。

と言つたからとて、謂はゆる大義親を滅すを振りかざして、父子法廷に爭ひ、兄弟牆に鬩ぐといふやうな、情味の無い世界は、どんなにか住み惡いことであらう。試驗だ、競爭だ、

優勝劣敗だ、適者生存だと、五十年の生涯を、武裝して暮して仕舞ふなんどは、全く、佛教で説くところの修羅道の生活で、とてもやりきれたものではない。イヤ、人間に生れて來た所詮が、どこにあるかと言ひたくなる。

修羅ぢやない。試驗は全く地獄だといふ。しかし、どんなにそれが苦しくとも、どうせ一度は、何處かで、誰かに、試驗せられなければならないのである以上、それをなし崩しに受けるか、一時に受けるかの區別こそあれ、全然、試驗なしには世の中へ出られないのであつて、畢竟、試驗を無視する譯にゆかないのである。たゞ殘された問題は、その方法如何といふことに歸着する。

試驗が惡いのではない、若し强ひて惡いものを探せば、試驗でもしなければ、始末がつかないといふやうになつた、その情實が惡いといふことになる。今から十七八年も前を振り返つて見ると、東京市中の、中學校でも高等女學校でも、生徒の爭奪戰に、どんなに心を痛めたものだか、知れたものではない。每年一月から二月へかけて、中等學校の經營者は、最寄の小學校へ、お百度を踏む、小學校長と六學年の擔任教師とを招待して、御馳走する、その上に、若干の手土産を携へて、その私宅へ御機嫌伺にさへ出なければならなかつた。從つて、その頃の小學卒業生は、どんな低能兒でも、大手を振つて、中等學校へ入學したものである。

ところが、それから七八年も經つと、形勢がすつかり變つて來て、評判の善い中等學校になると、二百人の募集に對して、千何百人といふ、多數の應募者が押しかけるといふことになり、今度は、小學校の擔任教師が、中等學校へ嘆願に出かける、父兄が、緣故をたどつて、校長や教員の私宅を訪問する。

卽ち、曾ては、學校が、生徒を欲しいといふところに情實が行はれ、昨今では、學校が、押し寄せて來る生徒を擊退する防波堤として、選拔試驗をする、これに應ずるものは、實力の有る無しに拘らず、千何百人中の二百人たらうとするために、叶はぬまでもと出來るだけ、情實の蔓をたぐり寄せる。その甚だしいのが、試驗問題の買收とまで、漕ぎつけてしまつた

それは畢竟、試驗といふ關門が、餘りに冷酷だからだといふものがある。そこで、今度の文部省の試驗地獄救濟案であるが、その骨子は、學校長の成績報告に重きを置き、入學試驗のための負擔を、輕減しやうといふのである。それが首尾克く參りましたら、お手拍子御喝采といふところだが、殘念ながら、さう安くは問屋が卸さない。今までゝさへ、小學校では、卒業成績

順位を五通り位にして、『五十人中五番の十』とか、『五十人中二番ノ八』とかいふ風に、報告して居るところがあるといふ。『五十人中二番ノ八』といふのは十八番のことで『五十人中五番ノ十』といふのは五十番のことなのである。十八番だ、五十番だといふよりは、二番ノ八とか、五番ノ十とか言つた方が、どの方面に對しても、誤魔化しが利くのである。今後若し、文部省案に從つて、學校長の成績報告が、有力な材料として取扱はれるといふことになれば、父兄は、決して、指をくわへて、默つて成り行きを眺めてなんか居らない。必ず、暗中飛躍も起れば、暮夜の訪問も行はれる。清廉なる擔任教員と校長とは、恐らくは、そうした人々からの手土産の返却に人夫の常雇ひを必要とするに至るであらう。

その結果は、金持に有利にして、貧乏人に不利なること、略略想像し得られることであつて、上級の學校は、畢竟、有産階級の子弟の逃げ込み所だといふことになり、無産階級の子弟は、小學以上の學校教育は、受けられないといふことにもなるかも知れない。その上に、大學卒業生には、多くの特權があるといふことになると、貧乏人は、單に、經濟的に貧しいといふだけでなく、精神的にも貧しかるべく、運命づけられて居るのだといふことにもなる。即ち、立身も出世も、研究も應用も、一切、情實の賜だといふことになるのであつて、時代の趨向である。實力本位、人物本位とは、全然、逆行することになる。現に、新聞社や會社などが、記者や社員を採用する場合、從來は、縁故情實に依つたのであるが、近來は、試驗で採用するやうになつて來て居る。然るに、從來、試驗本位で來た學校が、今になつて、情實本位に逆轉するといふことは、奇妙な現象と言はなければならない。

曾ては、試驗にさへ情實の弊が伴つた。しかし、今の教育者は覺醒して居る、彼等の良心は健在だ、縱令、情實本位になつても、斷じて弊害は伴はないといふ。吾々は、それを信じたい。そうして、せめて、教育の前にだけでも、貧富に基づく差別待遇が行はれることなしに、却つて、人間の溫情と互讓とが、平等に公平に行はれることに依つて、そこに、合理的情實の發揚を見、潤ひのある生活を樂しみ得られるやうな、氣持のよい世界の建設を、心から念願せざるを得ない。

要するに、學校が不足なのである。でなければ、無暗に、高級學校へ入學したがるものが多いのである。即ち、入學志望者の全部を收容し得るまでに、學校が增設せられるか、それとも、人間は、高級學校を出なければ、役に立たないといふものではないといふ、一種の覺醒が、國民の間に起つて來るか、少

くとも、誰もが、大學教育を受けなければならないとか、受け得られるものだとかいふ、迷妄の打破せられざる限り、吾々が、如何に眞劍になつて、心から念願するところがあつても、地獄の釜の蓋は、永久に、閉ぢられることはあるまい。(昭和二、一〇、二)

情實と政黨

下村海南

情實とはなにか？

第一義としては言海では「ことのこころ」「ことわけ」とあり、辭林には「實際のわけがら」「まことの事實」とある、漢字なれば和製らしく感じられる詞ではあるが、念のために調べて見ると、立派に支那傳來ものであつて史記の呂不韋傳には「秦王下レ吏治、具得二情實一」とあるから、只有のまゝの事實といふ意味に使はれてゐたのだ。

支那傳來の文學には漢呉唐元明清なんどの音がくさぐに傳へられて來てるが、中には胡越同舟を呉越同舟といふが如く、全然文字そのものまで變裝して仕舞つたのもあれば、又此情實のやうに同じ文字を使つても、其傳來の意味はいつの間に消えて仕舞つて、言海の「道理の外に」「人情の捨てられぬこと」、辭林の「人情上斷然たる處置をなしかねることがら」「私情のからまりたる事實」などいふ、第一義の丸でちがつた意味に用ゐられるやうになつたのもある。

人間は生きものである、喜ぶ怒る哀しむ樂しむ泣く笑ふ、だから又感情の動物といふ、この生きものが只道理一本鎗で二三が四、二三が六と動いてゐては、そこに味もそつけも出て來ない、人間の社會生活といふものはそう單純なものでない、乾燥無味なものでない。骨を刺す舌鋒に犬養木堂の辛味もあれば、孫さんを脊中にのせて部屋を這ひ廻るところに又彼の一道のあたたかみがある。兄貴も絶交だ養女も離縁だ、あいつには逢はない、こいつはぼい返へせといふところに德富蘆花の澁味もあれば、さて病革まりて會ひたい來てくれと電報を打つ、かけつけた兄貴の手を握り占めたところに又彼の甘味がある。

二二が四を水平線としてそこに二二が三があり二二が五がある、それが非理違法といふて見てが道理そのものがもとく人間の相場付けしたものである、況んや法律とか命令とかにおて

おやである。かるがゆゑに、お上の御法度を破つたとはいへ赤穗の四十七士は未だに渇仰の的となり、朝敵ではあつたが白虎隊の墓前には香煙が絶えない。

といふて僕は道理を無視して情に生きよといふのではない、只世の中は道理ばかりではいかぬ、そこに情といふものが絶えず大きな力で動いてる、しかし其情にこだわつてはいかぬ、何も「大義滅親」などいふ古い諺を引つ張るまでもない、現に「情實」といふ二字の用語例は、情になづむな情にとらはれるなといふ事を示してゐる。

情實

そこで此度の府縣會議員の選擧を情實といふ上からながめて見る。

今回の府縣會議員の選爭につきては云ひ度い事が澤山ある、が兎に角與黨は與黨で敗北でない豫定通りだとか當然だとかいふ、野黨では又豫期以上の成功だ大勝利といふ、それは何れでもよろしい誰か烏の雌雄を知らんやである。

只我々は……我一人でない殆んど我と知る幾十百の人々は、よるとさはると豫期した以上に民政黨の當選率が多かつたといふ、それはこの事實以上にうんと政友會の當選率が多からうと想像されたからである。

そこには(一)選擧區の擴大(二)選擧人の增加(三)運動の制限なんど、時勢の進運と共に與黨の政友たると民政たるとを問はず、そう／＼干涉などの出來にくゝなつた事、又干涉されにくくなつた事も認められやう。もはや超然とか中間とかいふ變態內閣の出現は跡を絕つて來た、必然的に二大政黨が交互に政權を執るやうな氣運があまねく民衆に看取されて來た事も想到される。しかし今春政友會內閣組閣に伴ふ地方官の交迭はかなり手廣かつたのみならず、浪人の復活が量に於ても質に於ても所謂水平線をはづれすぎた。その結果新陳代謝して順々に何十人となく昇進すべき筈の現役地方官は、多少とも順ぐりに芽を吹くべき筈が停頓する。停頓するばかりでない幾分左遷の氣味になるものが多い、之れが人情として嬉しくない、いや忌々しい、拾ひ上げられた浪人は多いといふても知れてゐる、引つづき現役になつてゐる大多數の感情を害した不利は、少數復活者によりて得る利益よりは遙かに大きい。此不平の氣分が此度の選擧にどう響いてゐたか之れはよくは知らぬが、此交迭の薬が利き過ぎたといふ事が、汎く／＼世間の隅々までしみ渡つてゐる、だから今度は與黨は壓倒的な素的な勝利を占める事であらう、それぢや野黨は可愛想だみじめだといふ、一種の强者に對する反感弱者に對する同情の空氣が全國に殊に市都には濃厚にみなぎつてゐたとおもふ。

情は忘れてならぬ、しかしとらはれてはならぬ、弱腰で白い齒を見せても居られまい、が一寸の蟲にも五分の魂といふ、薬が利きすぎるとそこに反動がおこる、なにも府縣會議員の選擧ばかりでない、近頃の滿洲の排日騷ぎを見ても正にお手元拜見である。

今度の選擧で一つ見逃がす事の出來ない事は野黨の選擧監視といふ事である、政府が公平に行はるべき選擧に監視といふ詞からして不都合な次第であるが、兎に角各府縣に亙つて野黨は監視にかけ廻つた、何れは現内閣の手でやめられた浪人連は、勢いぞろ／＼と之に加勢したのではないかとおもふ。何れの人事交迭の時でも、無能である又不都合であるため乃ち不適任者であるためやめる者と、有能であり才幹もあるが黨派的色彩の爲めやめる者と二た色ある、

問題はこの無能であり又人格の感心出來ぬ連中いつでも落伍者たるべきものが、只黨派の中に喰ひ下がり泳ぎ廻つて、折々浮び出ては黨派に左右せられ傍ら後進の途を阻害するとである、といふてそこが情實であつて此度矢張り監視などでかけ廻つたとすれば、將來民政黨内閣には又此浪人連が能不能共にぞろぞろ復活する、正に今春の交迭に對する非難が再びくりかへされはしないかといふ懸念がある。現に黨派の弊は内務から鐵道に近頃はだん／＼各省の局長課長にまで波及してをる、一警視廳にしても上は總監より下警部巡査部長にまで及んできた、かうして御互に黨派の情勢が上下左右にひろがられては、今に日本國民があげて政黨の色彩に色分けせられ、善惡共に自黨なら擁護反對黨なら攻擊といふやうな事になるとたまつたものでない。

今秋の普選には政見がどうの候補者の品定めがかうのといふよりも、そこに感情といふものがかなり動いてゐたとおもふ、國政の進捗よりも相互の黨派に忙しすぎる與黨野黨もかうした點に大なる考慮を拂つてほしい。(二、九、二九)

人は情の淵にすむ

水島爾保布

ベーブ・ルースがカツ飛ばした六十本の本壘打、どの一本にだつて「情實」なんかは係つてゐやしない

ジヤツク・デムシーをメチヤメチヤに突きのめして再度世界拳鬪選手權を贏ち得たジエーン・タニーの拳固、これにも「情

實」なんかが絡るせきはなさそうだ。――一體あのデムシーつて野郎、どんな野郎だか知らないが、どうも我輩あいつの寫眞面が氣に食はない。ブル、フロツクが酢を呑まされて、キユーツと引つ縮んだやうな、トテモ不景氣でトテモ下劣でトテモ醜惡な面をしてやがる。だから我輩いつの試合にもあいつの敗ける事をのみ希望してゐた。今度だつてさう思つた。踏み潰ぶされた往生念佛の張子面の如くにクシヤクシヤにヒン歪められて、ギユータ蛙のやうにヘタばつて了やアいゝと思つてゐた。思つてゐたその如く、向ふ面に散々に叩きのめされて鼻から血を噴き出してさうしてごろりデングリ返つて白眼を剝いてグンニヤリと延びて了つた。全く態ア見やがれである。――などと、その結果には大分我輩の感情は關係したが……

新進ラコストに慘敗したチルデン、――どうもこのチルデンなる野郎も我輩嫌ひな一人だ。だからこいつも態ア見やがれだ。――とそんな事はどうでもいゝが、このチルデンにしたところで恰も烏賊のとんびとからすのやうな鼻でヘンチキリンな波紋を描きながら、數萬の見物を前にラケツト片手のヘラヘラ踊りを演じた上句ペチヤンと敗けた。こいつも決して「情實」には關係してゐなかつたに違ひない。

その外、……モナコの玉轉(ルレツト)し、一天地六の賽コロ――どつちもいかさまを使へはともかくも、さもない限り博奕の勝負には人格も「情實」も挿まれないものと見て差支へなからう。

――と、この際都合上「情實」の無い世界を、最善の班に置くとして、それを教へ立てる。差し詰めその第一に居るものはスポーツと博奕だ。どうも、政治とか藝術とか學問とかに關係する諸々の問題は全くもつて下らない。

スポーツと博奕が、人間上下萬般の趣味を支配するのは必ずしも單なる趣味の爲めの趣味丈ではなささうだ。又唯に物欲の問題のみでもなささうだ。心理的に深長な意味がある。從つて清水の次郎長や國定忠次その他の博奕渡世の輩の生活つてものだつて相當價値はないとはいへない。

鮎は瀨にすむヨウ、鳥は木にとまるヨウ――――違つたかな。――人はなさけの淵にすむ。……なさけをこの場合「情實」つてことにする。

すなはち人間世界に情實の附き纏ふのは古來からの通り相場としてある。ついて彼是いふ奴は、「お前さんも野暮だねえ」で片づけられて了ふ。

どうも致し方がない。とはいへ、見渡す世間、餘りに「お前さんも野暮だね」といはれるべく、委曲を盡くし過ぎてゐるかの觀がある。結局「情實」あることによつて國家の道德も社會

の道德も維持されてゐるとしか考へられない。少くとも人間お互にその國家なり社會なりを擁護する責任があるとすれば、人間と國家、人間と社會が機械でない限り機械的であることは許されないわけで自然妥協も瞞着も芝居も存在する筈であるが、若し人間自身が、自動車や飛行機や輪轉機やヱムペーターや眞空管や、その他凡百の機械にのみ約束されてゐるやうな、正直さ、つまり超情實的なものであるとしたら、……一寸想像もつき兼る。そこに幾何學と力學と數學丈の世界が出來上つて了ふ。各自が各自に約束した丈の能力しか發揮せず、お互に保ち合ふのは正確な機械的關係のそれで、偶々油が切れたり捻が弛るんだり歯車に狂ひが出來たり心棒が擦り切れたりしたが最後忽ちその能力に影響が及ぶ。ピタリと運轉が止まつて了ふ。不正確な若しくは過つた取り扱ひを一寸でも受けると、その對手の人格や位置や階級やその他の情宜には一切關係なしに極めて當然な不結果を示す。飛行機やモーターサイクルが墜落轉覆する際、決してその座乘者又は操縦者の個人的價値には一向かけ構ひのないのと、同じやうな状態になる。少し危險至極だ。

人間を機械化することによつて、自ら文明を高潮しやうとしてゐる資本主義者或は資本主義的帝國主義者は、近頃大分對手の機械共に惱まされてゐるかの觀もないではない。やがては自ら求めた機械化文明の爲めに自らの位置を危くするやうな結果になるかも知れない。

ヒヨンな事を思ひ出した。一年だか、半年だか前の事、或る殺人事件に就いての裁判が行はれた。最初の公判廷でした檢事の論告求刑によると、被告は當然死刑に處すべきである――といふのであつたが、その後判事の宣告したのを見ると、懲役十二年といふことになつてゐた。我輩その事を新聞で見た時、世の中に法律くらゐ端倪すべからざるものはゐないなアと思つた。こいつを逆に行くと、十二年の懲役が死刑になつちまふ。一つの法律の解釋について、檢事と判事の間にかうも隔たりがあるものだとすると、全く法律くらゐ曖昧極るものはなく奇怪極るものはない。さうして裁判くらゐ出鱈目なものはなく裁判官くらゐ信用の出來ないものはない。どうも、恐ろしく危險な物騷なものが存在するな――と思つた。

十二年乃至死刑、少くともこの間には「情實」がある。そいつが檢事の側にあるか判事の側にあるかは關知出來ない迄も、とにかくに疑ふべく充分な餘地を示してゐる。

カフェーと讀書

カフェーと讀書――現代青年の享樂的氣分と讀書とは兩立するものかしないものか、少くとも何處かで交錯してゐはしないかどうか――の問題を提供し之を考察するのが本欄の有つ趣旨である。そこで現代から一時代前の讀書についての苦心談や雜感を蒐めてその反省資料としたいと思ふのである。（編者）

一種の讀書法

日夏耿之介

い、あたまの性質によつて讀書法の種類が異ふものである。

僕は必ずしも、今の享樂氣分そのものと讀書と背馳すべきもとは考へない、たゞ、いはゆるモダンボイ、ガール輩の讀書の輕薄と出鱈目とその自瀆的なるとを攻めたいのだ。が、

選出された無産黨の人々

二木愛太郎

無産政黨は、こんどの府縣會議員選擧に、成功したのか、失敗したのか。それは見る人により、見方によつて、いろいろに言はれるだらう。たゞ本稿を草する日までに、無産政黨各派が、合せて二十何萬票をとつて、二十六名の議員を府縣會に植ゑつけたことだけは動かぬ事實である。量の問題はそれでいゝとして、質の問題が殘る。榮譽と責任を擔はされた廿六名の諸君は一たい、どんな人なのか。

一、日本勞農黨

石山寅吉君　は選擧が濟んでから四五日して、いつものように淡々たる顔を日勞黨の本部に見せた。話しかけられると微笑をたゝえながら受け答へはしてゐたが、別だん嬉しさうでもなく、意氣軒昂とも見えなかつた。

「大變でしたらうね」

「僕のところは五人の區だからやりよいですよ、何とかかんとかいつて割り込んぢやうから」

靜かで、謙遜で、しかも思つたことは貫きとほす氣性が、その短い言葉の中に躍如としてゐる。

これは石山君のゐない時に麻生君から聞いたのだが、石山君が今度日光の町で政見發表のために小學校を借りた。學校が退けて生徒たちが歸ると、石山君は二三の同志と一緒に會場に充てられた教室の掃除を始めた、ところへ、そこの校長先生がノコノコやつて來て

「君等もなかなか御苦勞ぢやな」といふ調子で暫くの閑話してから

「それで候補者はいつごろこゝへ來るのか

その責任はまだ青臭い彼等にあるといふよりも、徒らに宣傳的、迎合的な過渡期政治家教育者の指導精神の非哲學的なる所に在ると斷じたい。

僕は、祖父も漢文も洋學も好きだが、漢學と英學とは小學生の頃から先生について特別に習つた。お伽噺から進化して所謂美文が好きな頃が一番よく文字を味はつた。一字一句骨身に泌み込んだと記憶してゐる。だから、今でも文章體文章の方が口語文章より樂に自由自在に早く書ける。漢字制限など主張する輩は乾度小學の時に僕よりも國語作文が下手で數學や運動計り好きな少年の成れの果てであると思ふ。中學初年の頃に哲學の要求が起つた。さまざまの哲學書（哲學概論と哲學史）を買込んで監督の叔父の目を盜んで讀んだ。その效果は具體的に何もなかつたが、哲學する事の要求をこの身から引出してくれる事には幾分の力となつた樣だ。次に英語の文學を讀んだ。ツルゲエネフ流行の頃で、ハイネマン二十何册本を愛藏の寫眞機を賣つた金で買ひ込んで隱れて讀み讀みした。散文詩だけは全譯した。イブセンの「死人が蘇つたら」も全譯した。十八九歲の頃である。中學の課業に差支へるといので文學書耽讀を禁じられて

かね」

「いや僕が石山です」

「ハアさうですか、こりやどうも……」

濡れ雜巾をもつて教壇のまわりを拭いてゐた石山君を、せいぜい事務員くらゐに、校長先生が思つたのは無理もない。それから石山君の演說をきいて、その校長さんは、すつかり感心してしまつた。演說會が終つてから、石山君等がまた掃除を始めようとすると、校長さんが飛んで來て「それには及びません、小使にやらせますから、どうか」と押し止めたさうだ。

足尾銅山から日本の勞働運動界へ、名の知れた鬪士が何人も送り出されてゐる中で、石山君が一番垢ぬけがしてゐる。演說をすれば、大ていは「われわれ足尾の坑夫は地下何千尺の底において云々」とやり出すのが、おきまりだが、石山君は決してそんな氣障なことをいはぬ。聲も調子も內容も澁い。地味ならちに味と熱がこもつてゐる。なかなかウイットもよく働く。室內に東郷大將の書いた額があれば、その字句を引用する、二宮尊德翁の畫像が掛かつてゐればそれをゆびざす。その土地、その時、その場の物事を捉へて話すから聽衆が釣り込まれる。石山君は越後の北蒲原、加治村の生れで、廿六の年までずつと自家で百姓をしてゐたんで、今でも時々農民運動に出かけるが、その道の專門家や學者よりは「石山さんの話が一番よくわかります」と、どこでも農民の受けがいゝ。

石山君は、悪水と號して俳句をひねくる。何派か判らんが、同好者と句會をつくつて、雜誌を出してゐる。矢たらにカンテラ節をどなつたりなんかはしない。カンテラ下げて、つるはしを握つたのは、大正四年から八年の騷擾で入獄するまでの四年間で、その後は引きつゞき日本坑夫組合の足尾支部長として運動に沒頭してゐる。

七八年前に石山君の家を訪うたとき、煤けた壁に「萬國の勞働者團結せよ」と書いた掛物があつた。石山君自身の筆蹟で、力のある見事な字であつた。石山君とこの便所は、渡良瀨川の崖から、危つかしい板のかけ出しになつてゐて、夜分戸をすこし明けてゐると溪谷一帶が見渡せて、折柄中天の冴えた冬の月かその影を川波に散らせてゐたことを忘れな

らは毎夜枕の下に十二三冊も本を布いて家人が寢靜まつてから夜更け迄こつそり讀んだ。鷗外文や二葉亭文だ。文學を一番眞劍に味はつたのはこの頃だ。國語に愛を覺えたのもこの頃だ。自分を天才だと確信し、さて書いて見ると一向上手でないのにぢりぢり懊惱したのもこの頃だ。僕は外に植物學書と天文學書とが好きであつた。今でも好きである。

そこで、早くから專門家風のあたまの人は早くから一國な讀書もよいけれど、僕のやうに運命的に讀書興味範圍の廣いものは即ち自由に廣く讀んで一向差支へはないといふ結論に到達したのである。

童時讀書

柳田國男

自分などは昔の田舍で育つた故に、書物の選擇といふことは丸で知らなかつた。有るだけの本は皆讀んでしまつて、まだ常に飢を感じて居た。三十年前に亡くなつた自分の實父は、少年の讀書法に就て可なりよく練つた考案を持つて居ながら、我子に思ふやうな讀み物の與へられぬことを、始終苦慮して居たや

い。

石山君が足尾の町を通ると、行き合ふ人が殆どみんなお辭儀をする。それだけに足尾鑛業所の役員が石山君を嫌つたがることも甚しい。今度も會社側は足尾から北山といふ人を立てゝ石山君の得票をさくことに全力をあげた。北山君のために手まわしよく祝杯をあげてゐる處へ「石山が勝つた」と電話で知らせて來ても「北山の間違ひだらう」といつて信じなかつた。石山君は、たつた一村を除く他の全町村から投票を集めて當選した。

阪本勝君　は今年卅九歲、お父さんは尼ケ崎市の開業醫、往診先で伜が縣會議員の候補者に立つ噂を聞いて、早速家へ歸つて、勝君をよびつけ

「うそやらうな」

「ほんとです」

「お前はまあ阿呆かいな」

で、ぼんちは氣なしだつた。が五千何票といふベラボーな高點で當選したと聞いたとき、親父さんが何といつたか、後日譚はわからない。

阪本君は仙臺二高の生徒時代に、下宿の表へ「英獨佛ラテンギリシヤ語教授」の看板を出したといふ話がある。ギリシヤ語だけは、傳へる者のおまけでないかと思ふが、とに角語學は天才的に達者だ。現に關西學院の講師で、選擧の眞最中でも、大ていは毎日午前中は教壇からイプセンだの、チエホフだのと外國文學の講釋をやつてゐたさうだ。小說も書ける、繪もかく。日勞黨のポスターや新聞の挿繪はしばしば彼の手に成る。しかし本分としてゐるのは經濟學の方面で、種々の雜誌にむつかしい理論鬪爭の陣を張つてゐる。東大時代には法科に籍をおいて、主に文科の哲學を聽いてゐた。卒業後も思索をつゞけるため、福島縣の田舍へ行つて小學校の教師になつたけれども、巷へ躍り立てる何ものかゞ身の內にあつた。一時大每の記者になつたが、すぐやめて第二回の大電爭議の中へ飛び込んだ。その時分の氣持を書いたのが阪本君の近著「洛陽に餓ゆ」。關西學院の先生になつてからも、チヨイチヨイ象牙の塔を拔け出す。先頃の市電爭議にも大ぶん働いた樣子だつた。活動が激しいので、財布はいつぽかち、親父さんと別

うであつた。

家には二十册と纏まつた本は一種も無かつた。文章軌範はあるが八大家文は無い。遠鏡や詞の玉の緒はあつて、肝腎の古事記傳が無い。ある時は遠方から綱鑑易知錄が借りられたと謂つて、重いものを嬉しさうに下げて來たこともあつた。併し通鑑は終に手に入らなかつた。中富の岩國といふ醫師の家に大日本史があるから借りてやらう。一緒に行けといつて連れて行かれたことがあつた。十一の年の秋である。坂を超えて二里近くの路であつた。眺望の佳い二階に通されて、酒が出る詩の話が出たが、父は遠慮がちな人で其折は言ひ出しかねて還つて來た。

それから半月ほどの後、手紙と大きな風呂敷を持たされて、私が一人で借りに往つたが其折は簡單に斷られた。併し格別失望をしたやうな記憶は無い、寧ろ其時から風呂敷を持つて本を借りに行く趣味を覺えた位であるが歸つて其話をすると二親は顏を見合せて、憮然とした樣子であつた。

それから後も本は方々から借りて讀むものとして居た。有るか無いか分らぬやうな奥の間から、出して貸してくれたりくれなかつたりとするものときめて居た。早く歸つて讀み

に一戸を構へてゐるもの丶、うつかり飯時なんかに阪本君を訪問して阪本君から「おかずを買うから五十錢貸してくれ」とやられた友人が相當にある。金より子寶といふわけか、阪本君には五つ位な男の子が一人ある。親まさりの綺麗な、りかうもので、誰いふとなく「傑作」とよばれてゐる。本名は別にある筈だ。阪本君夫妻も「傑作」君を鍾愛してゐる。しかし父阪本君も一種の傑作だ。日本ばなれのしたローマンノーズの顏だけでも異彩である。

行政長藏君　阪本君と違つた意味で行政君も日本離れがしてる。淺黑い顏に、ギヨロツとした目、それに天神ひげをだらりとさせてゐる。先ごろ東京で警官にとつつかまつて、も少しで檢束されさうになつたが、僅に内地人とわかつて釋放されるときに、警官の言草が「不逞鮮人と思つたんで、失敬々々」とは全く失敬な。

農夫であつた行政君が、鋤もつ手を感激にふるはせながら、神戸葺合の貧民窟に賀川豐彥氏を訪ねたのは十餘年昔のこと。今日まで賀川氏は「行政君のいふことなら」と何でも絶對信任だ。日本農民組合が神戸で產聲をあげたときから、今年の初めに杉山氏と共にそこを去つて新に全日本農民組合の常務主事となつた今日まで、行政君の足は一度だつて地を離れたことはない。強いていへば自轉車に乘る時だけ足が宙に浮いてゐた。行政君は照つても降つても自轉車に跨がつて、農村を驅け廻り、戸毎に同志を求めて歩いた。いつしか東播、西播の大きな組合が出來上つた。その副產物に二人乘りの自轉車を發明した。今それを組合から賣りだしてゐる。發明と行政君は一寸つかないけれども行政君らしくもある發明だ。

二、勞働農民黨

山崎常吉君　勞農黨にも發明家が一人ある、名古屋で「ブリキ屋の常さん」で通る山崎君だ。お手のものゝブリキと張り金でもつて、新聞の中の欄が、かくれない新聞挾みを考へ出した。選擧の少し前に新案特許權を得て「これで運動費が出來たわい」とえらい元氣だつた。けれども資金がなくて賣り出せず、權利は賣れず、選擧にはやはりピーピーしてゐ

たいといふ好奇心と、背中の重たく汗ばむことは、今でも自分には聯想である。だから東京に出て始めて本屋の店に立ち、又は圖書館の目錄を見たときは目が眩ふやうであつた。

私は短冊の反故を小さく切つて、栞にして本の中に挾んで居た。それに知らぬ間に父が一首の歌を書いて居た。

　其玉もみがけや磨けくはしほこ
　ちたるの國をかゞやかす迄

卽ち貞子の名が歌の中によみ込んである。勿論この祝福は多くの人の父の祝福と同じく、過大にして且つ不可能のものであつた。今は空しく哀々たる思慕の情を留むるのみである。

ユーゴー一册

馬場恒吾

今でこそ、浪曼派のユーゴーなんか、大抵の人は見向きもしないが、私は二十一か二のときそれに依つて生涯の一轉機を作られた。

私は脚氣で作州津山の近在の温泉に行つた。温泉と云つても月十圓位で下宿出來たのだから大した事はない。今のやうなカフェー、

たから、推薦狀の方はハガキ一枚も出さなんだが、ポスターを本部から澤山貰つて、目貫の場所にベタベタ貼りつけた。當時名古屋へ行つた人の話では「私は山崎常吉です」と書いたのが、とても目立つたさうだ。

常さんは無い癖に氣前がよくて、大山郁夫氏が應援に行つた時には、その二三日前から降りつゞけであつたのに、大枚百五十圓張りこんで大劇場を借り切つた。當日もドシヤ降りだつたが、開會の二時間ほど前になつて、一天カラリと晴れ渡り、聽衆が來るわ〳〵、入場料を取つても忽ち滿員、木戸止めの盛況で、借り賃と雜費を差し引いてまだ二三十圓儲かつた。「天佑ですわい」と常さん大はしやぎ。山崎君の當選疑なしと直感した、とは大山氏の直話。

永年の間、馬鹿といはれ、たわけといはれても、へこまなかつた甲斐があつた。山崎君の宅は名古屋市水主町、二階が選擧事務所であつた、といふと御大層にきこえるけれど、場末も場末も、前には二間幅の溝があつて、隣りはお寺で、小あきないも出來んような邊鄙のあばら家、そこから出掛けて行つて愛知縣會議事室へ取り上つて、ブリキ罐を叩くようにガン〳〵ガリ〳〵やらかすのかと思ふと手の一つも叩いてやりたくなる。

奥村甚之助君　「奥甚」の名を聞くことは久しいものだ。勞働運動の勃興し初めたころ、京都に起つた奥村電機の大爭議に中心人物となつて以來の「奥甚」だ。かれこれ十年も前、赤松、宮崎兩君等が新人會をつくつて京都へ最近の宣傳に行つた歸りに、當時すでにその人ありと知られてゐた奥村君は京都驛へ新人會一行を見送りに出た。三等急行でプラットホームはばかに込んでゐた。上り列車が着いた刹那、雪崩を打つた拍子に奥村君は下駄を片方はづした。今一人下駄を片方なくしたといつて騷いでる男があつた。奥村君が人を押し分けて探すと、ホームとレールの間に、たしかも一人の男の下駄が落ちてゐるが、自分のはどこへ行つたか見付からないでゐると、件の男がチヤンと奥村君の探してる片方の下駄をはいて汽車へ乘り込んでゐるのを見つけたのが、當年の水谷長三郎君（今は京都の辯護士で左翼のチヤキ〳〵）だつたと思ふ。奥

モガなどはなかつたが、出張菓子屋に入り浸つたり、溫泉客の遊び仲間に入つたりして、兎も角も、私の生活は模範青年の部に屬さなかつた。殊に私は丁度其頃學校を中途で止めたので、前途の方針には迷つて居るし、生活に對する緊張した興味を缺いてゐて、青年の墮落して行く徑路を辿るには、誂へ向きな狀態に居た。

それでも遊びくたびれると自分の部屋にかへつてユーゴーのミゼラブルを讀んだ。五十錢で買つたルートレッヂの英譯本であつた。

ユーゴー物は其前にノートルダムを讀んだ。それも眞中頃から讀み出して、終り迄讀み、それから前半を讀んだ。それでユーゴーが好きになつて、ミゼラブルを溫泉に持つて來てゐたのである。

ミゼラブルを讀んで、段々興味が深くなると、わざと部屋の障子をしめて、留守であるかの如く裝つて、それに讀み入つた。しまいには一人で野原に出て、ユーゴーが見た如き深刻な人生、崇嚴な運命を凝視めんとしてゐた。

さうした傾向が私をして遂に半年許り神學校の生徒たらしめた。そして、後にはユーゴーのやうな浪曼派の人生觀は之を實踐躬行す

村君がその男に、僕の下駄だから返してくれといつてもその男は「わたしも困る、これは拾つたのだから……」てなことを云つて返さないから、奥村君が「馬鹿野郎」と破れるような一喝を喰はすと、その男がヒョッと下駄をぬいだので大笑ひだつた。

奥村君はその頃と同じような元氣を、今でも持ち合せてゐるので、どうにも五十四才とは見えない。しかし倅さんがもう立派な闘士になつてゐて、今度の選擧にも骨身を捨てゝ親孝行をしてゐたといふことだ。勞働運動者は年を取ると段々右に寄るものだのに、「奥甚」は反對に行く、子供のような評議會の若手と一緒になつてガラ〲言つてるほどの若さだから、京都府會の睡けざましをやるだらう。

長尾有君　淡路の三原郡で當選した長尾君は、日本農民組合の最高機關である本部常任委員であり、勞農黨の本部中央委員でもある。十八九の子供上りの時分から革新思想を抱いて、淡路島で一人の社會主義者、といはれながらあらゆる迫害と闘つて來た。大阪齒科醫專を出て開業免狀はあつても持つてゐるだけ、舍弟とゝもにスットン〲穀物の賃搗きをして口を糊しながら一心不亂に組合運動のことを說き廻つた。ボツ〲農民組合が出來たし、淡路特產の貝ボタンの職人にも組合を作らせた。居村に近い福良港一帶の漁業權問題に盡力して漁師たちからも德とされた。一方では白刃を携げた暴力團に襲はれたこともあるが、ビクともせずに應對する不敵さに、刀を持つてる方がどぎもを拔かれたさうだ。この頃、長尾君の分身のように働いてゐる佐藤君は、もと小學校の先生で、長尾君に感激して教職を棄てた。長尾君の目ざましい働きにはまづ縣廳がおどろいた。縣の高等係が時々行つては「齒科醫の開業資金を出すから運動をやめてくれ」と賴んだものだ。そんなとき長尾君は持前の大きな口をあけて、カラ〲笑ふだけだつた。

日本の農民運動の全線を見わたして、長尾君は理論でも、實際の仕事でも、人格でも一頭地を拔いてゐるといはれる。しかしまだ廿九の若冠、ほんとのことはこれからだ。

溝淵松太郎君　香川縣では、日本農民組合

るには、餘りに感情を誇張した人生觀である事を悟つた。併し溫泉でだらけ切つてゐた私の生活を、兎も角も、緊張した生活に引き戾して吳れたのは此書一册のお蔭げであつた。

馬糞に塗れて

松村武雄

中學時代に每夜遲くまで日本支那の稗史小說を亂讀した祟りで、ひどい不眠症にひつかかつた自分は、高等學校に入ると間もなく休學をして、山の中に百姓生活をしなくてはならぬやうになつた。

それは丁度日露戰爭の折で、自分が十九歲の頃であつた。戰爭の噂は山の奧の百姓家にも喧しく響いて來た。しかし自分は胸に餘る煩悩でそれどころではなかつた。その頃は高山樗牛氏が死んで間もなくで、氏の作物はまだ靑年の頭を強く支配してゐた。そして一方では夏目漱石さんが『ホトトギス』誌上に『猫』『坊つちやん』『薤露行』などを續々發表して、若い者の人氣を一手に攫んでゐた。が自分にはさうした作品がどうもぴんと頭に來なかつた。樗牛氏の論評は高華ではあるが、學的精

の勢力がよほど衰へたと噂されてゐたのに、一擧四人の議員を當選させて、日本農民組合と勞農黨が正に氣を吐いた。これには他の無產黨も頭が擧がらなかつた。ことに香川では政民兩派の數が伯仲してどちらにも絕對力がなく、勞農黨の四人が完全に決定票を把握してゐるから見ものである。よしんば既成政黨のいづれかゞ過半數を制し得たとしても、無產黨はかなり有效に意思表示ができるだらうし、知事以下の當局を惱ますことだらう。四人が入りかはり立ちかはりまくし立てゝは叶はない。木で鼻をくゝるようにあしらふわけには行かず、理くつになれば無產の方は負けてゐないと來るからね。

溝淵君は、ひげむじやの百姓まる出し、でも言ふことはしつかりしてゐる。相當な年配だが新しい理論も一通り心得てゐる。くそ眞面目な、固い演說を一時間でも二時間でもやる。この春、農民代表者會議で東京へ來てゐたときには大層おとなしい人と思つたが、あれで仲々利かぬ氣ださうな。四つに組まれては知事さんも弱るだらう。

平野市太郎君　平野君は變り種の部だ。幼いときから芝居好き——といふより芝居氣違ひで、旅役者の群に投じて諸國を流れ歩いたことがある。後には自分が座頭で打つて廻つたこともある。自分の家は自作一町、小作一町で、いはゆる五反百姓とちがひ多少裕福だけれども、七八年前から農民運動に打ち込んだ。至る處で小作爭議の先頭に立つた。さうなつても好きな道を忘れないで、爭議の顚末を芝居に仕組んで興行を始めた。實際にあつたことを次から次と芝居にして見せるので、いつも大當り、見物人は「爭議で働けば芝居にして貰へる」てんで勇み立つ。縣警察部はその宣傳効果の大きいのに一驚して、平野君の興行を一切差し止めて了つた。平野君は例の伏石事件で起訴されたけれども、その時に限つて騷擾の現場に居なかつたと判つてたつた一人運よく無罪になつた。それで被選擧權があり、議員にもなれた。初の縣會には上演禁止反對演說を一席やらねばならぬところ、鬱憤ばらしにお得意の、せりふ、身ぶりよろしく芝居氣分を漂はせるか。

緻に缺けて居るやうな氣がしてならないし、漱石さんの作品にも生々しい血が足りないやうで、何となく不滿であつた。自分は小說家になるつもりはないので、漱石さんの方はどうでもよかつたが、樗牛氏の方が氣になつて仕方がなかつた。自分は、これはどうしても根本的に學殖を深くせねば駄目だ。それには何より語學の力をつけることと、古典を精讀することとが必要だと、生意氣ながらぼんやりとそんなことを考へた。

自分は間借をした山中の百姓家で不眠に苦しめられつづけた。それにうち勝ちたい一念から、百姓の手傳をして朝は草苅りに行く、晝は畑を耕す、夜は藁を打つて繩や草履を作る。一番閉口したのは、甘藷の苗床を拵へるのに、馬屋から馬糞を掻出して、それを積み上げては、手足でそれを叩き固めることであつた。馬糞は容赦なく爪の間皮膚の毛孔に滲み込む。洗つても洗つても臭氣が脫けぬ。その臭い手で麥と甘藷との混飯を口にする。實際泣きたいくらゐであつた。しかし自分は不眠に弱つた頭腦の許すかぎり古典を讀み、また佛蘭西語や羅典語にかじりつきつづけた。(英語と獨逸語とは學校の必修科であつた。)薪を背負つて山路を降りながら『詩經』や『古事

中村康三君　「中村の一代記はおもしろいよ」と聞いてゐる。ざつといへば木田郡田中村の素封家に生れ、高松中學を終つてから東京哲學館へ入つて中途でやめ、一時高松市の某家へ養子に行き、離緣になつて朝鮮へ渡り、後大阪にゐたとき、丁度やはり讚州の豪農の息子と、南地富田屋の娘分で當時名うての藝子はんを張り合ひ、火花を散らした戀愛合戰の末に遂に射止めたのが今の細君、當時花も恥らうその藝子はんを擁して錦衣歸鄕(?)したころには大ぶん家産をすりへらしてゐた。そこで今ゐる長炭村に落ちついて、醬油の販賣を營むかたはら、田地の耕作も始めた。それから間もなく農民運動へ入つたが、放浪時代にきたへた膽つ玉と親分肌が役に立つてメキメキ男をのした。ある時なんか、土工の一隊が皆ドスを拔いておどしに來たのに、中村君平然と徐ろにかくし持つたるピストルを向けて「サア來ないか」、土工どもコソコソ逃げ出した。その土工の親分が度胸に感じて兄弟分の杯を取りかはしてから、今でも中村君は土工を顎の先で使へる。

今春、長炭村の村會議員選擧に中村君が釆配をふつた勞農黨員が絕對多數を占めたので吏員一同が辭職するとすぐ、吏員の補欠をつけ、村役場の看板の脇へ黨と組合の看板もぶら下げた。長炭村は全く無産農民の自治村となつて、中村君はいはゞ大統領の格。

古川藤吉君　綾歌郡から出た古川君は、先年縣會の補欠選擧に立つて僅かの差で惜敗した。今度は樂々と出た。素朴といふ字がそのまゝあてはまる人柄で、演說なんかは下手だけれども重きを爲してゐる。

井上乙吉君　井上君は新潟市で、だれも意外に思つた高點で當選した。やはり永く新潟市の小學校で代用教員を勤めた。一寸捉えにくいところはあるが、氣骨のある男だ。これまでは殆ど勞農黨に關係してゐなかつたけれど、今度ははつきり勞農黨の公認候補を名乘つて出た。今度の選擧のとき、他派の演說會へ行つて演壇の眞下に座り込んで、候補者の演說が終りかけた時分に立ち上つてグルりと聽集の方へ向いて「つまらんぢやないか」と云はんばかりにゲラ〳〵笑つて見せたさうだ。

記」や『舊約全書』を讀んだり、科学の目を通しながら至つて初歩の羅典語の文法に夢中になつたり、今から思ふと、氣狂じみたほど一生懸命で、自分だけの考ではこれが他日の準備になるといふつもりで頑張つてゐた。今日の教育法から見て、それがいいことか惡いかは知らぬが、兎に角現在の自分は、そんなことをしたことを決して後悔はしてゐない。

貧乏書生時代

帆足理一郎

私は貧しい家に生れて、順當に教育をうける機會のなかつたことを悲しむと共に、それが又却て幸であつた點も常に感謝してゐる。私は弟でありながら、父の愛子として家業を嗣ぐべく、高等小學を經へた儘家に殘された。兄は獨り飛出して中學から士官學校に進んだが、私も後に只三ケ年間東京遊學を許されて上京した。時に年二十。晩學の私は今更中學にも入れず、止むなく法律學校に入つた。專門舍者が帝都に飛出して中等教育もなく、專門の學を修めることは、かなり困難であつた。けれど私は限ある三ケ年を最も有效に使ふた

そこいら少し變つてゐる。とにかく氣と熱で押し通した。井上君の細君おるいさんは女教員上りの女丈夫で身なりかまはず切り盛りした。また井上君の教へ子が澤山立派な青年になつてゐて獻身的に働いた。

井伊誠一君　今度の選擧に全國で唯の一つの共同戰線――日農黨と日勞黨と兩方からの聲援によつて首尾よく當選した。もともと井伊君は日本農民組合の顧問辯護士であつたし今後は大體、勞農黨員として行動するようだ郷里新發田の中學から二高、東大法科と型の通りインテリゲンチアの筋道を踏んで、郷里へ歸つて父業をついだ。酒はいける、俳句はよむ。釣も好きといふ風な多趣味であるが、曾ては嚴しいクリスチヤンであつた。そこからおひおひ無産運動に入つたものだといはれてゐる。しかしそれよりも井伊君が學生時代に慘憺たる苦學をしたことが無產戰士の萠芽を培つたのではないか。

入江五郎君　入江君の肌合は「滿洲の馬賊と思へば間違ない」と許した人がある。秋田縣湯澤町の舊家の生れ、今でも食ふだけのものはあつて、運動專業がやれる。雄勝郡には左翼の組合員が三百人そこそこしかないし、入江君はまだ年も若いのに當選したのはやはり馬賊的――といつて悪けりや馬車馬的突進の賜物だ。五郎君の家兄で入江大尉といふのは先だつて仙臺の聯隊で癪をおこしてヒョイと軍職を抛つて新聞を賑はした、劍道の達人で酒豪といふことだから兄弟同じタイプらしい。

富吉榮二君　富吉君も亦元小學校教員、薩摩國府煙草の耕作問題についてこの二三年來無產側の肩を持ち、地主に對抗して人望がある。人ずきのする飄逸なところがあつて今度も鹿兒島市の少壯辯護士團や七高生徒から躍起の聲援を受けた。それにしても薩摩のような傳統の力強いクラシカルな所でよく當選したものだ。尤も鹿兒島の人にいはせると富吉君は非常に雄辯なんださうな、他國人が聞いては何をいつてるのか判らんけど。

神田兵三君　神田君も卅九才、酒の小賣屋

めに法律書を讀む傍、宗教や哲學の書を耽讀した。小學時代から發句を嗜んで、拾舟と號し、頗る悲觀に傾いてゐた私は佛教の教に興味をもち、佛教哲學とか八宗綱要とかいつたやうな書物を、分らずながら讀んで見た。けれど最も強く私の心を動かしたのは内村鑑三氏の聖書の研究や、松村介石氏の修養錄であつた。

かうして私の學校の餘暇が段々宗教や哲學書の耽讀となるにつれて、法學を餘りに乾燥無味な常識的學問だと考へるに至り、僅か一年半を出でない内に、之を擲つてしまつた。法律や政治の根柢にある哲學や宗教の研究、それには相當に基礎のある博い學問が必要であると痛感し、獨力研學の擧を企て、僅かばかりの旅費を父に仰いで、渡米した。

東京における私の學生生活は單純であつた。只勉學の外、何物もなかつた。その頃カフエーなどはまだ起らず、ミルクホオルに大弓場などが學生の娯樂場で、稀に活動寫眞が所所に興行されたが、私は一回もさうした處に出入する機會をもたなかつた。日曜の郊外散策には電車や馬車(三太郎馬車の時代)にも乘らず、牛込や本郷に下宿して墨堤や國府臺や池上の本門寺邊までも歩いたものである。

さん、少年時代から革新思想に燃えて勉強したので、今は評議會と勞農黨の京都支部切つての闘士、人間も確かだし、辯も立つ、たゞ金が乏しいため市内では會場を借りかねて場末の方へ力を注いだのが案外いゝ結果になつたらしい。

赤阪伊吉君　運動中に違反があつたとかで當選した後すぐ收監されてゐる。福岡縣三井郡小郡町に生れてから、五十七才の今日までずつとその土地に根をおろした牛乳屋さん、先年人に說かれて心機一轉、脇目もふらず農民運動をやつてゐる。

三、社會民衆黨

塚本重藏君　民衆黨が公認した候補者三十何人の中で、初めから一等光つてゐたのは塚本君だつた。あの人物と地盤で、それに西尾末廣君が選擧事務長になつてゐて、それでもし落選したら問題になるけれど、當選したのは當り前で面白味がない。

塚本君は汽車製造會社の工場に十年餘り勤續してゐると同じやうに、勞働運動を始めてから十年餘り勞働總同盟で一貫してゐる。勞働運動では西尾君より古く、全く草分けだ。一つ一つ煉瓦を積むやうにやつて來て、總同盟の大阪聯合會長になり、關西同盟會長にもなつた。しかし組合から給料を貰つたことは一度もない。工場で働いて、退けてから組合の事務所へ來て組合の仕事をする。十年一日の如く同じ型をくりかへす間に、會社側も敬意を表した。今では塚本君の組合に入つて居らねばその工場では使はぬことになつてゐる。塚本君はしかし几帳面な反面になかなか熱情家だし、戰闘力も旺盛だ。若くして僧侶であつた時に精神主義的な熱を貯へ、後年機械工になつてから強さを錬えたものと見える。平素は強い一面を出さないだけで、いざとなれば一歩も讓らぬ、障碍を打ち破つて進む。曾て總同盟の中に左右兩流の抗爭が激烈を極めたとき、最も徹底的な態度で左翼を排したのは塚本君であつた。それでゐて今日、評議會でも塚本君の人物に向つて惡聲を放つ者はゐない。

去年の九月、工場で作業中に自分の振つてゐたかな鎚のかけらが飛んで、遂に一眼を失

外出した時の費金としても、舊居に寄つて二三錢のあべ川や雜煮を喫ふにすぎず、學友との交際にも燒芋や煎餅位が關の山であつた。親が貧乏の中から膏血を絞つて送つてくれる金を無駄に使つてはならぬと、しみ〴〵感じた私は茶菓子を喫ふにも躊躇なきを得なかつた。金のないことが却て幸で、あらゆる娛樂機關と全く沒交渉に、獨り籠城して讀書する習慣を養つてくれたのは有難い。

顯微鏡を覗いた頃

土田杏村

二十歳の時私は東京高師の理科へ入學した。豫科に一年居て其の次年からは動物や植物を研究する學生になつたが、理科は文科と違ひ授業時間數が多いので苦しかつた。表面は一日八時間になつて居るけれども、其中實驗が大抵午前に二時間午後に二時間あり、其れが長びいて、秋から冬にかけては電燈の下で顯微鏡を見なければならぬ樣になる。寄宿舍へ歸つても夕飯の時間さへ經過して居る事が幾度となくあつた。學生は遊ばないといふよりは遊ぶ時間の無いのが事實であつた。私

つた。唯一の趣味である讀書に不自由してるだらう。

師義三君 は宮城縣遠田郡田尻町で蠶種業を營んでゐる。男盛りの三十九才、何にでも一見識を持つてゐて、ことに財政を深く研究し、財政や租稅の細かなことにまで明るい。演說もうまい。大ていの應援辯士より上手であつた。安部さんが「師君は帝國議會へ出ても雄辯家の一人だらう」と折紙をつけた。師君の亡兄と鈴木文治氏は中學の同級生で、兄弟のように仲よしだつた。鈴木氏は時々師君の家で泊つたこともある。師君の兄さんが中學卒業前に亡くなつたとき鈴木氏は友人總代で弔辭を讀んださうだ。そんな緣故で鈴木氏は特に馬力をかけて應援した。

山本龍二君 は吳の海工會の主事で、工廠全部を橫斷する海軍勞働聯盟の主事を兼ねてゐる。職業は吳工廠に屬する工場の旋工だ。海工會の內部も時々ゴタ〳〵する、職場が違へば利害も違ふし、個人間の感情のもつれもあるが、いつでも山本君が上手に梶をとつて行く。海軍聯盟の方も、橫須賀の川島君と吳の久能君が元から合はないので屢々分裂を傳へられることさへあるのを、とにかく一つにまとめて破綻を見せないのも山本君の手腕である。山本君が中に立つて調和する——いな策を用ゐてゐる。ひと口にいへば山本君は策の人、そこを嫌ふ人もある、けれども面倒なことに當つて、どつちへもあまり無理をせずに纏める才能がある。その點を吉川中將が吳工廠長の時に認めて、山本君を重用したものである。

山本君は酒を飲まないけれど、煙草はすこしの間も口を離さぬくらゐ。組合の大會などに一段高い主事席で小さい身體をふんぞり返つて、マドロスパイプの煙を吐きながら代議員席を睥睨する格構はちよいと偉觀だ。

小笠原勘一君 去年までは佐世保工廠勞愛會の副會長であつたところ、去年市會議員の選擧に候補者に立てゝ貰へなかつたのが不平で少々づぼらした爲め、一ト級さげて政治部長にされた しかし今度は候補者に推されて、しかも當選したんだから不平も收まつたら

は此頃ずつと外國語の勉强に全勢力を用ひて居た。實驗を濟ますと直ぐに神田へ飛んで行つて獨逸語の夜學を聞いた。私は元來小學から大學まで試驗にならなければ課業の復習をしたりノオトを讀んだりする事が無かつたが。此頃も何かしら自分は自分だけの本を讀んで居た。顯微鏡下の仕事を一生懸命にした後で通ふ夜學は隨分苦しかつたが、議會のある頃には又よく其處へ通つた。憲政擁護運動のやかましかつた頃だ。

夏休みにも東京へ止まつて語學の講習に通ひ、其れが濟むと上野の圖書館へ通つた。一と夏は海岸でストラスブルガアを一生懸命に讀んだ。寄宿舍の自分等の一室十人は辯論部員だけで組織したものだつたが皆よく勉强した。課業の方よりは思想だとか政治經濟だとかを議論し合つて居たが、後に一室殆ど全部を擧つて大學へ這入つた。學習院教授のS君和歌山高商のN君、臺灣高校のT君、臺灣帝大へ行く筈のM君、正金銀行の上海支店に居るA君、獨逸の大使館に書記官となつて居るF君、東京高師に殘つて居るF君、それから僕と數へ來ると、隨分飛んでも無い方向へすべてが移つたものだ。勉强も勉强だが辯論風發の空氣の方がもう一層盛んだつたやうだ。

う。勞愛會の內部にも、筆工と機械工の對立があつて小笠原君は機械工を代表し、筆工側の古賀會長と對峙の形であるが、今度で氣をよくして、これから圓滿にやつて行くだらう。若くて元氣はいゝし、演說はうまし、縣會でも相當に働くだらうと期待されてゐる。

大野金吾君 は一寸愉快な經歷の持主である。長く軍隊生活をして特務曹長になつた。大正四五年ごろ、シベリアに駐屯して歸つてから軍隊を退いて、郷里の岐阜縣揖斐郡清水村で酒醬油の商賣を初めた。村長の娘さんを嫁に貰つて、すぐ子供が出來たし、普通なら安穩な生涯を振り出したわけだけれども、平凡な酒屋の主人で終るにはすこし血の氣が多かつた、ゼンマイが利きすぎてゐた。

もと〳〵岐阜縣、ことに揖斐郡あたりは、古くから地主と小作人の間がよくないところで、清水村の隣りの養基村には日本で一番早く明治八年に小作組合の出來たことがある、ような物騷な地方なんだ。大野君は久しぶりに郷里に歸つて農民に接してゐる中に、農民運動をやる氣になつた。近所の小作人を集めて地主と掛け合ひを始めた。大野君は、とにかく近時の農民運動の魁をしたわけだ。しかし當時の大野君は勿論マルクス流の理論や階級觀念を心得てゐたのでもなんでもなかつた。持前の氣性でワツと威勢のいゝことを云つてたに過ぎない。ところが田舍の警官はそれでも目を丸くして大騷ぎを初めた。帝國軍人が小作人を助けて地主と喧嘩するのは內亂だとでも思つたか「大野は不忠者だ」とか「煽動家だ」とか「相手にするな」とか樣々の宣傳をとばした。本人へ直接の壓迫も來たので大野君はカツとなつた。「何くそ！」てんでよけいあばれ出した。大正七年頃には、ある地主の門の前へ米を八十俵ほど積み上げて、根が兵隊さんだからその上へ「農民の勝敗この一戰にあり」と書いた旗を立てゝ野天の農民大會——示威運動をやつた。その時分のことだからかなり世間を騷がせ、その後大野君の指揮によつてあちこちの村に爭議が起つた。

その前ごろから、清水村は模範村として政府から表彰を受けることにほゞ內定してゐたのに、大野君等があばれるお蔭で沙汰止みになり、大野君の細君の父たる村長さんが多年

悔恨の種

松本喜一

お尋ねのやうな讀書の總論はないが、兎も角も高等學校時代の事を書いて見る。

東京の中學を出て仙臺の二高に入學したのは、明治三十二年の夏で、私が十九歳の時であつた。其頃の上級生には吉野作造博士や樗牛博士の令弟、野の人、齋藤信策君などがゐた。私はこれ等先輩の風を望んで、寄宿舍の賑かな中で努めて讀書に沒頭したものだ。

一年後に寄宿舍を出てからは、中學の同窓數名と元荒町に共同生活をしてゐたが、其家の所有者が東京から歸つて來るといふので、移轉を余儀なくされて了つた。あとで門標を見るに及んで、其持主こそは新任教授の土井晩翠先生である事がわかつた。其後面目頓みに一新した先生の新宅―私共の舊居―を訪問して、二階の書齋で先生のカーライル論を承つてから、私は一時カーライルの著書に傾倒したものであつた。其當時先生は私共の級（クラス）で『英雄崇拜論』を講義されて居たので、其時も先生は其獨逸譯を讀んでみよといはれて、書架から一冊の獨逸譯を取出して貸與せられた。今私の書架にあるカーライルものは、其

の苦心はおぢやんになつた。岳父は頭へ湯氣を立てゝ「そんな運動するなら娘を返せ」といひ出した。大野君も男の一分、引くに引かれず、老村長も頑固一徹、可愛い女の兒があるのに遂々離縁になつて終つた、といふ農村悲劇も生れた。

大野君の運動は、だん〳〵ほんものになつて行つて、大正九年には郡聯合會をつくつた。それは小作組合が聯合形體をとり出した最初であらう。大正十三年には縣全體が一つになつて中部日本農民組合が出來上つた。大野君は後妻に家業をまかせ切りで運動に沒頭した。一昨年は組合の中で森義一君（今度やはり岐阜縣で日本農民黨から立つて落選した）と抗爭して、組合長に中澤辨次郎君を擔いで來て森君を追ひ出した。昨年の暮には、左翼の森崎源吉君等を除名して了つて、大野君は大ぶんお天狗だつた。しかし今の中部日本農民組合が、大野君の思ひのまゝになるかといへばさうも行かない。そこに民衆團體のむつかしさ、いひ換れば、よい所がある。今度の選擧に大野君は、民政黨との妥協說を唱へたが、他の人が皆反對したので、仕方なく民衆黨の立場を嚴守することを誓つて、漸く公認され應援を得たような始末である。

四、日本農民黨

須貝綱太郎君　は新潟の商業學校を出た文學青年であつたが、文學から思想の方面へ進み、農民運動をやるようになつた。素直で勇敢で、好個のリーダーだ。布施辯護士と接近した爲めに須貝快天老人との仲があまりよく行かず、農民黨本部とも少し疎遠になつてゐた形跡があつたけれども、須貝君はやはり農民黨を捨てずにやつて行くだらう。

畑桃作君　姓名がいかにも美的百姓である。が御本人は才走つた紳士風である。すでに前回の選擧に廿何歳の若さで見事に當選して群馬縣會へ異彩を放つてゐた。これまで多くは政友派と行動を共にしながら、やはり中立の立場を取つて、絶えず農民の味方といふ氣持で動いてゐた。今度の選擧前に日本農民黨へ正式に入黨して、無產農民の味方といふことをはつきり標榜して再選された。群馬縣會は今度は政民十八對十八の同數で貴重な決定票

頃集めたものである。昨年の冬、倫敦滯在中に、カーライルの舊宅を訪れた時にも、私は晩翠先生や仙臺時代の生活を追憶せずには居られなかつた。

明治三十四五年の頃といへば、あたかもニイチェ研究の盛な時代で、樗牛や竹風などの論文に刺戟された私は、級友の一人と財布の底をはたき合つて、ニイチェの著書を丸善から取寄せ、『ツアラツストラ』や『イエンザイツ・フォン・グート・ウント・ベェゼ』などを、辭典と首引で懸命に讀み競をやつた。その友人は一年休學して獨逸語の學習に專念した程の熱心家で、當時の私は獨逸語では到底彼に敵しかねた。ともあれ、文學科を志してゐた私がやがて大學の哲學科に籍を置くやうになつたのは、かうした讀書の機緣からであつた。

私は少年時代から書物が好きで、夫が思ふやうに買へなかつた事に悩みを感じた以外には、特に苦勞して讀書に精進したといふ經驗はない。未だ肩揚のとれない中學生の時代から、閲覽人として世話をかけた事のある私が、その帝國圖書館で、多數の讀書子の爲めに奉仕する事になつた自分自身をかへりみると、讀書に精進する事の足らなかつた青年時代がいつも悔恨の種となるのである。

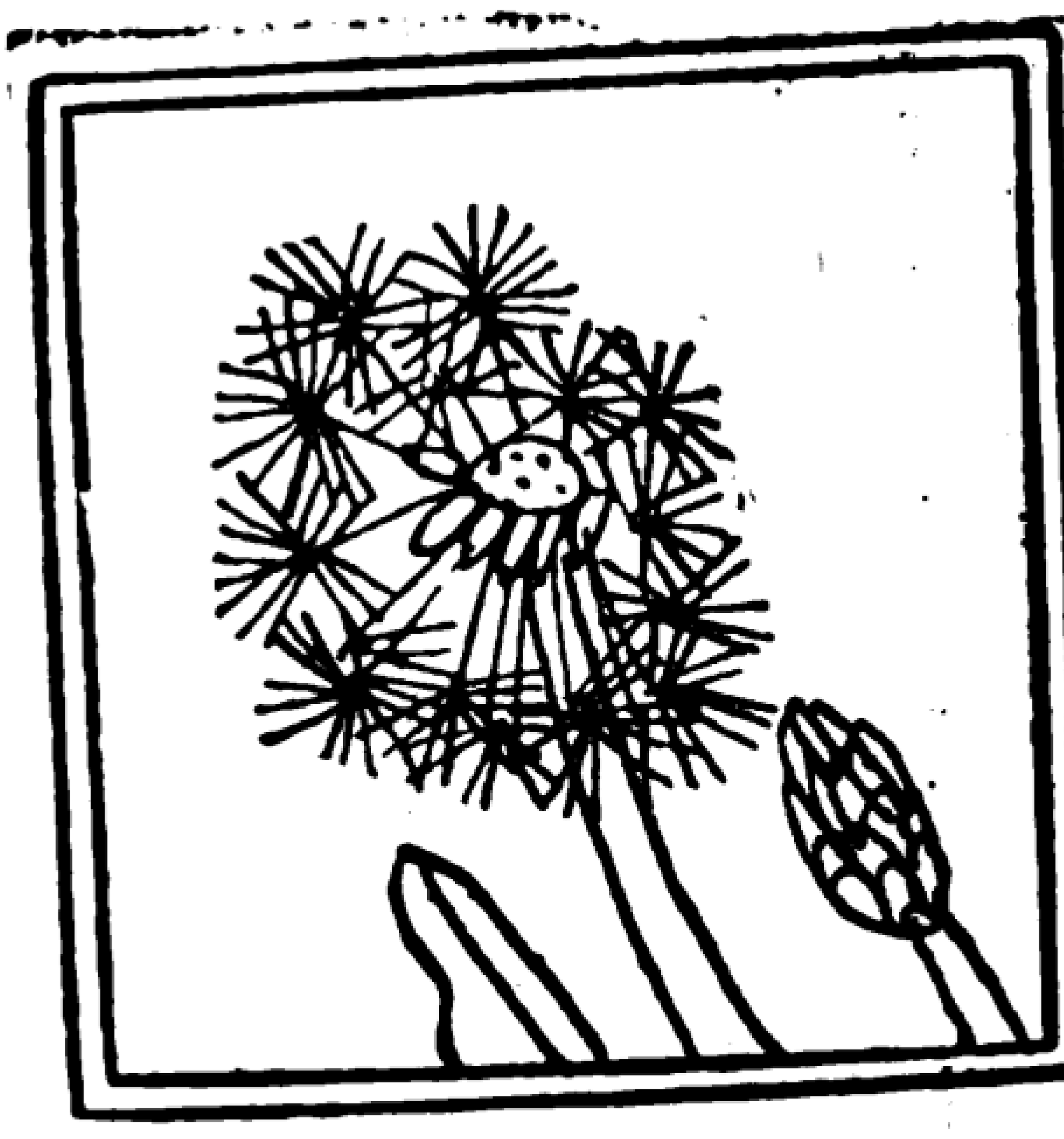
が畑君の手にある。看板に僞なく無產農民のためにキヤスチングボートを有效に使つてほしい。

古賀辨吉君　福岡縣浮羽郡水分村の生れ、四十六歲、東京音樂學校卒業とは變つてゐる。小學校の先生をしたり女學校の教師をしたりして、今は九州新聞に關係してゐる。農民黨の公認候補として當選しながら、當選後間もなく、無產派と何の關係もない人と一緒に中正クラブを組織したのは、農民黨の立場を捨てたものだとか、捨てないのだとか、大ぶん問題になつてゐる。

五、地方政黨

岡本榮吉君　中央に本部のある無產黨四派とはまるで關係のない、いはゆる地方政黨の活躍はなかく目ざましいものがあつた。大阪の東成區から出た岡本君は八木信一君等のやつてる關西民衆黨から推されて當選した。關西大學を出た人で、今年四十歲、河北電氣會社の庶務課長だから、御自身は無產者でないし、普通の勞働運動指導者とも違つてゐるけれど無產職工のために盡す決心は持つてるだらう。

堂本爲廣君　は今度の選擧では、投票の早かつた福岡縣で當選して、無產議員の一番乘りをやつた。山口縣の人で、大正八年から八幡製鐵所の門前で雜貨商を營んでゐる。大正十四年の三月、淺原健三君と共に九州民憲黨を起して勞働運動を始めた。正直で熱心で信用のできる人だ。同年の四月には市會議員に當選した。その時民憲黨から四人の市會議員が出た。然るに後その中の三人まで民憲黨を脫退した。にも拘らず堂本君だけは民憲黨に踏み止まつて今日に及んだ。その堅忍といはうか、俠氣といはうか、それをこのたび八幡市民が買つたのだといふ評判だ。



當なし行脚（其五）

一等旅客＝ズボンのツギ＝寶塚＝別府＝紫丸

堺利彦

一　カケツギズボンの一等旅客

生れて初めて一等汽車に乘つた。今度は少しそうした世の中を見るも面白くはないかといふ勸めもあつて、特にその費用も出して貰ひ、腰纒（ヨウテン）十萬貫　鶴に乘つて揚州に遊ぶといふ古い文句まで思ひだしたのだつた。何しろ、すばらしい勢ひだ。

所が一つ、早速に大問題が起つた。一等旅客になる以上、餘り目立たないだけの服裝が必要だ。もう十年ばかりハキふるした深ゴム靴（今の若い人の謂ゆる鎌足公）に別れを告げるは此の時だと考へて、先づ赤皮の編上靴を一足新調した。弊履（ヘイリ）を棄つるとは此の事だなと微笑された。（妙に今度は漢文が出て來る。）それからワイシャツ、ネクタイなど、一二三の小物も新調した。背廣はまだ三年前に新調した、丁度時節柄の間服（あひふく）が一着ある。新調とは、凡そ何年前までの調製物を指すのだらうかといふ疑問がチョット頭の中に、起つた。然し此の服は何しろ吾黨の御用洋服店たる、世界的名聲の藉甚（セキジン）なる、日比谷の服部で拵へたものである。こゝの洋服を着た洋行者は、決してあちらで耻を掻かないといふほど、それほど評判の仕立である。（月賦の滯りがちな連中が、せめてそんな評判で入れ合せをして居るのかも知れないが、私は又、滅多に新調の御用を仰せつける機會

を持たないので、せめて此の機會に於いて廣告の役を務めるのである。）兎にかく服はこれで差支ない。一等汽車が何だ。毫も恐れるには足りない。所が、どうだらう。その三年前の新調品を取出して、念のため一應檢べて見ると、ズボンの右側の丁度膝の上に當るところに、小指の先で押したほどの蟲食の穴が出來て居る。サア大變!。

出發は既に明日に迫つて居る。近處の洋服屋に驅けつけて、裏から膏藥を張つて貰つたが、どうも目について仕樣がない。これではいかんと云ふので、今度はカケツギ屋に賴んだ。ナーニ、御自分で氣にさへなさらなければ、これで結構、目につきは致しませんと云はれて、それもそうかと纔かに氣を安めて、兎にかくそれで出發した。サシツギズボンの一等旅客!。

橫濱停車場、午前十時、私は臆したけぶりも見せず、珍らしい白切符に指定された、下關行特急列車第八號の寢臺車にはいつて行くと、おひとりですかと案內のボーイが聞いて、そして私を或る一室に導いた。室內は片側が板戶、片側が橫長い腰掛、そして突當りがガラス窓。私は只ひとり此の室內に突立つて、うしろの入口のドアを外からピタリと閉められた時、變な氣持がした。何しろこれは寂しい。そしてその寂しい感じが、獄中の監房を聯想させた。一等旅客ともあらうものが、その高價な獨占の室內を、幽閉の場所と感ずるとは!。

窓の外には小雨が降つて居た。昨夜、殘つた仕事の片付の爲に幾らも眠らなかつた私は、何よりも先づ眠たくなつた。眠るには適當な室內だ。私はグッスリ居眠りした。

二　展望車の人々

一度目がさめて、それからウツラ〳〵して居る間に箱根は過ぎた。目がハツキリさめて見ると、いよ〳〵閉ぢこめられた感じがする。一體、何のためにこんな寂しい處に乘つたのだ。俺は世の中を見に來たのではないか。三倍の賃金を拂つて、こんな隔離室に獨りボツネンと腰かけて居るとは、何なる愚ぞや。そんな愚痴をこぼして見ても仕方がない。幸ひ小カバンの中に只つた一冊持つて來た本を出して讀みに掛つた。眠るに適當な場所は本を讀むにも適當だつた。

小し空腹を感じて來たので食堂車に出かけた。その時、隣室のドアがあいて居たので、通りすがりにのぞいて見ると、袴をはいた婦人がひとり、これも寂しそうに行儀よく腰かけて居た。傍らに日本とじの、茶色表紙の本が一冊置いてあつた。『茶味』といふ大きな字の表題が見えた。成るほど一等客だなと思つた。

食堂では入口近くの小さいテーブルに、ひとりの西洋人と差し向ひに着席させられた。その西洋人は、無愛想な、ずいぶん威張つた、そのくせ下品な大男で、とても話など出來そうもない。而も私の席は入口の方に向つて居る。私の目に入る食卓は幾つもない。私はこゝでも又さびしかつた。然し景色は好かつた。汽車は今、濱名湖を過ぎて居た。濱名湖の晝飯それは決して悪くなかつた。

食堂を出る時、始めて、展望車といふものゝある事に氣がついた。何といふ迂濶だ。然しそんなケブリも見せず、午前中はわざと自分の好みで寢室にばかり引込んで居た樣な顔をして、自分の寢臺車と、又一つ次の寢臺車とを通りぬけて、最後の展望車に出た。展望車の半分は、寢臺車でない普通の一等室で、西洋人を交へた十人ばかりの客が、向ひあひ隣りあつて賑かに着席して居た。私はこゝに乘りたいなアと思つた。然しこれにも及ばない。すぐその次の室、即ち列車の最後部は展望室で、そこは一等客の誰もが自由に出入し得る處である。

私は平氣な物なれた當り前の樣な顔をして展望室にはいつて行つた。展望室は左右と正面と三方の全部がガラス窓になつて居て、明るくて、氣持がいゝ。左右の兩側には樂々とした揃ひの籐椅子が並べてあつて、右側の中央だけは同じ揃ひの長椅子になつて居る。私は入口のそばの左側の隅の椅子に、愼ましやかに腰かけた。丁度そこがあいて居たからではあつたが、實は少少臆した形だつたかも知れない。そしてそこに腰かけると直ぐ、私の目は覺えず自分の右の膝に落ちた。するとそこに、細かい立縞のズボンの上に三四分四方のツギ跡があり〳〵と見えるぢやないか。私はギクリとした。ナーニ構ふもんかと口の中で獨りごとを云つて見たが、又しても其ツギあとを見直さずに居られない。氣にするからいけないのだと思ひ返して見たが、矢張り氣にせずに居れない。弱つてしまつた。長椅子には、先つき食堂で見かけた、若い小作りの元氣な可愛らしい娘が腰かけて居た。何だか知らないが、赤味がかつた着物に青い帶を占めて、斜に長椅子の片隅に腰かけて、厚いフエルトの草履をはいた兩足を大らかに組み合せて、膝の上で何か青い毛糸の編物をして居る。そして折々顔をあげて、利發そうな目に笑ひを見せながら、向ひ側に腰かけて居る二人の若い男と心安そうに快活に話して居る。言葉は聞き取れないが、凛々と響く汽車の音の間に、娘の聲が鈴のやうに響きわたる。二人の若い男は紺と鼠色の春服で、共にシガアをくゆらして居た。紺の方は謂ゆるローマンノースの高い鼻で、頭はオールバックで、可なり品の好い紳士だが、鼠色の方はどうも少し柄がよくない。然し兩方と

も、その指には白い光のチラチラする指環をはめて居た。

この中央部の人々の向ふには、三人の西洋人が居た。一人は左側の椅子で首を斜めにして眠つて居た。右側の一人は赤い着物に黑い帽子をかぶつた瘦形の婦人、今一人はデツプリとよくふとつた、溫厚には見えるが精力の强さうな、ミリネオヤらしい中年の紳士。この男女は道連でもなく、もちろん夫婦でもないらしかつた。

正面のガラス戸の外の、三方を低い鐵柵で圍つたヴエランダ、或は二階の緣側、或は小い橋の上とも見立てられる處、そこにも、一人の西洋紳士が、脊中をこちらに向けて、小い腰掛に腰かけて居た。彼は汽車の最後室の最後部に居て、汽車が疾走しながら其の背後に殘して行く所の線路上の風景を、眺め得る限り眺め盡さうとするものの如くであつた。

三　少し變なカプル

展望室の入口の左右には一二段の棚があつて、本と雜誌が少しばかり並べてある。片側の棚の下にはデスクがあつて、封筒、書簡紙、電報用紙、ペン、インキなどが置いてある。私はどんな本があるかと棚を覗いて見た。

片側で目についたのは、菊池寬の眞珠夫人、賀川豐彥の暗中隻語、正木不如丘の學用患者の手記、里見弴の大道無門、佐々木邦の文化村の喜劇など。片側の外國文ではアナトール・フランスのプチ・ピエール、イストアル・コミーク、スコツトのアイヴアンホー、ヂツケンスのテールス・オヴ・ツーカントリース、メータリンクの卑賤の寶、ダーヰンの種の起原、その外、アランボオ物語、日本藝術の精神、幸福の權利などいふ樣なものがあつた。私はアランボオを取つて少し讀んだ。本を讀んで居るうちにも、左を上にして足を組合はせた時だけは、餘ほど氣が樂だつた。

汽車は名古屋に着いた。五分間停車!。私は席を向ひ側に移して、窓からプラツトホームを眺めた。西洋紳士が二三人展望車からプラツトフオームに降りて大股に散步して居た。その間に交つて、脊のスラリとした、年は三十過とも四十過とも私には判斷のつかない、姿の好い日本婦人が、靜かに、ゆる〳〵と、フエルト草履で運んで來た。それと並んで、其人よりはズツト脊の高い、然しながら年は確かにズツト若い、半ズボンに鳥打帽の青年が歩いて居る。どうも少し變な、似合のわるいカプルである。話をして居る樣子を見ると、總てに女の方が主であり、アタチーヴである。奧樣と從者、そうも見られるが、それにしては男の態度が少し馴々しすぎる。姉と弟、それなら先

ブ無理がない。但し顔にも骨格にも類似が見えない。

　發車の笛が鳴つた。このカルプはうしろの方から展望車に乘つて來た。奥樣はガラス戸の外の腰掛に腰かけて、遠ざかりゆく名古屋驛を眺めて居た。半ズボンの男はその傍らに突立つて居た。やがて二人は寢台車の方へ行くべく、展望室を通りぬけた。奥樣は横縞のお召であつたが、それがスラリとした姿によく似合つて居た。

　この時、展望室の内部には種々なる變動が起つた。鼠色の脊廣は姿を消し、紺の脊廣と青い帶の娘さんとは、ガラス戸の外のヴエランダに出て、脊をこちらに向けて並んで腰かけた。やがて娘さんは何か小い物を袂から取りだして、男の方に差しだした。それは森永のビースらしく見えた。男は默つてそれを一つ取つた。大きな西洋人が二人づれで新たにはいつて來た紺と鼠のあとの椅子に腰かけた。その時、向への長椅の上にあつた編物の下から本が一冊すべり落ちた。西洋人の一人はそれを拾つて長椅子の上に乘せた。その本の脊には『詩篇』といふ金文字が讀まれた。編物の横にあるチリメンの風呂敷の中からも、金線皮表紙の厚い本がのぞいて居た。それは『聖書』らしく見えた。あの活々した娘さんがクリスチヤンとは、少し意外だつた。新來の西洋人の一人は丈の高い、髮の稍や黒くて濃い、ラサールの肖像に善く似た人で、今一人は、これも強いて類似を求めるなら、グラッドストンといふ所であつた。この二人には通譯の日本人もひとり附いて居て、何か頻りにしやべりつづけて居た。先程から居た居眠りの西洋人は、今はアクビをしながら新聞を讀んで居た。赤い着物に黒い帽子の婦人はもう居なかつた。

　私の向ひには額の禿げあがつた日本服の中老人が來て、本所の『講談倶樂部』を取つて讀み出した。そこに又一人の老人が來た。これはセルの着物にセルの袴をはいて居た先ほど見た、私の隣室の『茶味』の人だつた。遠眼鏡をかけて新聞を讀み出した。その手首に腕時計の見えるのが似合はしくなかつた。何のかのと、人の姿を批評したりすればするほど、カケツギズボンの紳士がおかしくて仕樣が無かつた。

　鼠背廣の青年が戻つて來て、紺背廣と娘さんとを誘ひ、『お茶飲み』に行つたので、今度は私がヴエランダに出て腰かけた。汽車の進行と正反對の方向を直視する所に一種の快感がある。並行した二直線のレールがズン〳〵ズン〳〵後退して收縮する。線路工夫が五六人、それの鶴嘴を振りあげる姿が見る中に小さく收縮する。レールの兩側に咲いた曼珠沙華が美しい。それが見る見る中に收縮して消えてしまふ。おやトンネルだ。短

いトンネルだ。その半圓形の穴が見る見る中にズン／＼ズン／＼收縮して遂に一點になつてしまふ。私は飽くこともなく、久しい間、この跡しざりの景色を眺めて居た。

四　寂しい旅

再び私が展望室内に戻つた時、ラサール君はデスクに向つて手紙を書いて居た。グラッドストン氏は眠つて居た。先から居た西洋紳士は皆な去つて、新たに下品な西洋人が來て居た。それが頻りに私の顏を見るので、私もよくそれの顏を見ると、外でもない、先つき食卓で向ひあつた、あの男だつた。

講談倶樂部の老人も雜誌を膝の上に伏せて眠つて居た。茶味の老人は既に去つて居た。そして紺と鼠の二青年が又娘さんと共に戻つて來て居た。然し娘さんは、——令孃といふほど貴族的な感じがしなかつたから、初から娘さんと呼んで來たのだが、そして其の方が、私には、親しみがあつて愉快なのだが、——その娘さんは、隣席の講談倶樂部氏やグラッドストン氏に化せられたものか、編物をかゝえたまゝ例の長椅子の隅でスヤスヤと眠つて居た。

二青年は、今度は金口のシガレットを吹かしながら、前と同じ席から折々娘さんの方を見やつては、何か面白さうに話しあつて居たが、ツイ一段高い聲で一と笑いを破裂させた時、娘さんもビクリと目をさまして笑ひだした。そして彼女は帶の間から化粧道具を取出して、輕い化粧をやりだした。鼠色の青年は娘さんから油とりの紙を貰つて、その油ぎつた顏を拭いつたりし。『モダンガールよりかモダンボーイの方が一層氣持がわるいねえ。紙おしろいを付けてる人なんぞあるんだもの。わたし驚いちやつたわ。どんな氣であんな事するんでせうねえ』彼女は少し紺谷廣の顏をのぞく樣にして、こんな氣焰を吐いて居た。

この時、窓外には絹糸のような小雨が降り、近い丘の松はまだ黒く見えて居るが、向ふの山には一面の薄モヤが掛り、もすこし遠い山々にはボンヤリと幽かに見え、更にそれより遠い山々は全く雲に隠れて居た。日は漸く暮れるのであつた。

私は又頻りに寂しさを感じた。私は汽車中で一語を發する機會を得なかつた。連のある人達はその連とばかり話つて居た。連のない人々は皆な獨りで默つて居た。それが紳士の風儀、であり、體面であつた。一日半日の間、お互ひ既に顏なじみとなつて居りながら、辭儀をするでもなく、會釋をするでもなかつた。私は殘りの時間で佐々木邦君の『文化村の喜劇』を讀み盡した外、只だ自らズボンのキズと相親しむのみであつた。夕、

飯の食卓では、初めての紳士と對坐して、稍や極りのわるい思ひをしながら、遂にニラミくらでコヒイを喫り終り、更に展望車に取つて返しては、定連の娘さんと二青年、スラリとした奥様と半ズボンの弟（？）などが、睦まじそうに食後の物語に耽るのをしみ〳〵と羨んだ。

最後に新らしく乘りこんで來た二紳士は、一人は洋服、一人は袴羽織で、事件、法廷、被告、辯護などの言葉に依つて、兩君とも辯護士である事はほゞ想像されたが、これが又その二人の間だけで、府縣議選擧の結果、政友會と民政黨の關係などに就いて、永いあいだ滔々と論じて居るので、すぐその側に腰かけた私は、只さびしくそれを傍聽するに過ぎなかつた。

斯くて私の一等汽車旅行は極めて詰らなく終りを告げ、八時半頃大阪に着いた。私が寢臺車から出ようとする時、私の直ぐ前にはセルの袴の『茶味』老人が居て、少しあぶなそうな足取でステツプに降りかけたが、そこに十七八の學校服の少年がひとり駈けつけて、『おぢいさんお歸りなさい！』と勢ひのいゝ迎への言葉を發した。私にはもちろん迎へもなかつた。いつもの尾行君の居ないのが物足りない様な氣持もした。

五　寶塚の一日

その夜は雨の中に寶塚の親戚を尋ねて一宿した。久しぶりで懷かしい人々に圍まれて、寂しい一等汽車の不滿が醫せられた。

翌日は雨。ちよつと計畫が一頓挫した。元來、今度の旅は、當なしの當を別府溫泉と定めたのだが、實はその途中の汽車汽船を本當の目的にしたのだつた。さればこそ柄にもない『一等旅客』にもなつて見たのである。所が、汽車の方は既に右の通り失敗した。あとは只だ汽船に望みが囑されて居る。噂さに聞く、大阪と別府の間には、クレナイ、ムラサキといふ、美しい名の美しい汽船が二艘、一日おきに往復して居る。クレナイで行つてムラサキで歸るか、ムラサキで行つてクレナイで歸るか、いづれにせよ、瀬戸内海の風景を照す紅と紫の光が思ひやられる。然しそれも此の雨では、折角の甲板の眺めが代なしだらう。そう思ふと、雨の中に出發する氣になれなかつた。

然し又こういふ話もあつた。クレナイ丸なら甲板にガラス張の散歩場があるから、雨が降つても平氣だ。雨の瀬戸内海は却つて美しいかも知れない。そう聞くと雨を冒して出發しようかといふ氣にもなつた。然し今日が都合よくクレナイの番かどうか。問合せて貰ふと、其日はムラサキだつた。仕方がない、雨の一日を寶塚で過す事にした。

私の宿には小鳥が飼つてあつた。玄關にも、椽側にも、庭先

にも、鳥籠が置並べ、積重ねてあつた。私は先づ九官鳥から『お早よう』とやられた。その外にはカナリヤ、セキセイインコ、文鳥などがあつた。こゝの人達は、あとからあとからと生れて來る雛を人に渡すのが厭で、それを皆そのまゝ育てる爲、段段に籠をふやして居るのであつた。自分に子供のない若い夫婦が、鳥の雛で慰めて居るのだなと私は考へた。

鳥を見て居ると誠に可愛らしい。然し私は餘り永くそれを見て居る事は好まない。ツイその狹い處に幽閉されて居るといふ境遇に對して、身につまされる氣持が起る。可愛らしく見えれば見えるほど厭な氣持になる。だけれども、ナニ彼等は籠の中に生れて、籠の中で育ち、籠の中を唯一の天地だと思つて居るのだから、別にそれを苦痛とも幽閉とも感じては居ないだらう。だから何も、センチメンタルな頬なんぞして、安價な同情を寄せたりするには當らないわけだろう。私はそう思ひ返して其の意味を宿の主人に語つた。況んや食物は安全に保證されて居るし、これほど氣樂な身の上はないと、そう云つて羨ましがつてゐる人間さへありますよ。主人はそう云つて笑つた。成るほど、身につまされ方もいろ／＼ありますね。私もそう云つて笑つた。籠の鳥がどうかして逃げだして、一二三日もして又自分から戻つて來る事が折々あるといふ。それをためして見たいとも思ふが、皆んな飛んで行つたきりになつちや堪らんから、ためして見るわけにも行かない。主人は又そう云つて笑つた。成るほど、外で餓ゑれば籠の食物が又戀しくなるのだらう。然しそれで居て、自由に飛びたいといふ、底の底の本能を抑へ盡す事も出來ない。そこに生きた物の悶えがある。餓ゑれば甘んじて束縛も受けるが、スキがあれば矢張り又飛びさずに居られない。悲しい運命だ。頼もしい力だ。

オヤ話が理に落ちた。雨の日は兎かく濕つぽい。私はその日、宿の人達と一緒に、大評判の歌劇『モン・パリ』を見た。何しろ百人近くの『少女』が種々雜多の燦爛たる服裝で、大舞臺一パイに立ち並び入り亂れて歌ひ踊る。籠の鳥の問題など全く消えてしまふ。

三日目の朝、雨は纔かに晴れたが、更に又一頓挫が生じた。クレナイ丸はこのごろ一年一度の定期修繕中で、當分は駄目だといふ。そして今日は代理船の屋島丸が出るのだといふ。クレナイはムラサキと同型の姉妹船だが、後に出來ただけ新らしい意匠が加はつて居て、諸種の設備にムラサキ以上の點があり、殊に石炭を使用しないため、少しも煤烟を出さないといふ長所まである。と云ふのにそれを見る事の出來ないのは殘念至極だ。と云つて仕方がない。何も廻りあはせだ。私は寶塚の人達

に送られて梅田に出で、それから自動車で天保山に向つた。

その途中、私は初めて大阪醫科大學を見て、大變それを珍らしいものに思つた。私の親しんだ古い大阪に、今は『大學』が出來て居る！。次にあれが『政府の遺跡』だと云つて、遙かに左手を指ざゝれたのを見ると、それは見覺えのある昔の大阪府廳―通稱『政府』―である。それが今は府廳新築の爲、『遺跡』として殘つて居るのであつた。築港の大通りで、あれ、あそこをと町の片側の日當りの二階を指ざされたのを見ると、そこにもこゝにも大小幾多の鳥籠があつた。寶塚の人達は、こんなにまで同好の多いのに大なる興味を持つのであつた。小鳥の流行は盛んだ。

午後二時、私は屋島丸の一等室に乘りこんだ。レーンコートをぬぐと、すぐに又ズボンのツギが氣になりだした。

六　屋島丸の一等船客

暫く船室内に休息してゐると、事務長が挨拶に來た。成るほど俺は一等船客だなと思つた。室内は別に驚くほど美しくもない。そして左右に一ツづつ二つのベッドがあるが、今日は天氣も怪しかつたし、相客のありそうな樣子もない。イヤ　室内に相客が無いばかりでなく、私以外には一等客が無いらしい。又しても寂しい旅だ。

一等室の廊下から段梯子をあがると、そこが一等の食堂になつて居る。狹くはあるが、ちよつと奇麗な部屋だ。食堂を外に出ると、そこは船の頭の甲板だ。船の頭などと云はないで、何とか外に言葉があるのだらうが、私は知らない。そこは運動場にも休憩所にもなつて居ない。私はひとり突立つて茶色服の船員の勞働するのを見て居た。すると白服を着た、高級船員らしいのが來て、私に對して丁寧に話しかけた。又しても一等船客たる自覺と、同時に又しても、カケツギズボンの着用者たる自覺とを與へられた。

船の尻の方の甲板に行つて見ると、そこは一二等の運動場で、二三人の二等客がベンチに腰かけて居た。私もそのそばに腰かけて大阪灣の海景色を珍らしく眺めて居ると、二等室からの上り口に可愛らしい賑やかな聲が聞えて、八つ九つでもあらうかと見える二人の小娘が飛びだして來た。揃ひの白い夏洋服を着て、短い裾の下は素足のまゝで靴下もはいて居なかつた。少し強い甲板の風が、そのオカツパの髮と、短い裾とを散々に吹きならした。彼等はキヤツ〳〵と叫びながら直ぐに又上り口に走りこんだ。少し寒かつたのだらう。暫くすると、彼等は又賑やかに飛びだして來た。今度は二人ともネルの單衣――一人

は鼠縞の、一人は紫縞の――を着て、暇そうにして居た。彼等は直ぐに二人で輪投をやりだした。

私の寂しさは忽ちこれで慰められた。私は熱心に彼等の輪投を見物した。彼等は姉妹であるらしい。脊丈は二人とも丁度同じほどだが、一人は稍や丸くふとり、一人は少し痩せがたである。痩せがたの方はネルが鼠縞で、面長の目付が利發そうに光つて居る。ふとつた方は紫縞で、眼が大きく、顔が丸く、大ぶんヤンチヤの相を示して居る。明らかにヤンチヤは妹、利發は姉、紫は妹、鼠は姉である。姉の方が全體に於いて寧ち小いさく見えるが、顔はさすがに妹に比べると少し大人びて見える。キリヨオは少し姉の方が好いが、妹の少し野蠻らしい所が、よけい可愛らしいとも云へる。年は十と八つでゝもあろうか。妹は姉をネエチヤンネエチヤンと呼び、姉も自らネエチヤンと呼んで居る。

輪投のやり方を見るに、姉はさすがに落ちついて、考へ考へやつて居る。妹は只だ滅茶苦茶に放らり投げて居る。然し滅茶苦茶に投げる無邪氣の輪は、存外に向ふの棒にはいり、考へ考へ投げる愼重の輪は、却つて的をはづれぶちである。そこで結局、二人とも九つの中に二つか三つくらいはいる事になる。丁度よい勝負である。姉は勝つても負けても只だ笑つて居るが、妹は負けると悔しがり勝つと兩手を差しあげて跳りあがる。輪は一度づつ、かわり〳〵に投げるのだが、どうかすると妹が二度續けて投げようとするので、姉はそれを押しのけてヤツト自分の順番を果す事がある。妹は又どうかすると、一ト足前に踏みだして輪を投げるが、姉はそれをネエチヤンらしく見逃して居る。ソーラはいつた！と、妹が滿腹の希望を以つて投げた輪がはいらぬ時、アカン！と云つてショゲるが、その次には姉がゆつくり投げるのを見ながら、ネエチヤン、アカン！はいらへん、はいらへん、はいらへんと、盛んに呪咀の言葉を發する。

こんな見物をして居る中に、船は神戸に入港した。私は後の方の甲板に行つて、大小、各種、無數の船舶と、海岸から山の上までダラシなく廣がつて居る神戸の市街とを眺望した。實に雜然紛然たる景色である。そこに又白服の高級船員が來て私の横に立つた。彼は、左手に見える川崎造船所を指さして私に語つた。『どうです、あの景色は。行詰りなどといふ様子は何處にも見えはしません。』成るほど、造船所の尨大な建造物が、ガンジヤン〳〵と凄まじい物音を立てて、何か知らんが盛んな活動の外觀を呈して居る。『これだけの實證を見て居ながら、矢張り勞働者が騷いで居る。』この時、彼は私に向つて話すと云ふよりも、むしろ獨りで咏嘆して居た。支配階級の意識と、勞働

者に對する反感とが、この小事務員、或は、小技術者の心中に養はれて居るのであつた。一等船客たる私は、何とも合槌の打ち様がなくて困つた。

七　素性しらべの當惑

船が神戸を出帆してから、私は又甲板で時を過した。入浴の準備が出來たといふ知らせもあつたが、私には西洋風の浴室の勝手が分らないので、少々臆し氣味で、入浴したくないと答へた。

甲板では絶えず輪投が行はれて居た。矢張り先つきの二少女が中心で、それに彼女等の『おぢさん』が引入れられ、それから追々と、他の見物人の誰彼がかわる／＼仲間に加つた。私も其の仲間入りがして見たくて仕様が無かつたのだが、生來の不器用から、幾度やつても只の一度もはいらないといふ、餘りの滑稽を演じそうな氣がして、そこに少しおくれがさして、とうとう始から終まで熱心なる見物人たる事だけに滿足した。然し私ばかりが不器用でもなく、大人は大抵みんな不成績で、只かのネエチヤンだけが、漸く著しい進歩を示し、屢々五つ六つまでも入れ、後には遂に七つまで入れる事に成功した。妹のヤンチヤンも、もうネエチヤンと覇權を爭ふ勇氣はなかつた。

ボーイが夕飯の知らせに來た。これは入浴と違ひ、食べたくないと云ふわけには行かぬ。食堂に行つて見ると、中央の食卓に事務長君と只ふたり差向ひだ。丸でお客で呼ばれた樣だ。御馳走はいろ／＼あるが窮屈で仕樣がない。ビールを飲みながらボツ／＼事務長君と話す。窮屈ではあるが、家庭的の面白味がある。汽車と汽船とでは、丸で心持が違ふ。これで相客が多かつたら、どんなに愉快だらう。

私がほろりと醉うて來た頃、事務長君はこんな事を云ひだした。『カードを拜見しますと、御職業は著述とありますが、私共は著述家先生の雅號は善く承知して居りましても、御本名を承知せぬ場合がありますので、……』私は返事に困つた。私は固より變名を使つて居たが、ツイ職業の欄に『著述』と書きつけた。これは、會社員と書いて何會社かと追究されたり、無職と書いて變に思はれたりするよりは、三モン文士で行く方がらくだと考へたのであつた。然しその時には、自分が一等船客である事を忘れて居た。三モン文士なら一等には乘らない筈だ。一等に乘るほどの著述家で、而もこれだけの年配なら、相當有名な人物に相違ない。そう思はれるのは當然だ。私は困つてしまつた。『ナーニ、私は著述と云つたところで、ほんの下らない………』とやつて見たが、先方は中々承知しない。まだ色々と

探りを入れて來る。『私は先に紀州通ひの船に乘つて居りましたので、佐藤春夫さんなど善く存じて居ります。あの方は新宮のお方で。……』『西村伊作さん、沖野岩三郎さんなども、皆よく存じて居ります。』そう云はれると、私も何とか云はないでは居られない。『その人達は私も萬ざら知らないでもありませんが、………』先づそんなところでお茶を濁した。すると先方は又、『御專門はどの方面で御座いますか』と來た。『すーニ、專門などと、………』あとはムニャ／＼で胡麻化して居ると、さすがに私の迷惑した樣子が分つたと見えて、素性しらべはそれで免除してくれた。

それから、この船が千トンで。クレナイ、ムラサキが千五六百トンである事、この船は從來、松山通ひであつたが、速力が非常に早いので、その爲にクレナイの代理に使はれて居る事、總て船は一年に一回、二週間くらいの修繕を要する事。クレナイが今それをやつて居る事など、いろ／＼船の話を聞いた。猶ほ汽船の待遇と汽車の待遇との差異、別府溫泉と道後溫泉との比較など、種々なる智識を與へられた。そうして居る中、少し私は不安を感じだした。どうも船が少し揺れる樣だ。私は昔から船には極めて弱い。この瀨戸内海ですら多少苦しんだ覺えがある。然し今度は大丈夫だらうと高をくくつて居たが、必ずしもそうでないかも知れない。どうも少し變だ。

『少し揺れて來た樣だな。』事務長は給仕のボーイを顧みてこう云つた。果して然り。私はヒヤリとした。『こゝは何處でせう。』『播摩灘です。鳴戸海峽から來る浪です。』『成るほど、昔も播摩灘で吐いた覺えがある。私は飯を食ふのをやめて早々自分の室に退却した。そして寢た。寢るのが一番だ。幸ひに寢られさへすれば、少々の揺れるくらい知らずに濟む。

八　東洋一の煙突、營利主義の策士

目がさめて見ると、私は高松に著いて居た棧橋に來た賣子から三つ廿錢の廿世紀を買つて、それを食つて又寢た。一等客らしくもない。

次は高濱。道後溫泉行上陸地といふ電燈のついたアーチが立つて居る。ちよつと上陸したい氣持もしたが、何ぶん午前四時といふ不便な時刻なのでヤメにした。

夜があけて甲板に出ると、もう向ふに九州が見える。早朝の海上ほど爽快なものはない。私は眞正面に別府に向つて進んで居るらしい。左手に豐後の佐賀の關の尖端が見える。甲板の人人が何か頻りにその方角に指さしをして居る。ソラ、あの山の上の、あの高い煙突！　私も、近眼の瞳の、眉をひそめ、目を

細くしてこちらを見やつたが、濃墨色の長い岬が見えるばかりで、外には何も見えない。見えませんか、あのソラ、山の少しへこんだ處の。そう云はれると成るほど、高い竿の様な物がウッスリと見える。それが久原の銅の精錬所で、何しろ久原の全盛時代に拵へたもので、山の高さが二百尺、それから上が三百尺、合計して海拔五百尺といふ、東洋第一の高い煙突なのであつた。(此の數字少々危し。)

私にもヤット人並に、ウッスリとでも其の大煙突の姿の見えたのが嬉しくて、どうして又あんな處に精錬所を拵へたものでせうと傍への人に聞くと、其人は云ふ。つまり煙害を避ける爲ですな。銅の精錬は云はゞ毒瓦斯式の物を吐きだすので、人民が段々惡化すると、色々な苦情を持出して來る。所が、あの岬の山の上に、あれだけ高い煙突を拵へて置くと、あそこは丁度、氣流の工合も善くて、煙は皆な海の方に流れてしまふのです。成る程ど、それで善く分つた。然し私は少し驚いた。この人は二等客で、大した御身分とも見受けられないのに、人民の「惡化」を嘆息して、資本家側の立物から物事を考へて居る。丁度、神戸で川崎造船所に關して私に話をした船員の態度と同じである。何しろ、あの素晴らしい大煙突が人民「惡化」の結果なのである！

朝飯の食卓は又事務長君と私と差向いだつた。然し今朝は向に一人、窓ぎわの小いテーブルに洋服の老志士が陣取つて、チビリ／＼日本酒をやつて居た。彼は高濱から乘りこんだ客らしいジグス式の好々爺で事務長を顧みては、何か頻りに論じて居た。段々聞いて居ると、話の題目は大三島のオホヤマツミ神社に關する事だと知れた。大三島は高濱より少し前の、今治(いまばる)の沖にある島で、そこのオホヤマツミ神社は極めて古い由緒のある神社で、上古から歷代の甲冑が八歩どほりも揃つて居る。その一事だけでも大變なものである。それにオホヤマツミは山の神でもあり、海の神でもあり、農業の神でもあり、漁業の神でもあり、あれをモットはやらせないのはウソである。あそこの神主がもすこし山師だつたら、今ごろは此の船をあそこに着けさせる事にして、大阪と別府の中間に於ける一大名所として、大大的繁昌を來して居る筈だが、今だにそれが出來ないで居るのは惜しいものである。ジグス君の氣焔は凡そ斯様なもので、滔滔として盡きる所を知らない。『全く名所の繁昌は宣傳次第でありますな。』事務長も頗る贊意を表した。『大和の志貴山などもあそこの坊さんが宣傳上手で、始終大阪に出て來て色々な事をやつて居るのだから、あのとほり繁昌して居ます。』事務長君がこんな相槌を打つと、ジグス君は大いに我意を得たりといふ様

子で、更にその山師觀を發展させ、盛んに事業經營の抱負を說いた。彼は實に當世營利主義の策士であり、代辯者である。彼に取つては、神社であれ、佛閣であれ、名所であれ、それが資本に利潤を與へる設備にならなくては、ウソなのである。現に別府『泉都』が大繁昌を呈して居り、クレナイ丸、ムラサキ丸の美しい名前が天下に響きわたつて居るのも、皆こうした策士や代辯者の抱負が實現されて居るのだらう。

九　標本的帝國主義者ジグス君

ジグス君の氣焰は更に擴大した。彼は世界の大勢を語りはじめた。彼はツイ先頃、歐米視察旅行から歸つて來た人であつた。彼はアメリカの大富豪の如何に大であるかを說いた。それに比べると、日本にはまだ本當の大富豪はない。彼はアメリカと匹敵し得る大富豪を日本に作りたいといふ愛國者であつた。彼はイギリスが勞働者を優遇して、賃銀が高く、失業給が高く(それが爲、勞働者が碌に働かず、産業が不振に落入つて居る事を說いた。日本など餘ほど善くその點を考へなくてはいけない。彼は出來るだけ日本の勞働を安價にして、イギリス資本主義の覆轍を踏ませまいとする意味に於いて、又大なる愛國者であつた。私は只フン〳〵云つて彼れの話を聞いて居たが、彼れの話その儘からして、愛國者なる者が必然的に勞働者の敵であり、富豪の味方である事を悟らせられた。

然し彼はジグスである、好々爺である。僞善な人道主義など云はない所が甚だ率直で愉快である。彼は更にロシヤ攻擊をやりだした。ロシヤも充分視察して來たが、全く駄目だ。ロシヤの人民は幸福でも何でもない。得意になつてるのは勞働者と兵士ばかりだ。産業を起さうにも資本が無い。資本が無くて何が出來る。自動車と云へば、半分こはれかゝつた樣な、ガタ〳〵車ばかり。それも其の筈。少し奇麗な自動車でも持つて居ればすぐに役人がやつて來て檢べる。どうした金でこんな物を買つた。そして少しでも犯罪があれば、ドシ〳〵縛り上げる。犯罪がなければ沒收するか、重稅を課する。堪つたものぢやない。だから資本も出來やしない。産業も起りやしない。あれぢや亡びるより外ありやしない。如何にも、資本階級は亡びるより外ないだらう。資本家は重稅を課せられるだらう。不法な營利をやれば沒收もされるだらう。犯罪があれば勿論縛られるだらう。それは如何にも、資本家に取つちや、堪つたものでないだらう。ガタ〳〵自動車は紳士に取つて不愉快だらう。然し勞働者などにとつちや、他人の乘る奇麗な自動車を見てばかり居るよりは、ガタ〳〵自動車にでも自分の乘る事の出來る方が愉

快ぢや無いだろうか。資本の無いのは確かに事實だろう。然し資本のある國の人民は皆な幸福だろうか。資本のある國では、得意になつてるのは資本家と、それに附き從ふ者共ばかりぢや無いのか。そんな反駁なんど、私はオクビにも出さなかつた。私は只フン／＼と彼れの氣焰を聞いて居た。それから、彼は遂に日本の大陸政策確立の必要に論及した。從つて田中大將の滿蒙政策を讃美した。好々爺ジグス君は實に標本的の帝國主義者であつた。彼は或人に頼まれて歐米の『眞相』を視察して來たのだが、今その視察した『眞相』を著述にしかけて居る。もう大體は書き終つたが、ドイツとロシヤだけがまだ殘つて居る。これから別府に行つて友人に會つて、それから東京に行つて東京で著述を完成する積りだと云ふのであつた。私は只、老年にも似ない彼れの意氣を感嘆した。

午前十時、私はいよ／＼別府に着いた。船から見渡す正面に高い山々が幾つも幾つも重なりあつて、その麓の海岸が一帶の溫泉地になつて居る。靜かな、おだやかな、暖かい、景色の好い『湯の町』であり、『湯府』であり、『泉都』である。私はジグス君のあとについて、棧橋に降りた。棧橋の人込の間に、かの輪投の二少女が奇麗な揃ひの洋服を着て、手を引き合つて步いて居るのが目についた。

十　龜の井ホテル

ジグス君のロシヤ攻擊に對しても、大陸政策に對しても、只だ默つてそれを拜聽した程の私だから、宿を極めるについても、同じく只、ジグス君に盲從した。ジグス君は私を引連れて、龜の井ホテルから來た迎への自働車に乘つた。この別府には、龜の井ホテルと日奈古旅館とが一流の宿屋で、殊に龜の井は外人向の洋館であるそうだ。私は又しても例のズボンを氣にしながらさあらぬ顏して龜の井ホテルに乘込んだ。

自働車から降りると、ジグス君はそこに出て來た主人らしい人に向つて、山下はまだかと聞いた。山下とは誰だらうと思つたが、立入るべき事でもないので、私は一先づジグス君と別れ、女中に導かれて日本建の離れ家に入つた。

私の當てがはれた部屋は、二階の八疊で、それに六疊の次の間が付いて居た。何の爲に、小さな男一人がこれだけの疊數を要するのかと、おかしく思つたが、一向驚きもしない樣で、洋服をぬいで浴衣に着かへ、兎に角早速、溫泉にはいつた。溫泉はその離れ家の階下にある只の小さな浴室で、相當奇麗ではあるが、別だん何の變哲もなかつた。

食事は成るべく食堂でしてくれと云ふ事で、こちらもそれが

望む所だから、浴衣のまゝで食堂に出かけた。浴衣ではどうかと少し危ぶんで女中に聞いて見たが、宜しう御座いませう、そのまゝお出でになる方もありますと答へた。食堂は本館の玄關の直ぐ右手にあつて、洋食と和食と兩方あるが、設備は總て洋風である。私は洋食の定食を食つた。これも別だん何の變哲も無かつた。

食堂から戻る時、本館の玄關前でジグス君に出會つた。今、山下龜三郎が着くので、これから迎へに行くのだと云ふ。成るほど、それで色々呑込めた。それから、猶ジグス君は、自分は極くの貧乏だが、友人に金持があるので少つとも不自由はしないなどと、しばらくそこで立話をした。私もジグス君に身の上を打明けたい氣持がした。そしてお互で淡白に議論でもして見たいと思つた。然しそんな事からして、旅先で尾行君の御厄介に成る樣な事があつては面倒だと考へて、不本意ながらそれはヤメにした。ジグス君は嘸ぞ私の事をハキ／＼せぬ男だと思つたろう。

私はそれから、偶然に隣室の客と連れになつて、謂ゆる『地獄めぐり』の乘合自働車に乘るべく、龜の井を出かけた。すると半町ばかりも歩いた所で、向ふから五六人の紳士の連立つて來るのに行き會つた。その中にジグス君の顏も見えた。あれは山下龜三郎ですよと、私は連れの人に話した。すると連れの人は、あの紋付の羽織を着てるのは龜の井の主人ですよと私に教へた。龜の井の主人は油屋熊八君と云つて、別府の名物男であるそうだ。

十一　地獄めぐり、浴場のぞき

私の連れは大阪紳士で、いづれ然るべき御大家の若旦那らしく見受けられた。それが偶然とは云へ、私と二人で（後には外の連も出來たが）自動車を走らせた。自動車が餘り早く走ると、彼はハラ／＼してスピードを緩めさせた。

『こゝが白蓮女史の舊跡です。』運轉手が或る別莊風の家を指ざした。『あの松原で宮崎さんと散歩したのです。』『銅御殿なるものだね。』『イヤ、銅御殿の方は燒けました。こゝは別莊です。』『銅御殿の燒けたのはおかしいと云ふではないか。』『ええ、麻生さんの別莊と同じ時に燒けたのですが、おかしいかも知れません。』

それから八幡地獄、鶴見地獄、十萬地獄、血の池地獄など遊覽した。熱湯が玉を飛ばして迸り出たり、赤いネバ土が沸々と湧いて居たり、白い湯氣が雲の樣に立登つたりして居る。血の池地獄はツイ先日、丁度二百十日の日、突然烈しく噴出して、若い娘がひとり其の爲に死んだといふ。池のまわりの山の木

か、松だの、杉だの、赤くなつて枯れて居る。私の連れの若旦那氏は、ひどく驚いてコワがつて居た。

それから若旦那氏と私は、更に仲よく自働車を觀海寺に走らせた。こゝは山の中腹にある、眺望の甚だ好い、古い溫泉である。この溫泉は胃腸を洗滌するに善いと云ふので、茶のかわりに溫泉を飲ませる。運轉手と三人、ちよいと溫泉につかつて、名物の縫針をミヤゲに貰つた。これで先づ『別府十湯』若しくは『十五大溫泉』の一斑を見た氣持になる。

今度は市内に歸つて、市有區有の大小浴場の二三を見物した。竹瓦溫泉をのぞいた時など、覺えずゾツトする樣だつた。こゝは『無料公開』で、『浴槽二十二個を男女に區劃し、男女とも泉浴、砂湯各一、臥湯各九個宛あつて、晝夜雜沓し』て居る。裸體の雜沓は凄まじい光景である。『階上に九十疊敷の無料休憩所』もある。『昔、粗末な竹屋根葺の小舍であつた』のに比べると、今は大進歩を示して居るのだらうが、まだずいぶん古めかしい設備である。不老泉は『輪奐の美、內容の整備、別府第一』と云ふのだが、それも大して綺麗ではない。然し別府の特色は上下各階級の客を迎へる所に在ると云ふので、實際、一日一圓などと張り出した內湯付の宿屋がある。全然昔風の自炊宿もある。殊に市有區有の無料公開は、湯の町として、せめてもの事だと思はれる。然し又、『日本一の泉都』であるなら、もすこし清潔な、もすこし新式な、民衆的設備があつても、よいわけだと考へられる。神經質な我が若旦那氏の如きは、あれでは病氣の傳染がこわいと云つて、頻りに眉をひそめて居た。

竹瓦溫泉の直ぐ前に姓名判斷の先生が控へて居た。若旦那氏は二十錢を投じて判斷を求めた。先生は提出された姓名の傍らに數字を書いたりして、記號を付けたり、何か手早く計算する樣な眞似をして居たが、若旦那氏は何か多少とも思ひ當る事を云はれたと見えて、更に二回まで廿錢を投じて、他の事項について判斷を求めた。先生はとう／＼調子に乘つて、『大將も一つ如何です』と私の顏をジロ／＼見た。

その夜、私はひとり散步に出て、揚町の『なの字館』で演說を聞いた。この演說會は、縣議選擧の落選祝賀會といふので、油屋熊八君の名も辯士の一人に列せられて居た。私のはいつた時には、梅田凡平君といふ雄辯家が相撲甚句を歌つたりして盛んに喝采を博して居た。彼は油屋熊八君の事を『民衆外務大臣』と呼んだりして居た。熊八君は、肥前の雲仙嶽に來て居る蔣介石君を別府に呼び寄せようとして、大いに外務大臣振を發揮したものらしい。凡平君の演說の趣旨は、政友、民政などの黨爭に超越して、新たに溫泉黨を組織し、以て別府の繁榮を計

ろうと云ふのであつた。繩の井ホテルの繁榮は即ち別府全市の繁榮を代表するものだろうと思はれた。

翌朝、若旦那氏と私と二人は、海岸の砂湯と、遊覽飛行機とを見に行つた。砂湯は滿潮の爲に、其の時は駄目だつた。若旦那氏は、ぜひ後ほど寫眞屋を連れて來て、自分が砂の中から首だけ出して居る所を寫させると云つて居た。遊覽飛行機は十分間十圓で乘せると云ふので、私は餘つぽど心が動いたが、用心屋の若旦那氏が頻りに危險率の大なる事を說いて心配するので、ヤメにした。

まだ一晩くらい滯在したいとも思つたが、今日のムラサキに乘りたいので、すぐ出發と極めた。若旦那氏とは名刺の交換もせずに別れた。そこに却つて旅の道づれの面白味があつた。繩の井は氣樂ではあつたが、面白くは無かつた。

十二　紫丸、變名の苦しみ

ムラサキ丸の一等室、切符に指定された第八號にはいつて居ると、『今日はこみますので』と、同室の相客のある事をボーイがわびた。間もなくやつて來たのは、思ひがけのないジグス君であつた。ヤアこれはと、お互ひに驚いたが、少しも不快な驚きでは無かつた。

午後一時ジャガン、ジャガンと、出帆を知らせる鐘の音が響いた。棧橋に沿うた船側の甲板に出て見ると、先づ意外なのは、幾十筋の五色のテープ――色紙の平紐――が甲板と棧橋の間に流れて、風に吹かれて美しく入り亂れて居る事だつた。こんな新らしい風習が早くもこんな處に行はれて居る。實を云へば、私としては、横濱あたりで外國行の船が出る時、近頃そんな事をするのがはやるとは聞いて居た（或は新聞などで讀んで居た）が、目に見るのは全く今が初めてだつた。

船はいよ〳〵動きだした。五色のテープの幾十筋が風を孕んで、見送人の手先からスル〳〵スル〳〵と延びて行く。（見た事のない人には、テープの構造（！）が分らないだらうが、測量師などの使つて居る卷尺の樣なものだと思へばいゝ。）甲板の洋服男が大事さうに其の數本の一端を持つて居ると、棧橋の藝者舞子らしい女共が、大騷ぎをやつて其の卷尺を繰りのばしてゐるなど、ずいぶん馬鹿くさい景色ではあるが、飯事のはやる世の中だから仕方があるまい。或は今に、反動團體の壯士でもやつて來て、この柔弱な亡國的風俗の流行に憤慨して、テープ撲滅！を絕叫するかも知れない。

お茶の知らせを受けて食堂に行く。山下成金氏の顏も見える。ジグス君は名刺を出して、名前がわからないと話がしにく

いからと云つて、それを私に吳れた。私は當惑したが、漫遊の旅で名刺を持つて居ないからと云つて、——實際持つて居なかつたのだが——手帳の一ページを引裂いて、それに目下使用の住所姓名を記して答禮をした。するとジグス君は『ヘエ、麻布霞町。そうすると高山長幸の近處だな。ネエ、そうですねえ』と云つて山下氏に確かめた『あゝそうだ』と、山下氏は鷹揚に答へた。私はいよ〳〵窮地に落入つた。麻布霞町には私の友人が居るので、滿ざら其の邊を知らないわけでもないが、細かい話になつては辻褄が合はなくなりさうだ。『高山長幸と云へばたしか貴族院議員ですね』と、テレかくしにウロ覺えでお茶を濁しかけたが、『イヤ、衆議院議員です』とやられて、又一ショゲした。『そうすると、谷町の方から行つて』どうとかして、どうとかした處かと、ジグス君はいよ〳〵攻め寄せて來る。『イヤ、靑山から墓地下、霞町といふ停留所の順序で、霞町が六本木線との交叉點になつてゐるのですが、その交叉點を六本木の方へ少し上つた處です』と、ずいぶん廻りくどい、然し充分地理に熟して居るらしい返事をすると、それで住所調べはヤット兗除された。(私は今ここにジグス君の本名を記さない。こちらの變名と交換した名刺なのだから、それを公けにしては善くない樣な氣がする。それで失敬ながらジグス君で通して置く。)

ムラサキ丸の一等室は上甲板の中央部にある。そしてそれから船尾の方が三等客の運動場、船首の方が一二等客の運動場になつて居る。そして一等室と船首の運動場との間が、食堂と談話室とになつて居る。その談話室などが、クレナイの方は遙かに立派なのだそうだ。然しムラサキでも、屋島に比べると、食堂も廣いし、談話室もあるし、總てが大ぶん奇麗に行屆いて出來て居る。然しクレナイ、ムラサキといふ、その美しい名が想像させた樣な美しさは、何處にも見つからない。『極樂船』には相違ないだろうが、龍宮の樣だとも思はれない。カケツギズボンの一等客と雖も、そんなに驚きも恐入りもしない。

十三　山下と結城

船が大分に著いた。下りはこゝには要らないが、上りだけは縣廳所在地に敬意を表して寄るのだそうだ。誰が乘るのか、制服の警部さんなどが見送に來て居た。おかしい事には、こゝにも三四本、寂しい色紙のテープがあつた。ジグス君は、今一艘そこの棧橋に着いて居る宇和島丸といふのを指さして、これは內の船だと云つた。內の船とは、山下汽船の事だろうか。ジグス君は猶、ニューヨークで內の船に出會つて愉快だつたといふ話をした。支配階級の附隨者たる誇りと滿足がそこにある。

船は佐賀の國を右手に見ながら進んで行く。例の高い煙突が今度はハッキリ見える。ジグス君は『人民の惡化』を說かなかつたが、『烟害の考慮』について色々話してくれた。別子でも純友が烟害問題で非常に困つた。それでとう／＼精錬所を島に移したが、そこでも矢張りいけない。結局、年に三十萬圓ばかりゆすられて居る。それを考へると、あの位の煙突なんぞ譯はない。久原は其の點に於いて大膽な率先者であつたのだそうだ。

我々の運動場には數個の籐椅子が備へつけられてあつた。ジグス君と私は並んでそれに腰かけて居た。私は又しても折々、左を上にして足を組みたい樣な氣がした。私達から二三間ばかり離れた向ふに、二人の紳士が手すりにもたれて、海を眺めながら話に耽つて居る。その一人は私も既に山下氏として見覺えて居た。山下氏と對等らしく振舞つて居る今一人は誰だらう。あれが山下と結城ですよ。ジグス君が私に敎へてくれた。結城とは結城豐太郎氏だらう。『有名な人でも、エライ人でも、金持でも、風采は大して變らないものですね』と私が云ふと、『えゝ、全く無階級ですよ』とジグス君が云ふ。『脊廣の色と靴の色との外、何處にも違ひはありませんね』『服裝なんぞ別に仕樣がありませんからね』

華族とか、大官とか、代々の富豪とかには、容貌なり態度なり服裝なりに、何處か違つた所が見えるものだが、謂ゆる實力で一代に成功した働き手の實業家などには、そんなケチくさい所がない。ジグス君がそこを『無階級』と云ふのだらう。そこが新興ブルジョアの誇りである。昔の戰國時代には、新たに崛起して王侯になつた英雄豪傑が、猶ほ多くは奴僕の面を存して居た。服裝態度もそれに伴つてまだ極めて粗野であつた。彼等の恃む所は只だ武力と才知であつた。今の成上りの經濟的王侯も、矢張り大體それと同じで、奴僕の面では無いにしても、中流智識者の風采以上に出でない。彼等の恃む所は只だ金力と才智である。

山下は既に謂ゆる老境に入りかけて居る。どうかすると、その步きぶりに少しトボつく樣子が見える。然し謂ゆる『泥龜』の名に値する頑强の氣は猶ほ其の顏面に現はれて居る。結城も既に若くはない。髮は稍や薄く、肉は少し瘦せて居るが、猶ほ其の精悍の氣は目の光に現はれて居る。然し何しろこの二人が、一人は有名な船成金であり、一人は安田王國の首相であるとは、どうしてもチョットうなづかれない位である。山下が船室に下つて後、結城は獨り永く籐椅子で讀書に耽つて居た。

十四　もうけた金の使ひ方

私は例の一睡を取るべく船室に降つた。そして目がさめて見ると、ジグス君もベットに横たはつて居た。暫く二人の間に談話の花が咲いた。と云つても、語るのは主としてジグス君であり、聞くのは主として私であつた。この船を作るのに凡そどのくらゐの金が掛つてゐるでせう。左様、今より高い時の事だから、トンあたり五百圓は掛つてるだらう。さうすると、千五百トンで七十五萬圓といふ事になる。でも、この船は贅澤船だからそんなに掛るのだが、荷船ならトンあたり百五十圓か二百圓で出來る。それが一時八百圓からしたのだから、もうかつた筈だ。ジグス君は船成金の出來た所以を語るのであつた。

彼は更にこういふ話をだした。大正三年、歐洲戰爭の始まつた頃、彼は山下の處に行つて金は無いかと尋ねた。山下は驚いて、もう小使がきれたかと云つた。イヤ、僕の小使はまだ澤山ある。そんな小いさな話ぢやない。今、歐洲に大戰爭が始まつた。金があるなら一つ船を買込んではどうだ。所が、山下は容易に食ひつかない。彼は頻りに歐洲戰爭の永びくべき理由を說いて船の買込を勸告した。すると山下は、君等に商賣の事は分らないと、其の大事な提案を一蹴した。そこで彼は、商賣の事は分らないが、世界の大勢は分つてる。その點に於いては僕の方に一日の長があると氣焔を吐いた。そんな事から漸く話が進んで面白い事になつて來たと云ふのである。話はそれからいよ〳〵肝腎な所に這入らうとしたが、そこに夕飯の鐘が鳴つた。

食堂にはいると、中村さんはこちらへとボーイが云ふので、一あゝ中村とは俺の事だつたなと、大きにドギマギして一隅の小テーブルに着席した。中央の大テーブルには、事務長と共に十人ばかりが着席して居り、その外に五六人のテーブルが一つ、三四人のテーブルが三つあつた。山下氏と結城氏とジグス君とのテーブルは、私のテーブルの直ぐ隣りであつた。

私のテーブルでは鰒のウマイ話が始まつた。鰒料理の決して危險でない事。折々やられるのは、あれは總て素人料理の結果である事。私と相對した客人は實に鰒通であつた。彼は又鰒食用の歴史を語つた。鰒は一體豐前の奴が食ひはじめたもので、それが下の關、福岡、豐後にまで傳播したのであるさうな。豐前人は鰒史に於いて光榮ある地位を占めて居る。私も豐前人の一人として其の光榮を分ち得るわけだなと、窃かに獨り微笑を催した。

隣のテーブルでは、山下氏がジグス君の服裝を見ながら、外國製か日本製かと尋ねて居た。皆んな和製だ。尤もシャツだけはロンドンで買つた。それから帽子は、アメリカでナイヤガラの瀧を見に行つた時、瀧の中に落したものだから、よんどころなくあちらで新調した。ジグス君は面白おかしくそんな話をした。

『事務長！食ふ物は中々うまいぞ。』山下の御前からお聲掛の言

葉を下された。中央のテーブルはもう食事が濟んで居た。事務長は山下氏の前に來て謝辭を述べた。山下氏は事務長に坐を賜うて、葡萄酒か何か知らんが赤い洋酒を彼にすゝめた。事務長は謹しんで山下氏の向ひに着席したが、赤い酒は固辭して受けやなかつた。山下氏は聲を低くして彼に問うた。……あの奥さんは誰だ。……内務部長の奥さんです。……お母さん……横井時雄氏の未亡人……そんな聲がとぎれとぎれに聞えた。大分で警部その他の見送があつたのは、それだなと頷かれた。

それから事務長は退き、あとはモウけた金の使ひ方の話になつた。私は態とゆる〱梨をむきながら熱心に其の話を聞いた。××さんは有りたけ皆んな使つてしまふ積りだそうですね。ジグス君がそう云つた。××君なんども殘す積りはありますまい。これは結城氏の言葉であつた。だから山下君なども大いに一つやつて貰ひたい。ジグス君が切りこんで行つた。彼はさすがに好漢である。すると結城氏が直ちにそれに應じた。そうだ！山下君は自分でもうけた金だから自分で使ふに遠慮はない。（人の金の番をして居る、自分の様な身の上とは違ふのだから、といふ意味だつたか、どうか。）するとジグス君が直ぐに又註釋を入れた。イヤ、自分でもうけたと云ふても、矢張り皆んな世間様のお蔭なのだから、世間の爲に使ふがいゝのです。××にもどうかそういふ暗示を與へて下さい。最後の一節は結城氏に頼む言葉であつた。××が何といふ言葉であつたか、聞取れなかつた。或は山下氏の内方を指したのだつたかも知れない。山下氏は只、ウン、ウン、フーン、フーンを以て之に酬いて居た。

十五　ホグロ、茶番、山下御殿

もうけた金の使ひ方はまだ續いて居た様だが、私の梨は既に盡きたので、いつまで永くテーブルにも居られず、私は殘念ながら食堂を出て談話室の長椅子に腰かけた。

丁度私の前の長椅子には、大ぶん安つぽい紳士がふたり、大きな聲で話して居た。Aは少し時候はづれの白チョッキを着て居る。Bには其の少し禿げあがつた額に大きなホグロがある。其に特色とすべきである。殊にこのホグロは、先刻私が運動場で見つけた時から、目について仕様がなく、餘計なお世話ながら、丁度私自身のズボンのツギほど氣になつて居たものである。

憲政會内閣は自分で選擧をやれば善かつたですな。あんな恐ろしい選擧取締の武器を作つてそれを敵に使はせたのは馬鹿々々しい。若槻さんは餘り考へ過ぎたのですな。だから智慧のあるものはいかん。そこは濱口さんの方がいゝでせう。時に文部長が替ると云ふ事ですな。（これはホグロ氏であつた。）サア。（これは白チョッキ君であつた。）あなたが其の候補者だと云ふ噂ですが。イヤ、そんな事……。誰でもいいんです、我々の處は。でも、對内は誰でもいゝとして、又對外の事情があるでせう。ナニ、それも、大して……。

こんな話の中に船は高濱に着いた。運動場に出て棧橋を眺めると、ジグス君はそこに降りて行つて、頻りに誰彼と話して居る。彼は宇和島の人だと云ふが、ここらも矢張り繩張りの中に屬して居ると見える。

これから先は夜の世界。今度の旅行で私の一つ大いに失望した事は、瀬戸内海の中で最も景色の好い、船が島の間を縫うて行くと云はれる、高濱と高松との間が、往も返りも丁度夜になる事であつた。これは折角の、タレナイ、ムラサキの價値を著るしく減ずるものだと思ふ。せめて月でも出ればと思つたが、それも駄目だつた。

夜は三號の船客で茶番狂言があつた。一等の奥さん達も、大實業家達も、皆な見物して居た。初はさぞ見づらいものだろうと思つて居たが、實は中々馬鹿にならない巧者ぞろいで、誰も彼も感心して居た。筋は曾我兩家五郎の脚本から取つたのださうだ。先刻、私が談話室に居る時、背の高い奥さんが、或る一等室のドアに忍び足で近づいて、耳をドアにつける様にして、暫く中の様子を窺ひ、それから又忍び足で立去つたが、後で思へば、子供の寢ついたのを見定めて、茶番見物に出かけたのであつた。

その夜、私は食堂の書棚から大衆文學全集を取りだして、正木不如丘君の『木賊の秋』といふ話を讀んだ。信州の農村の生活――哀れな一農家の運命――が誠に面白く描かれて居た。一隅には將棊をさして居る夫婦もあつた。ジグス君がそこにやつて來て、笑ひながら云つた。王様を握つたりしてるのぢやありませんか。これは、先刻の茶番の中で、將棊さしの一方が、お手はと聞くと、王が一つと歩が三つと答へる所があつたからの洒落だつた。

翌朝早く、私は又ジグス君と共に運動場の籐椅子に腰かけた。船は既に神戸近く進んで居た。山下氏と結城氏が運動場の眞中に立つて神戸の方を眺めて居た。『山下御殿の所在がお分りですか。』山下氏が黑い顔に笑ひを含んでそう云つた。愛嬌のない結城氏もさすがに多少の愛嬌を示して、『サア、どの邊ですかな』と、目さぐりをして居た。

『あそこのソラ、あの白い物の……』と、山下氏は頻りにそれを指さしして居た。あとで聞けば、この謂ゆる山下御殿は、實際、疊數の六百疊からある、大變な御殿だそうだ。須磨には別に意氣な御妾宅もあるそうだ。

× × × × ×

神戸に上陸して、僅かに一時間あまりの後、再び一等汽車の客となつた。今度は寢臺車でなく、展望室の隣りの室に入れられたので、往よりは少しマシだつたが、それでも矢張り獨りぼつちの寂しい旅客で、その日の夜、東京に歸りついた。書けばそこにも多少の話はあるが、例の日時と紙數との切迫で、これだけにして置きます。絶えず氣にしたズボンのツギは幸ひに誰からも咎められませんでした。

蔣介石論

人物評論



贔負役者を見る

○

高畠素之

蔣介石は僕の晶負役者である。北方聯合軍を堂々と擊破して山東ちかく進出した時は、北京に城下の誓ひをなさしめるも羔して難事でなささうだつたが、晩秋の天候と同樣に寸前の豫測を許さぬ支那の戰況は、彼れをして日本へ亡命するのやむを得ざらしむる悲運に導いてしまつた。大して執着のある氣持ちぢやないが、鉛毒で倒れた菊次郎を偲ぶ程度の愛情はおのづから感じられる。

蔣介石も一時は『英雄』であつた。ムッソリーニやケマルほどの魅力はなかつたが、それでもリザ・カーンやアブデル・クリムや、その他の動劇的群小英雄に比較すれば、一枚か二枚は確かに看板が上であつた。英雄の末路や哀し、彼れもその點で先驅者と同じ感慨に耽つてゐるか知れない。しかし未だ四十そこそこの年配、加ふるに討伐と下野とを年中行事に出し入れしてゐる支那のことだから、また來ん春には、コルシカがへりのナポレオン以上の勢威を盛り返へさぬとも限るまい。などと、晶負は晶負なりの氣持ちで慰めてゐる。

こんなことを言ふと、何にか僕が彼れの政治的立場に同意してゐるかに疑はれさうだが、實はさうした野心があつての仕業ではない。この方面に於いては、社會民衆黨の御歷々もお揃ひだし、我々ごときがオセッカイに飛び出す幕ではないと自認してゐる。元來、僕から言はせれば、共產派にしろ國民派にしろ、武漢派にしろ南京派にしろ、兩者の區別を本質的に決定する條件は甚だ薄弱である。その場の變の日の出やうと、その日の風の吹き廻しで、左にもなり右にもなり、共產主義にもなり、國民主義にもなるといふのが彼等の常套、主義も主張も利害打算を中心とした巧言令色に過ぎない。これは何にも現代支那のみに限つた譯でなく、東西古今を通貫する普遍原則であるが、殊に今日の支那は日本の如くそれが露骨に作用してゐる。張作霖にしろ、馮玉祥にしろ、閻錫山にしろ、その他の有象無象にしろ、何づれも筒井順慶と本家爭ひをしかねない連中ばかりである。中でひとり、吳佩孚だけは原始的武人の典型を偲ばせる部分があり、御歷々の末席を穢して及ばずながら力瘤を入れて來たが、彼れを除けば支那四億の民で蔣介石のみ晶負役者とするに足りる。

○

蔣介石に武人的面影があるかどうか、これは直接にその人を知らぬ僕の斷言し得るところでないが、少くとも吳佩孚のやうな秋霜味は偲ぶことが出來ない。嘘か眞か知らぬが、戰爭をタネに何百萬の金を失敬したとか、前の細君を追ッぱらつて新しい佳人を迎へるとか、さういふ風聞を傳へられるだけでも、可成り如才ない人間のやうに思へる。しかし僕は、何にもさうした彼れを善いとか惡いとかいふ意味でなく、寧ろその人間らしい點味に同感させられるのである。如才なさも御多凡百の將軍に見る品の惡るさを印象させないだけどつか彼等と本質的にちがつた部分があるのぢやないかと思つてゐる。

新聞電報を通じての斯かる印象は、當るも當らぬも八卦なみの見當である。果して彼れが實際のそれと合致するか背馳するかは問ふところでなく、一人勝手に自分がさう極めてゐるだけの話しである。大體、晶負といふのは、先方の都合の如何で成立するものではない。當方だけの條件で成立することは何ほ不見轉が役者の寫眞を見て岡惚れる如く、或は本場所を見ずに新聞勝負だけで晶負角力を造り得る如くである。小生の蔣介石に於ける場合も、大體その邊のところと御承知ねがひたい。

ところで、岡惚れに贔屓があり、贔負角力に勝負番附があると同じで、小生に於ける蔣介石の場合にも、何にか知らの原因みたいなものがなければなるまい。今もいふ通り、共産主義も嫌ひな代りには三民主義なんかも好かない僕である。隨つて國民軍總司令だつたが故に、彼れに力瘤を入れたと思はれるのは近來の迷惑とするところ、第一また、當の蔣介石が、どれだけ三民主義に依る國民革命の情熱を有つてゐたかをさへ知らない。さればと言つて、蟲の好かない張作霖や馮玉祥と喧嘩して呉れたからでもない。實はホンの一寸した小手先きの器用さを感心したのに原因する。

○

今も言ふとほり、支那の革命家（！）を區別するに、共産主義とか三民主義とか、總べてさうした主義的見地からなすのは無意味である。といふのは、單に彼等の日和見的出所進退のみに關係したことでなく、實は斯かる主義的自覺が、彼等の心理をどの程度まで把握してゐるかに對し、先づ第一の疑義を挾むことにも原因してゐる。現に蔣介石の談話として新聞に報道された記事などに見ても、若し新聞記者の低能に原因せざれば、蔣介石自身の頭腦的責任に歸せらるべきものが多かつた。これは贔負の引き倒しに陷らざるため、特に溯つて注意を喚起する次第である。

そんなら一體、彼等の區別は何にを標準とすべきであるか？　十九世紀末のロシヤ思想界の分野が、西歐派と純露派の二つに特色づけられた如く、支那革命家は外國利用派と自國獨行派との二つに區別すべきであると思ふ。

蔣介石はその初め、赤衞軍の正式な軍事敎練を受け歸國以來は自ら革命の將士を養ふべく特殊の士官學校を設け、赤衞軍の敎練をその儘に移して努力したのであつた。當時の彼れは、正眞正銘の共産派と見られ、支那支店長ボローヂンからも無二の信用を受けてゐたやうである。然るに一旦、十分な兵力を涵養するや弊履の如く共産主義と同時に先師露國を棄て、獨力獨行による國民革命の成就を聲明したのである。僕の見る目として、彼れの斯かる徹底した外國利用ぶりは、對手がロシヤだといふ意味ばかりでなく甚だ痛快に感じた。

外國利用といふことは、僕などの持論としても大いに獎勵すべきを說いてゐる。隨つて、東洋は精神文明を特徴とするから西洋の物質文明を摸倣するな、などといふ一派の議論の無益有害なるを主張して來たが、實はさうした當方の心意氣も手傳つて、蔣介石の徹底した外國利用ぶりに感心させられたのである。若し想像にして事實ならば、或る程度まで鳴かず飛ばずにロシヤの御氣嫌を迎へ、卒然として祖國の大事を揭揚するなどは、どうして隅には置けない小手先きの器用さだと感心させられたのである。そして牛を馬に乘りかへる早業で、日本の勢力は善くも惡くも無視されないと知れば、さつそく排日取締りを訓令したり、如何にも生れながらの親日家たる如きステートメンを發したり、實は彼れや此れやの日本の諸氏にも、取つて以つて他山の石たらしめたく思つた程である。

蔣介石にしてもう一と押しの力があるか、又は北軍乃至背後的存在にこれを押し返す力がなかつたら、或は支那も存外に面白い芝居を打つたも知れない。相手は閻錫山に代つても、主は依然たる張作霖が又しても蒸し返へしの喧嘩をやつてゐる當節、殊に彼れの失脚は惜しまれるやうな氣もする。

贔負角力が引退した後は、新聞の勝負附けを見るのと何んとなく張合がない。

情の人蔣介石

清水安三

◇

あんまり出兵に反對した爲めにもう北京に居にくゝなつた私は病に托して、久方振りに日本内地に歸り、暫し支那問題から筆を洗ひ遠かることに決めた。そうして今夏は海邊に行つたが、秋に入つてから山邊をうろつくことにし、秋色をめでむとて奈良の古都に來つた。すると私の宿つた菊水といふ宿に、十月五日蔣介石氏一行が泊り合はせた。

——浪の音、聞くがいやさに山家(やまが)に行けば、またも氣になる鹿の聲——

私としたことが愈々支那問題から逃避することが能きぬ。其處へ中央公論の記者徳永氏が來られて是非蔣氏のことを書けとのこと、愈々もつて再び支那の爲めに禿筆をとらねばならぬことになつちやつた。では一つ蔣介石氏を隣室に訪れて、一筆序に書いて貰つて、それと共に原稿を寄せることにしやう・・・彼は巻紙の端に「救世濟人」と書いて呉れた。これを奈良で逢つた紀念にするでせう。

◇

蔣介石は思想のことが解る人である。その點只の一個武辯ではないのである。田中首相だつたか、「吾人は大に反動思想を排斥せねばならぬ」とやつた。田中にしては感心なこといふと思つて聞いてゐると、どうも話に辻褄の合はぬ合點の行かぬ所が多い。其處で聞いて見ると、田中首相は社會主義や無政府主義をば反動思想であると考へてゐたことが解つたそうな。之に反してこちら蔣介石は少くも反動思想の何物であるか位は、充分に知つてゐるのである。

蔣介石は孫文の三民主義を社會主義の右端に位置せしめてゐる。それも當つてゐる。彼は蘇露の新經濟政策の何物たるかを說いて、「中國は蘇露の如くに、革命の行き過ぎをやつてから、退却せないで、最初から蘇露の踏んだ轍をふまないで行きたいものだ」といつてゐる。彼の講演集を讀んだ誰もが、彼がなかなか思想方面にも、素養のあるのに驚くのである。

◇

蔣介石は實に雄辯者である。少くも演說を好む。去年六月二十五日滿都の群衆に見送られつゝ、廣州を發して北伐の途に上つたのであるが、その折彼は群衆に向つて熱叫した。その告別の演說は餘に悲壯にして、聽くもの一人も殘らず號泣したそうである。八月十四日には午前三時といふ眞夜中に、長州についたのであるが、その時も群る民衆に路傍演說をやつた。九江でも除州でも南京でも彼はよく演說した。

かくいへば讀者諸君はよく喋る奴だ位に思はれやうが、しかしそれは生命かけての仕事であらねばならぬ。實に危險なことである。けれども彼は兎も角もそれをやり切つたのである。私は思ふ、演說する爲めに思想もなかるべからず、熱もなければならず、膽力もいるんだと。此くの如きは曾て支那の如何なる政治家も得爲さゞりし所である。

◇

彼は情の人である。私が曾て九江の行營に彼を訪れし時に、彼に問ふたるに彼は、「自分は先總理の外に敬慕する人なし」といつた。彼が孫文の北京に病むと聞ける時、彼は無理無體に軍を進めて陳烱明討伐を急いだ。その時麾下將士に告げた言葉が振つてゐる。「總理の病氣は肝病である。肝病は怒氣から起る。陳烱明が叛旗を飜した爲めに總理はかつとなつて肝を痛めたのである。故に總理の病は藥では直るまい。陳烱明をやつつけて仕舞へば乾度總理は癒えるに相違ない。」云々といつてゐる。孫文がせめてのことに揚子江まで出たいといつたるが故に彼は、北伐を計劃し、孫文の遺像を奉じて、進軍し攻擊しまた退却したのである。何といふ人情であらう。こうすることが方便といへば云へた、私等はこれは餘程に情の細くないと思ひつけぬ藝當だと思ふ。

彼が曾て敎練を受けし長岡外史のことを談ずる時には目を細うして、「將軍はどうしてゐられるか」といふ。今時の支那人としてめずらしい情味ある人物ではないか。

熱の人なるが故に演說し、情の人なるが故に先總理を忘れぬが、同時に熱情にかられて戀もする。妻を何度も〳〵離緣して戀愛を漁るは如何かと思ふが、凡て人間の長所は短所である。奈良の牡鹿もこの頃では、どろ〳〵になつて、くう〳〵鳴いて居る。宋美齡孃を戀ふ熱情の英雄の心持は、鹿でも解らではないか。古來英雄色を好むと聞いてゐるから。

◇

戀愛問題よりも蔣介石の自ら戒めなければならぬ事は、その獨裁的なやり方である。彼はいつも若い所の小僧の如きものをのみ身邊に置き、ほんの書記位の仕事をさせて、彼は大抵自らやらねば置けぬ性質である。朱紹良參謀長でも誰でも實に若い。もそつと人に委かせねば駄目である。委かせねば人物が集つて來ぬ。尤もナポレオンボナパルトは何でもかんでも獨りでやつたそうであるが、現代ではどうかと思ふ。ウドロウウイルソンを見よ、彼でさえも獨斷に過ぎたるが爲めにうまく行かなかつたではないか。蔣介石たるものこの點大に氣をつけて吳れねば困る。

◇

去年六月廣東東郊で、「嗚呼我將士生死を非にし……」の北伐詩を讀んだ時、彼は二年間には必らず、全國を統一して見せると斷言した。それは廣東市民にとり今猶耳新らし。よもや本人の蔣介石自らは忘れては居まい。

二年間にはまだ十ケ月はある。この間に日本に來つて、牡鹿戀ふ鹿を追ふのもよからう、日本朝野の人達に親しみを感ぜしめて置くのもよからう、しかし乾度再び來るであらう所の機會が來たならば、風雲に乘じて大にやるがよからう。

私は吳佩孚にも逢つた、張作霖も見た。そうして孫傳芳にも逢つた。閻錫山馮玉祥皆知つてゐる。しかし蔣介石はこれらの人物の何れにも增して痛快な男であつた。幾度逢つても印象は實によかつたのである。（十月五日於奈良菊水樓にて）

反革命の徒蔣介石

猪俣津南雄

個人としての蔣介石が如何なる人物であるか、――それは、吾々の問ふ所でない。吾々にとつての興味は、一個の歴史的人物としての彼が、世界革命の進行過程において演じたところの役割にかゝる。

世界資本主義の安定、不安定の鍵を握る支那革命の舞臺に歴史的人物として登場した蔣介石は、革命運動を構成する諸階級の力關係の發展によつて必然的に失脚した。

支那革命は、自由の敵、進步の敵と闘ひ來たつた。敵の一は、支那民衆を搾取し隷屬せしめてゐる帝國主義諸國の資本である。敵の二は、帝國主義と結合して國民の骨までシヤブル軍閥及び一部のブルジョアである。軍閥は政權を握つてゐる。一方、革命的勢力としては、プロレタリアートがあり農民があり、小ブルジョア層がある。更に一部の新興資本家階級があつた。蔣介石は、此の資本家階級を代表した。

新興資本家階級の目指す所は、先づ外國の資本と同等の搾取權を獲得するにある。そこで不平等條約の撤廢を主張した。更に彼等は、新しき支那の支配者として、舊き支配者群に取つて代らうとする。彼等はそこで打倒軍閥を標榜した。彼等の欲する支那は、民衆の欲する支那ではない。彼等自身の資本家的搾取に好都合な支那である。半植民的、半封建的な支那を、獨立的、統一的な資本主義國に改造すること、――とそこに彼等の革命の限度がある。同時にそれは、帝國主義諸國が革命支那に讓步し得る限度でもある。此の一致の故に、帝國主義者は必要あれば、支那大衆の革命運動に對し、支那ブルジョアを支持して之れを反革命の道具たらしめることが出來、彼等は彼等で、帝國主義者及び自國軍閥と妥協し得るのだ。

支那の新興ブルジョアそれ自身は、自己の目的を達成するに必要な決定的闘爭力を有たない。革命の力は大衆のものである。彼等は此の力を利用せねばならぬ。かくて彼等は國民黨の指導權を握らんと努力し、彼等の代表者を蔣介石に見出した。

農民は支那軍閥の直接の搾取下に立ち、軍閥の支配に對する強大な革命的勢力である。資本家階級の勝利は、農民を味方とする時にのみ實現される。しかるに、支那資本家階級の多數は、勞働者を搾取する資本家たると同時に、また農民を搾取する大地主を兼ねてゐる。革命運動が進展し、農民が土地革命に進出すると共に資本家階級は必然に農民を彈壓せねばならなかつた。たゞプロレタリアートのみが農民を支持した。プロレタリアートにとつては、支那革命に限度はないから。

支那プロレタリアートは農民に比して少數であるとはいへ、既に五百萬人を超え、内三十五萬人以上が組合に組織されてゐる。彼等は、大正十五年一ケ年間に、上海のみでも百七十回のストライキを決行し、參加者は二十萬人以上に及んだ。近代的都市に集中されてゐるプロレタリアートは特殊の重要性ある革命的勢力を形成する。支那に喰ひ込んだ帝國主義諸國の資本の直接の搾取と壓迫の下に立つ彼等こそはまた打倒帝國主義の運動の主勢力で

なければならぬ。支那の新興資本家階級は、プロレタリアート特有の階級的鬪爭手段を藉らずして帝國主義の桎梏より解放されることは出來ない。しかるに、彼等資本家階級は、その階級的本質の故に當然に、始めから勞働者階級の革命的勢力の增大を恐れた。

かくして、政治的デモクラシーの運動、國民的獨立の運動が、農民及びプロレタリアートの結成、强化、進出の基礎の上に優勢となればなるほど、蔣介石氏の代表した支那資本家階級は、それ自身の地位を脅かされ、運動から分離し、運動の進展を阻止せねばならぬ立場に置かれた。背に腹はかへられぬ。民衆と共に進んで自身の墓穴を掘つてはならぬ、寧ろ民衆の敵と妥協し、とも〲に民衆の桎梏となつて生き延びるに如かず! ——蔣介石は先づ、國民黨全體を、半封建的ブルジョア的反動の要具たらしめようと努めた。それに失敗した時、彼は、國民黨に對して宣戰を布告した。彼は今や、彼の代表する階級の欲する方向に過ぎざる國民運動に背を向け、軍閥及び帝國主義者と手を握るべく、運動それ自身を分裂せしめ、潰滅せしめることを辭さなかつた。

歷史は、支那の解放を命ずる。此の解放の鬪ひにおいて、ひとり被搾取大衆の力のみが決定的である。かくて、支那解放の必然は、支那プロレタリアート及び農民の勝利の必然である。しかるに自家の利益の爲めに常に國民を犧牲にする資本家階級は、彼等の代表者蔣介石を如何に行動せしめたか? 國民黨中央委員會が發した蔣介石の放逐の聲明書をして語らしめよう。

『故孫逸仙は、國民革命の目的は支那の爲めに自由と平等とを確立するにあることを唱道した。吾々は、内に軍國主義を排除し、外に帝國主義を××しなくてはならぬ。黨の三大政策、——「聯露」、「農民との協同」、及び「勞働者との協同」は、國民黨改組に際して故孫逸仙の聲明した所である。蔣介石は、當時、これらの政策の熱心なる支持者であつた。が、今や彼の一言一行は故孫逸仙の遺囑に悖るものとなつた。』『吾が黨が今時の革命を遂行したのは、吾が民衆の利益においてゞある。——實に、黨は大衆の利益にその基礎を置く。……然るに、蔣介石は、農民及び勞働者を見ること恰ほ敵の如く、彼の行く所として、これら民衆の虐殺の繰返されぬことはない。江西省に(おいては)、黨の本部、農民組合及び勞働組合の事務所等の一擧の破壞、黨員並びに、江西地方のあらゆる部分に亘る農民勞働者の逮捕及び慘殺が起つた。……上海に到着するや否や蔣介石は、帝國主義者と煽動的同盟を結び、民衆並びに勞働者大衆に對して戰鬪を開始した。勞働者ピケットは中央政府によつて合法的權利と見做されてゐるにも拘らず、蔣介石は、勞働者の武裝を解除せしめて之れを慘殺した。』『蔣介石の行動を穿鑿するならば、彼が飽くまでも反革命の徒なる事實が暴露されるであらう。張作霖や張宗昌が敢て爲し得なかつたことを彼は何の躊躇もなく實行した。自身を黨から引離し、且つ民衆から引離したものは彼である。』

革命的民衆を敵とする革命指導者はあり得ない。民衆の革命的勢力の昂揚と共に、蔣介石の沒落は必然であつた。彼を審判したものは、歷史の進行である。

革命家としての蔣介石

長野朗

昨初夏北伐軍が廣東に起り今夏革命の一頓坐を來すまでの國民革命の中心人物は何んといつても蔣介石であつた。此後の彼れが如何なる役割を演ずるかは知らないが、今までになし遂げた所によつて、革命家としての彼れに就いて若干の批判を試みたいと思ふ。

今回の國民革命が革命軍を主體として行はれたため、兵權を握つて居た彼れの活動は最も目立つて見えた。軍隊指揮官としての彼れは、優秀な手腕を發揮した。大正十四年に於ける廣東の平定戰を手始めに、北伐に際しても孫傳芳に對する江西の侵略戰の如きは、敵を頭から呑んでかゝつたやうな、極めて大膽な戰法を取つたのである。戰爭の仕方は實際に巧いものである。軍隊統率者としても蔣介石はかなり好い性質を備へて居る。支那の殆んど凡ての將軍が、部下だけを前線に出して自分は後の方から指揮して居るのに、蔣介石だけは馬を陣頭に進め、士卒に率先して戰ふために、その勇敢な行動は能く將卒の信頼をかち得た。又彼れの軍に臨むや極めて嚴格で一歩も假藉しない。これが又彼れの軍隊が強い一因でもあつた。然し個人としての彼れは非常に親切であると。この嚴格な性質は一方では多くの敵を造り、包容力に欠げたことにもなつた。こゝは孫文とは餘程異つた點で、孫文は惡いことをした男でも、其非をわびれば默つて又收容したため、種々なものが部下に集つたが、又惡いことをする者も續出した。蔣介石はそれと反對に、惡い者はどしどし處分したために、一般に非常に引き締つたが又多くの反對者も出來た。

軍隊指揮官としての素質を備へ戰ひに巧みであつた彼れも、將に將たる點には欠げて居た。彼れは大きな野心と自尊心が强いために、凡てのものを已れの下に屈服せしめんとし、已れと競爭的な立場にあるものにかなり辛く當つた。清濁併せ呑み、天下の英雄を巧に操縱する點は拙いやうに思ふ。從て彼れが[illegible]組織した國民革命六軍を率ゐて戰つて居た間はよかつたが、唐生智、馮玉祥と種々な異分子が飛び込んで來るとどうも巧く行かない。それだけでなく却て分裂にも至つたのである。

革命運動家としての彼れは、大體眞面目である。然して思想的には多少明瞭を欠いで居た。廣東に於ける彼れは先づ國民黨中間派であつた。當時共産黨の國民黨に對する作戰は、右派は極力排除し、左派とは聯合し、中間派は利用することにした。蔣介石の中間派としては、先づ共産黨と結んで右派を排除し次に共産黨を抑へる積りであつたらしい。從て始めは蔣介石と共産黨は巧く調子が合ひ、右派を排斥したが、右派がなくなると共産黨は中間派を倒し、一擧に左派と結んで共産黨の天下を造らんとし、却て昨年春のクーデターとなつた。其後の蔣介石派と共産派は表面協同しながら内面に反目を續け遂に今春に於ける兩派の表面的分裂となつた。蔣介石は嘗東に居た時には自ら三民主義の信徒で共産黨の親友であり、忠實なる三民主義の信徒は又共産主義者でもあるといふやうなことをいつて居たので、或る者は蔣介石は共産黨臭いといひ、或る者は單にロシヤを利用して居ると

いひ、共産黨の連中はケマル・パシャの故智を學んで居るのだともいつた。然るに武漢に進出したまではそうでなかつたが、江西に入り南京に移るに至つて共産黨に對し全く非妥協的となり、無産者專制は勿論、階級爭鬪を否認し勞資協調を説くに至つた。こゝの關係は彼れの思想が變つたのか、それとも始めは共産黨を利用するためにそう云つて居たのか、實際問題に遭遇して變化せざるを得なくなつたのかそれは他人の想像を許さないが、右傾して來たことは事實である。一體三民主義そのものがどうにでも解釋し得るもので、蔣介石は三民主義の極左から極右にまで移つて來たものといへる。然し彼れにはまだ革命的な所が殘つて居るし、軍隊指揮官の中では最も眞面目な方である。從て彼れは三民主義の右翼には立つて居るが、革命家としての生命は未だ殘つて居ると思ふ。

蔣介石は一時支那のケマル・パシャと目されて居たが、それが失敗したのは必ずしも蔣介石だけの罪でなく、支那の國民性がかゝるものゝ出現を許さないのも一つの大きな原因である。專制者としての彼れは或る程度まで成功した。彼れは廣東で最も精鋭な中堅軍隊を造ることに成功し、その威力で廣東全省の軍隊を其統制下に收め、軍隊の力を利用して政權を左右し反對者を彈壓した。次で北伐軍が起るや自ら總司令となつて軍權を一身に集め、總司令部に政治部を置いて占領地域の政治國民黨務を總轄したために、廣東の國民政府はも拔けの殼となり、國民政府の武漢進出が叫ばれ、蔣介石の獨裁制非難の聲が高くなつた。かくて彼れは其郎黨を率ゐて南京に據つたのである。彼れの獨裁制が失敗したのは共産黨との寄合世帶であつたのと、その間に既に間隙が生れて居たのと、彼れが新參の身として一擧最高の職權を得たことが同僚の嫉妬を買つたこと、餘り發展が急速であつたため、充分羽翼を張るいとまがなかつたことが主なる原因であるが、一つは蔣介石が矢張り一般支那人と同じく、自派のもの及同鄕者を餘りに重視し、他の志を蔣介石に寄するものをして失望せしめたことも閑却出來ない。

蔣介石にも種々な欠點はあるが、今日の支那を見渡して見て、國民革命の指揮官として彼れは確かに優秀なものであつた。今にして思へば共産黨も蔣介石が北伐に成功するまでやらせて見た方がよかつたやうに思ふ。お互の喧嘩はそれからで遲くはあるまい。現在の支那は革命一頓坐の有樣で、南北の抗爭は最早國民革命と北方軍閥の爭ひではなく、南北軍閥の爭鬪である。外形は同じだが、昨年と今年では内容は變つて居る。恐らく南方は次第に分裂の形を取り、革命の影は薄れて軍閥の色彩が濃厚になるだらう。この際蔣介石が斷然外遊を試みたのは、彼れとしては適當な處置だと思ふ。今日彼れは實に雌伏の時で、事を急がずもつと確實に進む方が宜いと思ふ。今日彼れが飛び出して見てもどうにもならない彼れのために計れば來るべき新しい革命を捕へるのが最上策ではあるまいか、所が新しい革命として動きつゝあるのは、國民黨左派と共産黨の合同によるもの、國民黨だけで純三民主義の革命を行はんとするもの、共産も三民も支那の國情に合はないから、新しい支那獨特の革命即ち多少無政府主義的な革命を起さんとするのとある。最も力強いのは第一のもので、第三のものは芽生えただけである。この三つの中で、蔣介石がどれを捕へるか、彼れが共産黨との絶緣狀態を續くれば第一のものとは協力出來ないが、そこは支那のことだから何んとも云へない。然し下手に動けば一般軍閥同樣に墮する虞れもある。彼れは未だ將來ありと見られて居るだけ、彼れとして此後の行動は餘程愼重を要すると思ふ。

徹頭徹尾誠意の人

殷 汝 耕

人一人を論ずる事は難かしい。就中、英雄を論ずる事は猶更に困難である。貴社の計畫は私に「蔣介石論」を書けといふが、そんな大袈裟な事は私の立場として出來ないし、又おいそれと容易に出來るものでもない。只、我々同志の一人として常に交遊してゐる關係上、私の知る其の性格の一端、並に國民革命に於ける同氏の地位、聲望の斷片を紹介して編輯者の御希望に代へ、讀者諸子の御參考にしたい。

蔣介石氏が廣東の黃埔の軍官學校を經營してゐた時「親愛精誠」の四字を額に書いてよく學生に示したものであるが、蔣氏の始終口にされる此の四字は、蔣氏自身の性格を最もよく表現するものであると云ひ得るであらう。

蔣氏を知らぬ人は、革命の首領であるからどんなにか峻烈な人であらうと思ふが、さて面接してみると非常な相違で、如何に親しみの強い人であるかは、氏の部下に對する慈愛が證據立てゝゐる。軍官學校の生徒等との間も親子の如く、氏の許に借金に行く者もあり、娘の世話から婚姻の面倒までみて貰つた者もある。或る時部下の一人が軍規に違反して民家の財物を掠めたが、法規として死刑に處するに當り、殘る親と妻子の今後の生活の保障を約して後顧の憂なく刑に就かせ、後毎月その遺族に一定の金額を與へてゐた。美しき插話として氏の性格の一面を語る者であらう。

蔣氏の革命の精神も亦、孫文氏の口にせられたと同樣博愛を基礎としてゐる。三民主義の精神は博き深き人類愛に出發してゐる。共產主義の、物質の爲に鬪爭を主張し、獨裁を主張し、個人の人格を無視し之を機械視するのとは根本からの相違である。蔣氏は此の「愛」を金科玉條として尊び、之に徹底してゐる。

蔣氏の日常を知るものはその絕倫なる精力に驚かされる。每朝五時に起床し、卅分靜坐して昨日の自己を反省し、必ず讀書し、一黨の領袖としての寸暇もない（時には食事すら攝る時間もない）繁忙な仕事に夜の一時二時まで追はれ、そして就床前には必ず其の日の日記を認める。が、徹夜することも稀ではない。これが氏の日課であるが、一日や二日の我慢ならば誰にも出來よう、年中殆んど一日の休もなくこの繁忙さを繰返すことは、普通人の眞似し得ぬ所であらう。

蔣氏は如何なる些事にも、如何なる人にも對するに誠を失はない、如何なる人に對しても誠なき言を發しない。日本の人士で氏に會つた人々の話を聞くも、何れも氏の誠意に感じて居る樣である。

氏は平生無口な人であるが、一旦演壇に立てば其の熱烈な雄辯を以て千萬人の聽衆を魅了しなければ已まぬ傾がある。此は偏に氏の說の一字一句皆至誠を込めた熱烈なる感情の迸りに外ならないからであらう。

氏は少年陽明に私淑し陽明の教に依り心膽を練つて來たので、鐵の如き強固な意志と火の如き熱誠と海の如き博き愛を以て、氏の奉ずる主義一筋に殉ずる人である。

此の氏を同志は如何に見るか。

我々革命の唱道者であつた孫文氏の亡き後、その周圍にあつた同志は澤山殘つてゐるが、孫文氏が生前自分の後繼者として最も嘱

を囑したのは蔣氏である。甞て、孫氏が大元帥となり蔣氏を福建方面に戰はせた時、蔣氏が戰死したとい謀報が孫氏の許に傳へられた事があつたが、其時の孫氏の失望は非常なもので、何萬の軍を失ふとも一人の蔣氏を失ひ度くないと云つた程氏を恃んでゐた。

又、ロシアと提携して國民革命黨の陣容の建直しを計つた時、蔣氏を遣はして其の任に當らせたのもその一例である。

孫氏が、段祺瑞氏、張作霖氏と三角同盟をした時、自身廣東から北京に赴く孫氏の身邊の危險を惧れて、或る日本の同志がその輕擧を注意したが、孫氏は、蔣氏を廣東に殘してあるから心配はない、と云つたといふ。これは、自分の後繼者には蔣氏といふ立派な人物が廣東に置いてある、自分は何時死んでも構はない、自分が生命を賭して事をしても後を心配することはない、といふ氏の氣持であつたらう。孫氏逝いて後の國民革命黨を擧けて內輪の意見の相違、周圍の敵のあるにも拘はらず、今日の革命にまで進め得たのは蔣氏に據るものと云へよう。蔣氏は、自分は只先總理に服從し、如何なる危險に會しても頓着しない、と云つて生命をかけて主義に邁んでゐる。斯くまでに孫氏が囑望した蔣氏に、一般同志が大いなる期待をかけてゐることは考へられよう。その絕倫なる精力を以て廣東の內部を纏め、外部のあらゆる妨害を打破し、革命を今日にまで進展せしめた氏の勳勞を、國民として思はぬものはあるまい。共產黨の陰謀を警戒しつゝ革命を進め、あれだけ跋扈した共產黨を壓して淸黨運動を徹底させたのはそれが全國人の公意でもあらうが、蔣氏の決斷のなす所と云ふべきであらう。今蔣氏は、內部の團結を促す爲に一時下野して精神の休養をしてゐるが、下野に際して各地方に在る黨員からの引止運動は非常な勢で、毎日その電文によつて新聞紙の半面は埋められた程であつた。また其の後、日本に來る前にも政治上の引止運動は可成り激しかつた。一般同志の蔣氏への希望の如何に切なるかが判るであらう。

しかるに蔣氏は今、それを避けて日本に都養に來てゐる。が、それは再び國事を顧みぬのではなく、今日迄幾多の困難と戰つて來たこの革命運動を今度徹底的に完成し得る用意を爲し、再び國民黨員の希望に添はんとし、自らも期待してゐるのであると思ふ。

世間には今迄の革命の進行の間に於ける色色な治績を見、政治外交の見地から蔣氏を非難する人があるが、これは決して蔣氏一人の責ではなく、あの困難な局面の中に一人の意思で極めるわけにゆかない所もある。國民革命程の大事業であるから一人の領袖に萬全を望むのは無理であらう。一般の國民黨員は等しく其の責任を感ずべきであると同時に、孫氏の後繼者として自らも期し一般からも望まるゝ蔣氏としては、リーダーとしての用意も必要とし責任の重大なることもよく知つてゐよう。同氏について世間に流言蜚語はあるが反對者の中傷が多く殆んど信ずるに足りない。が、これによつても氏の勢力の如何に大であるかゞ覗はれよう。

現在支那は四分五裂の有樣ではあるが、思想上では三民主義思想を以て既に統一されてゐる。殘る所は實際の運びだけで、この實際の運びの遲速はそのリーダーの人物如何にかかるのであるから、蔣氏は正に、近く完成すべき革命のリーダーとして最適であり、又それを擔ふべき名譽と共に責任を持つてゐると云へよう。

我が黨員全體は各々其の黨員たる責任を持つて夫々革命の一端を分擔すると同時に、蔣氏はそれ等同志を綜合して、革命の完成の大任を背負つてゐることを自覺してゐるに相違ないと思ふ。

演藝時評

「桐一葉」について

正宗白鳥

私は、坪内博士の「桐一葉」は、二十餘年前の東京座でその最初の演出を觀た。思出の多い芝居である。「書生氣質」が著される前には「小說神髓」に說かれてゐるやうな、新代の小說についての博士の詳しい見解があつたと同樣に、「桐一葉」の執筆されるまでには、新代の戯曲を創始するはどういふ道を取つたらいゝかと、博士はいろ〳〵に研究されてゐたのである。それは「梨園の落葉」などに收められてゐる博士の演劇評論を見てもよく分る。默阿彌櫻痴その他の古今の戯曲に關する丹念な研究が網羅されてある。當時の演劇もいろ〳〵に批判されてゐる。過去と現在を討究し考察し盡くした上で、將來の日本の劇を樹立しようと試みられたのであらう。學者的用意が周倒である。

それで、「桐一葉」が早稻田文學に連載されてゐた間にも、一卷の書として現はれた時にも、文壇の注意は惹いてゐたに違ひない。樗牛全集中の「文藝評論」に徴しても、その一斑は推察せられる。博士のことだから、我々の如く机上の讀物たるに安んじて書かれたのではなくつて、上演意識は充分であつたのであらうが、時代はまだ劇場の作者部屋以外の廣い文壇から新作を求めるほど進んではゐなかつた。片桐且元は團十郎を目標として書かれたといふ風說を私は耳にしてゐる。それから、團十郎自身この新作を傍人に讀ませて、一通り作意を呑込んだあとで、「氣が惡い作だ」と云つたといふ風說をも私は耳にしてゐる。團洲の評語の意味は、私にはよく理解されない。櫻痴の活歷物を演じ馴れてゐた彼れは、「桐一葉」

の脚色をくどく思ひ、作中の人と人との關係をしつこく思つたのであらうか。

兎に角、團菊存生中には、かういふ實演に適してゐる新作さへ、劇場に用ひられなかつた。そして、團菊逝去の翌年、日露戰爭のはじまつた年に、やうやく、當時の大劇場の一つであつた東京座で上演されて、眞價を世に問はれることになつたのである。傳統的歌舞伎劇の二巨星が一時に消えたゝめに、群小が途に迷つて、新意ある脚本を求める氣持になつたのであらうか。本當の意味で文學者の創作が劇場に迎へられたのは、これを最初としてもいゝので、明治の演劇史中の注意すべき事件であつた。

私はかねて朗讀的にこの脚本に通じてゐたのであつたし、劇評をやりかけてゐた時でもあつたので、「桐一葉」上演についての興味は深かつた。二三の重なる役者を訪ねて苦心談を聽いて紙上に掲げたりした。

初日は固唾を呑んで幕々を見物した。そして、豫想外の面白さを覺えた。脚本そのものについては、當時批判の目を向ける餘地はなかつたので、はじめからそのまゝに受入れてゐたのだが、俳優の演技の巧妙さに意外な感じを起した。無學な舊俳優でも、文學者の新作をこんなにまで演じこなすものかと感心した。仁左衛門の且元はことにうまかつた。

しかし、彼れの且元と歌右衛門の淀君とは、彼等一生の所演中の當り藝として、擧げられるべきもので、この「桐一葉」はその後たび〳〵上演された。私も三回は觀てゐる。だが、何年かを隔てゝ觀るたびに、興味は薄らぐばかりであつた。ことに、今度はひどかつた。歌と仁左との老衰の姿は鍛錬された技藝や扮裝によつても隱すことが出來ない。仁左の如きは首を振り〳〵口を動かしてゐるばかりで、臺詞が見物には分らない。私は、多くの見物が分らないなりに、さう退屈もしないで幾時間を忍んでゐるのを見て、知名の歌舞伎役者と見物との關係のいかに盲目的に結ばれてゐるかを、今更らの如く不思議に思つた。新劇團の俳優がこんな風であつたら、見物は我慢しないであらう。

今度の「桐一葉」は、初演の時などに比べると、著しく短縮されてゐる。これは止むを得ないのであるが、この戯曲の

持つてゐる詩美はすつかり取去られて、理窟つぽいところばかりが殘されてゐるやうにも思はれる。花を去り葉を取つて、ごつ〳〵した幹ばかりが殘されてゐる。夢の場でも、華やかで面白い吉野の花見が取去られてゐる。蜻蛉の可憐な情話も、銀之丞の可憐な情話も、すべてはぶかれてゐる。シエークスピアの戯曲から挿話を除いたら、興味索然とする如く、「桐一葉」から挿話を取つたら、「活歴」物とさして異るところはあるまい。木村石川など多くは在來の芝居の人物の如く型のやうな人間で、且元の魂膽だけが櫻痴などの「活歴」よりも稍々複雑である譯だが、それは脚本について熟讀して考へなければ呑込めない。私は今度の上演を觀て、「桐一葉」は、舞臺で觀るよりも、讀んではじめて味はるべきものだと確信した。大詰の「長良堤」は、背景が極めて美しく、百計悉く心と齟齬して、故山に歸臥する且元と、それを見送る重成と、老若二忠臣の生別離は、看客の詩情をそゝる譯であるが、今回は情味が舞臺に漂はなかつた。人生の淋しさを偲ばせる抒情味は、澤田の「シラノ」の大詰の方が、遙かに看客の心に染みた。

初演の折には、「溜りの場」の仁左の且元は、科白とも含蓄のある演出振りを見せたが、今度は味ひを缺いだ。しかし、舊劇の家老らしい面影だけはさすがに留めてゐた。歌右衞門の淀君は、あの特有のくゝみ聲が我々の耳には、とても不快で非藝術に思はれだした。寢所の場の如きは、いやらしくて見るに堪へなかつた。壽美藏の修理はさぞ演じづらいだらうと察せられた。歌右衞門は一種の古典美を持つてゐた役者で、「鏡山」の尾上などは、古名優を偲ばせるやうな錦繪美を現出してゐたが、今はもう藻拔けの殼である。……今度の二老人の所演は、私に取つては、藝術家の末路を見せてくれた點で價値があつたと云へば云はれる。演劇は、刹那の藝術で、ことに肉體を公衆の面前にさらすものだから、末路の感じがことに痛切に響いて來るのだが、「蕭條たる天地の秋の末路」は、他の藝術家にも、歌や仁左の舞臺に現はれる如く現はれるのである。私は自己の身邊が顧みられる氣がした。羽左の重成の滔々たる辯舌を、大向ふが、辯舌の内容はまるで分らないらしいのに、名調子と評したが、私も同感である。彼れと、猿之助の石川伊豆とだけが活動して、見物の倦怠

をいくらか救つてゐるやうなものである。茶道珍柏は原作では飄輕な臺詞を云つて面白いのだが、村右衛門はひどく現代的で、初演の際の髭太郎(?)に及ぶべくもない。左升の常眞は薄汚くて下品だ。彼れだの荒次郎だの、左團次門下の連中は、この芝居には適しない。

「咲亂れた花百合の綺襖」を見ての淀君の述懐だの、「長良堤に秋たけて、一叢薄に風黑く、ありあけ凄き淀川みづ」の如き、淨瑠璃で語られる叙景だの、この戯曲には、日本の傳統的の名文句が豐富に用ひられてゐるが、これを觀るにつけても、二三十年來の文壇の變遷が考へられる。史劇も變つて來た。岡本綺堂氏の史劇によつても、史劇の變遷は推察される。「桐一葉」ほどに評判になつて、幾回も繰返される史劇さへまだ現はれないのだが、拙いものばかり現はれてゐるうちにも、時勢は徐々と移つてゐる。

「桐一葉」から「金看板」にうつると、多くの看客は、肩の凝りをおろして樂々とした氣持になつて、義俠や孝行の人情美に感じてゐるらしかつたが、不朽の人情でも、かうも型の如く運んで陳腐を極めては、人間心理の無氣力さと愚昧さとに愛想が盡きる。……この頃は、文學の方でも「涙ぐましい」といふ言葉が、頻りに目に觸れる。つまり人間の極意は、人情の涙ぐましさにあるらしいので、默阿彌などの狙ひどころもそこなのだが、哀傷の濫費は、我々には甘つたるい餡粉をやたらに口の中に押込まれるやうな氣がする。へどが出さうになる。この芝居でも、羽左の藝が冴えてスッキリしてゐるので、いくらか救はれた。この役者は、舊劇をその味ひを保つて巧みに演じながら、舊劇特有の、默阿彌などにも多く含まれてゐるべた／＼したいやみを離れてゐる。天品である。中車の甚五郎も、今ではこの人以外にこれだけ演じ得るものはないだらうが、私はこの俳優には左程の歌舞伎味を認め得ない。大功記の光秀など近來好評を博してゐるやうであるが、私は感心しない。歌舞伎の型は格に入つてゐても持味を缺いでゐる。ヴイタミンがない。羽左よりも菊五郎よりも、歌舞伎特有の趣味を缺いで、一本調子の「活歴」に過ぎないと私は思ふ。今度の甚五郎でも、久藏の身代りになる決心を

したところから、大五郎から受けた屈辱を忍ぶところなど、いかに、硬張つた乾干びた顏や態度をしつゞけてゐることか。そのためこの芝居がます／＼退屈なものになつた。

一番目も二番目も、短時間に多くの幕數を演じるのだから、幕間が極度に短縮されて、役者も忙しいだらうが、見る方も忙しくてならなかつた。ゆつくり食事をする暇がないのみならず、一服吸つて疲れを休める暇もないくらゐだつた。徒らに多數に見せなくつて、精選したものを適度に見せたらよささうに思はれるが、しかし、多數の見物が暴食主義なんだから爲方がない（十月三日）

菊五郎の舞踊

歌舞伎座見物の翌日、演舞場を見た。こちらの方が出し物の撰擇が遊戯本位にかなつてゐて、民衆を樂ませてゐる。所作事が二幕も續くのは、いくら菊五郎が舞踊の名人であらうとも、少し鼻につく譯だが、陳腐で乾燥無味な新古の狂言の連續よりも、舞踊の連續の方がまだしも、快い銷閑の料となるのである

「江島生島」は新作で、生島の追懷の情緒に、いくらか新意を宿さうとしたものらしい。不幸な境涯にゐて、樂しかつた昔を偲ぶほど悲しいことはないといふ千古不朽の人情に觸れてゐる譯だが、しかし、その感じを見物に傳へるほどの用意は、作風にも演技にもなかつた。見物はただ美しい踊り振りを面白がつてゐるだけである。全體我々の在來の日本舞踊に對する感じは、何を見ても同樣な印象を與へられるのに過ぎないので、ある種の性格の表現などは、どちらでもいゝものと思はれる。そして、新舞踊といふものは、多くは下手な理窟をくつゝけた勞して效なきものゝやうに思はれてゐる。

今度のは、「保名」を連想させるものである。こと更らしい新着想も新演出もないかわり、格外れの不快な印象を見物に與へるところもない。しかし、小袖を引摺りながらべそを掻いて花道を廻つて、揚幕へ入つて行くのは、不快である。

全體日本の舞踊の妙所を傷けないで新味を出すことは極めて困難なことで、坪内博士の「お夏の狂亂」などでも、唄の文句も運びも、在來のものからそんなに脱出されてゐるとは思はれない。「江島生島」の如きもすつかり古い文句の連續である。そして、音樂師社中の肉聲や絃聲には、「保名」を聽く時ほどにも哀切の情緒が漂つてゐないやうに、私の耳には聞かれた。菊五郎は、「保名」を演じた時にも、その氣持を現はさうと努めたと聞いてゐるが、若しも「保名の氣持」が戀に心の崩折れた氣持と云ふのなら、それは何等新味を發揮しようと思はれないらしい、宗十郎の「保名」の方に一層多く見られた。菊五郎は圓轉自在で、美しい形のさま〴〵を現はし得る名人であらうが、春を踊る人で、秋を踊る人ではない。離れ小島に孤影悄然として昔の戀を偲ぶ人としては、あの豐滿な容貌からして相應しくない。さういふ表現には最も不適當な人である。旅商人が出て來て、島の女も大勢出て來て、生島にからんで踊るのは、様によつて枯蘆を描く常套である。音樂も賑かだし、背景も派手であるし、淋しい感じは、この所作舞臺からは得られなかつた。しかし、新味を敢て望まないで、菊五郎の踊りだけを見てゐるつもりなら面白い。

「鏡獅子」も長唄物である。所作事の連續とゝもに長唄までも連續するのは、少し知惠がなさゝうに思はれるが、「鏡獅子」を強いて撰びたくつて爲方がなかつたのであらうか。この舞踊は優美と勇壯美との對照に興味を求めたものであつて、年齒まだ若くして豐滿なる肉體未だ衰へぬ菊五郎は、前後の舞踊の美態を演じ分けるに左程困難を感じない譯で、さして珍重するには當らない。察するところ、この所作事は、團十郎晩年の老衰期に創出されたもので、老衰したる彼れが、少女に扮して邪氣なく踊り、且また花に戯る獅子の勢を見せるといふことに、自己の誇りと見物の驚ろきがあつたのであらう。舞踊そのものに特異のところがあるのではない。

「新皿屋敷」ははじめて見た。大酒の飲みぶりや泥醉の經路の描寫は、日本の劇では珍らしくないので、宗五郎といふ人物に何の興味も感ぜられないが、默阿彌の二番目物としては、常例の如くうまく運びがついてゐる。輔助は次第に上手

になつたが、かういふ役には、もつと凄艷な趣きがなければならない。彼れの愛妾某はお嬢樣然としてゐる。これも、先代菊五郎が兄妹の二役を演じたのが見物の興味をそゝつたのに違ひない。歌舞伎座でやつてゐる「金看板」の書卸しの時、團十郎が俠客と田舍婆との二役を演じたのが興味になつたのと同樣だ。歌舞伎の興味本位はかういふことにまで附纒つてゐる。岡榮一郎氏などが、歌舞伎は今日の文學の規準では律しられないといふ所以である。

演舞場の菊五郎一座に對して本鄕座では吉右衛門一派が、南北物などを演じてゐる。陰慘な味ひを出し得る點では、左團次よりも吉右衛門の方が、南北役者として一層適してはゐないかと察せられるが、私は二日續いての見物に疲れ切つたので、本鄕行を斷念した。中幕の「袖萩祭文」の長つたらしい人情劇には、想像しただけでも、恐れを感じる（十月四日）

ブルジョア、シッペル

築地小劇場で、シュテルンハイムの喜劇「ブルジョア、シッペル」を觀た。友田のシッペルはなか〳〵力を入れて演じてゐるが、「柿の種」や「毛猿」に於て現はした態度表情臺詞廻しをそのまゝなのが鼻につく。何とか工夫はないものか。丸山の鑄金家も、演出振りが型の如き觀がある。汐見には輕快な喜劇美が自から備はつてゐる。

外國の喜劇は演出が困難で、今度のも、小劇場として成績のいゝ方ではない。

しかし、この作とか「ホオゼ」とか、あるひは「空氣饅頭」とか云つたやうな諷刺劇は、日本の現代には當然起らなければならない筈なのに、なぜさう云ふものが一つも見當らないのであらう。陳腐な封建的人情劇に、毎月食傷されてゐる私には、たとへ演技に生硬未熟なところがあつても、この小劇場の外國喜劇の方が、前述の二つの大劇場の封建劇よりも氣持がよかつた。食もたれのあとのタカヂヤスターゼぐらゐの効能はあつた。それに、時間の短いのも有難かつた。三時か四時にはじめて、十一時過ぎまでも、立續けに見せようとする興業者も愚かだが、そんなに見なければ得心しない見物

も利口ではない。

小劇場も今月限りで改築するさうである。三年半の間に、我々にさま〴〵な飜譯芝居を觀せて吳れたこの座に對し、大に感謝の意を表して置く。（十月五日）

春昇氏の「鳥邊山」

今日は讀書の興味も執筆の興味もない。朝から秋雨が降りつゞいて散歩にも出られず、ホテルの內を彼方此方とうろついたり、廻廊の椅子に凭れて、中庭の雨景を眺めたりして時を過してゐたが、ふと、食堂の側の黑板の英字を見て、午后から演奏會の催しのあることを知つた。生田流箏曲の名手宮崎春昇氏の「溫心會」の例會であつた。

私は、少年の頃から、三味線の音色を好んでゐた。上京後も、機會さへあると、努めて、各派の名人の音曲を聽くやうにしてゐた。夢幻の境地に恍惚としたことも少くなかつた。しかし、箏曲には興味はなかつた。音樂上の理論は分らないが、たゞ、三味線は面白くつて琴は面白くなかつた。

近年、今井慶松とか萩岡松韻とか云ふ大家の演奏を數度聽聞したが、私はたゞ退屈を感じるばかりであつた。女のたしなみとして、嫁入前に、「コロリンシャン」の眞似事を覺えるといふ風習は、たとへ斷髮のモダンガール跋扈の今日でも、まだ根深くはびこつてゐるらしく、聽衆は何時も場に滿ちてゐるが、しかし、かういふものが、將來の家庭音樂として、盛況を續けて行きさうには思はれない。

「溫心會」の演奏も、これまでに一二度聽いたことがあつたが、今後續けて聽きたいとは毛頭思つてゐなかつた。ところが、今日は他に適當な消閑の方法がなかつたので、グリル食堂で、食慾のない腹に、簡單な食物を採つたあと、何氣なく、その側の演藝場へ入つて行つた。

數ヶ月間高原に閑居して樂の音に饑ゑてゐる筈の私の耳も、箏曲によつては左程の感銘が與へられなかつた。頻りに眠氣が催された。「川千鳥」とか「蟲の音」とかの名曲も、どうも聞應へがしなかつた。紅葉の「隣の女」の粕壁讓が隣家の美女の琴に合せて吹奏した尺八の曲は、この「蟲の音」であつて、作者は、「草ばう〱たる阿部野の塚にぞ蟲の音ばかりや殘るらん」と、餘韻嫋々と唄ひ收めたらしく、すべて感興ありげな美詞麗句を並べて、一場の光景を叙してゐるが、しかし、作者自身は、かういふ貧弱な管絃樂に陶醉してゐたのではあるまい。小說構成の手段として、琴を用ひ尺八を用ひ、誰れかに聞いて「蟲の音」といふ曲の名を採用したのに過ぎないだらう。

私は、「殘月」とか、「新浮舟」とかいふ手事物に於ては、傳統的に日本人の耳に媚びる哀音にをり〱心を惹かれた。目をつぶつて、斷續する尺八の音を聞いてゐると、嚴丈な石造の演藝場も、秋草離々たる輕井澤の原つ場の一軒家のやうに薄ら淋しく化するのである。

ところで、私は最後に上方唄のうちでも最も有名な「鳥邊山」を聽いた。そして、人類衰滅の唄を聽かされたやうなみじめさを感じた。みじめと云つても、藝術の氣品は保つてゐるみじめさであつて、野卑でもなければ蕪雜でもない。昔へラスの人々が盲詩人のトロイ沒落の唄を聽いた時の感じが思出されないことはない。わが中古の國人が琵琶法師が奏する平家沒落の曲を聽いた時の感じが思出されないこともない。

春昇氏は、箏曲界では三絃の名手であるさうだ。ことに、繁太夫節などの古曲は氏によつて正統を傳へられてゐると聞いたことがある。私は、かつて、その「髮梳」を聽いた。一中節で有名な、「小春の髮梳」にしろ、繁太夫節のそれにしろ、昔の日本人は、よくこんな弱々しい、か細い音色によつて愛慾の悲みを唄つたものだと不思議に思はれた。古い藝術は古いといふことのためだけで鑑賞を價ひしてゐるとは云へ、かういふものは、今日の世では、どうしても酸豆腐である。

ところが、今度「鳥邊山」を聽くと、私の心境に觸れるものがあつた。

徳川の遺物たるいろ〳〵な音曲も、多少でも時代に順應して、存在を續けようと努力してゐるらしいが、春昇氏の古曲は、昔のまゝであるやうに思はれる。他の音曲家のやうに派手にしようとか、機才を弄しようとか企てゝゐるところがない。やがて滅ぶべき運命をもつてゐる古曲を、滅ぶるにまかせて唄つてゐるやうである。緑なす黒髪を梳づりながらの愁歎は、舊日本の女性の情緒をあらはすにふさはしいのであつたが、春昇氏のを聽くと、そこに、色も艶もなかつた。老いさらばうた女の末期の泣聲を聞くやうであつた。「鳥邊山」の心中にも、激情はちつとも唄はれてゐなかつた。「年は十七初花の、雨にしほるゝ立すがた」など、唄の言葉に心を留めると、なか〳〵濃艶なのだが、三絃の音と、肉聲は、枯木寒鴉である。江戸末期のすべての音曲の持つてゐるべた〳〵した情味はないのである。「彈く三味せんは祇園町……の面白さ」を、傍觀する時は、派手な色彩がいくらか施されて、三絃の手は餘分に動いたやうであつたが、それは上はつ面の賑かさで、唄ひ手の心魂は、「茶屋のやましゆの色酒」などに動かされてゐないらしく、そんなものもあんなものも、すべて、枯木寒鴉であつた。若い男女の心中を唄ひながら、かすれた墨色で茫漠摸糊と描かれた繪のやうであつた。そして、どこと云つて部分的に聽衆の耳を喜ばせるところは皆無なのにかゝはらず、全曲を聽終つたあとでは、地の下か何處かゝら洩れて來る人間の泣音を幽かに聞いたやうな淋しさを覺えた。

今の音曲家には、盲人でも、脂ぎつて、會社の重役見たいな顏した人がある。春昇氏は、打見たところは、肉情を脱した古彫刻のやうな顏をしてゐる。音彈もます〳〵枯れて、なま〳〵しさを失つてゐる。

かういふ音曲に、自己の心境を見出すやうな私は、老いたのである。（九月十八日）

思ひ出すまゝに

院展と二科會展覽會を、閉會間際に瞥見した。私は生來繪畫の鑑賞力に乏しいのであるが、かつて、生活のために、新聞の美術欄を擔任して、時々の展覽會について妄評を試みるべき餘儀なくされてゐたので、鈍眼は鈍眼なりに、次第に自己流の見解がつくやうになつた。無論專門家に云はせたら、私の批評などは、すべて見當違ひなので一笑に附すべきものだらうと思つてゐる。だから、ひそかに心苦しい思ひをしながら勤めてゐた美術批評の擔任から解放されて以來は、成るべく繪畫については批評の口を利かないことにした。しかし、記者時代に養はれた習慣がまだ拔切らないで、今でも繪畫の展覽があると、分りもしないのによく見に出掛ける。見ると、昔の癖で、自己流の批判が頭に浮んで來るのだが、それは筆に上さないのみならず、口から洩らすことをも差控へてゐる。いつも默つて他の鑑賞家の所說を聞いて、自己のあやまりを正すやうに努めてゐる。

私が、近年展覽會を見て興味を感じるのは、作品その者の鑑賞に於てばかりではなくつて、いろ〳〵な美術家の榮枯盛衰に思ひを及ぼすからである。二十年前に職業關係から面識のあつた美術家の浮沈の跡を、展覽會場に立つてよく追想することがある。今春朝日新聞社主催の明治大正名作展覽會に陳列されて、ます〳〵その眞價を發揮した「落葉」の作者たる、薄倖の藝術家菱田春草氏や、今度の院展に、「瀟湘八景」を出品して、多くの鑑賞家を驚歎させてゐるらしい横山大觀氏についても、二十年前彼等の風丰言論に接觸してゐた當時のことを回顧すると、一種の感慨が催される。

岡倉門下のうちでも、大觀氏はことに覇氣に富んでゐて、凡庸平坦に安んずる人ではなさゝうであつた。朦朧派と呼ばれて惡罵されてゐた畫風も、次第に洗練されて、その所謂朦朧派なりに大成したのであつた。氏の周圍には多くの模倣者をも生じた。氏の作品は、新日本の優秀なる日本畫として後世に傳へられるであらうと、多くの鑑賞家によつて認められてゐる。二十餘年來、氏の新作を展覽會場に於て見續けて來た私もさう思つてゐる。今度の「瀟湘八景」は、一瑕をも留めずと云つたやうに美しい。以前のやうに衒氣なく匠氣なく、技神に入つてゐると云つていいのであらう。觀てゐて快感を與へられた。

しかし(これは、私だけの偏した趣味に基くのであらうが)私は、大觀氏の名畫に對してさへ、他の多くの日本畫に對すると同樣に、飽足りない思ひをしてゐる。これ等の繪畫は美しいことは甚だ美しい。繪のやうに美しい。神韻漂渺とした無聲の詩であると評してもいゝのかも知れない。しかし、かういふ繪畫を見るたびに、自然の風物は、絹本におとなしく美しく收まるべき、甘い存在であらうかと、私には疑はれる。印度のタゴール翁が、かつて大觀氏の繪畫を評して、宇宙の秘密がそこに潜んでゐると云つたことがあつたが、私には、「瀟湘八景」などを見て、いくら見ても、そこに、宇宙の秘密が感得されさうではなかつた。漁舟があり、小鳥もゐる。しかし、それは、畫面の配置をよくするために手際よく添へられてゐると思はれるばかりで、そこに宇宙の秘密が暗示されてゐるやうには思はれなかつた。峻峰の雪景にも繪のやうな美しいものを見たばかりであつた。私は、先日來輕井澤の高原で、一面の秋艸の野面を見た。月光で煙つた遠山近峰の朧たる美相を見た。そして、繪のやうだと思つたが、繪といふものが、我々の目で自然を見て美しいと思つたと同樣の美しさを、現はすに過ぎないのなら、繪畫といふ者をそんなに有難く思はなくつてもいいだらうと、私には思はれた。

大觀氏のは氏の藝術としては完成してゐるのであらうが、神韻漂渺を目標とした日本の繪畫については、數十年つねに飽足らない思ひをしてゐるのは、私に繪畫の鑑賞力が缺乏してゐるためなのであらう。

院展から二科會へ移ると、まづ薄汚い感じがした。ぎごちない繪が多い。稚拙である。色彩の美しい繪もさう見當らなかつた。神韻漂渺といつた感じや、無聲の詩といつたやうな風流心を起させるものも、あまり見當らなかつた。全部を見終つた後で考へると、二科會の方は、薄汚いながらも生氣に富んでゐて、現代の人心に接觸してゐるのぢやないかと思はれた。將來の日本に傑れた美術が現はれるとすると、かういふ雰圍氣から發育されるのぢやないかと思はれた。在來の日本の傳統的風流心の所産とは違つた美術の出現を期待してゐる私には、さう思はれるのである。

私が演藝時評に於て、美術の事に論及したのは、美術ならこそ、二科會のやうなものでも成立したので、演藝の方面で

は、さういふ傳統に反したものは容易に存在を許されないことを感じたからである。綜合藝術たる演劇に、新生命の發露を求むることの困難を想像した。それとともに、現代の俳優や作者の無能鈍才に想倒した。それよりも、我々が一般の今日の日本の演劇に於て、求むべからざるものを求めてゐるやうな感じを起して、本當の戯曲の鑑賞は、閑窓で獨りで讀み獨りで場面を空想する時にあることを痛切に感じた。これは、私の實感であつて、傍の人が何と云はうとも、私一箇に取つては動かすべからざる眞理なのである。

歐洲近代劇は、日本の土には適しない。日本の劇場に移植するに堪へないと云はれてゐる。しかし、私自身は、日本の土に育つた寺小屋や大功記などを歌舞伎座などで見るよりも、イプセンとかストリンドベリとか、あるひはチエホフ、ハウプトマンなどを、獨りで讀んでる時に、遙かに強い感激を覺えるのを如何ともしがたい。菊五郎や吉右エ門の技藝の巧妙に快感を覺えることもあるが、それは、「瀟湘八景」を觀て、その美を喜ぶ程度に過ぎないので、それ以上のものを感得したことはない。自分は飽足らぬ思ひをしながら、大衆の鑑賞には適してゐると云つて、浪花節見たいな芝居を讃美するのは可笑しい。自己の魂を棄てゝ、自分の身體に他人の魂を宿したつもりで言論してゐるのは、不思議である。自分は面白くなくつても、大衆は面白いだらうと、他人の心に成變つて、芝居を鑑賞してゐる人のことを想像してゐると、私は噴飯するのである。そこらに、心の使分けをしながら、芝居を書いたり觀たりしてゐる人があると思ふと面白い。

私は、歐洲近代劇に感歎してゐるとしても、その模倣を是とするのではない。如何なる樣式を採用しようとも、我々の心眼に感應するやうな新演劇が現出すればいゝのである。歌舞伎の形式を採つて現はれたつていゝ。しかし、舊幕時代の劇作家や俳優の採つた態度から脱却しなければ、劇界に新面目を呈しないことだけは確かである。

新聞で傳へられた噂だから、眞否は疑はれるが、菊五郎は近々實行する筈の洋行に對する感想として、「日本の歌舞伎は世界一だから、西洋へ行つたつて芝居を學ぶ必要はない」と云つたさうである。口先でから豪語するのは面白いが、腹の

中までも、さういふ無反省な己惚れを持つてゐるのだらうと思ふと滑稽である。彼等頑なる舊俳優は、周圍の諂諛に慢心して、自分は世界一の名優になり濟ました氣でゐるのであらう。現代の歌舞伎に安立してゐる俳優から、斬新なる新劇の求められよう筈がない。

小山内薫氏が、今回その愛兒を俳優に仕立てようと決心して、吉右衛門の手に托したといふ報道を、新聞で讀んで、私は、日本の芝居は當分歌舞伎中心で、數十年來一部の新人が渇望したやうな、新劇の榮える氣込のないことを推察した。小山内氏は、最も劇界の眞相に通じてゐる人である。新劇促進のために數十年間努力した功勞者である。今も築地小劇場を主宰して、劇壇に重んぜられてゐる。私なども氏によつて啓發されたところが少くない。その小山内氏が、愛兒の師としては、歌舞伎劇に固定してゐる觀ある吉右衛門を撰び、その羽翼の下で愛兒の一生の藝術を覆翼まうと考へたのは、新劇の前途は不安定で、歌舞伎劇は衰滅の恐れなしとの前提に基いたのではなからうかと推察される。議論はどうにでも云へる。しかし、愛兒の一生の事業を考へる場合には、あやふやに考へてはゐられないであらう。

新派劇が萎靡振はなくなつたのは、藝の拙いためであらうが、二科會の繪畫のやうに、新興の藝術に完成美のないことは憂ふに足りない。新派の頭目達が大役者通有のお大名氣質になりすまして、自足して、自己の藝に慢心してゐたからいけなかつたのではあるまいか。衰微したのは新派劇ばかりではない。先覺者によつて創始されたいろ／＼な新劇團は、殆どすべて倒れてゐて我等の望みを掛けた築地の小劇場さへも危機に瀕してゐると噂されてゐる。そして、歌舞伎系統の芝居が、何等の新意をそこに求むる氣魄もなく惰性のまゝで跋扈してゐる。外國人に見せるためなら、かういふ芝居は、錦繪と同樣に珍らしがられて、結構な譯であるが、我々は、一夜の觀劇を終つて、感激して歸途に就くやうなことは全くなくなつてしまつた。私自身が老いるとともに、芝居や小説などを味ふ力が無くなつてしまつたゝめかとも思はれるが、まうばかりではない。先日、ナポレオンの傳記を讀んだ次手に、トルストイの「戰爭と平和」の日本譯のところ／＼を拔い

て走り讀みしたが、何年か前に英譯で讀んだ時と同様な感激を覺えた。翻譯では文學を正當に味はへないと云はれてゐるが、その翻譯によつてさへこんなに感ぜられるのだから、原作に接したらどんなに驚かされるだらうかと推察される。日本現代の文學を讀んでも、何等かの意味で心を動かされることが無いでもない。

しかし、芝居は詰らない。ことに現在の舊劇が詰らない。今年は隨分芝居も見た譯だが、そのうちで、心に殘つてゐる者を擧げると、井上の「平將門」をはじめ、元日に帝劇で觀た小劇場所演の「休みの日」や、この劇團や新劇協會所演の二三が、自己の心に浸染して面白かつたゞけである。南北物にしろ梅暦にしろ、太功記にしろ、俳優に藝のうまさがあり、脚色や背景も面白かつたが、しかし、それ等の面白さは、院展を見る程度のもので、小山内氏が以前云つてゐたやうな「心の糧」にはならないものであつた。

今のやうでは、大劇場は、我々に取つては、退屈醒ましの遊び場に過ぎないし、何等かの意味で新方面を開拓しようとする劇團は、經濟上の負擔の過重や檢閲制度の苛酷のために、微かな存在をも續けられなくなつてゐる有様だ。ラヂオプレイなんていふ下らないものによつて、新劇團が微々として存在してゐるのはみじめである。みじめさは俳優ばかりではない。戯曲家だつて、二三年來景氣がよさゝうだつたが、この頃新作は裟際振はなくなつてしまつた。谷崎氏は「改造」の十月號に於て、自己の戯曲が意の如く演出された例のなかつたのを歎じて、机上戯曲存在の理由を説いてゐたが、假りに上演に適した新意ある名作が現はれたにしても、現在の如何なる劇團、あるひは、どういふ俳優が、充分に理解のある演出をするであらうか。

明治以來、劇作家も隨分出てゐる譯であるが、實際の劇場に則した成功者と云つては、岡本綺堂氏唯一人であると云つていゝ。この頃は、劇作家協會の力によつて、作者も上演料が得られるやうになつて、表面幾分の尊敬を奉られるやうになつたものゝ、興行者の方では、上演さへしてやれば作者が一も二もなく喜ぶだらうと思つてゐるらしい。だから、興行者

の方で勝手に極めて、準備に掛つて、作者へは事後承諾を求めるのが普通のやうである。少くも私の脚本上演はさういふ順序を經てゐた。私も作家として不見識であつたが、私自身は自作を大切にする氣はなかつたし、上演料も欲しかつたので、大抵は承諾して來た。しかし、他日私にも自信のある作品が萬一出來たなら、さうやすく〱と上演はさせないつもりである。上演の申込みがあると、俳優や演出者などの如何に關はらず、喜んで飛付くやうな態度を見せるから、作者がいくら大言を弄してゐても、興行者に腹の中を見透かされるのだ。

そのかはり、自信のある傑作であつたなら、上演料は座頭の給金並みに要求していゝと思ふ。「星亨」が傑作であつて、その力によつて見物を感動させたのなら、作者中村吉藏氏は、俳優澤田正二郎氏と同額の報酬を得ていゝ譯である。作者が薄謝に安んじることも、興行者や一等俳優達に甘く見られる理由になつてゐるのではあるまいか。

いくら大衆向きを藝術の理想としても、草双紙と同様な歌舞伎が大衆に適してゐると見做されるのは不思議である。早稻田文學十月號は草双紙研究號であるが、これを讀むにつけても、草双紙が今日の一般の讀者に愛好されようとはどうしても思はれない。年少にして、歌舞伎讃美の劇評を書く人もこの頃表はれてゐるが、それ等の多くは、古い劇通の言古したことのはしくれを、言葉だけ新しく、物珍らしさうに云つてゐるに過ぎない。坪内博士の演劇評論集「それからそれ」などを讀むと、今日の舊劇に不滿を感ぜられながら、數百年傳來の歌舞伎藝術に、斷ちがたき愛着を感じてゐられることが解る。私なども、舊劇についてはいつも馬鹿らしく思ひながら、回顧的興味は感じてゐる。しかし、今日の青年にして、歌舞伎芝居の半可通になるやうでは心細い。(九月末日)

荷風隨筆

永井荷風

一　文士の生活も今では年と共に殆一定の形式に當嵌るやうになつてきた。こゝに文士の生活と言つたのは何であるか。則ち現代の青年が專門の學校を卒業した後、世の雜誌新聞に文を掲げ其の報酬によつて生計を營むことを謂ふのである。此等現代の文士はその未だ學業を卒らざるに先立つて、多くは學校内で發行してゐる雜誌または新聞紙に草稿を投じ、其の編輯を擔任してゐる先輩の推擧を待ち、やがて其の後任者となるのが、是れ文士生活の第一歩である。(學校の經營者も教育といふものが今では全くの商業に等しきものとなつてゐる事を意識してゐるが上に、おのれも亦校長とか教授とか或は監事とかいふ各自の地位を踏臺にして、折もあらば他に榮達の道を求めやうと思つてゐるので、第一には學校の廣告となり、第二には學生の氣受をよくするために校内に於て新聞や雜誌を刊行する事を許可してゐるのである。)さて學生にして校内發行の印刷物に關係する事を得る者は、また絶えず機會を窺つて世間知名の文士、或は世の新聞雜誌の記者、或は又書肆出版商に接近し漸次に文士生活に入るべき道を習ひ覺えるのである。

一　文士生活を營むに最必要なるは政治家の政治運動をなすと同じく、常に集團をつくつて勢力を張ることである。是が過去の文士生活とは全く趣を殊にする所である。過去の青年文士は互に心置きのないもの四五輩相會すれば、往々行先も定めず近郊の散策に好晴の半日を消し、歸途牛肉屋か蕎麥屋の二階に登つて陶然一杯の酒に途次獲たところの俳句でも示し合つて、款語するくらゐの事を無上の娯みとなしたに過ぎない。現代の文士に至つては俳諧の一首さへも知名の俳人と

一堂に會して膝を接するに非らざれば之を吟ぜず。一度吟ずれば亦知名の士と其の名を連ねて世の新聞雜誌の紙上に之を掲げることを忘れない。彼等は其の友人の中にたまく一人其著述を出版するものがあれば狼の如く其周圍に集り來つて、某君が某著の出版を祝する事を口實にして宴會の催をなす。其の狀況を見るに彼等同類の文士は發起人となつてまづ其姓名を連署したる往復端書を印刷して之を世の文士新聞記者等の許に發送する。しかも發送先の人は著者とは一面識なきものでも、或は著者の思想とは全く傾向を異にしてゐる者でも、其等には一向に頓着せず、唯一人たりとも多く人を集め、一錢たりとも多く會費を獲やうとする。かくの如き宴會には幹事の當夜飲食店に對して完全に支拂をなさぬもの往々にして有るとかいふ事である。

一　さて斯くの如き出版祝賀の宴會が催されると、彼等同類の青年文士は又別に往復葉書を印刷し、先に出版物を贈呈した文士連の許に之を發送し期限を定めて、かの出版物に對する批評感想錄の如き返書を請求し、之をやがて雜誌に掲載して、著者に對しては、陽に友誼を重んずるがために犬馬の勞を惜しまなかつた事を説くのであるが、然し其實は友人の狂買を借りて隱に同類の名を弘める手段となすに他ならない。

一　當代の文士にして少しく名を成したものは機會ある每に、好んで學校教會等に聽衆を集めて講演會を催す。文士の講演を喜び聽くものは重に男女の學生であつて、平生出版物を講讀してゐるものである。それ故文士輩より見れば是最も大事な顧客である。文學好きの學生は文士に對しては特に尊敬の念を抱いてゐるわけでも何でもないが、唯其の面貌風采を目擊したいと云ふ輕い好奇心を持つてゐるので、之を滿足させるがために講演會に集り來ること、恰芝居好の町娘が俳優の素顏を見たいと切望してゐるが如きものであらう。演壇に立つ文士にして經驗のあるものは既に聽衆の心理を洞察してゐるであらう。然しわづか二三十分間も饒舌つてゐれば謝禮の外に其の日の晚食くらゐは馳走になれると胸算用もする。幹事に對してはどこまでも迷惑さうに不精無精に承諾して置きながら、いざ演壇に立つとなると、聽衆は已れが著述の購

讀者だと思ふので、成るべく前受のよさゝうな演題を擇び、有りもせぬ智慧をしぼつて時々は滑稽な事を云つて聽衆を倦ませぬやうにと力めるのである。かうなつては文士も落語家と更に擇ぶところがない。尤も字典には舌耕といふ古語も見えてゐるから、文士が筆のあい間に舌で稼ぐことも、あながち今に始つたわけでもないらしい。今日では文學講演は文士の定業の如き狀況となつた。聞く所によればラジオ放送所の文士に贈る講演料は一回五六十圓を以て最高の價としてゐるさうである。わたくしは生來訥辯であるので公會の席で講演をする事を好まない。又人の講演を聽く氣にもなつた事がない。講演を聽かなくとも若しその人に著述があつたなら靜にそれを把つて讀めばよいであらう。わたくしは講演その物の多くは無趣味なると共に又會場の光景の殺風景なるを嫌ふのである。又わたくしは日本人の面貌と言語と音聲とはいづれも講義や演說には最も適せざるもののやうに思つてゐる。日本人の面貌は表情なく陰險にして且つ下賤に見えるので聽者に不快な感を起さしめる。其音聲は低くして濁つてゐるのみか、平坦にして抑揚に乏しく、其言語は散漫にして、且無意味なる剩語が多い。一言半句を發する每に必デアリマス。デゴザリマス。ト云フワケデス。といふやうな剩語が反復せられる。暫時聽いゐると、此等の剩語ばかりが耳について他の必要な言葉は聞きとれないやうになる。翻つて文章のことを思ふに、言文一致體の文に於いても心ある詞藝家は筆を乘るに當つては文勢の緩漫に流るゝことを慮つて、成るべくデアルの剩語の反復を避けやうと苦心してゐる。講演に於ては目に見る文章よりも一層此等の注意が無くてはならぬ筈であらう。日本人の面貌は今遽に之を奈何ともすることができない。然し其の音聲と言語とは猶練磨することができる。今日試にラジオの講演について耳を傾くるに、世の講演者にして此等の事について苦心の痕を示したものは未だ一人もないやうである。西洋人の言語音聲は演說に適してゐる。西洋には夙くより即興詩の朗讀が行はれた。また演劇について見るも彼國には長き獨白があつて、而も聽衆を倦ましめない。是に反して我國に於ては臺詞の長きものは伴我對面或は暫のつらねの如きに過ぎ

ない。是亦彼我音聲言語の相違を證する一例となすに足りるであらう。

一　當世文士の副業を擧ぐれば講演の外には色紙短冊の揮毫が行はれてゐる。わたくしも曾て大正七年の頃亡友井上唖々君と個人雜誌を發行してゐた時、出版費の損失を補ふがために雜誌に廣告を掲げ塗鴉を試みて錢に替へたことがあつた。この事が累をなして、雜誌廢刊の後に至つても、わたくしは今だに折々揮毫を強ひられてゐる。當初一時の興に乘じて悪筆を慚る暇もなかつたが、一度び自分は畫家でも俳諧師でもないのにと反省した後は、さすがに心はづかしくて之を再びする氣にはなれなくなつた。況や近頃は依頼者の中にその兇暴なること無頼漢にも等しきものが往々わが身邊を脅すやうになつては、俳句も今は文學の遊戲だと言つてもゐられない。左に二三の例を擧げたのは、其人を誅する意ではない。事實について時勢の變遷と人心の下つた事とを證明する一例となすのである。埼玉縣下の某邑に居住する某氏なる者が一日果實一籃を携へてわたくしの家に來り、短冊二三十葉を出して俳句の揮毫を求めた。旬日を經て其男は以前の短冊を受取りに來た際、歸りがけに更にまた二三十枚の短冊に拾圓紙幣一枚を添へ、重ねて揮毫を請うて去つた。その後幾度となく催促に來たが、わたくしは再びその男の短冊には筆を把らなかつた。そして、二三個月過ぎた後あまり度々催促に來るので、わたくしは拾圓札と短冊とを其儘郵便で返送してやつた。すると其男は一回催促に出京する度毎に往復一二圓の車賃をつかつた。之を計算すれば二三拾圓になつてゐるが、この損害は一體どうしてくれるのか、此まゝには濟まされないといふ意味の返書を寄越した。

一　關西の某市で書畫の販賣を業としてゐる者が或時わたくしの許に來つて短冊に俳句を書いて貰ひたいと云ふ。わたくしは暇のある時書いてもよいと答へると、商賈は其翌日短冊二三百枚を運んで來て、紅黄綠白五彩に分つた短冊に其の赤きものには春の句、青きものには夏の句を書いて貰ひたいといろ／＼な註文をする。わたくしは默々として聞いてゐたが、心中窃にかの商賈の言ふ所は、さながら江戸時代の大名が平生出入扶持を給して置く抱の儒者に命じて詩をつくらせると同

じであるやうに感ぜられたので、わたくしはどうしても筆を把る氣にはなり得なかつた。商賈は頻に前約の履行を迫り、既に國内の諸新聞に廣告を掲げ短冊購求者の募集をした上は、期限までに是非とも書いていただかなければ店の信用にかかはると言ふ。わたくしは之に答へて、然らば御遠慮なく公に向つてわたくしが違約の罪を鳴して損害賠償の法を講じたらよいではないか。わたくしは商賈の奴隷とならうよりは寧ろ懷中の錢を空くした方が遙に心持がよいと答へた。この事件は半歳に渉つて頗紛擾を極めたが、一友人の仲裁を俟つて辛うじて無事に濟んだ。古人芭蕉の句を誦して閒寂の俳味を學ばうとする心と、當世商人の貪欲なることゝを思比べると、今の世に在つては十七字の戯れさへ人には知られぬやうに用心してゐなければならぬのである。

一　森先生の短篇小說に「あそび」と題せられたものがある。「あそび」は官吏にして公事の餘暇文筆を執つて久しく其の名を世に知られてゐる男の、一日の行動を叙述したものである。其男が或新聞社から懸賞應募脚本の選定を依囑せられてゐる。これは其男が平生其身に寸暇もないところから甚迷惑に思つてゐたところであるが、無理やりに押しつけられて已むことを得ず承諾したのである。たま〳〵或日其男は朝餉の際に其の日の新聞紙を見た。新聞紙は懸賞脚本を募集した社の發行するものである。紙上には、其男の藝術を評して殆ど價値なきものゝ如くに斷言した論文が掲載せられてゐた。其男は之を讀んで學問上の公憤を禁じ得なかつた。そして斯の如き誤れる批評を草してゐる筆者と、喜んで之を掲げてゐる新聞社とを同一のものと見做した。其紙上に斯の如き批評を掲載して憚らざる以上には、新聞社は擧つて其の論旨を是認してゐると見ねばならぬとなした。さうなると、かの新聞社は誤れる藝術家に大切な脚本の選定を依賴したわけで、是れ彼我兩者に對して甚怪しからぬ事である。主人公は新聞社から電話で選評の催促を受けたが生返事をしたまゝ懸賞脚本は用箪笥の上に放り上げて遂に見やうともしなかつた。是によつて主人公は纔に公憤の報復に代へたと云ふ。主人公は木村と名付けられてゐる。篇中終りの一節を見るに、「微笑の影が木村の顏を掠めて過ぎた。そしてあの用箪笥の上から、當分脚

本は降りないのだと、心の中で思つた。昔の木村なら「あれはもう見ない事にしました」なんぞと云つて、電話で喧嘩を買つたのである。今は大分おとなしくなつてゐるが、彼れの微笑の中には多少の Bosheit がある。併しこんた、けちな惡意では、ニイチエ主義の現代人にもなられまい。」云々。

一　わたくしは森先生が「あそび」の篇中から、こゝに又左の數行を抄出して置きたい。平生わたくしは現時文壇のわたくしに關する毀譽兩面の月旦に關して常に平なること能はざるものがある。この憤懣は左の數行の文を得て自ら慰撫せられるが故である。「木村は唯人が構はずに置いてくれゝば好いと思ふ。構はずにと云ふが、著作だけはさせて貰ひたい。それを見當違に罵倒したりなんかせずに置いてくれゝば好いと思ふのである。そして少數の人がどこかで讀んで、自分と同じやうな感じをしてくれるものがあつたら、爲合せだと、心のずつと奥の方で思つてゐるのである。」云々。

一　わたくしが三田文學を編輯してゐた頃わたくしに對してのみならず、森先生や上田先生に對しても、野卑なる文字を連ねて殆人身攻撃に等しき事を敢てしたのは雜誌「新潮」である。「新潮」はわたくしが三田文學を去つて二三同臭の士と雜誌「文明」なるものを發行してゐた時までも毎號依然としてわたくしに對して中傷の記事を掲げて止まなかつた。わたくしの事は今姑く言はない。大正十一年七月森先生が世を去られた際、「新潮」は其翌月の誌上に次の如き記事を掲げた。

「森鷗外博士が死んだ。新聞の報道だけを見て居ると、死んだ人は皆な、それ相當に褒められてゐる。生前隨分批難の的となつて居た人間でも、死んだとなると手の平を返すやうに褒められる。人情としてさもあるべきことだ。鷗外博士もヤつぱりその通りである。生前イヤな奴だと思つて居ても、死後その人の逸話や私生活を知ると何んとなく好きになつて來る人がある。ちよつとした逸話にその人の人間らしい面目が見えて、生前の反感が打消されて了ふやうな人がある。原敬だの、山縣有朋だの、出羽の海だのは生前イヤであつたが、死んでから割りに好感を持てた。ところが生前もイヤな奴で、死後も尚イヤな奴がある。大隈だの、森鷗外だのがそれだ。彼等の死後、業々しく報道される彼等の人となりを知れば知

るほど、一層親しみが持てない。鷗外博士は翻譯こそしたが、彼の仕事が文壇に取つてどれだけ意義あるものかは疑はしい。鷗外が翻譯をしなくたつて、馬場孤蝶だつて、米川正夫だつて、誰かが多分翻譯してくれるだらう。それを讀めば十分だ。たゞ鷗外は翻譯の先驅をつけたといふだけのものだ。結局鷗外はお上の月給取りといふだけのもので、彼が死んだことの爲に、文壇は少しも騷ぐに當らないと思ふ。」云々。

一　右の文には署名がなかつた。然し前後の體裁より推知するに、當時新潮社の内部に在つて同誌の編輯をなしつゝあつた者の手に爲された事は明である。わたくしはこゝに於て、雜誌新潮誌上の該記事は文學書肆新潮社全體の是認してゐるものと見做した。新潮社は森先生が六十年の生涯に爲された事業は我日本文壇には何等の意義をもなさぬものと斷定したのである。然るに此如き暴言を吐いた其の舌の根のまだ乾きもやらぬ中、新潮社は同年十一月與謝野寛氏が鷗外全集刊行のことを企つるや、氏に請うて遂に全集出版書肆の中に加つた。森先生は新潮社に取つては死んでも猶イヤな奴ではないか。そして其の著述は何等の意義なきものだと言ふではないか。意義なきものゝ出版に强ひて自ら參加したのはどういふわけであらう。さほどに意義なきものが出版したくば獨森先生の著述のみを選ぶには及ぶまい。新潮社は言行相一致せさる破廉耻の書肆である。翌年大正十二年十一月二十一日に至つて新潮社は店員何某をわたくしの家に派遣して、現代小說選集とか稱する豫約出版物に拙者をも編入したい趣を傳へた。店員はその際わたくしの問ひもせぬのに不可解なる事を申譯らしく言ひ添へた。其の言葉は「中村さんも近頃は大變後悔して居られますから。」と云ふのである。わたくしは今だに何の意であるかを解しない。然しわたくしは先師が物故の際聞くに堪えさる毒言を放つた書肆に、わが著述を與へることは德義上忍ぶ可らざる事なので、一言の下に其の請を拒絕し、且つ店員に向つては重ねて敝廬の門を叩くなと戒めて歸した。わたくしは新潮社に關係する文士、其社から著述を公にしてゐる文士輩は、誰彼の別なく彼の新潮の記事を公平だと是認してゐる者と思つてゐるので、其等の輩とはたとへ席を同じくする折があつても言語は交へないつもりである。宋儒理氣の說を奉ず

るものは明學を入れる雅量はないであらう。わたくしは狷介固陋を以て殘餘の生涯を送ることを自ら快しとなしてゐる。

一　日本の新聞紙に對して、わたくしが憎惡と恐怖の念を抱き初めたのは、猶世間や人情の何たるかをも更に意識しない以前からであつた。今わたくしは其年月を記憶してゐないが、恐らくは明治廿一二年の頃ではなかつたかと思ふ。當時府下の新聞紙中獨り赤色の紙を用ひ、辛辣なる記事を掲げて常に世人を恐怖せしめてゐた新聞があつた。其の赤新聞はたしか蓄妾實例と稱する題を掲げ、記者をして每夜紳士の車に尾行せしめて其の閨門の秘事を訐いたことがあつた。わたくしはまだ小學校に通つてゐた頃のことなので、親しく赤新聞の記事を讀んで之を知つたのではない。當時就學の兒童は父兄の戒めを守つて新聞雜誌を手にしたかつた。さういふものは大人の見るものだと思つてゐたから戒しめられずともさして見たいとは思はなかつたのである。わたしの家は其頃小石川に在つて、博士田尻男爵の邸と杉の生垣をさかひにしてゐた。杉垣は地境の茂つた老樹の下蔭になつて葉もまばらになつてゐたので、わたくしの家の勝手から覗くと、博士が邸内の諸生塾で諸生が讀書してゐるところまでよく見通された。わたくし達は今日の少年の如く球投げの運動を知らぬから、每年十二月になつて紙鳶を揚げるのを野外遊戲の中で最面白いものとしてゐた。紙鳶はいつも諸生塾の庭の木に引つかかつたり其屋根の上に落ちたりした。書生が唔咿の聲をやめて木に攀ぢ屋根に登つてわたくしの紙鳶を取つてくれる。わたしが偶然かの赤新聞の紙上に知名の人の私行が摘發せられてゐることを知つたのは、或日隣の諸生塾で諸生が雜談してゐるのを聞いたからである。何の事だかよくは分らなかつたが、新聞といふものはお金がほしいために、わざと人の困るやうなことを書く。書かれる人よりも書く奴の方が餘程惡いのだといふ事だけが、偶然書生の談話から、深くわたくしの記憶に彫みつけられた。わたくしは其夜父にこれ等の事を質問して、子供が大人の仲間入をして話をするのはよくない事だ。人の話を默つて聞いて來るのは猶更よくない事だと誡しめられた。歲月は匆々として過ぎた。わたくしは既に丁年を過ぎて、文壇知名の二三子に謁することを得た頃であつた。それ等知名の士の中に平尾不孤といふ人があつたが、此の人の私行を訐い

たのはかの赤新聞であつた。市川左團次君が年少くして怙恃を喪ひ志を立てゝ海外に遊び、歸り來つて歌舞伎劇刷新の事業を舞臺の上に實行せんと企てた時中傷の記事を掲げて之を防害したのも是亦かの赤新聞であつた。

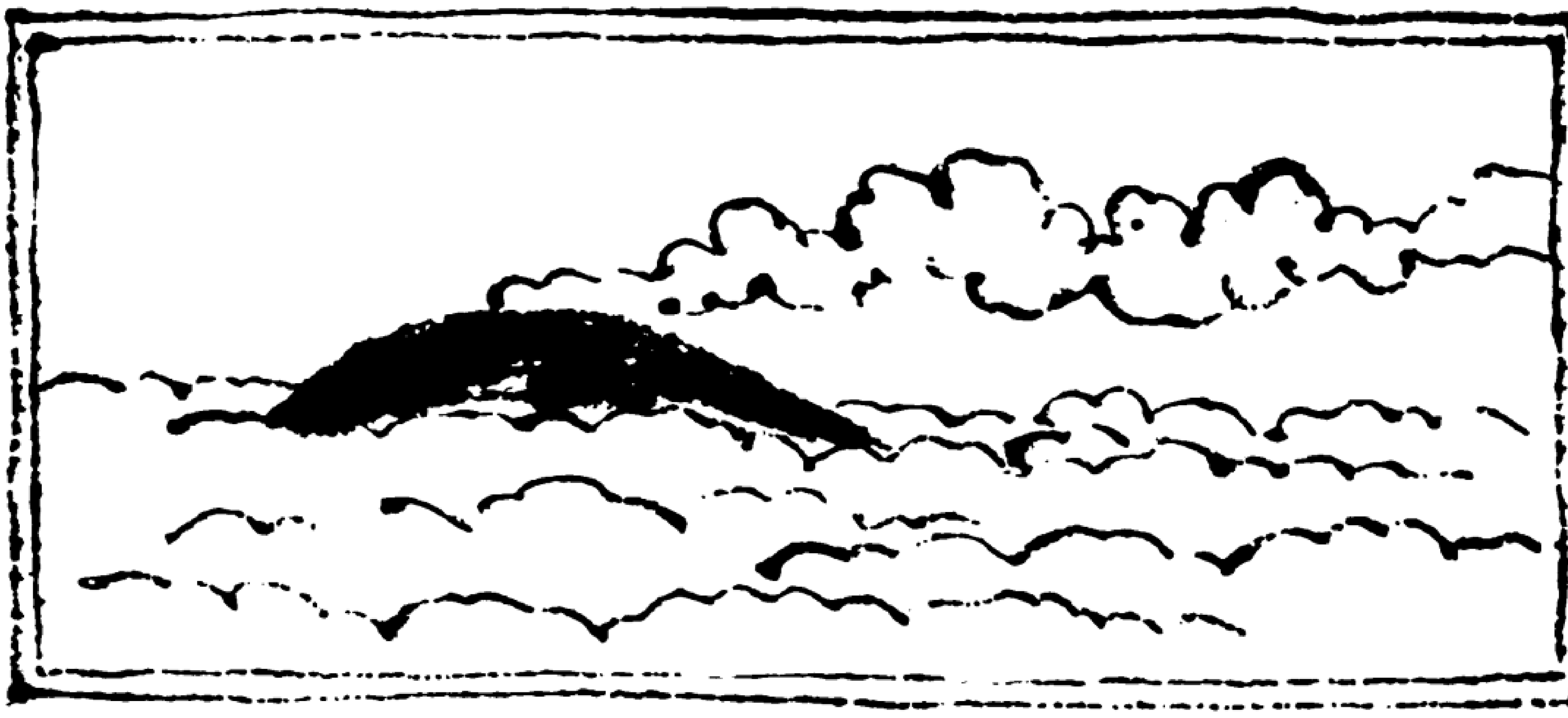
一　世の新聞社は一旦事が起つて、記事の筆者の誰であるかを問ふものがあれば、必これを隱匿して責任を回避しやうとする。其名を署せずして人の非を鳴すは怯懦のかぎりにして又不義の甚しきものである。わたくしが三田文學を編輯してゐた頃である。時事新報の文藝欄に、三田の文科の振はざるは學務を掌るもの丶其の人を得ない爲であると云ふやうな記事が出た。當時慶應義塾で學務を掌つてゐた人は塾監石田氏であつた。氏はわたくしが窃に何人かをして斯くの如き記事を書かしめたものと思爲して其の故を問うた。兩個問答の結果は、わたくしをして直に新聞社に赴き該記事の筆者を捕へて之を石田氏の面前に拉し來らむことを約するに到らしめた。わたくしはまづ新聞社の受付に抵り、刺を通じて文藝欄主任記者に面會をもとめると、やがて鼻目鏡をかけた若い人が出て來て、其の任に當る者だからと言ふ。そしてわたくしの來意をたづね、それでは明日の紙上に正誤を出すからと言ふ。わたくしは記事の正否を訊しに來たのではなくして、記事の筆者の誰なるかを問ひに來たのである。もし足下が之を知らないと云はれるならば、慶應義塾と時事新報社とは特別な關係もあるのだから何等か別の方法を講ずるであらう。わたくしはこの事件を啻に文藝欄だけのことに畢らしめず、紛糾の範圍を成るべく擴大せしめたいと思つてゐると答へた。で、其の日は文藝欄の主任が筆者に代つて詫びをする趣の一札を認めてくれたので、それを受取つて、翌日慶應義塾の塾監に之を呈し、さて此の次はいかなる方法を取るべきかを問ふと、塾監は前日の樣子とは變つて、もうそれほど追究するにも及ぶまいと云ふ。それで、此の事件はそれなり終つてしまつた。

一　新聞社は紙上の記事について人より追究せられることがあると、翌日紙上の最も目に立たない處に細字で正誤の文を掲げて謝罪に代るを例としてゐる。然し一度び世に公にせられた誤報の爲めに個人の蒙つた損害については、新聞社は之を償ふべき道を講じない。恰も裁判所が無辜の民を捕へ來つて之を訊問した後無罪の申渡をして放ち歸らしめるのと變り

がない。國の法律には欠けてゐる所がある。世の新聞紙は怠慢にして愧る事を知らない。之あるが爲に危禍に遭つて泣くものは獨り無辜の民ばかりである。

一　わたくしが新聞紙に拙作の小說を掲げたのは前後に唯二度だけである。前者は福地榎本の兩先生に從つて日出國新聞といふ新聞社に入つた時である。後は夏目先生が東京朝日新聞の文學欄を管理して居られた際である。それ故わたくしは今日では窃に自分だけの辯疏として、わたくしは直接に新聞紙に關係した事はない。唯畏敬する先輩の庇護の下に筆を執つたものだとなしてゐる。新聞紙に筆を執るのは要するに新聞の力を借りて己れの著作を世に布かしめるものなので、新聞社に對して幾分なりと恩義を擔ふことになる。それ故わたくしはかくと心づいて以來新聞紙に筆を執ることは出來得るかぎり之を避けてゐるのである。今日の新聞紙は事ある每に訪問記者を人の家に派遣して意見を叩き談話筆記なるものを作らうとする。然し此の筆記が正確につくられた事は、わたくしの知るかぎり一度も無いことで、いつも記者の隨意にその私見を差加へたものが紙上に公表せられるのである。これはわたくしの喜ばざるところ。從つて記者の訪問を拒絕せんとするには、平生より新聞社の恩義に與らぬやうに心懸けて置くのが、わたくしの取るべき必然の道となるわけである。

一　嘗てわたくしの親友の中に酒癖のよくない人があつた。醉へば必怒を發するが敢て傍人と爭ふのではない。怒を發する時爭ふ相手は必巡査を選ぶのであつた。彼は屢拘留せられた。わたくしは其の醒めてゐる時諄々として其の爲す所の愚劣なるを說き、且つ又何が故に巡査と爭ふのかを問ふと、彼は唯ふだんから癪にさはるからさと微笑するばかりであつた。市中の電車に乘ると、口角泡を飛して車掌と爭つてゐる乘客を看ることは珍しくはない。傍に立つて事件の何たるかを聞けばいづれも爭ふにも及ばない瑣細な事のみである。怒號する乘客其人も心の中ではつまらない事だと意識してゐながら勢已むことを得ず激語を放つてゐるのかも知れない。わたくしの此の草稿の如きも相手のない獨喧嘩の愚劣なること、車掌と路上に口論する乘客の激語にひとしいものであらう歟。



人間事

佐藤春夫

一

「文藝戰線の連中が迎えに来る約束だつたさうだが、来なかつたのは何か氣を惡くしてゐるのぢやなからうかね

私が言つたのに對して村松は答へた。

「どうして？何もそんな筈はなからう」

「うん、理由はないが、でもそんな氣がするな」

私は、昨日の朝、停車場で我々が田漢を迎へて歸る時、別れ際の彼等の沈默中には、何か特別な表情があつたやうな氣がしたのを、ふと思ひ出したのであつた。

「そんな事は何もないだらう」村松は無雜作に答へた「今日が初日だといふの

だから、取込んでゐて、きつとあの連中もいそがしいのだね」

私たちは話しながら、改造社の方へ歩いてゐた。天氣癖で、朝のうちは晴れてゐたのがまたしても小雨が降り出した。その小雨を冒しながら我々が田を改造社へ案內するのは、いつか出した「改造」の現代支那號に田の作品が、紹介されたといふ因緣があるからである。よく氣のつく村松の發言で、いづれ近所ではあり一度そこへも顏を出して置いたがいいといふのであつた。改造社では社長山本實彥は多忙さうに、又元氣に滿ち充ちて見えた。我々が話合つてゐるところへ給仕に導かれてヨネ野口が用談ありげに室に現れた。田はこの世界的に有名な詩人にもお時宜をする好機會を持つた。我々が部屋を出ようとすると、山本は私と田とのそばに步み寄つて、明晚もし都合が惡くなかつたら、田のために小宴を張らうと言つた。田は喜んでそれを受けた。村松も私もお相伴に招かれる約束をした。雨具の用意のなかつた私たちは降りしきる雨を見て困つた末、山本に賴んで彼の新らしい自働車をしばらく借りた。

一たい私は、小說をそこへ發表する契約があつて、報知新聞の社員である。さういふ關係から、私は田の東京見學の第一にまづ彼をそこへ案內した。田と雷とは折から活動してゐた高速度の輪轉機に感心した。全くそれは見ものであつた。瀧帝の水のやうに搖れ溢れながら出來立ての新聞紙が湧き出ては、あとからあとから流れ去つた。この機械はここの社で自慢のものの一つであつた。說明をしながら案內してくれる社員が廊下を步きながら言ふのを私は聞いた——

「我が社は改築の當時に於ては、新聞社として最高の完備を遂げたものでありました。その後になつては、新築した一二の同業の新建築や設備もありますけれど」

その人は、私たちが後から或は既に別の大新聞社を見學してそれと見較べるであらうことを豫想してゐる態度が、私には面白く感ぜられるのであつた。田はこの建物のあらゆる部分を步いてゐるらしく、そこに長い間居た。私と村松とは編輯室で待つてゐたが、それがあまり時間をとるので氣が揉める程であつた。といふのは、私はその日の夕刻五時からは新

潮合評會へ出かける筈になつてゐた。さうしてその時刻にならないうちに朝日新聞社を田に見せなければならない。私は田が飽きてゐるのに社員が熱心と親切とのあまり、方々をひつぱり廻してゐるのでなければよいがと、内心少しばかり心配してゐないでもなかつた。しかし、再び田が我々のゐるところへ出て來た時には、飽きるどころか非常に熱心な顔つきで、今まで見聞を書記してゐたらしい手帳を開いて、改めて彼の記入をもう一度案内者に確めたり、また案内者の親切に感謝して名刺を貰ひたいと申し出たりする程であつた。

報知社を出た私たちはやはりその界隈にある朝日新聞を訪ねた。これが先刻、報知の社員の所謂新築した同業の一つで、つひ三四ケ月前に落成したばかりであつた。新らしい樣式の高層建築の頂きには社旗が折から雨が晴れた雲の斷れ目から夕日に照されて飜へつてゐた。その旗からの聯想ばかりではなくこの建物はどこか巨大な船艦に似通ふたところがあつた。

ここの編輯長の鈴木文史朗と村松とは兼ねて知り合ひであつた。私もつひ先月の新潮合評會で會つてゐた。これに先程、村松は電話でよく賴んであつたので、我々は時間より早く來たのに應接間で待たされる間もなく、鈴木は我々を迎へた。彼は自分が案内になつて、先づ締切の迫つてゐる活氣づいた編輯室を通つて、その隣室にある調査室へ私たちを連れて行つた。この部の壁にはちようど低いパネルのやうにつくりつけになつた藥味箪笥樣のものがあつた。その幾百を數へる小抽斗のなかには、新聞編輯者として後日何か必要を生ずるプロバヴリテイのあるさまざまな人物や題目の記事を、全國のあらゆる新聞紙から切拔いて、これを頭文字の順で整理し保存してあつた。この社ではこの室の仕事にはよほどの努力と注意とを仕拂つてゐると說明しながら鈴木は、この室の主任と思へる人を呼んだ。さうして彼の說明を事實に依つて說明しようとするらしく、

「田漢氏に關する記事はありませんでしたかね」

求められた人は言下に答へた。

「あります」

言ひながら彼は、部屋の隅へ歩を運んで、壁の外れに小箱の列の最後にあつた「假保存」と書いた一つを引き出すと、その中から、手早く小さな紙片をとり出した。鈴木は手にとつて一目それを確めると、直ぐ田に手渡しした。正しく、南京國民政府顧問兼藝術部電影股長たる田漢の入港を傳へた神戸の新聞の人事消息欄記事からの切拔きであつた。田はその機敏で遺漏のないのに感歎する聲を上げると同時に、明らかに少々得意の面持さへ加はつて、それを當に渡して見せ田は愉快さうに言つた——

「佐藤さんのはありませんか」

「あります」鈴木は答へた「無論、あります。いろ〳〵ありませう」

鈴木が答へてゐる間には、その主任はもう或る小箱に手をかけてゐた。すぐさま見つけ出すとそれを鈴木に渡した。鈴木はやゝ大きな一片をひらいて一目見るや、

「いや、これはなかなか面白いのがありましたよ」

「え？」私は多少の好奇心で「何です？」

鈴木は私には答へずにたゞ笑ひながら、それを田に手渡しした。

「やあ〳〵！」田は極度に快活に叫んだ「これは面白い」

私は背延びをして覗きこんだが、一目で直ぐに氣がついた。

「つまらないものを出して來やがつた」

「何？」村松が笑ひながら言つた。

「ローマンスだ――艶つぽい記事だ」

二つ並んだ寫眞があるので、それは田にも讀まぬうちから判つたのであらう。田の聲に應じて村松も覗き込んだが、彼は見覺えでもあつたのかにこ〳〵して見せたきりで別に讀まうともしなかつた。それは三年ほど前のもので私とたみ子との事を書いたものである。それには私の談話として言ひもしないことがまことしやかに書かれてある。私を一かどの享樂兒か何かに仕立てるためには私の言ひ分では面白くなかつたのであらう。たみ子の寫眞なるものは藝者姿であるが見も知らぬ女のもので、當のたみ子とは似ても似つかぬ顔だつた。私は忘れてゐた不快をかすかに思ひ出した。

「そんな出鱈目を熱心に讀んぢやいかんぜ。見たまへ、その寫眞――女の方の寫眞を。その記事も寫眞のとほり出鱈目なのさ」言つてしまつて、私はふつと眞顔になりすぎたやうな氣がした「その記事には、僕は少々怨みがるんだよ、そんなことを言つたといふので、その當座、時々それが家庭の平和を害したものだよ。アハ、ハ、ハ、」

「ハ、ハ、ハ、ハ」

誰かが同じやうに聲を合して笑ひ興じた。

この同じ部屋には寫眞の蒐集もあつた。蔣介石のものが取出された。田には、しかし、この間京都のスタヂオで見て來た活動女優たちのものゝ方が面白いらしい。

私たちはこの室からその隣の圖書室を拔けて、更に奥まつた小さな部屋へ導かれた。私たちはそこに並ばされた。記念に寫眞をとつてやらうといふのである。それは手早く行はれた。その小さな室の壁の一方には、人間の脊より少し低いぐらいの高さの棚に、方一尺に足りない程の箱が三重に重ねられて長く列つてゐた。説明によると、それは各の寫眞記者のひとりびとりの爲めに一切の用具を一揃づつそこへ用意させてあるのださうである。説明されながら扉を開かれた次の室は暗室であつた。池のやうにたたへられた現像液の上には赤色の電燈が映つてゐるその中で、今のさつき寫されたばかりの

私たちの寫眞がもう映像を現はしかかつてゐた。栓一つひねると別の液體が流れ出したり、變つた光線が必要に應じて直ぐに造られたりして、この大きな建物のなかの妙に奥まつた小さな室は、さういふものを見なれない私のやうな人間の目には、別世界と言つては大げさすぎるが、少くとも探偵小説の一場面ぐらゐには珍らしく面白かつた。

「何しろ、今日の新聞紙にとつては、寫眞は多くの場合最も雄辯なニュウスですからね。その方面には、この社でも極力注意をしてゐるつもりで。この間もウヰンから新聞記者が視察に來て、この部屋を見せると非常に驚いて歸りましたよ——ヨオロッパでも見られないさうです。アメリカは別として……」

かういふ説明を聞くと、感心する人は我々田舎者ばかりでも無いと見える。私たちが第三番目の小室へ進んで行つた時には、我々の寫眞はそこではもう大きく引き伸されて燒きつけられてゐた。やがて洗はれると、大きな廻轉する筒になつた機械の上でまはりながら、送られる風によつて乾かされるのであつた。十分とは經たないうちに出來上つた寫眞を見ると、今までは言葉が判らないままにただ默々と皆のあとについて歩き、人々と顏を見合せた時には愛敬笑をして見せるより藝のなかつた富は、まつさきに例の無邪氣な大きな目を光らせて驚き、それから太い聲を出して子供のやうに歡聲を擧げた。

私は新潮合評會の時間におくれるのを案じた。そこで建物のもつと高いところを見物しようとしてゐる一同とはエレベータの前で別れた。あとは彼等を村松が、築地小劇場で開かれる前衛座へ連れて行つてくれる筈である。

二

私は東京會館といふところは不案内である。玄關には制服をつけたギアルソンがゐたけれども、彼はそこへ乘りつけた自働車の扉をあけるために出て行つて歩いて來た私には目もくれなかつた。私は、まだ明るいのに電燈のともつてゐる大

きな階段を、不安心ながらひとりで二階へ上つて行つた。きよろ／＼してゐる芥川龍之介が私を見つけて聲をかけた。彼は手を洗つて來て廊下へ出て來たところらしく、兩手でハンケチを持つてゐた。近ごろの彼には珍らしくモオニングを一着してゐる。私はいきなり彼に田の噂をした。私は芥川が田と面識があるものと思ひ違ひしてゐたからである。田は以前、歸國する當時、芥川に會ひたいといふ意志を私に洩したことがあつたので、私は田のために芥川へ紹介狀を書いた記憶があつた。私は田が私の紹介狀を使用したものだとばかり思つてゐた。しかし田は芥川には會はずに歸つたものと見える。

「さうか。さういふ因緣があるなら、僕も會ひたいものだな。君のところに居るんだつて、それぢや一つ僕の方から敬意を拂つて訪問するよ、そのうちに。」さう芥川は氣輕るに言つた。

「ところが、田はさう長逗留をしないのでね。二日の船で歸るのだが、これまでにまだ京大阪で二三日はゐたいやうなことを言つてゐる。するとせいぜい二日ぐらゐしか居ないわけだ。時間があれば、無論、こちらからつれて行くがね。――それよりは、さうだ、明晩、改造の山本が、田や僕を御馳走すると言つてゐるんだがね」

「そいつはいゝ」芥川は元氣よく半は道化けた口調だつた「そいつ、一つ、ついでに俺を招ばせろよ。君、一つその事を報告して、かけ合つて置いてくれよ」

「よし、ぢや今直ぐ電話をかけよう。無論、喜ぶよ。山本も、田も」

「さうして、誰よりも最も俺が喜ぶさ」

廊下の立話はこれで終つた。私は電話をかけなければならなかつた。しかし、私は絶對にこの文明の利器と對話する術を知らない。知つてゐても、何だかそれを潔しとしないのだ。つまり僕は電話ぎらひだ。それに、どうせ、たださう傳へさへすれば先方は承知する電話なのだから、私は人を捜してその人に賴んで電話の代理をして貰つた。

室へ這入つてみると殆んど頭が揃つてゐるやうに見えた。私は二十分ばかり遲刻してゐたのである。しかしこの會の主

人たる中村武羅夫は人々の顏を見渡してからまだひとりふたり待つ人があると言つた。私はその間、芥川のとなりの椅子に腰をおろした。見ると正宗白鳥が卓の向側にゐた。私はこの人と少し見界を異にしたことがあつて、二ケ月ほど前から文章の上で議論を應答してゐた。私は相手がえらい先輩だといふので、反つて我武者羅に言ひたいだけを言つてゐた。殊にその數日前に發賣された雜誌にある文章がわれ乍ら最も無作法だつた。私は論敵たるこの先輩をまのあたり見ては、言葉をかけなければならない氣がした。

「文藝時評では失禮をして居ます」

「いや……」

相手は溫かな、むしろにこやかな調子で受取つてくれた。この人の文章の冷たい肌ざわりとは違つて、そこに長者らしい溫雅なものがあつた。

私は無意味に芥川を顧みたが、ふと彼のネクタイが目にとまつた。白い繻子のやうな細い絹の上には小さな蝶が繡ひ出されてゐる。その下には綠の葉や紅いの小花がチョッキの胸から半分出てゐる。

「ひどくロマンテックなタイをしてゐるね」

「いいか」芥川は煙草をくはへたままで「支那の布だよ」

それは聞くまでもなく判つてゐたが、私は彼がいつに似ず若々しく氣取つた風をしてゐるのが賴もしかつた。

「面白いよ」

久米正雄が赤い顏に少し汗を浮かせながら、氣ぜわしげに這入つて來た。今着いた汽車で鎌倉から出て來たのださうである。さう言へば汽車のひゞきはこの室の窓へもひゞいた。

* * * * * *

當代の若い政治家や、又社會運動家も加はつたこの會合の模様をここへ描寫することも風俗史的には無駄ではないだらう。けれども私には、今その餘裕がない。ただ一つ會の終りに近づいた頃に中村武羅夫が都河龍と鬪した意見が私には面白かつた。中村が、一たいに文學雜誌といふものは努力して見ても賣れないといふ時代の傾向があるといふのに對して、都河は、それは時代の傾向とは何の關係もないことで編輯に新機軸さへ出せばもつとずつと販路が擴められるといふのであつた。枝葉の問題であつたし、それに互にそれ以上には發展させようもなくさうかと言つて協定のしようもない各の意見を、熱心に、半時間ばかりも戰はしたのである。私が面白いといふのは各のその意見そのものではない。それは正直にいふと寧ろ退屈な押問答だつた。ただこの論者のひとりが文藝雜誌編輯の當事者であり、これに反對する者は、文藝雜誌でこそはないけれども當時最も賣行のいい一婦人雜誌の發行者としてその編輯に新機軸を出したと自負してゐる人物であることを考へ合した。私が面白く思つたのはこの一事であつた。彼等は熱中的な性格の人ではあるが、もし彼等の立場がそれぞれにさういふ位置にゐなかつたとしたら、この論題は多分もつと早く切り上げられたらう。彼等は無意識にか或は有意識的にかは知らないが、ひとりはその責任と又ひとりはその自負と、それによつて互に彼等は自我を辯護したり主張したりしてゐるのである。私は人間の一切の主張や論爭の雛形を今見てゐるのだと思つた。それは眞理の探求や合理の追求のためにのみ熱中してゐるのでは決してない。さうしてすべての議論に於て、それはさまざまに變裝してゐるけれどもすべての議論者は、中村でなければ都河なのだ。さうして今眼前の、中村と都河とは論旨も態度も單純なものであるだけに雛形としては一層價値があつた。私は生きてゐる象を、その中に見出して、心中で「面白い、面白い」と叫んだ。

その議論をやつとみんなで引分けて會は果てた。

歸り際になつて、この建物の玄關口で、芥川は私と一緒に車へ乘らうといふ。ふたりでどこか同じところへ行くのかといふとさうでは無い。それぞれに家に歸るのに同じ道筋だと彼は言ふのである。彼は田端へ、さうして私は小石川のそれも目白に近い方へ行くこの二人を、彼は「同じ方角ぢやないか、道順だよ。君の乘るやつへ乘せろよ」と言ひ張るのである。時間はまださう遲くはないのだから、もし私は體さへくたびれてゐなかつたなら、彼の言ふとほりに本郷神明をまはつて、彼を家に送つて行つてもよかつた。しかし私は今日は正午から殆んど體を休ましてゐる間はなかつた。

「さうか」芥川が言つた「それぢや僕が君を送つてまはり道をしようよ。それたらいゝだらう」

「それぢや、さうしてくれ給へ。いいとも」

芥川は私がさつきから乘り込んでゐるその車のなかへ這入つて來た。大塚に歸る片上伸は、これは芥川にくらべるとずつと私の道順に違ひなかつた。そこで片上も同車した。

車のなかで私は正宗白鳥のことを思ひ出した。私はその人柄と作風とがどうも相似てゐないやうな氣がして、人と作とを別々に見ればそれぞれにいづれもよく判つたけれども、その作風と人柄との關係が判らなかつた。――この事は白鳥自身でも或る書物の卷頭に書いてあつたやうに思ふけれども。私はその事を思ひ出すと一緒に口に出して言つた。

「僕にはよく判るな」芥川は答へた「あの人は怖いのだよ――人生が怖いのだよ。根はごく氣の弱い人なのだ。だから身を守つてゐるんだ。つまりあの人の攻勢はごく消極的なものなのだ。臆病な犬が吠える道理で、あの人はだからいつも人生に對して白い牙を見せてゐるのだ………」

「それを僕が、强いから攻勢を示してゐると思ひ込むので、判らなくなるのかな」

「さうだよ、何かそんな錯誤だね」

片上が何か芥川の說にちよつとした異論をした。

車は江戸川橋の手前まで來た。私は片上に別れを告げながら、芥川に私の家へ立寄ることをすゝめた。私はこの冬、また江戸川附近にゐた頃、芥川が夜の三時までも話込んで行つた事を思ひ出し、また今日、どうしても私と同車しようと言つた彼の態度のなかに矢張りひとりになることを淋しがつてゐる彼を見出してゐたからである。

「すぐそこなのだから、まあちよつと寄つたらどうだい。今度來てひとりでさがすよりは、こんな序に覺えて置くといいよ」

「うん」芥川は生返事をして「寄つてもいいよ。だがもう遲いだらう」

「僕のところならそんなことはいいよ」

「君ばかりぢやない、僕だつて……」

私は時計を出して見た「なんだ、君、まだ九時半ぢやないか」

「本當か」芥川は急に元氣になつたやうに見えた「本當か。それぢや寄らうよ、一時間ほど。ちよつと君の新らしい家も見て置きたいからね」

芥川は私と彼とに共通な或る友人の噂ばかりしてゐた。山や町や海岸を歩きまはつて空腹になつて薔薇の花を食つたといふのである――彼は氣が違つてゐたのである。その友人のことを芥川はちようど一時間、くどいほどな不思議な熱心で噂しつゞけて、約束の一時間で迎えに來た車で慌しくひとり歸つて行つた。

三

愈々、上海へ旅行することに決めてしまつた私は、そのためには一日も早くその月分の仕事をしてしまはうといふので、例の村井を賴んで、その日も口授を筆記に來て貰つた。それは書きかけてゐる續きものの小說だけれども、失敗をしてゐ

ゐこの作はなか／＼はかが行かなかつた。あせればあせるほど書けない——話せない。それに天氣がはつきりすると同時に急に一時に暑くなつてしまつた。纒らぬ話と暑さとに惱みながら、それでもどうやらやつと油が乘つて來たと思ふと、昨日の約束で、私は「改造」の山本に御馳走になりに行かなければならなかつた。

田は朝早いうちから、「文藝戰線」の同人のひとりが來て一緒に出て行つた。前夜その人たちの演戯を見に行つた田は、今日また彼等の茶話會か何かへ出席するのだと言つてゐた。行がけに改造社で落ち合ふ時刻を打合せながら、田は菊池寛だとか、中川與一だとか、金子光晴だとか、同國人の何某だとか、その外會ふべき澤山の人々を數へて出かけた。菊池は別として、他の多くは上海で知り合てゐる人たちであつた。

改造社へ行つてみると、田は雷と村松ももう一緒になつて社長室の長椅子に三人並んで腰かけてゐた。山本はまだ用務が濟まないので事務室にゐるのださうである。三人は暮れかかつた大きなビルデングの隅の物音もひびかない一室に少ししよんぼりしてゐるやうに見受けられた。話好きで、いつも人の顏を見さへすればいきなり何か言はずにゐられない田が、今日は私が來たのを見ても面白さうには話しかけなかつた。さすがに元氣な彼もくたびれたのだなと私は思つた。私のその氣を見てとつたらしく村松は言つた。

「田君がねえ、君。けふ文藝戰線の連中と議論をおつぱじめてね、面白いんだよ、顏を赤くしてやり合つたのさ。ハ、ハ、」

「へ？何だつてまた？」

「まあ、何だね、その、連中は田君が君のところへ泊つたといふのが氣に入らないのだね。——佐藤のやうなブルヂョア作家の 美善を盡した邸宅などへ納つて、とまあかういふわけで、君を同志と思つてゐたのに全く我々は裏切られた。我々は君はてつきり我々同志のところへ來るものと信じてゐたのに。——なんて言ひ出すものだから、田先生がまたやつ氣に

なつて、吃り吃り、佐藤氏とは東京での一番の舊友だとか何とか言ふけれど、先方はそれでも、主義の爲めには舊友がどうしたとか、先方はそれこそまるで單純至極なんだ。まるで田君はいぢめられるために呼び出されたやうなものでね。ハハハ、ハ、」

田のふさいでゐるのが私にもやつと了解できた。神經質な彼にはその論爭の酒滓がまだ、心に殘つて居るに違ひない。

「ハ、ハ、ハ。善美を盡した邸宅だつて、大笑ひだね——昨晩は、芥川が來て、久米の借家の文化住宅よりは多少いゝな、と言つて行つたぜ、尤も一軒の家の見方でもさう違ふところに、ブルヂョア作家とプロレタリア作家との相違があるのかな」

私は笑つたが同時に輕い憤りと淋しさとを感じた。私の憤りはものゝ解らない狹量なまたいつも自分だけを正義と思へる虫のいゝ人種に對するものであつた。私が自分に相應したぐらゐの自分の家を一つ持つためには、自分の舊友の一人をあそこへ迎へることが出來ないといふそんな世界が、我々の新らしい世紀の曙光として現はれてゐるとすれば、一たい夜があけたならば果してどんな日が來るのだらう。それにしてもさう單純に信念を持つて單純に行動し言論出來るといふ人々のその疑ひのない生々とした心持を考へると、私はさういふ仲間になれない自分をさびしいとも感じた。私は一瞬間、不愉快な氣持になつた。

「芥川君が今晩來るつてね」村松は自分で言出した話題をとり換へたいらしく「いい都合だつたねえ、僕も久しく會はないのだから。それからさうさう、忘れないうちに言つて置くがね、好都合と言へば、武者小路君が明日の靈山水樓で田に逢つてくれるといふのだ。先方でも何か田に頼みたい事があるさうでね。僕は電話で頼んだのだが、いい具合だつた。君も一つ、その席へきてくれたまへ」

足音を響かせて山本が這入つて來た。腕一ぱいの大きな折鞄と帽子とを持つてゐた。

「ヤ、ヤ。失敬しました。サ、行きませう。大へん失敬しました。」

「芥川が」私は立ちながら言つた「來るんですがね」
「え、もう來てゐられるですよ。社の上村と會場へ行つてゐるんです」
「會場つて　どこです？」
「え？、上村、あなたがたにまだお傳へしてゐませんか。何してゐるんだ、上村は。マア、御一緒に行きませう。え、すぐ近いところだから」
　赤坂の或る旗亭であつた。果して、芥川はもう來てゐた。今日は昨日のモオニングを脱捨てて、夏羽織に袴まではいて、それに初夏らしく腰からは白扇をとり出した。芥川は笑ひながら自分の衣物をつまんで言つた。
「これ、何だか知つてゐるか。わからないだらう。泉さんをして坪いくらするかと言はせたものだが、一反六圓也だ。支那麻だよ」
　泉さんといふのは鏡花のことである。
　田は芥川に「支那游記」の支那文壇に於ける好評などを話してゐる。芥川はその受け答へには、支那などといはずに中國とかお國とか言つてゐる。
　四五人の藝者が來て酒が運ばれた。雷が言葉に通じないのが、女たちにとつては思ひがけない座興になつた。雷は何を言はれてもただにや／＼と笑つてゐるより外に方法はなかつた。女たちはそれを同情したり笑つたりした。
「全くだよ」村松は言つた「我々だつて、言葉のわからないところへ行つてごらん。まさか怒つてはゐられないから、薄馬鹿見たやうにあやつて、笑つてばかりゐるのだ――覚えがあるよ」
「本當に愛嬌があつていいわ」ひとりの女は言ひながら立つて雷の前へ座つた「お相撲さんみたようだわね」
「おや」山本は道化た聲で叫んだ「こいつおれの色女のくせに氣が多いぞ」

「いいわよ、わたしこの方大好きですよ――ね、どなたかさう言てみて頂戴よ」
「言つてみて頂戴といふ奴があるか」
田は女の言葉を雷に通じた。雷はこつこつ御馳走をついてゐた箸を休めて、前に座つた女を改めて眺めながら、相變らず笑つて両手を合して拜んだ。
「あら、拜んでゐるわよ。ホ、ホホホ」
「雷さん。東京の印象はどうですか」
山本の言葉を田が通じた。雷の答は田からみんなに斷かされた。
「いいところです。第一に文化がいゝ。第二には女がいゝ。第三には友達がいゝ――とかう言つてゐる。雷さんなかく外交辭令に長けてゐる。きつと今度歸つたら南京の外交官にでもなるつもりでせう」
「ハハハ。それで藝者はどうです」
「なかく美しい。でも、髪を斷髪にしたらもつと美しからう」
雷の返事は全く奇想天外だつた。
雷はなかなか飲み手であつた。銚子を出すと一々手を合して拜んでから、それを受けた。それをさつきから見てゐたのであらう。いつも默つてゐる若い妓がひとり、田に質問をした、
「お兄さん、支那ではみんなお辭義の代りに手を合して拜むのですか」
「そんなことは無いのです」田は説明した「たゞ、この人だけ別です。この人、坊さんであつた事がある。それで拜むのです。この人の癖です。普通の人は支那でもあんな事しない」
「お坊なのですか、この方」

「いゝえ、今、この人、軍人さん。少將です。もとから軍人。この人强いよ」
「ね、君」私がその話のなかに雜つた「一たいナイさんは、どうして坊さんになつたのだつて？　この間の晩それを聞かうと思つてゐて忘れてゐたが」
「それね、それちよつと面白い話ですよ」田はさう前置きをしながら、聞き耳を立ててゐる女たちにも解るやうに簡單に話し出した。

*　　*　　*　　*

さう、もう十年以上も前、雷震はその當時もやはり軍人だつた。湖南の或る町を守つてゐた。裏切者がでて町は思ひがけなく圍まれた。敵は四方から取圍んで袋の鼠のやうにして置いてから、使をよこした。降參をしなければ町を燒くといふのだ。仕方がないから降參することになると、その時の條件で、その町の大將たる雷は敵のところへ行かなければならない。行けば殺されるに決つてゐるけれども、降參をした以上は敵の陣へ行かなければならないし、降參をしないことにすれば町は燒かれた上に無論町全體の人と一緒に雷も死ななければならないことになるだらう。決心をして雷は敵の中へ連れられて行つた。果して雷は殺されることになつた。雷は覺悟をきめて座つてゐたが、それにしてもどんな奴が自分を斬るのかと思つて、後に刀を用意してゐる男をふりかへつて見た。ところが、ごらんなさい、雷の目は人並よりずつと大きい。それが精神をこめて力一ぱい睨んだものだから、刀を持つてゐた人間は、雷のこの樣子を見ると、氣味が悪いと言ひ出した。それから誰も雷を斬らうといふものはなかつた。それでは鐵砲で殺さうといふので今度はその用意に取かかつた。そんなことで手間のかかつてゐる間に、そこへ雷の手兵の中の强い者たちが一隊になつて、自分たちの大將を助けに來た。不意を食つてうろたへてゐる敵の中から雷の部下は雷を助け出して一緒に逃げた。逃げたのはよかつたけれども、その代

り彼はその後で町は敵のために襲はれてしまつて、雷の妻子はこの騒ぎの間に行方が知れなくなつてしまつた。多分は、雷の身代りに敵の爲めに殺されたらうといふことに決つてしまつた。すると雷は非常に悲しんでお寺へ行つて坊さんになつてしまつた。二年半ばかり坊さんだつたけれど、その中に細君も三人の子供も生きてゐたことが判つた。やはり雷の部下の兵卒が、機敏にその町から助け出して細君の實家へおくりとどけてゐたのである。さうしてそのことを便りしようにも、軍事時代ではあるし、そればかりか雷がひとりで家を出てしまつて行つた先の寺が知れなかつた。そんなことで、それだけの月日の間、雷は坊さんになつて生きてゐる細君や子供たちを、死んだものと思ひ込んで後世を弔ふてゐた。しかし、一たん、妻子が生きてゐたことが知れると、雷は、それぢや坊さんになどなるのではなかつたと言つてまた還俗した……

* * * *

田はかう話して聞かせたが、案外誰も面白がらないのでつけ加へた。

「まるで日本の人が聞くと嘘みたなやうな話だけれど、本當の事で支那には今でもこんなことがよくある」

田がさう説明をしても、それでもまだこの話は我々の誰にもさう實感を起させなかつた。人は自分の身邊に天才がゐることを信じないやうに、自分の目の前に坐つてゐる人間にそんなロマンテックな出來事があつたとも思ひ込み難いのである。しかし田の折角の説明に對して何とか言はなければいけないと思つたので、ひとりの女はまるでお伽噺を評するやうに言つた。

「まあ、奥さんや子供さんが生きてゐたからつて折角なつた坊さんをやめるなんて、現金だわね」——

「いや〳〵、さうではない」芥川が言つた「なか〳〵人間的で面白いよ」

「諸君は」私は言つた「一たい、その人を、お相撲さんのやうな豪傑を殺つたと思ひます。誰でも言ひ當てた人には褒

美を出すよ」

皆は雷を三十一二だと言つた。中には二十九だと言つた者さへあつた。三十九——日本流に言へば四十だと教へても、誰も信ずる者はなかつた。

「本當だとも！もう君たちぐらいになる娘さん——一たんは死んだ者と思つた娘さんさね、それがゐて、來月の四日には結婚式があるんだよ。

「嘘々。この方御自分がそんなお孃さんと結婚なさるんだわ。ね、さうでせう」

雷は自分の事が何か言はれてゐるのに氣づいて、目をパチクリさせてゐた。田の通辯で事實を確めて、雷が眞顔でうなづいたのを見て皆はやつと、驚きながら得心した。雷が一ぺン殺されやうとした人物だといふよりも、何といふ若々しい人だらうといふ事の方が女たちには問題になつた。

醉つてしまつて紙を出されるがまゝに田は幾らでも字を書いた。妻に死別した男がひとり瀟々の夜雨を聞く詩もあつた。女中に額面をと言はれた紙には「好事如夢」と書いた。きつと昨日、山水樓で書いた「好事不常舊遊如夢」がつづまつたのだらう。山本は笑ひながらそれを見てゐたが、女中から何といふ事だと聞かれて答へた。

「子供がたくさん生れてお金がどつさりたまるのだとさ。ハッハッハ」

新らしい紙に臨んで筆を持上げた田に、山本は傍からうまく注意した。

「今度はめでたいのを一つ」

さし出された扇子を受取つて、その持主の顔を見たが、それは一座中で一番美しい若い妓であつた。田は認めた「海上一片月天涯若比隣」

「これ何といふことですの」

私は問はれて答へた「遠くはなれて逢ひたい時は、といふ事だよ」
「その名譯をちよつとそこへ一筆書いてやれよ」
そんなことを言ひながら芥川は、自分ではさつきから突きつけられてゐる寄せ書きにさへ、容易に書かうとはしなかつた。さうしてたうとう仕方がないといふ風に、片隅へ小さく書いた——「夏の月御油より出でて赤坂や。」筆を措きながら、「ね、芭蕉の句と斷つて置かなけりや悪いだらう」などと心配してゐる。ひとりの妓は扇子を差出してどう芥川が斷つても聞入れなかつた。芥川はその代りにと紙を懷紙ほどの大きさに切つて書いてやつた——

あはれ　あはれ　旅びとは
いつかは心やすらはん
垣根を見れば「山吹や
笠にさすべき枝のなり」

四

田はその一日のうちに數個所で三十人ばかりの人に會つた。かういふ慌しい間にも、田はいつの間にか戸塚の家を訪れてゐた。それは彼が七年前に東京にゐた時、そこで後に妻になつた從妹とふたり間借をして、假住居してゐた家である。家主である隱居の老夫婦は、八十程になつてまだふたりとも揃つて丈夫に生きてゐた。小さかつた樹なども青葉が一面に茂つてゐた。田はその老夫婦を見ると、彼自身の身邊ではこの人たちよりずつと若い人間がそれもふたりまで——父とも思ふ叔父と妻と、もうこの世にゐなくなつてゐるのだと思ふと、これが不思議でもあれば、またこの老人たちの生きてゐるのが羨ましいとさへ思つた。その老夫婦は、しかし、田の出世を心から喜んでくれた。さうして彼の妻の死の前後の

ことを話して聞かせると、老人たちはふたりとも眞實に涙をこぼした。

――「僕も、つひ泣くやうになつてしまつて困つた」

田は赤坂から歸つてもうさめると、醉ざめに茶をがぶ〳〵と飲みながら、たみ子を相手にそんな話を聞かせてゐた。

・

五

田は彼が企てゝゐる「南京」「武漢」「北京」といふ三部作の映畫の抱負やら、また「孫逸仙」といふ戲曲の荒筋やらを、食事の間に述べるのである。前の三部作では支那の今日の民衆の行くべき方向を示したいし、戲曲の方では革命の先覺者の生涯のなかに支那の社會の結婚問題やら宗教問題やら、またこの主人公とその弟子たちとの間に自から生じて來た思想的相違によつて最近二十年間に於ける支那の思想史をも含ませることが出來ると自賛した。それからまた武者小路の「桃源にて」を評し、それが支那で舞台に上つた時の批評をもした。一たいに無口な方の武者小路實篤は、自分の作の事が言ひ出されても話は田にまかせて田が質問をしないかぎりはおしやべりをしなかつた。さうして彼は別にうまいやうな顔もせず、またまづいやうな顔もせずに食つてゐた。甚だぶつきら棒でしかし溫みがあつた。

「何しろ、こつちは、支那の事などはわけて何も知らないと來てゐるんだから」

彼はそんな風に言ひながら、彼の雜誌「大調和」で亞細亞號といふものを出すに就て、寄稿者を現代の支那の文士から選んだり、またそれの世話をすることを田に賴んだ。

「僕も」と私は言つた「多少は世話を出來る。ちようどそのころ、上海にゐるだらうと思ふから」

「さう。君も行くの。それぢや、さう願へると大へんいいね。」

村松は時計を出して見た。田も同じく二時からは、三共ビルデンクの階上のエンプレスといふレストランへ行く筈であ

つた。その日、そこでは或る少壯の戯曲家の渡歐送別會があつて、そこへ來れば一度にさまざまな人に會ふことが出來るやうに計らふと、昨日菊池が言つたから、田は行く筈にしてゐた。

「君一つ、田君と一緒にエンプレスへ行つてやつてくれないかね」

村松は私にさういふのであつた。

「まあ、やめたいね」私は答へた「僕はさういふ會合はあまり好かない。それに僕もその時刻にはうちで人が待つてゐる。――村井が來て昨日から初めた筆記のつづきをやつてくれる事になつてゐるし」

「さうか、それぢや、僕が行かうか」村松は言つた「君は、菊池寛君が嫌ひだと聞いてゐるから、或は行つてくれないかとも思つてゐたんだから」

「いや、僕は」と私は少し慌てて言つた「菊池寛君を見るのがいやで行かないといふのぢやないで」

「それぢや、何が厭なの」

「やつぱり、それや人が厭なのだが」

「それぢや、誰が厭なの」今度は武者が、村松と同じやうな事をそばから口を出した。別に意味があつて問ふといふよりは、つき合ひに口を利くといふ風に、笑を帶びてゐた。

「誰もひとりびとりでは好きも嫌ひもないけれどもね。言はゞ集ると嫌なのだね。一團になると、その集り方が嫌ひになるものでね」

「あゝいふといふのは？」今度は田が尋ねるのであつた。

「いや、さう皆で嚴密に談じ込まれちや」私が苦笑すると皆も笑つた。私はもう一度、眞顏になつて言つた「つまりは僕が變屈といふことになり、僕の恥を話すことになりさうだけれど、ね、僕には、志を同じくして集つたのだか利益を目的

にして集つた親密だか解らないやうな氣がするのだよ――そんな例證はどこにも無いのだがね。だからつまり、僕は自分の恥を言ふやうなものだが。ともかくもあまり行きたくないところもあるさ」

「さうまで言ふなら僕がつれて行くよ」

村松がさういふのと同時に、武者小路は他意のない笑を短く笑つた。

「でも」私は言つた「そのビルデングの入口までは一緒に行くよ。同車しよう。どうせ僕も急ぐから自動車で行くとして」

村松は再び時計を出してみて女中を呼んだ。自動車を二台言ひつけようとするのを、武者小路は「近いのだから、それに僕らはつれがあるから、散歩するよ」さう車を斷つた。さうして車を待つてゐる私たちを殘して、彼等は出て行つた。

車はどこから來るのだか、少し手間どつた。私たちは下へおりて行つた。私は先きに下りたが、私は階段の中程から、ふと下の部屋の壁と壁との間の一隅に一風變つた人物がゐるのが自然と目にとまつた。ひとりの老人で、ありふれた藍色の支那服を着てゐる。それが黄色な唐紙の上に一心に字を書いてゐるのである。私はもの珍しく思つて、階段を下りると自づとそこへ立つてゐた。廣くない部屋だから、階段を下りて三歩ほど歩けば自づとそれを覗くやうなわけになる。私と同様に田や雷もその人物の近くに集つて立つた。しかし、その老人は我々がそんなところに來たのには一向氣がつかぬかと思へる樣子であつた。一心に字を書いてゐる。

衣服は外國人の私が見ても明に時代おくれで、その上にあまり新らしくもない。私はこんな着物を濟州の田舍あたりで見かけたことがある。その筆から出來てくる字は子供のやうにたどたどしく、しかも枯れ切つてゐる。この人物の身のまはりには何か特別な空氣が感ぜられる。私は無作法をも忘れて更に二三歩進みよると、その人の腰かけてゐる卓の眞向へ立ちはだかつてしまつて、ちつとその字を、またそれを書く人物を見入つた。

有感

――人間事――

(舊作23)

芳草如茵處處青
閭門要地一時生
年來檢點人間事

と書きかけてゐる。一足おくれて來た村松は見入つてゐる私のそばへ來て耳うちした。

「鄭鴻銘だよ――ここへはよく來るんだ」

私は默つてうなづいた。字は一字づつ書きつがれた――

惟有春風不世情

さうして讀易老人と署名をした時、田はその老人に向つて何か聲をかけた。

老人は先づ靜かに筆を擱いて、それから聲のかけられた方を見上げた。顏を上げた瞬間に、私は彼の顯に灰色になつた一握の髯があるのを見た。それが一層この老人に神采を添へてゐた。その目は稍落ち凹んだ大きなものでゆつたりとしたその態度にも似合はず鋭い寧ろ神經質な光を放つてゐた。落ち凹んでゐるのは目だけではなく双頰にも亦肉づきはなかつた。淸瘦と言ふにには少し傷ましく、老いやつれたと言はなければならない。――

ぢろりと上目づかひに田を見上げた彼は、短かく田に何か言つた。さうして田が再び言つたのに對しては、もう一度更に短い言葉で應對した。さうして今擱いた筆を再びとり上げると、その卓上に別に置かれてあつた洋風の書翰用箋をひきよせて、默つて書き出した――

救國歌

毎日清晨一炷香
拜天拜地拜三光
但願國人早囘首
倡明大義復三綱

ここまで書いた筆をとめて、辜鴻銘は「三綱」といふ字のわきを筆の穂先で二三度輕くたすりながら何か言ふ。質問をしたのであらう。

今まで默つてゐた雷が直ぐに何か答へた。田の雷の言葉を半で打消して、自分で言ひ出した。その田の言葉を今度は辜鴻銘が聲を勵まして遮つた。彼が尋ねたことに對して相手の答が何れも違つてゐたのだといふことは見ただけでも判つた。老人は三綱といふ字の下へ、君臣義、父子親、夫婦順、と三字づつを三行に書き並べた。註をしたのである。書きながら彼は彼等に對して言ひつづけた。叱り且つ教へてゐる調子であつた。それをやめると書きつづけた。

忠烈賢豪秉國政
亂臣賊子皆滅亡
外患不作內訌息
人民壽命得延長

筆を捨てて、老人は自分の書いたところを讀み上げた。田はその紙片を貰ひ受けて手にとつた。それから改めてもう一度說き出した。話の途中で彼はテーブル越しに手をさし延べて田のネクタイを引つぱつた。それはチョッキ無しにしやつの上に垂れてゐたものである。老人は田のネクタイをしごいた手を、彼自身の頭の上へ持つて行つたと思ふと、一束ねに編んだ髮が、バサリと音をたてて彼の胸の上に當つた。この老人は辮髮を蓄へてゐたのである。それを我々に示したので

あつた。私は彼がそんなものを蓄へてゐたことに今まで氣づかなかつたし、またこの言葉が解らぬからこの動作の意味をも私は解しなかつた。私が瞬つた奇異の眼を、老人はすぐに見てとつた。彼は言つた。――

"*My ne-k-tie*"

我々の顏を彼は見まはした。それは美しい餘韻が耳朶に殘る程うつくしい發音であつた。私はその發音の鮮やかさとこの異樣な風俗の老體との思ひ設けない對照を感ずると同時に、この老人が有名な學者で、以前は永く歐洲にゐた事もある人だつたことを、今まで忘れてゐたのに思ひ當つた。確か少壯い時にはケンブリッヂで學んだ人であつた筈だ。

辜鴻銘は更に聲を高くして說きつづけてゐる。

「また御說教が始つてゐますね」

山水樓の主人はいつの時にか、私のそばへ來てゐて、かう言ふのであつた。

「いつもかうなのですか」

「ええ。機會ある度に」

「實に面白い字ですね」私はそこにまだひろげられてあつた紙に目をそそいで言つた「そのうち、いつでも一枚、私にも書いて貰つてくれますまいか」

「好うございます。頼みませう。今直ぐ」

「いや、いそがないのです。今度でもいつでも」

「しかし先生は今日きりしか居ないのです――明日は大連へ出發するのです。急にさういふ事に決めてしまつたので。一時は永住したいとさへ言つてゐた程なのだから、多少何か不平でもあるらしいのですが……。」頼んで置きます。書いてく

れますよ」

「どうぞ――對句、聯か何かがいいな」

コック場から呼ぶ聲がしたので家の主人は引込んで行つた。辜鴻銘はなほ説きやめなかつた。やつと一段落を述べたらしく言葉を切ると、それを待ち構へてゐたかのやうに、雷は言ひ出した。それが何であつたか判らなかつたが、雷の言葉を聞くと、突然、老人は一聲叫びながら片手を振上げて、「去れ」といふ表情でその手を振り拂つた。それが雷の肩をかすめた。雷は叫び出した――不可解な言葉ではあるが、怒に燃えてゐるものであることがその語勢と身振とに溢れてゐた。雷のその聲と一歩すり寄つた肥大な體とは痩せた老人の上から押冠さつた。辜鴻銘は今までは見當らなかつた一本の杖を手に握りしめて、雷の攻勢に對してゐたが、その手は激しくふるへてゐた。仙人の持つやうな細い長い木の枝の杖である。

雷の吹鳴る聲におどろいて、店の主人は出て來た。田は雷の腕を捉へて一歩あとへ退かせた。雷は素直に退さかつた。その間へ、事を防ぐやうに村松が立つた。ゆとりが出來たけれども、辜鴻銘の手は尙固く杖を握りしめて今にも打たうかとするやうに顫へてゐる。

「三綱主義と三民主義とぢや、合ふ筈がない。ハ、ハ」

店の主人は、事の落着いたのを見て私にさう言つた。

「さ、田君ともかくも、お時宜をして行かうぢやないか。車は來てゐるんだよ」

田や私たちは老人に對して禮をした。彼は丁寧に禮を返した。しかし雷は田の言葉などは耳にも入れず、なほも吹鳴ることをやめない。叫びつづけてゐる雷を私たちは無理に戸口へ引つぱつた。雷は動かされながらも辜鴻銘を顧み顧み一歩一歩叫ぶのであつた。――ラオシユウ！ラオシユウ！ラオシユウ！！ラオシユウ！！！（私にはさういふ音に聞えた）雷は自動車に乗りながらも、乘つてしまつてからもそれを叫びつづけた。辜鴻銘が怒つて叫んでゐる聲も戸外に洩れてゐた。

六

「一たい、何だといふのだい」

車が動き出した時に、村松と私とは同時に田に質問した。

田は説明して聞かせた――老人は先づ、田が聲をかけると、「お前たちは南方の人間か北方の人間か」とたづねた。上海だと答へると、「さうすると短髪賊だな」と言ひながら救國歌を書き出した。三綱と書いて、三綱とは何ごとか知つてゐるかと問ふた。田も雷もふたりとも知らなかつた。間違つてゐた。「お前たちは自分の國の本一冊讀んだ事もない輩だ。西洋かぶれがしてしまつて。西洋人の糞なら香水の匂がするのか！」とも言つた。

――田が私たちに説明してゐる間にも、雷は怒氣の納まらない聲で、田に何ごとかを言ひかけるのを、田は手短かになだめて、私たちに辜鴻銘の言葉を説明した。田の説明は雷の聲で、十ぺんも邪魔をされた。

辜鴻銘の言ふには、一たい支那には現に三つの支那がある。新らしい支那、舊い支那、さうして本當の支那。お前たちのは新らしい支那で、さうして私を舊い支那と思つてゐるだらう。だが私のは本當の支那なのだ。お前たちは西洋の眞似をしたがつて、そんなものを頸のまはりへぺらぺらさせてゐる。だが見ろ、おれのネクタイは是だ。彼はかう言つて辮髪を見せたのだ。民主主義だの共産だの、やれ飛行機だのと、そんな子供だましが何になるのだ。本當の支那を見よ。精神主義の支那……

「まるで。」田は辜鴻銘を評した「あの人はヒステリーにかかつたのです。もうきつと精神が朦朧としてゐるのです。國政を乗るといふ（田はさう言ひながらポケットから、さつき辜鴻銘の書いた「救國歌」のある紙片をさぐり出しながら）この乗るといふなどは、さう讀んだけれど間違つてゐる。こんな字ももう忘れてゐる程なのだから、そんな狀態になつた人、

氣の毒です。でも、あの人は、以前にはともかく立派な人、——歴史的には尊敬していい人だとは僕は思つてゐる。ナイさんのやうに、今日のあの人を見てあの人の眞價をきめるのは氣の毒だから」

「ラオシユウと、ナイさんが叫びつづけてゐたが、何といふ事だ」私が田に聞いた。

「老いぼれといふ事」

「老朽か」

「さう、老朽。——それでナイさんは、三綱主義なんて、夫婦順、父子親はまづそれでいいとしても、今日の支那に君主主義なんていふものは、何處にそんなものの必要があるのだ。時代遲れな事を言ふな、といふとあの人——辜鴻銘が怒つた。ナイさんはそこでお前見たいな者がゐるから支那はいつまでも文明國にならないのだ。——この老いぼれ、お前もも しそんな老いぼれでなかつたら、おれはお前を毆り殺してやるんだが、貴樣のやうな老いぼれは助けてやる。この老いぼれ——老朽老朽。と言つたのだ」

「老朽！老朽！」雷は又しても思ひ出したやうに叫び立てながら、擲りつける身振りをした。その手の勢は車の天鵞絨張りの低い天井にぶつつかつた。氣がついたやうに彼は私たちを見まはして笑つてみせた。私は雷の先刻の見幕と今の樣子とを思つて、田の昨晩の話——かつて彼を斬らうとした男が尻ごみしたといふのを思ひ出し、成程とうなづけた。

車は初夏のキラ〱した銀座の中を走つてゐる。

「何しろ、僕は」村松が私に言つた「あの老人が大好きさ。ああして頑固に、ともかくも自説を屈しない。あれだけの年になつてあの氣力だ。又、あれだけの學識のある人なのだから、もし世と相迎へる腹があるならその智惠と學問とで何とでも時代の氣に入ることが言へるだらうぢやないか。それをし得ないところが面白いぢやないか。日本の學者などを見てみたまへ。いつの間にか教育勅語主義などがぬる〱と國家社會主義に變つて來るところは、手ぎわだからねえ」

「君子豹變だらう」田が言つた。

「さうだ」私は答へた「日本には本當の保守家もゐない」

私は田の持つてゐる救國歌を借り受けた「忘れないうちに、借りて寫して置かうよ」

「用意周到なものだね」村松の言葉だ「全くちよつと今の場面は書けるものね。世の中には小說の種は盡きない筈だよ。あんなところでひよつくりあんな人物に出會して、それがまたあんなに活躍して見せるなんて」、

「全くだよ、いろいろ窮するとなるとこれでいろいろ書くことが出てくるものさね。」

七

芥川の「支那遊記」のなかに辜鴻銘の事を書いた一章があつたのを、私はおぼろげに思ひ出した。辜鴻銘は英語で話しながら、殆んど同時に漢字を書いて見せてくれるので甚だ便利だとか書いてあつた。さうさう何でも上海から北京へ行く時、停車場で芥川の友人ジョンスが手を握りながら、北京では宮殿を見ないでも辜鴻銘を見忘れちやならんと言つたさうである。芥川はあの老人のことを顏は蝙蝠に似てゐると書いた。あの老人が、東西南北人と自ら別號を名告つてゐるのは、東は日本人を細君にして西はケンブリツヂで學んで、南は福建で生れ、北は北京に住してゐるからだとも說明してあつた。その日本人の細君といふのは死んでしまつて、娘をのこしてゐる。この小さな女の兒に辜鴻銘は芥川の前で「いろはにほへと」を言はせて、この日本からの訪問者をセンチメンタルにさせたと書いてあつた。さうして東洋を說き西洋を論じトルストイのことを論じたが、トルストイは先生に手紙を寄越したことがあるさうだとも書いてあつた。談論風發するのを見て芥川は、「先生が時事に慨しながら敢て時事に關せざるは何が故ぞ」と質すと、相手は早口の英語で何か言ひつづけた。それが聞きとれなかつたので芥川がもう一度問ひ返すと、先生は筆をとり上げてさも忌々しげに書き投ぐつた——

「老、老、老老老……」芥川はその訪問の歸途、何でも色鮮やかな柳の垂れた枝を見ながら、先生の最後の言葉を思ひ出すと同時に、已の青春を祝福した………そんな風に、その文章は結ばれてあつたやうに思ふ。家へ歸つたら、一つ「支那遊記」をとり出して讀んで見よう………

私はそんなことを車の中で、思ひ出してその事を田や村松に話さうかと思つたが、あたりを見ると日本橋のすぐ手前だつたのでもう話す時間もないから默つてゐた。

彼等を三共ビルデングの入口で車から降りさせると、私は行く先を問はれた運轉手に

「小石川の目白坂」

と自分の家を答へた。時計を出して見るともう二時半であつた。私は自分の家のベランダに村井が待つてゐるのを考へた。しかし、私の頭には、村松が私に與へた暗示が盛んに働きかけて來た。私は辜鴻銘に出會つた話は書けると考へついてゐた。それにしては、もう一度、あの老人をよく見て置きたいと思ひ始めると、目に浮んでゐる退屈さうな村井には、心のなかで「ちよつと待つてくれ給へ。急な用事が出來たから」と斷りを言ひながら同時に、目の前に座つてゐる運轉手に言ひつけた——

「もう一ぺん、山水樓へ引かへしてくれ給へ。用事が出來たから」

車は二町ほど走つてゐたが方角を變へるために側路へ曲つた。

私の心にはあの老人がまだそこにゐるかどうかの外に、もう一つちよつとした問題があつた。彼が未だそこにゐるものとして、彼は果して私に、私が頼む字を書いてくれるかどうだらうか。彼は或はまだ怒つてゐて、彼の喧嘩相手である男の同伴者である私に快い感情を持つだらうかどうか。この問題を假にあの老人が日本人であるとしたら、多分書くかも知れないがあまりいゝ顔はしないだらうと思へるのであつた。尠くとも「文藝戰線」同人の心をもつてすると書かないだ

らう。しかし辜鴻銘は多分書いてくれるだらう。そんなことを漠然と考へ、それからさつきのあの老人の怒つてゐる、全く芥川がうまく形容した如く蝙蝠のやうな顔を思ひ浮べた。ふるへる手に握られてゐた仙人めいた杖を思ひ出した。しかしあの老人は仙人めいてはゐない。寧ろ人間臭い。トルストイは俺に手紙をよこした事があると言つたり、又さつきの「有感」の詩にしても「開門要地一時生」と言はずにゐられないところ、そこにあの老人が仙人にはなれない人間として生きてゐる證據がある。さうして、それならばこそ時事には關しないのに、時事を慨するのであらう。……

車は横町へ這入つて停つた。

「ちよつと待つてくれ給へ」

私は入口から覗き込んであの老人がまだゐるかどうかを確めた。もとの卓に彼はやつぱり字を書いてゐた。金を拂つて私は車をかへした。さうして再び家の中へ這入つて行つた。

「またやつて來ました。辜鴻銘先生をもウ一ぺん見たいと思つて」

私は出迎へた主人宮田にさう言ひながら、見ると人のゐない卓の上に、字を認めた紙がひろげられてゐるが、これには佐藤先生とある。私の頼んだものはもう出來てゐた。私はそこへ近づいて行つた――

閉戸宛然山水際
經冬自在歳寒心

と書かれてある。

「もう書いて下さつてある。有難う」

「もう少し大きな字だといいのですが」宮田が言つた「手がふるへて、それが精一杯なのです」

「いや、結構です。有難う」

私は辜鴻銘の方に向つて禮をした。宮田は私の言葉を通譯してくれた。また辜鴻銘の言葉を私に判らせた。老人は自分の卓の前の椅子を示して、まあ腰をかけよと言つた。

私の車のなかでのちよつとした問題はまるで問題ではなかつた。私の爲めの字はもう書かれてゐたし、それに老人は三十分前のことはもうすつかり忘れてしまつたかのやうに、私の顏を見ると微笑を帶びてゐた。私は老人は私が雷の同作者であつた事を氣づかなかつたのではないかと感じた程である。

相對してみると默つてゐるわけには行かない。私は言葉を捜してゐると、相手は何か宮田に言つてゐる。

「英語をお話しになるかと言つてますよ。え、無論です」

あとの半分は辜鴻銘にさう答へたといふ意味である。

「いやいや、私はそんな事を言はれると困りますよ。話すことも聞くことも出來ないのだから」私は慌ててから言ひながら、筆をとり上げると目の前にあつた書翰用箋へ字を書いた。こんなところで英語などをしやべらされて恥をかくよりは、まだしも筆談でもした方がいいと思つたからだ。しかし、これもよほど勇氣が必要である。語になつてゐるかどうかは知らないが書いた。

「久仰先生清節」

先生は私の書いたのを見ると、すぐにその隣に書いた

心憂天下食不足

節慕古人識愈來

彼の字はくしやくしやと物臭に書かれてあつた。識といふ字を私と宮田とは糸ヘンに讀んだ。さうして意味が分らなかつた。それをふたりで詮議してゐると、相手は

「ヒト、バカニスル」

と日本語で譯してくれた。成程、讒言の讒であつた。彼はこの句を自分で見つめながら、眞面目極る顔をした。言葉とその表情とで、彼は先刻私がここにゐたのを覺えてゐたことがわかる。彼は直ぐにまた筆をとつて、今の二行のつゞきに

　我來日本求食

と書いて、前の二行のうちの食不足といふところを、筆の軸で示すと、筆を投げ出して、急に呵々大笑した。その唐突な笑は、今までの眞劍な顔をつつむ假面のやうにも思へた。また急に日本を去ると決定したと聞くこの老人に、何か言外の不滿があるやうにも私には直覺された。さうしてこの痩せて老ひやつれた人は私には傷はしかつた。私は仕方なしに笑つて、答へるすべを知らなかつた。宮田はまごついてゐる私の代りに

大謙々々

と書いてくれた。

こんなまはりくどい事をしてゐるよりも、東亞同文書院出身の宮田に通辯して貰つた方がずつと早いのだ。

「お前は北京へ行く事があるか」

「知りません」

「それでは上海は?」

「そこもまだ知りません」

「それでは支那はどこも知らないか」

「福建を見ました」

「福建?!、福建のどこだ」

「厦門です」
「厦門か？私の故郷だよ。いつたいどれぐらゐ居た」
「ほんの少しです」
「え。いつ？」
「七年ほど前です」
「七年ゐたつて？それぢや厦門の言葉を言へるだらう」
「言へません。七年ゐたのではありません。七年以前に、たつた二十日ほどゐただけです」
「あ、さうか。それでは言葉はわかるまい。――厦門の發音は日本語と同じだよ、これを讀んでごらん日本流に」
言ひながら彼は「馬關」と書いた
「バカン！」
「バカン！そのとほり厦門でも。――厦門の子守唄をわたしは英語に譯したことがあつたつけ」
彼は追想するやうな目ざしであつた。子守唄を聞いたそのころであるか？それともそれを英譯したと云ふそのころであるかそれは私にはわからないけれども、彼はさう言つて、しばらく言葉を途切らした。
「折角、二度目お出になつたのだからもう一枚、書いてお貰ひなさいますか」宮田は私にさう言つた。
「それや、さう願へればうれしいが、氣の毒ではありませんか」
「いや、何、書いてくれますよ」
宮田は辜鴻銘にその事を言ひながら、紙を卓に展げた。私は黄色紙に書いて貰ふことにした。さつきの詩が近作だからよからうといふのでそれを額にするやうに書いてもらつた。宮田はその紙の上を指で示して次に字を書く位置を示した。

「かうしなけや、まるで曲つてしまつて纏りがつかないのです。さうかと言つてあまりこつちで指圖をしたのでは面白味がありませんしね」

字を書いてしまふと老人は署名をするのに雅號に書かうか、本名にしようかと相談する。さうういふ點については少しも意志がないやうに見受けられるのであつた。この家の庖丁が老人が筆を持つてゐる序を見て出て來た。前に書いて貰つてあつたらしい紙をそこに展べると、隅に年號を入れてくれといふ。書き入れればせせつこましくなる餘白に彼は唯々諾々とそれを書きかへてやつた。丁卯の卯といふ字をどうしても書きそこなふと宮田は說明した。

筆を置くと、彼は今書いた紙を見つめて高らかにその詩を吟じ出した。二度繰り返した。

「今のは北京の音です。今度は福建流に讀んでみる」

また讀んだ。その差別は私には無論よく判らなかつた。突然、老人は叫び出した

「月オチカラス啼イテ」それだけを朗吟してから笑ひ出して日本語で言つた「ワタシ藝者！」

彼の快活は私にとつて異樣なものに思へた。私は宮田に尋ねた。

「酒を飮んでゐるんですか」

「いえ、ほんの少し」

「酒量は？」

「殆んどありませんね」

老人は私たちの話を聞きたがつた。さうして宮田に支那語で言つた。

「何を言つてゐるのだ」

宮田氏の答を聞いて、彼は私が彼に酒を献じようかと言つたと思つたらしく、宮田をして私に傳へさせた。

「有難う、酒は飲まない」

酒精中毒でないとすれば、年寄してゐるのだらうと思つて私は年を宮田から聞いた。七十一だとの答であつた。窓の少いこの部屋は、その所爲もあるだらうが、私には大へん陰氣なものに感じられて來た。私は外のかがやかな空氣を吸ひたくなつた。私は別れを告げようと思つて言つた。

「今日、もう日本をお立去りださうですね」

「さうだ。大連へ行く。東京は暑くなるからね。最後の日にお前に會つたのだ。因緣だ。大へん愉快だ」

「また東京へいらつしやいますか」

「さ。來ようとは思ふが」

「是非どうぞもう一度」

「アリガト」――それは彼自身が日本語で言つた。

「ごきげん好う」

一路平安（イッピンアン）と宮田氏は私に代つて書いて讀んだ。私は山水樓を出た。出てしまつてから私はあの老厦門人にどうして「順風（スンボン）」と言つて別れなかつたのを後悔した。それは私の今も覺えてゐる殆んど唯一の厦門語である。人との久しい別れを述べる港の言葉らしい好い言葉であつたのに。彼に故郷の言葉一つ思ひがけなく聞かせてやりたかつたのに。歩きながら私は自分自身に言つた「面白かつたな、今度、芥川に會つたら話してやらう。彼が會つた時の模樣も聞かう」。

八

九時二十分の汽車に乘る筈だのに、田は八時になるのに歸らなかつた。一緒に最後の夕飯を食はうと思つたが待ち兼

ねて食事をしてしまつた頃に、彼は手に大きな花束を抱いて歸つて來た。彼は私が氣を惡くするとでも思つたのか、彼の爲めに晩餐會があつたのを、私には言はなかつたらしい。「文藝戰線」同人に贈りたのだらうと思つて、私はちよつとをかしかつた。聞けばその花束は三宅やす子がくれたのださうである

私は借りてゐた教國歌の紙片を返さうとそれを差出すと、田はもうその紙のことは開いて見るまで忘れてゐた。しかし、雷はよく覺えてゐたと見えて、それを差出した私を見ると、急に大きな聲で笑ひ出した。荷物は小さな手にさげるものばかりだからもう用意されてあつた。時間はまだ三十分ばかりは餘裕があつた。私と田との間には、何よりも辜鴻銘の噂が出た。私は再び行つて來に逢つた話をした。

つさうです。むかしは支那の中でも第一の人物でした。英國に久しくゐて、支那の文明をヨオロッパに紹介した。またヨオロッパの文明を支那人としては最もよく理解したひとりです。それ程の人が、年をとつたからと言つてどうしてあんなになるか、僕、本當に判らない。あの人ばかりではない。淸朝の遺老といはれる人は柯風孫にしても、羅振玉にしても、王國維にしても――この人はごく近ごろ北京の昆明池へ身投げして死んだよ また嚴又陵――あのモンテスキューやスペンサアやダアヰンやアダム・スミスなどの支那譯をしたりして群學、つまり日本で何といふか、さう社會學を支那へ眞先に紹介したこの嚴又陵にしても、みんなその當時の新思想で、誰よりもさきに辮髮をきつたやうな人などが、また辮髮を生やしたりして、そんなことはどうしても僕、わからない。さうして王國維なんといふ人はもう七十にもなつて、何もわざわざ自殺することはない。――でも、それは僕、ナイさんのやうにさう單純には見ない。誰にでも花のさく時代ある。その時代はいつまでもない。現に我々にしても一つの時代をつくつたら、あとはも用がない人間になる。それでいいのだから、だから僕、さういふ人たちには歷史的に非常に敬意を持つ。それでも、その人たち……」

首を振り立て、眉をしかめ、また吃りながら田は雄辯にしやべり出した。雷は田の肩をゆすぶつて何か言ふのは早く停車

場へ行かうと促すのであらう。雷の頭の中には三匹の猫の子や、もう十日とは經たないうちに人の妻になる自分の娘や、胸のなかに一杯つかへてゐるいろいろの自分の國の言葉やらがあつて、それが一刻も早く東京を立去りたい思ひなり、まだ上海へは行けなくとも少しでもそこに近い關西の地へまでゞも行つて居たいに相違ない。

停車場へは村松は夫妻で支那服を着て、見送りに來た。主觀的な田は大きな花束を一つと、それから停車場で子供の土産に買つたラッパとを持つたきりで、他の荷物は一切雷に持たせてあつた。それに氣がついた私は改札口をずつと出てしまつてから、それを持つてやらうと手を差し出すと雷は遠慮も辭退もしなかつた。投げ出すように私に持たしたが、それは私にはやつと持ち切れるやうな重さだつた。私は田のお供に來たやうなこのお人好しの豪傑の雷が氣の毒でもあり、をかしくもあつた。

彼等の汽車が立つてしまつてから、村松が言つた――

「今になつて僕は氣がついたのだが、田はあれでいゝとして、雷は一たいあれで面白かつたかね。言葉も解らないでただ無暗と關係も用事もないやうな人間のところばかり引つぱり出されてさ。せめて、東京へ來たのだから、つまらないにしても、淺草とか吉原とかそんな日本の田舍者並のところでも一日案内して見せてやればよかつたと思つてね」

「さうさ」私も言つた「それや僕も氣がつかないではなかつた。案内してやらうとまでは思はないまでも、くたびれたとよく言つてゐたやうだつたから――それや、さうだらう、どんなに若く見えたつて三十の田とは違ふよ、四十だもの。だから一日、田と歩くことはやめてうちで休んだらどうだらうと、女房とも相談したのだが、何さ、例の言葉がわかるまい。だから家にゐても話相手になつてやることも出來ないのさ。見物に案内してやるにしても同じ事さ。一日、晩になつてななけやなるまい

「へ、へ、へ。それもさう言へばさうさね」

支那服を着た村松夫妻が、それこそ上手な日本語で私と立話するのを、見送りがへりのさびしい群集の五六人は、珍らしさうにふり返つて通つた。村松はまた言つた。

子供はやつぱり可愛いいんだね、あんなくだらないものを停車場などで買ふほどなら、持たしてやるものはいくらもあつたよ。」

* * * * *

私が村松に宛てた上海からの手紙

七月二十九日。

出發の時はいろいろ御配慮ありがたう。もう歸りがけになつてお禮は季節外れだが。おかげで面白く見物した。君の紹介狀をくれた諸君はみな親切にしてくれる。時に、さつき西湖から歸つたばかりだが、芥川の死を知つて實に驚いてゐる。君と一緒に、あの晩赤坂で別れたのが最後だが、あの晩はあんなに活快だつたぢやないか。君は何かあの時おもひ當ることがあるか。僕には何にもない。もつとも今年の一月には一度そんな時はあつたけれどもね。あの日は誰と一緒に自動車で歸つたか知ら。僕たちは早く乘つてしまつたから知らないが、自分の車へ彼を誘へばよかつたのに、とあの時にもあとからさう思つたのだよ。

「支那遊記」には上海の酒場で花賣の婆さんの花籠をふみ散らして、その花の上を踏み歩いてとほる水兵の一團が書かれてある——「人生は花を蹴いた道である」と友人のジオンスが言つたとか。また北京、辜鴻銘に會つた時の歸途にも彼は自分の青春を自ら祝福してゐる。彼の厭世觀はすると彼の支那漫遊當時には無かつたものだ。何にしても殘念だ。西湖で

も彼の曾遊の土地だけに僕は彼のことを思ひ出しては、郁達夫と語り合つたものだ。彼が好いといふから揚州へも行つたし、彼に話したい話題がこゝへ來て澤山出來たのだのに。郁は君も知つてゐるね。僕は彼には非常に世話になつてゐる。僕は支那人のうちでは彼が一番好きだよ。尤も日本語の達者なせいもあるだらうが。田は政府の仕事が多忙であまり相手をしてくれない。田の子供はもうラッパはこわしてしまつてゐる。彼は、日本語をゴザイマスだけ知つてゐる。南京へ行つてみて、君も興味を持つて聞いた男裝の女士官も見たが、男裝しても女はやつぱりやきもちを燒くね。その男裝女士官たる田の二度目の女房などはなか〳〵その點盛んなもので、おかげて秦淮の見物もしそこなふところだつた。田などは羽ぶりがいゝのできつと秦淮の釣魚が祟つて、見物さへ出來ないのだよ。釣魚は田ばかりぢやないと見えて、軍人一切秦淮に夜おそくゐることは嚴禁の布令が最近出たさうだ。雷にはこの地へ來てから未だ會はない。雷が藝者を見て斷髮したがよからうといふ突飛な批評をしたが、こゝへ來て見てその言葉がわかつたね。こゝでは女子剪髮大流行で、事實髮のある女はをかしく見える。辜鴻銘が大連へ來た時に、大連の日本字新聞に談話として「三つの支那」の話や三綱主義の意見があつて、それは山水樓のかへりに田から聞いたのと全く同じだつた。たゞ一つ張作霖はこの點無學だけれども、直覺的な良知を持つてゐると言つてゐた。芥川の記事を漁るために西湖で見られなかつた數日分の新聞を見てゐると、辜鴻銘が今度、張作霖の最高顧問とかいふものになつたといふ記事があるよ。蔣介石は最近少々風むきが悪いやうだ。長いことはないなどといふ噂もある。

いづれ後便と書くところだが、後便を書くまでもなく僕はかへるつもりだから萬端拜眉の上。芥川のことを書くつもりでつひ餘分なことまで。細君によろしく。僕の女房も支那服を着てゐます。但しまだ剪髮はせず。不一

（附記）この作は前月號所載の一舊友につゞけて讀んでいただきたい。

小見山叔父さんと其妻

加能作次郎

(一)

敬介が關西旅行から歸つて來た晩のことだつた。彼是三週間振りに我が家に落着いた彼は、殊更ゆつたりと打寛いだ氣持で晩酌を傾けながら、妻の靜子を相手に何くれとなく旅行談をしたり、留守中の出來事を聞いたりしてゐたが、それが一寸一段落ちついたところで、靜子はその機會を待つてゐたやうに、やゝ改まつた調子で言つた。

『昨日小見山の叔父さんと叔母さんが來ましてね。』

『ふうん。』

敬介は俄かに澁面を作り、素つ氣なく鼻であしらふやうに應へて、態と夕刊の上

に眼を落した。

小見山の叔父さん叔母さんといふのは、妻の靜子のそれだつた。つまり靜子の實の叔父夫婦なのだ。敬介はその二人が連れ立つて來たことを聞いたゞけで、何かまた彼等の身の上に關して煩さい相談事を持ち込んで來たに違ひないと直覺したのであつた。のみならず靜子の切り出し樣によつても、容易にそれと察せられた。と案に違はず、

『大變困つたことが持ち上つて來ましたの。』と、靜子は敬介の機嫌を損ずるのを恐るゝもののやうに、遠慮勝ちに言つた。

『何だい？』

『外でもありませんが、郷里(くに)に預けてある子供を、今度急に引取らねばならなくなつたんですつて。』

『へえゝ。』と敬介は此時漸く新聞から眼を放して靜子の上に移した。『どうして？』

『つまり郷里の方ではもう世話が出來ないといふんださうです。妹のみよ子だけは養つてやるけれど、兄の繁は早速引取れつて、突然鐵から棒に言つて來たんです。』

『それはまたどうしたことなんだ、急にそんなこと言はれたつて叔父さん達も困るぢやないか。今の狀態ぢや、引取ることもどうすることも出來ないぢやないか。』

『えゝ、とても／＼！』と靜子は力を入れて言つた。『ですけれど向ふでは、是非早速引取れ、一日も置くことは出來ないからつて、すぐにもこちらへ送り屆けて來さうなんです。』

『どういふ譯なんだ、何か惡るいことでも仕出かしたのか？』

『それにはいろ／＼込み入つた事情があるらしいんですけれど、表面の理由は、一口にいふと、その繁といふ子が、近頃とても不良になつて手に合はないから、責任をもつて養育出來ないといふんですの。』

『なんだか一向要領を得ないけれど、兎に角困つたもんだな。それで叔父さん達はどう言つてるの？』

『どう言つてるつて、どうしてい丶か途方に暮れてゐるんです。それであなたに御相談を願ふつもりでやつて來たんですけれど……明日でもまた來るでせう。今日お歸りだと言つときましたから。』と靜子は敬介に濟まないといつたやうな調子で言つた。

『やりきれないな、そんな煩さい相談なんか持ち込まれちや。』と敬介は持ち前の憂鬱な顔を一層曇らして、『俺だつてどうしようもないぢやないか。あの人達の力で、引取れるものなら引取ればよし、それが出來ねば、もう暫く何とでもいつて預つて居て貰ふやうな方法を取るより途がないぢやないか。』

『それはさうなんですけれど……』

『まさか、俺んとこの家に置いて貰ひたいなんて、そんな蟲のい丶ことを考へて居るんでもあるまい。』

敬介は小見山と血の通うた妻の靜子を前に、そんな冷酷なことを言ふのは少し酷いと思つたが、何かしらそんな風に先手を打たせるものが心の何處かにあつた。

『そりや何とも言へませんね。』と靜子が言つた。『或はそんなことを空想してゐるかも知れませんわ。』

『何かそんな風なことをお前に匂はしでもしたかい？』

『そんなことはありませんけれど、さうして貰ひたいのが腹一ぱいでせう。何か一寸でもそんな風な樣子でも見せようものなら、それこそ飛びついて來ますよ。』

『そりや眞つ平御免だ。』と敬介は言下にきつぱり言ひ切つた。彼もそれを有りさうなことだと最初から恐れてゐたのだつた。『だがお前は……？』

『私だつて絶對に反對ですわ。たとひ何と泣きつかれても斷りますわ。』と靜子も斷乎たる決意を示した。『家だつて子供が

大勢で困つてゐるのに、その上人の子の世話なんか出來ませんわ。それでももつと年の行つた子なら書生にでもといふことがあるけれど、何しろまだ小學校の生徒で、家の坊やと同じ位なんですから取扱に困りますわ。殊に身内の者は何やかやと氣苦勞です。おまけに不良だといふんですから、若し家の坊やなんかゞそれに感化されでもしようものなら大變ですからね。』

敬介はその通りだと思ひ、妻がさういふ氣なら幸だと一應は安心したものゝ、而もさうなるとまた一方には、何かしらそれも本意ではないといふやうな、何物かに濟まないやうな忸怩たる氣持も心の何處かでしてゐた。のみならず、若し叔父夫婦にそれと哀訴嘆願されでもした場合、果してさうきつぱりと强く冷酷に斷り切れるかどうかと、自分を不安に思ひもした。

『不良だつて、どの程度のものだか知らないけれど、兎に角困つたことになつたものだな、叔父さん達も大に心配してゐるだらう。』

『えゝ〳〵心配してゐるどころの騷ぎぢやありません。それで昨日もそのことで、二人が此處で午後が間大騷ぎですの、叔母さんが例の通りだら〳〵と愚痴の百萬遍も並べて叔父さんに食つてかゝるやら、終ひはべそ〳〵泣き出すやら何やらで、もう〳〵弱つて了ひました。叔父さんはまたあの通り、はたで見てゐても齒痒い位薄のろつとしてゐて、何を言はれても口答へ一つし得ないし、そこをまた叔母さんがつけ込むやうに、何もかもあんたが惡るいんだ、あんたが意氣地がないからだ、あんたが甲斐性がないから、親子も夫婦も散り〳〵ばら〳〵になるやうなこんな慘めな暮しをしてゐなければならないのだとか、だから大切な一人息子を不良少年にして了つたのだとか、今更言つても仕樣のないことを何遍も〳〵執こく繰り返して、口ぎたなく喚くやら、罵るやら、愚圖るやら大變なの。そりやもう叔母さんとしては無理もないことなんだけれど、あんまり執こく小突き廻されるので叔父さんも可哀相な位。私も終ひに情ないやら聞き辛らいやらで、い

い加減に二人を打つちやらかしといて外へ逃げ出して了ひましたわ。』と靜子はその時の模樣を語つた。

『さうだつたらうな。あの人達としてはさう有りさうなことだ。』と敬介も、いつもの二人の樣子や性格の相違などを思ひ合せながら言つた。

『場合が場合だし、事柄が事柄なんですから、もつと優しく互に仲善くしみ〴〵と、あゝもしようか、かうもしようかと相談でもするならいゝんですけれども、叔母さんは初めから何でもかんでも惡いことは皆な叔父さんの所爲にして、只だ無暗にがみ〳〵いきり立つて當り散らすばかりで、叔父さんの言ふことなんかてんで受附けようともしないし、まるで一言も口をきかさないんですからね。あれでは相談にも何もなりやしない。』

『無理もないがね。――兎に角どちらも氣の毒は氣の毒さ。』と敬介は溜息を洩らした。

(二ノ一)

敬介は妻の叔父の小見山夫婦の境遇や生活を考へると、いつでも眞に慘めだといふ氣がして、同情を禁じ得ないのであつた。が併しそれは第三者として離れて眺めた場合のことであつて、彼等が常にわづらはしい係累として、現在はもとより將來にも亘つて、直接自分の上に乘りかかつてゐるのだといふことを思ふと、まるで胸に大きな癪でも痞へてゐるやうな、不快な重苦しい壓迫をも感ぜずにはゐられないのであつた。

彼等が敬介達を賴つて上京したのは、例の關東大震災直後のことだつた。尤も小見山だけは、震災前から出て來てゐて、三ケ月ばかりも敬介の家にごろ〳〵しながら職を探してゐたのだが、その中震災に遇つたので一旦郷里に歸り、暫くしてまた、今度は妻君の富枝と二人連れで轉げ込んで來たのであつた。その時小見山は五十二三、富枝は三十五六といふ年輩だつた。

敬介はそれまで一度もこの人達に會つたこともなく、靜子と結婚後十年にもなるが、自分の親類の中にさういふ人達の居ることさへ充分には知らなかつた程だつた。妻の靜子は年賀狀位遣り取りしてゐたらしく、時に「これは私の叔父さんです」と彼女宛の年賀狀を示たりすることもあつたが、敬介はたゞさうかとばかりで手に取つて見ようともせず、小見山良順といふその姓名など、會て記憶にも止めてゐなかつた。ところが震災の年の七月初め頃、ひよつこりその小見山良順なる妻の叔父がやつて來たわけだつた。

　小見山はそれより少し前に、靜子の所へ一本の端書をよこした。それは靜子に金を二圓貸して呉れといふ、思ひもよらぬ無心狀だつた。更に思ひがけなかつたのは、彼がそれまで住んでゐた越前の福井から、神奈川縣の横須賀へ來てゐるといふことだつた。どうしてどういふ人を頼つて横須賀などへ出て來たものか分らなかつたが、兎に角或る人の世話で今度東京本所の或る會社に勤めることになつたが、上京する旅費がないから貸して呉れといふのだつた。

　靜子はあまり突然で且つ意外なのにひどく驚かされた。本當かしらと怪しみもした。叔父が福井で大變困つてゐるといふことは、同市に住んでゐる彼女の妹からの手紙などによつて薄々知つてゐたが、それが今近くの横須賀なんかへ來てゐるなどとは夢にも思ひがけないことだつた。而も東京へ出て來る爲めのたつた二圓の旅費小使にさへ窮してゐるとは！彼女は何ともいへぬ暗い情ない氣持になつた。それほどまでに窮迫してゐる肉身の叔父を憐むのあまりには、たつたそれ位の無心を言つて來たその意氣地のない心根を思つて、腹の立つほど悲しかつた。無心を言ふにも程がある、叔父ともあらうものが、いや堂々たる男子ともあらうものが、たつた二圓ぽつちとは何事だ！恥しくて人に話も出來ないといふやうな氣がした。同時にまた今後何かにつけてさま〴〵の迷惑のかゝつて來ることも當然豫想されて、一寸心を曇らさずにも居られなかつた。

『だがその叔父さんといふ人は、よつぽど正直な善良な人らしいな。』と敬介は一種の好意に似た心持で輕い苦笑を浮べな

がら言つた。『普通の人なら、二圓必要なところならまあ大抵五圓も言つて來るところなんだが。』

『えゝ、そりやもう極く正直な善良な人なんです。一寸男振りもいゝし、やさしいおとなしい人だもんで、兄弟の中でも一番人に好かれてゐたんです。私の母なんかも始終さう言つてゐましたが、まあ謂はゞ少し善良過ぎる方なんですね。』

さう言つて靜子は簡單に小見山の身の上を語つた。彼は靜子の母のすぐ上の兄で、靜子達の村から十四五里離れた或る海岸の村の、かなり大きな眞宗の寺の三男だつた。が僧侶になるのが嫌ひで、宗門の中學も半途に退學し、半僧半俗の體でぶら〳〵してゐたが、田舍には珍らしい晩婚で三十五六になつて漸く今の妻君の富枝と結婚した。そして相當の財産を分けて貰つて別家したが、それから自ら漁業をやつて見たり、不慣れな商買に手を出したりしてゐる中、次々に失敗が續き、又人に胡魔化されたりして、遂には家も屋敷も皆な失くして了つた。それで結局村にも居られなくなつて、數年前縣廳所在地の福井市へ出て、保險や月掛貯金の勸誘員などになつてゐたのだつた。それから後のことは靜子は何にも知らなかつたが、今この無心の端書によつて、さては到頭その福井にも居れなくなつて、恐らくは妻子を郷里へ歸し、自分だけ何かの手蔓をたよつて横須賀へ出て來たのに違ひない、と彼女は推察せざるを得なかつた。

『併し、東京で勤め口があつてよかつたぢやないか、どんな會社へ出るのか知らないけれど。』と敬介が言つた。『お前も今後何かと頼りになれてよからう。』

『そんな人ならようございますけれど、たつた二圓のお金にさへ困つて、自分の姪に無心を言つて來るやうな叔父さんですもの。』と靜子は心細がつた。

敬介は兎も角早速送金するやう、それにはまさか二圓ぽつちりも不體裁だから、せめて五圓位も送るやうにと靜子に勸告した。靜子は良人の寛大を有難く思つたが、いろ〳〵考へて、矢張り二圓だけ送つてやつた。

小見山がやつて來たのはそれから二三日の後だつた。ところで段々話を聞いて見ると、東京の會社に勤めるなどといふ

のは出鱈目で、横須賀の家の者の好い加減な嬉しがらせを眞に受けてゐたに過ぎないのだつた。この横須賀の家といふのは、もう二十何年も前に、郷里の方で小見山の長兄の妾をしてゐた女が、長兄との間に出來た男の子を一人連れて後妻に行つてゐる所で、主人は荒木といつて建築請負師だといふことだつた。つまり小見山は、彼の長兄の昔の妾の子供――彼には義理の甥に當り、『その年の春徴兵檢査を受けた福井の方へ歸つた時久し振りに會つたのだ――を頼つて行つたわけなのだ。窮した餘りとはいへ、そんな僅かな手蔓を捉へて、全く筋違ひな所へ頼つて行つたところにも、彼の人の善さが示されてゐるが、結局十日ばかりも其家に居候してゐた上、體よく追出されて來たやうなものだつた。本人は少しもさうとは思つてゐなかつたが、いろ〳〵話の模樣で、敬介達には明かにその間の消息が察せられた。小見山のいふところでは、本所の何とか會社に勤め口があつたのだが、横須賀の荒木が、既に五十の坂を越えた老人の小見山に、今更他人の所に苦勞をさせるのは氣の毒だ、今度自分が東京の郊外に或る大建築の工事を請負ふから、その方の現場監督か何かの事務を執つて貰はう、又その上で郷里から妻君を呼び寄せ、人夫達の賄ひ方を受持たさう、兎に角二三日中に迎へに來るから、それまで見物旁々東京へ行つて居れ、と言はれたといふのだつた。敬介達は何だか怪しいと疑つてゐたが、小見山はすつかりそれを信じ荒木の迎へに來るのを待つてゐた。ところがその二三日が五日になり七日になり又十日になつても、荒木の所からは迎へどころか端書一本も來なかつた。それでも小見山は少しも疑つて見ようともせず、問合せの手紙一本出しもせずに呑氣に構へてゐた。やつと靜子がせゝついて樣子を聞きにやると、荒木が例の請負事業が落札出來なかつたので駄目だつたと、すぐその晩の中に戻されて了つた。

『それ御覽なさい、どうも最初から怪しいと思つてたら、矢張りその通りだつた。少し話がうま過ぎると思つてゐましたよ。』と靜子は當惑して言つた。

小見山は併し別に悲觀もせず、又荒木の不誠意を憤るでもなかつた。そして今後どうする積りかと尋ねると、東京で會

社か何かの事務員にでもなつて、妻子を呼び寄せるのだと、極めて簡單に無雜作に言つてゐた。

『そんなうまい譯にいくといゝんですがね、この不景氣な時節に中々さううまく問屋で卸して呉れませんよ。何處でも彼處でも緊縮々々で人減らしばかりやつてゐるんですもの。何の目算も手掛りもなしに漫然と田舍から出て來たつて、滅多にいゝ勤め口なんか見つかりつこはありませんよ。立派な肩書があつたり、身についた藝能を持つてゐたりしてさへ困難なんですからね。』と靜子は多少警告的な意味をも含めて實情を語つた。『よしんば、よつぽど運がよくて何か見つかつたとしても、あんた一人の口を養ふのがやつと〳〵ですよ。』

『なに、富枝には女事務員でも何でもやらせるから大丈夫や。』

小見山はまるで其邊に、自分や妻君の爲に拵らへられさういふ就職口が轉がつてゞもゐるやうに事もなげに言ふのだつた。東京の事情に通じないとはいへ、そのあまりに單純な樂天的な考へ方に、敬介も靜子も只だ共々に苦笑するばかりだつた。

かうして小見山は敬介の家に食客となつたが、さうなるともう何もかも敬介達に依頼しきつて了つて、自分の就職口を求めようといふのに、自分から何等積極的に動き出さうともせず、默つてゐても敬介達が何とかして呉れるだらうと思つて安心してゞも居るやうに、毎日何の爲すこともなく呑氣に悠長に構へてゐた。尤も自分ではどうして見ようもなかつたのだらうが、又如何に焦つたり慌てたりして見たところで急にいゝ勤め口なんか見つかるわけのものでもなかつたが、さればといつて、徒らに無爲に日の經つて行くのを氣にするでもなく、まるで東京へ遊びにでも來てゐるものゝやうに晏如としてゐるのだつた。少くとも敬介達にはさういふ印象を與へた。

『叔父さんてばまア、なんて呑氣な人だらう、いつまでもあんなに安閑としてゐてどうする積りなんだらう。自分一人はかうして家に居候してをれば三度の食事に事缺かぬからいゝやうなもの、國には妻子諸共人の家に厄介になつてゐるの

に心配にもならないものかしら。そんな事を考へたら一刻もぢつとしてゐられない筈だのに、まるで他人の事のやうにすつかり人頼りして了つて、他から喧しくせつつかねば、いつまでも平氣なんだから困つたものだ。』と靜子も呆れ顔に言つたが、敬介もまた、彼の爲に努めて就職口の奔走をしてゐながらも、何となく張合がなかつた。

それは單に小見山の氣持が悠長だとか樂天的な性分だとかいふだけではなく、もと〳〵何事に對しても神經が鈍く、その上最早生活力が減退して、積極的な意志の働きを缺いて了つてゐる人のやうにも思はれた。何事に對しても受動的で、行動も鈍く、まるでその心が眠つてでもゐるかのやうであつた。

『自分の叔父さんだけれど、何だか頼りのない心細い人ですね。東京なんかに暮して行けるかどうか、あの樣子では末始終が案ぜられますわ。人間は極くおとなしい、微塵けも惡る氣のない、正直一方の善い人ですけれど、少しもきび〳〵と拔け目なく立ち廻るといつたやうな所がありませんからね。』

靜子は時々そんなことを言つては心細がつたが、敬介もそれには全然同感だつた。

小見山はさすがに氏や育ちがよいだけあつて、零落はしてゐても何となく上品な感じのいゝ人だつた。擧止態度もしとやかで行儀も正しく、頭こそ禿げて老人染みてゐるが、色白の秀でた額と高い端正な鼻とをもつた細面の顏立ちも卑しからず、しやんとして坐るべき所に坐らせたならば、それこそ立派な好紳士たるに耻ぢないものがあつた。殊にその素直な溫良な恬淡な人となりには、敬介も心から好意を感ぜずに居られなかつたが、それ以上の、又それ以外の何物をも持つてゐないらしいのが、東京のやうな生存競爭の特に烈しい大都會に、產なくして生活して行かうといふのに極めて重大な障礙だといふことも思はずに居られなかつた。

『それに年も年ですからね。五十を三つも四つも越えて、もう疾うに人間一代經つて了つたやうな時分に、何の藝もない者が空手で東京へ出て來るなんて間違つてるんですよ。』

靜子はそんなことも言つたが、實際さういへばそれもさうに違ひなかつた。併しさうせずに居られなかつたところに小見山その人の不幸があり悲哀があるのだつた。運が悪るかつたのか、それとも彼自身にこれまで田舎で一家を支へて行くだけの力がなかつたのか、兎に角靜子の所謂人間一代經つて了つたやうな時分になつてから、東京の眞中に生活の道を求めて出て來なければならなかつた彼の境遇や身の上そのものは、十分同情さるべきであつた。で敬介は何とかして一日も早く然るべき就職口を得るやうにと、出來るだけ奔走して見たが、中々いゝ所が見つからなかつた。小見山もまだ敬介や靜子に鞭撻されて、眞夏の暑い日中に職業紹介所へ行つて見たり、新聞の廣告をたよりにあちこち歩いて見たりしたが、結局徒勞だつた。瓦斯會社や電燈會社などのやうな確實な所の集金人、學校や病院などの受附、華族か富豪の邸の執事か用人、又は別莊守、何かさういつた風な勤め口か又は住込の所がなからうかと、小見山の人物や性質などから考へて最も適はしいやうな就職口を、毎日あれこれと數へ上げて見るのであつたが、そんな望ましい所は、鐵の草鞋で探して歩いても容易に見つかるわけはなかつた。

『叔父さん一人なら、いつまでゝもあゝして食べさしといて、書生代りに使つとればいゝんですけれどね、頭こそ鈍活に働かぬけれど、あれで中々小器用なんだから、言ひつけさへすれば何でも小まめにちま〳〵とやりますし、ちよこちよこした小用足しに使ふのにもつて來いの人ですけれど、何しろ妻子のある身體だからさういふ譯にも行かないし、本當に困つたものだ。』靜子は終ひにさう絶望的に言つて嘆息したが、敬介も同じ思ひをせずに居られなかつた。

八月の中頃、小見山が來てから一ケ月以上も經つてから、その妻君の富枝から始めて敬介達の所へ手紙が來た。小見山は呑氣にも、それまで妻君の所へ自分の居所も知らさずに居たのだつた。富枝はその手紙で、先づ良人の良順が長らく厄介になつてゐることの禮を述べ、又今迄何にも知らなかつたのでとその缺禮を謝し、それから本文に入つて、彼女達が近年不幸續きで生活の安定も得られず、あちこちと居所を移し歩いた後、今は親子も夫婦も皆な別れ〳〵に他人の厄介にな

つてゐなければならないやうな悲慘な境遇にあることを訴へた上、彼等をその不幸と窮境とから救ひ出して呉れ、即ち良順に早くいゝ勤め口を與へ、彼女と子供達を一日も早く呼び寄せるように計つて呉れといふやうなことを、こま〴〵と書いてあつた。敬介はその手紙を讀んで、その文章のうまいことゝ、その能筆とに感服した。それは迚も小學校を出たきりの女の書いたものとは思はれぬほど、その文章も筆蹟も巧みなしつかりしたものだつた。

『……どんなに不幸だと申しても、親子夫婦別れ〴〵に暮さねばならぬほど不幸な慘めなものはあるまいと思ひます。兩親が揃つて生きて居りながら、幼ない二人の子供を冷たい他人の手に託して、哀れな日傭者の生活をさせて置きますことは、親の身として實に堪へ難い苦痛で御座います。子供に對しても本當に罪なことだと思ひます。それを思ふと、私は實際腸を斷たれるやうに辛らく、日夜涙の乾く日もないほど悲しい思に浸り續けてゐる樣な次第で御座います。どうかかうした悲慘な境遇に居る私達を哀れと思召し、御同情を以てこの窮境よりお救ひ下さいますよう幾重にも〳〵懇願致します。如何に貧しくとも、親子夫婦諸共に一つ家に生活出來ることほど樂しい幸福なことはないと思ひますが、私達にその幸福を與へて下さいますのは此世にあなた樣方お二人の外にはないので御座います……』

　こんな風に、如何にも敬介達の同情をそゝらうとするやうに書いてあるのだつた。文筆を業としてゐる敬介といふものを眼中に置いて、特に念入りに美しく文章を飾つたものらしく、十八九の文學少女の手紙みたいな甘つたるい感じもあつたが、併しさう惡るい氣持のするほどのものでもなかつた。

『中々名文ですわね』と靜子もそれを讀み終へて言つた。『それに字も上手ですし、言ふことも中々しつかりしてゐますわね。』

『少し文章を飾り過ぎてゐるけれど、言つてることは本當だね。』

『さうですよ、考へて見ると叔母さんといふ人も隨分氣の毒な人ですよ。亭主に働きがないばかりに、手紙にもある通

り、親子夫婦が別れ〳〵になつてゐなければならぬ始末ですからね。嘸ぞつまらない寂しい思をして居なさることでせう。』

聞くと富枝は彼女の實家に、二人の子供は小見山の生家、即ち彼の長兄の所に、互に十里も離れて別れ〳〵に口を預けてゐるのだといふことだつた。

『それにこれから先だつて、あんな叔父さんを頼りにしてゐたところで、どうなるか分らないし、前途の暗い話ですよ。』

と靜子は續けて言つた。

『やゝ心細いな。』

敬介も一寸その富枝といふ女に同情した。彼は富枝の手紙の文面や、その美しい達者な筆蹟などから、かなり綺麗な、小見山のやうな年老には不釣合なほど若い、元氣盛りの女を想像した。(事實小見山と富枝とは十六七も年が違つてゐるのだ)そして既に頭が禿げ、身心共に去勢されたやうに活氣を失つた、薄ぼけた感じの小見山の側に置き並べて見て、何かしら一種不安に似たものを感じた。靜子の語るところによると、小見山は何故かその妻君の富枝が元からあまり氣に入つて居ないのだといふことだつた。これまで二度も三度も離縁しかけたけれど子供が居るので仕方なく思ひ止つたので、更に夫婦らしい暖かい愛情なんか持つてゐないと、小見山自身が話したといふことだつた。

『でも、如何に貧しくとも、親子夫婦諸共に一つ家に生活出來ることほど樂しい幸福なことはないなんて、大いに愛情の濃やかなところを見せてるぢやないか。』と敬介が言つた。

『そりやあんた他人に見せる手紙ですもの。』

と靜子は笑つた。

靜子はその手紙を小見山にも見せた。そして言つた。

『困りましたわね、叔母さんはそんな風に言つて來なさるのに、あんたはいつまでも仕事が見つからないし、どうしますか。』

小見山は流石に言葉なく打悄れた。

『この様子ではとても急に望みがありませんから、いつそのこと東京なんか思ひ切つて、國の方で何かやつて見るとか、誰かに資本でも出して貰つて何か商賣を始めるとか、何とか方針を立て直す必要がありますね。でないと、叔母さんだつて可哀相ぢやありませんか。いくら困るからつて、亭主や子供とまで別れ〳〵になつてゐるなんて本當に慘めですよ。叔母さんも嘸ぞ寂しい心細いことだらうと同情しますわ。』

『なに、あれは却つて氣樂でいゝやらう。好き勝手なことが出來て。』と小見山は氣にも止めぬやうに言つた。

『まあ！』と靜子は呆れ顔に言つた。『そんな呑氣なことを言つてどうするんですか。幾ら自分の生れた家だつて、出戻りか何かぢやあるまいし、ちやんとした亭主のある者が一月も二月も鐚一文の仕送りも受けずに厄介になつてゐるなんて、どんなに肩身狹く氣苦勞が要るか知れませんよ。』

そして戯談半分に笑ひながら、

『それに若し、長い間かうして離れ〳〵になつてゐて、何か間違ひでも起つたらどうします？』

『なに構はん、色男でも何でも勝手にこしらへたがいゝ。その方が却つていゝよ。』

『そんな無茶な話があるもんですか。』

『いや本當だよ。俺はもう女なんかに用はないし、あれと別れて獨り身になつた方がどんなに氣樂か知れない。又あれの爲にもその方が得やらう。あれだつて一寸も俺なんかと一緒になつて居たくないんだけれど、子供が居るから仕様事なしにあゝしてゐるだけのもんや。』

小見山は事もなげな輕い調子で言つて苦笑したが、その言葉の節々には、單に一場の戯れ言とのみ聞き流すことの出來ないやうなものがあつた。敬介はそれを聞いてゐて、何となく憂鬱になつた。

（二ノ二）

さうかうしてゐる中に、例の九月一日の大震災が襲つて來た。もう小見山も就職どころの騒ぎではなくなつて了つた。かうなつては最早どうにもならないからと言つて、一ケ月あまりの後輸送機關がやゝ回復されるのを待つて遂に空しく郷里へ歸つて行つた。で敬介達もほつと肩の荷の下りたやうな思ひをしたのであつたが、間もなく翌年の春早々、又候突然上京して來た。而も今度は一人でなく、妻君の富枝まで一緒だつた。

彼等は今度はその儘東京に永住するつもりで出て來たのだつた。田舍に居てもどうしても生活の道が立たないので、二人の子供は暫くこれまで通り小見山の生家に預け、これから復興しようとしかけてゐる東京には、震災前と異り却つて幾らも仕事があるだらうとの期待の下に、まあ謂はゞ背水の陣を布いて出て來たのであつた。

『私はもういざとなれば女中奉公でも何でもする積りで出て來たんですよ。』と富枝は初對面とは思はれぬ狎れ〳〵しい調子で敬介達に決意を語つた。『何しろ二人の子供が居るもんですからね。この子供等だけは、たとひ如何なる苦勞をしても、高等の教育まで施して一人前にしてやらねばならんと思つてね、その爲ばつかりに住み馴れた生れ故郷まで捨てゝ了ふ氣になつたのですよ。』

富枝はそれから尚ほ續けて、これまでの不幸な生涯や、今後の方針や希望などについて語つた。相當な寺の長女として生れたのだが小さい時から冷酷無情な繼母の手に育てられ、小見山に嫁してから以後今日まで、遂には住む家もなくなり、子供とさへ別れてゐなければならぬやうな惨めな境遇に陷つたほど貧困な生活を續けて、未だ曾て幸福な思をしたこ

ともなく、これまで單に子供の愛のみによつて生きて來たのであるといふことや、現在丼に將來の幸福も希望も、またその子供の成長の上のみに係つてゐるのだといふことなども嘆き訴へるやうに語つた。

彼女は中々雄辯だつた。大きな稍高い聲で、調子もはき／＼してゐた。そして少しも惡怯れたりおづ／＼したりするところがなかつた。併しそれだけに何となく女らしい優しみや情緒的なしとやかさやが少く、妙に荒つぽい、惡るくいふと我武沙羅らしい壓服的な感じを惡く人に與へた。それには彼女の容貌や體格などが大に關係してゐるらしかつた。それは全體として十人並ではあるが、大柄な、色の淺黒い、頬骨の高い、口の大きな、唇の厚い、何處か野性的な感じのする粗大な顔だつた。それに異常に毛深く、おまけにじやり／＼した、一本々々逆立つてゞも居るやうな粗い太い性の惡るい毛だつたが、それで束ねた鬢の廣い大きな髷を笠のやうに被つてゐるので、一層さうした感じを深めてゐた。背は普通だが、男のやうに骨組の大きながつしりした體格で、肉附もよく、何となく一種の壓迫を感じさせるやうないかつい圖體の女だつた。ドス黒い血でも全身に漲つてゐるかと思はれるほどだつた。三十五六といふ年齢には、若過ぎもせず老け過ぎても居ず、女として正に爛熟の絶頂にあることを思はせた。

敬介はこれがあのいつかのすら／＼とした美しい筆蹟の、哀れつぽい文句に充ちた手紙を書いた女かと、稍々豫期に反した失望の心持で彼女の横顔を眺めた。感じからいつても氣分からいつても、又人間のタイプからいつても、すべての點に於て夫の良順と對蹠的であるかに思はれた。

『何だか恐いやうな猛々しい感じの人ですね、あれでは叔父さんのやうな上品なおとなしい一方の人と性が合ひさうもないわ。』

かう靜子が後で批評したが、その「猛々しい」といふ評語は、よく彼女の人となりを言ひ現はしてゐた。何となく邪見な女だといふ感じもないではなかつた。それは兎も角敬介達は非常な迷惑を感じた。まだ何處を見ても燒野原で、復興と

ごろが秩序も十分に恢復してゐない所へ、單に世間の景氣附けに唱へられてゐるに過ぎない復興に關する宣傳的な新聞記事などに煽てられて、何の當てもなしにいきなり出て來たところでどうなるものかと、彼等の無謀や輕卒を咎めるよりも、あまりに人の迷惑を無視して、その好意を强要するやうな圖々しい態度を憤りたかつた。丁度その頃京都から敬介の甥が文學を志して出て來て食客となつてゐた。それに前から書生代りに世話してゐる郷里の親類の息子も居た。その上四人の子供があり、さらでだに家が狹く困つて居る所へ、いきなり夫婦連れで大きな荷物と一緒に押しかけて來たのだから堪らなかつた。たつた五間しかない小さな家は、どこも彼處も人に埋つて殆ど足の踏み場もない位に混雜だつた。

『こりややりきれない、俺はもう逃げ出すよ。』

敬介は半ば泣き聲で長大息したが、靜子も同じ思ひで、皆の三度の食事の爲だけにでも終日身心を休める暇なく追ひ廻されてゐた。併しどうにもならなかつた。まさか追ひ出すわけにもいかず、結局無理に小見山達の哀れな境遇に同情することを以て幾らか締めるより外はなかつた。

小見山達は始めは矢張り何かの會社の內勤の事務員のやうな知識階級的な綺麗な職業を望んで、新聞の廣告や職業紹介所などについて方々探して歩いたが、何處にも思はしいものがなかつた。段々望みを小さく低くして、旅館の帳場に女中頭といつたやうなことや、病院や學校の寄宿舍の賄方といつた風なもので、二人が一緒に住込めるやうな所がないかなどと言つてゐたが、それも要するに空想に過ぎなかつた。たゞ在るものは男には肉體的の自由勞働か、大工か左官などの技術工、女にはカッフェの女給位のものだつた。だがその自由勞働者たらんにも、小見山の年齡や體力が之を許さなかつた。カッフェの女給となるには富枝はあまり年を取り過ぎて居た。たとひ年齡を問はないにしても、さういふ方面の職業で比較的金になりさうな好い所では、それに應ずるだけの衣裳と美貌との資本が必要だつた。正に復興途上にある帝都には、自分達の身にも適した仕事が澤山あつて、すぐにも生活の安定が得られるもの〻やうに考へて居たのが、單なる無知な淺

甚な夢に過ぎなかつたことを知ると、富枝は極度に失望し落膽した。その結果、自然に氣が焦立ち心も荒んで、何かにつけて小見山に食つてかゝつて、時々醜い夫婦喧嘩など始めるのであつた。

『あんたが悪るいんです。あんまり考無しだからいけないんです。だから、私があんなに何度も注意したんぢやありませんか、よく／＼後先のことを考へたりこちらの事情もよく確かめたりしてからでないといけないつていふのに、うゝん大丈夫だ、今なら復興最中だから幾らでも就職口があるからなんて、飛びつくやうなうまいことを言ふもんだから出て來たのに。こんな有様で一體どうなるんです。あんたは何時でも、又何事でも斯うだから駄目なんですよ。あんたみたいな間抜けた頓間な人つたら世界中にありやしない。だから私や子供までこんなに苦勞しなけりやならんのです。本當に愛想が盡きる。』

こんな風に富枝は、例の壓服的な調子で、人前でも何でも頓着なく、良人の良順を口穢く罵倒するのだつた。彼女の癖として、さういふ場合には何でもかんでも悪るいことは皆な良順に責任を負はせ、言つても返らぬ昔のことまで引合に出し、良順の至らぬことを今更のやうに愚痴だら／＼と幾度も同じことを繰返して執こく責め立て苛めつけるのが常だつた。さうした彼女の習癖を知つてゐる小見山は、そんな場合いつも默つて負けてゐるのを常とした。たとひ自分の方に正しい道理があつても、苦もなく口達者な富枝に言ひ負かされ、たまで口を利かせられないことが多いので、富枝に無理でもなんでも勝手に言はせて、自分はいつも沈默の牙城に逃げ隱れ、忍辱に堪へてゐるのだつた。そしてさういふ場合の彼は、實際はたの見る眼も傷ましいほど哀れな慘めな姿に見えた。僅か七日か十日の間にも、敬介達は幾度もさうした場合に遭遇したが、理非は何れにあらうともあれでは叔父さんが氣の毒だと、いつも二人は良順の方に同情を寄せるのが常だつた。

『そりや元々叔父さんが腑甲斐ないからのことでせうけれど、今更そんなことを言つて責め立てたつて仕様がないぢやありませんか。あの人だつて只だぼんやりとのろくらしてゐるぢやなし、あれでもどうかしてと思つて、いろ／＼心配しな

から、一生懸命に仕事を探し廻つたりしてゐるのに、その腹にも入つて見ずに、何でもかんでも叔父さん一人の罪にして、あゝ頭からがみ／＼痛めつけるなんて、可哀相ですわ。』

靜子はさすがに肉身の情で、いつも蔭でそんな風に言つては小見山を憐むのであつた。

半月以上も經つても、小見山達は二人共まだ就職上に何等の曙光をも認め得なかつた。で或時、もはや東京に望を絶つて、富枝の主唱で北海道へ行かうとの相談を始めた。それといふのは、曾て郷里で小見山と共同で鰊網の漁業をやつた男が、それに失敗した時多大の損耗を小見山一人に背負せたまゝ北海道へ逃亡し、今は北見の端の稚内に鰊漁か何かやつて相當に成功してゐるといふことだつたので、昔の關係もあるからその男を頼つて行かうといふのであつた。その男は今でも時々手紙を寄越し、その度に昔の不義理を詫びて何とかそれに酬ひたいと言つてゐるとかで、いろ／＼話を聞くと大變都合がよさゝうなので、敬介達もその議に贊成し、旅費の心配位はするからといつて、熱心にその決行を勸告した。そこで二人共すつかりその氣になり、早速その男へ手紙を出し、返事など待たずにいつ何日に立たうといふことにまで話を定め、汽車の時間まで調べて、その準備をしてゐた。ところがその矢先へ、その男から差止の電報が來た。今は冬で時節が悪い、夏まで待てといふのであつた。さう言はれると實際それに違ひなく、それも一時見合さねばならなかつた。

それからまた二人は仕事を探しに寒い空風の吹く中を出歩いた。今は最早あれこれと選り好みしてゐられる場合でもないから、何でもその場にやれることをやらうといふ悲壯な決心の下に。そして富枝は本所の或る安食堂の給仕女に住込み、小見山は試みに或る建築工事の人夫に雇はれて見ることになつた。敬介達も流石そのあまりに慘めな有樣に涙なきを得なかつた。

『まあ、何とした哀れな話だらう。最初から田舍で坊さんになつてゐたら、今時分こんな難儀苦勞をしなくても、誰にも彼にも御院主樣奥樣と崇められて、絹の蒲團にまるこつて居られたのに。』と靜子は涙を流さんばかりに言つた。

ところで小見山は、二三日經つともう迚も身體が續かないといつて止めて了つた。富枝は一月足らずの後、そこの料理人の世話とかで、或る場末の小さな西洋一品料理屋の女給に住み替へたが、それを手始めに、彼女はそれから以後ずつと、あちこちの場末の小レストランで女給生活を續けるやうになつた。又小見山は、それから一ケ月餘の後、漸く手蔓を得て郊外の或る精神病院の看護人に採用され、日給六十錢で其處に住込むことになつた。

（二ノ三）

かうして二人は漸くのことで、夫婦別れ〳〵ながらもどうかかうか生活の途がつくやうになつた。二人とも最初の希望や期待に反すること大なるものがあつたが、併しそれ以上多くを望むのが無理だといふことが、今やはつきりと二人の胸に感ぜられた。兎も角も二人はそれで滿足し、敏介達もほつとした。

富枝の最初の間の女給姿は、やゝ氣の毒な感じのするものだつた。あの年齡で、あの山出しの粗野な顏や容で、そしてあのいかつい無骨な身體で、それをば無理に掩はんが爲に、まるで十七八の小娘のそれのやうな、派手な大柄な着物を着、こて〳〵に白粉を塗り、小さなエプロンをぼて〳〵に張りきつた胸にかけて、取つてつけたやう不自然な媚をさへ作つて客に接してゐる樣子には、思はず顏を外向けたくなるやうな慘めな傷ましい感じがあつた。人によつては憐れとも嫉ましいとも思ひ、中にはまた『ひやッ、こいつア怖いや、まるでお化けだ！』などと、露骨な嘲笑を浴びせる口の惡るい客もあつた。けれども段々月日が經つにつれて、いつか次第にその顏や容が綺麗に垢拔けして、年齡や體格にも拘らぬ派手な服裝もさほど不似合ではなくなり、エプロン姿もちやんと板について來て、半年ばかりの中には、すつかり女給らしい型にはまつて了つた。それに始終年若な朋輩や男の客などの間に交つてゐるので、氣分も自然に若々しくなり、顏も一寸見ると二十四五位かと思はれる程の若さに見え、その上爛熟した女に獨特の魅力も添はつてゐるので、常連の客などに

は却つてもてる位だつた。

『私も到頭カツフエの女給になつて了ひましたわ。』

或日敬介達の所へ遊びに來て、富枝は幾らかそれを恥づるかのやうな調子で言つた。

『いゝですとも、一寸もそんなことを恥ぢる必要なんかありませんよ。カツフエの女給だつて、今ではもう立派な職業になりましたからね、相當の家の妻君なんかでも幾らもやつてゐますよ。』と敬介も慰めるやうに言つた。

『田舍の人達が聞いたら何とか言ふでせうけれど、でも仕方がありませんもの。これもみんな二人の子供の爲ですわ。少し宛でも月々仕送りしなければなりませんし、將來の敎育の爲にも、一文でも餘計金のたまるやうなことをやらねばなりませんからね。』

『さうですとも、まあいろ〳〵辛らいことや厭なこともあるでせうが、我慢して大いにやるんですね。』

『えゝ、私もうすつかりさう覺悟をきめましたわ。始めは隨分厭な思ひもしましたけれど、馴れたら何でもなくなりました。却つてこの方が氣樂でよう御座いますわ。――まあ二三年もこんなことで稼いだら、その中自分で何か小さな商賣位始められるやうになるでせう。』と富枝は今からそれに望みをかけ、且つ自信あるものゝやうに言つた。相當收入があるらしかつた

『えゝ〳〵、それはもうなれませうとも。』と靜子は阿ねるやうに言つた。『まあ〳〵茲暫くの苦勞ですわ。その中きつと成功しますよ。商賣でも始めて、少し風向きがよければすぐ盛り返しますからね。こなひだ叔父さんともそんな話をしたんですが、叔父さんもそんな氣持でほし〳〵儉しくしながら働いてゐるらしいんですよ。』

『あの人なんか、何の足しにも賴りにもなりませんよ。』と富枝は急に突放すやうな冷かな調子で言つた。『自分さへ樂に暮して行ければ、私や子供なんかどうなつたつて構はうともして吳れない人ですからね。そりや私や子供に對して冷淡

な、情愛のない人ですよ。だから私は何するにしても、あの人なんか一寸も當てにしてゐませんの。』

　さう言はれると、靜子は妙に嬉しくなかつた。その時に限らず、富枝はいつも自分の亭主の良順のことをそんな風に見縊り、且つ彼等の今日の不幸が、全部良順の責任のやうに言ふのであつたが、靜子にして見れば、たとひ叔父がどんなに無能な男であらうとも、それはあまりに叔父の氣持に理解も同情もない、且つ人格を無視した殘酷な言ひ方だと不快に思はずに居られなかつた。彼女はそれ以後富枝に對してあまりいゝ感情を持つことが出來なかつた。そして叔父の良順が、運拙く幸薄く、あの老體にも拘はらず、又その昔の氏や育ちにも拘はらず、狂人達の糞便の後拭ひをしたり、夜の目も寢ずに病院の廊下に立番してゐる傷ましい落魄の姿を思ひ浮べると、堪らないほどいとしくなるのであつた。叔父及びその一家が今日かういふ悲境に陷つたからといつて、どうしてそれが全部叔父一人の罪だといへよう。寧しろその一半の責任は、妻の富枝も背負ふべきものではあるまいか。又如何に無神經な彼であらうとも、自分の子供等に對してどうしてさう冷淡で無情であり得よう。言葉や形にこそ現はさね、心の中ではどんなにその現在や將來のことについて思ひ惱んでゐるかも知れないのだ。

『なに、あれ（富枝のこと）は何でもかんでも自分ばかりがいゝやうに言ふ女だよ。そしていゝことは何でも自分の手柄にして、惡いことはみんな人に被せるんだよ。俺が子供のことなんか一寸も構はないやうに誰にでも言ひ觸らして歩くけれど、そんな馬鹿なことがあるもんか、俺だつて人間だもの、いや子供の父親なんだもの、愛もあれば責任も感じてゐるよ、あいつは自分の子供にまで、俺のことを惡く宣傳するんだからな。』

　彼女は曾てこんな風に述懷してゐた叔父の言葉をも思ひ出さずに居られなかつた。

　富枝は二た月か三月に一度位づつ敬介達の所へ顏を出したが、一度々々見る度毎に、彼女が若々しく艶つぽく粧ひ、コケツチツシユな感じを増しつゝあるのを敬介達は見逃さなかつた。そしてそれに對して一種厭惡に似たものを感ずると共

に、時には變な惡推量することもないではなかつた。何とも斷言出來ない、少くともさういふ危險性を帶びてゐないとは言へない、と二人は密かに噂したこともあつた。

『何しろあの人達は夫婦だか何だか分らないんだからな。同じ東京に居ても、別々に暮してゐて、一緒になる機會なんか殆どないんだからな。たまに何か相談事の起つた時に、此處の家で落合ふ位なもので、それとて話さへ濟めば別々にさつさと歸つて行くんだし。あれでもたまには何處かで會つて樂しむことがあるかしら。』

『さあ、どうですかね。そんなことは、まあ、なさゝうですね。それにあの叔父さんときたら、色氣なんかもう疾うに無くなつて居ますよ。自分でもさう言つてゐますし、あの樣子を見てもさうとしか思はれませんよ。まるでよぼよぼの爺さんですからね。ところが自分ではそのことを自慢してるんだから可笑しいぢやありませんか。だから、あんなに年甲斐もなく、活氣も何もないんですよ。いつか叔母さんもさう言つてゐましたわ。もう叔父さんには亭主の資格がないんだなんて。』

『ところで叔母さんときたら、あの通り若いんだからね。』

『えゝ、それに以前と違つて今の生活が生活ですからね。他からの誘惑も多いでせうし、自分だつて始終若い男の人やなんかと交つてゐるんですもの、いつどんな魔がささないとも限りませんわ。ひよつとしたら、叔父さんなんか、もう好い加減に見限られて了ふかも知れませんわ。あんな甲斐性のない叔父さんなんかと一緒になつてゐたつて、一生幸福にはなれませんからね。』

『まさかそんなこともあるまいが、兎に角變挺な夫婦だな、年が違ひ過ぎてゐることもあるが、お互にどつちもあんまり好いては居ないやうだし、何だか不自然な、お互に不幸を持ち寄つて來てるやうな感じで、何の爲に夫婦になつてるのか分らないやうな人達だ。』

『本當ですよ。お互に愛もなければ尊敬もしてゐない、たゞまア子供があるばつかりに、あゝして名ばかりの夫婦になつ

てゐるやうなものですね。子供さへなければ疾つくの昔に別れて了つてゐますよ。今でも二人とも公然とさう言つてゐますもの。』

『而もその子供が滿足に養育出來なくて、かうやつて所謂親子夫婦互に離れ〳〵の不幸な生活をしてゐる始末なんだから因果だよ。實際何が何だか分らない、考へると只だ憂欝になるばかりだ。』

そんな風な狀態で、日が經ち月が過ぎ年も移つた。小見山達が東京へ來てから、もう一年半にもなつた。彼等は最初郷里を出る時、その子供を、彼等が東京で就職口を見つけて、生活の途が開け次第引取るといふ約束で、小見山の生家即ち彼の長兄の家に預けて來たのであつた。ところが、彼等が兎も角どうにかうにか職に就くことが出來たには出來たが、何しろ二人とも住込みで、一緒に家を持つことが出來ず、最初の一年が過ぎても、又その次の半年が經つても、まだその約束を果すことが出來なかつた。又急に履行し得る見込も立つてゐなかつた。で時々先方から履行を迫られる毎に、彼等は、その事情を訴へ（富枝は女給をしてゐることは秘密にし、たゞ或所に勤めてゐるといふだけで、文通はすべて敬介の家の氣付で取交してゐた）もう暫く〳〵といつて延ばして貰つてゐた。

丁度長男の繁が尋常五年から六年になり、長女のみよ子は四年生になつてゐたので、せめて繁が卒業するまで何とかして預つて貰はう、來年中學へ入る頃になつたら、その時はその時で又何とか方法がつくだらうから、と彼等は腹の中で獨り極めに考へてゐたのであつた。又それ位のことは向ふでも暗默の裡に承知して吳れてゐると思つてゐた。ところが今度――それは七月初めのことだ――突然藪から棒のやうに、前に言つた通り、繁が不良で困るから早速引取れといふ、非に急な、そして又最後通牒的な非常に强硬な談判の手紙を受け取つたのであつた。差出人は小見山の長兄ではなく、最近家督を相續して新たに主人となつたその長男の淨祐であつた。そこで小見山達は大に驚きもし狼狽もし、取り敢えずいつもさういふ場合の相談相手であるところの敬介の所へ、旅行中とも知らず一緒に驅けつけて來た次第だつた。

三

翌くる日の午後、小見山達は案の定再び敬介を訪れて來た。そして事情を話す代りに、郷里から來た手紙を示した。敬介は形式的にざつと眼を通した。詳しく讀まなくとも、昨夜妻の靜子から聞いた話でよく内容が分つてゐた。

『困りましたね。どうしたらいゝもんですかね。』

敬介は先づそんなことを言つて見るより仕方がなかつた。

『それに不良になつたといふんですから、一層困りました。あなた方も何よりそれが心配ですね。』

その一言に刺戟されてか、富枝はその時もう早くもしく／＼泣き出した。幾らか作り泣きめいても居たが、併し大切な一人息子が不良少年になつたといふ報告は、それがどんな性質及び程度のものか充分には不明だつたにしても、彼女にとつては實に殆ど致命的の大打撃には相違なかつた。

『私はもうそれが何より心配で／＼、昨夜なんか一眼も眠られませんでした。』

『どんな程度なのかどんな樣子なのか一向分らないけれど、どうしてそんな風なことになつたものですかね。』

敬介は話が横道に入ることを知つてゐたが、外に言ひやうもなく、他人の時でもするやうに言つた。

『何しろ、小さい時分から冷たい他人の家に居るんですからね。無理もありませんわ。不良になつたと聞くと、私は尚ほ更可愛相でなりません。どんなに今迄他人の中で小さい心を痛めて苦勞したらうかと思つてね……』

聞くとその子供等は、小見山達が福井市へ出た時から良順の長兄の家に養はれてゐたのださうだつた。もう五六年にもなるのだつた。そして富枝は、良順の長兄は極く善良な温かい心の人だけれど、その妻君なる老婆と最近寺の嗣を繼いだ長男淨繭とが、血も涙もないやうな冷酷な人で、榮やみよ子がこれまでどんなに酷く虐待されてゐたかといふことを、い

ろ〳〵例を擧げて說明し、これも元はといへば、良人の良順が妻子をも養ひ得ないやうな無能短才の男だから、遂にこんな悲しい結果を招くに至つたのだと、返らぬ愚痴をこぼし始めた。

『また十八番が始つた。今更そんなことを言つたつて何になるか。』と小見山は苦々しげに舌打した『そんなくだらない愚痴をこぼしてる暇に、これからどうするかといふことを相談しないかい。』

『でもさうぢやありませんか。みんなあんたの責任ですよ。繁は決して不良少年になるやうな子ぢやなかつたんです、今迄始終一番か二番で通して來て居た程、よく出來た子だつたぢやありませんか、それだのに……』

富枝は理非をも辨へぬ駄々兒のやうに例の疳高い調子で食つてかゝつたが、小見山は默つて相手にならなかつた。かうした富枝の取亂した、自分の夫を蔑にしたやうな態度は、たとへその心持には同情すべきものがあるにしても、あまりいい感情を敬介達に與へなかつた。

それからいろ〳〵あつて話は本題に入つて行つた。問題そのものは極く簡單だつた。小見山達が子供を引取りさへすればすぐ解決されるのであつた。だが、彼等の生活が、未だそれを許す狀態になつてゐないので困るのであつた。引取るとすれば彼等は二階借りでも何でも兎に角一戶を構へなければならないし、さうするには彼等は、少くとも母親の富枝だけでも今の職業をやめて、傍ら子供等の養育をしながらやつて行けるやうなものを他に求めねばならなかつた。それは併し今のところ到底不可能に屬してゐた。そのことについて何か名案はないものかと四人の者が知惠のありたけを搾つたが、要するに只だ互に空想を語り合つたに過ぎなかつた。結局一時凌ぎの策として、せめて來年の春繁が學校を卒業する迄、無理にでも今迄通り田介の家に置いて貰ふように泣きつくより外はあるまいといふことになり、小見山はそれに異論なかつたが、併し富枝は容易にそれを肯じなかつた。彼女は、たとひ先方でその請を容れて呉れたにしても、さうすればその間に繁の不良性が益々嵩じて、終ひには取返しがつかなくなるに違ひない、と、それを最も恐れ憂へるのであつた。今の中に何

どでもして自分の側に引取り、溫かい母の愛情を以て訓育を施して行つたならば、きつと矯正されるに違ひない、否さうしなければ一生の破滅だ、と思ふのであつた。それに先方の人達に對する反感や憎惡の念もかなり手傳つてゐた。彼女は前々から、いろ〳〵な事情で小見山の生家の人達に對しては好い感情を抱いてゐなかつたが、その爲今後の事件についても、元々人一倍感情的な彼女は、我が子可愛さのあまりに一層冷靜な思慮を失ひ、只だ一途に彼等郷里の人達が、自分の子供に不良少年の汚名を被せ、自分達の困ることを知りながら急に追ひ出さうとしてゐるもの丶やうに僻んで考へ、さういふ冷酷な不人情の人達に、かうなつた以上今更おめ〳〵と頭を下げて泣きついて行くなどは、到底忍び難い屈辱に感ぜられるのであつた。又さういふ人達の家には、此上一日も自分の大切な子供などを託して置けない、繁が不良に陷つたのも、畢竟彼等が溫かい愛と眞心とを以て慈しみ且つ導いて與れなかつたからだ、といふ風に、却つて先方の人達を恨みに思ひさへするのであつた。で、それなら仕方がないから、兎も角先方の言ふまゝに繁を引取り、東京で何處かへ小僧にでも入れたらどうかといふに、それも彼女の忍び得るところでなかつた。母としての純眞な本能的な愛憐の情の外に、彼女の一種の虛榮心も之を許さなかつた。彼女は飽くまでも繁に高等の教育を施してやりたい又やらなければならぬといふ無理のない世間並の考から、どうしても脫することが出來ないのであつた。敬介は今はそんなことの言つて居られる場合ではないと、理屈で說き伏せることは知つてゐたが、併しその場合の富枝の感情まで說破することの困難をも、またよく知つてゐた。

『それぢやどうにも仕樣がないね。』

彼は遂に投げ出すやうに言つた。富枝も途方に暮れたやうに、深い〳〵溜息を吐いた。そして恰も罪人のやうに默然として打ち悄れてゐた。小見山は最初から多くを語らず、否その語るところを知らず、又その權利を持たぬものかのやうに、硬い無表情な顏して、きちんと行儀正しく沈默勝に端坐してゐた。いろ〳〵と嘆いたり訴へたり仰づたりして、子供

のことについての心配や苦勞を一人で背負つてゐるかのやうに言つてゐる富枝よりも、寧ろ彼の方がより多く心を痛め惱ましてゐるのだといふ氣がした。敬介は何となく涙ぐましいやうな氣持に動かされ、もう少しで自分から繁を自分の家に預つてあげようと言はうとした。それはその場合彼等の最も望み願ふところであり、彼等を最も喜ばし最も幸福に感じさせるところのものには違ひなかつたが、併し輕々しく一時の感傷的義俠心に動かされてもならないと思つて、辛うじてその衝動を抑へつけた。

『本當にどうしていゝか、頭がぼうつとして、譯が分らなくなりましたわ。自分の生んだ子供の一人や二人位自分の手で育てることが出來ないなんて、自分ながらあんまり哀れな情ない氣がして、いつそのこと、みんな殺して自分も死んで了ひたくなつた。』

富枝はさう絶望的に言つて、自分から笑ひ出した。敬介は恰も自分が責められ恨まれてゐるやうな氣がした。

結局その日一日、夜おそくまでかゝつて、いろ／＼に積んだり崩したりこね廻したりした後、漸くまとまつた話は次のやうなものだつた。つまり二人の子供を親の手許に引取るといふことを原則としてゞあつたが、それは富枝がカッフエをよして素人下宿を始めようといふのであつた。これなら割に簡單に出來ることなので、富枝もかなり乘氣になつた。只だその資金が、即ち借家の敷金とさしあたりの世帶道具を調へる金は安く見積つても四五百圓必要だつた。それには富枝と良順とがこれまでに稼ぎ貯めたものが、合せて約三分の一近くもあつたので、後の分は敬介達も幾らか應援し、他は台灣の或る小都會に製材所を經營してゐる良順の次兄の惠順に頼んで融通して貰はうといふことになつた。この惠順といふ人は、若い頃巡査か何かで台灣に渡り、そのまゝずつと居着いて了つたので、一時は相當の資產を作つて居たが、最近は不景氣續きで製材事業の方も稍々經營困難に陷つてゐるといふ話だつた。けれども二百圓や三百圓位の金なら何とかして與れるだらうと、こちらだけで獨りぎめにしてゐた。殊に惠順は大變弟思ひで、これまでも幾度も良順に物質的の援助をし

て呉れたのであつた。たゞさういふことがある爲に、此頃良順はあまり信用がなくなつてゐるからといふので、敬介からも依頼狀を出すことにした。

敬介はもとよりその惠順といふ人を知らず、手紙を書くのもその時が始めてだつた。彼は厭だつたけれど仕方なく、小見山夫妻の爲に出來るだけ詳細にこれまでの事情を述べ窮境を語り、懇切丁寧を極めてその同情に訴へてやつた。

すると或る日數を經て敬介と良順の所とへ同時に返事が來た。折角だがどうしても都合が惡るくて融通が出來ないといふのだつた。彼等は落膽したが、併しそこに彼等の全く思ひもかけなかつた吉報が含まれてゐた。それは敬介の妻の靜子の弟で、惠順や良順達の甥に當る英夫といふ男が、問題の繁を預つて教育してやらうといふのだつた。英夫は十年ばかり前に軍人として臺灣の守備隊に入つたのだが、滿期後その儘其處に止り、今は叔父の惠順の近くの或町で總督府の役人を勤めてゐるのであつた。ところが二三ケ月前に妻君が死んで、彼がその悲みと孤獨の寂寥とに惱んでゐた折柄、小見山夫妻が繁の問題で困惑してゐることを叔父の惠順から聞いて、まだ三十前の、折柄一層感傷的になつてゐた多感な青年の心が、一種ロマンチックな感情に動かされたものらしかつた。即ち彼はさうすることによつて、一方愛妻の死の悲みと孤獨の寂寥を癒すと共に、さうした不良に陷つた少年を感化し、善良に導いて行くことの、如何に心往くことならんかといふ風に空想したらしいのであつた。

『心掛は實に美しい、感心なことなれど、一時の感情に動かされて、後で困るやうなことになるんぢやないかしら。』

靜子はそんな風に親身な情から弟の上を案じたが、小見山夫妻は實に天來の福音のやうに喜んだ。折も折幸なことには、惠順や英夫の知人で、且つ同鄉福井縣出身の者で、臺北の或る旅館の主人の寺田といふ男が、一兩日中に展墓旁々內地に歸省する、何れ東京へも廻る筈だが、よくその男に賴んで置いたから、その男に繁を託して送るやうにと、福井の方の宿の所番地や東京のそれまでも知らせてあつた。その寺田といふ男なら、良順も富枝も曾て福井に居た頃、矢張り惠順

からの紹介で一二度會つたことのある人だつた。

『まあ、何といふいゝ都合だらう！こんなに何もかも都合よく行くものかしら。窮すれば通ずるとやら、人間は何處にどんな幸運に廻り合せるか知れないものだ。』

富枝はさう言つて、その思ひがけない幸運を有頂天に喜んだ。そして早速繁にも言つてやつて、その準備に取りかゝつた。

さうかうしてゐる中に、富枝はふと自分も一緒にみよ子をも連れて台灣へ行く氣になつた。英夫が繁を引取つて呉れるといふ話を聞いて、一時は只だもう夢中で、有頂天になつて喜んだものゝ、その後あれこれと一人でほしく〳〵考へてゐる中に、次々にいろんな思が湧いて來始めた。小さな繁一人を誰一人知る者もない遠い熱帶の植民地へやるのはあまりに哀れで傷はしい、今迄生れ故郷の土地に居てさへ、雨につけ風につけ何かと氣掛りでならなかつたのに、況して氣候風土の異つた台灣などへやつては、どんなに不安か分らない。のみならず、まだ後にはみよ子が殘つてゐて、厭でも矢張り良順の生家の恩を着てゐなければならぬ。それが口惜しいばかりでなく、台灣と郷里と兩方へ別々に心を使はねばならぬ。却つて今迄よりも心配が多くなるわけだ。それに自分も東京にこんなことをして居たところで一向つまらない、同じ苦勞するならせめて愛する子供達と一緒に居て苦勞をした方がましだ、その方が生甲斐がある。それに又台灣へ行けば、ひよつとしてどんな幸福に廻り合さないとも限らない。植民地のことだから、東京なんかと違つて、幾らもいゝ仕事があるだらう、內地に居るよりは金も多く儲かり、生活も安樂に違ひない。さうだ、さうだ、さうしよう、そして新しい運命を開拓しよう、始めから新しく生活をやり直すのだ……。

そんな風に、彼女はまるで人生に經驗の淺い年若い女のやうに、半ば空想的に考へて行つたのであつた。夫の良順のことなど問題にもせず、又なりもしなかつた。たゞ二人の子供だけが眼中にあつた。その子供達は、自分なしには生きて行

かれないのだ。彼等にとつては、父の良順は居ても居なくても同じことだ。あの人には子供など養育する力がない。やつとあの人一人の口を養つて行くだけに過ぎない。そしてそれは自分が、この私が居なくてもどうにかかうにかやつて行くだらう……。

で、彼女はその決心を良順に語つた。相談でなく、單なる通告に過ぎないやうな調子で。

『行かうと思つたら行つて見るがいゝ。』

良順は無表情で答へた。本當に贊成だつたのか、それとも厭々だつたのか、どちらともはつきりしないやうな調子だつたので稍々張合がなかつたが、併し今はそんなことはどうでもよかつた。次に敬介達に打明けた。勿論引とめる筈はなかつた。それから寺田に會ひ、事情を話して一緒に連れて行つて呉れと頼んだ。寺田は人情の自然として、彼地のいゝ方面を多く語つて、不知不識富枝の渡臺熱に一層油を注いだ。愈々となつたら、自分のところの旅館の女中取締になつてもらつてもいゝ、みよ子は自分の家から學校へ通はすがいゝ、場合によつたら臺北の附近にある或溫泉場の支店の方の經營をやつて貰つてもいゝ、そんなことまで言つて呉れた。

かうして彼女は七月下旬の或る日、郷里に立寄つて子供等を伴ひ、東京から直行した寺田と神戸の宿で落合ひ、そこから汽船で渡臺の途に就いた。

四

富枝が台灣へ行つて了ふと、小見山は急にさつぱりと身輕くなつたのを覺えた。二人の子供を遠い郷異へやつて了つたのは、如何にも可哀さうなことであつたし、父親としての責任といふことも考へられて、一寸心の痛むのを覺えたが、まあ、あれもかうなる外仕方のないことだつたのだと、簡單に諦めもついた。殊に心配してゐた繁の處置がうまくついたの

で、何より安心だつた。その上妻の富枝が身近に居なくなつたのが、何となく彼の心を輕るく明るくした。まるで抛つべたの瘤みたいな用のない邪魔な物が、急に取れてなくなつたやうなのう／＼した氣持を彼に與へた。元々好いてゐた女ではなし、いやそれどころか、あの偏狹で頑固で片意地で、執拗で微塵も女らしい素直ところや優しい所のない、まるでじやく／＼馬みたいな荒くれた、壓しかゝつて來るやうな性分が、厭で厭で堪らなかつたのだ。子供さへ居なかつたら、疾うの昔に別れて了つて居たのだ、などと思つた。そしてもうこれきり永久に別れて了つてもいゝなどと思ひさへした。すると又何故ともなく、何だかさうなつて了ひさうな變な豫感めいたものを感じたりした。

次號「飜譯小說」號豫約

來る十二月號は先例を破つて歲末特別號とし（但し定價は上げぬつもり）『飜譯小說』號を發行する。

主意は所謂飜譯家と呼ばれる人達の飜譯でなしに、さうかといつて所謂語學者の飜譯でもない、文壇一流の創作家の手に成る飜譯を掲載して、沈滯した我文壇に一大ショックを與へたいと思ふのである。

依賴してある向きは正宗白鳥氏、永井荷風氏。佐藤春夫氏には特に紛亂の支那小說をお願ひしておいた。谷崎潤一郎氏のハアディー（九十八枚）、山本有三氏のシュテファン・ツワイク（九十二枚）は既に譯了されて來てゐる。芥川氏は約束を異途へ持つて行つてしまつた。

單に創作家の飜譯が珍らしいといふばかりでなく、外國文學の精髓・味・匂を、此等の作家によつて如何やうに移植されるか、興味は主としてこゝに繫つてゐる。どの作家が、外國のどの作家のどの作品を選ばれるか、そこにも亦第二の興味が無くてはならない。

小說が面白くないと評判される今日、本誌の此計畫はきつとあらゆる方面から歡迎されるであらう。誤譯指摘で待ち構へる人もあるかも知れない。

「誤譯なんか、たとひあつたつていゝさ。」谷崎氏はさう言つてをられる。目的が他に在るといふ意味だらう。



日田縣事件（五場）

小山内薫

人物

水野正名。大参事。
小河眞文。權大参事。
川島澄之助
吉田足穂
太田茂
鹿野淳二
井上達也
下川己之助

島田莊太郎
大鳥居菅吉
樋口良臣
篠本廉藏
本山岩之丞
川口誠夫
田中隆吉
青木喜太郎

柳瀨三郎
松村雄之進
寺崎三矢吉
太田要藏
今村圓兵衛
横枕覺助
中村彦次郎
師富進太郎

平彦助
以上久留米藩士
大樂源太郎
山縣源吾
小野淸太郎
中村要助
（登場せず）
以上山口藩脫人
その他

時代
明治四年三月

場所
久留米城下

（一）

水野大參事役宅。夜。

水野大參事、小河權大參事、床の間を後にして端座瞑目してゐる。

川島、鹿野、島田、井上、大鳥居、太田、吉田、下川、青木、寺崎、篠本、樋口など、詰め寄るやうに、これを取圍んでゐる。

鹿野。では、水野先生はどうしてもお出かけになるのですか。

水野。(大きく頷く)

井上。小河先生もお出かけになるのですか。

小河。(頷く)

篠本。どうしても、おやめになることは出來ませんか。

水野。出來ない。わしは東京を出る時から、もうその覺悟だつた。わしは人質になるつもりで國へ歸つて來たのだ。

太田。大鳥居や川島は先生のお供をして歸つて來ながら、それに氣がつかなかつたのか。なぜ、船中でお留め申さなかつたのだ。

大鳥居。アメリカの飛脚船で横濱を出た時は少しも氣がつかずにゐたが、遠州灘あたりで、九州鎭撫總督の有栖川宮殿下が同じ船に乘つてをられるのを知つた時は、おれも驚いた。謂はば久留米征伐の宮樣が、久留米藩知事公の代理たる水野大參事と同船をしてをられたのだ。だが、同じ船に薩州の西郷も乘つてゐた。水野先生は西郷に事情を述べて、前後曲直のあるところを監視して貰ひたいと言つた。西郷もそれは氣の毒だ同感に堪へないと言つて、及ぶだけのことはしようと請合つてくれた。おれは幾分それで安心した。まさか、こんなことにならうとは思はなかつた。

吉田。問題は山口藩の脫人を保護したことにある。だが、その巨魁たる大樂源太郎はもう久留米の領內を逃げてしまつた。もう吾々に責任はない筈だ。

下川。脫人を保護したのは、吾々の同志だからだ。尊王の大業は完成して、幸に王政復古にはなつたが、まだ攘夷の一重大事が殘つてゐる。新政府はいくぢなくも幕政を踏襲して外人の侮辱を甘んじて受けてゐる。然るに、山口藩は常備軍を解隊して、新政府に媚を呈してゐるのだ。馬關海峽に聯合艦隊と戰つた往年の意氣はどこにある。志ある者が國を逃

れて、常備軍の復興を謀るのは當り前のことだ。それを暴徒とは何事だ。おれは大樂を國外へ追ひ出したことさへ心外に思つてゐるのだ。

青木。おれ達は唯無暗やたらに攘夷を稱へるのではない。開港が惡いと言ふのではない。文明の輸入を拒むのではない。長崎にゐるおとなしい阿蘭陀人までを追拂へと言ふのではない。兵力を以て無理無體に開港を迫つて來た奴等の壓迫に屈從する必要はないと言ふのだ。徳川幕府は彼等に對してどういふ處置をした。城下の盟といふ屈辱を甘んじて受けたではないか。假に結んだといふあの條約は、國を辱め、國體をも顧みざるものだ。天下の輿論はこれを許さない。幕府はこれが爲に失脚して、終に政權返上となつたが、幕府が殘したあの屈辱條約は依然として元の儘だ。王政復古した以上、若し攘夷が出來ないと言ふのなら、一日も早く條約の改正をして國體を全うしたければ、畏れながら先帝の遺詔にも背き奉り、外夷に闘して斃れた勤王志士の靈に對しても顏向けがならんと言ふものだ。

篠本。さうだ、さうだ。條約の改正だ。だが、その條約の改正は樽俎の間に折衝しようとしても、到底それは望み得られんことだ。名のあるところに從つて、國力を外に展べるのだ。それが第一だ。然るに、今の新政府は、内政にのみ重きを置いて、一切外を見ない。その結果、外に對しては常に畏縮して、口も利かなければ、手も出さない。屈從を屈從とも思はずに、ひたすら外人の鼻息のみ窺つてゐる。山口藩の如きはその雄なるものだ。

鹿野。吾々が山口藩の脱人を庇護したのは、國家を思ふ至誠からしたことだ。その國家の忠臣を國家が攻めるといふのは何事だ。

井上。いや、討伐軍は決して國家ではない。山口藩が國家を示唆したのだ。

太田。戰つて斃れるまでも、兩先生を渡すことは出來ん。

吉田。斷じて出來ん。

一同、騒然。

小河。待て。先程からあれ程理を說いて聞かしてゐるのに、諸君はまだ分からんのか。僕は決して諸君の主義を否とするのではない。現に吾輩自身も脫人の保護はした。僕が新政府の對外政策に飽き足らんのは諸君以上だ。併し、今の場合を考へろと言ふのだ。九州鎭撫總督の宮は既に大阪表まで出向いてをられる。巡察使の四條少將閣下は鹿兒島熊本山口三藩の兵を率ゐて、既に目近の日田まで押寄せて、今にも久留米へ攻め入らうとしてをられる。政府は既に四國九州の四十二藩に令して四條巡察使の指揮を待たせてある。參謀の大田黑は百何人といふ兵隊を連れて既に善導寺に上陸した。久留米は四圍の內に落ち入つてゐるのだ。政府が久留米の人民を怒らせて、わざと兵端を開かせようとしてゐることは火を見るよりも明かだ。決して、その手に乘つてはならん。その手に乘つたら、藩は破滅だ。

水野。その上、藩知事公は東京へ人質に取られたやうな形になつてをられる。知事公は謹愼を仰せつけられて、赤羽の藩邸は政府の兵隊で圍まれてゐる。知事公はかの遷都一件以來、事每に新政府の嫌疑を受けてをられるのだ。吾々が何等含むところのない廣澤參議の暗殺でさへ、一時は嫌疑が吾が藩にかかつた。若しこの場合、血氣に逸つて、巡察使に楯をつくやうなことをしたら、東京の知事公は如何なる憂目を御覽になるか分からん。

小河。如何にも現在久留米を圍んでゐる兵隊は、鹿兒島山口熊本三藩のものに相違ないが、既に朝命を奉じて、巡察使の指揮の下にある以上、これを官軍と言はなければならん。官軍に手向ふことは錦旗に手向ふことだ。そんなことをしたら、忽ち朝敵の賊名を蒙り、天下の兵を一つに引受けて戰はなければならんことになる。吾が久留米藩は天下に率先して勤王論を唱へた。佐幕俗論家は既に斃れて、今日藩政にあづかるものは悉く勤王の諸士だ。然るに、今その久留米藩が朝敵となつて、累を知事公に及ぼし、あまつさへ久留米城下を焦土に化して、何も知らぬ一般人民を塗炭の苦しみに陷れるのは悲慘の極ではないか。忍び難きを忍ぶのだ。志は事と違つた。目的は蹉跌した。併し、今は恭順を表さねば

ならん時だ。

島川。どうもこれは兩先生の言はれることが道理だ。吾々は一時この屈辱を忍ばなければなるまい。

水野。さうだ。一時のことだ。吾々二人が出て行つたあとで、官軍は必ず無理無體を持ちかけ、諸君に手を出させようとするに違ひない。併し、如何なることがあつても、忍從して、恭順の誠を表し、一旦兵を引上げさせた上で、正々堂々朝廷に迫り、無名の師を起して一般を騒がした罪を糺し、報復して今日の恥辱を雪ぐが好い。一時のとだ、一時のとだ。

鹿野。併し、殘念だなあ。

井上。今まで先生として敬慕した方々を、おめおめ彼等の手に渡したとあつては久留米藩の恥辱だからな。

太田。全く天下の諸士に對して申訣がない。

川島。いや、併し、今の場合どうにもなるまい。僕も兩先生を引渡すことは飽くまでも反對だつたが、だんだん兩先生の御訓話を承つて見ると、如何にも御尤もだ。ここは一番忍ばなければなるまい。なあ、大鳥居、貴公はどう思ふ。

大鳥居。兩先生のお詞に從ふより外はあるまい。知事公のお身の上も心掛りだ。一般人民のことも思はなければならん。總てを兩先生の御意志に任せよう。

島田。どうも、この際さうするより外に手段はあるまい。

下川。屈辱は一時だ。吾々の目的は遠大だ。

篠本。吾々は長い間兩先生の指導を受けて來たのだ。この期に及んで兩先生の意に反するやうな行動を執るとは出來ん。

大鳥居。では、もう誰も異存はないのだな。（一同、沈默）誰も異存はないか

一同、沈默。暗に贊意を表す。寺崎三矢吉唯一人、苦々しげに横を向いてゐる。

小河。寺崎、君はさつきから一言も口を利かんが、君もやはり同意なのだらうな。君は脫人のことに關して前後最も深い

關係を持つてゐる一人だ。現に君は吾々と一緒に、あした巡察使廳へ出なければならん人だ。君の同意はどんなに諸君の心を勵ますか分からない。

寺崎。（突然、聲を勵まして）いや、僕は同意しません。僕の意見は大反對です。たとひ兩先生がお出かけになつても、僕は決して日田へは參りません。

水野。なに。

寺崎。どうせ一度は國家の爲に斃れる覺悟で始めた爲事です。一か八か、遣れるだけは遣つて見ます。あとがどうならうと、そんなことは構つてゐられません。朝命を矯めた奴原を片つ端から鏖殺しにして、錦旗を主上にお返し申し上げ、以來かやうな者にはお渡しにならぬやう闕下に伏して奏請いたします。

島田。そんな亂暴なことを言ふ奴があるものか。

青木。そんなことをしたら、却つて不敬に當るぞ。

寺崎。ばかを言へ。朝命を矯めた奴等に屈從するのこそ、却つて天意を晦ますといふものだ。おれは斷じて日田へは行かん。兩先生も決して遣らん。

川島。おい、おい、寺崎。どうして君はさう過激なことを言ふのだ。君の眞意はよく分かつてゐる。君は兩先生が救ひたいばかりに、さういふことを言ふのだらう。併し、今の場合さういふことをするのは、却つて兩先生を傷つけることになるぞ。

寺崎。いや、おれは兩先生の爲を思ふのではない。おれは國家の爲に立つのだ。

島田。藩公のことは思はんのか。藩の安危は考へんのか。

寺崎。もう吾々に藩といふものはない。吾々には唯國家があるばかりだ。上御一人があるだけだ。新政府の腰が弱いの

も、畢竟は舊大藩に壓迫されてゐるからだ。

島田。君は知事公はどうなつても好いと思つてゐるのか。久留米が滅びても構はんと思つてゐるのか。

寺崎。國體には換へられん。國威には換へられん。攘夷の爲の犧牲なら、知事公も藩も何かあらんやだ。

島田。默れ。貴樣は久留米藩の藩士ではないのか。

寺崎。おれは日本の國民だ。

突然、井上が寺崎に斬つてかからうとする。一同、留める。

島田。寺崎、歸れ、歸れ。貴樣のやうな亂暴者に國事を議する資格はない。

寺崎。おれもこんな穢れた場所に同席は御免だ。いくぢなしの寄合め。

井上。なに。（又斬つてかからうとする。今度は下川も立つ。一同、二人を留める）

寺崎。おれは一人でも、きつと遣つて見せるぞ。

寺崎、席を蹴立てて歸る。

一同、暫く呆氣にとられてゐる。

水野。困つたものだな。

小河。困つたものです。

水野。だが、實際あいつは遣るつもりだらうか。

小河。それは分かりません。あいつは煽動家ですが實行家ではありません。口だけのことの出來る男ではないのです

川島。失禮ですが、小河先生の仰しやる通りです。わたくしは武田先生の門下だつた時分から、彼とは分け隔てなく附き合つてをります。小河、古松、兩先生の下へも共に參いてお世話になつたのです。彼の性格はどの諸君よりもわたく

しが知つてをります。彼は誠意のない男ではありません。山口脫人庇護の場合にも、彼は身命を賭して働きました。併し、彼は存外小心な男なのです。今度の場合も、彼は日田へ行くのが恐いのです。恐くないまでも厭なのです。自分が厭だもので、他を唆かすのです。唯それだけのことです。

水野。併し、唆かされた相手が若し本氣になつたら一大事ではないか。

川島。如何にもさうです。わたくしもそれを心配してゐるのです。

島田。あいつの家には應變隊の過激黨が大分集まつてゐるといふ噂だぞ。

大鳥居。さう言へば、横枕が今夜來ないのも不思議だな。

鹿野。ここへ來る途中で、太田要藏や今村圓兵衛に逢つたが、二人とも寺崎の家へ行くのだと言つてゐた。

川島。それはいかん。あの二人は中でも寺崎と親密で、しかも非常な過激論者だ。

水野。では、一刻も猶豫することは出來ん。萬一あの輩に暴動を起されたら、吾々の苦衷も水泡に歸してしまふ。

小河。さうだ。何と言つても、川島は隔意のない仲なのだから、一つ行つて取鎭めてくれんか。あの男は決して自分で何もする男ではない。唯はたを取鎭めてくれれば好いのだ。あの男の煽動にはたが乘らんやうにしてくれれば好いのだ。

川島。宜しうございます。參りませう。どうせ過激な連中の集まりですから、散々にわたくしを罵倒するに違ひありません。併し、わたくしはそんな者は相手にしません。寺崎一人と膝詰談判をしてやります。さうして九つ過ぎる頃まで邪魔をしてやれば、兩先生の駕籠は田主丸あたりまでは參るでせう。さうすれば、たとひ本當に何かしようと思つても、もう何も出來ますまい。兩先生が無事に日田へ向はれたとなれば、當人もきつと諦めて巡察使廳へ參るでせう。

水野。成程、好い考へだ。是非さうしてくれ。

川島。では、一刻も早い方が好いと思ひますから、直ぐにこれから參ります。

青木。だが、川島一人では危ない。おれが一緒に行かう。

井上。僕も一緒に行かう。

川島。いや、君はいかん。君はさつきも危なくあいつを遣つつけるところだつたではないか。

青木。では、おれ一人だけでも連れて行け。

川島。いや、誰も來ん方が好い。

青木。大丈夫か。

川島。大丈夫だ。おれ一人なら、何を言はうと、決して寺崎は怒りはせん。

青木。でも、周圍の者が。

川島。周圍の者と言つたところで、みんな寺崎の子分だ。首領の寺崎が手を出さなければ、子分も手の出しようがあるまい。兎に角、おれは氣が急くから、もう行く。（水野と小河の前に平伏する）では、水野先生、小河先生、どうぞ御機嫌宜しう。無事の御歸藩を祈ります。

水野。あとを宜しく頼みますぞ。

川島。畏りました。

川島、退場。一同、目送する。

入れ違ひに、庭口から、息せき切つて、田中隆吉が飛び込んで來る。

小河。どうした。隆吉。

田中、上へ轉び上がる。

田中。（息を切つて）兩先生の外、お人拂ひを願ひます。

水野。(一同を見て) 諸君、暫く遠慮してくれ給へ。

水野、小河を殘して、一同退場。

小河。(暫くして) 田中、どうした。

田中。(聲を潜めて) 一大事でございます。

水野。何事だ。

田中。大樂源太郎が又逃げて參りました。

小河。
水野。 えつ。

水野。いつ。

田中。たつた今。

小河。どこへ。

田中。わたくしの宅へ。

水野、小河、顏を見合はす。

田中。(心の急くやうに) 如何いたしませう。

水野。待て。奥へ行つて、大鳥居と島田を呼んで來てくれ。密議があるからと言つて。

田中、奥へはひる。

水野と小河、顏を見合せて默つてゐる。

田中が大鳥居と島田を連れて來る。

水野。ずつと側へ寄つてくれ。

大鳥居と島田、水野と小河の側へ寄る。

水野、囁く。大鳥居と島田、驚愕して、思はず聲を立てようとする。小河、抑へる。

一同、鳩首、議を凝らす。

――幕――

（二）

寺崎三矢吉宅。同じ夜。

主人の寺崎、今村圓兵衛、太田要藏の三人と床の間の前に胡坐してゐる。

横枕、中村、師富、平の四人、少し離れて一圏をなしてゐる。その他、應變隊の諸士、足の踏み込めぬ程、そこここに群つてゐる。

杯盤狼藉。一同酒氣を帶びて喧々囂々と論じ合つてゐる。

寺崎。おれは行かん。斷じて行かん。誰がおめおめと巡察使などに縛られるものか。

太田。さうだ。さうだ。決して行くな。

寺崎。兩先生も遣つてはいかん。檻籠を道に要して、是非とも奪ひ取らなきやいかん。

今村。さうだ。さうして直ぐに兵を擧げて巡察使を追つ拂ふのだ。山口や熊本の二中隊ぐらゐがなんだ。

太田。さうだ。さうすれば、豫て示し合せた豐津島原その他各藩の同志が、きつと來應するだらう。

寺崎。各地に潜伏してゐる奇兵隊の諸士も、きつと方々から出て來るだらう。さうしたら、これを糾合して、直ぐに日田を奪取するのだ。それから九州の兵を引き纏めて下の關へ押し渡るのだ。それから、山口を乗取つて、ここを根據地にして義兵を擧げるのだ。

太田。さうだ。今が遣り時だ。おれ達の目的が達せられるのは今だ。

寺崎。今を措いて他に機會はない。その好機會を手を拱いて逃がさうなどとは、何といふ腰拔武士だ。水野、小河、兩先生には、兩先生の立場がある。だが、若い者達が直ぐとそれに同意して、官軍でもない官軍に屈服しようなどとは、何といふ意氣地なしだ。川島などはおれの少年時代からの親友で、常に行動を共にして來た奴だが、あの優柔不斷な態度はどうだ。

太田。あいつは今度東京へ行つてから、ひどく意氣地がなくなつた。きつと東京で臆病風でも引いて來たのだらう。

一同笑ふ。

途端に、奥の方で「川島が來た。」「川島だ。」「川島だ。」といふ聲がする。

寺崎。なに、川島が來たと。あいつ、考へ直したか。

今村。さうだ、さうだ。きつとさうだ。あいつあやまりに來たのだ。

川島、刀を提げて、周圍には目もくれず、大勢の中を押し分け押し分け、まつ直ぐに寺崎の側まで來て坐る。

寺崎。おう、川島、貴公吾々の味方になりに來たのか。大に宜しい。まあ、一杯やれ。

川島。(杯を受ける) 君は愈戰ふ氣か。

寺島。勿論だ。君も戰ふ氣になつたのだらう。

川島。いや、おれは戰はん。

寺崎。なに、戰はん。

川島。機會はもう去つてしまつた。

寺崎。いや機會は今だ。

川島。まだそんなことを言つてゐるのか。兩先生のお詞がまだ貴樣には分らんのか。

寺崎。兩先生は兩先生だ。吾々には吾々で、また覺悟がなければならん。おれは盲從は厭だ。

川島。おれだつて盲從は厭だ。勝算があればおれだつて戰ふ。勝算はあるのか。

寺崎。ある。

川島。では、それを聞かう。

寺崎。吾々が立てば熊本の同志が三百人は直ぐに來る。島原は藩を擧げて立つだらう。豐津藩も同樣だ。各地に潜伏してゐる奇兵隊も立つて、きつと山口を囘復するだらう。みんな久留米の立つのを今か今かと待つてゐるのだ。

川島。だが、熊本の同志が立つといふなら、久留米の遣るのを待つには及ぶまい。三百人もゐるなら、直ぐに熊本城を乘取り、これを根據にして呼號したら、九州は必ず響の如く應ずるだらう。然るに、彼等がその大事な熊本を棄てて久留米へ來るといふのは分からん。それは誰かが詐り拵へた流言に相違ない。それとも熊本の同志が愈城を乘取つて兵を擧げるといふのなら、君等も同志を率ゐて熊本へ趨いたらどうだ。さうして、天下の兵を一手に引受けたら、或は志を貫くことが出來るかも知れん。然らずんば、到底勝算はない。

横枕。（下座から）よせ、よせ、寺崎。そんな臆病者の議論などは聞くな。

師富。さうだ、さうだ。邪魔者の議論は聞くには及ばん。聞けば迷が出る。迷が出れば考が動く。斷じて聞くな。

中村。そんな奴の議論をぐづぐづ聞いてゐると、時が遲れて機會を失ふぞ。機會は再び來るものではないぞ。

平。そんな奴にかかり合つてる隙はない。叩き出せ。叩き出してしまへ。

「叩き出せ。」「叩き出せ。」といふ聲が方々で聞える。

川島。いや、おれは歸らん。飽くまでもおれは留める。身命を賭してもおれは留める。

横枕。腰拔侍。臆病者。

川島。何と言はれても、おれは動かん。今の場合、輕擧盲動するのは國の破滅だ。

横枕。因循姑息も國の破滅だぞ。

平。もうこんな奴には構はずに、どんどん實行に取りかゝれ。

横枕。兩先生の羈絏を奪ふのだ。それから日田を襲撃するのだ。

寺崎。まあ、待て。おれは川島の言ふところにも一理あると思ふ。

横枕。だめだ、だめだ。そんな奴の言ふことに動かされてはだめだ。

寺崎。いや、決して無暗と動かされはせん。併し、熊本の同志が立つなら、熊本城に據る筈だと言ふ一言には一理ある。若し吾々が立つても、熊本の同志が馳けつけてくれなかつたら、吾々はどうすることも出來ん。吾々の人數は餘りに少ない。

今村。おい、おい、大將がそんな意氣地のないことを言ひ出しては爲方がないではないか。

太田。熊本の同志はきつと來る。おれは確な筋から聞いた。三百人は來ないまでも、二百人はきつと來る。

中村。どんなことがあつても、百人はきつと來るといふ報告がおれのところへ來てゐる。

川島。それ見ろ。人數のことでさへ、既にまちまちだ。熊本の同志が立つなら、熊本を棄てる筈はない。

横枕。いや、おれ達は熊本の同志などあてにしてゐるのではない。來んなら來んで構はん。おれ達は自分でやる。

寺崎。だが、それは無謀だ。勝算のないのに戰ふのは犬死だ。

横枕。何が犬死だ。國家の爲に死ぬのがなんで犬死だ。攘夷の爲に斃れるのがなんで犬死だ。

「犬死ぢやない。」「犬死ぢやない。」といふ聲が聞える。

寺崎。待て。おれも犬死ぢやないと思つてゐた。誰がどうならうと、知事公がどうならうと、これは飽くまで戰はなければならんと思つてゐた。だが、だんだん川島の話を聞いてゐる内に、これは一番考へ直さなけりやならんと思つた。

「考へ直すことはない。」「考へ直しちやならん。」などといふ聲がする。

寺崎。成程、この際戰はんのは屈辱には違ひない。併し、これは唯外見だけのことだ。肉體は縛られても精神は縛られん。吾々の目的は遠大だ。一時の恥を忍んでも永遠の策を立てなければならん。苟にも錦旗に楯をついて、朝敵の汚名を受けたら、多年の苦心も水の泡だ。

横枕。だめだ、だめだ。川島の臆病風が移つたのだ。

寺崎。いや、斷じて臆病で言ふのではない。この屈辱に堪へるには金鐵の心が要る

「言ひ抜けだ。」「恐くなつたのだ。」「大將がやらなきや、おれ達だけでもやつて見せるぞ。」などといふ聲がする。それに對して、「いや、寺崎の言ふのが本當だ。」「屈辱は一時だ。」「目的は遠大だ。」などと言ふ聲が聞える

議論が二派に分れて、詞の聞き取れぬ程混亂する。

罵る聲怒る聲が頂點に達した時、殷々と鐘の音が響いて來る。

——何時だ。

——丑三つだ。

——だめだ。もう兩先生の駕籠は行つてしまつた。

——もう追つかけても、とても追つくまい。

一同、絶望して首を垂れる。

稍長き沈默。

川島。(微笑を含んで、寺崎の前へ向き直る)寺崎、日田へ行くか。

寺崎。(決心を面に表して)うむ、行く。

川島。では、別盃だ。

川島、寺崎に杯をさす。

—幕—

(三)

大島居菅吉の寓居。或商家の裏坐敷。翌日の午後。

主人の大島居はじめ、島田、樋口、篠本、本山、川口、吉田、太田(茂)、鹿野、井上、下川など、鳩首して、聲を潜め、頻に密議を凝らしゐる。

川島、登場。この光景に意外の面持をする。

大島居。(川島の來たのに氣がついて)おう、川島、疲れてゐるところをよく來てくれた。

川島。また何事か起つたのか。

大島居。兎も角も、ゆうべの禮を言はなければならん。よく寺崎を留めてくれた。お蔭で兩先生も無事に日田へ行かれた。寺崎もたうとう日田へ行つたと言ふではないか。

川島。いや、なかなか骨が折れた。併し、夜明けまで居坐つて、たうとう寺崎を日川へ立たせた。
大島居。それは大手柄だつた。さぞ應變隊の過激黨が憤慨したらうな。
川島。一時はどうなるかと思つたが、こつちがぢつと堪へてゐたので、たうとう血の雨を見ないで濟んだ。先づ、これで一時の片はついた。
島田。ところが、ここに又一つ大難事が沸いて來た。
川島。（心配さうに）なんだ。何事だ。
島田。（一同に）諸君、あたりに氣をつけてくれ給へ。

一同、あたりを警戒する。

大島居と島田、ずつと川島の側へ寄る。

島田。（聲を潜めて）大樂源太郎が又久留米へ歸つて來たのだ。
川島。（笑ふ）冗談を言つちやいかん。もう大樂は久留米にをりやせん。小河先生も、それだけは安心しろと言はれた。
島田。ところが、ゆうべ、突然又戻つて來たのだ。
川島。（驚く）一人でか。
大島居。四人で。
川島。誰のところへ。
大島居。田中隆吉のところへ。
島田。ゆうべ君が寺崎のところへ出かけると間もなく、田中があの席へ飛び込んで來た。兩先生の外、人拂ひになつたが、やがておれと大島居が呼ばれた。話を聞くと、そのことだ。兩先生が言はれるには、折角これまで苦心して來た

ことも、これではみんな水の泡になつてしまふ。だが、日田へ出發の時刻は迫つてゐる。どうか、自分達の出發後、みんなと相談して、事の破れにならぬやう宜しく始末を頼むと、しみじみとしたお頼みだ。實に僕等は途方に暮れた。

大島居。至急にどうにかしなければならぬが、僕等はこれまで親しく關係したことでないので、一向工風がつかん。どうしたら好いだらう。好い考へはあるまいか。

川島。成程、それは一大事だ。だが、僕も今まで多少は關係して來たが、潜伏といふことには一向關係したことがないから、これといふ妙案もない。併し、ぐづぐづしてゐれば、直ぐに捕まへられるに相違ない。萬一、大樂等が捕へられたら、藩知事公のお身の上が危ない。

島田。さうだ。吾々もそれを懸念してゐるのだ。

大島居。大樂が捕へられて、何もかもしやべつてしまつたら取返しはつかん。たとひ一度でも知事公は大樂に會つてをられるのだから。なあ、川島、なんとか處置のつけようはあるまいか。

川島。(突然、或希望を面に表して)さうだ。若津に藩の蒸汽船の千歳丸が來てゐるといふ話だ。あれに脫人を載せて逃がしたらどうだ。おれも若手の同志を連れて同船しても好い。さうして、あとを晦ましたら、どうにも捕まへようがあるまい。さうだ。會計に金を出して貰つて、千歳丸で逃げよう。

島田。うむ。成程、それは好い考へだ。大島居はどう思ふ。

大島居。(首を傾げて)だが、それでも逃げ延びることは出來ない。必ず捕へられるにきまつてゐる。若し捕へられれば、何も彼も漏れてしまふだらう。さうなつたら、もう破滅だ。

突然、目付役の一人襖を排して入り來る。

――誰だ。誰だ。無斷ではひつて來てはいかんではないか。
目付役。お許し下さい。急の御用で、島田樣にお目にかかりに參つたのです。
島田。おれはここにゐる。なんだ、なんだ。
目付役。きのふ佐賀の兵が若津に押し渡り、千歳丸に乘込んで、大砲を引きおろし、機械類にも總て封印をしてしまつたさうです。その知らせがありましたので、直ぐに御報告に參りました。
島田。しまつた。(間)川島、千歳丸も取られてしまつたぞ。

目付役、去る。

一同、沈默。

川島。(決心を面に表して)もうかうなつた以上は爲方がない。可哀さうだが、片づけてしまふより外に手段はあるまい。

一同、顏を見合はす。

大島居。(暫くして)實はみんなもその意見だつたのだ。だが、君には何か他の策があるだらうと思つて、それで君を呼びにやつたのだ。君までが、その意見なら、もう爲方がない。
樋口。(後からにじり出る)いや、わしは初めから不同意だつた。そんな殘忍酷薄なことがあるものか。大樂は國士だ。天下の事を共にしようと吾々が盟つた同志だ。その再び得難い同志を、今日まで助けて置いて、もう爲方がないからと言つて殺すといふ法はない。諸君がどうしても遣ると言ふなら、吾輩は刑法局に出て、一部始終を訴へる。それでも好いか。
島田。それなら、どうしたら好いのだ。誰も好んで遣りたいと言つてゐる者はないのだ。君に良策があるなら聞かうでは

ないか。

樋口。わしはさつきから言つてゐる。大樂等をお城の內へ入れて生米をかじらせて置くのだ。暫く辛抱させて置いたら、決して分かる氣遣ひはない。その內には、事も落著して、兵隊は引上げてしまふに相違ない。暫くの間のことだ

大島居。それが出來れば好い。併し、お互にしても、いつ捕縛されて出て行かなければならんことになるか分からん。さうなつたあとはどうなるのだ。もう大樂を保護するものはない。大樂はきつと捕へられる。彼が捕へられたら、もう取返しはつかん。

樋口。飽くまで遣ると言ふのか。そんなら遣り給へ。わしはこれから直ぐ刑法局へ訴へて出るから。（立ちかける）

島田。（笑つて）訴へるなら、訴へるが好い。刑法局の總裁は鵜飼先生ぢやないか。鵜飼先生は既に吾々に同意してをられるのだ。

川島。まあ、樋口、待て。成程、樋口の言ふところにも一理ある。吾々が手を下すまでもない。大樂に自決を迫つたらどうだ。

島田。それだ。それはもうだめなのだ。ゆうべそのことを聞くと、おれはすぐ田中に案內させて大樂を訪ねたのだが、そして、暗に自裁を迫つたのだが、彼は少しも吾々の衷情を汲んではくれんのだ。却つて久留米を死地に陷れるつもりでやつて來たと言はんばかりの態度なのだ。あいつはかう言ふのだ。長州でも嘗て俗論沸騰して奈何とも爲し難き苦境に陷り、正義の士は相踵いで殺された。もう誰も手を出す者がない。殆ど自滅を待つ狀態となつた。その時、敢然兵を擧げて頹勢を挽回したのが高杉晋作だ。今日の久留米の狀態もこれと寸分違はない。諸君が思ひ切つて立てば、必ず事は成就するのだ。今が決心のし時だと言つて、おれの論には一向耳を貸さんのだ。弟の山縣が大樂に向つて、さう御自分の考ばかり言ひ張られても、藩には藩の御事情もあらうから、萬事お任せになつた方が宜しからうと口を添へたのを決

に、一先づ引き上げることにはしたが、一時はあまり大樂が自分勝手を言ひ募るので、おれはいつそその場で遣つてしまはうかとも思つた。併し四人を相手にして、ひよつと手創でも負うたら、忽ち一般に知れ渡つて、隱すことも何も出來ぬやうになるから、ここは忍ぶ時だと思つて、話は早々に切り上げた。それで、兎も角も潜伏の手筈だけはして置かなければならんから、誰はどこ、彼はここと、それぞれ別にして置いたが、實におれは殘念だつた。

大鳥居。（川島に）さういふわけで、樋口一人反對はしたが、實は君の來る前に、一議は既に決してゐたのだ。併し、吾々は今日まで、大樂のことには直接關係してをらん。君はこれまで脫人のことに關係してゐるのだから、君も一緒に遣つたといふことになれば、萬一若手連中にこの事が知れても、事情が疎通するから、是非君にも同意をさせようといふことになつたのだ。併し、君は必ず不同意を稱へるだらうと言ふので、一時は言はん方が好いといふ說も出たのだが、國事多難になつてから、何事も一緒に話し合つて來た仲だから、この一事のみ話さぬといふのも心持が惡い。それに、藩知事公に關した大事なことを君は知つてゐるのだから、話をしたら、きつと同意をするだらうと、自分も信じ、島田も亦さう言ふので、來て貰つたのだが、やはり同意をしてくれたのは有難かつた。

川島　いや、同意にも同感にも、事實さうするより、今の場合他に道はあるまい。樋口、君ももうかうなつたら爲方があるまい。

樋口。（苦笑して）川島までが同意では爲方がない。おれも遣らう。

大鳥居。よし、それで話はきまつた。それでは、これから、それぞれの受持を定めよう。みんな側へ寄つてくれ。

一同、大島居の廻りに丸くなる

大鳥居。大樂は一番の大物だが、これは川島と吉田に遣つて貰はう。これは太田が連れ出すのだ。大樂の弟子の中村要助は鹿野の受持として、井上下川の三人で遣るのだ。大樂の弟の山縣と小野淸太郎は、別々に引放すことが出來んかも知

れんから、島田の受持にして、おれ、樋口、徳本、本山、川口の六人がかりで遣ることにしよう。あの二人は屈強な若者だからな。

島田。よし。そこで、その手段だ。どうか、みんなもつと側へ寄つてくれ。

一同、更に首を寄せ合ふ。

川島。（聲を潜めて）おれは高野の濱で遣らうと思ふ。あの八幡の裏手だ。太田は一旦、大槊を自分の家へ連れて行くのだ。それから……（だんだん聲が小さくなつて、終に聞えなくなつてしまふ）

雨が降つて來る。

―幕―

（四）

筑後川の砂濱。高野八幡宮の裏手。

朧月夜。雨しとしとと降る。

舞台暫く空虚。鐘鳴る。

土手の篠籔ががさがさする。

やがて、川島が顔を出す。

川島。もうやつて來さうなものだな。

吉田。（顔を出す）あまり長いな。

川島。（濱へ出る）途中で取逃したのではあるまいな。
吉川。（これも濱へ出て、向うを透し見る）そんなことはあるまい。太田のことだ。
川島。（きつと向うを見る）や、誰かやつて來たぞ。傘をさして。
吉川。二人か。
川島。いや、一人だ。
吉川。一人だと。
川島。今頃こんなところへ他の人間がやつて來る筈はない。きつと太田だ。
吉川。太田なら大藥を連れて來る筈だ。
川島。さうだ。若し他の者だといかん。隱れよう。

二人、又篠籔へ隱れる。

太田、一人で急ぎ足で出て來る。

太田。（聲を潜めて）吉田、吉田。
吉田。（川島と一緒に躍り出る）おう、茂さんか。どうした。大藥はどうした。
川島。（詰め寄つて）取逃したか。
太田。（落ちついて）いや、取逃しはせん。實は宵の内にもうおれの家へ連れて來て置いて、約束の時刻が來たから、直ぐ連れ出さうとしたのだが、蟲が知らせたか一向動かん。いろいろなことを言つてゐて、容易に立たうとしないのだ。時刻はどんどん移るし、どうしたものだらうと思つてゐると、幸に柳瀬三郎がやつて來た。それから、柳瀬にざつと事情を述べて、柳瀬にやつて貰ふことにした。柳瀬の言ふことは大藥もよく聞くのだ。併し、柳瀬一人では危ないと思つた

から、松村雄之進を呼び寄せて、これにも手筈を言ひ含めた。それから、やつと四人でおれの家は出たが、大樂の奴、動もすれば他の道へ行かうとするのだ。どうもおれを疑つてゐる樣子なので、これはおれが離れた方が却つてよからうと思つた。そこで、用があると嘘をついて、三人に別れた。近道を來たので、おれの方が先になつたのだらう。もう追つつけ來る筈だ。油斷は出來んぞ。

川島。大丈夫か。

太田。大丈夫だ。二人で連れて來るのだから、容易に逃すことではない。

遠くで人の話し聲がする。

吉田。やつて來たやうだぞ。

三人、急いで籔の中に隱れる。

柳瀨と松村が大樂を眞ん中にして、何か小聲で話しながら出て來る。

突然、柳瀨が大樂に斬りつける。大樂、柳瀨に飛びかかる。松村、後から大樂を斬り下げる。川島と吉田と太田が飛び出した時は、もう大樂は川へ嵌り込んでゐる

太田。もう遣つてしまつたのか。

柳瀨。うむ、もう遣つてしまつた。

吉田。早く誰か首をとれ。

松村。うむ。(首をとる)

川島。死骸を殘してはいかん。(籔の中から鍬を持つて來る)

柳瀨。鍬を持つて來たのか。

川島。袴の下へ隠して持つて來た。

吉田。早くやれ。

　川島、濱を堀る。吉田、手傳ふ。川の水がはひつて來るので、穴がなかなか深くならない。

太田。懐にある書類を出せ。

松村。うむ。（死骸の懐から書類を出す）

太田。（風呂敷を出して）これへ包んでくれ。

松村。うむ。（書類を包む）首はどうしよう。

太田。構はんから、その儘提げて行け。（川島に）穴はまだか

川島。砂が崩れて來るので、容易に深くならん。

　川島、一所懸命に鍬を動かす。

太田。よし。みんなでやれ。

　一同、力を協せて穴を堀る。

——幕——

（五）

城内。本庄一行氏傳宅。（水野大参事が移る筈になつてゐて、既に修繕も終つてゐたのだが、大参事が捕はれの身となつたので、その儘明き家同然になつてゐた家）同じ夜の深更。

島川、大鳥居、樋口、篠本、本山、川口、鹿野、井上、下川など環坐して、中央に大德利を据え、茶碗で冷酒を飲んである。

島川。中村はさすが大樂の弟子だけある。小伜だ小伜だと思つてゐたが、潔く切腹をしたとは偉いな。

井上。今さらに何か思はむ武士のけふを限りの死出の山道」歌は平凡だが辭世まで讀みをつた。

鹿野。全く落ちついたものだつた。

大鳥居。おれの方は、なかなかそんな落ちついたことではなかつた。どうかして山縣と小野を引放さうと思つたが、どうしてもだめだ。二人一緒に斬らなければならんことになつた。幸に兵馬倥偬の間に轉戰した川口本山のやうな勇士がゐてくれたので、たうとう豆津の渡し場で捕つてしまつたが、おれなどは實に危なかつた。山縣がおれを目がけて斬りつけて來た時、若しおれが受け損じたら、それこそ命はなかつたらう。はつしと受け留めた時は、火花で向う岸の肥前がありありと見えた。(笑ふ)

一同、笑ふ。

島田。待て。だが、まだ安心はならん。肝心の大樂がどうなつたか分からん。川島達はどうしたのだらう。

鹿野。餘りおそいな。

大鳥居。さうだ。あれを取逃したら、吾々の苦心も水の泡だ。

井上。爲損じたのではあるまいか。

下川。いや、そんなことはあるまい。

篠本。太田はなかなか智略に富んでゐるからな。

本山。併し、腕が心配だ。

突然、襖を排して、川島、吉田、太田、柳瀬、松村が現れる。

大島居。おゝ、川島、どうだつた。

島田。爲損じたか。取逃したか。

川島、默つて、大樂の首を環座の中央へ出し、その儘そこへ置かうとする。」

島田。待て。(紙を出して、疊の上に廣げる)

川島、紙の上へ首を置く。

一同、瞑目。首うな垂れて、聲がない。

島田。(稍あつて、首に向ひ、兩手を突いて)大樂源太郎君。國難この極に至つて奈何ともし難い。百計は既に盡き果て、策の施すべきものは一もない。國の爲、君の爲、やむを得ずかゝる處置をとつたのだ。どうか許してくれ。追つつけこの怨みはきつと酬ゆることにする。どうぞ瞑目してくれ。

一同、暗涙に咽ぶ。

樋口、茶碗に酒をつぎ、にじり出て、首の前に供へる。

樋口。大樂、大樂。君は吾々の得難い同志だつた。その同志を吾々は討つたのだ。同志が同志を殺したのだ。こんな理不盡なことがこの世にあらうか。なぜ、同志が同志を殺さなければならなかつたか。それはこれからおれ達のする爲事で分かつて來る。おれ達はこの屈辱に堪へて、更に大きな爲事をしなければならんのだ。君の肉體は亡びても、君の魂は吾々の内に殘つてゐる。君の志は吾々の手できつと貫徹して見せる。冥府で見てゐてくれ。おれ達が何をするか。おれ達が何をするか。おれ達が何をするか……(涙に咽んで、あとが言へなくなる)

一同、肅然。

——幕——

定價	送料
一册 八十錢	參錢
六册 四圓八十錢	送料共
十二册 九圓六十錢	同

毎月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます
△外國行送料は普通號一册に付十六錢申受けます
△御送金は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵劵代用は一割增の事
△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料
△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和二年十月十八日印刷
昭和二年十一月一日發行　（禁轉載）

編輯兼發行人　島中雄作
印刷人　高木島三
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社　秀英舍

東京市丸ノ内ビルヂング七七六區
中央公論社
電話丸ノ内二〇六番
振替東京三四番
同　長野三二〇五番


耳の神秘はラヂオ
舌の審美はカルピス
カルピスは偉大なる藝術を放送する
『健康』の交響樂を人々の舌へ
四季好適の滋強飲料
カルピス

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co. Published Monthly.

Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.